

青森県埋蔵文化財調査報告書 第410集

新田遺跡Ⅱ

－八戸南環状道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告－

2006年3月

青森県教育委員会

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは平成10年度以降、八戸南環状道路建設予定地内に所在する遺跡の発掘調査を進めて参りましたが、平成15年度・16年度には新田遺跡の発掘調査を実施しました。

調査の結果、縄文時代早期～晩期及び古代に至る各時期の人間活動の痕跡が確認され、縄文時代早期中頃、中期終わり頃、後期のはじめ、古代の集落跡が検出されました。

本報告書では平成15年度の調査成果の一部と平成16年度の調査成果をあわせ、集落に関連する内容をまとめたものです。特に、縄文時代中期の集落では、東北地方南半に分布の中心がある複式炉をもつ住居跡や、大木10式土器が発見されています。複式炉は県内ではこれまで検出例が少なく、文化の動態をとらえるうえで貴重な事例であります。

本遺跡の所在する八戸市是川地区には、国指定史跡である是川石器時代遺跡をはじめ縄文時代早期から古代まで連綿と遺跡が営まれております。本遺跡もこの地域における濃密な人間の活動を示すもので、今回の調査成果によって、是川地区の歴史像がより具体的になるものと確信しております。

最後になりましたが、発掘調査から報告書の刊行まで御指導・御協力を賜った関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成18年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所 長 白 鳥 隆 昭

例言

- 1 本報告書は、八戸南環状道路建設事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが平成15年度・平成16年度に発掘調査を実施した新田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本報告書は青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆は青森県埋蔵文化財調査センター職員が担当し、執筆者の氏名は文末に記した。依頼原稿、石器実測の一部は下記に依頼し、依頼原稿については執筆者名を文頭に記した。




炭化材の樹種同定	高橋利彦（木工舎「ゆい」）
炭化種実同定	吉川純子（古代の森研究舎）
¹⁴ C年代測定	小林謙一・遠部 慎（国立歴史民俗博物館）
土器の胎土分析・火山灰同定	柴 正敏（弘前大学理工学部 地球環境学科）
土壌（焼土）の自然科学的分析	赤沼英男（岩手県立博物館）
石器の実測図作成	（株）アルカ
- 3 出土した石器の石質鑑定は松山 力氏（八戸市文化財審議委員）に依頼した。
- 4 本報告書に掲載した遺跡位置図には、国土交通省国土地理院発行の5万分の1地形図『八戸東部』・『苫米地』を複写して使用した。
- 5 基本層序及び遺構の土層注記には、小山忠正・竹原秀雄『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 1997・1998年）を使用した。
- 6 本書を編集するにあたり、下記の方々からご指導・ご協力を得た。（順不同 敬称略）
小林謙一、新井達哉、中村明央、能登谷宣康、村本周三、星 雅之、小林 克、菅野美香子、菅原一彦、小島朋夏、大野憲司、河田弘幸、榮 一郎、児玉 準、小保内裕之、村木 淳、杉山陽亮、宇田川浩一、（財）岩手県埋蔵文化財センター、秋田県埋蔵文化財センター、福島県文化センター白河館、一戸町教育委員会

凡例

- 1 遺構の表記は、青森県埋蔵文化財調査センターで定めた下記の略号を使用している。

S B 掘立柱建物跡	S D 溝跡	S E 井戸跡	S I 住居跡
S K 土坑	S N 焼土遺構	S Q 配石・集石遺構	S R 土器埋設遺構
S T 捨て場	S V 溝状土坑	S X その他の遺構	
- 2 挿図中の北方位は、座標北である。
- 3 測量法の改正により経緯度の記載方法が旧日本測地系から日本測地系2000に変更となったため、抄録では両者の数値を併記しているが、挿図・本文には全て旧日本測地系を使用している。
- 4 挿図のうち遺構図の縮尺は、各挿図にスケールとともに示した。ただし、座標の表示のあるものについてはスケールを示していない場合がある。
- 5 遺物実測図の縮尺は以下のとおりである。

土器：1/4	剥片石器：1/2	礫石器（石製品）：1/3 または 1/5
--------	----------	----------------------
- 6 挿図中で用いたスクリーン・トーンは次のとおりである。

 焼土	 柱痕	 硬化面
--	--	---
- 7 縄文原体の基本的な分類は『日本先史土器の縄文』（山内清男、1979年）に従ったが、観察表中ではその名称を一部略記した場合がある。

目 次

序

例言・凡例

目次

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査要項	1
第3節 調査の方法	2
第4節 調査の経過	2

第2章 遺跡周辺の環境と遺跡の層序

第1節 周辺の地形	4
第2節 周辺の遺跡	4
第3節 遺跡の層序	8

第3章 検出遺構とその出土遺物

第1節 検出遺構の概要	13
第2節 検出遺構とその出土遺物	14

第4章 遺構外出土遺物

第1節 土器・土製品	90
第2節 石器	107
第3節 その他の出土遺物	117

第5章 自然科学的分析

第1節 八戸市新田遺跡出土炭化材の樹種	118
第2節 八戸市新田遺跡縄文時代中期より出土した炭化種実	124
第3節 土器付着漆および顔料分析	128
第4節 青森県八戸市新田遺跡出土炭化材の ¹⁴ C年代測定	131
第5節 新田遺跡土器胎土分析について	136
第6節 新田遺跡出土の火山灰について	140
第7節 新田遺跡採取土壌の自然科学的調査結果	142

第6章 考察

第1節 縄文時代中期末葉の土器について	149
第2節 複式炉の使用法について	156
第3節 複式炉の分布について	157
第4節 石器について	160

引用・参考文献167

遺物観察表168

写真図版185

抄録

奥付



図1 新田遺跡の位置 (S=1/50,000)

第1章 調査の概要

第1節 調査にいたる経緯

平成7年度に、建設省青森工事事務所（現 国土交通省青森河川国道事務所）から、八戸南環状道路建設事業の実実施計画策定に伴い、予定地内に所在が予想される遺跡の取り扱いをめぐって、青森県教育庁文化課（現 文化財保護課）に照会がなされた。そこで、建設予定地内を関係者で踏査した結果、まず分布調査・確認調査を先行させ、発掘調査の条件が整った遺跡から順次、青森県埋蔵文化財調査センターが調査を行うこととした。工事の工程の都合上、翌平成8年度には弥次郎窪遺跡から調査を開始し、平成10年度から13年度までに、丹内・蟹沢(2)・新田・潟野・黒坂・松ヶ崎・蟹沢(3)・楯館遺跡の調査を行った。

新田遺跡・潟野遺跡については、史跡・是川石器時代遺跡に近いこともあって、是川遺跡が予定地に延びていることが懸念されたため、平成10年4月に青森工事事務所、文化課、埋蔵文化財調査センターの三者が現地協議を行い、同年度内に、用地買収済みの区域の調査を先行した。調査の結果、縄文時代の遺構・遺物が発見されたが、是川遺跡とは年代が異なるものであった。

その後、工事計画と設計の変更をうけ、平成14年9月に、改めて青森河川国道事務所・文化財保護課・埋蔵文化財調査センターの三者で現地踏査及び調査打合せを行ない、翌平成15年度から埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施することになった。

第2節 調査要項

1 調査目的

八戸南環状道路建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する新田遺跡の発掘調査を行い、その記録を保存して地域社会の文化財の活用資する。

- | | |
|------------|---|
| 2 発掘調査期間 | 平成16年4月20日から同年9月8日まで |
| 3 遺跡名及び所在地 | 新田遺跡（青森県遺跡番号 03141）
八戸市是川字新田8-6、外 |
| 4 調査面積 | 平成15年度 4,750 m ² （本報告書分では500 m ² を掲載）
平成16年度 4,400 m ² |
| 5 調査委託者 | 国土交通省青森河川国道事務所 |
| 6 調査受託者 | 青森県教育委員会 |
| 7 調査担当機関 | 青森県埋蔵文化財調査センター |
| 8 調査体制 | 調査指導員 市川 金丸 元青森県考古学会会長（考古学）
調査員 松山 力（八戸市文化財審議委員）
調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター
所長 佐藤 良治（現 青森県立図書館長）
次長 福田 友之（現 青森県立郷土館副館長） |

総務 GL 工藤 和夫（現 青森県商工労働部資源エネルギー課副参事）
 調査第二 GL 三浦 圭介（現 青森県埋蔵文化財調査センター次長）
 文化財保護主査 中村 哲也
 文化財保護主事 斉藤 慶吏
 調査補助員 成田 英規 土岐 真以 敦賀 優子 加藤 渉

第3節 調査の方法

グリッド 平成10年度の調査で設定した、昭和43年建設省告示第3059号による平面直角座標系第X系を基準としたグリッドによる分層発掘を実施した。1グリッドは4m四方とし、北から南に向かってローマ数字とアルファベットの組み合わせでⅠA、ⅠB…ⅠY、ⅡA、ⅡB…のごとく、西から東に向かって算用数字で0、1、2、3…のごとく表記した。グリッドライン交点は南北ライン名と東西ライン名を-（ハイフン）でつなぎ、これを呼称とした。グリッド名は南西隅のグリッドライン交点の呼称をもって代表させた。平成10年度の調査は隣接する潟野遺跡も対象としたため、当時の潟野遺跡・新田遺跡の調査対象区域をすべてをカバーできるように、グリッド起点（交点名ⅠA-0）は、公共座標値X=53,000 Y=55,000の地点とした。現地には20m毎に木杭を打設したが、調査対象範囲が拡大されたこと、打設後6年が経過し、多くのグリッド杭が腐食していたことから、平成15年度調査時に用地内に設置されていた路線測量用基準点を用いて、業者委託により4級基準点を新設し、これを基に新たに杭を打設した。

土層の掘削 表土は調査担当者立ち会いの下、重機を用いて掘削した。それ以下は基本的に手掘りで層毎に掘り進めた。ただし、谷部の遺物を包含しない黒色土は、重機を用いて掘削したことがある。トレンチ等による試掘の結果、遺物が確認されなかった黄褐色火山灰土を最終面とした。

遺構精査 大きさにより適宜二分法・四分法を用い、堆積土を上位から順に掘削した。遺物は3次元の座標を記録して取り上げた。

遺物の取り上げ トータルステーションにより3次元の位置を記録して取り上げた。

遺構名 種類毎・検出順に付し、調査の結果、遺構でない判断したものは欠番とした。

層序名 遺構外にローマ数字、遺構内の土層に算用数字を用い、上位から順に付した。

写真撮影 主に35mmカメラで行い、カラーリヴァーサルフィルム、モノクロネガフィルムを用いた。メモ用にデジタルカメラを用いた。また、適宜6×6判カメラも使用した。

第4節 調査の経過

平成15年度 すでに『大開遺跡・新田遺跡』（青森県埋蔵文化財調査報告書第384集）で述べてあるので、繰り返さない。

平成16年度 4月20日、隣接する潟野遺跡と併せて、職員4人、調査補助員8人、作業員110人の体制で調査を開始した。新田遺跡の調査終了後は、潟野遺跡の調査に合流する予定であった。新田遺跡・潟野遺跡それぞれの調査体制は上述の2分の1を基本としたが、作業内容に応じて適宜変更することとした。前年度に表土の除去を終えたⅡSライン以北は遺構検出作業を進めた。翌日から、

重機を使用して表土の除去を開始した。II P ライン以北は畑地造成時に削平されており、谷部以外は表土を除去した段階で既に地山が露出した。また、調査区東部は尾根状地形のため、黒色土（後述の第Ⅲ層）の堆積が薄く遺構検出も容易であった。この部分の古代の住居跡、縄文時代中期の住居跡等の精査は順調に進んだ。そのため、7月初めに空中写真を撮影し、8月上旬をめどに調査を終了する予定であったが、谷部西側の黒色土中に住居跡が検出されたため、空中写真撮影を1週間遅らせて実施した。空中写真の撮影後、古代の住居であるSI-05周辺から縄文時代中期の遺構が黒色土中で検出されはじめ、調査期間を延長することとした。同時に重機を用いて、遺構に影響のない範囲の遺物がほとんど含まれない黒色土（第Ⅲ層）を除去したが、限定された範囲のものとなった。

第Ⅳ層中には早期から前期前葉の遺物が包含されており手掘りで掘削したが、予想以上の作業量であった。こうした事情から、9月8日まで調査を行った。調査終了後、一部の危険箇所は重機を用いて埋め戻しを行った。（中村）

第2章 遺跡周辺の環境と遺跡の層序

第1節 周辺の地形

八戸市域には北から順に、十和田湖及びその外輪山に源を発する奥入瀬川、五戸川、浅水川、岩手県七時雨山・早坂高原付近に源を発する馬淵川、平庭岳に源を発する新井田川が流れており、これらの河川とその支流によって形成された段丘地形が発達している。八戸市西部から北部では、高位の段丘から順に、蒼前平段丘、天狗岱段丘、高館段丘、根城段丘、田面木段丘、名久井段丘に区分されている。地域によっては更に細分され、あるいは異なる名称が与えられており、新井田川と太平洋に挟まれた階上岳山麓線以北の地域では、高位から蒼前平高位段丘・蒼前平低位段丘（蒼前平段丘相当）、白銀段丘・野場段丘（天狗岱段丘相当）、種市段丘（高館段丘相当）、根城段丘、田面木段丘、名久井段丘に区分されている（松山 1983）。

新田遺跡は新井田川中流の左岸に位置する。標高 15m 前後から 80m 前後まで複数の段丘面を含む広大な範囲が遺跡として登録されているが、平成 10・15・16 年度の調査対象区域は標高 15～24m 前後の田面木段丘面である。八戸市立函南小学校の南方約 1km の地点から新井田川に流れ込む小枝谷が遺跡の西方から南方を限っている。田面木段丘は段丘礫層上に八戸火山灰層と完新世堆積物を乗せるが、完新世火山灰は成層状態では確認されていない。遺跡周辺の基盤岩は、通産省工業技術院地質調査所発行の 1:200,000 地質図（平成 3 年発行）によれば、粘板岩及び砂岩、泥岩・砂岩・及び礫岩、輝石安山岩溶岩及び火砕岩である。新井田川の右岸には、苦鉄質火山岩・石灰岩が分布する。

この地域を含む青森県南部地域には、完新世以降、十和田火山を給源とする火山灰（二ノ倉、南部、中掬、十和田 a、十和田 b）・および白頭山火山灰が分布することが知られている。その降下年代や産状は『新田遺跡・大開遺跡』に述べているので、ここでは繰り返さない。

第2節 周辺の遺跡

八戸市の馬淵川・新井田川中流域には、後期旧石器時代の田向冷水遺跡をはじめとして、近世に至るまでの多数の遺跡が知られている。遺跡の数は縄文時代早期以降増加し、縄文時代後期の遺跡が最も多い。新田遺跡の所在する是川地区周辺では、土橋川を境として、東側に縄文時代前期～中期の遺跡が多く、西側では後期の遺跡が多い。遺跡数だけでなく、東側には蟹沢遺跡・重地遺跡・松ヶ崎遺跡など縄文時代前期から中期の大規模な集落が点在するが、この時期の大規模な遺跡は土橋川西側には知られていない。一方、縄文時代後期前半になると、土橋川の西側で丹後谷地(1)遺跡、田面木遺跡など大規模な集落が現れ、縄文時代後期の遺跡も増える。東側では後期後半になって、風張(1)遺跡のような大規模な集落が現れるが、それ以前の大規模な遺跡は知られていない。晩期には遺跡数は減少する。弥生時代も同様の傾向が続く。古墳時代の遺跡は田向冷水遺跡以外に知られていない。飛鳥時代になると遺跡はやや増加する傾向にあり、奈良時代になると、田面木平遺跡をはじめとする集落遺跡、丹後平古墳群や鹿島沢古墳群の群集墳が形成されるようになり、平安時代には、集落数も増加する。

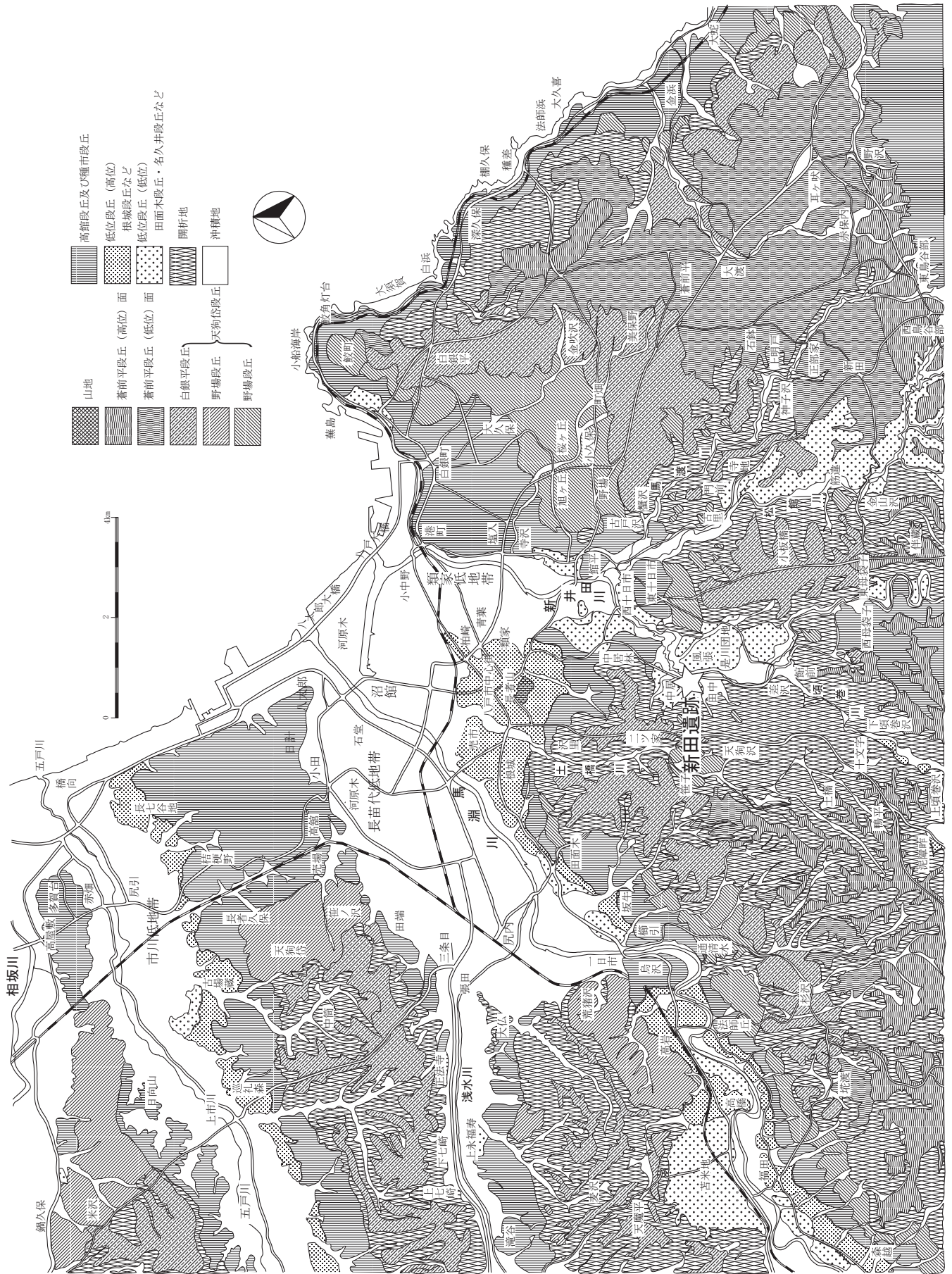


図2 八戸付近の段丘区分図 (松山 1983 を一部改変)

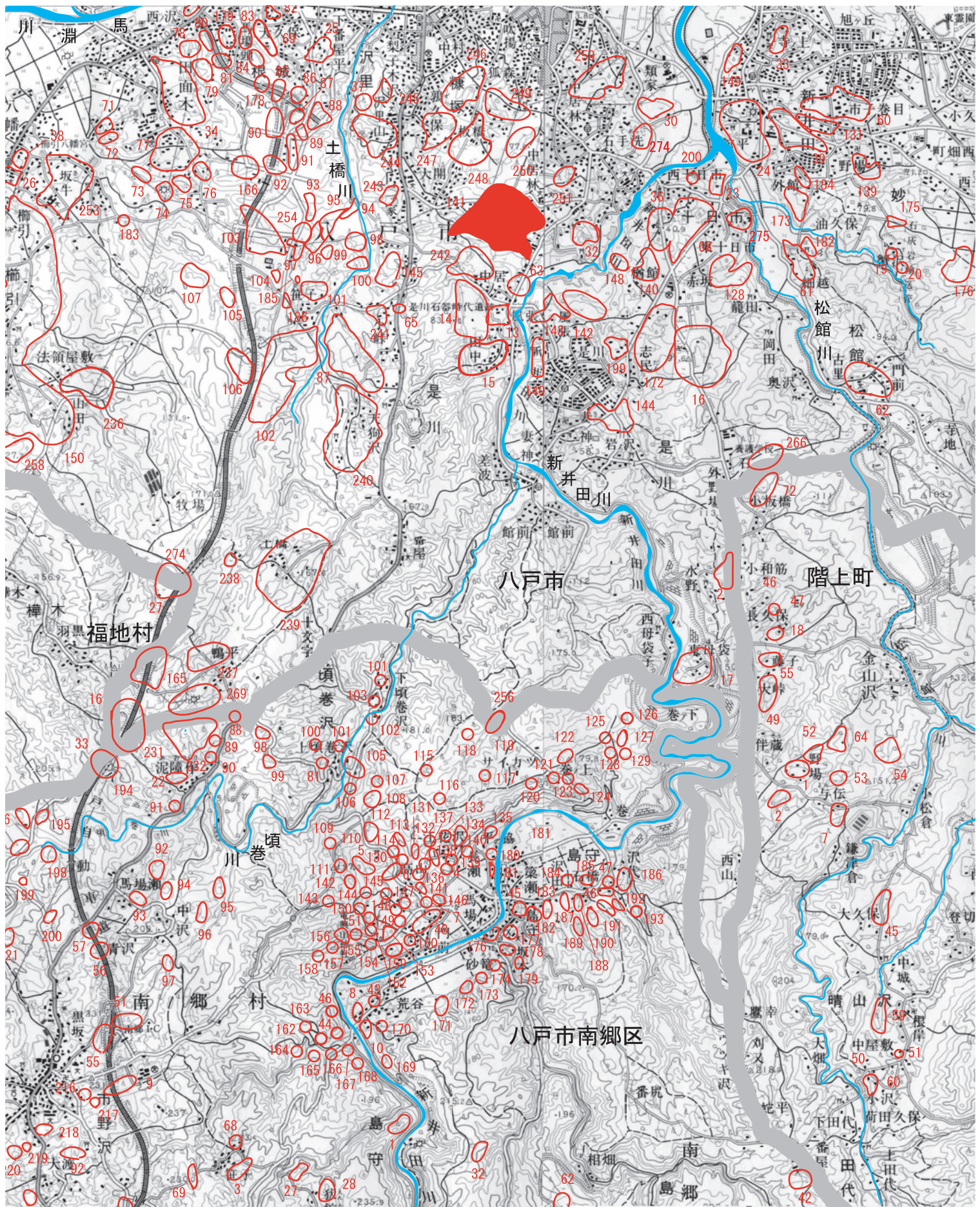


図3 新田遺跡と周辺の遺跡 (S=1/50,000)

表1 遺跡地名表

遺跡番号	遺跡名	時代	遺跡番号	遺跡名	時代	遺跡番号	遺跡名	時代
03013	中居遺跡	縄文(早・晩)	03142	風張(1)遺跡	縄文(後・晩)、平安	64037	杉沢遺跡	縄文
03014	一王寺(1)遺跡	縄文(前・中・後)	03143	風張(2)遺跡	縄文(後・晩)、平安	65001	下山遺跡	奈良、平安
03015	一王寺(2)遺跡	縄文(中)	03144	寺ノ上遺跡	縄文(中)	65003	市野沢笹子(1)遺跡	縄文(後・晩)
03016	留流遺跡	縄文(前・中)	03145	小峠遺跡	縄文(後・晩)	65005	高山(1)遺跡	縄文(早・前・晩)
03017	東母袋子(1)遺跡	縄文(晩)	03148	橋館遺跡	縄文(前)	65006	高山(2)遺跡	縄文(前・中・後・晩)、古墳
03019	蟹沢遺跡	縄文(前)	03149	風張館跡	縄文(後・晩)、平安	65007	高山(3)遺跡	縄文(中)
03020	蟹沢竊跡遺跡	近世	03150	櫛引遺跡	不明	65008	荒谷遺跡	縄文(前・中・後・晩)、平安
03023	赤御堂貝塚遺跡	縄文(早・前・後)	03164	鴨平(1)遺跡	縄文(早・前)	65009	三合山遺跡	縄文(後・晩)
03024	館平遺跡	縄文(早)	03165	鴨平(2)遺跡	縄文	65010	松石橋遺跡	縄文(中・後・晩)、弥生
03025	鹿島沢古壇	縄文、平安	03166	長者森遺跡	縄文	65021	下洗遺跡	縄文(後)
03026	八幡貝塚遺跡	縄文(晩)	03172	上ノ沢遺跡	縄文(後)、奈良、平安	65022	沢口遺跡	縄文(後)
03029	水野遺跡	縄文	03173	丹内遺跡	縄文	65027	猛館(1)遺跡	縄文(後・晩)、古墳
03030	田向遺跡	縄文(早)	03175	蟹沢(2)遺跡	縄文、平安	65028	就館(2)遺跡	縄文(早・晩)
03032	石手洗遺跡	縄文(早)	03178	牛ヶ沢(3)遺跡	縄文	65032	持金沢遺跡	縄文(後・晩)
03033	重地遺跡	縄文(早)	03179	松長根遺跡	縄文(後)	65042	田代遺跡	縄文(中・後)
03034	田面木遺跡	縄文(早・晩)、弥生、平安	03182	大茂館(松館)	中世	65043	下荒谷遺跡	縄文(中)
03036	西長根遺跡	縄文(中)	03183	笹ノ沢頭経塚遺跡	近世	65044	向山遺跡	縄文(前)
03037	鍋久保遺跡	縄文(後)	03184	西遺跡	縄文、平安	65045	十文字遺跡	縄文(中)
03038	千石屋敷遺跡	縄文(晩)	03185	笹子(3)遺跡	縄文	65046	石橋(1)遺跡	縄文(前・中)
03039	市子林遺跡	平安	03186	坊坂遺跡	縄文	65047	駒坂(1)遺跡	縄文(前・中)
03060	石橋遺跡	平安	03187	上鶴対遺跡	奈良	65048	島守館跡	縄文(中・後)、中世
03061	細越遺跡	平安	03188	志民遺跡	縄文(早)	65051	石ノ窪(2)遺跡	縄文(前・晩)
03062	松館遺跡	縄文(前・中・後・晩)、平安	03199	上樋田遺跡	縄文	65054	右エ門次郎窪遺跡	縄文(晩)
03063	堀田遺跡	縄文(中・後・晩)	03200	寺沢遺跡	奈良、平安	65055	石ノ窪(1)遺跡	縄文、平安
03065	小峠一里塚	近世	03214	鳥館場遺跡	縄文(後)	65056	馬場瀬(1)遺跡	縄文(後)
03068	松ヶ崎遺跡	縄文(前・中・後)	03215	法領屋敷遺跡	縄文(後)	65057	馬場瀬(2)遺跡	縄文(早・前・後・晩)
03069	牛ヶ沢(1)遺跡	縄文(前・後・晩)、平安	03237	鴨平(3)遺跡	縄文(後)	65062	八森根遺跡	縄文(晩)、平安
03071	上野平(1)遺跡	縄文(後・晩)、平安	03238	専菜沼遺跡	縄文	65064	外山長根(2)遺跡	縄文(晩)
03072	上野平(2)遺跡	平安	03239	土橋遺跡	縄文(後)	65068	市野沢笹子(2)遺跡	縄文(晩)
03073	盲堤沢(1)遺跡	平安	03240	天狗沢遺跡	縄文(早・後)	65069	達折向遺跡	縄文(晩)
03074	盲堤沢(2)遺跡	縄文(後)	03241	鏡冷畑遺跡	縄文(後)、平安	65072	林合遺跡	縄文、平安
03075	盲堤沢(3)遺跡	縄文(後)	03242	瀧野遺跡	縄文(前・後)	65081	泉清水(4)遺跡	縄文(後・晩)
03076	盲堤沢(4)遺跡	縄文(中・後)、平安	03243	ニツ屋遺跡	縄文(後)	65085	合戦場遺跡	縄文(晩)
03077	酒美平遺跡	縄文(中・後)、平安	03244	沢里山遺跡	縄文(後)、平安	65088	下長根(1)遺跡	縄文(後・晩)
03078	田面木赤坂(1)遺跡	縄文(後)、平安	03245	休場遺跡	縄文(後)、平安	65089	下長根(2)遺跡	縄文(後・晩)
03079	田面木赤坂(2)遺跡	縄文(後)、平安	03246	山内遺跡	縄文(前・中・後)	65090	下長根(3)遺跡	縄文(後)
03080	田面木赤坂(3)遺跡	縄文(後)、平安	03247	狐森遺跡	縄文(中・後)	65091	岩ノ平遺跡	縄文(晩)
03081	鶉窪遺跡	縄文(後)、平安	03248	長久保遺跡	縄文(前・後)	65092	桜窪遺跡	縄文(後・晩)
03082	大久保(1)遺跡	縄文(後・晩)	03249	惣善前遺跡	縄文	65093	泥障作一本松遺跡	縄文(後・晩)
03083	内沢遺跡	縄文(後)	03250	大沢遺跡	縄文(前・後)	65094	青沢遺跡	縄文(晩)
03084	牛ヶ沢(2)遺跡	縄文(後)	03251	狐平遺跡	縄文(後)、平安	65095	妻ノ神(1)遺跡	縄文(晩)
03085	牛ヶ窪(1)遺跡	縄文(後・晩)、平安	03253	殿見遺跡	縄文(後)、平安	65096	妻ノ神(2)遺跡	縄文(前)
03086	大久保(2)遺跡	縄文(後・晩)、平安	03254	丹後平古墳群	古代、奈良	65097	桜久保遺跡	縄文(晩)
03087	牛ヶ窪(2)遺跡	縄文(中)	03256	合戦場沢遺跡	縄文、平安	65098	清水頭遺跡	縄文(晩)
03088	古宮遺跡	平安	03258	櫛引中沢遺跡	縄文	65099	谷地頭遺跡	縄文(後・晩)
03089	湯浅屋新田(1)遺跡	縄文(前)、平安	03259	雷遺跡	縄文、弥生、奈良、平安	65100	壁ヶ坂遺跡	縄文(中・後)
03090	白山平(1)遺跡	平安	03266	牛ヶ沢(4)遺跡	縄文、平安	65101	八森遺跡	縄文(後・晩)
03091	湯浅屋新田(2)遺跡	縄文(前)、平安	03269	鴨平(4)遺跡	縄文(後)	65102	蒼前下遺跡	縄文(前)
03092	白山平(2)遺跡	縄文(後)	03274	昼巻沢遺跡	縄文(後)	65103	下頃巻沢遺跡	縄文(晩)
03093	丹後半(1)遺跡	縄文(後)		日向冷水遺跡	旧石器・弥生・古墳	65104	鬼ノ目遺跡	縄文(晩)
03094	丹後谷地(1)遺跡	縄文(前・中・後)、平安		黒坂遺跡	縄文(中・後)	65105	館向(1)遺跡	縄文(前・晩)
03095	丹後谷地(2)遺跡	縄文(後)、平安	63001	野場(1)遺跡	縄文(後・晩)	65106	館向(2)遺跡	縄文(晩)
03096	丹後半(2)遺跡	縄文(前・後)、平安	63002	野場(2)遺跡	縄文(前・中・後・晩)	65107	十文字平(1)遺跡	縄文(晩)
03097	丹後半(3)遺跡	縄文(後)、平安	63007	与伝遺跡	縄文	65108	十文字平(2)遺跡	縄文(晩)
03098	丹後谷地(3)遺跡	縄文(後)、平安	63018	姥沢遺跡	縄文(後)	65109	砂沢遺跡	縄文(後・晩)
03099	丹後谷地(4)遺跡	縄文(後)、平安	63045	晴山沢大久保遺跡	縄文、平安	65110	横道遺跡	縄文(中・後・晩)
03100	丹後谷地(5)遺跡	縄文(後)、平安	63046	大日遺跡	縄文(後)	65111	高陣場(1)遺跡	縄文(後・晩)
03101	笹子(1)遺跡	縄文(後)、平安	63047	上外金山沢遺跡	縄文(晩)、平安	65112	北向(1)遺跡	縄文(前・晩)
03102	笹子(2)遺跡	縄文(後)	63049	大峠(2)遺跡	縄文(早・前・後・晩)	65113	北向(2)遺跡	縄文(晩)
03103	田面木平(1)遺跡	縄文(後)、平安	63050	中屋敷遺跡	縄文(後・晩)	65114	北向(3)遺跡	縄文(中・晩)
03104	田面木平(2)遺跡	平安	63051	長根遺跡	縄文(晩)	65115	島守狐森遺跡	縄文(晩)
03105	鳥ノ木沢遺跡	縄文(後)	63052	野場(3)遺跡	縄文(晩)	65116	中森遺跡	縄文(後・晩)
03106	菰窪遺跡	縄文(後)	63053	野場(4)遺跡	縄文(晩)	65117	鷹持場遺跡	縄文(後・晩)
03107	笹ノ沢頭遺跡	縄文(後)	63054	金山沢大久保遺跡	縄文(早・晩)	65118	長森遺跡	縄文(晩)
03128	赤坂遺跡	縄文(晩)	63055	藤子遺跡	縄文(中・後・晩)	65119	合戦場沢遺跡	縄文(前・晩)、平安
03131	坂中遺跡	平安	63059	晴山沢館跡(中城跡)	中世	65120	帳塚(1)遺跡	縄文(晩)
03139	野場遺跡	縄文(後)、平安	63060	小沢館跡	中世	65121	帳塚(2)遺跡	縄文(晩)
03140	弥次郎窪遺跡	縄文(前)	63064	野場(5)遺跡	縄文(中)	65122	笹山遺跡	縄文(早)
03141	新田遺跡	縄文(中)	63072	小坂橋遺跡	縄文	65123	帳塚(3)遺跡	縄文(晩)
			64027	昼巻沢遺跡	縄文(中・後)	65124	帳塚(4)遺跡	縄文(晩)
			64033	境久保遺跡	縄文			

遺跡番号	遺跡名	時代	遺跡番号	遺跡名	時代	遺跡番号	遺跡名	時代
65125	池ノ沢 (1) 遺跡	縄文 (晩)	65154	赤坂 (1) 遺跡	縄文 (晩)	65183	上旦平遺跡	縄文 (中・後)
65126	駒峰遺跡	縄文 (晩)	65155	大開遺跡	縄文 (晩)	65184	坂ノ下遺跡	縄文 (晩)
65127	池ノ沢 (2) 遺跡	縄文 (後・晩)	65156	赤坂 (2) 遺跡	縄文 (後・晩)	65185	駒坂 (2) 遺跡	縄文 (晩)
65128	池ノ沢 (3) 遺跡	縄文 (晩)	65157	赤坂 (3) 遺跡	縄文 (晩)	65186	沢代遺跡	縄文 (前)、弥生
65129	池ノ沢 (4) 遺跡	縄文 (晩)	65158	赤坂 (4) 遺跡	縄文 (前・晩)	65187	長ツムネ (1) 遺跡	縄文 (晩)
65130	小林遺跡	縄文 (後・晩)	65159	古坊遺跡	縄文 (前・晩)	65188	長ツムネ (2) 遺跡	縄文 (後・晩)
65131	天魔 (1) 遺跡	縄文 (晩)	65160	門前遺跡	縄文 (晩)	65189	沢田沢遺跡	縄文 (中・晩)
65132	矢八坂遺跡	縄文 (晩)	65161	内山遺跡	縄文 (前・後・晩)	65190	高嶽遺跡	縄文 (前)
65133	上江花沢遺跡	縄文 (晩)	65162	目蕪ら (1) 遺跡	縄文 (後)	65191	石橋 (2) 遺跡	縄文 (前)
65134	下江花沢遺跡	縄文 (晩)	65163	目蕪ら (2) 遺跡	縄文 (中・後・晩)、平安	65192	石橋 (3) 遺跡	縄文 (前)
65135	高清水遺跡	縄文 (晩)	65164	目蕪 P (3) 遺跡	縄文 (晩)	65193	野田沢遺跡	縄文 (晩)
65136	天魔 (2) 遺跡	縄文 (前)	65165	林遺跡	縄文 (晩)	65194	境久保遺跡	縄文 (前)
65137	山子 (1) 遺跡	縄文 (晩)、平安	65166	山口遺跡	縄文 (晩)	65195	長伝遺跡	縄文 (晩)
65138	山子 (2) 遺跡	縄文 (後・晩)	65167	三代坂 (1) 遺跡	縄文 (後・晩)	65196	中久喜 (1) 遺跡	縄文 (晩)
65139	山子 (3) 遺跡	縄文 (晩)、平安	65168	三代坂 (2) 遺跡	縄文 (前)	65197	中久喜 (2) 遺跡	縄文 (晩)
65140	平ノ脇遺跡	縄文 (前・晩)	65169	竹野遺跡	縄文 (後・晩)	65198	石ノ鉢 (1) 遺跡	縄文 (後・晩)
65141	熊堂遺跡	縄文 (前)	65170	上荒谷遺跡	縄文 (晩)	65199	石ノ鉢 (2) 遺跡	縄文 (晩)
65142	高陣揚 (2) 遺跡	縄文 (晩)	65171	黒坂出口遺跡	縄文 (後・晩)	65200	境井沢遺跡	縄文 (晩)
65143	高陣揚 (3) 遺跡	縄文 (前)	65172	ニツ石遺跡	縄文 (晩)	65216	下市野沢 (1) 遺跡	縄文 (晩)
65144	西越遺跡	縄文 (晩)	65173	小山田遺跡	縄文 (前)	65217	下市野沢 (2) 遺跡	縄文 (晩)
65145	クビレ松遺跡	縄文 (前)	65174	坂本遺跡	縄文 (晩)	65218	黄檗遺跡	縄文 (晩)
65146	五輪遺跡	縄文 (晩)	65176	砂竈遺跡	縄文 (晩)、平安	65219	市野沢平 (1) 遺跡	縄文 (晩)
65147	高山 (4) 遺跡	縄文 (中・後・晩)	65177	小平遺跡	縄文 (前・中)	65220	市野沢平 (2) 遺跡	縄文 (晩)
65148	野月遺跡	縄文 (早)	65178	白山遺跡	縄文 (後)	65231	鴨平 (1) 遺跡	縄文 (中・後・晩)
65149	館遺跡	平安	65179	ヒノコ前遺跡	縄文 (晩)	65232	狐森遺跡	縄文 (早)
65150	大久保 (1) 遺跡	縄文 (前・後・晩)	65180	長瀬 (1) 遺跡	縄文 (晩)			
65151	大久保 (2) 遺跡	縄文 (前)	65181	長瀬 (2) 遺跡	縄文 (後・晩)			
65152	大久保 (3) 遺跡	縄文 (晩)	65182	稲荷遺跡	縄文 (晩)			
65153	小花遺跡	縄文 (晩)						

青森県遺跡地図 (青森県教育委員会 平成10年3月刊行) を基に作成、一部加筆。表中の「遺跡番号」上2ケタは自治体名と次の通り対応する。
03 八戸市 63 階上町 64 福地村
65 八戸市南郷区 (旧南郷村)

第3節 遺跡の層序

八戸南環状道路用地は、本遺跡内では田面木段丘面から河谷平野に当たる。調査区北側の斜面から南流する沢地形が複数あり、本書で報告する調査区にも二本の沢地形が流れ込んでいる。

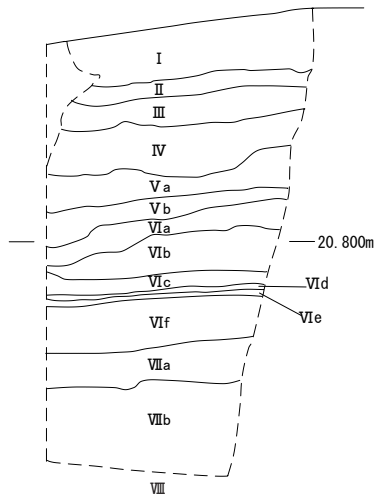
平成10年度の調査の段階で、沢地形に当たる部分にトレンチを設定した。しかし、この時点で調査区の地形の全容は不明で、トレンチを設定した場所が沢地形に当たることを把握できず、おおむね『新田遺跡・大開遺跡』で報告した基本層序と同様の堆積であると考えた。平成16年度の調査を開始する時点では、この層序を引き続き使用することとした。調査が進むにつれて、調査区全体の地形を把握でき、尾根部分の層序と土質がやや異なることも明らかとなった。しかし、おおむね尾根部の層序と対応し、また、遺物の出土状況から考えても、尾根部の層序と同一の層名を用いても大きな齟齬は無いものと考えられたので引き続き同じ層序を用いることとした。以下に層序を述べる。

第Ⅰ層 10YR2/1 黒色シルト 表土 (旧耕作土)。草木根を多く含み、しまりが無くぼそぼそしている。

第Ⅱ層 10YR1.7/1 ~ 2/1 黒色シルト φ 3mm の十和田 b 降下軽石 10% 含む。しまり無くぼそぼそしている。

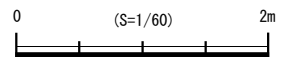
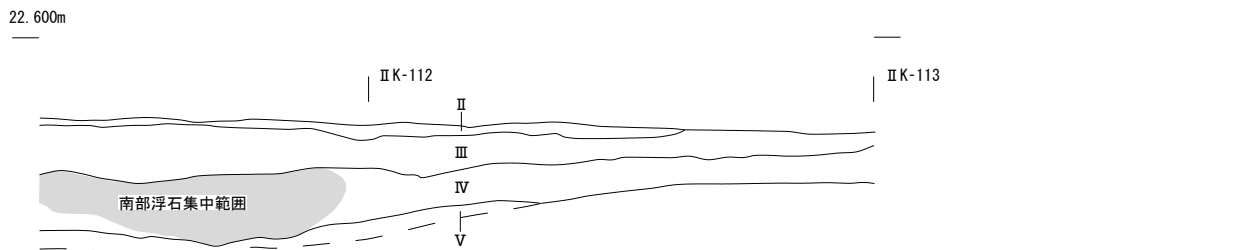
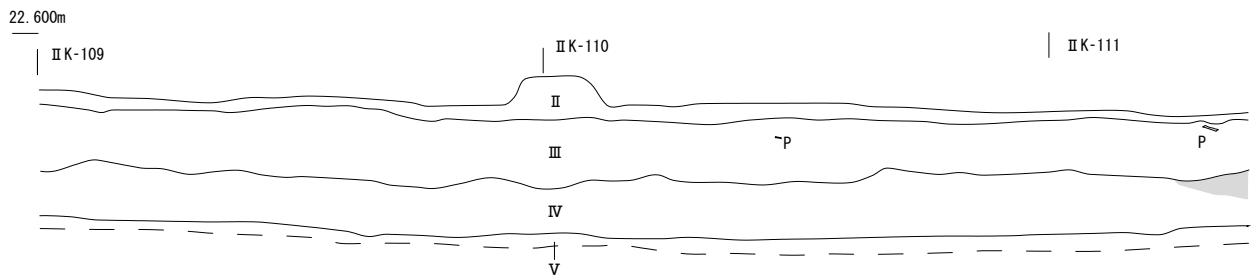
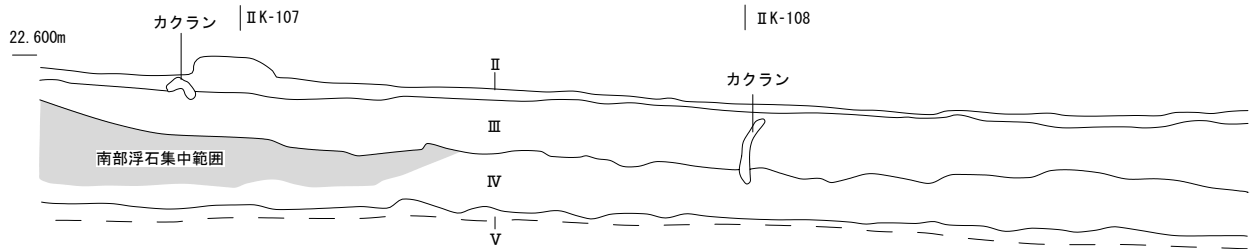
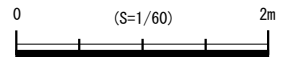
第Ⅲ層 10YR2/1 黒色砂質シルト 上層よりやや明度が高い。粒径が細かくしまっている。中掇浮石起源の黄褐色微細粒子含む。縄文時代前期中頃以降の主要な包含層である。谷部では尾根部より砂が少なくシルトが多くなる。

第Ⅳ層 10YR2/2 黒色シルト 砂を含まない均質なシルト。φ 1cm の 10YR6/8 明黄褐色浮石 10% 含む。下層との境界は漸移的である。谷部では砂が混じり、南部浮石が少なくなる。縄文時代早期



- 第I層 10YR1.7/1 黒色シルト 草木根多量含む。しまりなくボソボソしている。
- 第II層 10YR2/1 黒色シルト 草木根含む。φ3mmの十和田b降下軽石10%含む。しまりなくボソボソしている。
- 第III層 10YR2/1 黒色シルト 上層よりやや明度高い。上層より粒径細かくしまっている。中礫浮石起源の黄褐色微細粒子含む。
- 第IV層 10YR2/2 黒褐色シルト 砂を含まない均質なシルト。φ10mmの10YR6/8明黄褐色浮石10%含む。下層との境界は漸移的である。
- 第V a層 10YR2/3 黒褐色シルト 10YR7/8 黄褐色浮石5%。
- 第V b層 10YR3/4 暗褐色シルト 10YR7/8 黄褐色浮石5%。
- 第VI a層 10YR5/6 黄褐色軽石層 φ10mmの表面が風化し、丸みを帯びた軽石層。
- 第VI b層 10YR6/4 にぶい黄褐色粘土質火山灰
- 第VI c層 10YR7/8 黄褐色軽石層 軽石は風化が進んで軟質である。φ20mm。表面は鉄分が沈着し10YR4/6 褐色を呈する。
- 第VI d層 10YR7/6 明黄褐色粘土質火山灰
- 第VI e層 10YR7/8 黄褐色軽石層 φ20mm。鉄分が沈着し表面は10YR4/6褐色を呈する。
- 第VI f層 10YR7/2 にぶい黄褐色粘土質火山灰
- 第VII a層 2.5Y6/2 灰黄灰黄色粘土層
- 第VII b層 10YR4/1 褐灰色灰色粘土層
- 第VIII層 礫層

尾根部基本層序



II Kライン層序

- 第II層 10YR1.7/1 黒色シルト 10YR7/1 灰白の浮石(φ10mm)2%混入。(十和田b降下軽石)。空隙多くあまりしまりない。
- 第III層 10YR2/1 黒色砂質シルト 中礫浮石起源を思わせる黄褐色微細粒子含む。上半には黄褐色微細粒子少なく黒味が強い。下半は黄褐色微細粒子多くなる。
- 第IV層 10YR2/1 黒色シルト 10YR3/3 暗褐色浮石(φ10mm)3%混入。上部に中礫浮石起源と思われる黄褐色粒子微量。
- 第V層 10YR2/3 黒褐色シルト 10YR6/6 明褐色浮石(φ1~10mm)1%混入。

谷部基本層序

図4 基本層序

後半～縄文時代前期前半の包含層である。

第Ⅴ層 第Ⅵ層の八戸火山灰と第Ⅳ層の黒色土の間にある黄褐色火山灰土で、a・bに細分できる。

第Ⅴ a 層 10YR5/6 黄褐色シルト質火山灰土 縄文時代早期中葉の物見台式の主要な包含層である。

第Ⅴ b 層 10YR5/8 黄褐色シルト質火山灰土 第Ⅴ a 層よりしまっている。

第Ⅵ層 八戸火山灰層である。a～fの細分層は、八戸火山灰第Ⅵ層～第Ⅰ層にそれぞれ対応する。

第Ⅵ a 層 10YR5/6 黄褐色浮石層 風化のため表面が丸みを帯びたφ10mmの軽石層。

第Ⅵ b 層 10YR6/4 にぶい黄燈色粘土質火山灰土

第Ⅵ c 層 10YR7/8 黄燈色軽石層 軽石は水分を含み軟質である。φ20mm。表面には鉄分が沈着し、褐色を呈する。

第Ⅵ d 層 10YR7/6 明黄褐色粘土質火山灰層

第Ⅵ e 層 10YR7/8 黄燈色軽石層

第Ⅵ f 層 10YR7/2 にぶい黄燈色粘土質火山灰土

第Ⅶ層 谷に堆積した粘土層。色調により2細分した。

第Ⅶ a 層 2.5YR6/2 灰黄褐色粘土層

第Ⅶ b 層 10YR4/1 灰黄褐色粘土層

第Ⅷ層 礫層

谷部では、第Ⅲ層はシルトが多くなり、第Ⅳ層は砂が混じり、土質の差が尾根部に比べて小さくなる。そのため、断面での識別は比較的容易だが、平面での識別はやや困難を伴う場合があり、層位を誤って取り上げた遺物も一定量存在すると考えられる。 (中村)



図5 調査区位置図 (S=1/2,000)

第3章 検出遺構とその出土遺物

第1節 検出遺構の概要

本報告書では平成15・16年度に本調査を実施して検出された縄文時代早期・縄文時代前期前半、縄文時代中期末葉・縄文時代後期初頭・古代を中心とする集落について報告する。検出された遺構は、竪穴住居跡12軒、土坑12基、不明遺構7基、焼土14基、不明遺構7基、土器埋設炉2基、溝状土坑1基、ピット群1である(表2)。表には位置・規模・検出面・重複など基本的な情報を記載し、文中ではこれら以外の属性について触れることとした。

調査区は遺跡の西端に当たり、西側と南側は谷地形で限られている。この谷地形は現在水田となっている。調査区中央部には北側の斜面から南流する浅い沢地形が認められ、第Ⅲ層の黒色砂質シルト及び第Ⅳ層の黒色シルトが埋積している。

縄文時代早期の遺構、竪穴住居跡2軒・土坑1基(SI-01・SI-12、SK-11)は谷部からはずれた位置にある。その他(SX-03・08・09)は谷に当たる部分に位置する。

縄文時代早期後半～前期の焼土遺構のうち2基は(SN-05・11)は調査区西側を限る谷の落ち際に位置する。1基(SN-14)は調査区南東部の尾根部に位置する。

縄文時代中期末葉の遺構(SI-02・04・07・14・15、SK-06・14・15・16、SN-07・08・09・10、SR-01、SX-04・05・06・07)は沢地形を中心に分布する。

縄文時代後期初頭の遺構(SI-13)は沢の中央部に位置する。

縄文時代晩期の土坑(SK-12・13)は沢部の黒色土中に2基検出された。

谷部中央には弥生時代以降のピット群が検出された。

古代の遺構は調査区南半に3基(SI-05・08・09)検出された。(中村)

表2 遺構一覧表

遺構の長軸・短軸は下端を計測した。上端は遺構の検出レベルや廃絶後の崩落により容易に変化する性質のものである。一方、下端は変化しないと考えられるので、規模を表すのに適していると考えられる。ただし、焼土は上端を計測した。深さはセクション図・エレベーション図における最深部の値を採用した。

遺構名 (略号)	調査 年度	グリッド	検出層位	重複	規模(m)			時期	備考
					長軸	短軸	深さ		
SI-01	04	Ⅱ V～Ⅱ W-108～109	Ⅳ～Ⅴ		4.41	4.15	0.65	早期中葉	
SI-02	04	Ⅱ S-95	Ⅳ		1.58	0.90	—	中期末葉	炉規模
SI-03	04	Ⅱ Q-106	Ⅲ		0.68	0.62	—	中期末葉	
SI-04	04	Ⅱ O-95～97	Ⅴ		6.26	2.16	0.18	中期末葉	
SI-05	04	Ⅱ L-110～111	Ⅲ		3.17	3.12	0.46	奈良時代	
SI-06	04	欠番			—	—	—		
SI-07	04	Ⅱ I～Ⅱ J-115～116	Ⅳ		4.30	4.19	0.21	中期末葉	
SI-08	04	Ⅱ G～Ⅱ H-115～116	Ⅴ		2.79	2.66	0.59	古代(10C前葉以前)	
SI-09	04	Ⅱ E-114～115	Ⅲ		—	—	0.33	奈良時代	SK-09から変更
SI-10	04	欠番			SI10	0			SN-16に変更
SI-11	04	Ⅱ K～Ⅱ M-111～112	Ⅲ～Ⅳ		4.71	4.65	0.32	中期末葉	
SI-12	04	Ⅱ I～Ⅱ J-113～115	Ⅴ		4.59	3.53	0.31	早期	
SI-14	04	Ⅱ I～Ⅱ J-108	Ⅲ		4.04	3.96	0.33	中期末葉	SK-08から変更
SI-15	04	Ⅱ S-97～98	Ⅳ		2.93	2.51	—	中期末葉～後期初頭	
SK-04	04	Ⅱ Q-96	Ⅴ		1.69	1.69	0.62	前期後半以降	
SK-05	04	Ⅱ P-99	Ⅴ		1.84	1.33	0.40	前期後半以降	
SK-06	04	Ⅱ K-107	Ⅲ		2.93	2.76	0.21	中期末葉	
SK-07	04	欠番			—	—	—		SI-13に変更
SK-08	04	欠番			—	—	—		SI-14に変更
SK-09	04	欠番			—	—	—		SI-09に変更
SK-10	04	Ⅱ H-119	Ⅳ		0.78	0.75	0.34	前期後半以降	

遺構名 (略号)	調査 年度	グリッド	検出層位	重複	規 模 (m)			時期	備考
					長軸	短軸	深さ		
SK-11	04	Ⅱ V～Ⅱ W-107	V		0.78	0.62	0.49	早期	
SK-12	04	Ⅱ I-112	Ⅲ		1.00	0.80	0.20	晩期	
SK-13	04	Ⅱ I-111	Ⅲ		1.23	1.03	0.10	晩期	
SK-14	04	Ⅱ M-104	Ⅲ		2.41	2.36	0.16	中期末葉	
SK-15	04	Ⅱ K～Ⅱ L-110	Ⅲ		2.28	2.09	0.09	中期末葉	
SK-16	04	Ⅱ M-110～111	Ⅲ		2.28	1.90	0.31	中期末葉	
SK-17	04	Ⅱ Q-106	Ⅲ		0.62	0.54	0.14	前期後半以降	
SK-18	04	Ⅱ Q-102	Ⅳ		0.79	0.68	0.29	前期前半以前	
SK-19	04	欠番			—	—	—	—	
SN-03	04	Ⅱ Q-99	Ⅲ		0.46	0.41	0.12	前期後半以降	
SN-04	04	Ⅱ Q-93	Ⅲ		0.57	—	0.17	前期後半以降	
SN-05	04	Ⅱ S-92	Ⅲ		0.51	0.41	0.06	前期前半以前	
SN-06	04	Ⅱ T-92	Ⅲ		0.36	0.25	0.02	前期前半以前	
SN-07	04	Ⅱ J-107	Ⅲ		—	0.45	0.09	前期後半以降	
SN-08	04	Ⅱ J-107	Ⅲ		0.74	0.51	0.07	前期後半以降	
SN-09	04	Ⅱ I-109	Ⅲ		0.45	0.40	0.04	中期末葉	
SN-10	04	Ⅱ I-109	Ⅲ		0.97	0.96	0.09	中期末葉	
SN-11	04	Ⅱ T-91	Ⅲ		—	—	0.13	前期前半以前	
SN-12	04	Ⅱ Q-93	Ⅲ		0.55	0.49	0.09	前期後半以降	
SN-13	04	Ⅱ R-93	Ⅲ		0.98	0.86	0.24	前期後半以降	
SN-14	04	Ⅱ G-118	V		0.38	—	0.03	早期	
SN-15	04	Ⅱ R～Ⅱ S-92	Ⅲ		1.22	0.91	0.19	前期後半以降	
SN-16	04	Ⅱ M-109	Ⅲ		0.65	0.52	0.10	中期末葉	SI-10 から変更
SX-03	03	Ⅱ D-116	Ⅳ		—	—	—	早期	
SX-04	04	Ⅱ P-105	Ⅲ		—	—	—	中期末葉以降	
SX-05	04	Ⅱ J-107	Ⅲ		—	—	—	前期後半以降	
SX-06	04	Ⅱ P-109	Ⅲ		—	—	—	中期末葉	
SX-07	04	Ⅱ Q-106	Ⅲ		—	—	—	中期末葉	
SX-08	04	Ⅱ Q-110	V		—	—	—	早期後葉	
SX-09	04	Ⅱ O-110	Ⅲ		—	—	—	中期末葉	
SR-01	04	Ⅱ J-114	Ⅲ		0.57	0.44	0.22	中期末葉	
SI-13	04	Ⅱ L-108	Ⅲ		0.95	0.91	0.21	中期末葉	SK-07 から変更
SV-01	04	Ⅱ O-105～106	Ⅲ		3.19	0.27	1.16	前期後半以降	

第 2 節 検出遺構とその出土遺物

第 1 号竪穴住居跡〔SI-01〕（図 7～10）

〔平面形〕不整形円形を呈する。〔床面・柱穴〕床面は全体的に軟弱であり、硬化面は検出されなかった。18 基のピットが床面で検出されている。Pit1 と Pit9 は平面形が長楕円で、いずれも底面付近で柱痕跡状の小ピットが確認されている。Pit8 は不整形で掘り込みも浅く、柱穴以外の可能性が考えられる。これら以外のピットは壁近くをめぐるように配置されており、壁面に対して斜めに掘り込まれている。〔炉〕明確に炉と判断できる痕跡は確認できなかった。〔堆積土〕基本層序第Ⅳ層から第Ⅲ層に相当する層がレンズ状に堆積している。2 層で南部浮石が厚く堆積しており、3 層より上位については自然堆積と考えられる。3 層より下位についても遺物は含まれているものの人為的な堆積要因を示す特徴は確認されなかった。〔出土遺物〕土器 26 点 (637.2g)、敲磨器類 11 点、石皿・台石類 2 点、磨製石斧 1 点、石錘 1 点、総数 15 点の石器が出土している。土器はすべて早期中葉に属するもので、本遺構の堆積土か、周辺の第Ⅳ層からのみ出土した。磨製石斧 (9-3) は遺構外第Ⅲ層で主体をなす擦り切り痕跡のあるものとは異なる。成形時の敲打痕が基部付近に顕著に残り、断面形状は偏円をなす。刃部には再生を目的とした粗雑な剥離が加えられている。堆積土からは剥片石器が 1 点も出土しておらず、遺構外第Ⅳ層同様、礫石器が全体の組成の中で大きな割合を占めていることがうかがえる。出土層位は 7 層を中心としており、S-13、14、15、16、17、18、19、20、21 につい

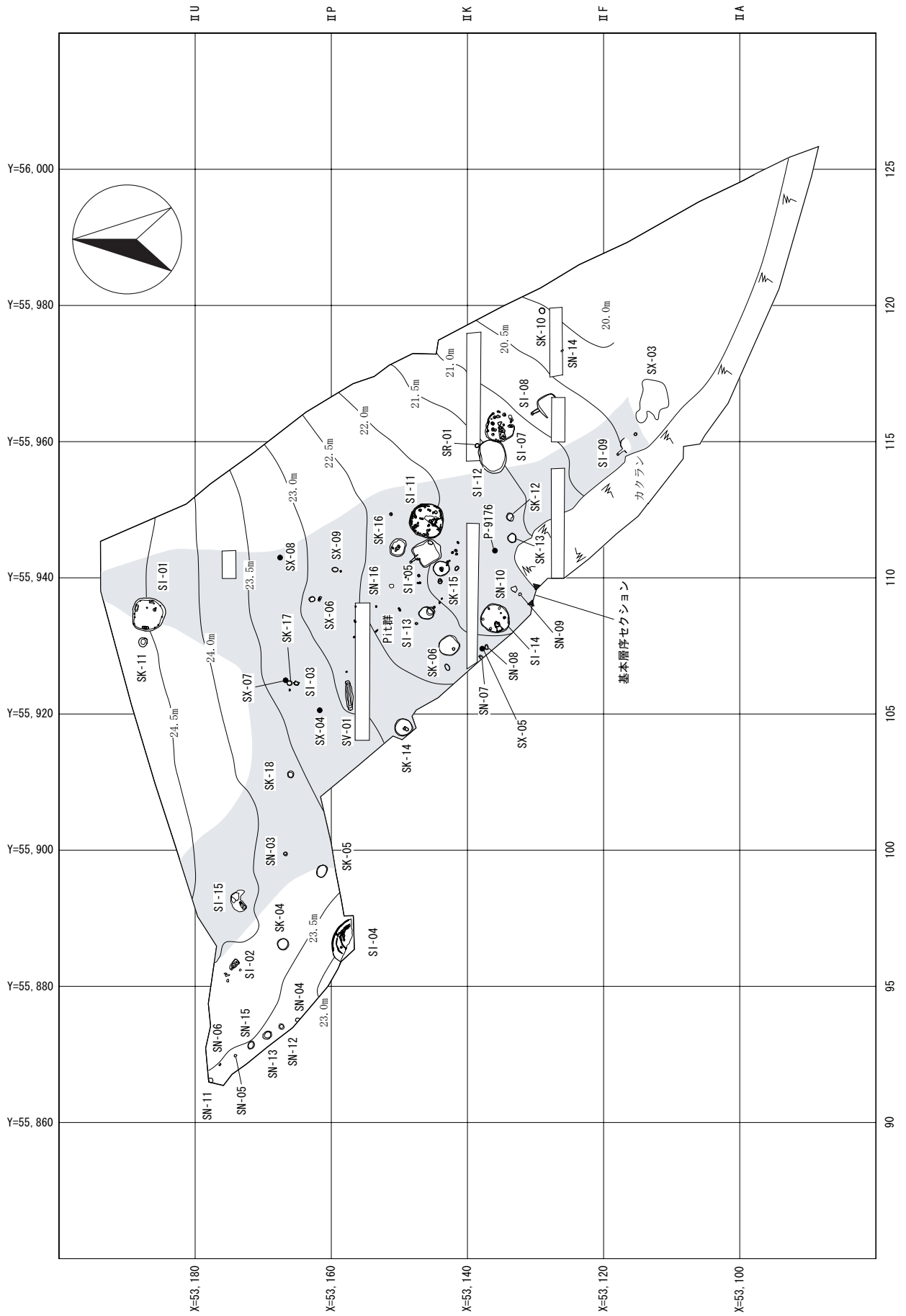


図6 遺構配置図 (S=1/800)

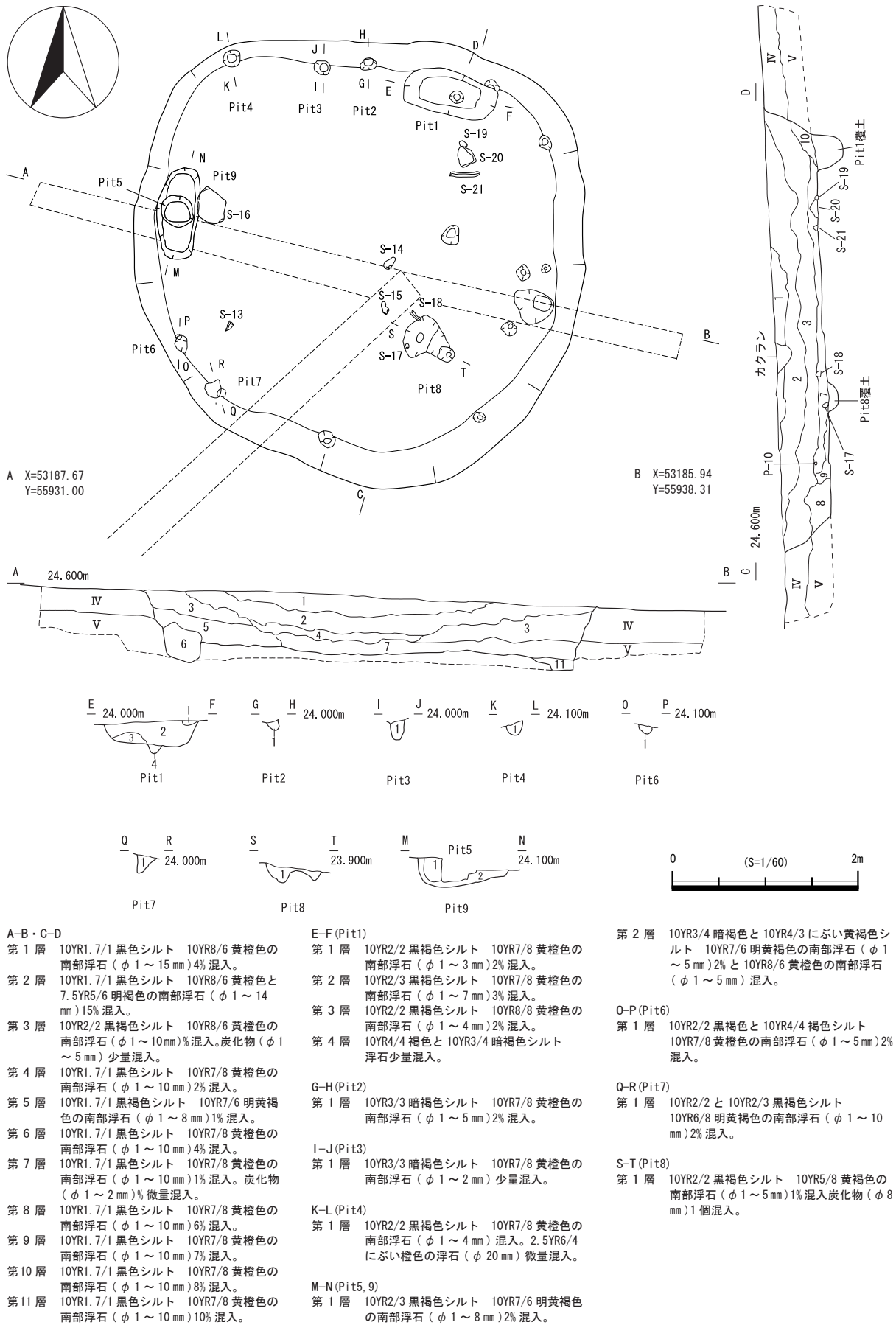
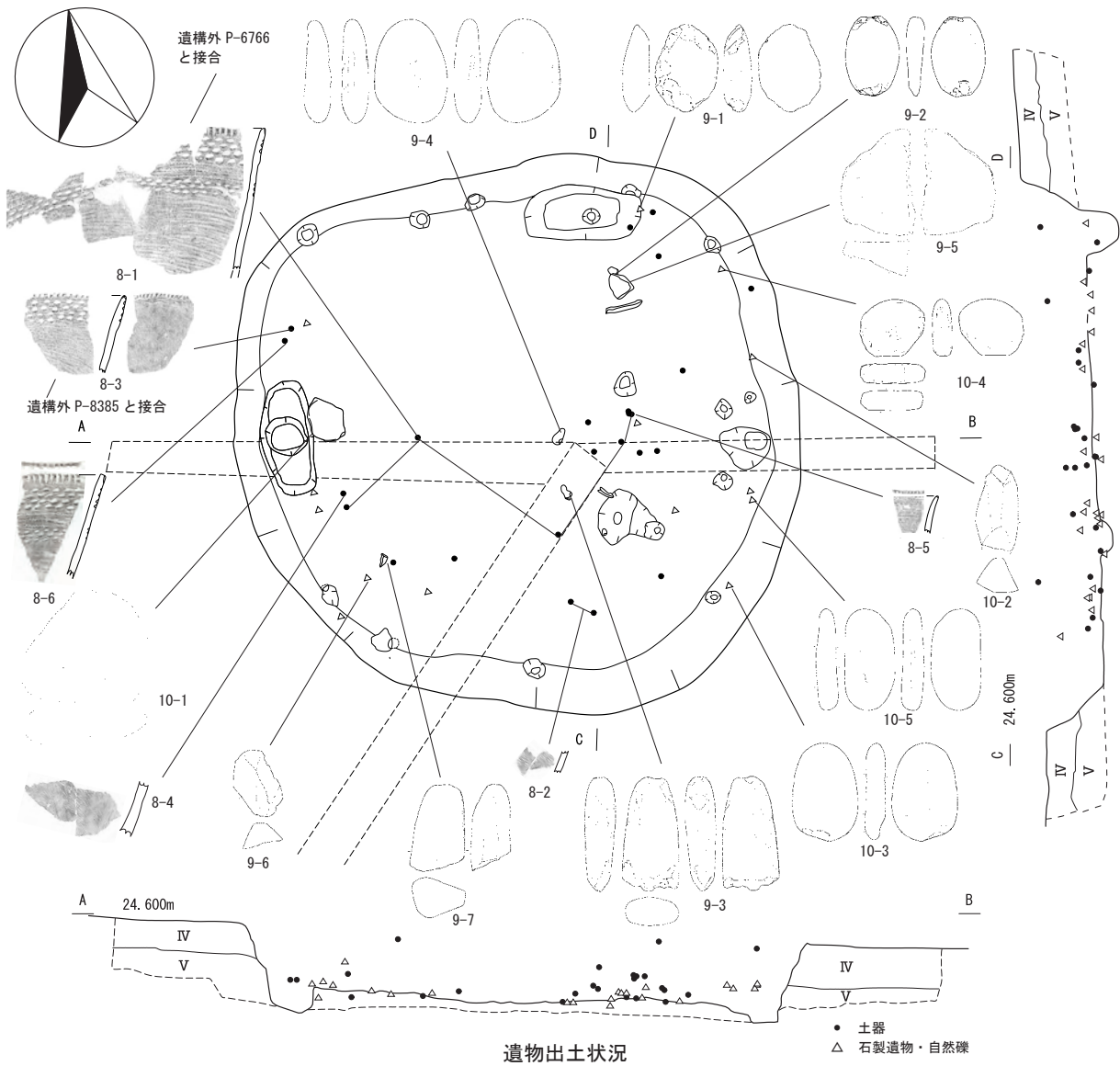


図7 第1号竪穴住居跡(1)



遺物出土状況

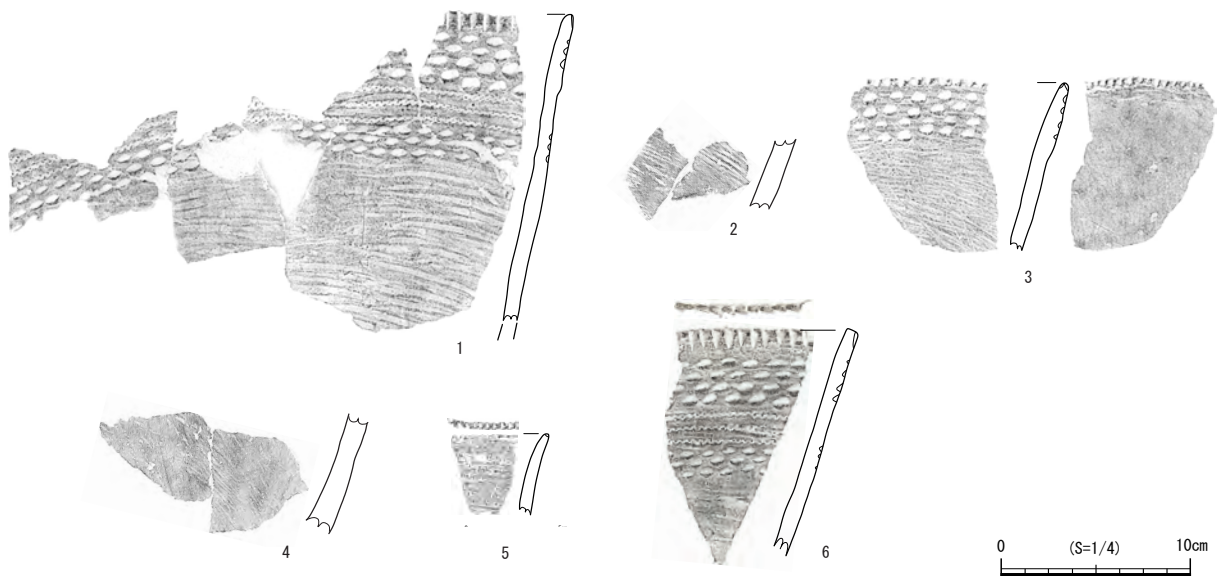


図8 第1号竖穴住居跡(2)

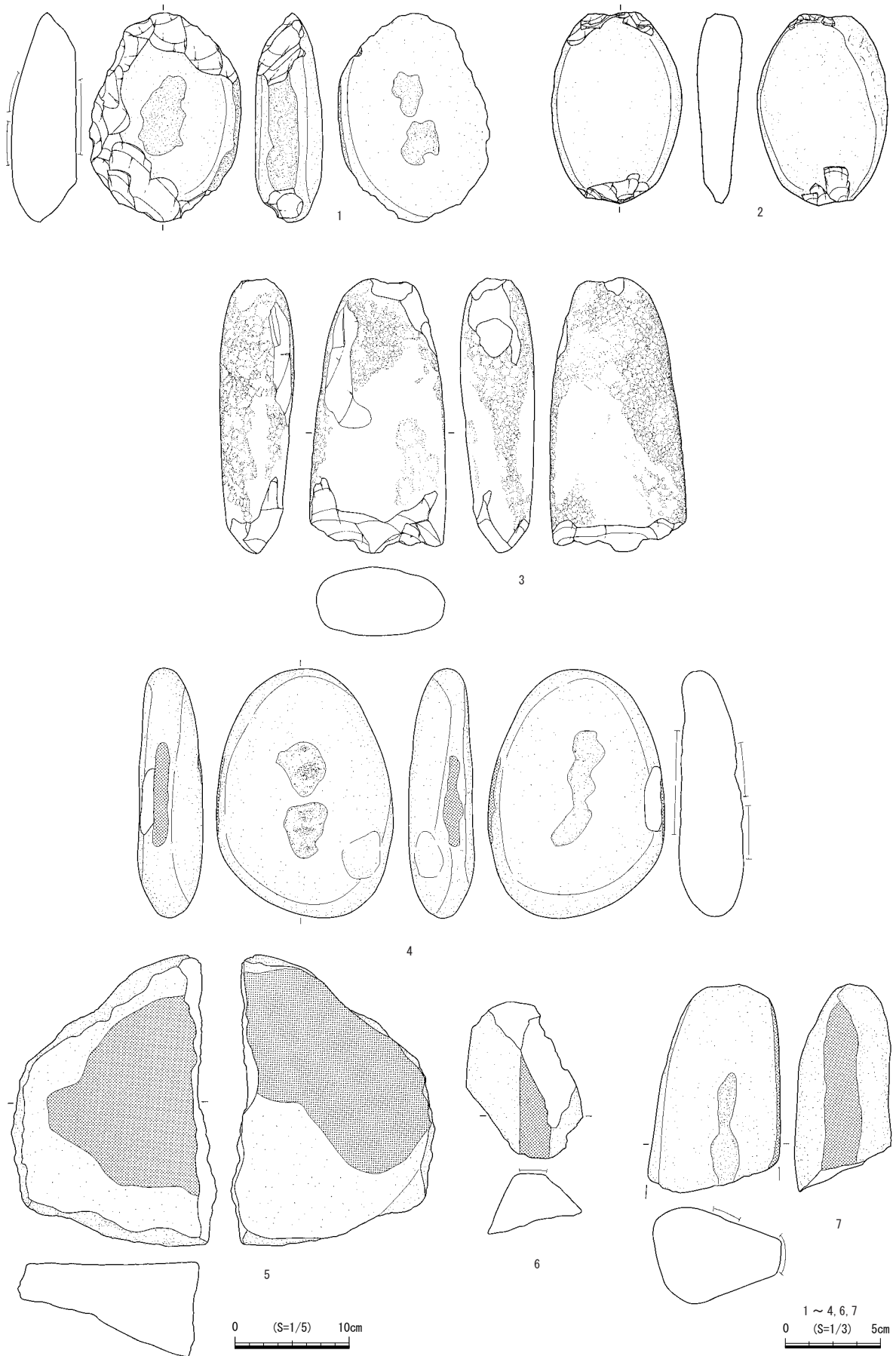


图9 第1号竖穴住居跡(3)

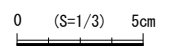
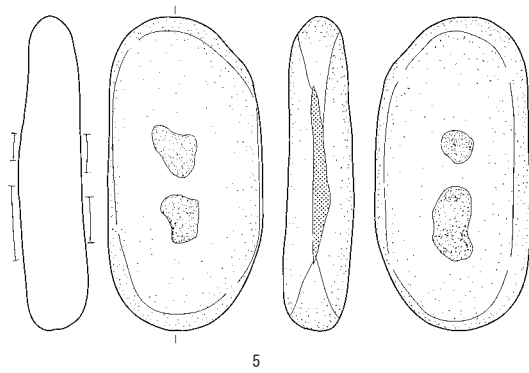
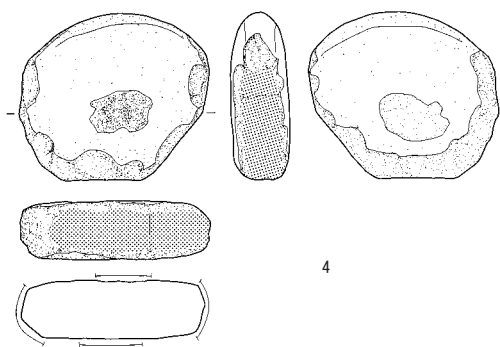
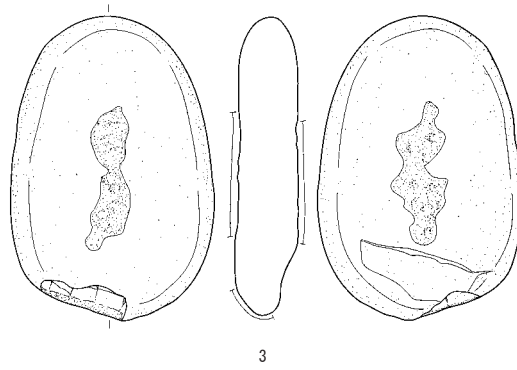
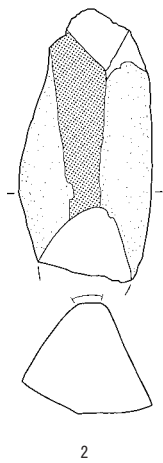
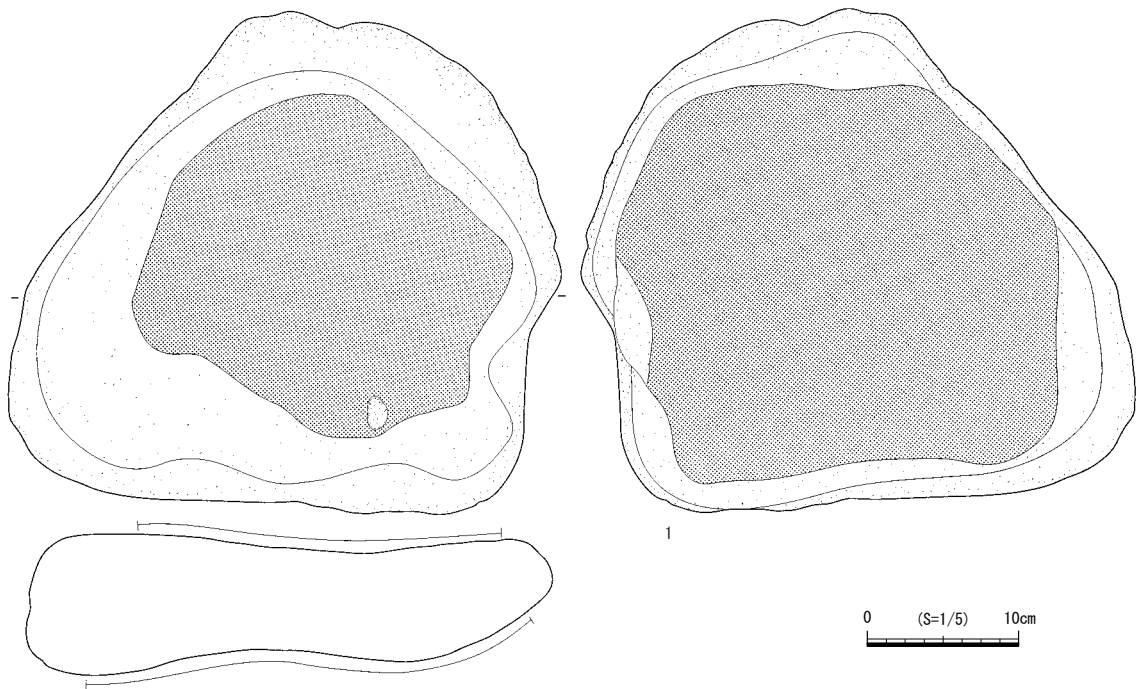


図10 第1号竖穴住居跡(4)

ては床面出土遺物と判断されるものである。[時期] 堆積土に含まれる遺物から判断して早期中葉（白浜式期）に帰属するものと考えられる。（斉藤）

第2号竪穴住居跡〔SI-02〕（図11）

〔検出状況〕周辺は削平をうけており、当初、炉だけを検出した。精査終了後、周辺の掘削を進めた段階で、炉に伴うと考えられる硬化面とピットを検出した。〔炉〕土器埋設部・石組部・前庭部からなる複式炉である。土器埋設部は石囲いを伴わない。土器の口辺は赤化していたが、周辺や土器内に焼土は形成されていなかった。土器内は、第Ⅲ層類似の土層を取り除いた時点で炭化材と焼土粒の混じるしまりのない土壌が現れ、底面まで類似の土壌が堆積していた。この土壌からクリ、トチノキの子葉・果皮の破片が検出された（第5章第2節参照）。また出土した炭化物1点はクリと同定された（第5章第1節参照）。土器内は下位1/3まで、熱によるハジケが観察された。石組部は2連で、底面に石は認められず、焼土が形成されていた。前庭部は堅くしまっていた。〔出土遺物〕土器1点・石鏃1点が土器埋設部土器内から、土器7点（54.3g、うち重量不明1点）、剥片1点が炉堆積土から出土した。〔時期〕炉の土器埋設部に用いられた土器から縄文時代中期末葉である。（中村）

第3号竪穴住居跡〔SI-03〕（図12～13）

〔検出状況〕周辺は削平をうけており、表土を除去した段階で炉石の上端が検出された。この段階で掘り方を確認するためベルトを設定して掘り下げた。しかし、遺構が黒色土中に構築されていたこと、検出面から床面と考えられる面までが浅かったことから掘方は確認できなかった。〔床〕硬化した床は確認できなかった。炉のレベルから判断して第Ⅲ層中に床があったと思われる。〔炉〕方形の石囲炉である。焼土の焼けは概して弱く、部分的によく焼けたブロックが認められた。炉石は赤化が認められた。〔埋設土器〕石囲炉の中心から約1.3m北西に完形土器が埋設されていた。土器内の第Ⅲ層相当層を取り除くと、下位1/3に焼土粒混じりの土壌が堆積していた。土器内はハジケは確認できないがやや赤化していた。これらの状況から、土器内で火を使用した可能性が考えられる。〔出土遺物〕セクションベルトを設定した範囲から縄文時代中期末葉の土器が64片（835.8g）出土した。石器は碎片・剥片・微小剥離痕のある剥片各1点がセクションベルトを設定した範囲内から出土した。土器内からは7点の土器片が出土した。炉の南1.3mの位置から板状の礫が出土した。ただし、掘方・床面ともに不明であるため、これらの遺物が本住居跡に伴うかどうか不明である。〔時期〕埋設された土器から、縄文時代中期末葉である。〔その他〕石囲炉の下位約20cmで焼土1基とピット4基を確認した。焼土は粒状を呈し、現地性の焼土とは考えにくい。ピットは石囲い炉の一部と平面的に重複するので本住居跡に伴わない可能性もある。ピットの深さは検出面から数cmである。（中村）

第4号竪穴住居跡〔SI-04〕（図14～15）

〔検出状況〕本住居跡は床面で4条の壁溝が検出されており、重複関係から3回にわたる拡張が行われた可能性が考えられる。南側半分が大きく削平されているが、攪乱土層中より本遺構に由来するものと考えられる多量の土器が出土している。〔平面形〕削平により、全体形状は不明であるが一番新しい第Ⅳ期では長楕円形を呈するものと考えられる。〔床面・柱穴・壁溝〕北西部分を中心に硬

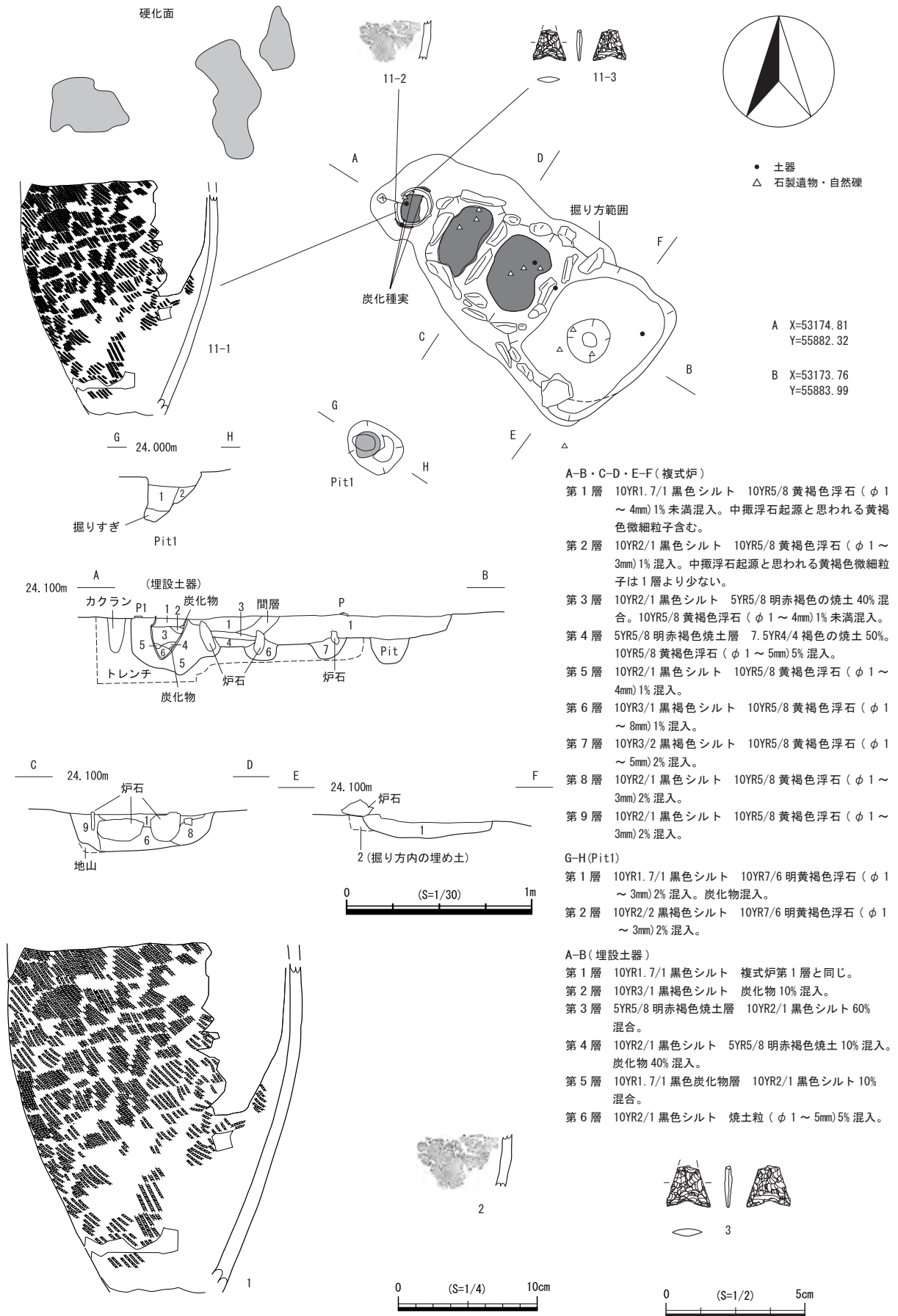


図 11 第 2 号 竪穴住居跡



図12 第3号竖穴住居跡(1)

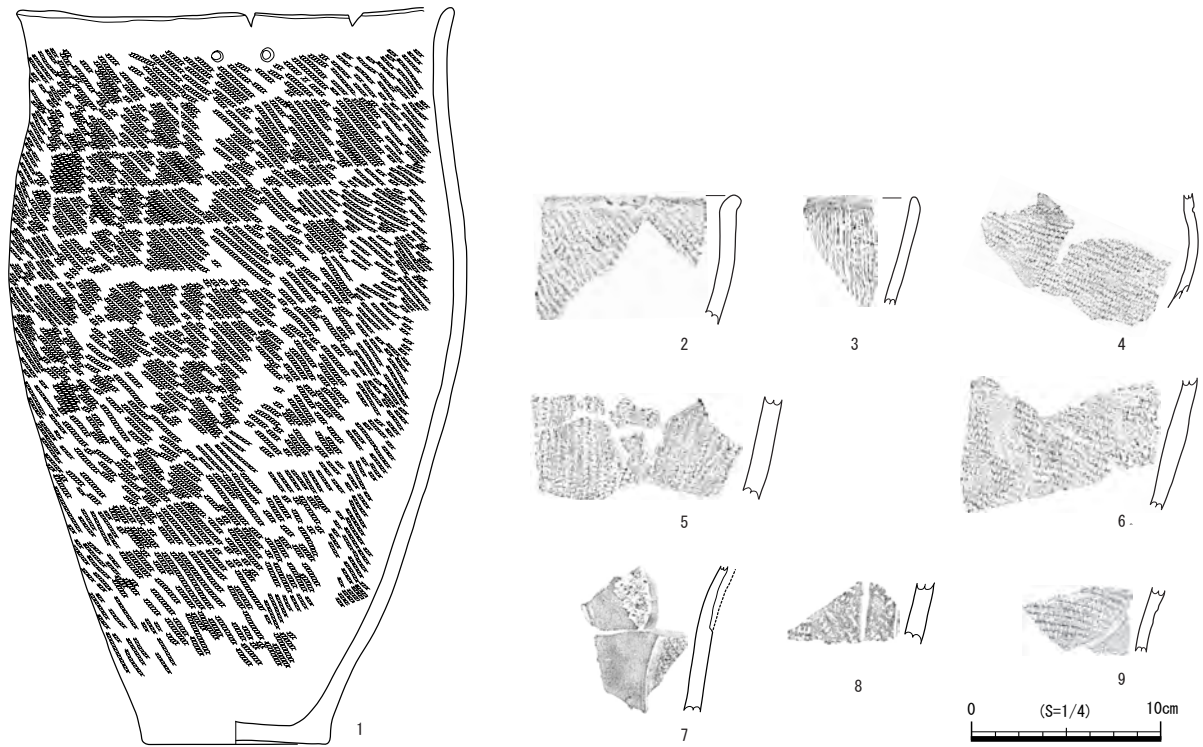
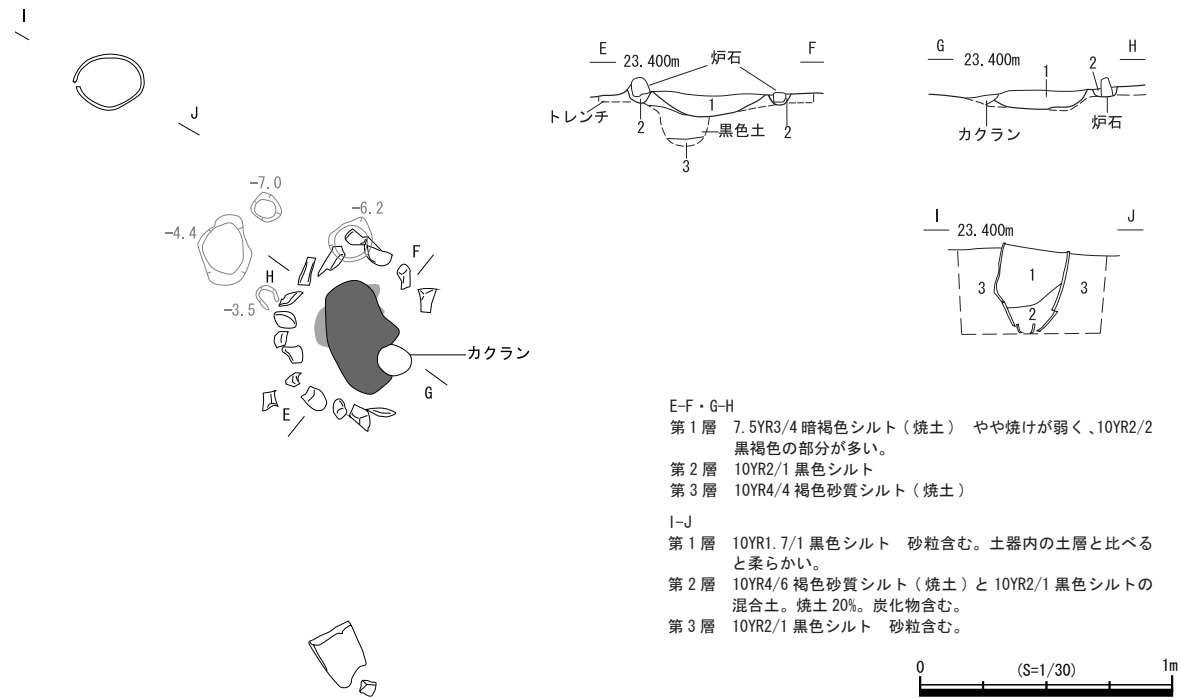
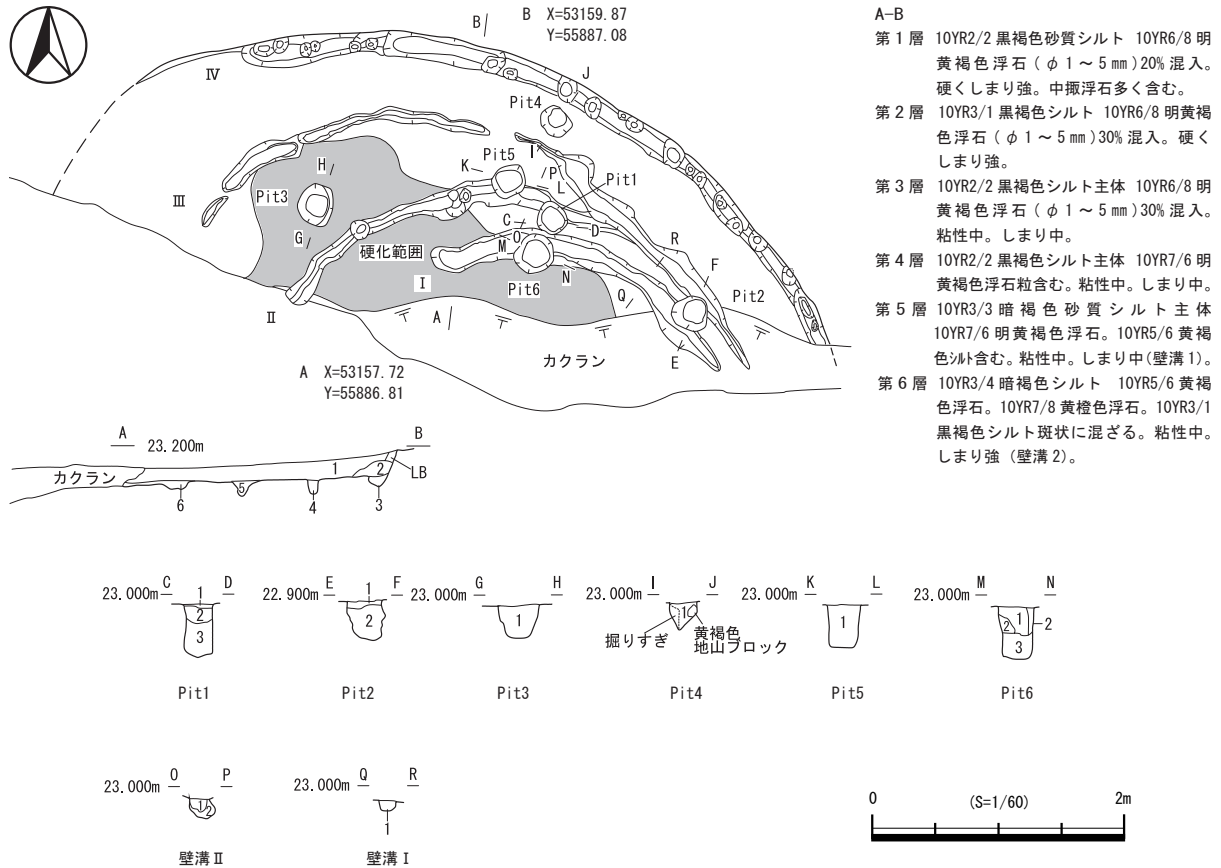


図13 第3号竖穴住居跡(2)



C-D (Pit1)
 第1層 10YR2/3 黒褐色シルト主体 中礫浮石多く含む住居堆積土1層に相当浮石粒2%混ざる。粘性弱。しまり強。
 第2層 10YR2/2 黒褐色シルト主体 10YR5/8 黄褐色シルト浮石粒が斑状に混ざり板装の様相呈している。粘性中。しまり強。
 第3層 10YR2/3 黒褐色シルト主体 10YR5/6 黄褐色シルトブロック状に含まれる。粘性中。しまり中。

E-F (Pit2)
 第1層 10YR3/1 黒褐色シルト主体 浮石粒3%中礫浮石多く含む。粘性強。しまり中。
 第2層 10YR3/4 暗褐色シルト主体 10YR6/6 明黄褐色(φ3~5cm)ブロック状に多く含む。

G-H (Pit3)
 第1層 10YR2/3 黒褐色シルト主体 粘性弱。しまり強。中礫浮石多く含む住居堆積土1層に近似浮石粒3%混ざる。10YR3/4 暗褐色シルト(φ3~5cm)ブロック含む。※硬化面を切るPit。

I-J (Pit4)
 第1層 10YR2/2 黒褐色シルト主体 10YR6/6 明黄褐色ブロック含む。浮石粒2%含む。粘性中。しまり弱。

K-L (Pit5)
 第1層 10YR2/3 黒褐色シルト主体 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト(地山に由来)混ざる。(φ5mm)程度の炭化物1%。浮石粒7%。粘性中。しまり中。

M-N (Pit6)
 第1層 10YR2/2 黒褐色シルト主体 直径5mm程度の浮石粒5%。10YR5/8 黄褐色粘質シルトブロック含む。粘性強。しまり中。
 第2層 10YR2/1 黒色シルト主体 10YR5/8 黄褐色粘質シルト斑状に含む貼り床状の堆積。粘性中。しまり中。
 第3層 10YR2/1 黒色シルト主体 浮石質シルト(10YR5/8 黄褐色)斑状に含む貼り床状の堆積。粘性中。しまり弱。

O-P (壁溝1)
 第1層 10YR2/2 黒褐色シルト主体 10YR6/8 明黄褐色浮石粒2%含む。
 第2層 10YR3/3 暗褐色砂質シルト主体 10YR7/6 明黄褐色浮石粒40%含む。10YR5/6 黄褐色シルト40%含む。

Q-R (壁溝2)
 第1層 10YR3/4 暗褐色シルト 10YR5/6 黄褐色と10YR7/8 黄褐色浮石混入。10YR3/1 黒褐色シルト斑状に混ざる壁溝1の第2層に似る。

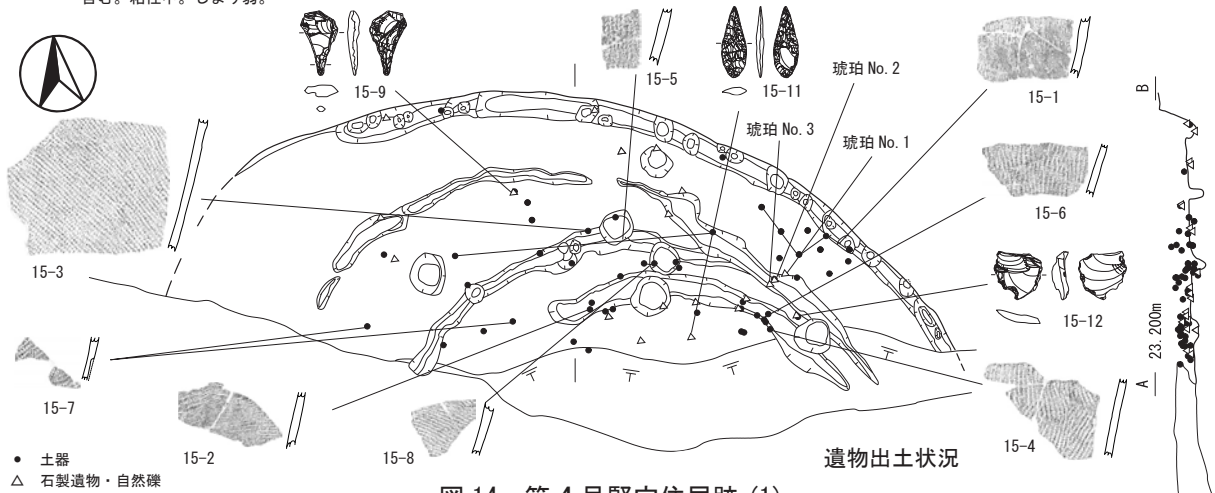


図14 第4号竖穴住居跡(1)

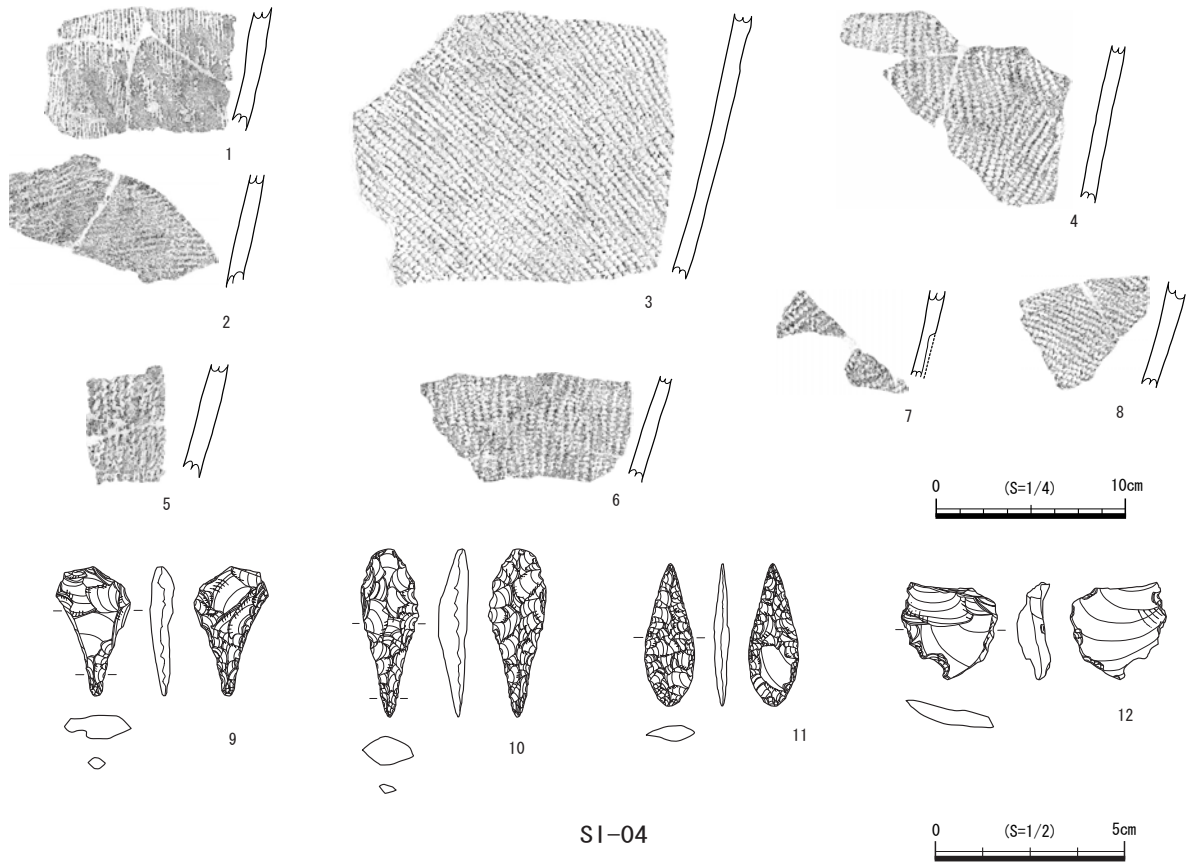
面が確認されているが、壁溝Ⅲの内側では特に顕著であった。Pit1、2、3、4は重複関係ならびに堆積土の特徴から第Ⅳ期に伴うものと考えられる。第Ⅳ期に伴うピットの堆積土はいずれも黒色土とロームブロックの混合土で埋め戻されおり、検出時に1層として確認された薄い黒色土は土圧によって住居跡の堆積土が相対的にピットの上面まで下がったものと考えられる。Pit5は壁溝Ⅱよりも新しく、第Ⅲ期もしくは第Ⅳ期に伴うものと考えられる。Pit6は壁溝Ⅰの掘方を確認した際に検出されたものであり、第Ⅱ期以降に構築され第Ⅳ期よりも古いものと考えられる。壁溝Ⅰ～Ⅳいずれについても堀方底面には顕著なピット状の凹凸がみられ、平面形状は直線的ではない。壁溝Ⅳは西側で途切れており、壁も不明瞭である。[堆積土] 壁溝、ピットには黒色土とロームブロックの混合土が堆積しており、特に壁溝Ⅰの堆積土は堅くしまっている。壁際の2層については褐色土が混ざり、壁の崩壊土と考えられる。壁溝Ⅰ～Ⅲ、およびピットについては人為堆積、住居跡掘方については自然堆積による埋積と考えられる。[出土遺物] 堆積土中から土器が56点(1308.2g)、壁溝Ⅰの覆土から微小剥離痕のある剥片、壁溝Ⅳの覆土から剥片、Pit1より石鏃がそれぞれ1点出土している。堆積土からは剥片4点、石鏃、石錐、二次調整のある剥片、微小剥離痕のある剥片、両極加撃痕跡のある剥片、碎片、敲磨器類が各1点出土している。また、堆積土中から琥珀塊・琥珀片が3点(計15.8g)出土した。[時期] 堆積土および、周辺の攪乱土より出土した遺物から判断して中期末葉に帰属するものと考えられる。(斉藤)

第5号竪穴住居跡〔SI-05〕(図15～17)

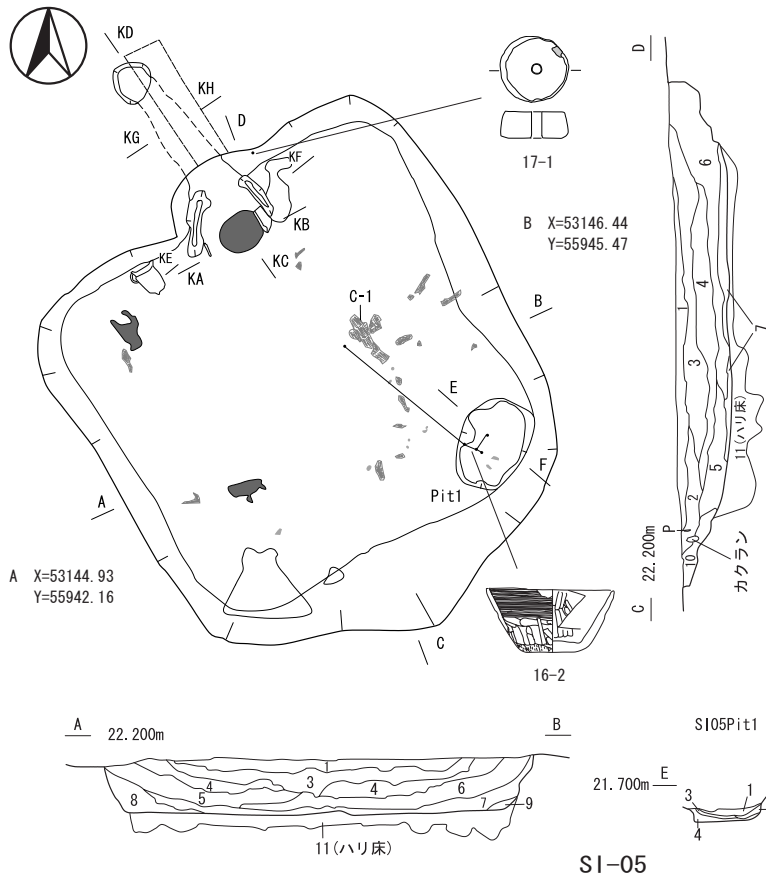
[堆積土] 10層に分層した。第2層に白頭山火山灰、第4層に十和田a火山灰を含み、これに挟まれて焼土が堆積していた。焼土は廃棄されたものと考えられた。その他は黒色シルトである。[炭化材・焼土] 第7層中から若干の炭化材および焼土が検出された。本住居跡は焼失住居と考えられる。焼土・炭化材は床面から数cm程度浮いていた。炭化材1点がコナラ属コナラ節と同定された(第5章第1節参照)。[壁] 壁はやや斜めに立ち上がっているが、遺構廃絶後の崩落のためと思われる。南壁の中央部がスローブ状になり、外側にやや張り出すが、硬化面などは観察されなかった。[床] 黒色土の張り床で、軟弱である。[カマド] 地下式のカマドで北側中央に位置する。袖は粘土により構築され、末端に粘板岩の板石を起てていた。焼土は厚さ約12cmである。煙道部は長さ125cmで、火床面から緩やかに下る。[柱穴] 検出されなかった。[周溝] 検出されなかった。[その他の施設] 床面南西隅にピットが検出された。[出土遺物] カマド脇から土師器坏・甕が、カマド上から土師器甕が、Pit1から土師器坏がそれぞれ出土した。また、堆積土から土器片が55片出土したが、周辺の包含層から紛れ込んだものと考えられる。石器は、敲磨器類1点、石皿・台石1点、石鏃1点が堆積土から、敲磨器類1点、石鏃1点がカマドから出土した。[時期] 出土した土師器から、奈良時代と考えられる。(中村)

第7号竪穴住居跡〔SI-07〕(図17～19)

[重複] 後述する炉の検出状況から新旧2軒の竪穴住居跡が重複したものと考えられる。[平面形] やや不整な円形を呈する。[堆積土] 黒色シルトの単層である。[炭化材・焼土] 堆積土中から炭化材



SI-04



A-B・C-D

全体に十和田b浮石を1%含んでいる。

第1層 10YR3/2 黒褐色シルト 下層の焼土の土壌化したものを含んでいる。

第2層 10YR2/1 黒色シルト 10YR5/6 黄褐色シルト質火山灰(白頭山火山灰)を途切れ途切りに含む。

第3層 10YR3/4 暗褐色シルト(焼土)とその土壌化した10YR2/2 黒褐色シルト

第4層 10YR3/1 黒褐色シルト 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト質火山灰(十和田a火山灰)を途切れ途切りに含む。

第5層 10YR2/1 黒色シルト 他の層より粒径細かい。柔らかい。

第6層 10YR3/1 黒褐色シルト

第7層 10YR2/1 黒色シルト 炭化材出土層。

第8層 10YR3/1 黒褐色シルト

第9層 10YR3/1 黒褐色シルト

第10層 10YR2/1 黒色シルト

第11層 10YR2/1 黒色シルト 10YR7/8 黄褐色浮石(φ1~8mm)混入。かたくしまりあり。

E-F(Pit1)

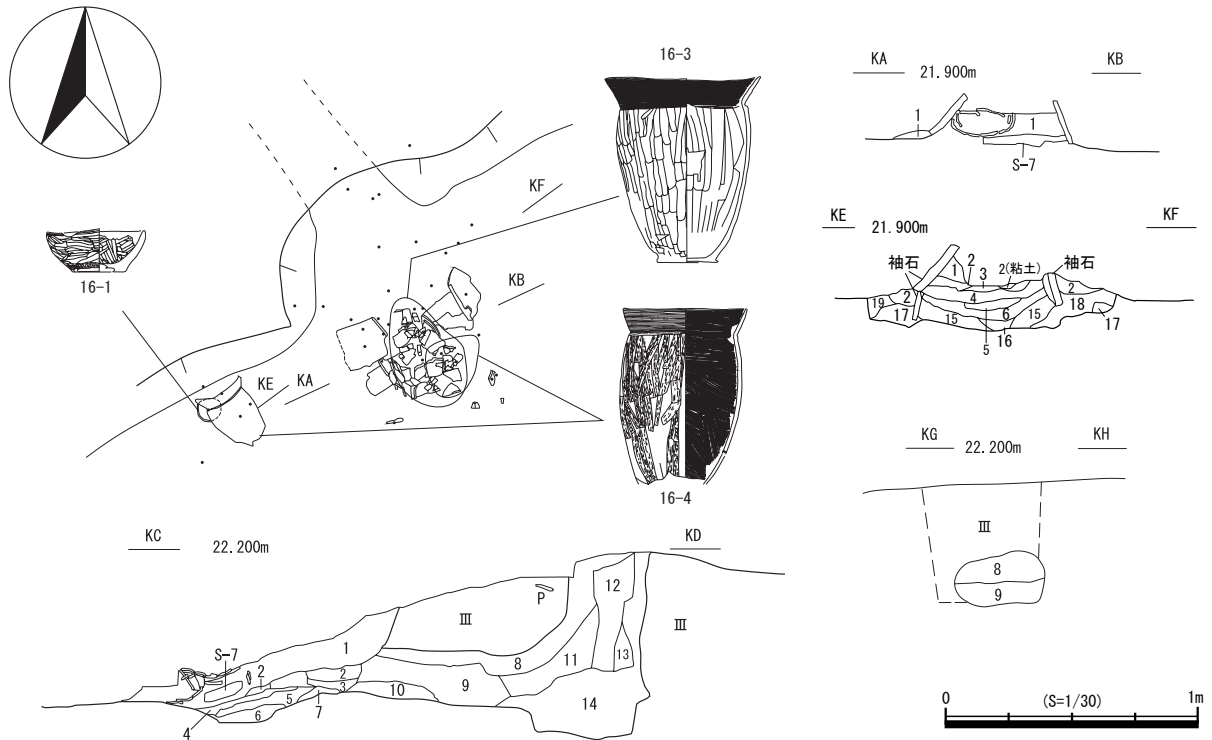
第1層 10YR2/1 黒色 10YR5/6 黄褐色浮石(φ1~5mm)混入。かたくしまりあり。

第2層 10YR3/1 黒褐色 2.5Y6/4 にぶい黄色の粘土10%混入。かたくしまりあり。粘性あり。

第3層 10YR2/2 黒褐色 2.5Y6/4 にぶい黄色の粘土40%混入。かたくしまりあり。粘性あり。

第4層 10YR2/3 黒褐色 黄褐色浮石(φ1~2mm)3%混入。かたくしまりあり。粘性あり。

図15 第4号竪穴住居跡(2)・第5号竪穴住居跡(1)



KA-KB・KC-KD・KE-KF・KG-KH

- 第1層 10YR2/2 黒褐色シルト 10YR7/4 にぶい黄橙色の粘土（カマドの粘土）10%混入。10YR8/3 浅黄橙色浮石（φ1~3mm）5%混入。かたくしまりあり。
- 第2層 10YR2/2 黒褐色シルト 10YR7/4 にぶい黄橙色のカマドの粘土80%。10YR8/3 浅黄橙色浮石（φ1~5mm）5%混入。焼土粒（φ1~3mm）微量混入。かたくしまりあり。粘性あり。
- 第3層 10YR3/2 黒褐色シルト 焼土（φ1~10mm）。炭化物（φ1~5mm）40%混入。かたくしまりあり。粘性あり。
- 第4層 10YR3/4 暗褐色シルト 7.5YR5/8 明褐色焼土ブロック（φ30mm）。焼土粒（φ1~5mm）。炭化物（φ1~5mm）。10YR6/8 明黄褐色浮石（φ1~8mm）30%混入。ややかたく。粘性あり。（火床面として作用した層）。
- 第5層 10YR4/4 褐色と7.5YR3/4 暗褐色混合シルト 2.5YR4/8 赤褐色焼土。ややかたい。粘性あり。
- 第6層 2.5YR4/8 赤褐色焼土 かたい。火床面。
- 第7層 10YR2/1 黒色シルト 10YR6/8 明黄褐色浮石（φ1~3mm）10%混入。焼土粒（φ1~5mm）3%混入。かたくしまりあり。
- 第8層 10YR2/2 黒褐色シルト 7.5YR5/4 にぶい褐色の焼土粒（φ1~5mm）10%混入。やわらかい。しまりあり。

- 第9層 10YR2/1 黒色シルト 10YR5/4 にぶい黄褐色の粘土10%混入。やわらかい。
- 第10層 10YR3/2 黒褐色シルト 10YR7/4 にぶい黄橙色のカマドの粘土30%混入。ややかたくしまりあり。粘性あり。
- 第11層 10YR2/1 黒色シルト 10YR7/4 にぶい黄褐色と10YR6/8 明黄褐色浮石（φ1~5mm）5%混入。やわらかい。粘性ややあり。
- 第12層 10YR3/2 黒褐色シルト 10YR6/4 にぶい黄褐色と10YR7/6 明黄褐色粘土30%混入。煙道部の粘土の崩落。
- 第13層 10YR6/4 にぶい黄褐色粘土。かたくしまりあり。
- 第14層 10YR3/1 黒褐色シルト 10YR6/4 にぶい黄褐色と10YR5/8 黄褐色の粘土20%混入。やわらかい。
- 第15層 10YR2/1 黒色シルト 焼土下の変色層。
- 第16層 10YR2/3 黒褐色シルト
- 第17層 10YR2/2 黒褐色シルト（貼床）
- 第18層 10YR2/1 黒色シルト（貼床）
- 第19層 10YR1.7/1 黒色シルト（貼床）
- 第Ⅲ層 10YR2/1 黒色シルト 10YR7/8 黄褐色浮石（φ1~3mm）3%混入。かたい。

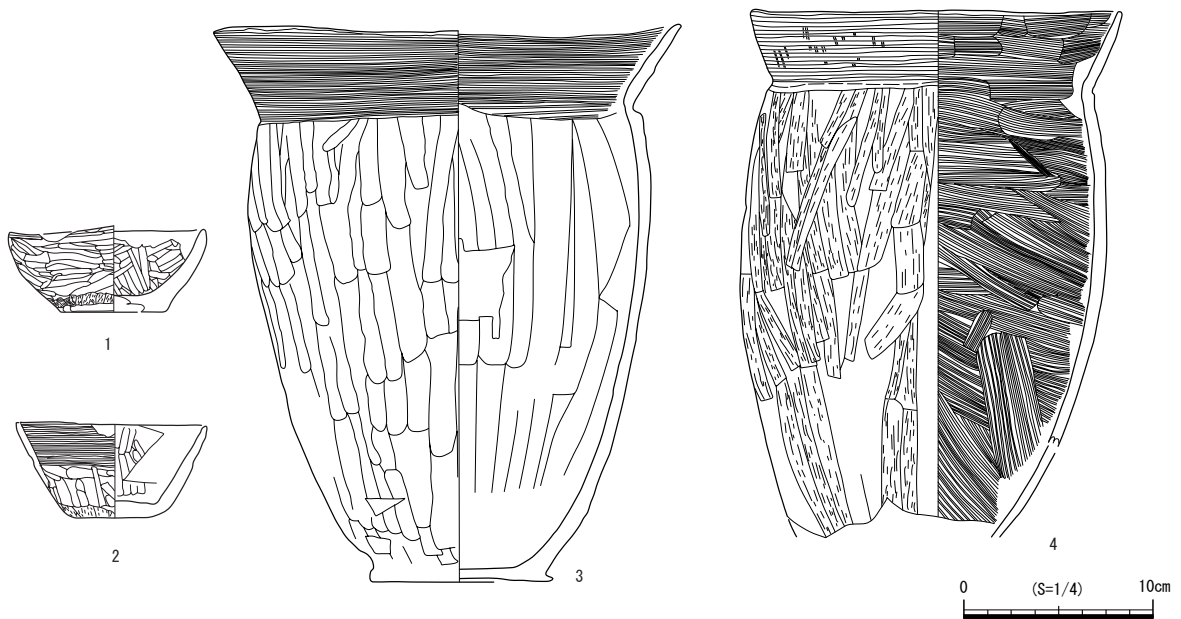


図16 第5号竪穴住居跡(2)

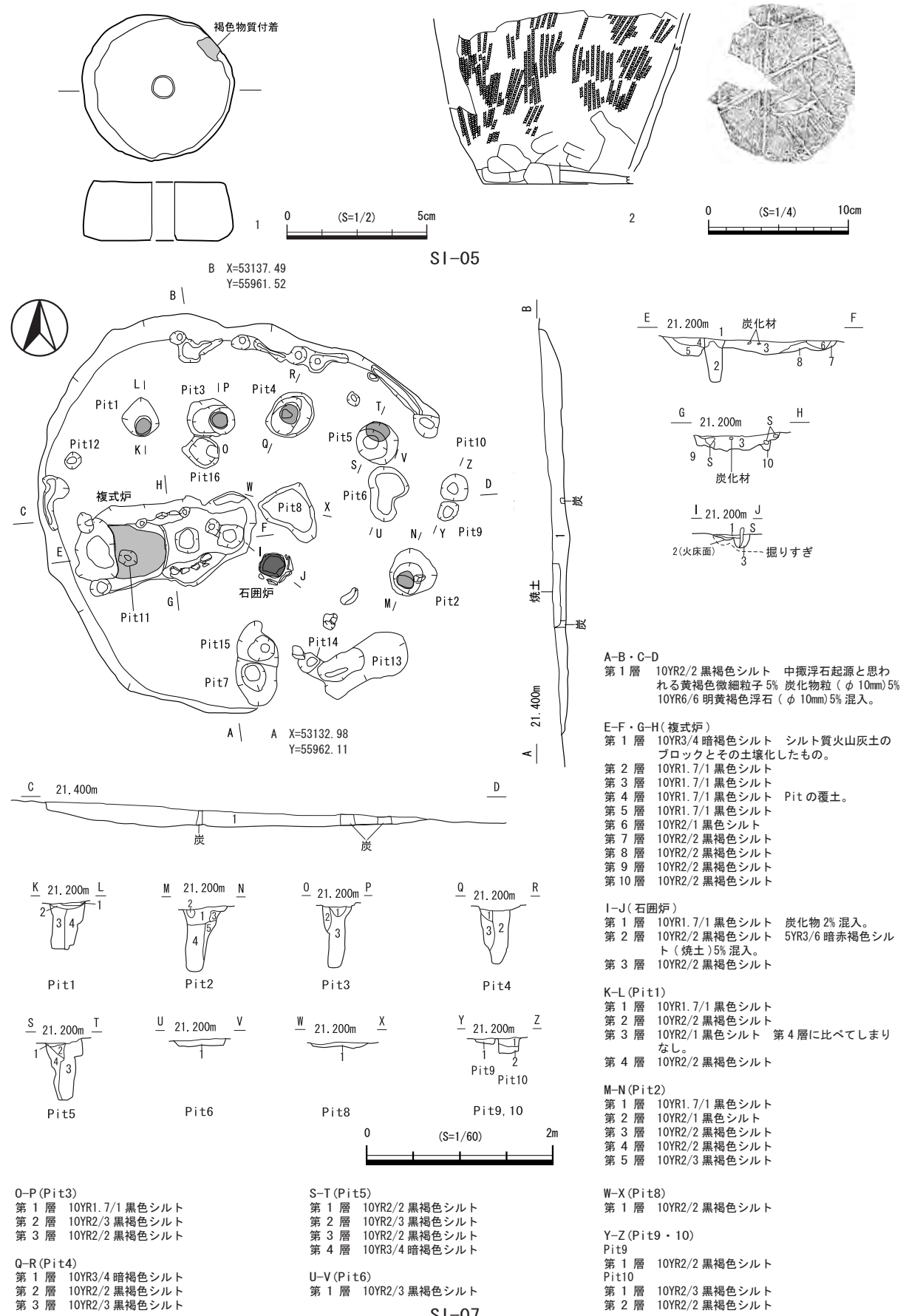
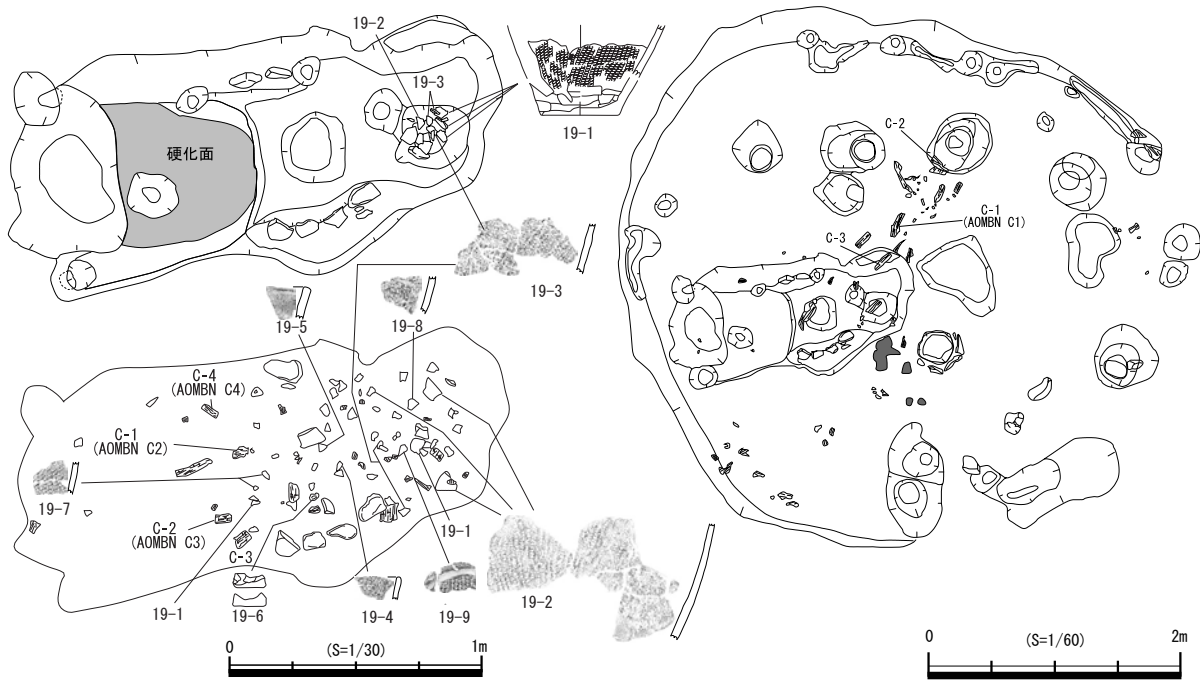
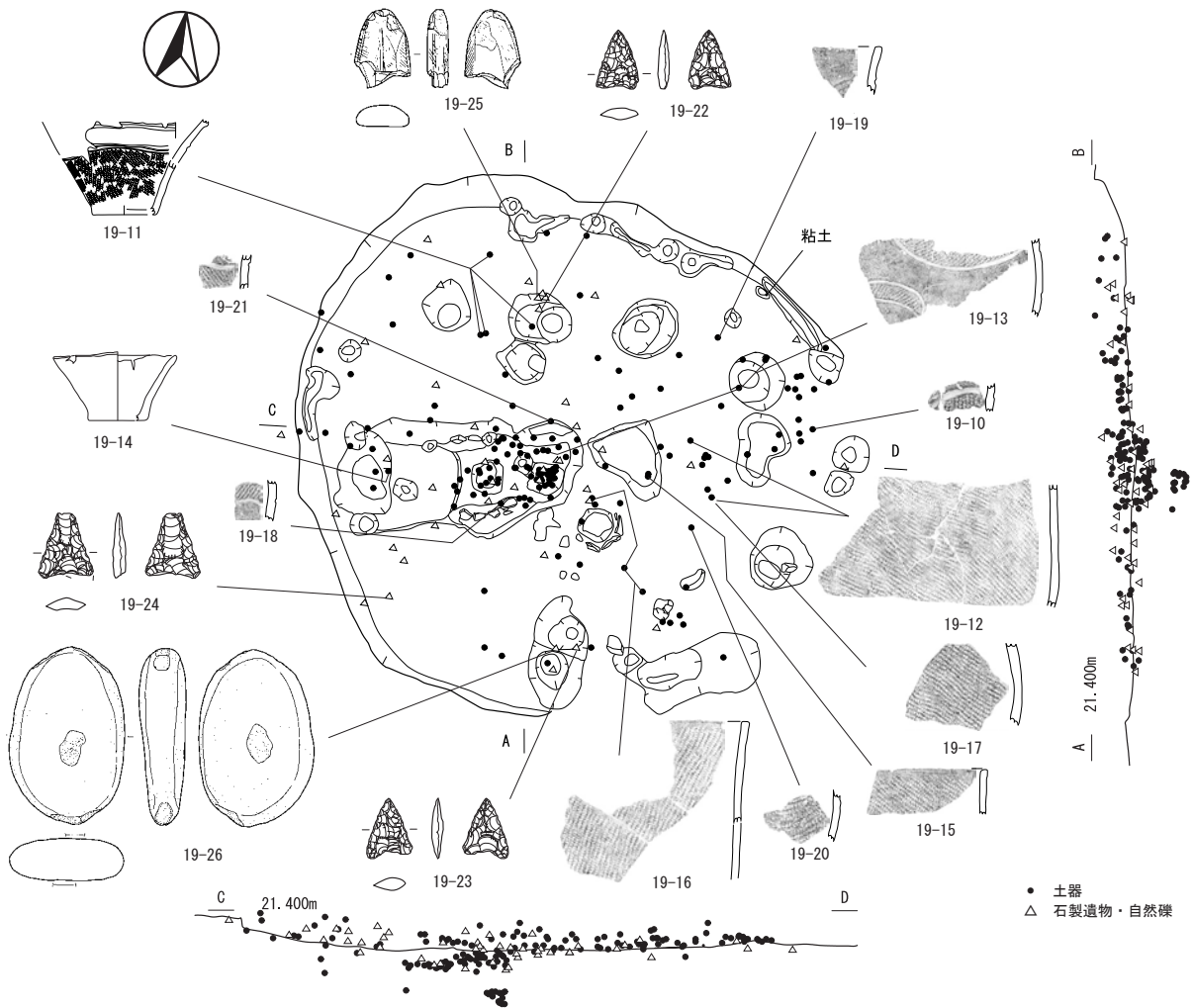


図17 第5号竪穴住居跡(3)・第7号竪穴住居跡(1)



複式炉平面図(上)・遺物出土状況(下)

炭化材出土状況



遺物出土状況

図18 第7号竖穴住居跡(2)

化と少量の焼土が検出された。いずれも床面から数センチ上位で出土している。本住居跡は焼失住居である。炭化材は元の長さが数十 cm 以上と推定され、上屋の部材と考えられる。炭化材 3 点について ^{14}C 年代測定を実施し、2 点は縄文時代後期初頭、1 点は奈良時代の年代が得られた（第 5 章第 4 節参照）。樹種はいずれもクリと同定された（第 5 章第 1 節参照）。[壁] 東～南東の壁は検出されなかった。もっとも残存状況のよい北西側で約 20cm である。[床面] 第Ⅳ層～第Ⅴ層を床面とする。硬化面は認められなかった。[炉] 半円形の石囲炉と複式炉が検出された。石囲炉は床面の南東側、中軸線上の壁よりの位置に検出された。石囲の規模は直径約 40cm で、内側には焼土が形成されていた。焼土は半截後に残った土壌を採取し水洗選別を実施したが植物遺体は検出されなかった。複式炉は、西壁に接して検出された。住居跡中央側に石囲部、西側に前庭部が認められた。東側には土器の底部付近の破片（図 19-1）が残存するピットがあり、土器埋設部の一部が残存したものと考えられる。前庭部は硬化していた。石囲部は礫が抜けていた。堆積土中で炭化材と土器片及び炉石と思われる礫が出土した。土器片や礫は炭化材の上や同レベルで認められた。炭化材は細かく、中には節のある小枝状のものもあり、炭化材が砕けたものではなく元の材が細かなものであったと考えられる。また、住居堆積土で検出された炭化材はこれらより大型であるが、複式炉上にも分布する。一方、細かな炭化材は複式炉覆土以外に集中する状況は見られない。これらの状況から、この炭化材は住居の部材が落ち込んだものとは考えられず、複式炉の廃絶時、ないしは廃絶以後に炉石・炉体土器の抜き取りや遺物の投げ込みが行われたものと考えられる。複式炉覆土から出土した炭化材は ^{14}C 年代測定を実施し、縄文時代中期末葉の年代が得られている（第 5 章第 4 節参照）。樹種はいずれもクリである。従って石囲炉が新しく、複式炉が古いと考えられる。[柱穴] 床面から 14 基のピットを検出した。Pit1・3・4・5・15 が支柱穴と考えられ、Pit3・15・5・2 が複式炉に伴うと考えられる。[出土遺物] 土器は堆積土中から 135 点、2753.5g、複式炉覆土からは 83 点、748.7g 出土した。複式炉の土器埋設部に当たると考えられるピットから縄文時代中期末葉の土器底部（図 19-1）が出土している。堆積土から出土した土器はいずれも縄文時代中期末葉の土器である。図 19-11 は、胴部文様帯下位に隆起線により水平方向に展開する文様を描くものである。石器は Pit3 上面から磨製石斧 1 点、同覆土から剥片 1 点、Pit7 覆土から敲磨器・二次調整のある剥片各 1 点、堆積土から石鏃 5 点・剥片 4 点、微小剥離痕のある剥片 2 点・両極加撃痕のある剥片 1 点が出土した。19-25 は磨製石斧の基部であるが、正面中央に縦方向の擦痕が筋状にみられる。石斧としての機能を失った後に擦り切りを意図した再加工がなされたものと考えられる。遺物と堆積土出土炭化材の上位からも下位からも出土し、特定の傾向を示すものではない。[時期] 複式炉を持つ住居跡が、炉の形態や出土土器から縄文時代中期末葉、石囲炉を持つ住居跡が縄文時代中期末葉から後期初頭と考えられる。（中村）

第 8 号竪穴住居跡 [SI-08]（図 20～21）

[平面形] 北西－南東を軸とする隅丸方形を呈する。[カマド] 北東方向に煙道がのびる地下式構造のカマドである。袖の構造は壊されているため不明であるが、袖石と考えられる礫片が火床面近くに散在している。[床面・柱穴] 北東隅を除くほぼ全面に貼床が施されており、南東隅では顕著な硬化面が確認されている。硬化面の箇所では地山ブロックが層状に堆積しており、数次にわたる床の補修が行われた可能性が考えられる。[堆積土] 焼土層に含まれる形で灰白色火山灰が上下二層、層状

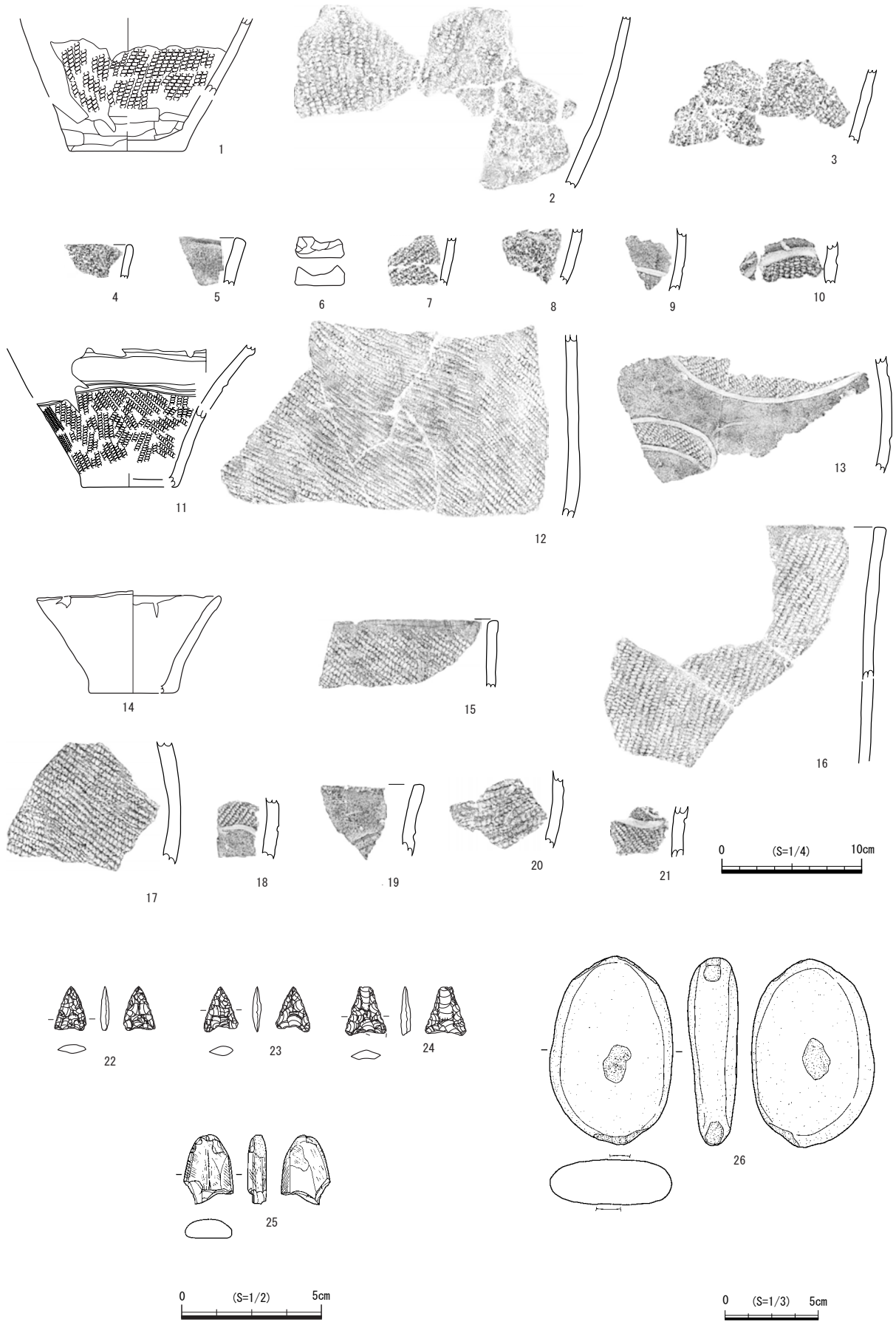


図19 第7号竖穴住居跡(3)

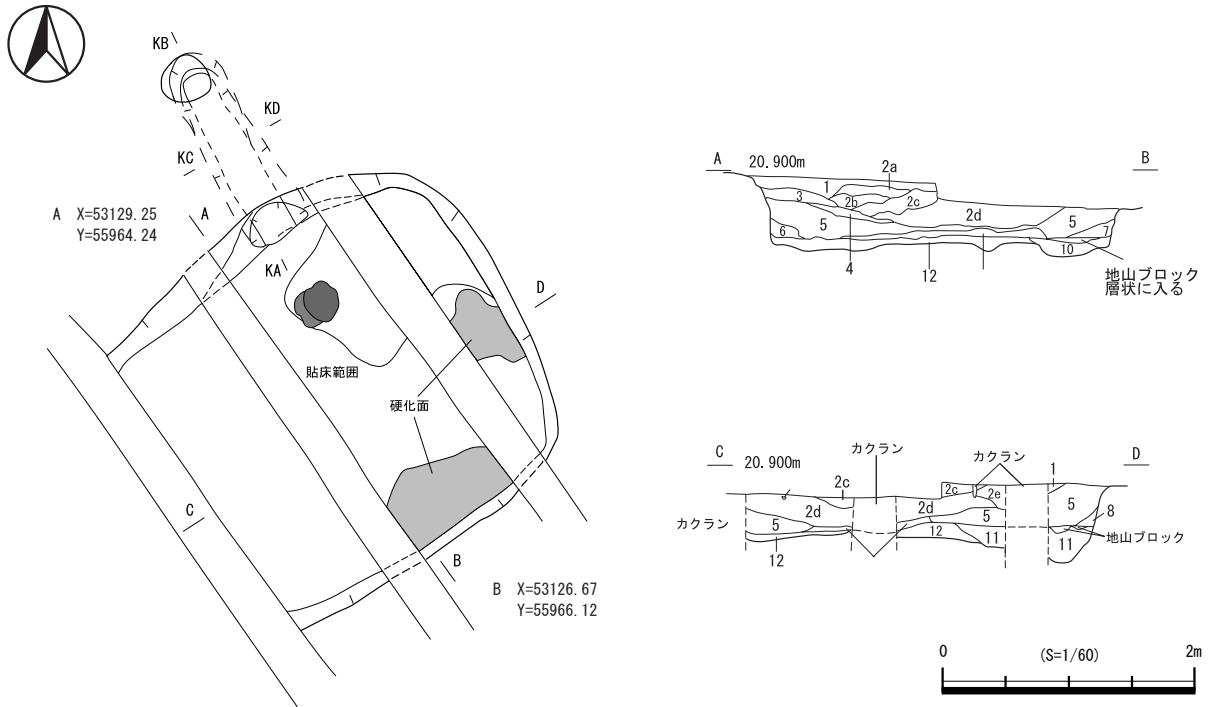
に堆積している。[出土遺物] 本遺構に確実に伴う遺物は出土していない。堆積土・床面から 70 片 (447.2g) の土器が出土したがいずれも流れ込んだものと思われる。[時期] 堆積土中の十和田 a 火山灰より、10 世紀前葉以前に帰属するものと考えられる。(齊藤)

第 9 号竪穴住居跡 [SI-09] (図 22)

[検出状況] 平成 15 年度調査時に掘り下げを行った際、遺構の存在に気づかずに南側を掘削してしまった。平成 16 年度調査の際黒色土の落ち込みを認識し、土坑として調査を開始したが、カマドの存在が明らかになった時点で住居と認識した。[堆積土] 2 層に分層された。第 2 層は焼土である。第 2 層の焼土は柱穴と思われるピットにも詰まっていた。[炭化材・焼土] 焼土下から炭化材が出土した。焼失住居の可能性がある。材 1 点はカエデ属と同定された (第 5 章第 1 節)。[壁] 遺存状況が悪く、カマド脇の一部が残存するだけである。[床面] 第Ⅲ層を床面とし軟弱である。[カマド] 袖は基部がわずかに残存していた。粘土により構築されている。火床面も焼けが弱い。[出土遺物] 第 2 層の焼土上面から土師器片が 1 点出土した。底部は穿孔されている (写真図版 7 右最上段)。カマド煙道部から石核が 1 点出土した。[時期] 出土した土師器から奈良時代である。(中村)

第 11 号竪穴住居跡 [SI-11] (図 23 ~ 32)

[平面形] やや扁平な円形を呈する。[堆積土] 黒色シルトの単層である。[炭化材・焼土] 覆土中から炭化材と焼土が検出された。本住居跡は焼失住居跡である。炭化材・焼土とも床面から 3cm ~ 20cm 浮いた状態で出土している。焼土と炭化材の関係は、焼土が炭化材と同レベルないしやや上位から出土する傾向がある。出土した炭化材 4 点は ^{14}C 年代測定を実施し、縄文時代中期末葉の年代が得られている (第 5 章第 4 節参照)。材は 18 点について同定を実施し、オニグルミ・コナラ属コナラ節が各 1 点、他はすべてクリ・クリ類似種であった (第 5 章第 1 節参照)。[壁] 黒色土中に遺構が構築されており、検出が困難だったため、遺存状況が悪い。底面からはまっすぐ立ち上がるようである。[床面] 第Ⅳ層・第Ⅴ層を床面とする。住居軸線の奥壁側に硬化面が認められた。[炉] 土器埋設部・石囲部・前庭部を持つ複式炉で、作り替えが行われている。[柱穴] 床面に 16 基のピットを確認した。平面の規模や深さから Pit1・14・3・11・12・4・7・16 が支柱穴と考えられる。このうち、Pit7・3・4・14・12 が旧炉に、Pit16・11・1・12・4 が新炉に対応するものと思われる。Pit5・12 は深さから支柱穴とは考えがたいが、平面的位置からすると、旧炉の段階で想定される床面に収まりきらず、新炉に対応するものとする。[その他の施設] 新炉前庭部の壁際から剥片集積が 2 基検出された。剥片集積 1 から 28 点、剥片集積 2 から 25 点の剥片が出土した。どちらも周辺の土層 (基本層序第Ⅳ層に当たる) と同様の土に埋まっており、掘方は確認できなかった。壁際には周溝と小ピットが断続的に巡る。[出土遺物] 土器は 131 点 2538.3g 出土した。内訳は床面から 1 点、堆積土から 130 点である。すべて縄文時代中期末葉のものである。石器は複式炉から敲磨器類、石皿・台石、石製品、石錐、石鏃、砥石、剥片各 1 点、微小剥離痕のある剥片 2 点、Pit13 から二次調整のある剥片 1 点、剥片 2 点、Pit11 から両極加撃痕のある剥片 1 点、堆積土から石鏃 3 点、二次調整のある剥片 9 点、剥片 16 点、微小剥離痕のある剥片 10 点、磨製石斧 1 点、両極加撃痕のある剥片 1 点出土した。31-10 は左側縁に尖頭状のエッジが形成されており、石錐の可能性がある。32-3 は複



A-B・C-D

- 第1層 10YR2/2 黒褐色シルト
- 第2a層 10YR3/3 暗褐色シルト(焼土) 十和田a火山灰5%混入。かたくしまりあり。
- 第2b層 10YR3/3 暗褐色シルト(焼土) 十和田a火山灰20%混入。10YR7/8 黄橙色浮石(φ1~5mm)5%混入。炭化物少量混入。かたくしまりあり。
- 第2c層 10YR3/2 黒褐色シルト(焼土) 十和田a火山灰40%混入。10YR6/8 明黄褐色浮石(φ1~5mm)1%混入。炭化物少量混入。かたくしまりあり。
- 第2d層 10YR3/2 黒褐色シルト(焼土) 十和田a火山灰が層の右側に5%混入。10YR6/8 明黄褐色浮石(φ1~5mm)10%混入。かたくしまりあり。
- 第2e層 10YR2/2 黒褐色シルト(焼土) 10YR3/3 暗褐色シルト。10YR4/6 褐色シルト。10YR6/8 明黄褐色浮石(φ1mm)少量混入。かたくしまりあり。
- 第3層 10YR3/1 黒褐色シルト 10YR6/8 明黄褐色浮石(φ1mm)少量混入。かたくしまりあり。
- 第4層 10YR3/1 黒褐色シルト 10YR7/8 黄橙色浮石(φ1mm)微量混入。ややかたくややしまりあり。4層と5層理面に薄い砂層有。

- 第5層 10YR3/1 黒褐色シルト 10YR6/8 明黄褐色浮石(φ1~5mm)5%混入。かたくしまりあり。ラミナ状の堆積状態。
- 第6層 10YR2/2 黒褐色シルト 10YR6/8 明黄褐色浮石(φ1~10mm)10%混入。かたくしまりあり。
- 第7層 10YR3/2 黒褐色シルト 10YR6/8 明黄褐色浮石(φ1~5mm)10%混入。焼土と炭化物5%混入。かたくしまりあり。粘性あり。
- 第8層 10YR3/1 黒褐色シルト 10YR6/8 明黄褐色浮石(φ1mm)少量混入。やや柔らかくややしまりあり。
- 第9層 10YR2/2 黒褐色シルト 10YR6/8 明黄褐色浮石(φ1~10mm)10%混入。かたくしまりあり。
- 第10層 10YR1.7/1 黒色シルト主体 9層・5層・7層との境に10YR5/6 黄褐色の砂質シルトが層状に含まれる。10YR4/4 褐色シルト(φ3cm)混入。10YR5/6 黄褐色シルト(φ3cm)斑状に含まれる。
- 第11層 10YR2/3 黒褐色シルト 10YR4/4 褐色シルト(φ4cm)混入。10YR5/6 黄褐色砂質シルト斑状に含まれる。硬化著しい。しまり強。粘性中(浮石φ5mm含む地山ブロック)。特に5層・8層との境に多い。
- 第12層 10YR3/1 黒褐色シルト主体 10YR4/4 褐色シルト(φ3cm)20%斑状に含む。白色浮石粒(φ5mm)1%混入。粘性中。しまり中。

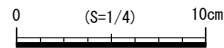
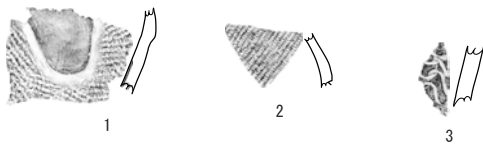
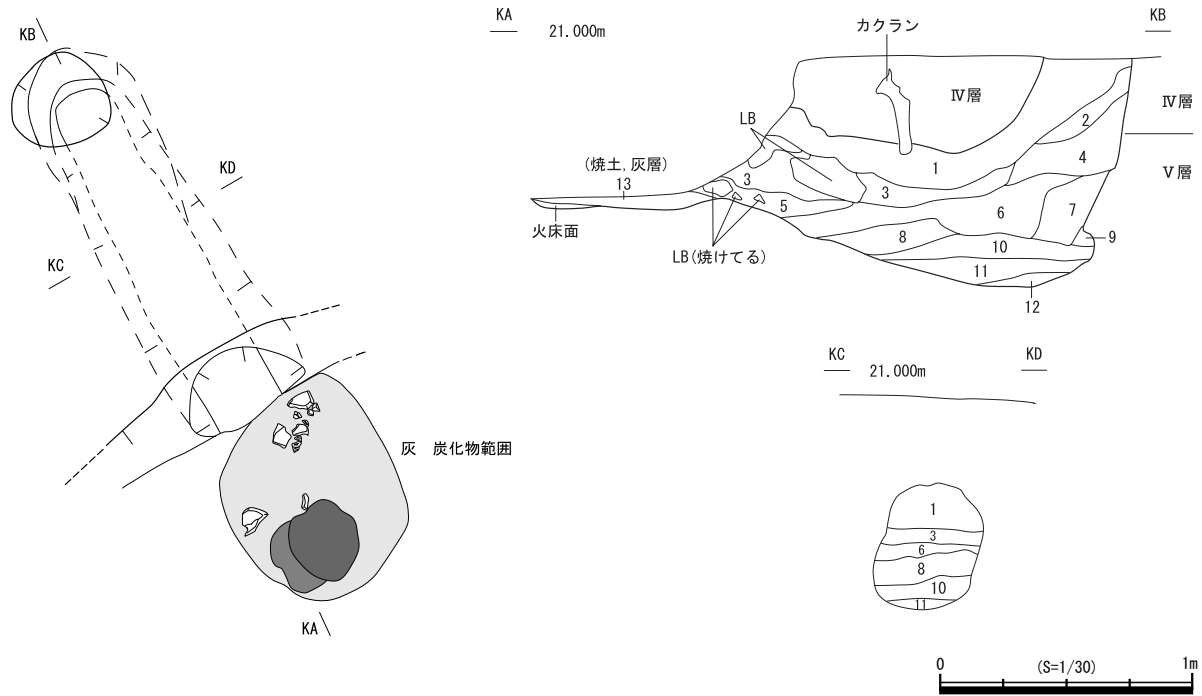


図20 第8号竪穴住居跡(1)



KA-KB・KC-KD セクション

- 第 1 層 10YR3/1 黒褐色粘性シルト 10YR3/3 暗褐色土 30%。10YR6/8 明黄褐色浮石 (φ 1~5mm) 少量混入。ややもろくしまりなし。
- 第 2 層 10YR2/2 黒褐色シルト 地山崩壊土。粘性中。しまり弱。
- 第 3 層 10YR3/1 黒褐色と 10YR3/3 暗褐色粘性シルト 10YR6/8 明黄褐色浮石 (φ 1~5mm) 微量混入。ややもろくしまりなし。
- 第 4 層 10YR2/1 黒色シルト 浮石粒微量。粘性中。しまり弱。
- 第 5 層 10YR2/2 黒褐色シルト ロームブロック (φ 30mm) 20%。被熱したカマド崩壊土。
- 第 6 層 10YR4/4 褐色シルト 10YR6/8 明黄褐色シルトを斑状に含む。
- 第 7 層 10YR2/1 黒色シルト 粘性中。しまり弱。
- 第 8 層 10YR5/6 黄褐色シルト 粘性中。しまり弱。浮石質ロームブロック多量含む。
- 第 9 層 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性中。しまり弱。
- 第 10 層 10YR5/6 黄褐色シルト 浮石質ロームブロック 50% 含む。
- 第 11 層 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性中。しまり中。砂質浮石斑状に含む。
- 第 12 層 10YR2/1 黒色シルト 粘性中。しまり弱。
- 第 13 層 10YR3/2 黒褐色シルト 2.5YR5/8 明赤褐色焼土粒 (φ 3~10mm) 斑状に含む。炭化物 (φ 3~5mm) 5% 含む。粘性中。しまり中。

図 21 第 8 号 縦穴住居跡 (2)

式炉の炉石として利用されていたものである。片面に研磨面があり、裏面には凹Ⅱ類がみられる。両端は打ち割られており、部分的なつぶれも生じている。剥片集積 1 は剥片 2 点、微小剥離痕のある剥片 25 点、二次調整のある剥片 1 点で構成される。石材は全て珪質頁岩であるが、母岩としては最大 7 つのグループに分類できる。剥片集積 2 は剥片 4 点、微小剥離痕のある剥片 21 点、二次調整のある剥片 1 点、両極加撃痕跡のある剥片 1 点で構成される。このうち、2 組に接合関係が確認された。(28-12, 13) いずれも、折断面で接合している。石材は全て珪質頁岩であり、母岩としては最大 8 つのグループに分類できる。[時期] 出土した土器から、縄文時代中期末葉である。(中村)

第 12 号 縦穴住居跡 [SI-12] (図 32)

[平面形] 小判型を呈する。[堆積土] 第 V 層がやや濁ったようなシルトで、3 層に分層した。壁に近いほど黒みが弱くなり、壁との識別が難しくなる。[壁] 緩やかに立ち上がる。[床面] 第 V 層を床面とする。硬化面は認められない。[炉] 検出されなかった。[柱穴] 壁際に小ピット状の落ち込みが巡っていたためすべて半截を行った (写真図版 8) が、明確にピットといえるものはなかった。床面に柱穴は検出されなかった。[出土遺物] 堆積土からムシリ I 式の細片 1 片が出土したのみである。[時

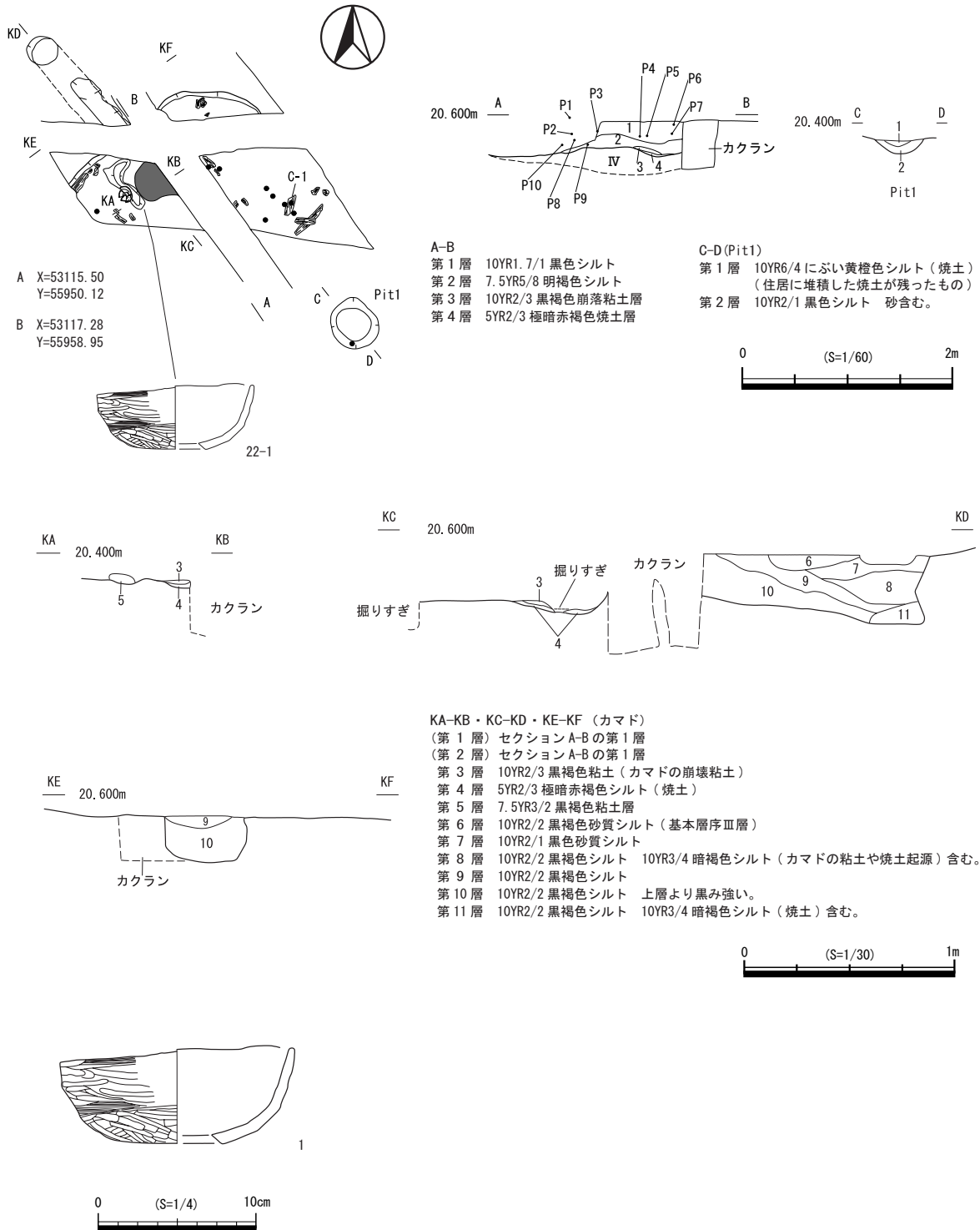
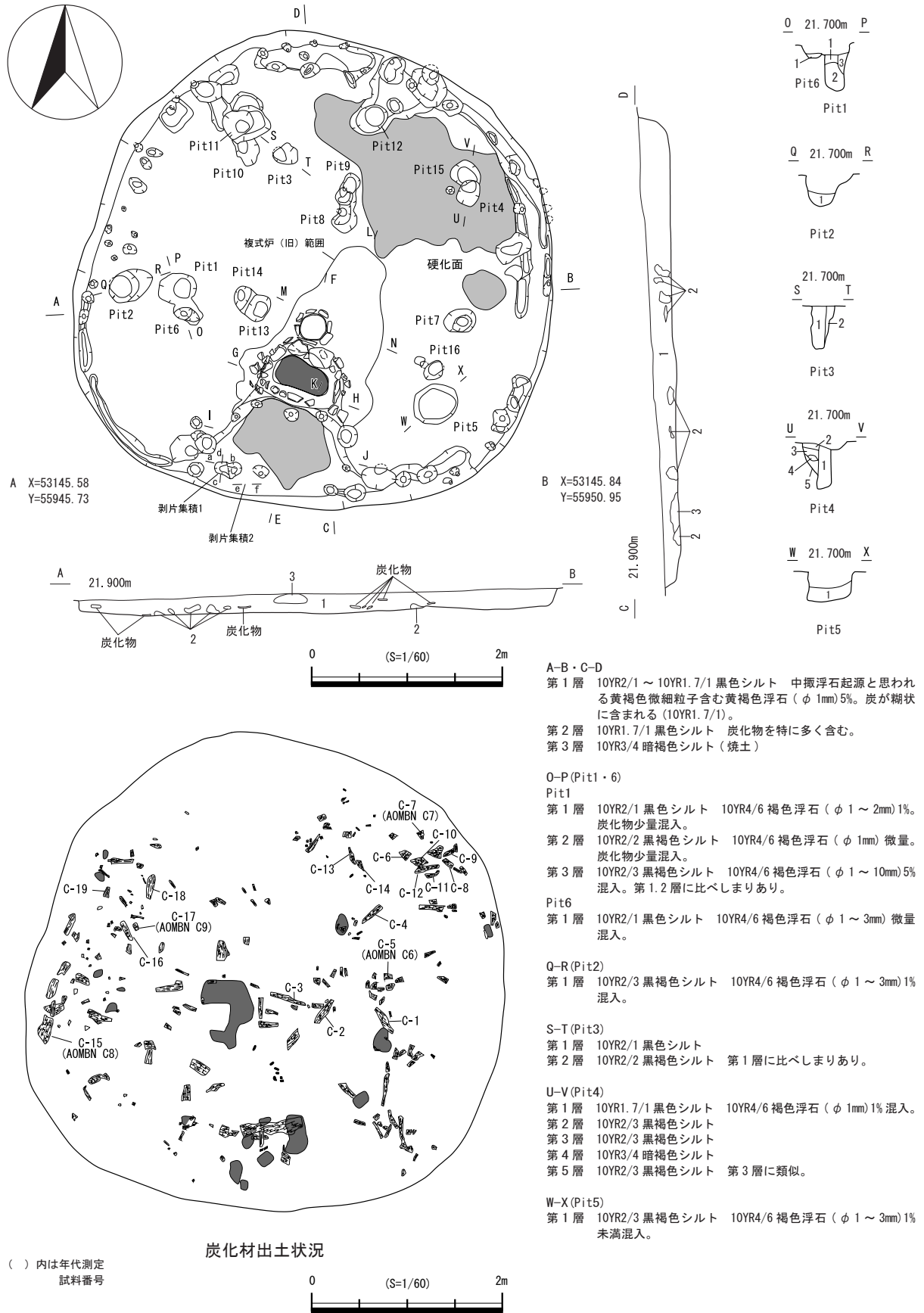


図22 第9号竪穴住居跡



A-B・C-D
 第1層 10YR2/1～10YR1.7/1 黒色シルト 中概浮石起源と思われる黄褐色微細粒子含む黄褐色浮石(φ1mm)5%。炭が糊状に含まれる(10YR1.7/1)。
 第2層 10YR1.7/1 黒色シルト 炭化物を特に多く含む。
 第3層 10YR3/4 暗褐色シルト(焼土)

O-P(Pit1・6)
 Pit1
 第1層 10YR2/1 黒色シルト 10YR4/6 褐色浮石(φ1～2mm)1%。炭化物少量混入。
 第2層 10YR2/2 黒褐色シルト 10YR4/6 褐色浮石(φ1mm)微量。炭化物少量混入。
 第3層 10YR2/3 黒褐色シルト 10YR4/6 褐色浮石(φ1～10mm)5%混入。第1.2層に比べしまりあり。
 Pit6
 第1層 10YR2/1 黒色シルト 10YR4/6 褐色浮石(φ1～3mm)微量混入。

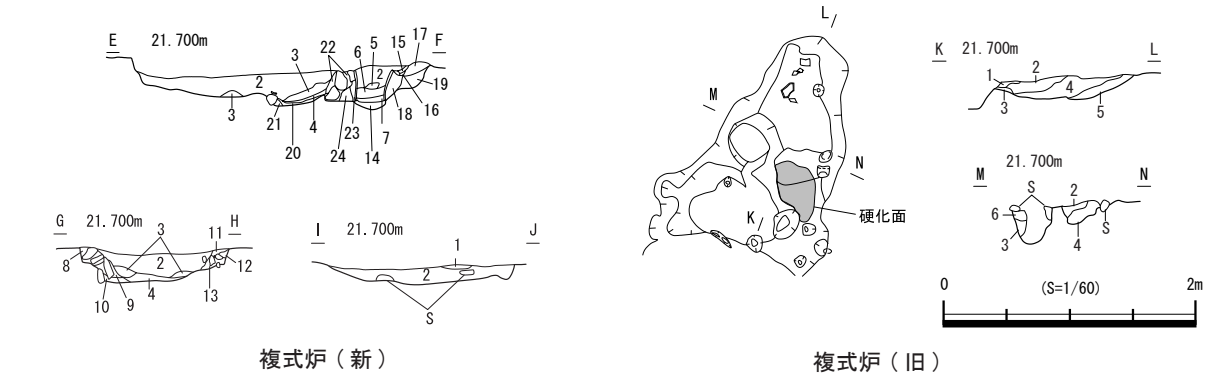
Q-R(Pit2)
 第1層 10YR2/3 黒褐色シルト 10YR4/6 褐色浮石(φ1～3mm)1%混入。

S-T(Pit3)
 第1層 10YR2/1 黒色シルト
 第2層 10YR2/2 黒褐色シルト 第1層に比べしまりあり。

U-V(Pit4)
 第1層 10YR1.7/1 黒色シルト 10YR4/6 褐色浮石(φ1mm)1%混入。
 第2層 10YR2/3 黒褐色シルト
 第3層 10YR2/3 黒褐色シルト
 第4層 10YR3/4 暗褐色シルト
 第5層 10YR2/3 黒褐色シルト 第3層に類似。

W-X(Pit5)
 第1層 10YR2/3 黒褐色シルト 10YR4/6 褐色浮石(φ1～3mm)1%未混入。

図23 第11号竪穴住居跡(1)



E-F・G-H・I-J(複式炉新)

- 第1層 10YR4/4 褐色シルト(焼土)
- 第2層 10YR2/1 黒色シルト 10YR4/6 褐色浮石(φ1~3mm)1%混入。しまりなし。炭化物多量。
- 第3層 10YR1.7/1 黒色シルト 炭化物。
- 第4層 10YR2/2 黒褐色シルト 他層に比べしまっている。
- 第5層 7.5YR4/4 褐色シルト 焼土。炭化材1~5%混入。しまりなくボソボソしている。
- 第6層 10YR2/1 黒色シルト しまりなくボソボソしている。
- 第7層 10YR2/2 黒褐色シルト 他層に比べしまっている。
- 第8層 10YR2/2 黒褐色シルト 10YR6/8 明黄褐色浮石(φ1~3mm)少量。しまりあり。
- 第9層 10YR2/3 黒褐色シルト 10YR6/8 明黄褐色浮石(φ1~5mm)5%混入。しまりあり。
- 第10層 10YR3/1 黒褐色シルト 10YR6/8 明黄褐色浮石(φ1~5mm)微量。炭化物少量混入。しまりややあり。
- 第11層 10YR2/2 黒褐色と10YR4/4 褐色の混合シルト 10YR6/8 明黄褐色浮石(φ1~5mm)1%混入。しまりあり。
- 第12層 10YR3/1 黒褐色シルト 10YR6/8 明黄褐色浮石(φ1~3mm)微量。しまりあり。
- 第13層 10YR2/1 黒色シルト 10YR6/8 明黄褐色浮石(φ1~3mm)1%混入。しまりあり。
- 第14層 10YR1.7/1 黒色と10YR4/6 褐色の混合シルト 10YR7/4 にぶい黄褐色浮石(φ1~5mm)1%混入。粘性あり。
- 第15層 10YR2/2 黒褐色シルト 10YR7/8 黄褐色浮石(φ1mm)1%。かたくしまりあり。

- 第16層 7.5YR2/3 極暗褐色シルト 10YR7/8 黄褐色浮石(φ1~8mm)3%混入。かたくしまりあり。
- 第17層 10YR2/3 黒褐色シルト 10YR7/8 黄褐色浮石(φ1~3mm)1%未滿。5YR3/6 暗赤褐色焼土混入。
- 第18層 10YR2/2 黒褐色シルト 10YR7/8 黄褐色浮石(φ1~12mm)2%混入。炭化物(φ10mm)。焼土(全体的に)混入。
- 第19層 10YR2/2 黒褐色シルト 10YR7/8 黄褐色浮石(φ1~5mm)3%混入。炭化物1%混入。かたくしまりあり。
- 第20層 7.5YR3/4 暗褐色焼土 10YR3/4 暗褐色。シルト。炭化物混入。
- 第21層 10YR2/1 黒色と10YR2/2 黒褐色の混合シルト 10YR6/8 明黄褐色浮石(φ1~2mm)1%未滿混入。炭化物混入。粘性あり。
- 第22層 10YR2/1 黒色シルト 10YR6/8 明黄褐色浮石(φ1mm)1%未滿混入。炭化物1%。かたくしまりあり。
- 第23層 10YR2/3 黒褐色シルト 焼土1%未滿。かたくしまりあり。
- 第24層 10YR3/3 暗褐色シルト 10YR7/8 黄褐色浮石(φ1~8mm)1%混入。かたくしまりあり。

K-L・M-N(複式炉旧)

- 第1層 10YR2/2 黒褐色シルト 7.5YR3/4 暗褐色の焼土粒(φ5mm)混入。
- 第2層 10YR2/3 黒褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色浮石(φ1~5mm)1%混入。
- 第3層 10YR2/2 黒褐色シルト
- 第4層 10YR2/2 黒褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色浮石(φ1~3mm)1%混入。炭化材1%混入。
- 第5層 10YR2/3 黒褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色浮石(φ1mm)1%未滿混入。
- 第6層 焼土。

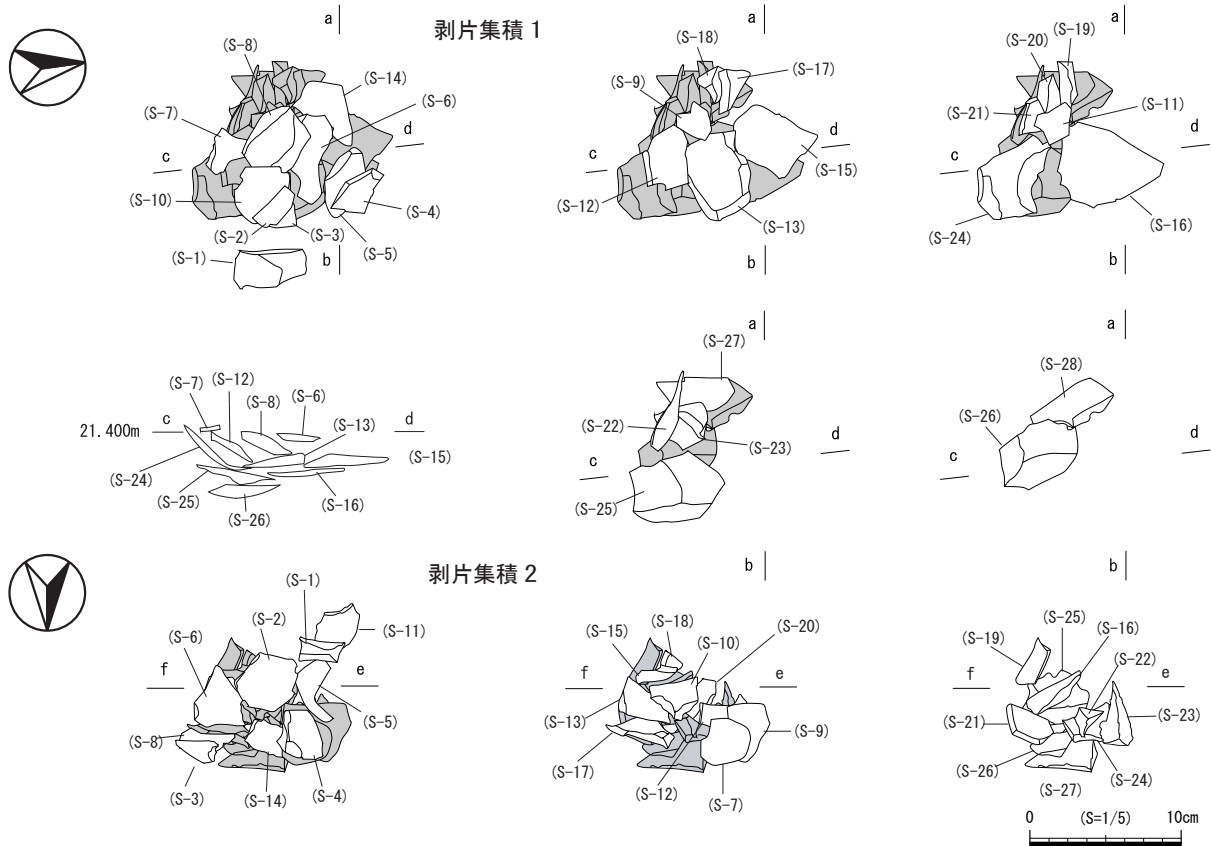
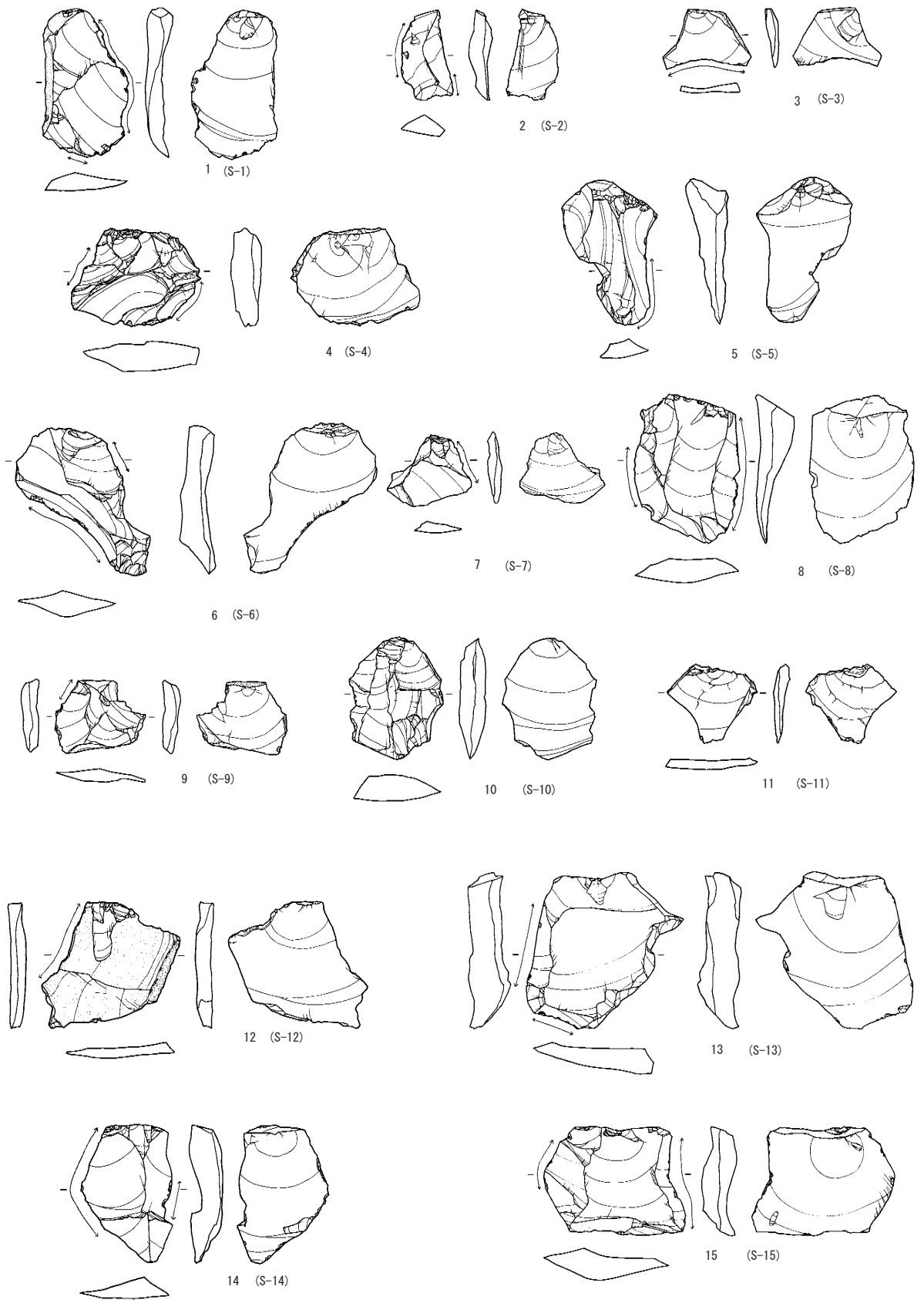
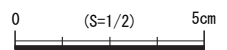


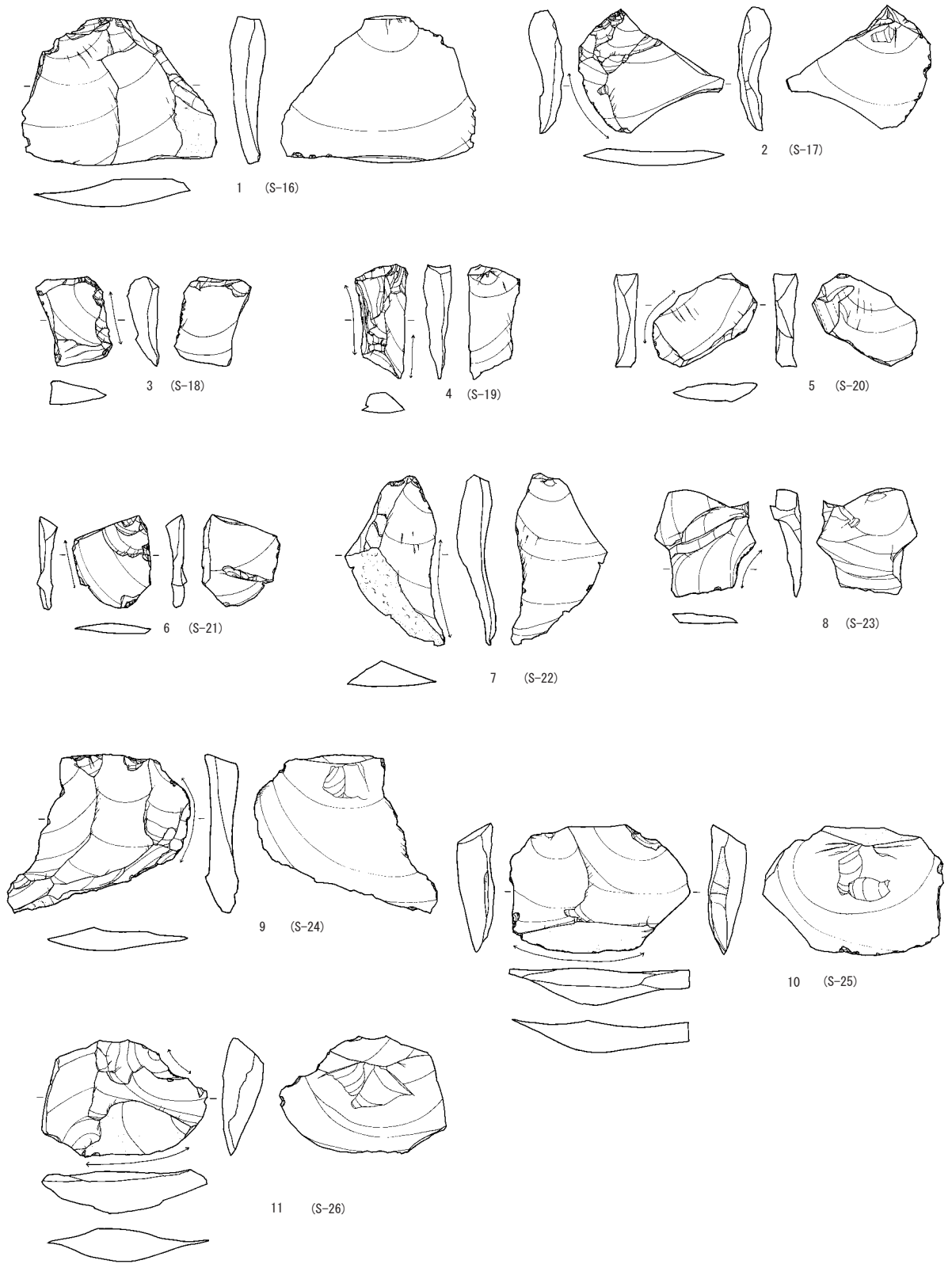
図24 第11号竪穴住居跡(2)



剥片集積 1 出土遺物 (1)

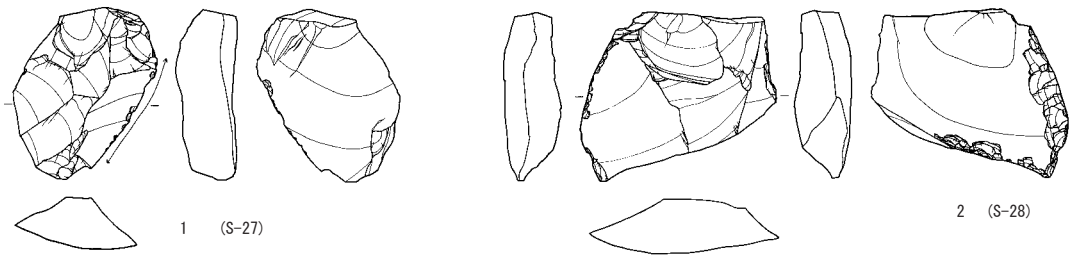
图 25 第 11 号竖穴住居跡 (3)



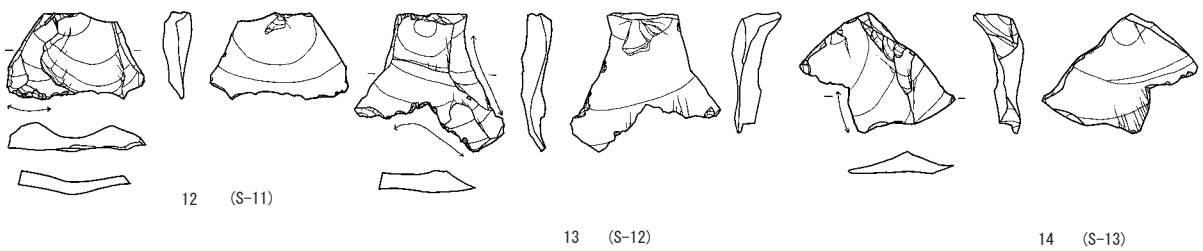
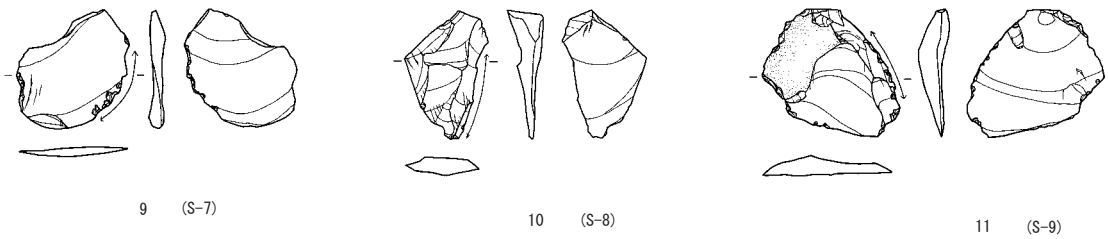
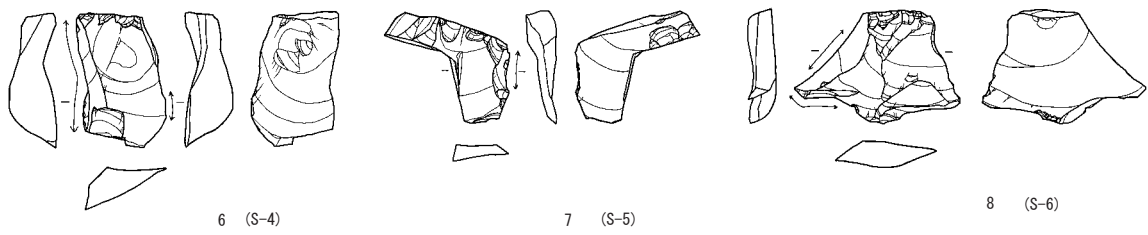
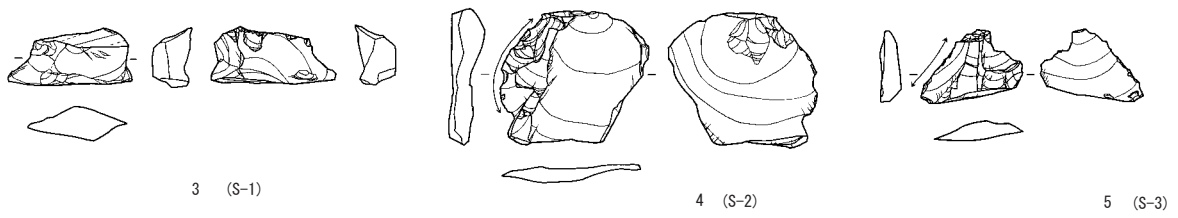


剥片集積 1 出土遺物 (2)

図 26 第 11 号竪穴住居跡 (4)

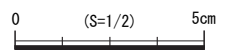


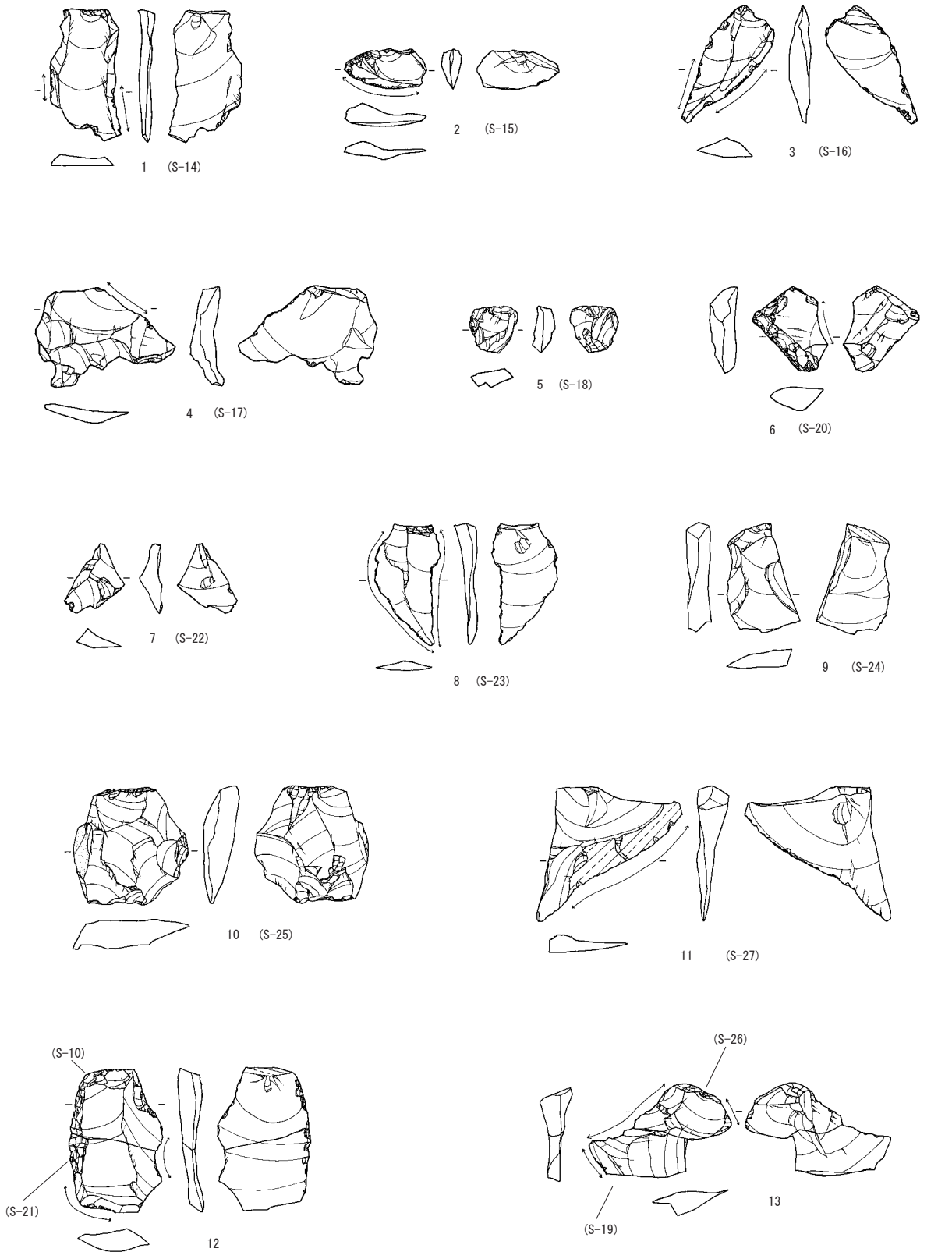
剥片集積 1 出土遺物 (3)



剥片集積 2 出土遺物 (1)

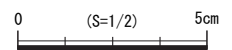
図 27 第 11 号竖穴住居跡 (5)

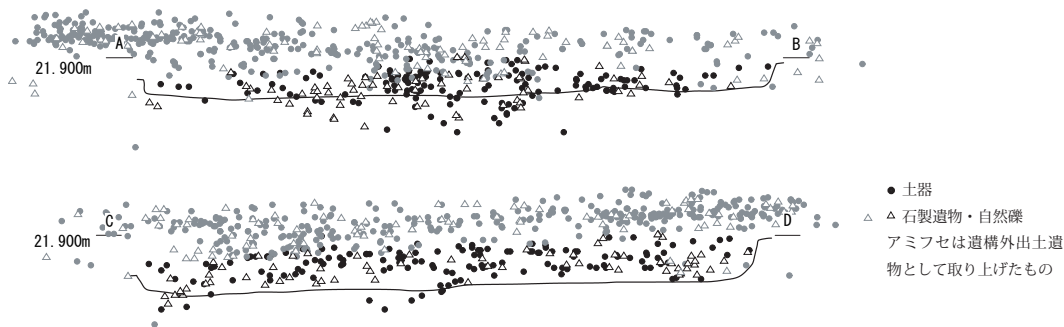
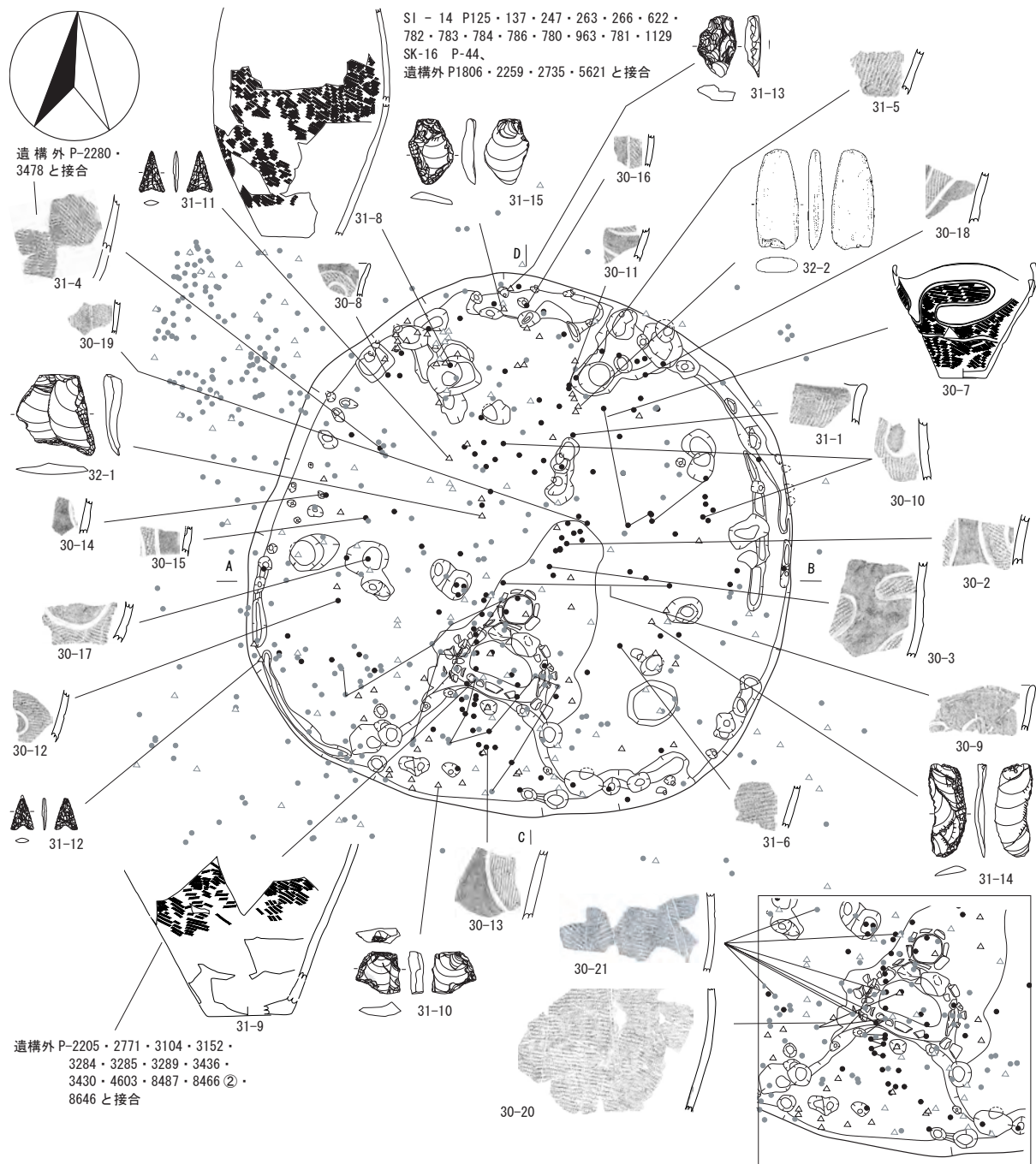




剥片集積 2 出土遺物 (2)

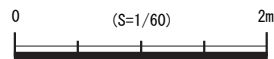
図 28 第 11 号竪穴住居跡 (6)





遺物出土状況

図 29 第 11 号 縦穴住居跡 (7)



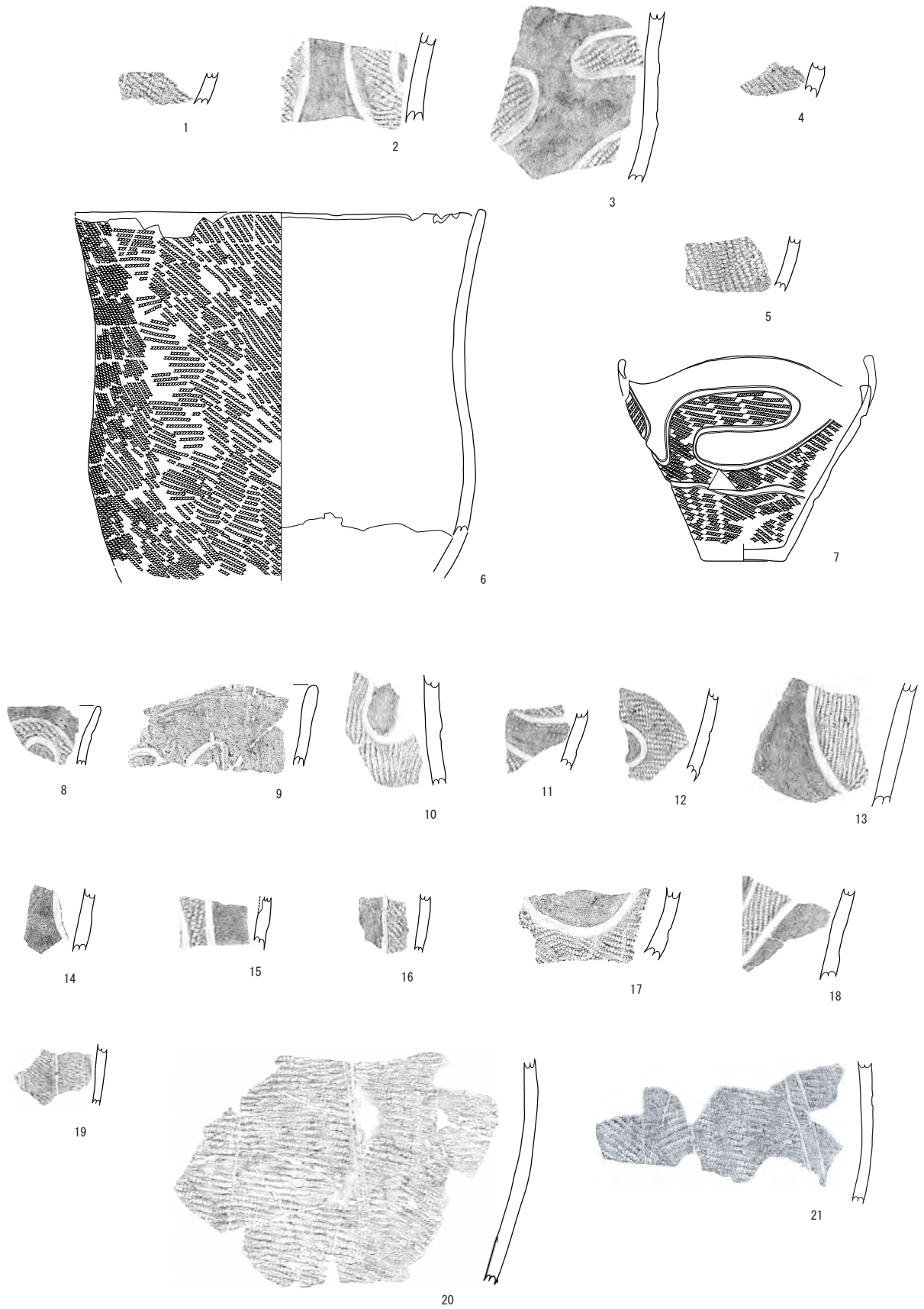
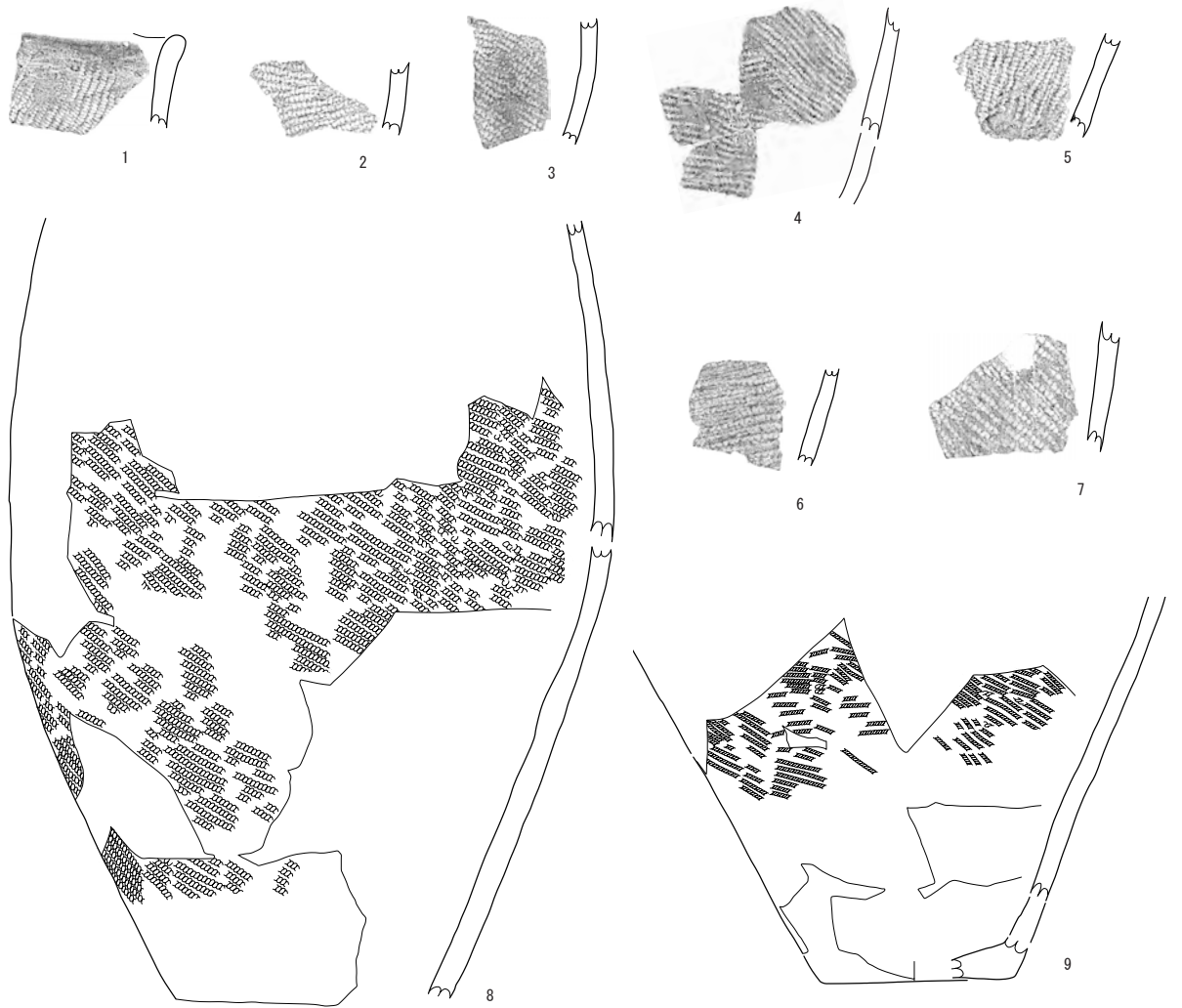
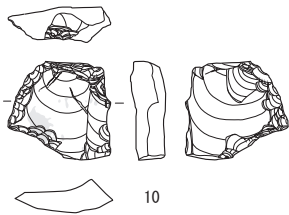


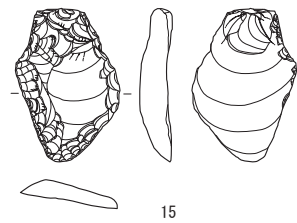
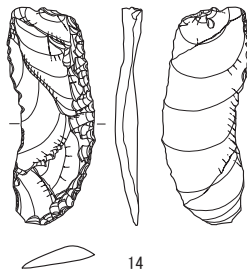
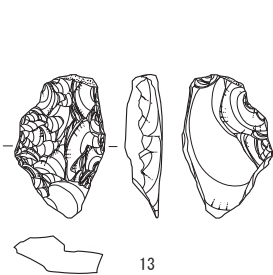
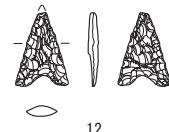
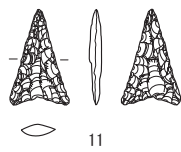
図30 第11号竪穴住居跡(8)



0 (S=1/4) 10cm

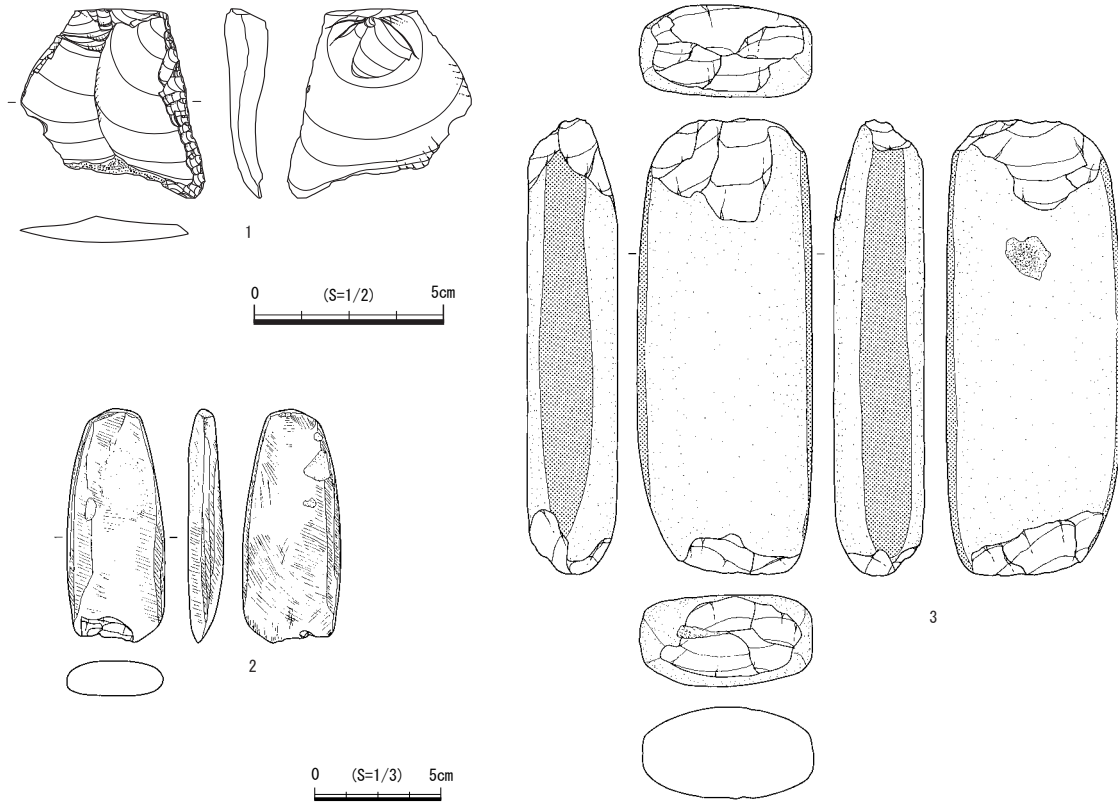


SI-11 複式炉



0 (S=1/2) 5cm

图 31 第 11 号竖穴住居跡 (9)



SI-11

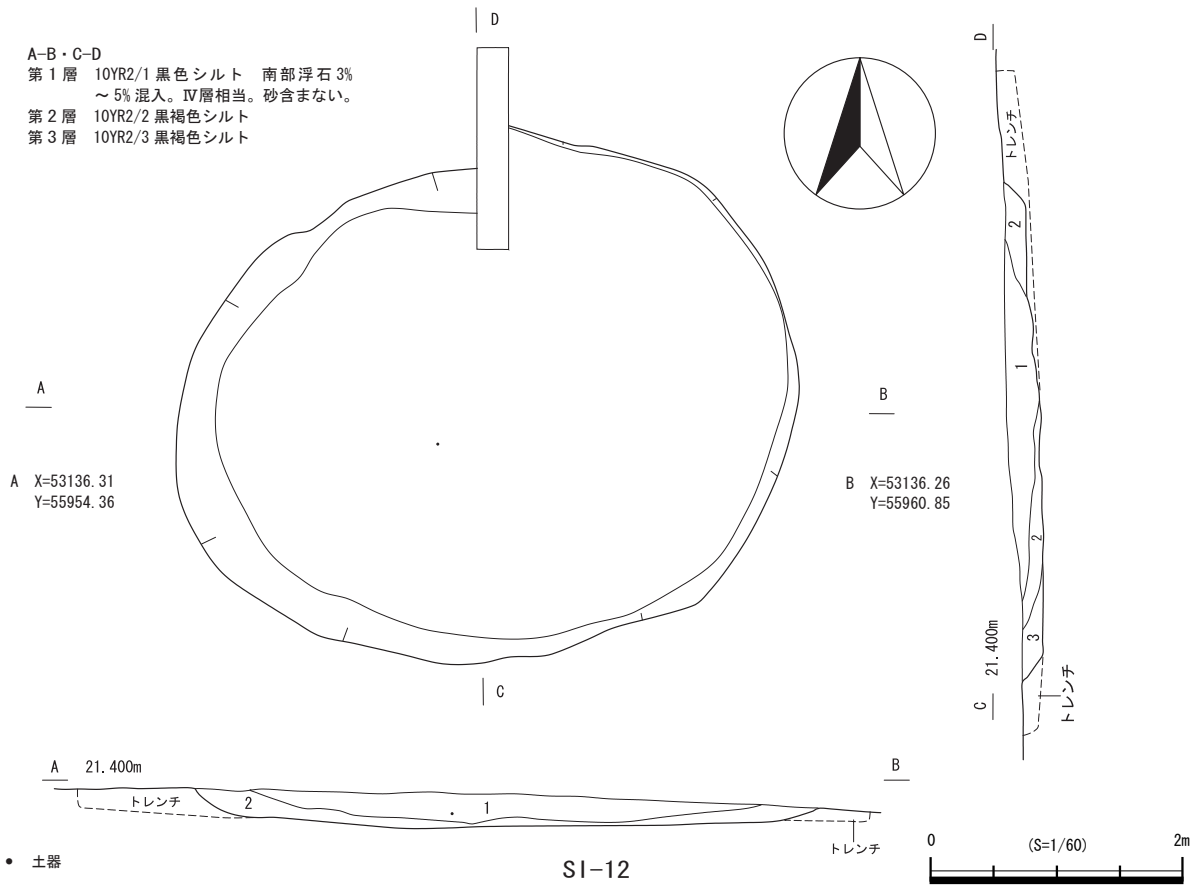


図32 第11号竪穴住居跡(10)・第12号竪穴住居跡

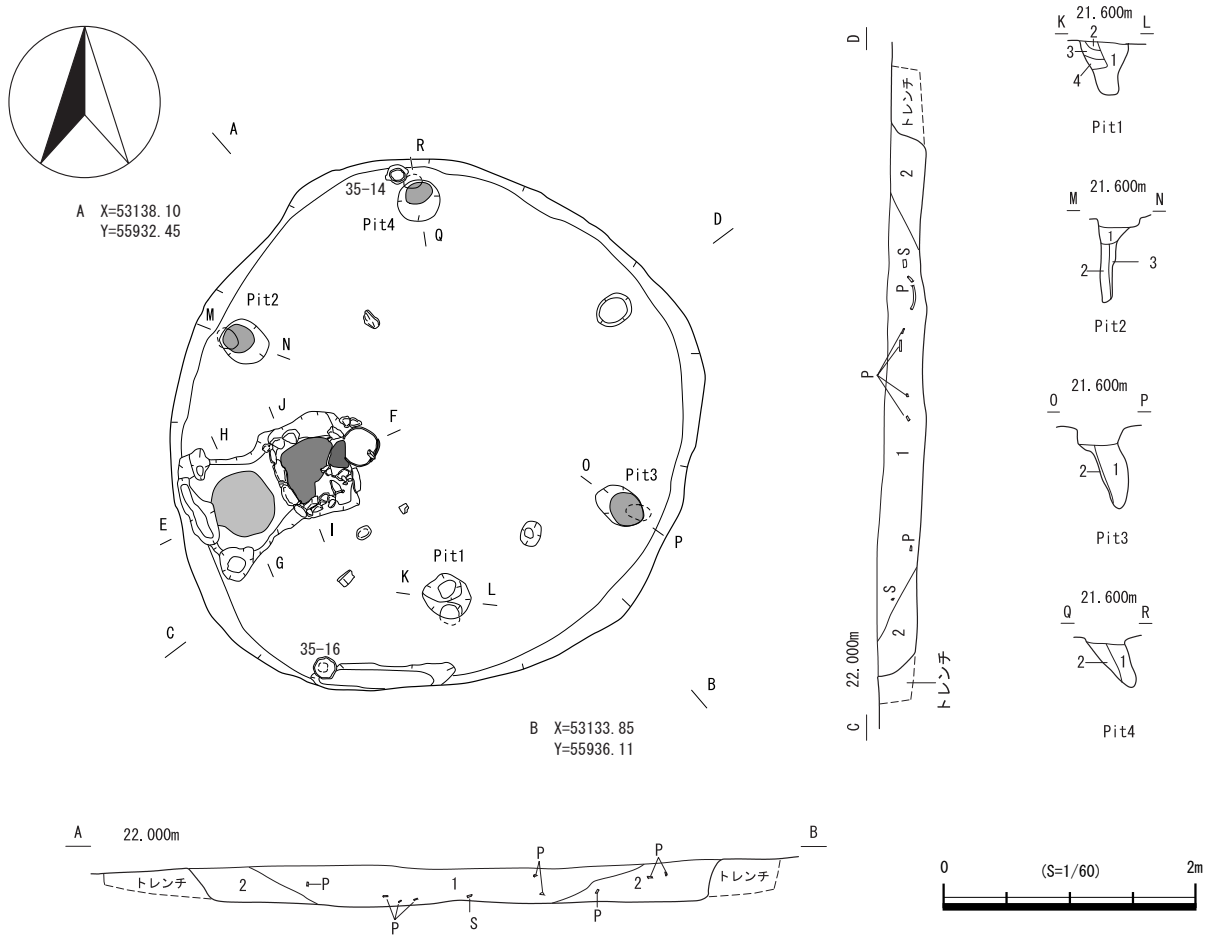
期] 堆積土の様相から、縄文時代早期の遺構と考えられる。(中村)

第 14 号竪穴住居跡 [SI-14] (図 33 ~ 39)

[検出状況] 第Ⅲ層中で、黒色の落ち込みを検出し、当初 SK-08 として調査を開始した。しかし、数 cm 掘り下げた時点で落ち込みはなくなり、遺構として認識することは困難であった。そこで包含層の掘削を再開したが、次第に当初の SK-08 とは重複しながらもややずれた位置で、遺物が円形の分布を持って出土し始めた。土色から遺構を平面的に認識することはできなかったが、遺物の分布を手がかりに SK-08 として精査を再開した。最終的に炉が検出されたので、調査終了時に番号を振り替え、SI-14 とした。当初 SK-08 として認識した落ち込みは、完全に埋没していない遺構の一部にたまった土層と思われる。[平面形] 円形を呈する。[堆積土] 黒色シルトで、2 層に分層した。第 1 層には遺物が多量に含まれていた。[壁] 第Ⅲ層中から掘り込まれていたため、上部は堆積土との識別が難しく、掘り上がった状況はやや外傾しているが、本来はまっすぐ立ち上がっていた可能性が高い。[床面] 第Ⅳ～Ⅴ層を床面とする。硬化面は認められなかった。[炉] 土器埋設部・石囲部・前庭部を持つ複式炉である。土器埋設部の炉体土器周辺の土壌は焼土化した部分が認められた。炉体土器内は、住居堆積土と同質の土壌(土器内第 3 層)を取り除いた段階で焼土粒・炭化物を多く含む土壌(土器内第 4～6 層)が現れた。これより上位の器内面は著しい赤化が認められた。これより下位の器内面は熱を受けてはいるが、灰褐色を呈し、明らかに受熱量の違いが認められる。従って、土器内には土ないしは何らかの内容物が充填された状態で火が焚かれたと考えられる。土器内第 4 層から琥珀が、底面付近から炭化クルミ殻が出土した。石囲部は一連で、底面に石敷は認められず、焼土が形成されていた。前庭部には硬化面が認められた。[柱穴] 床面から 5 基の柱穴が検出された。Pit1～4 は同程度の規模だが、Pit5 はやや浅い。[出土遺物] 複式炉堆積土中から土器が 47 点、石皿・台石類 2 点、二次調整のある剥片 1 点、剥片 1 点が出土した。第 1 層中の壁際から、上半部を欠失した注口土器(図 35-14)が 1 点出土した。堆積土中からは多量の土器(1421 点、29384.0g、うち重量不明 4 点)・石器類が出土した。石器の内訳は敲磨器 10 点、石皿・台石 3 点、碎片 5 点、石錐 3 点、石槍 1 点、石鏃 15 点、二次調整のある剥片 13 点、剥片 42 点、微小剥離痕のある剥片 10 点、両極加撃痕のある剥片 3 点である。堆積土から琥珀片が 3 点(S-126、172、遺構外 S-3327)、複式炉埋設土器内の第 1 層から 1 点(計 8.2g)の琥珀片が出土した。堆積土中の遺物は出土状況から、遺構廃絶後の窪地に廃棄されたものと考えられる。[時期] 炉内出土遺物から考えて、縄文時代中期末葉と考えられる。(中村)

第 15 号竪穴住居跡 [SI-15] (図 40)

第Ⅳ層を掘り下げている途中で方形に配置された石囲炉の上端とⅢ層土が集中する範囲を検出した。Ⅲ層土の広がり直径約 3m の三日月形を呈しており、竪穴住居跡の堆積土に相当するものと判断して精査をおこなった。[平面形] 掘方の平面形については不明であるが、堆積土の範囲から円形に近いものと考えられる。[床面・柱穴] 石囲炉の北東側では第Ⅳ層上面に硬化面を確認した。硬化範囲は前庭部の反対側で顕著に認められ、硬化の程度は北側で相対的に弱くなる。柱穴と考えられるピットは確認できなかった。[炉] 北東-南西を主軸とする石囲炉を検出した。石囲炉の南西には浅



A-B・C-D

- 第1層 10YR1.7/1 黒色シルト 10YR7/8 黄橙色浮石 (φ1~15mm)5% 含む。炭化物 (φ1~8mm)1% 混入。炭化物比較的多く含む。遺物を多量に含む。
- 第2層 10YR2/2 黒褐色と 10YR2/1 黒色シルト 10YR7/8 黄橙色浮石 (φ1~8mm)7% 混入。炭化物 (φ1~5mm)1% 混入。かたくしまりあり。粘性ややあり。中振浮石多く含む。

M-N (Pit2)

- 第1層 10YR2/2 黒褐色シルト
第2層 10YR2/2 黒褐色シルト
第3層 10YR3/2 黒褐色シルト

O-P (Pit3)

- 第1層 10YR2/1 黒色シルト 黄褐色浮石 (φ1~5mm)2% 含む。
第2層 10YR3/1 黒褐色シルト 黄褐色浮石 (φ5~10mm)5% 含む。

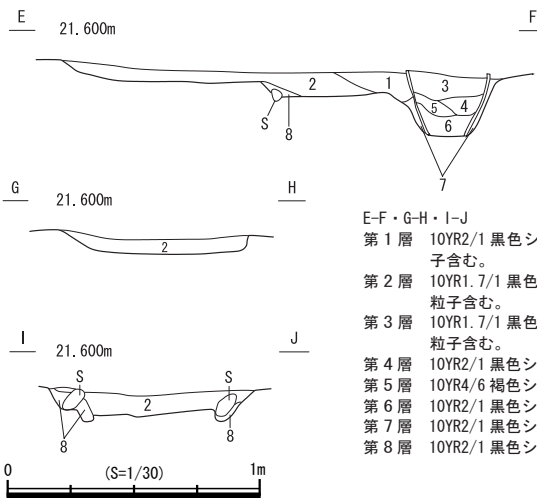
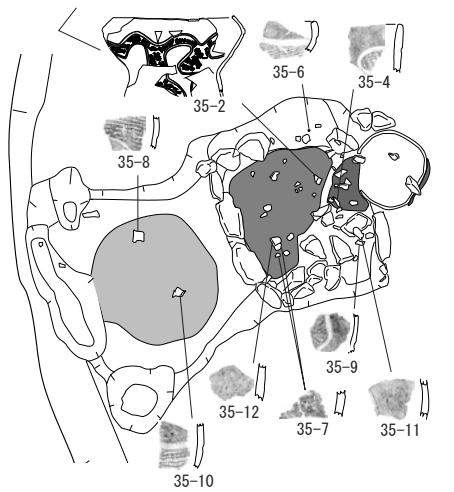
K-L (Pit1)

- 第1層 10YR2/1 黒色シルト
第2層 10YR3/4 暗褐色シルト
第3層 10YR3/3 暗褐色シルト
第4層 10YR2/2 黒褐色シルト

Q-R (Pit4)

- 第1層 10YR1.7/1 黒色シルト
第2層 10YR2/2 黒褐色シルト

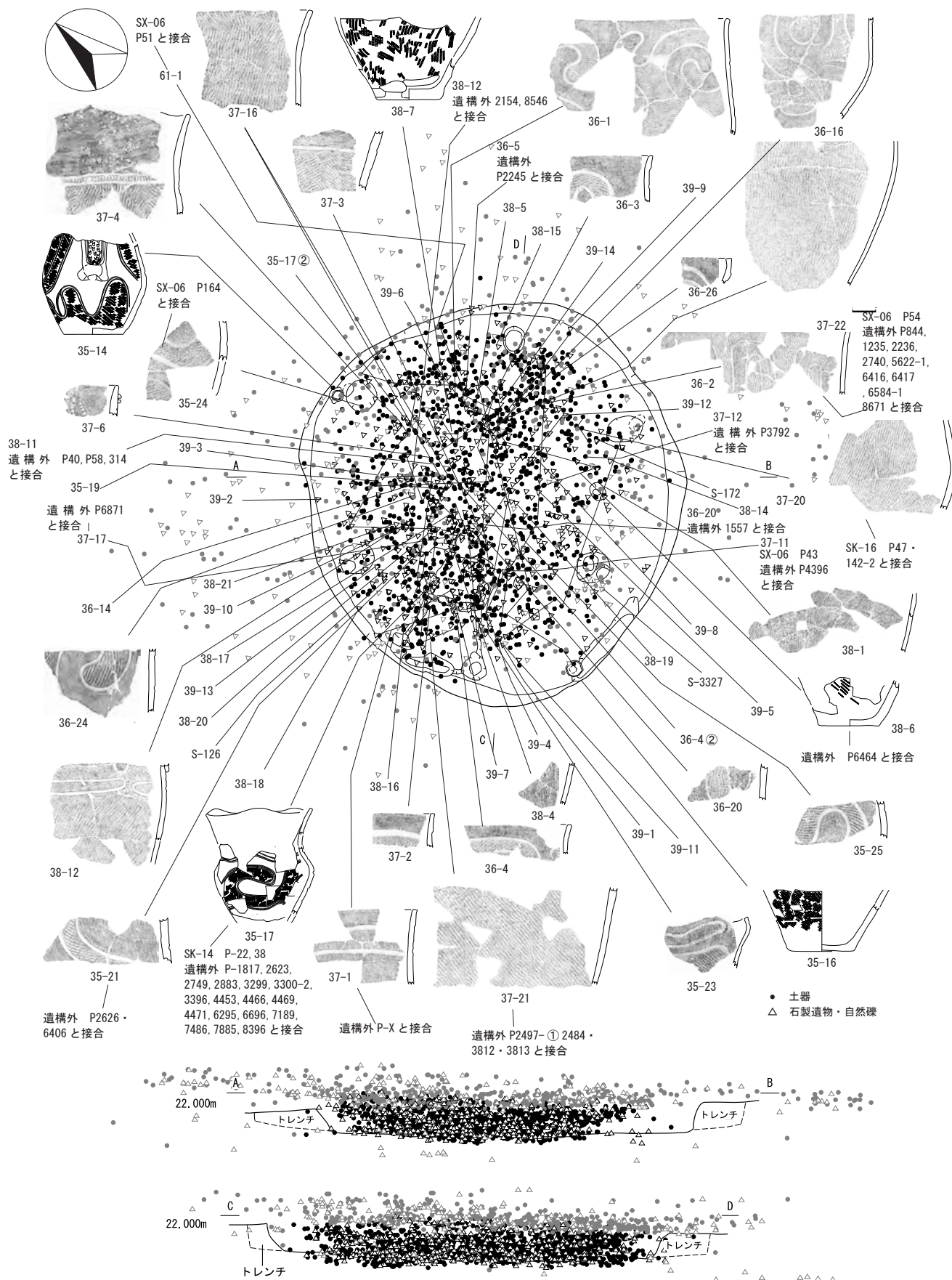
S1-14 P571, 594, 859 SK-15 P11, 12, 24, 29
遺構外 P3151, 4731, 5797, 9282-2・3, 9287-1~3 と接合



E-F・G-H・I-J

- 第1層 10YR2/1 黒色シルト 中振浮石の微細粒子含む。
- 第2層 10YR1.7/1 黒色シルト 中振浮石の微細粒子含む。
- 第3層 10YR1.7/1 黒色シルト 中振浮石の微細粒子含む。
- 第4層 10YR2/1 黒色シルト
第5層 10YR4/6 褐色シルト (焼土)
第6層 10YR2/1 黒色シルト
第7層 10YR2/1 黒色シルト
第8層 10YR2/1 黒色シルト

図33 第14号竪穴住居跡 (1)



遺物出土状況
 図 34 第 14 号 縦穴住居跡 (2)

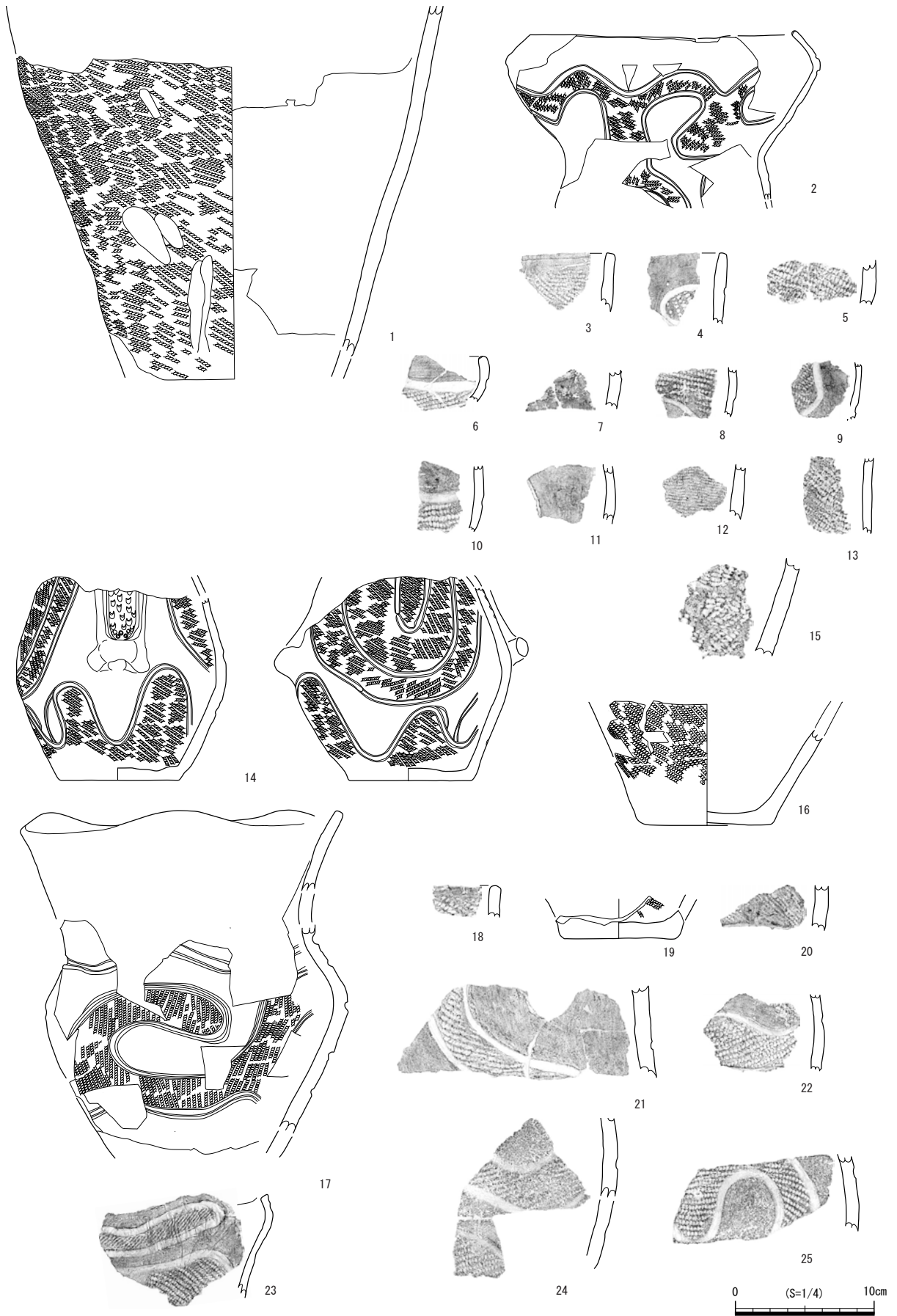


图 35 第 14 号竖穴住居跡 (3)

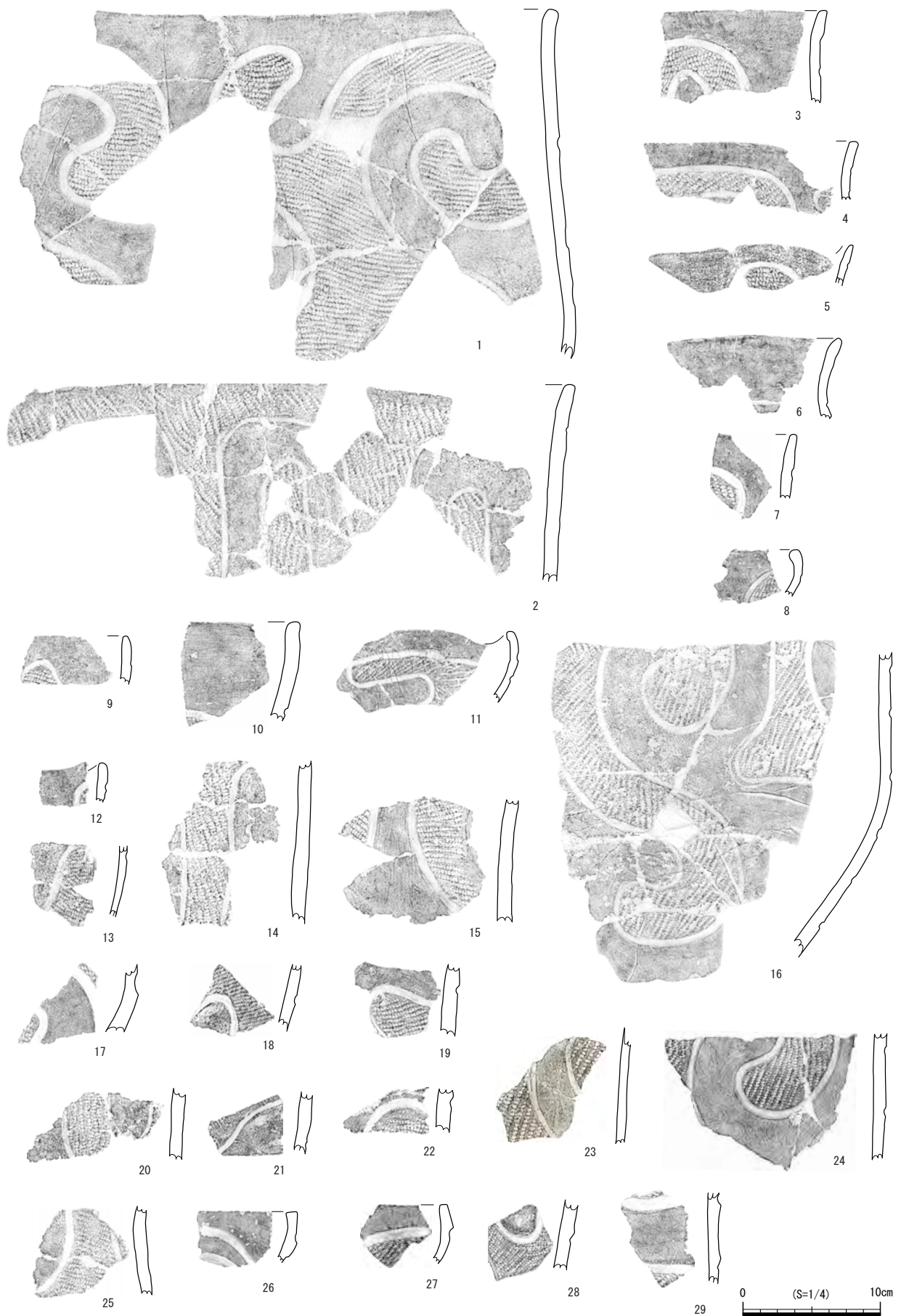


图 36 第 14 号竖穴住居跡 (4)

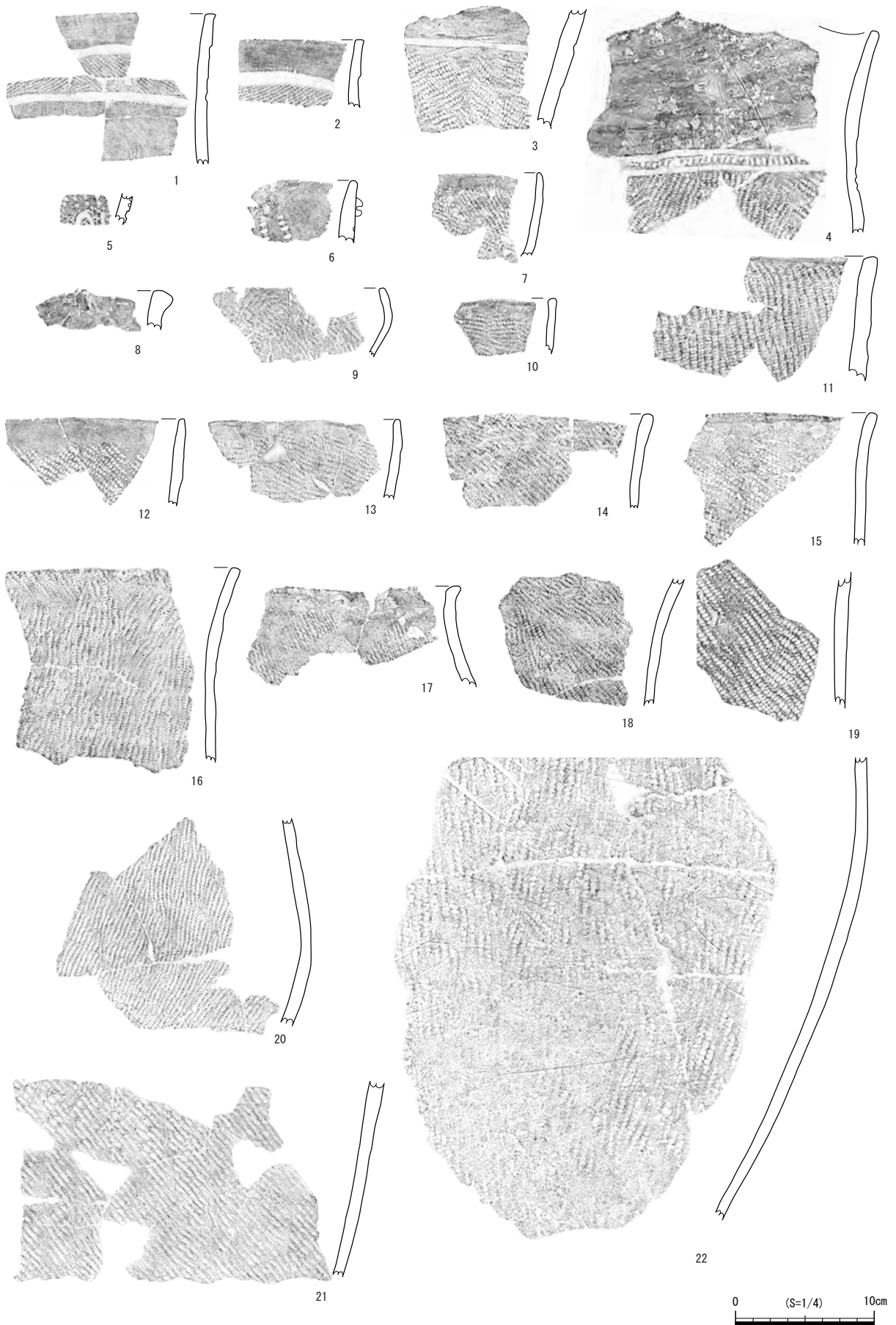


图 37 第 14 号竖穴住居跡 (5)

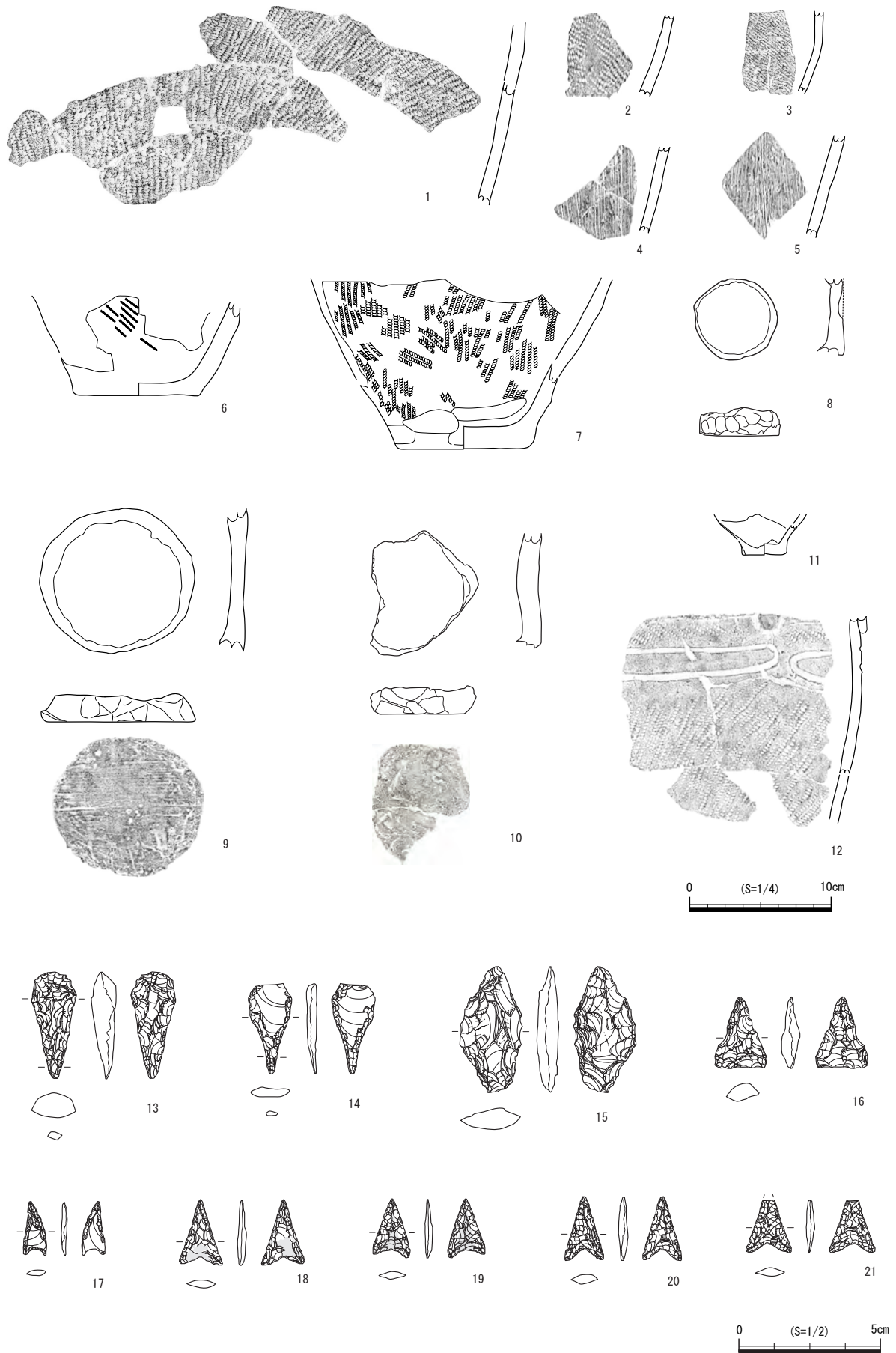


图 38 第 14 号竖穴住居跡 (6)

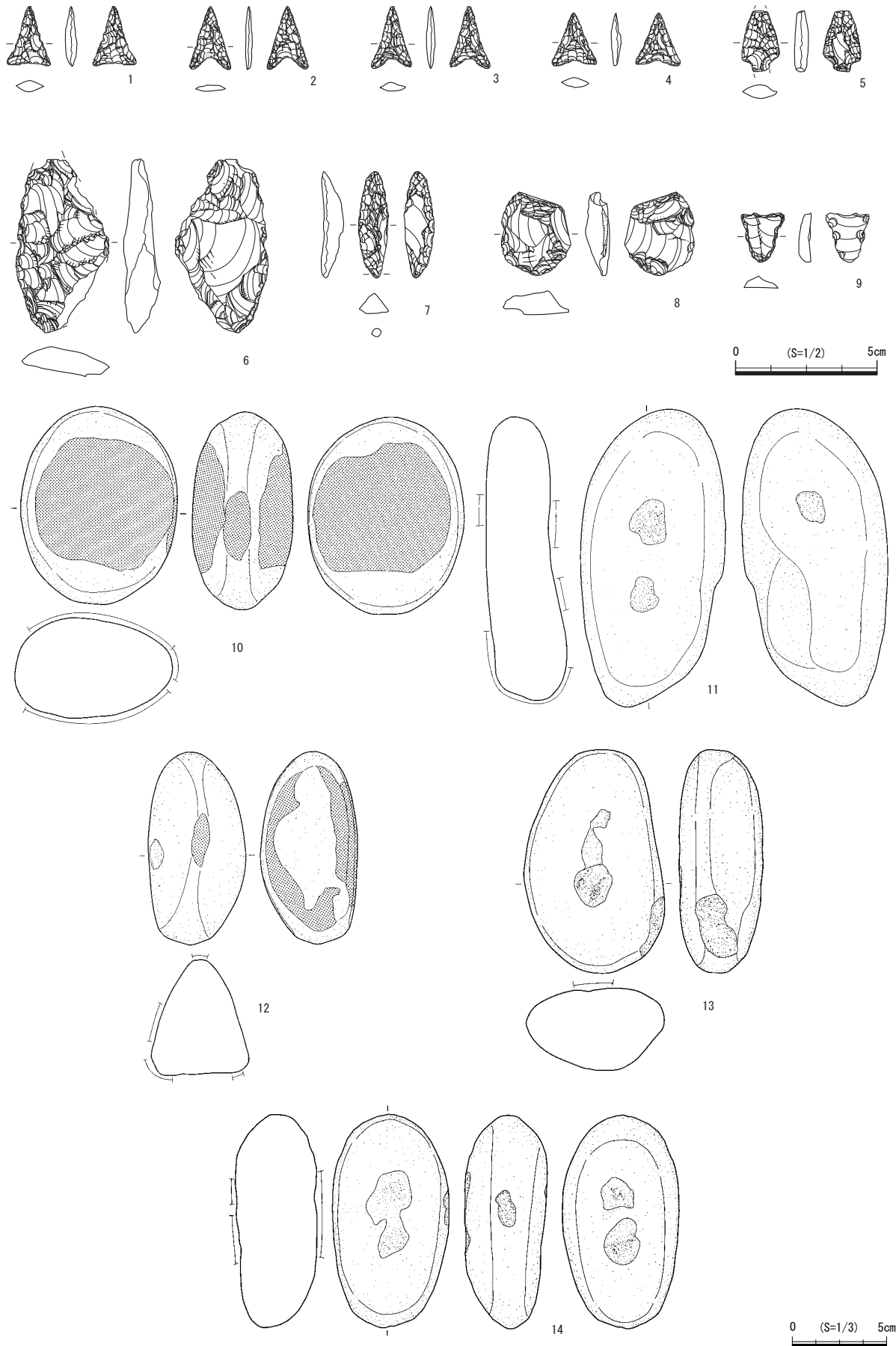


図39 第14号竪穴住居跡(7)

い掘方が前庭部を形成する。石囲炉に隣接して弱い焼土がみられたが、土層断面から地床炉と考えられる。[堆積土]石囲炉の上位に堆積している土層は基本層序第Ⅲ層に相当する層である。[出土遺物]堆積土中から10点(99.8g)の土器が出土した。[時期]炉の形態、周辺より出土した遺物から判断して縄文時代中期末葉～後期初頭頃に帰属するものと考えられる。(斉藤)

第4号土坑〔SK-04〕(図41)

[堆積土]底面直上では地山起源のロームあるいは浮石ブロックが壁際より土坑底面中央に傾斜して堆積している。これら崩壊土の色調は上位から下位、壁際から底面中央にかけて漸移的に暗色になる特徴があり、自然堆積によって埋積されたものと考えられる。[出土遺物]堆積土中から13片(113.2g)の土器、剥片1点が出土している。[時期]遺構の形状および堆積土出土遺物から縄文時代前期後半以降に帰属するものと考えられる。(斉藤)

第5号土坑〔SK-05〕(図41)

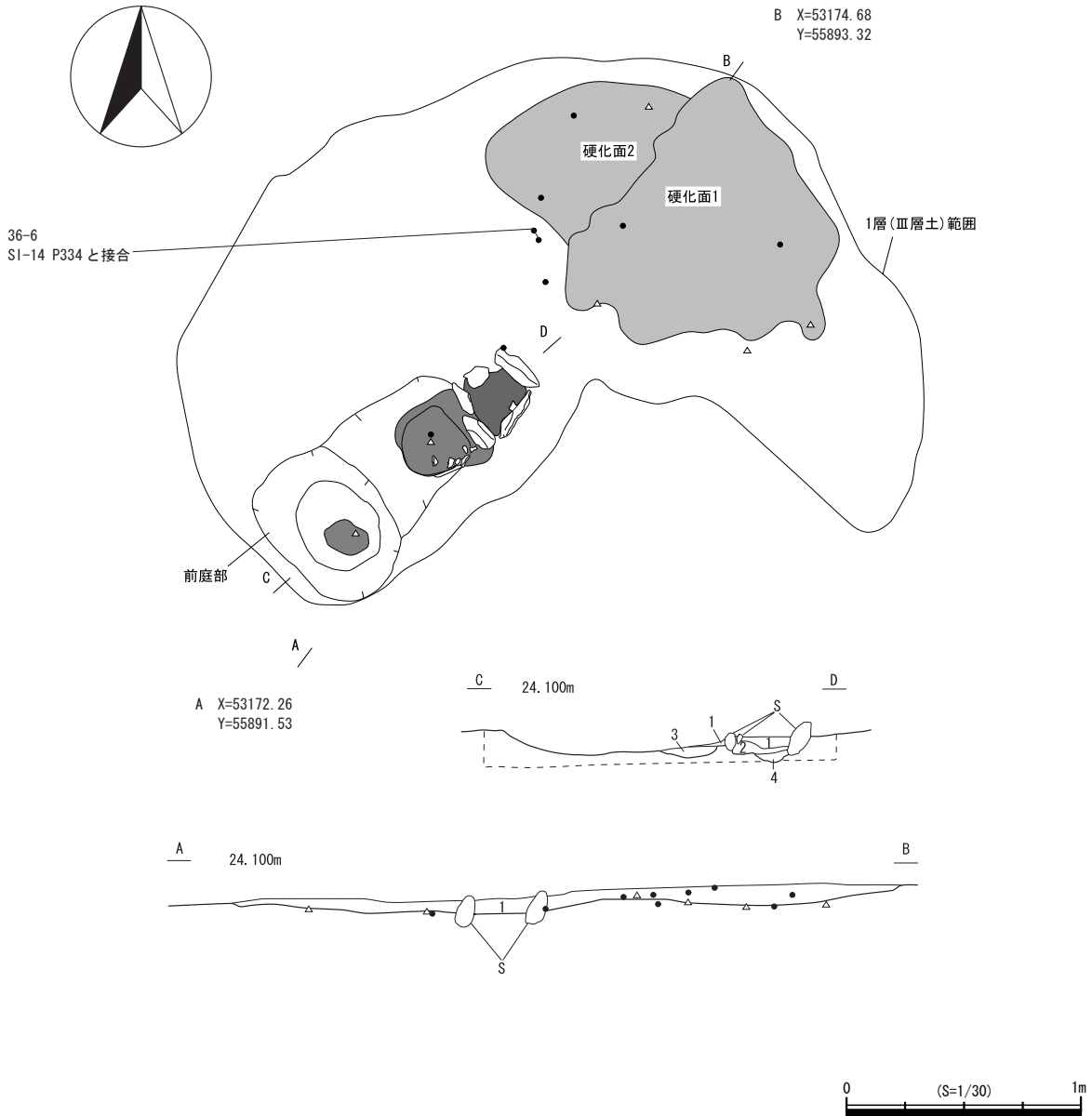
[平面形]東西にやや長い小判型を呈する。[堆積土]11層に分層した。第Ⅲ層類似の黒色シルトが主体である。壁際に崩落土と思われる火山灰土が認められたことから自然堆積と考えられる。[壁]短軸方向はやや外傾気味に立ち上がるが、長軸方向の壁はオーバーハング気味に立ち上がる。[底面]第Ⅴ層を底面とし、平坦である。[出土遺物]堆積土中位から中期前葉～中葉、堆積土上位から中期末葉の土器片が計13片(147.4g)出土したが、いずれも周辺から流れ込んだものと考えられる。また、石鏃1点、剥片2点が出土した。[時期]明確な時期は不明である。堆積土の様相から、縄文時代前期後半から晩期のうちいずれかと考えられる。本遺跡で検出された他の遺構の時期を参照すれば、縄文時代中期末葉から後期初頭の可能性が高い。(中村)

第6号土坑〔SK-06〕(図42～44)

[平面形]円形を呈する。[堆積土]谷を埋積する黒色シルトと同質の土壌で、壁との識別が困難であった。3層に分層した。[壁]掘り上がりは底面から湾曲して立ち上がるが、壁と堆積土の識別が困難であったため、直線的に立ち上がった可能性もある。[底面]沢地形埋積土の第Ⅳ層相当層を底面とする。[出土遺物]多量の土器(370点、6599.3g、うち重量不明2点)・石器類が出土した。堆積土上位からは縄文時代後期初頭の土器が少量出土したが、主体を占めるのは縄文時代中期末葉の土器である。図43-9は土製品・注口のいずれか判然としない。縄文時代後期の可能性がある。石器の内訳は敲磨器類2点、碎片8点、石錐1点、石篋1点、石鏃1点、二次調整のある剥片25点、微小剥離痕のある剥片2点、磨製石斧3点、両極加撃痕のある剥片1点である。44-22は磨製石斧の欠損品を再加工し、擦り切った際の残片である。溝の擦り切りは両側から加えられており、5mmほどの厚さに達したところで割り取っている。[時期]出土遺物から考えて、縄文時代中期末葉と考えられる。(中村)

第10号土坑〔SK-10〕(図45)

[堆積土]底面直上の壁際に黄褐色の崩壊土がわずかにみられる。[出土遺物]なし。[時期]検出層



A-B

第1層 10YR1.7/1 黒色砂質シルト 10YR6/8 明黄褐色浮石(φ5mm)5%混入。炭化物(φ5mm)1%混入。

C-D

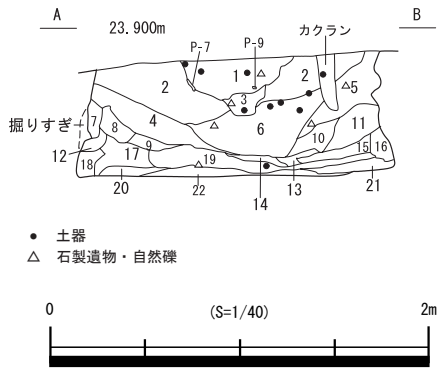
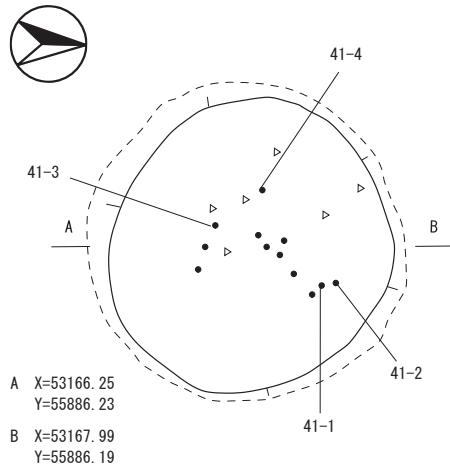
第1層 10YR2/1 黒色シルト 5YR5/8 明赤褐色焼土微量混入。10YR5/8 黄褐色浮石(φ1~3mm)3%混入。砂多量混入。

第2層 10YR2/1 黒色シルト 5YR5/8 明赤褐色焼土20%混合。10YR5/8 黄褐色浮石(φ1~3mm)1%混入。炭化物少量混入。砂多量混入。

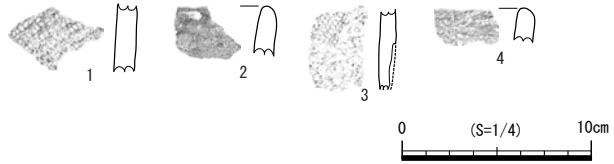
第3層 5YR5/8 明赤褐色シルト(焼土) 10YR3/1 黒褐色土20%混合。10YR5/8 黄褐色浮石(φ1~5mm)5%混入。砂少量混入。

第4層 10YR2/1 黒色シルト(やや砂質) 10YR5/8 黄褐色浮石(φ1~5mm)3%混入。砂少量混入。石囲炉堀方埋土。

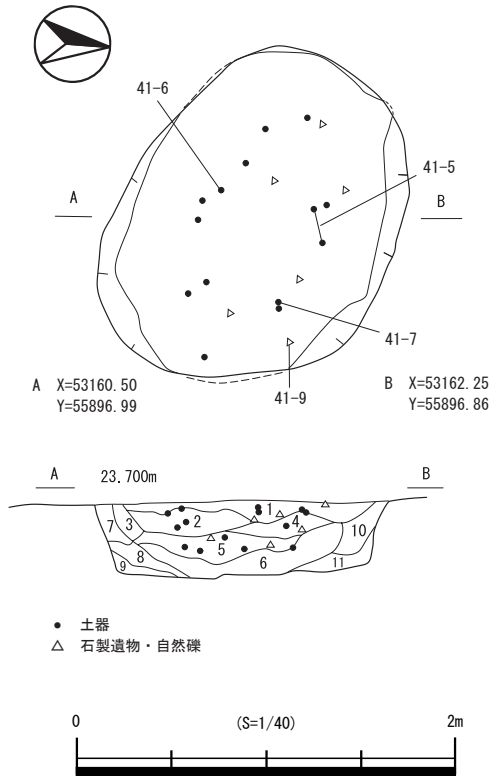
図40 第15号竪穴住居跡



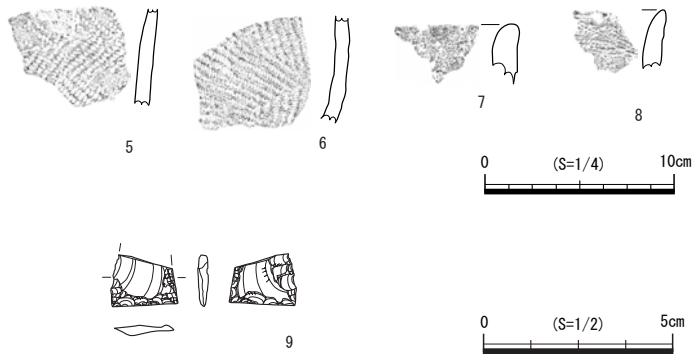
- 第1層 10YR2/3 黒褐色シルト 黄色浮石 (φ1~3mm)1%混入。白色軽石 (φ1~2mm)1%混入。炭化物わずかに含む。
- 第2層 10YR2/2 黒褐色シルト 黄色浮石 (φ1~10mm)2%混入。白色軽石 (φ1~7mm)1%混入。
- 第3層 10YR2/2 黒褐色と10YR3/4 暗褐色混合シルト 黄色浮石 (φ1~8mm)2%混入。白色軽石 (φ1~2mm)1%混入。炭化物 (φ1~4mm)1%混入。
- 第4層 10YR2/2 黒褐色シルト 黄色浮石 (φ1~4mm)1%混入。白色軽石 (φ1~3mm)2%未満混入。
- 第5層 10YR2/3 黒褐色シルト 黄色浮石 (φ1~4mm)1%混入。白色軽石 (φ1~3mm)1%混入。
- 第6層 10YR2/1 黒色粘質シルト 浮石 (φ1~7mm)1%混入。十和田b (φ1~2mm)微量混入。
- 第7層 10YR3/4 暗褐色と10YR4/6 褐色砂質シルト 浮石 (φ1~3mm)2%混入。十和田b (φ1~3mm)1%混入。
- 第8層 10YR2/3 黒褐色と10YR4/6 褐色砂質シルト 浮石 (φ1~12mm)2%混入。十和田b (φ1~2mm)微量混入。
- 第9層 10YR2/2 黒褐色と10YR3/4 暗褐色混合シルト 浮石 (φ1~5mm)2%混入。十和田bごく微量混入。
- 第10層 10YR2/2 黒褐色粘質シルト 浮石 (φ1~2mm)1%未満混入。十和田b (φ1~3mm)1%混入。
- 第11層 10YR2/1 黒色粘質シルトと10YR4/6 褐色混合シルト 浮石 (φ1~4mm)2%混入。十和田b (φ1mm)少量混入。
- 第12層 10YR5/6 黄褐色と10YR2/3 黒褐色砂質シルト 浮石 (φ1~2mm)3%混入。十和田b (φ1mm)少量混入。
- 第13層 10YR2/1 黒色粘質シルト 浮石 (φ1~2mm)1%混入。十和田bごく微量混入。
- 第14層 10YR2/2 黒褐色粘質シルト 浮石 (φ1mm)ごく微量混入。十和田b (φ1~3mm)3%混入。
- 第15層 10YR4/4 褐色と10YR2/3 黒褐色混合シルト 浮石 (φ1~5mm)3%混入。十和田b (φ1mm)微量混入。
- 第16層 10YR3/3 暗褐色シルト 浮石 (φ1~2mm)1%混入。十和田b (φ1~2mm)1%混入。
- 第17層 10YR2/3 黒褐色と10YR4/4 褐色混合シルト 浮石 (φ1~5mm)4%混入。十和田b (φ1~5mm)3%混入。
- 第18層 10YR6/6 明黄褐色砂質シルト 浮石 (φ1~2mm)2%混入。十和田b (φ1mm)1%混入。
- 第19層 10YR2/1 黒色粘質シルト 浮石 (φ1~13mm)1%混入。十和田b (φ1~8mm)1%未満混入。
- 第20層 10YR2/2 黒褐色粘質シルト 浮石 (φ1~3mm)2%混入。十和田b (φ1mm)1%混入。
- 第21層 10YR3/4 暗褐色と10YR6/6 明黄褐色粘質シルト 浮石 (φ1~7mm)2%混入。十和田b (φ1mm)少量混入。
- 第22層 10YR2/2 黒褐色粘質シルト 浮石 (φ1~2mm)1%未満混入。十和田b (φ1mm)微量混入。



SK-04



- 第1層 10YR3/3 暗褐色砂質シルト 浮石 (φ1~3mm)2%混入。中振浮石多量含む。砂粒分が最も多い。
- 第2層 10YR2/2 黒褐色シルト 浮石 (φ1~8mm)2%混入。中振浮石多量含む。
- 第3層 10YR3/4 暗褐色シルト 浮石 (φ1~5mm)3%混入。中振浮石多量含む。
- 第4層 10YR2/3 黒褐色シルト 浮石 (φ1~2mm)2%混入。中振浮石多量含む。
- 第5層 10YR1.7/1 黒色砂質シルト 浮石 (φ1~4mm)2%混入。中振浮石多量含む。
- 第6層 10YR1.7/1 黒色シルトと10YR4/4 褐色崩落土 浮石 (φ1~7mm)2%混入。中振浮石多量含む。炭 (φ1~3mm)微量含む。
- 第7層 10YR3/3 暗褐色シルトと10YR4/4 褐色シルト質火山灰土 浮石 (φ2~5mm)2%混入。中振浮石多量含む。
- 第8層 10YR2/1 黒色砂質シルトと10YR4/4 褐色火山灰土 浮石 (φ1~2mm)2%混入。中振浮石多量含む。
- 第9層 10YR5/6 黄褐色火山灰土と10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 浮石 (φ1~2mm)1%混入。中振浮石多量含む。
- 第10層 10YR2/2 黒褐色砂質シルト 浮石 (φ1~5mm)5%混入。中振浮石多量含む。
- 第11層 10YR2/3 黒褐色砂質シルトと10YR4/4 褐色火山灰土 浮石 (φ1~5mm)3%混入。中振浮石多量含む。



SK-05

図41 第4号土坑・第5号土坑

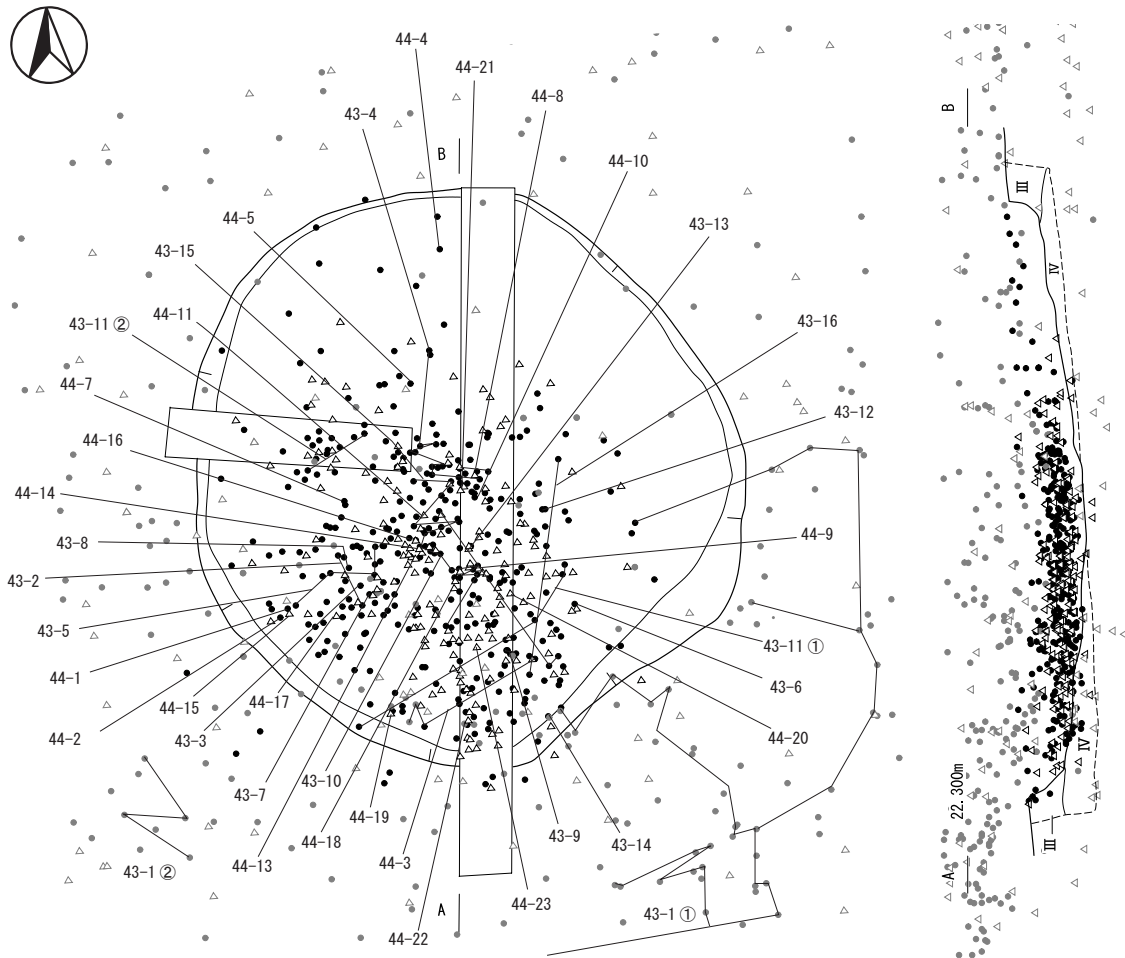
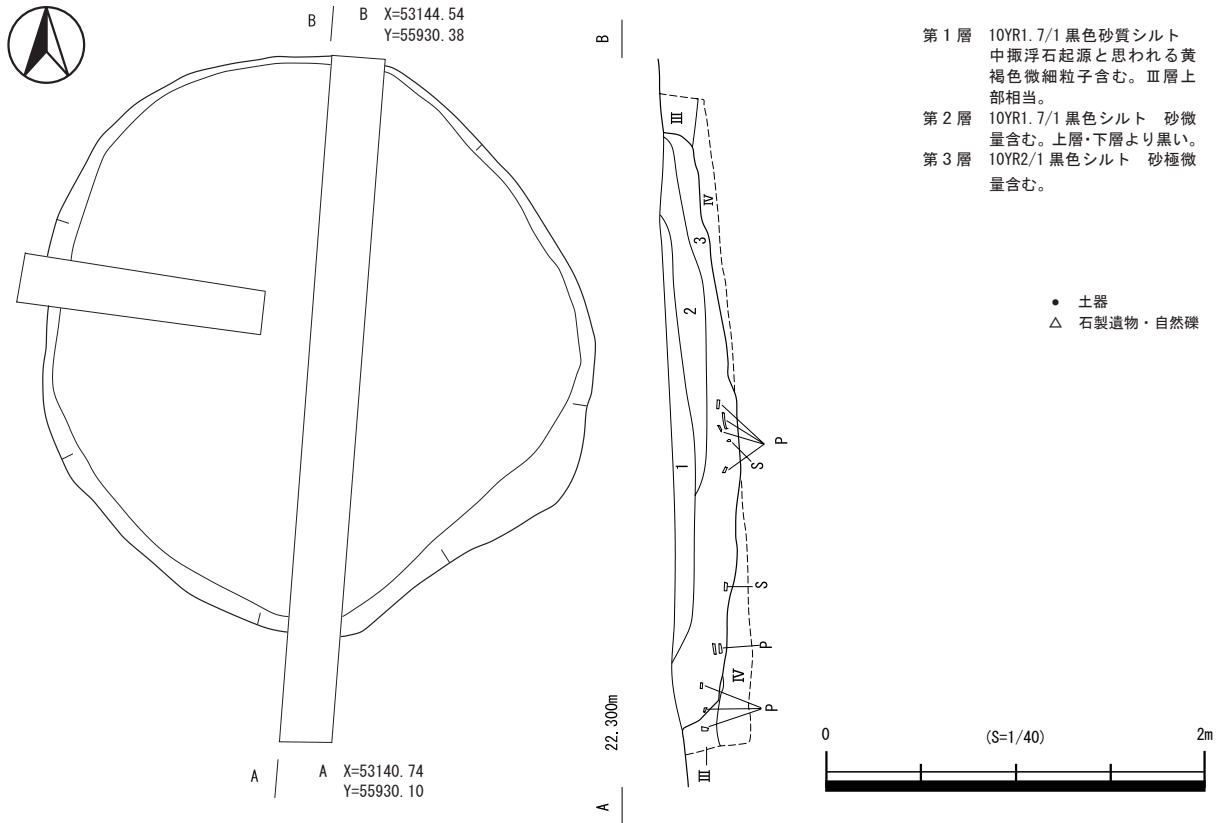


図42 第6号土坑(1)

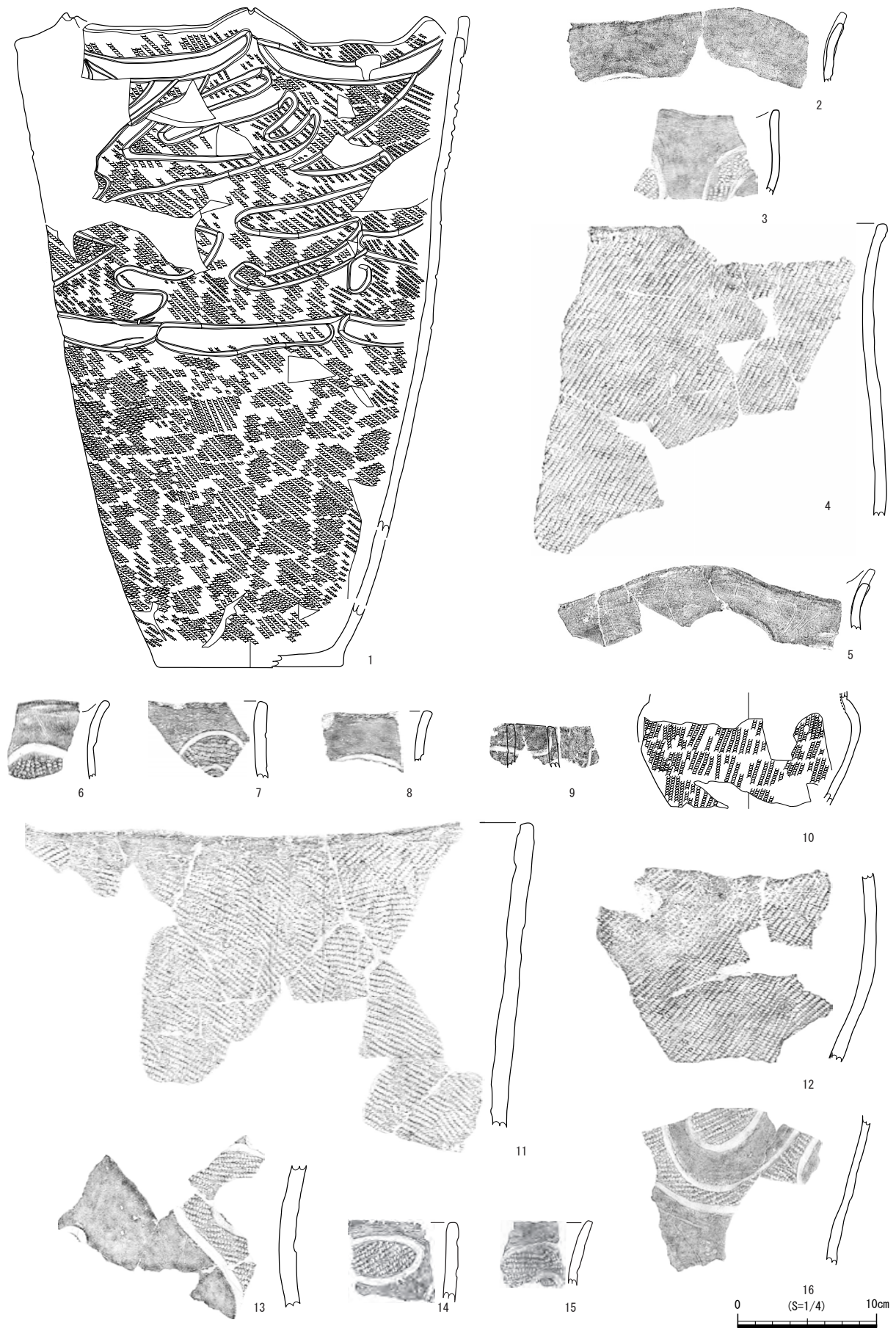


图 43 第 6 号土坑 (2)

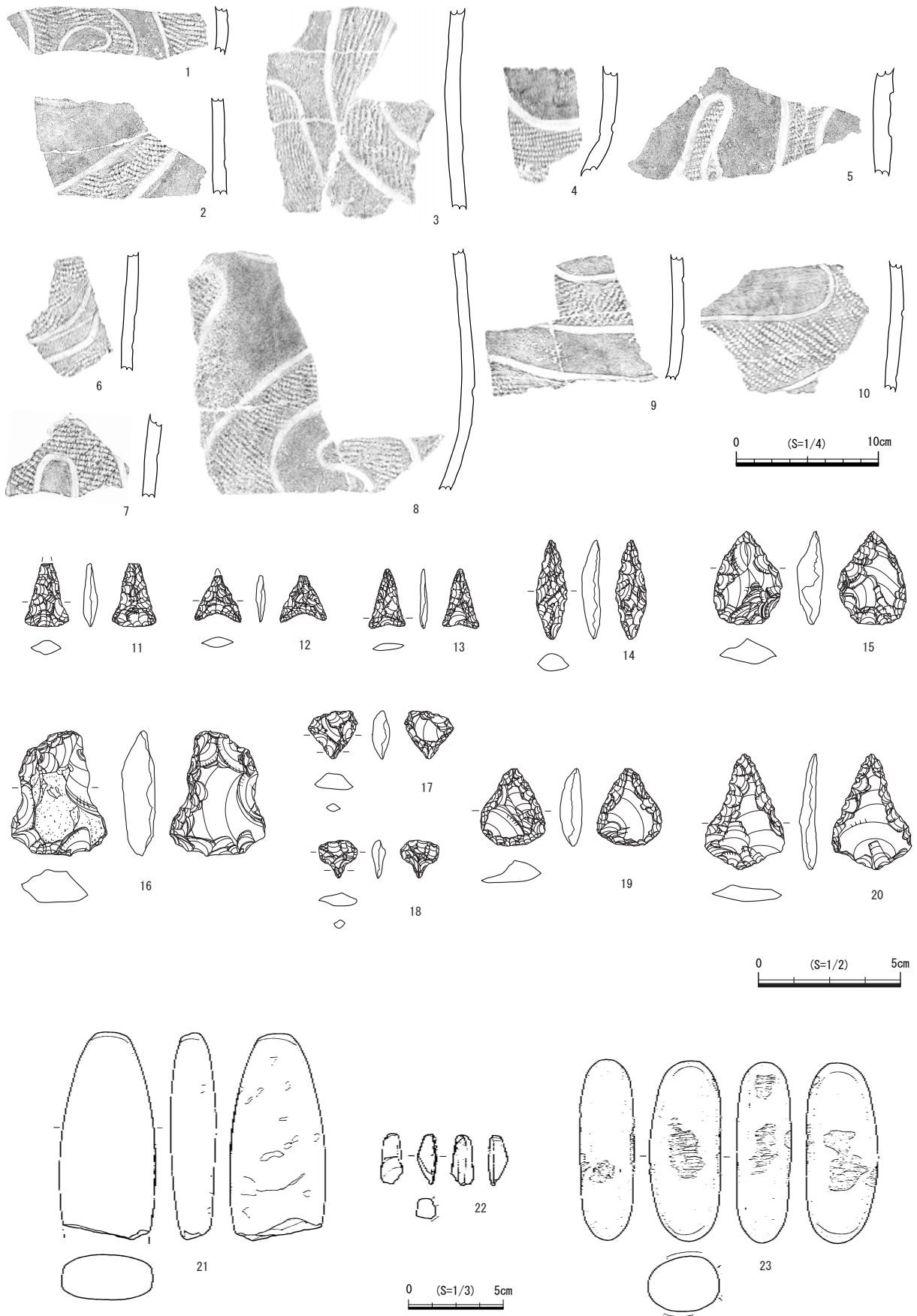
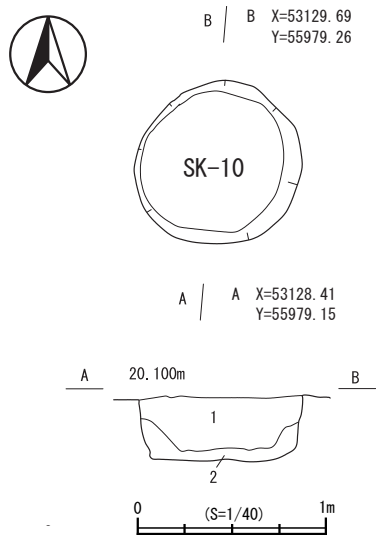
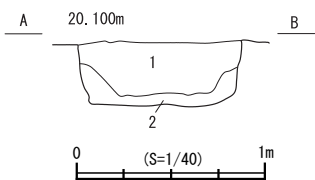


图44 第6号土坑(3)

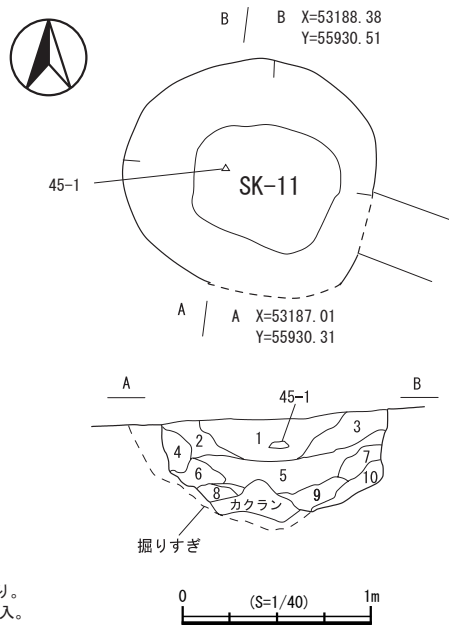


B | B X=53129.69
Y=55979.26

A | A X=53128.41
Y=55979.15

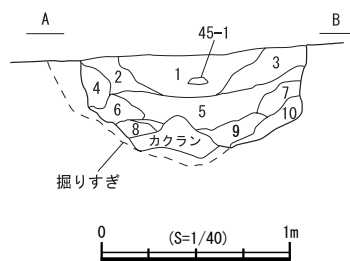


SK-10
第1層 10YR2/1 黒色シルト 10YR6/6 明黄褐色浮石 (φ1~5mm)5%混入。硬くしまりあり。
第2層 10YR2/1 黒色シルト (1層よりやや黒み強) 10YR7/8 黄褐色浮石 (φ1~5mm)3%混入。硬くしまりあり。粘性あり。

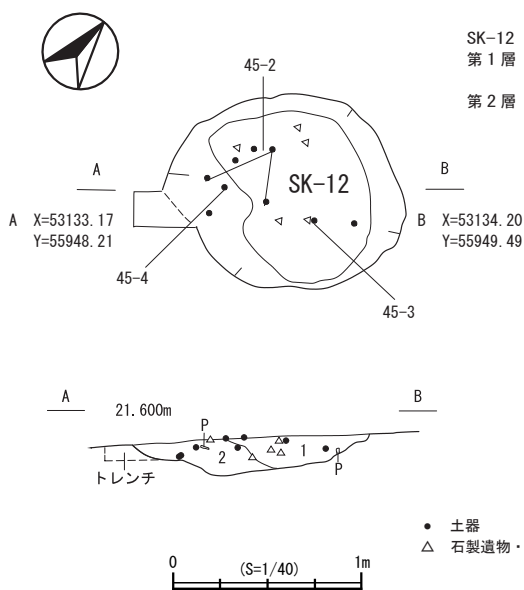
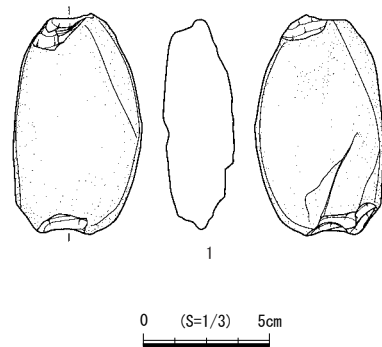


B | B X=53188.38
Y=55930.51

A | A X=53187.01
Y=55930.31

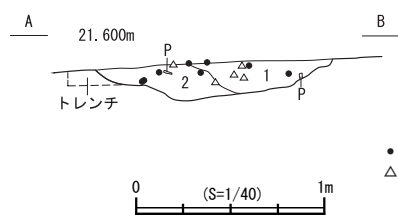


SK-11
第1層 10YR2/2 黒褐色シルト 10YR5/8 黄褐色浮石 (φ1~10mm)20%混入。炭化物微量混入。硬くしまりあり。
第2層 10YR3/2 黒褐色シルト 10YR5/8 黄褐色浮石 (φ1~5mm)15%混入。硬くしまりあり。
第3層 10YR3/2 黒褐色シルト 10YR3/4 暗褐色の土20%混合。10YR5/8 黄褐色浮石 (φ1~5mm)15%混入。硬くしまりあり。
第4層 10YR3/2 黒褐色シルト 10YR3/4 暗褐色の土10%混合。10YR5/8 黄褐色浮石 (φ1~10mm)15%混入。硬くしまりあり。
第5層 10YR2/2 黒褐色シルト 10YR5/8 黄褐色浮石 (φ1~10mm)25%混入。硬くしまりあり。
第6層 10YR3/4 暗褐色と10YR4/4 褐色混合シルト 10YR5/8 黄褐色浮石 (φ1~5mm)20%混入。硬くしまりあり。
第7層 10YR3/4 暗褐色と10YR4/4 褐色混合シルト (6層よりやや褐色多い) 10YR5/8 黄褐色浮石 (φ1~5mm)20%混入。硬くしまりあり。
第8層 10YR3/4 暗褐色と10YR4/4 褐色混合シルト (6層よりやや褐色少ない) 10YR5/8 黄褐色浮石 (φ1~5mm)20%混入。硬くしまりあり。
第9層 10YR3/2 黒褐色シルト 10YR5/8 黄褐色浮石 (φ1~15mm)15%混入。硬くしまりあり。
第10層 10YR3/4 暗褐色と10YR4/4 褐色混合シルト 10YR5/8 黄褐色浮石 (φ1~5mm)10%混入。硬くしまりあり。

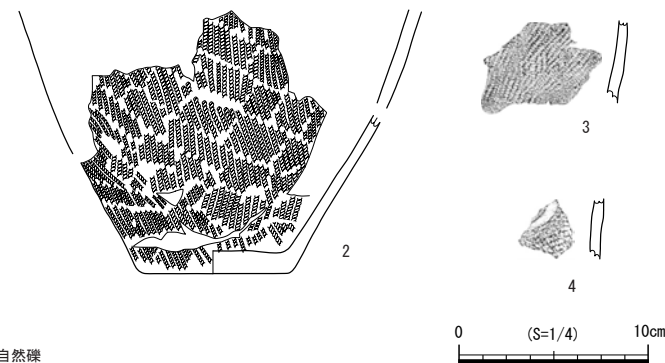


A X=53133.17
Y=55948.21

B X=53134.20
Y=55949.49



SK-12
第1層 10YR2/1 黒色シルト 10YR4/6 褐色浮石 (φ1~5mm)2%混入。砂微量含む。基本層序第三層よりは砂少ない。
第2層 10YR1.7/1 黒色シルト 10YR1.7/1 黒色シルト 10YR4/6 褐色浮石 (φ1~5mm)1%混入。



● 土器
△ 石製遺物・自然礫

図45 第10号土坑・第11号土坑・第12号土坑

位より縄文時代前期後半以降に帰属するものと考えられる。

第11号土坑〔SK-11〕（図45）

〔堆積土〕黒褐色～暗褐色土を主体とするが、周囲の基本層序第Ⅳ層との境界は漸移的である。壁際にはロームブロックが顕著にみられ、自然堆積による埋積の特徴を示す。壁の崩壊土と想定したロームブロックは暗色の堆積土と互層になっており、暗色土のみを掘り上げた底面および壁面の凹凸は極めて顕著である。堆積土中にしまりの弱い木根による攪乱が確認されており、本遺構については形成年代の古い風倒木痕の可能性も考えられる。〔出土遺物〕1層より石錘が1点出土している。〔時期〕堆積土の特徴から縄文時代早期に帰属するものと考えられる。（斉藤）

第12号土坑〔SK-12〕（図45）

〔平面形〕やや不整な円形を呈する。〔堆積土〕黒色シルトだが、第Ⅲ層よりは砂を含む量が少なく、しまりがない。〔壁〕底面から緩やかに立ち上がる。〔底面〕第Ⅲ層を床面とし、平坦である。平面形は不整である。〔出土遺物〕土器は縄文時代晩期のものが出土した。石器は二次調整のある剥片2点、剥片1点が出土した。〔時期〕出土した土器から縄文時代晩期と考えられる。（中村）

第13号土坑〔SK-13〕（図46）

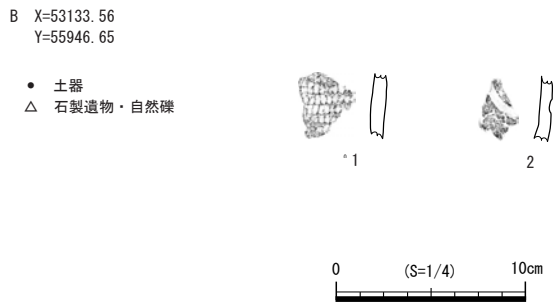
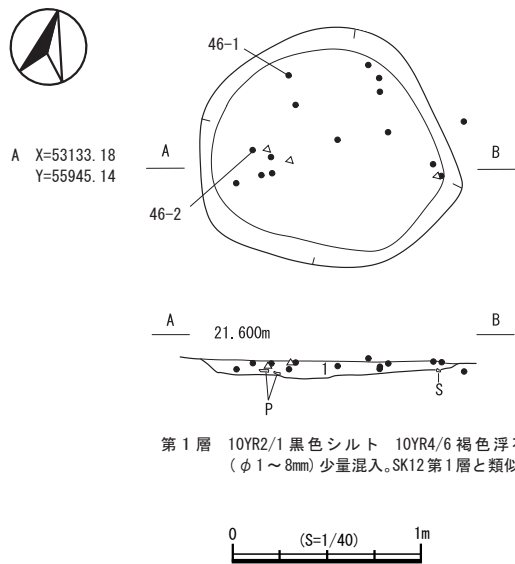
〔平面形〕やや不整な円形を呈する。〔堆積土〕黒色シルトだが、第Ⅲ層よりは砂を含む量が少なく、しまりがない。〔壁〕底面から斜めに立ち上がる。〔底面〕第Ⅲ層を底面とし、平坦である。〔出土遺物〕縄文時代中期末葉の土器小片が出土したが流れ込みと思われる。石器は微小剥離痕のある剥片1点、両極加撃痕のある剥片が出土した。〔時期〕堆積土の様相が第12号土坑に類似するので、第12号土坑と同様縄文時代晩期の可能性が高い。（中村）

第14号土坑〔SK-14〕（図46～50）

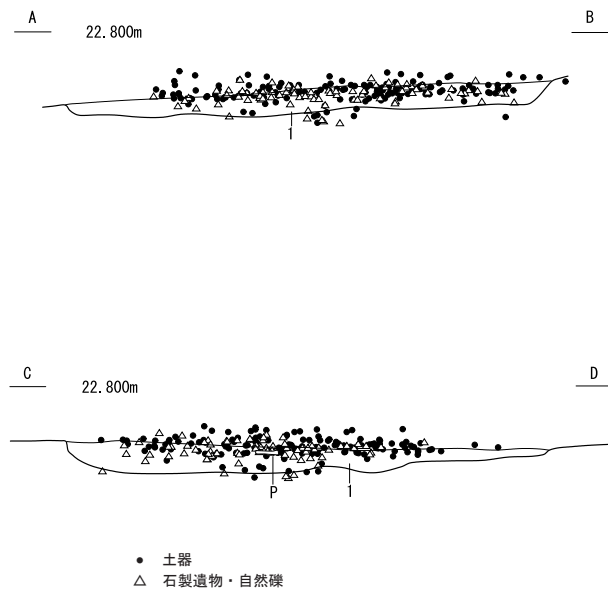
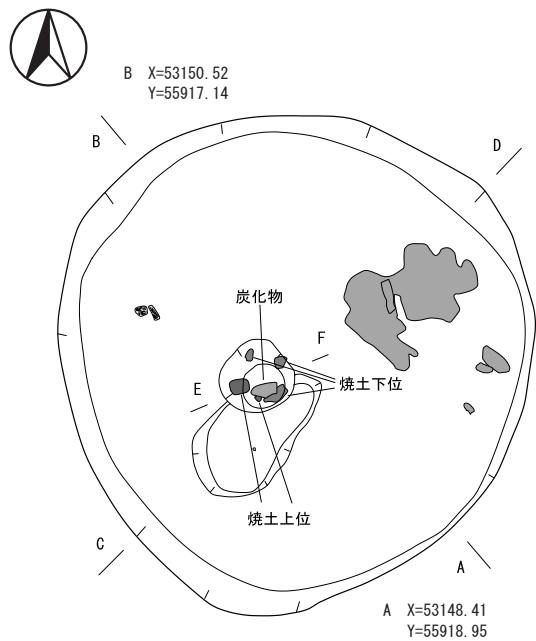
〔平面形〕円形である。〔堆積土〕第Ⅲ層類似の黒色シルトで、壁面の第Ⅲ層との識別が困難であった。〔底面〕第Ⅳ層を底面とする。〔壁〕検出が困難であったため、遺存状況が悪い。やや外傾気味に立ち上がる。〔焼土〕底面に弱い焼土を検出した。焼土と暗褐色シルトがブロック状に堆積しており、熱を受けて赤化した土壌が攪拌・移動されたものと判断された。焼土中や暗褐色シルト中から炭化したトチノキの果皮片が少量出土した。この焼土に隣接して、砂を微量含む土壌が堆積していた。〔出土遺物〕堆積土中から土器（186点、10697.0g）石器が出土した。石器の内訳は碎片4点、石鏃6点、二次調整のある剥片2点、剥片14点、微小剥離痕のある剥片3点である。これらに混在して炭化したクリ・トチの果皮・子葉が出土した（第5章第2節参照）。また、焼土中から径10cm前後の円礫が出土した。〔時期〕出土した土器から縄文時代中期末葉と考えられる。（中村）

第15号土坑〔SK-15〕（図51）

〔平面形〕円形である。〔堆積土〕沢地形を埋積する第Ⅲ層と同質の黒色シルトである。〔壁〕黒色土中に構築されており検出が困難であったため、遺存状況が悪く詳細は不明である。〔底面〕第Ⅲ層を

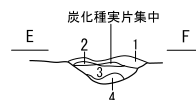


SK-13



A-B・C-D
第1層 10YR1.7/1 黒色シルト 中礫浮石起源の黄褐色微細粒子含む。周辺よりやや砂なし。微細粒子2%含む。

E-F (焼土)
第1層 10YR2/1 黒色シルト
第2層 10YR2/3 黒褐色シルト (焼土)
第3層 10YR2/2 黒褐色シルト 焼土混入。
第4層 5YR5/8 明赤褐色シルト (焼土)



SK-14

図46 第13号土坑・第14号土坑(1)

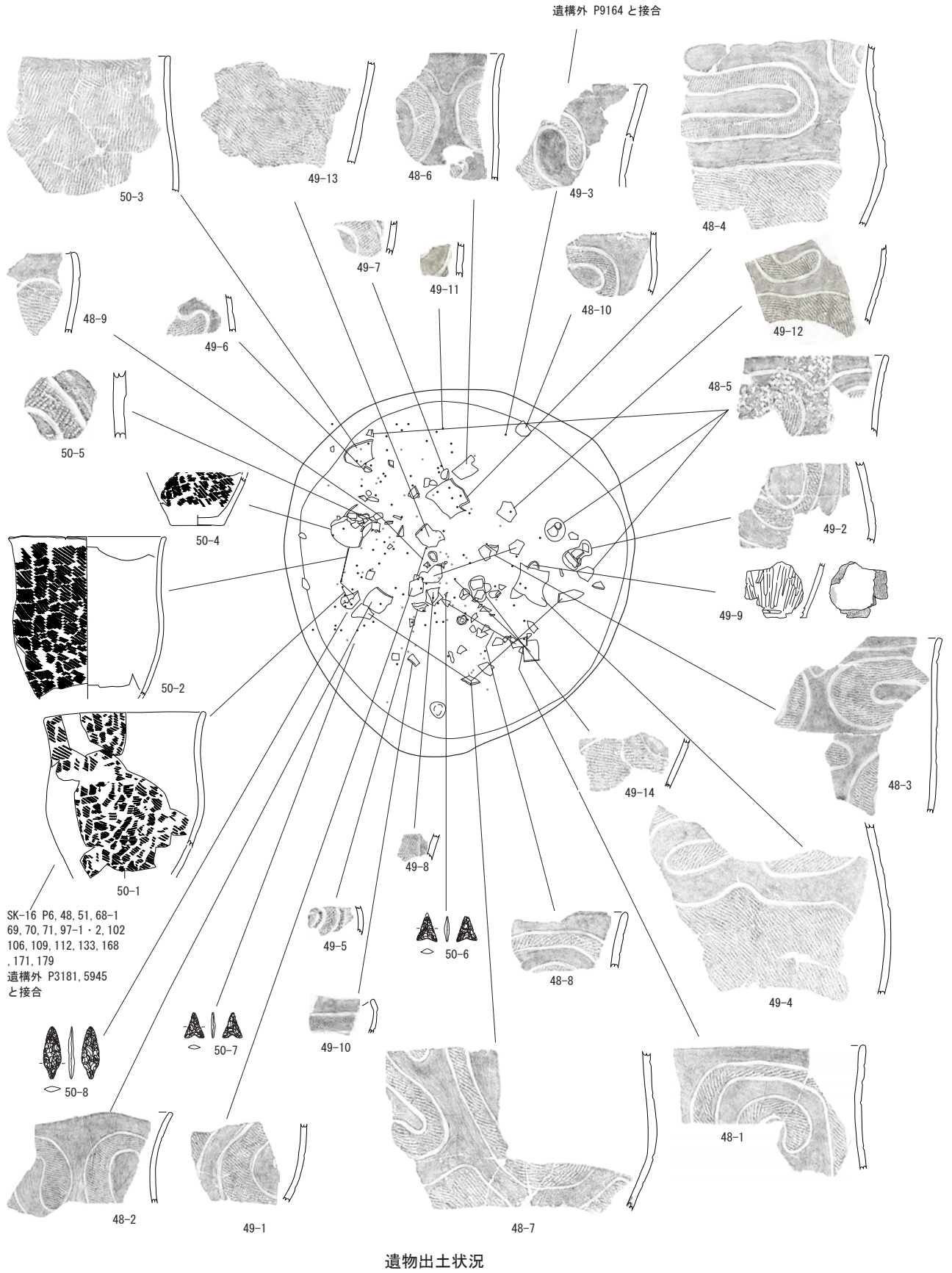


図47 第14号土坑(2)

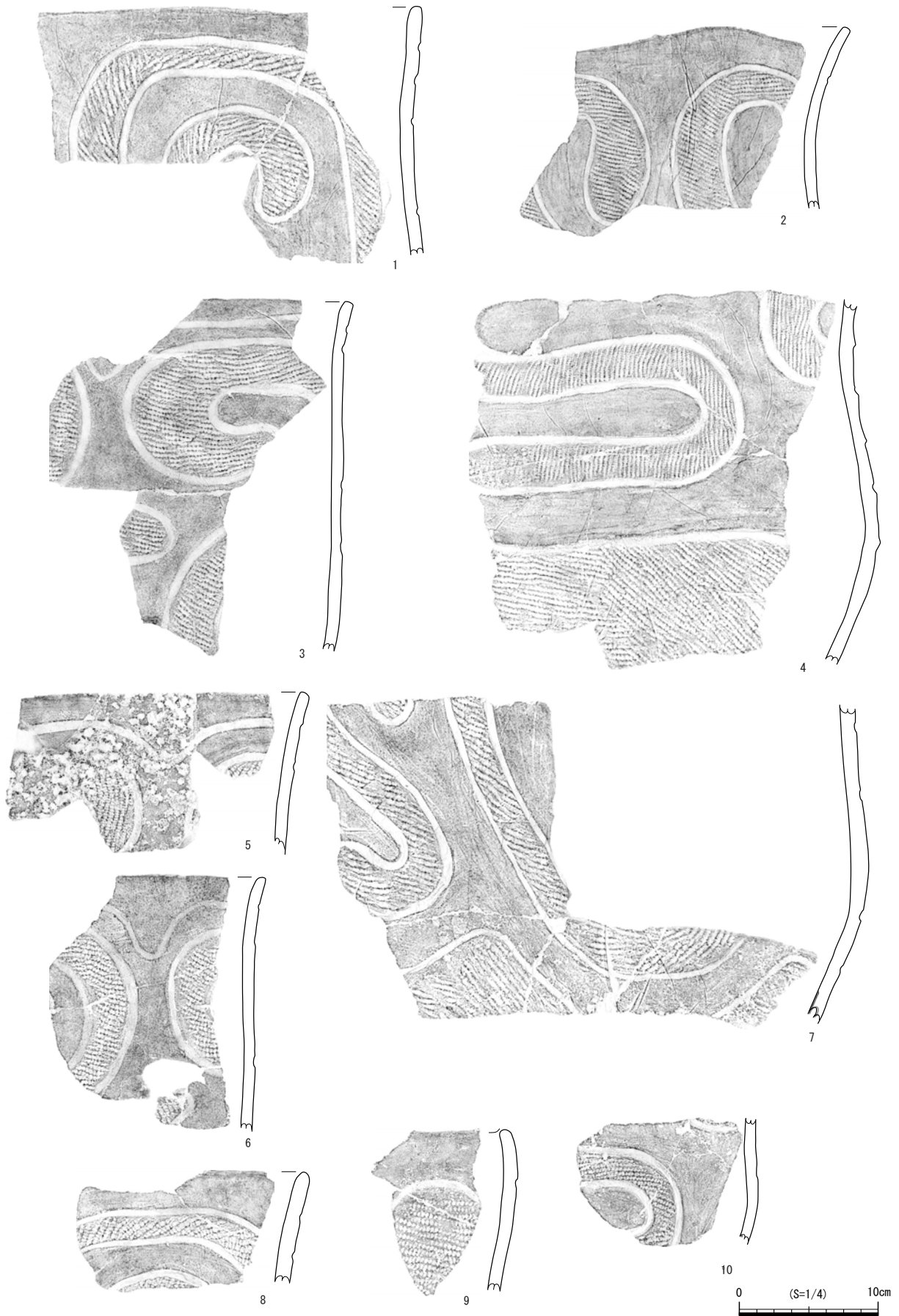
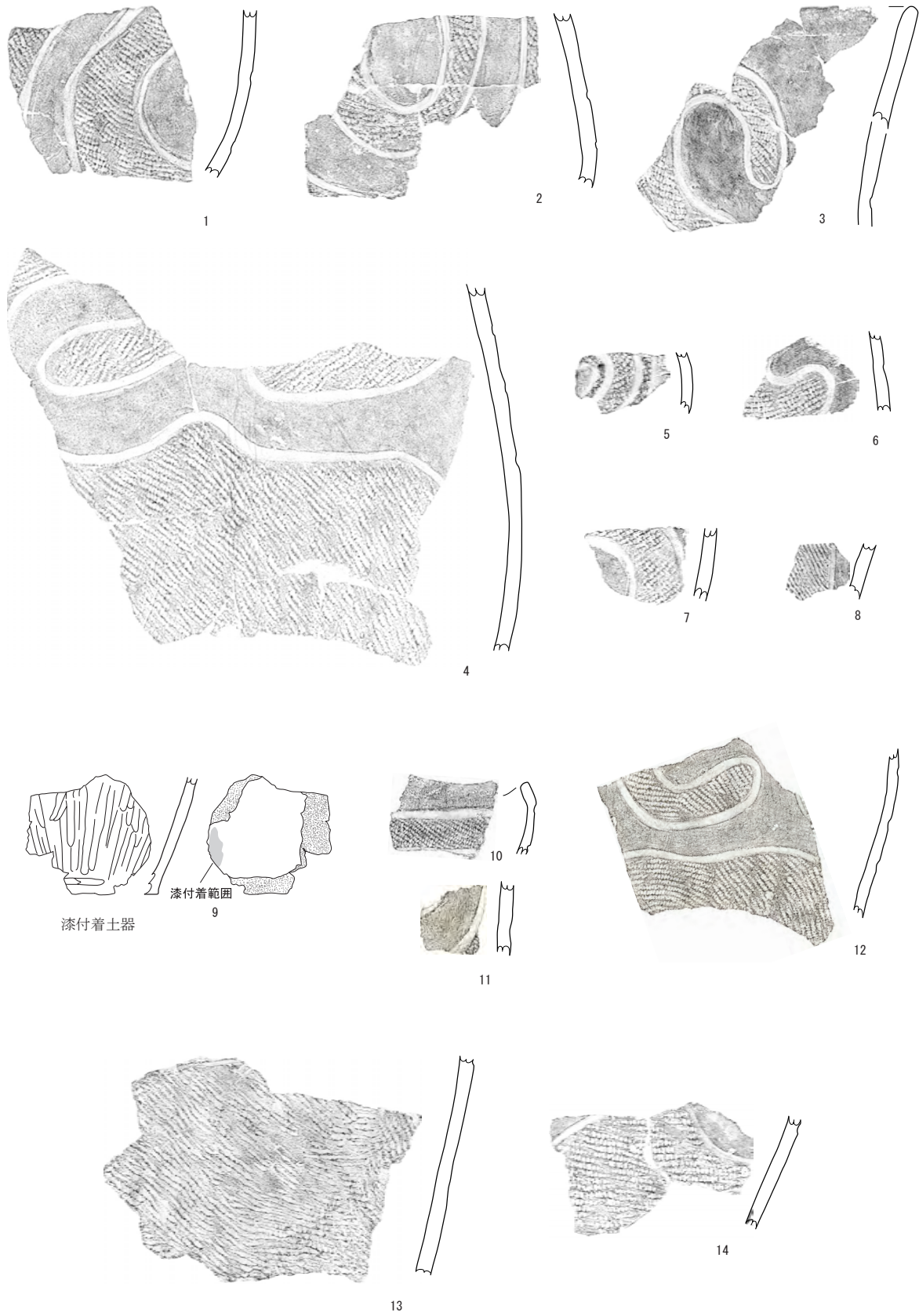


图48 第14号土坑(3)



0 (S=1/4) 10cm

图49 第14号土坑(4)

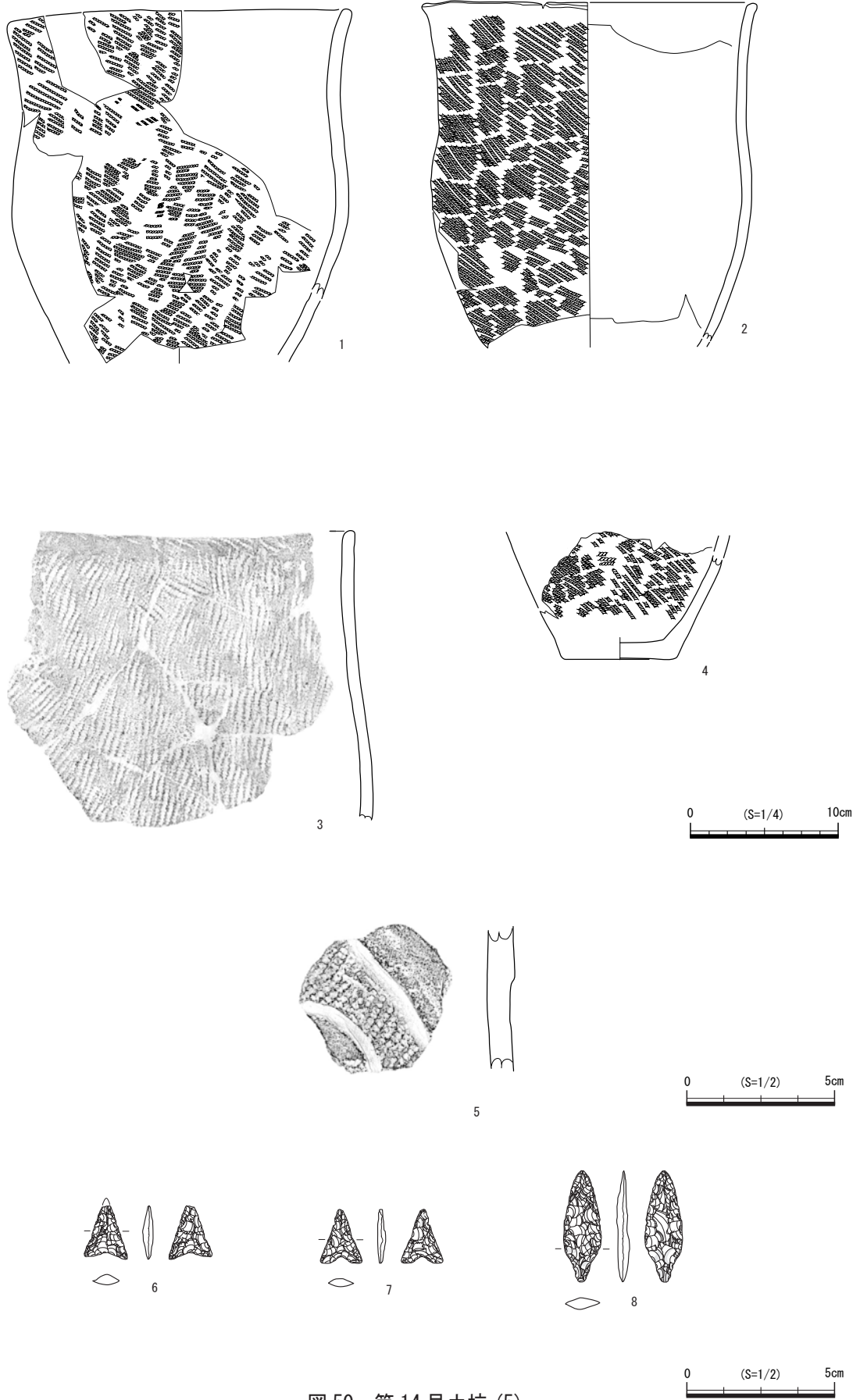
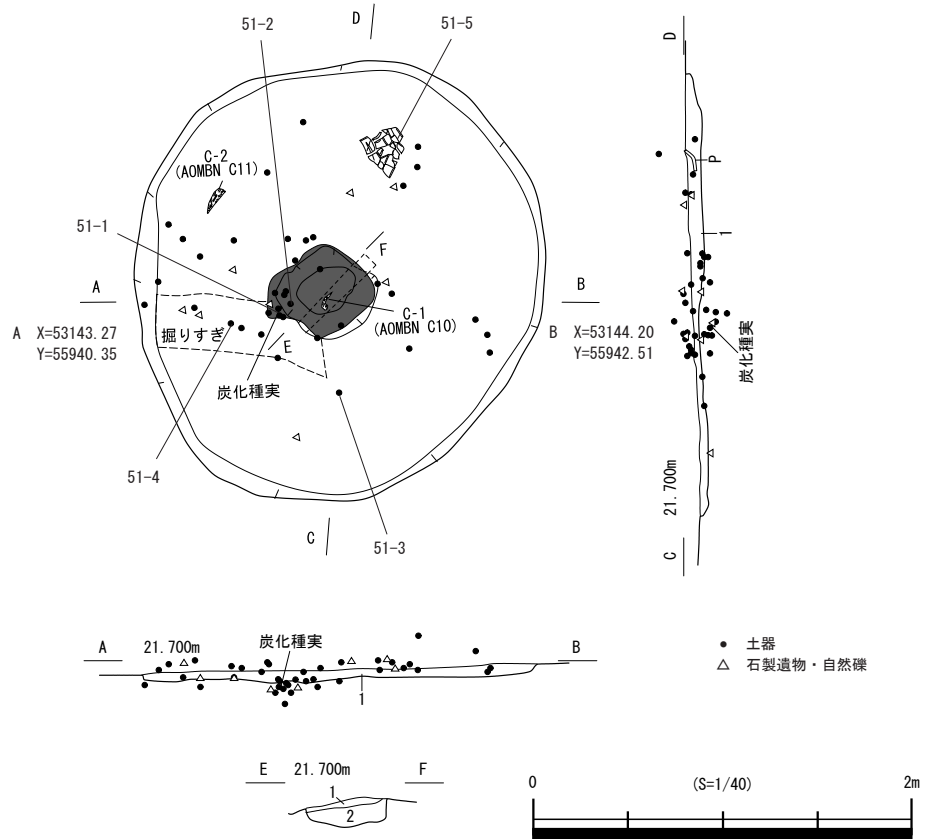
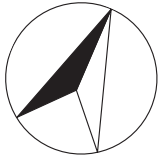


图 50 第 14 号土坑 (5)



A-B・C-D

第1層 10YR2/1 黒色シルト 10YR6/8 明黄褐色浮石 (φ 1~10mm) 10% 混入。炭化物極微量混入。

E-F

第1層 10YR2/2 黒褐色砂質シルト 焼土粒 10% 含む。

第2層 10YR2/2 黒褐色シルト 焼土粒 30% 含む。

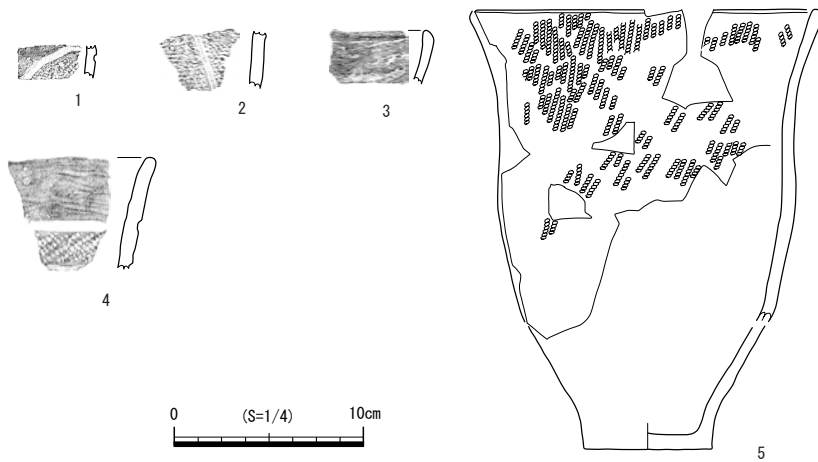


図51 第15号土坑

底面とし、平坦である。[焼土] 底面中央に焼土が検出された。確認面の平面形は方形に近い。焼土は厚さ 15cm 程度で、暗褐色のあまり焼けていない土壌とともに粒状に認められ、周辺部への土色の漸位は認められなかった。この点から焼土は掘方を持ち、攪拌されていたものと考えられる。[出土遺物] 堆積土中から 34 点 (847.3g) の土器が出土した。いずれも縄文時代中期末葉の土器である。石器は、敲磨器、剥片が各 1 点出土した。また、底面北西部と焼土上面からそれぞれ炭化材が出土した。炭化材は長さ 10cm、太さ 3cm 程度である。燃焼材の可能性が考えられる。これらの炭化材を用いて¹⁴C 年代測定を実施し、縄文時代中期後葉に近い年代が得られている (第 5 章第 4 節参照)。焼土上面の炭化材はクリと同定された。焼土中から縄文時代中期末葉の土器片と炭化栗が出土した (第 5 章第 2 節参照)。**[時期]** 出土した土器から縄文時代中期末葉である。(中村)

第 16 号土坑 [SK-16] (図 52 ~ 53)

[平面形] やや不整な小判型である。**[堆積土]** 第Ⅲ層類似の黒色土で、8 層に細分した。**[壁]** 底面からやや外傾して立ち上がる。**[底面]** 第Ⅴ層を底面とし、平坦である。**[焼土]** 底面に弱い不整形の焼土が検出された。焼土はブロック状で暗褐色のシルトと混在しており、これらを掘り上げると深さ 10cm 程度の落ち込みとなった。**[出土遺物]** 土器は堆積土中から 174 点 (4485.9g) 出土した。底面の焼土・暗褐色シルトから 10 点 (370.8g) 出土した。土器の時期はすべて縄文時代中期末葉である。石器は敲磨器 2 点、二次調整のある剥片 1 点、剥片 2 点、微小剥離痕のある剥片 1 点、両極加撃痕のある剥片 1 点が出土した。**[時期]** 出土した土器から考えて、縄文時代中期末葉である。(中村)

第 17 号土坑 [SK-17] (図 54)

[堆積土] 中坩浮石を多量に含む黒褐色シルトの単層からなる。**[遺物]** 土器が 2 片 (63.0g) 出土した。**[時期]** 検出層位から縄文時代前期後半以降に帰属するものと考えられる。(斉藤)

第 18 号土坑 [SK-18] (図 54)

[堆積土] 2 層、3 層、4 層の黒褐色シルトに対し、第 1 層および第 5 層の黒色シルトが貫入するような様相を呈している。第 1 層および第 5 層については植物による攪乱の可能性も考えられる。**[遺物]** なし。**[時期]** 検出層位から縄文時代前期前半以前に帰属するものと考えられる。(斉藤)

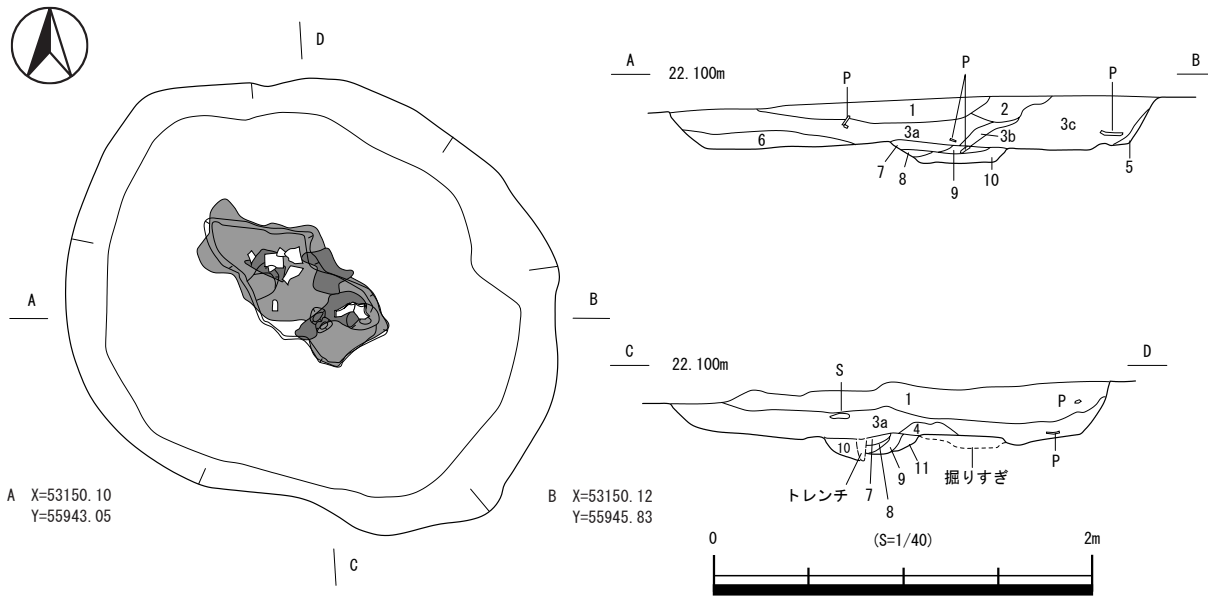
第 3 号焼土遺構 [SN-03] (図 54)

[特徴] 直径 25 cm ほどの円形を呈する。断面の色調は漸移的であり、現地性の焼土と考えられる。**[時期]** 検出層位から縄文時代前期後半以降に帰属するものと考えられる。(斉藤)

第 4 号焼土遺構 [SN-04] (図 54)

[特徴] 一部調査区外に広がるため全体を検出していないが直径 25 cm 程度の円形を呈するものと考えられる。**[時期]** 検出層位から縄文時代前期後半以降に帰属するものと考えられる。(斉藤)

第 5 号焼土遺構 [SN-05] (図 54)



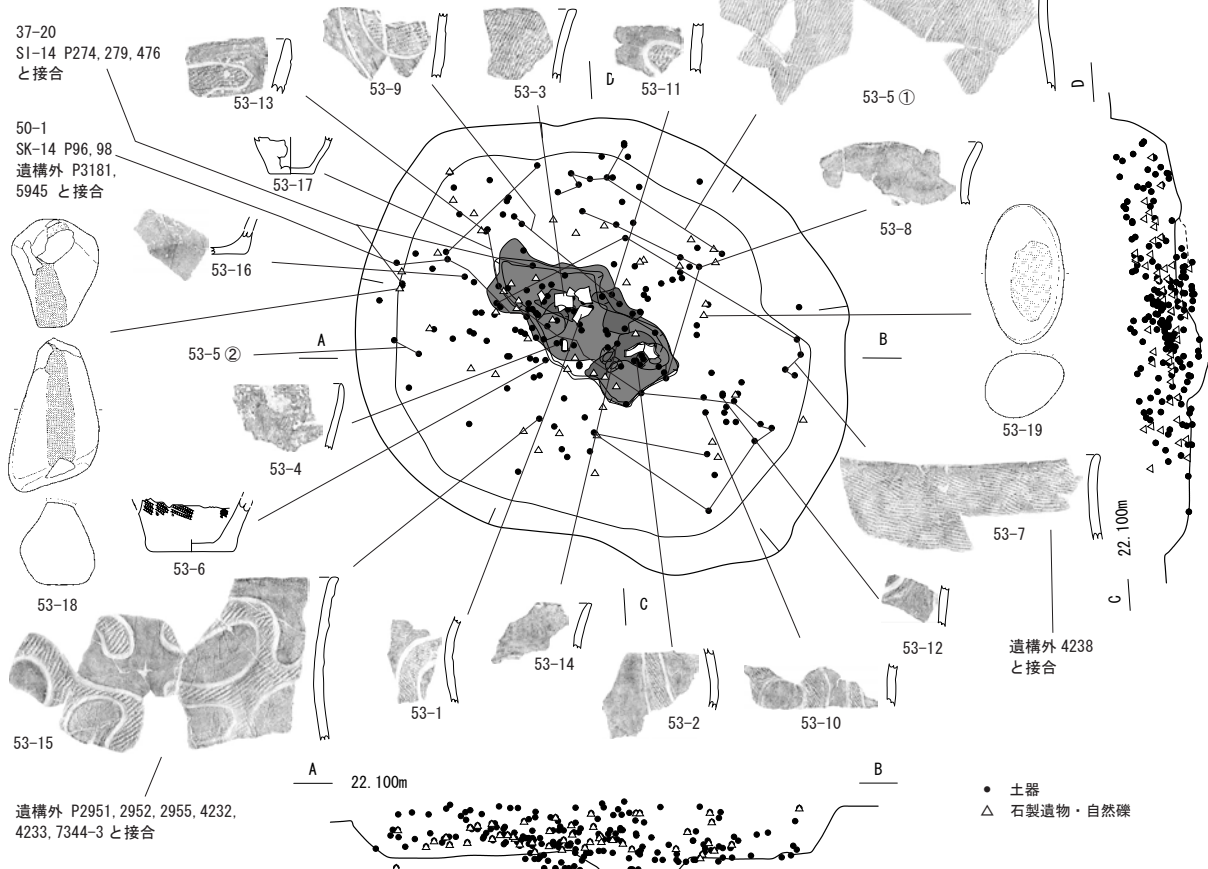
A X=53150.10
Y=55943.05

B X=53150.12
Y=55945.83

A-B・C-D

- 第1層 10YR2/1 黒色シルト 10YR5/8 黄褐色浮石 (φ1~8mm)10%混入。炭化物少量混入。
- 第2層 10YR2/2 黒褐色シルト 10YR6/8 明黄褐色浮石 (φ1~8mm)3%混入。炭化物少量混入。
- 第3a層 10YR1.7/1 黒色シルト 10YR5/8 黄褐色浮石 (φ1~8mm)7%混入。炭化物少量混入。
- 第3b層 10YR3/3 暗褐色シルト 10YR7/8 黄橙色浮石 (φ1~2mm)5%混入。10YR2/1 黒色シルト混入。ブロック状に含まれる。
- 第3c層 10YR1.7/1 黒色シルト 10YR7/8 黄橙色浮石 (φ1~10mm)7%混入。炭化物少量混入。
- 第4層 10YR2/2 黒褐色シルト 10YR5/8 黄褐色浮石 (φ1~5mm)2%混入。炭化物少量混入。

- 第5層 10YR2/3 黒褐色シルト 10YR7/8 黄橙色浮石 (φ1~3mm)2%混入。
- 第6層 10YR2/3 黒褐色シルト 10YR5/8 黄褐色浮石 (φ1~12mm)15%混入。炭化物少量混入。
- 第7層 5YR4/8 赤褐色シルト (焼土) 10YR3/3 暗褐色シルトの混層土。
- 第8層 10YR2/3 黒褐色シルト やや赤化している。
- 第9層 10YR2/1 黒色シルト
- 第10層 10YR2/2 黒褐色シルト
- 第11層 10YR2/3 黒褐色シルト 焼土粒10%。



37-20
S1-14 P274, 279, 476
と接合

50-1
SK-14 P96, 98
遺構外 P3181,
5945 と接合

遺構外 4238
と接合

遺構外 P2951, 2952, 2955, 4232,
4233, 7344-3 と接合

● 土器
△ 石製遺物・自然礫

遺物出土状況
図52 第16号土坑(1)

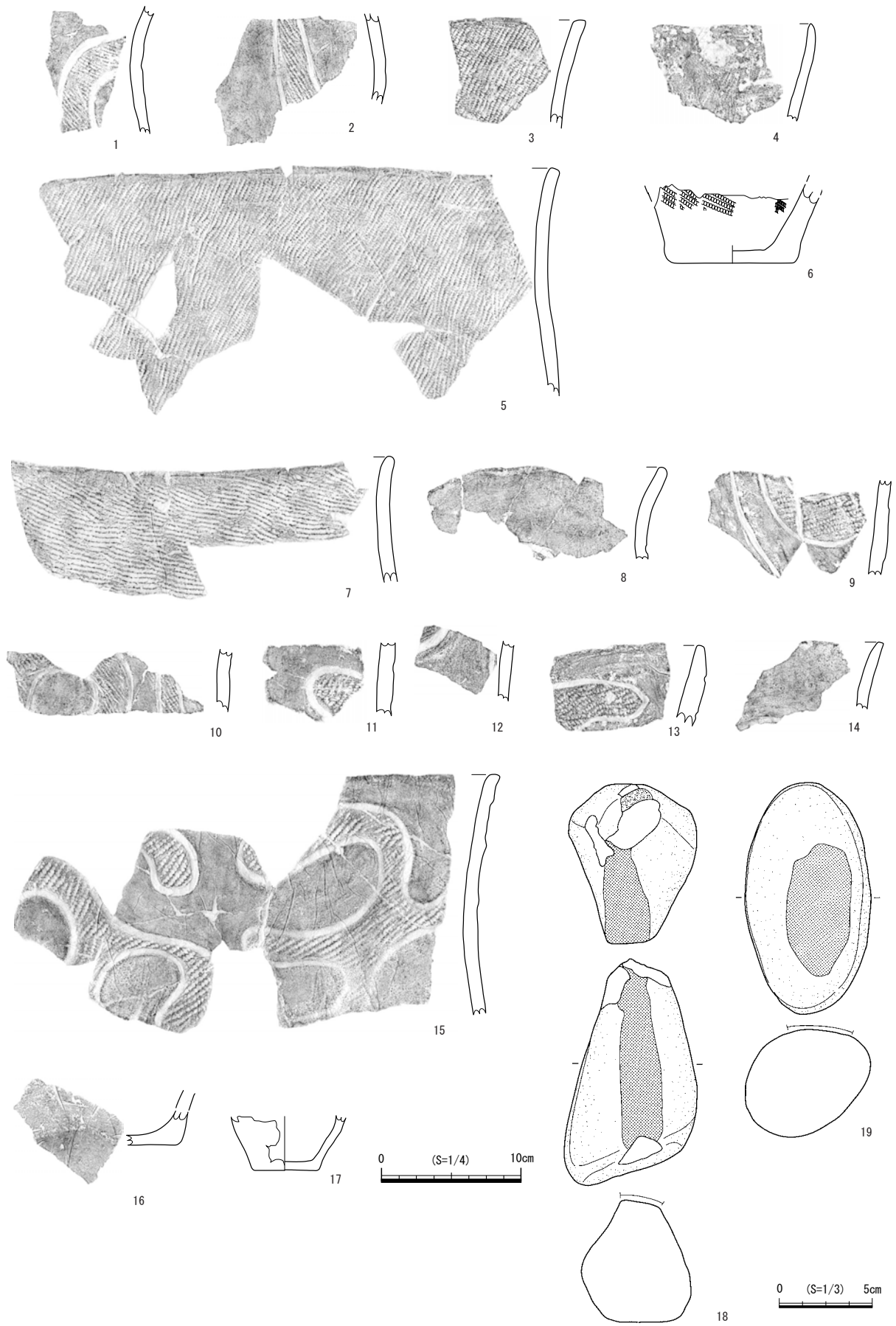
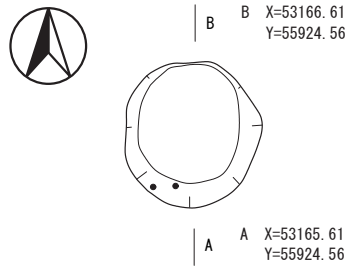
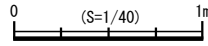
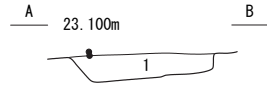


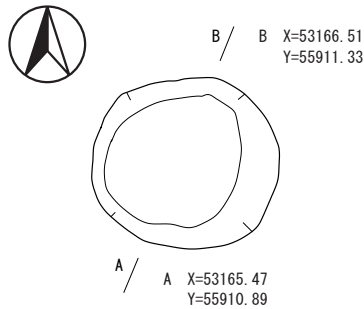
图 53 第 16 号土坑 (2)



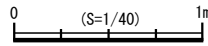
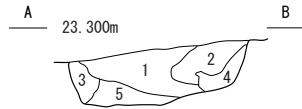
第1層 10YR2/3 黒褐色土浮石 (φ2~5mm以下)3%
含む。炭化物 (φ3~5mm)3%含む。中振
浮石多く含む。粘性中。



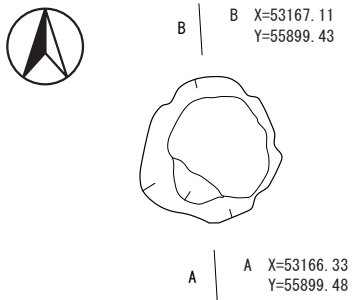
SK-17



第1層 10YR1.7/1 黒色シルト 10YR5/8 黄褐色浮
石 (φ1~8mm)20%混入。しまり中。粘性強。
第2層 10YR3/1 黒褐色シルト 10YR5/8 黄褐色浮
石 (φ1~10mm)15%混入。しまり中。粘
性中。
第3層 10YR3/1 黒褐色と 10YR3/3 暗褐色シルト
10YR5/8 黄褐色浮石 (φ1~5mm)5%混入。
しまり中。粘性中。
第4層 10YR3/1 黒褐色と 10YR4/4 褐色土が斑状に
混ざるシルト 10YR5/8 黄褐色浮石 (φ1
~8mm)10%混入。しまり中。粘性中。
第5層 10YR2/1 黒色粘性シルト 10YR5/8 黄褐色
浮石 (φ1~10mm)10%混入。しまり中。
粘性中。

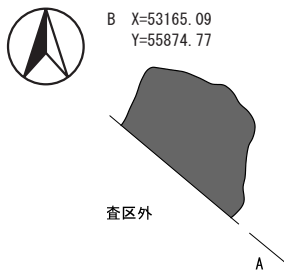
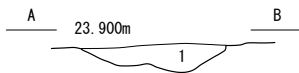


SK-18



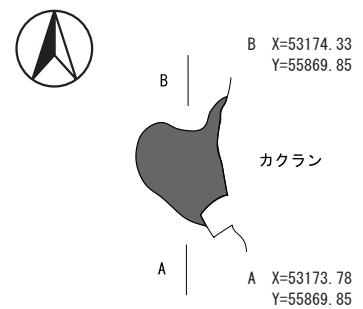
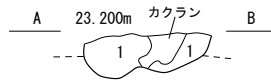
第1層 10YR2/2 黒褐色シルト 7.5YR6/8 橙
色焼土が30%斑状に混入。10YR7/8
黄橙色浮石 (φ1~5mm)5%混入。
硬くしまりなし。

SN-03



第1層 10YR2/1 黒色土 浮石1%混入。

SN-04



第1層 10YR2/2 黒褐色土

SN-05

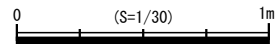
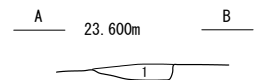


図54 第17号土坑・18号土坑・焼土(1)

〔特徴〕一部攪乱を受けており、全体の形状は不明であるが、概ね直径 25 cm 程度の不整円形を呈するものと考えられる。断面の色調は漸移的であり、現地性の焼土と考えられる。〔時期〕検出層位から中坵浮石降下以前に形成されたものと考えられる。(斉藤)

第 6 号焼土遺構〔SN-06〕(図 55)

〔特徴〕第Ⅳ層上面で赤化した土壌を確認した。赤化の度合いは微弱で、熱以外の要因で赤化した可能性もある。〔時期〕検出層位から縄文時代前期前半以前に帰属するものと考えられる。(斉藤)

第 7 号焼土遺構〔SN-07〕(図 55)

〔特徴〕一部調査区外に広がるため全体の形状については不明。断面の色調は漸移的であるため、現地性の焼土と考えられる。〔時期〕検出層位から縄文時代前期後半以降に帰属するものと考えられる。(斉藤)

第 8 号焼土遺構〔SN-08〕(図 55)

〔特徴〕平面形態は不整円形を呈し、黒色土と焼土ブロックが斑状に混ざる。〔時期〕検出層位から縄文時代前期後半以降に帰属するものと考えられる。(斉藤)

第 9 号焼土遺構〔SN-09〕(図 55)

〔特徴〕第Ⅲ層掘り下げ中に検出した。不整形で焼けが弱く、木根による攪乱もうけている。現地性のものかどうかの判断は困難であった。〔時期〕検出層位と周辺出土土器から縄文時代中期末葉と考えられる。(中村)

第 10 号焼土遺構〔SN-10〕(図 55)

〔特徴〕第Ⅲ層掘り下げ中第 9 号焼土に近接して検出した。不整形で焼けがやや強い部分が斑状に存在する。廃棄焼土の可能性が高い。〔時期〕検出層位と周辺出土土器から縄文時代中期末葉と考えられる。(中村)

第 11 号焼土遺構〔SN-11〕(図 55)

〔特徴〕調査区外に広がるため全体形状については不明である。堆積土は 2 層に分かれるが、色調は漸移的であり、周囲の土壌との差は不明瞭である。現地性の焼土と考えられる。〔出土遺物〕土器が 2 点出土した。2 層より二次調整のある剥片 1 点が出土している。〔時期〕検出層位および周辺より出土した遺物から縄文時代前期前葉に帰属するものと考えられる。(斉藤)

第 12 号焼土遺構〔SN-12〕(図 56)

〔特徴〕第Ⅳ層で直径 45 cm ほどの中坵浮石の集中がみられ、その中心がわずかに赤変している。断面の色調は斑状であり、非常に不明瞭である。本遺構の赤色土は被熱による酸化とは別の脈絡で生じた可能性も考えられる。〔時期〕検出層位から縄文時代前期前半以降に帰属するものと考えられる。

(斉藤)

第13号焼土遺構〔SN-13〕(図56)

〔特徴〕中礫浮石ブロックの下位で周囲よりもやや赤みを帯びた暗褐色土が検出された。断面からは明瞭なまとまりをつかむことができず、基本層序第Ⅲ層に焼土ブロックが斑状に混ざり合う状態であった。本遺構の赤色土は被熱による酸化とは別の脈絡で生じた可能性も考えられる。〔時期〕検出層位から縄文時代前期後半以降に帰属するものと考えられる。(斉藤)

第14号焼土遺構〔SN-14〕(図56)

〔特徴〕第Ⅴ層上面で検出した。平面形は瓢型を呈する。断面はこれに対応して両端の円形部分はやや厚く、3cm程度である。くびれ部は明確な焼土を確認できない。〔時期〕検出層位から縄文時代早期と考えられる。(中村)

第15号焼土遺構〔SN-15〕(図56)

〔特徴〕基本層序第Ⅲ層中で周囲よりもやや赤みを帯びた褐色土が検出された。周囲との境界は漸移的であり、現地性の焼土と考えられる。〔時期〕検出層位から縄文時代前期後半以降に帰属するものと考えられる。(斉藤)

第16号焼土遺構〔SN-16〕(図57)

〔検出状況〕第Ⅲ層掘り下げ中に焼土を検出した。周辺を精査し、ピットかと思われる黒色の落ち込みを平面で認識し、断ち割り調査を実施した。しかし、断面ではピットの存在を確認できなかった。そのため、整理段階で焼土として扱うこととした。焼土は径約60cm、厚さ約10cmである。〔時期〕周辺から出土した土器から縄文時代中期末葉である。(中村)

第3号不明遺構(SX-03)(図57・58)

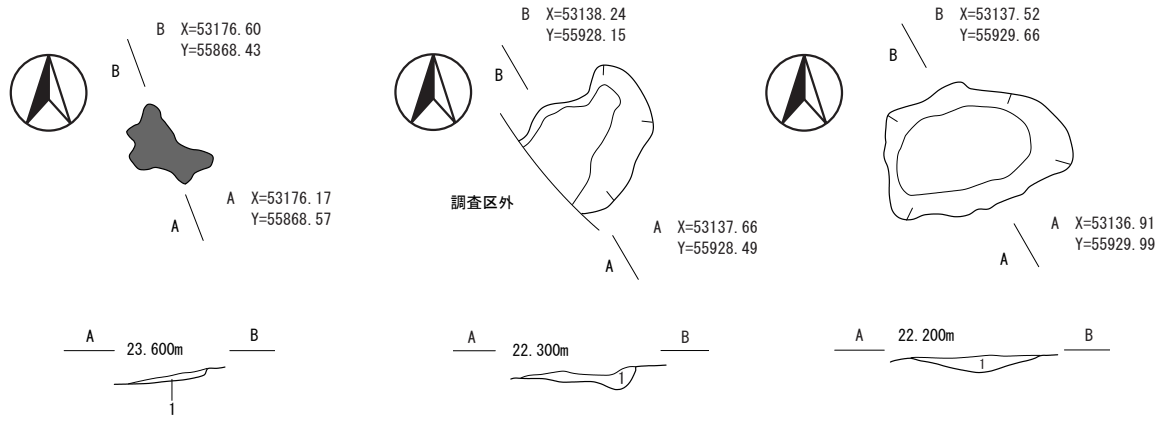
〔特徴〕第Ⅳ層中で、東西6m、南北5mの範囲で礫が検出された〔出土遺物〕土器は小片が数片混在していたのみでほとんど出土しなかった。石匙、剥片各3点、微小剥離痕のある剥片、磨石各1点が出土している。〔時期〕検出層位と出土土器から縄文時代早期後葉と考えられる。(中村)

第4号不明遺構(集石遺構)〔SX-04〕(図58)

〔特徴〕こぶし大程度の円礫を主体とする集石遺構である。個々の礫にレベル差はほとんどみられない。礫の石質はチャート、粘板岩、頁岩などが主体で、全体の130点中61点の礫に被熱に由来すると考えられる赤色変化がみられる。〔出土遺物〕被熱痕跡のみられる磨石の破片が1点含まれている。〔時期〕検出層位から縄文時代前期後半以降に帰属するものと考えられる。(斉藤)

第5号不明遺構(剥片集中遺構)〔SX-05〕(図59)

〔特徴〕基本層序第Ⅲ層中で剥片8点が折り重なっている出土している状態を確認した。剥片石器



第1層 10YR2/2 黒褐色土

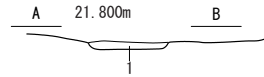
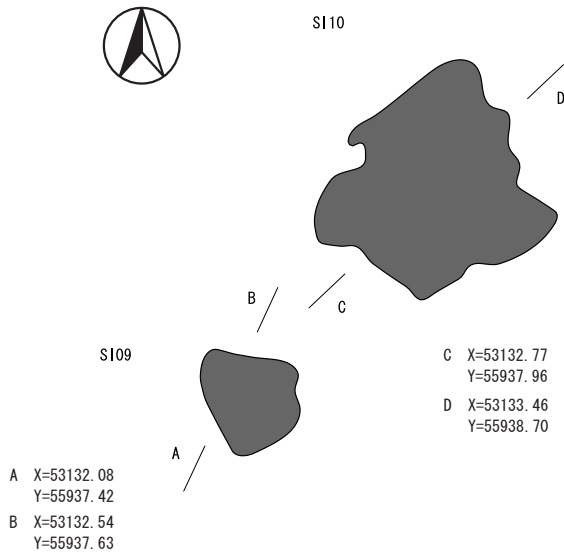
SN-06

第1層 10YR2/1 黒色土 焼土1%混入。

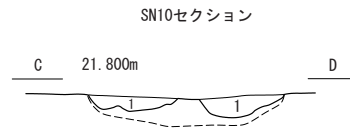
SN-07

第1層 10YR2/1 黒色土主体 焼土1~5%混入。

SN-08

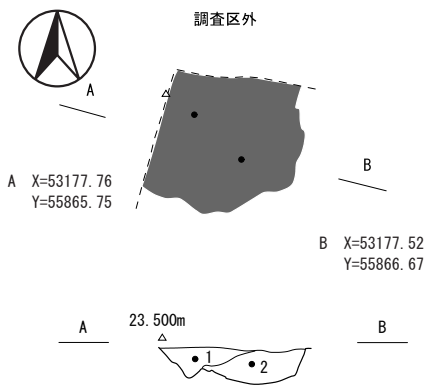


SN-09
第1層 10YR3/1 黒褐色シルト（焼土）



SN-10
第1層 10YR2/2 黒褐色シルト（焼土）

SN-09・10



SN-11
第1層 5YR2/3 極暗赤褐色焼土 7.5YR4/6 褐色の焼土粒（φ1~5mm）2%混入。しまりややあり。粘性強。中礫浮石が母材？
第2層 5YR2/2 黒褐色土（φ5mm）程度の浮石粒わずかに含む。しまり中。粘性強。

● 土器

SN-11

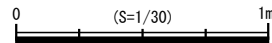
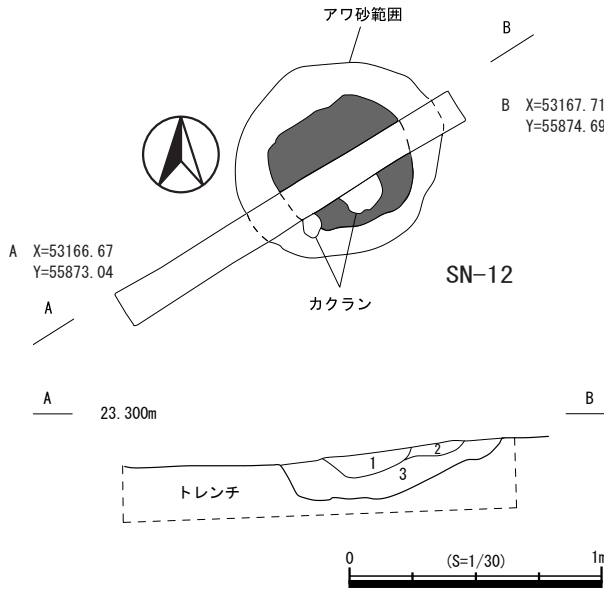
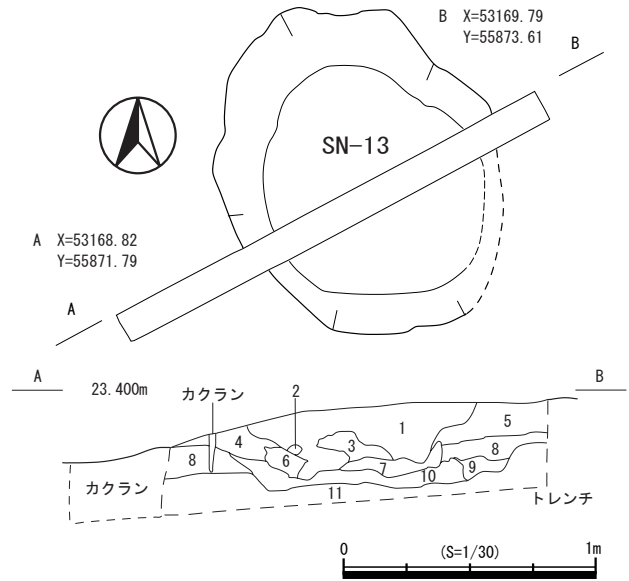


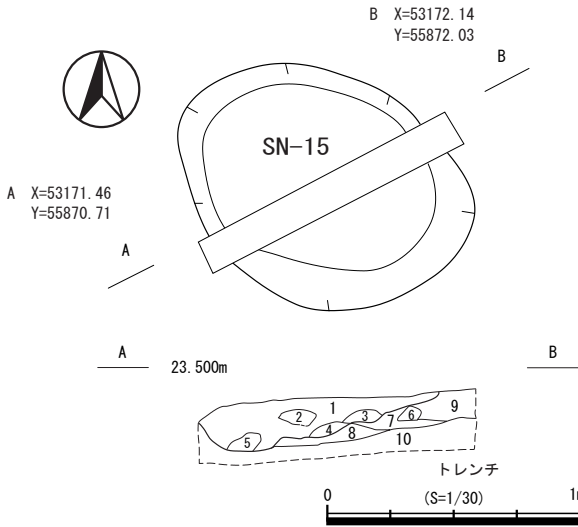
図 55 焼土 (2)



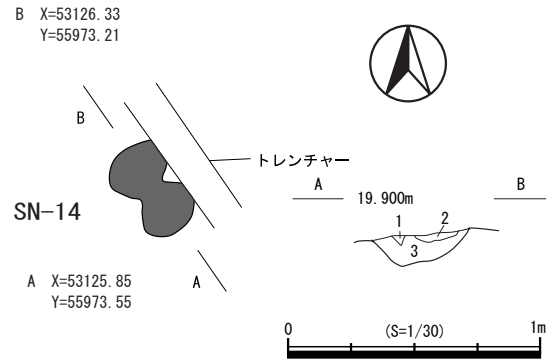
- SN-12
- 第1層 10YR2/2 黒褐色シルト主体 10YR5/8 黄褐色浮石 (φ1~5mm)5% 混入。焼土ごく微量混入。砂多い。粘性中。しまり中。中振浮石多量に含む。φ2cm程度の斑状ブロック多く含む。
 - 第2層 10YR2/2 黒褐色砂質シルト主体 10YR5/8 黄褐色浮石 (φ1~3mm)3% 混入。砂多い。粘性中。しまり中。中振浮石多量に含む。
 - 第3層 10YR2/1 黒色シルト 10YR5/8 黄褐色浮石 (φ1~8mm)10% 混入。5YR4/6 赤褐色の焼土粒 (φ1~3mm) 少量混入。砂中。中振浮石少量含む。φ2cm程度の斑状ブロックまばらに含む。



- SN-13
- 第1層 10YR2/3 黒褐色砂質シルト 10YR5/8 黄褐色浮石 (φ1~8mm)1%。しまりあり。中振浮石の純層。Ⅲ層。褐色化。
 - 第2層 10YR3/2 黒褐色シルト 10YR5/8 黄褐色浮石 (φ1~5mm)20%。しまりあり。焼土ブロック。
 - 第3層 10YR3/3 暗褐色砂質シルト 10YR5/8 黄褐色浮石 (φ1~5mm)15%。しまりあり。焼土ブロック。
 - 第4層 10YR3/1 黒褐色砂質シルト 10YR5/8 黄褐色浮石 (φ1mm) 微量。しまりあり。Ⅲ層。
 - 第5層 10YR3/1 黒褐色砂質シルト 10YR5/8 黄褐色浮石 (φ1~5mm)3%。しまりあり。Ⅲ層。
 - 第6層 10YR2/1 黒色シルト 10YR5/8 黄褐色浮石 (φ1~3mm)5%。しまりあり。焼土ブロック。
 - 第7層 10YR2/1 黒色シルト 10YR5/8 黄褐色浮石 (φ1~5mm)10%。しまりあり。Ⅲ~Ⅳ漸移層上部。
 - 第8層 10YR2/1 黒色シルト 10YR5/8 黄褐色浮石 (φ1~3mm)1%。しまりあり。Ⅲ~Ⅳ漸移層上部 (黒)。
 - 第9層 10YR3/1 黒褐色シルト (やや黒み強) 10YR5/8 黄褐色浮石 (φ1~2mm)1%。しまりあり。Ⅲ~Ⅳ漸移層下部 (褐)。
 - 第10層 10YR2/2 黒褐色シルト 10YR5/8 黄褐色浮石 (φ1~5mm)5%。しまりあり。Ⅲ~Ⅳ漸移層下部。
 - 第11層 10YR3/1 黒褐色シルト 10YR5/8 黄褐色浮石 (φ1~3mm) 少量。しまりあり。Ⅳ層。

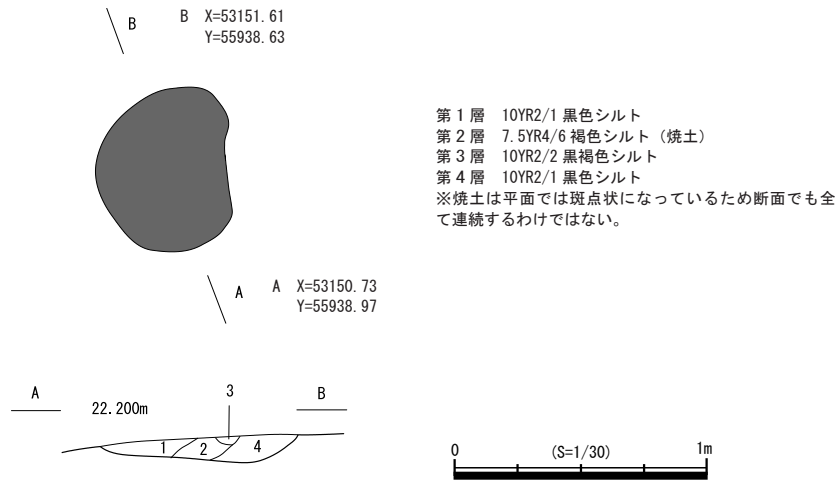


- SN-15
- 第1層 10YR2/3 黒褐色砂質シルト φ3mm程度の黄褐色浮石粒5%含むφ7mm程のブロック状の中振浮石を多量に含む(Ⅲ層)。粘性中。しまり中。
 - 第2層 7.5YR4/4 褐色砂質シルト φ3mm程度の黄褐色浮石粒5%含む(Ⅲ層)焼土状の赤色土ブロックは色調が斑状中振浮石を多量に含む。粘性中。しまり中。
 - 第3層 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト φ3mm程度の黄褐色浮石粒1%含む(Ⅲ層)。中振浮石を多量に含む。粘性中。しまり中。
 - 第4層 7.5YR2/2 黒褐色シルト 中振浮石わずかに含む(Ⅲ~Ⅳ層漸移層)。粘性中。しまり中。
 - 第5層 10YR2/1 黒色シルト 中振浮石わずかに含む(Ⅲ~Ⅳ層漸移層)。粘性中。しまり中。
 - 第6層 10YR2/1 黒色シルト 中振浮石わずかに含む(Ⅲ層?)。粘性中。しまり中。
 - 第7層 7.5YR2/1 黒色シルト 中振浮石わずかに含む(Ⅲ層)。粘性中。しまり中。
 - 第8層 7.5YR2/1 黒色シルト 中振浮石わずかに含む(Ⅲ~Ⅳ層漸移層)。粘性中。しまり中。
 - 第9層 10YR2/2 黒褐色シルト 中振浮石多量に含む。φ3mm程度の浮石粒5%含む(Ⅲ層)粘性中。しまり中。
 - 第10層 7.5YR1.7/1 黒色シルト φ3mm程度の浮石粒5%含む(Ⅳ層)。粘性中。しまり中。



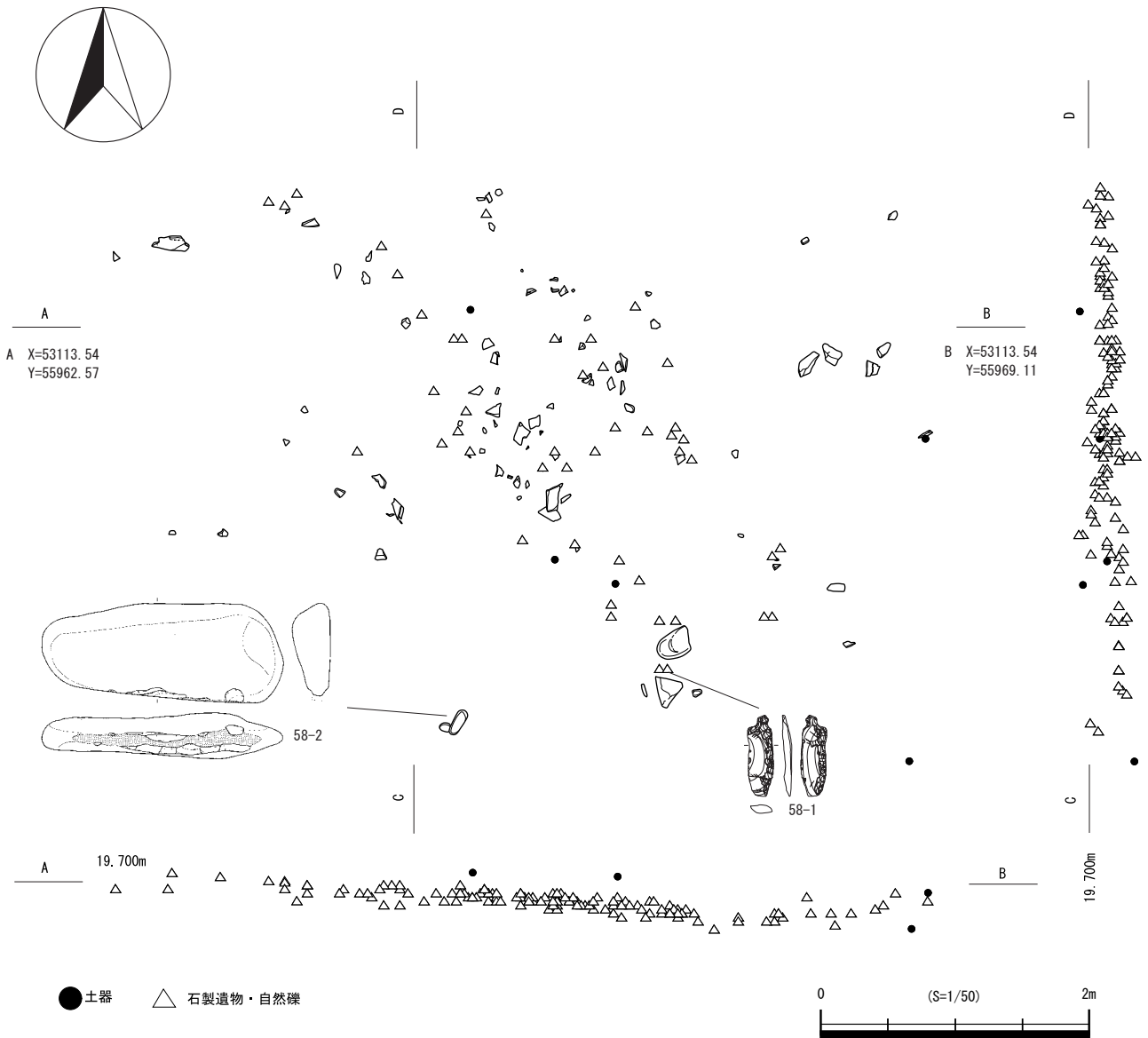
- SN-14
- 第1層 7.5YR3/2 黒褐色焼土層 10YR2/2 黒褐色シルト40% 10YR6/6 明黄褐色浮石 (φ3mm) ごく微量。炭化物 (φ1~2mm)1% 混入。しまりなし。粘性あり。
 - 第2層 7.5YR3/2 黒褐色焼土層 10YR2/2 黒褐色シルト25%。炭化物少量混入。しまりなし。粘性あり。
 - 第3層 10YR1.7/1 黒色シルト 7.5YR4/4 褐色浮石 (φ1~5mm)5%。炭化物 (φ1~3mm)2% 混入。しまりなし。粘性あり。

図56 焼土(3)



第1層 10YR2/1 黒色シルト
 第2層 7.5YR4/6 褐色シルト (焼土)
 第3層 10YR2/2 黒褐色シルト
 第4層 10YR2/1 黒色シルト
 ※焼土は平面では斑点状になっているため断面でも全
 て連続するわけではない。

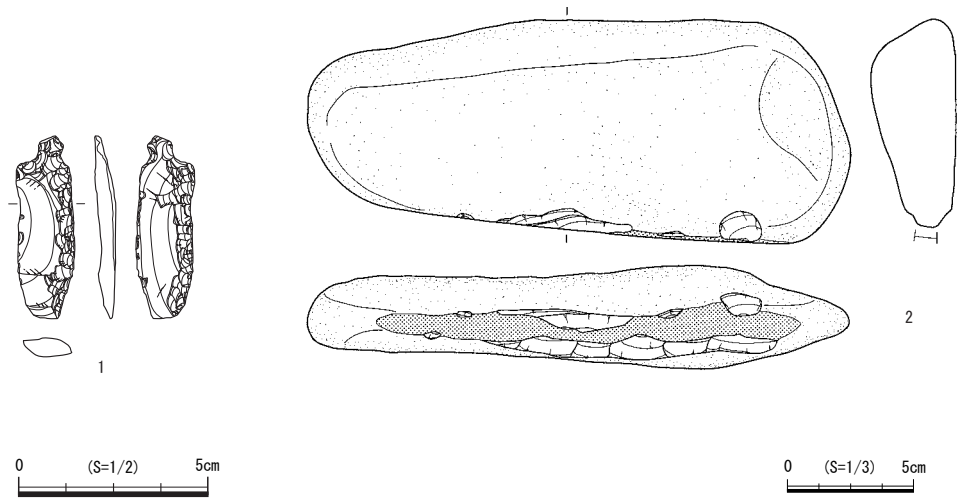
SN-16



● 土器 △ 石製遺物・自然礫

SX-03

図 57 第 3 号不明遺構 (1)



SX-03 出土遺物

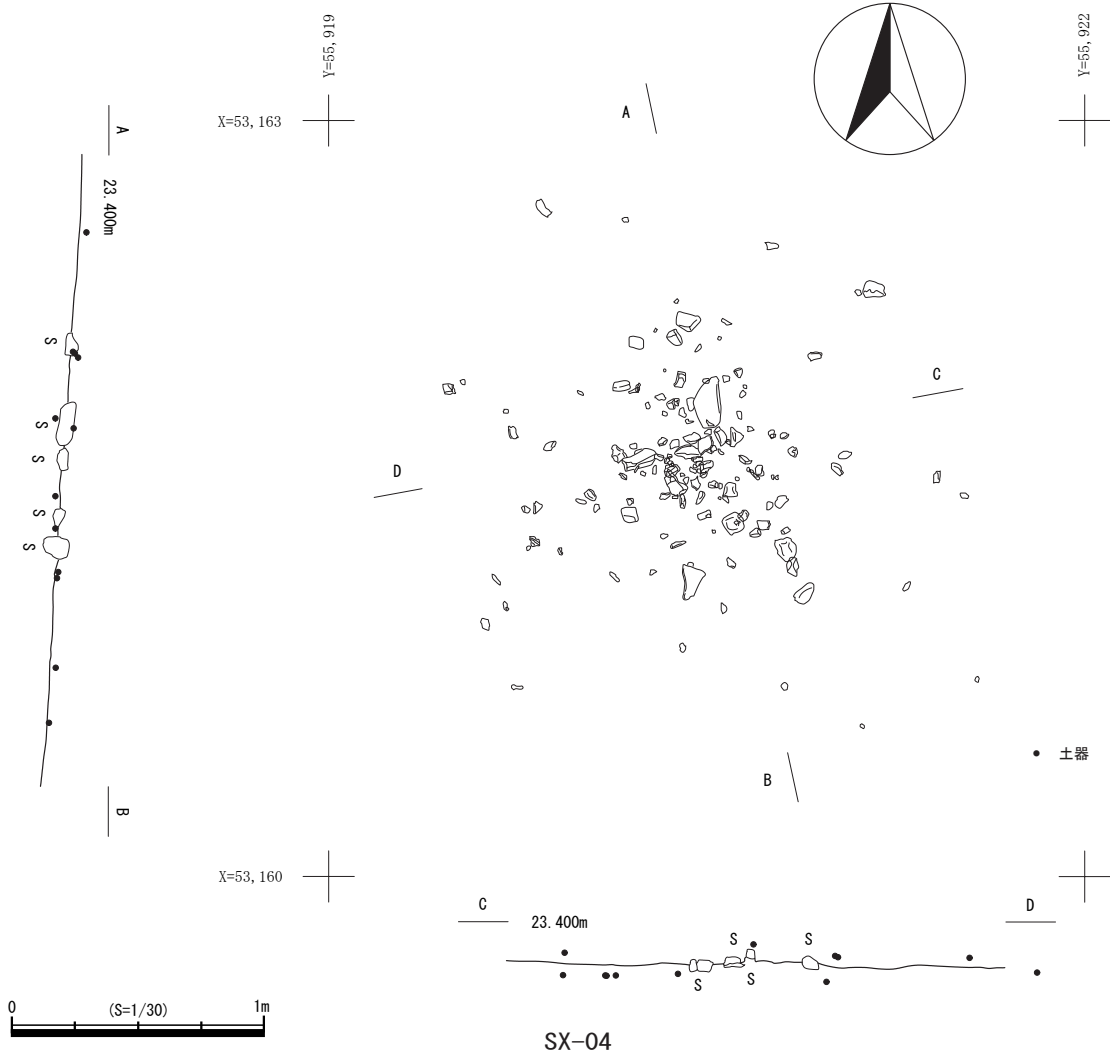


図 58 第 3 号不明遺構 (2)・第 4 号不明遺構

8点はいずれも珪質頁岩を素材としている。鋭利な側縁部には微小剥離痕がみられ、母岩としては5つ以下のグループに分類できる。接合関係は確認できなかった。[時期] 周囲の遺物、検出土層から縄文時代中期末葉に帰属するものと考えられる。(斉藤)

第6号不明遺構〔SX-06〕(図60～62)

〔特徴〕第Ⅲ層で炭化物と多量の土器の集中を確認した。土器の集中は直径3m、深さ40cm程度の範囲に広がる。遺物集中範囲の中央最低面で同一個体の土器片(図62-1)の上に直径20cm程度の焼土がみられた。土器片の内面に焼土範囲と符合する黒変、および黒色付着物を確認し、炉の可能性を考慮して精査を行ったが、接合後の検討では黒変が焼成時に形成されたことを否定する明確な根拠を得ることができなかった。焼土の入った土器が廃棄されていた可能性が考えられる。底面でピット1基を確認した。〔堆積土〕炭化物および人工遺物が多量に含まれており、廃棄行為によって形成された人為堆積層と考えられる。〔出土遺物〕土器が276点(9590.9g)出土した。図62-1は器内面の上位1/4が熱により赤化し、剥落が著しい。下位1/3は灰褐色～黒褐色で、器面の荒れもさほど目立たない。炉に使用された土器が廃棄されたものと考えられる。Pit1より二次調整のある剥片1点出土している。堆積土からは剥片12点、微小剥離痕のある剥片5点、二次調整のある剥片、碎片各3点、磨製石斧、敲磨器類各2点、石鏃、石錐各1点出土している。〔時期〕出土遺物から縄文時代中期末葉に帰属するものと考えられる。(斉藤)

第7号不明遺構(剥片集中遺構)〔SX-07〕(図63～65)

〔特徴〕基本層序第Ⅲ層中に剥片石器32点が直径18cm、深さ14cmの範囲にまとまった状態で出土した。剥片の多くは折り重なる状態で接しているが、北東側にまとまる4点の石器は主要剥離面が地面に直立する状態であった。出土した剥片石器はいずれも珪質頁岩を素材としており、剥片3点、微小剥離痕のある剥片29点で構成される。母岩としては15以下のグループに分類できる。そのうち、2組については接合関係を確認した。(斉藤)

第8号不明遺構〔SX-08〕(図65)

〔特徴〕遺物がほとんどみられない基本層序第Ⅴ層で土器片が直径40cmほどの範囲に集中して出土した。土坑の可能性を考慮してトレンチ調査をおこなったが、明瞭な掘り方を確認することはできなかった。土器44点(386.0g)はすべて同一個体と思われる。〔時期〕出土遺物から縄文時代早期(ムシリⅠ式)に帰属するものと考えられる。(斉藤)

第9号不明遺構〔SX-09〕(図65)

〔特徴〕基本層序第Ⅳ層上面でⅢ層のブロックを確認し、掘り下げたところ焼土(3層)がみられた。プランが不明瞭であったため周囲のⅣ層土を更に掘り下げたところピット1基を確認した。〔時期〕周辺より出土している遺物、検出層位から縄文時代中期末葉に帰属するものと考えられる。(斉藤)

第1号土器埋設炉〔SR-01〕(図66)

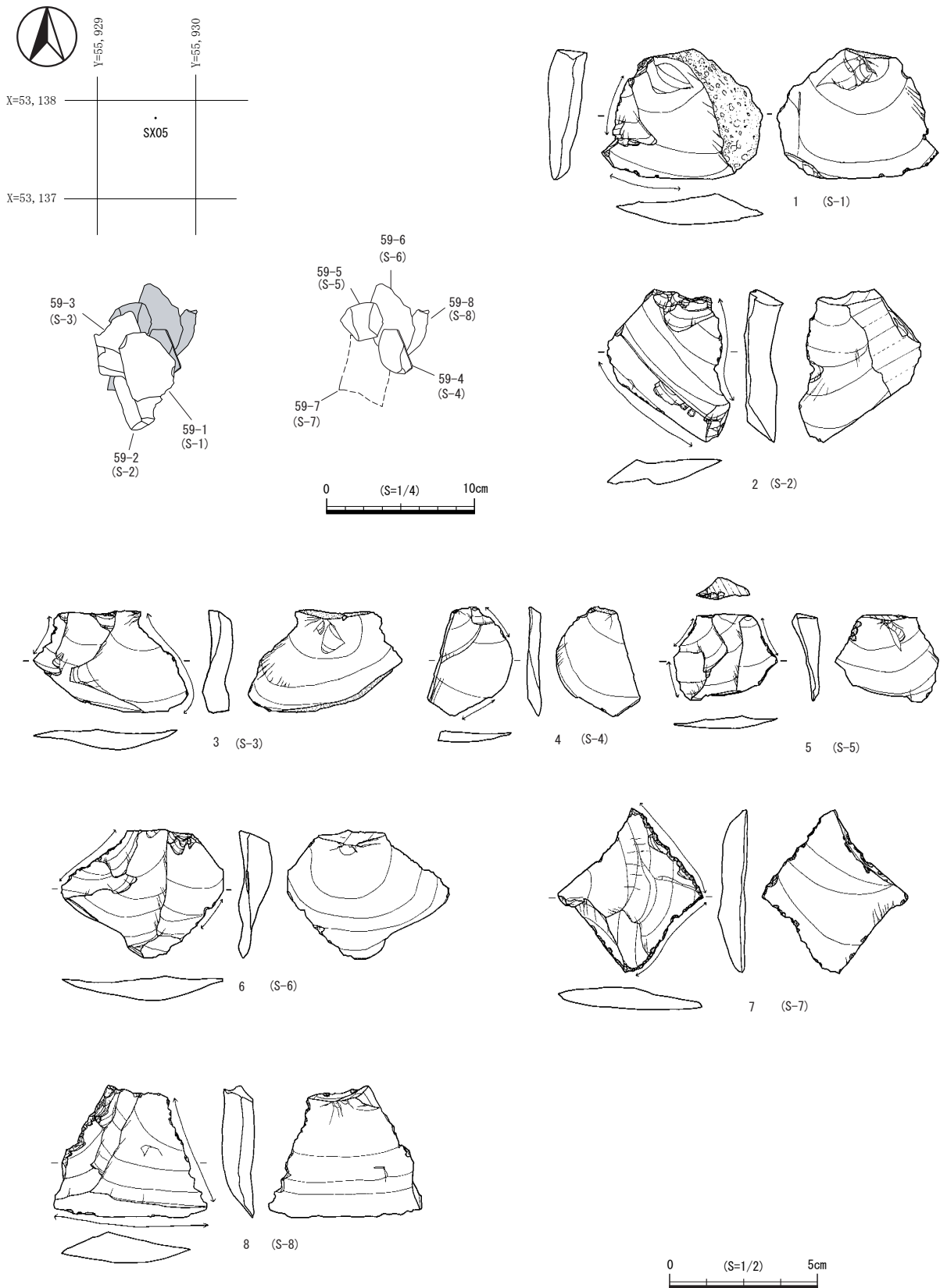
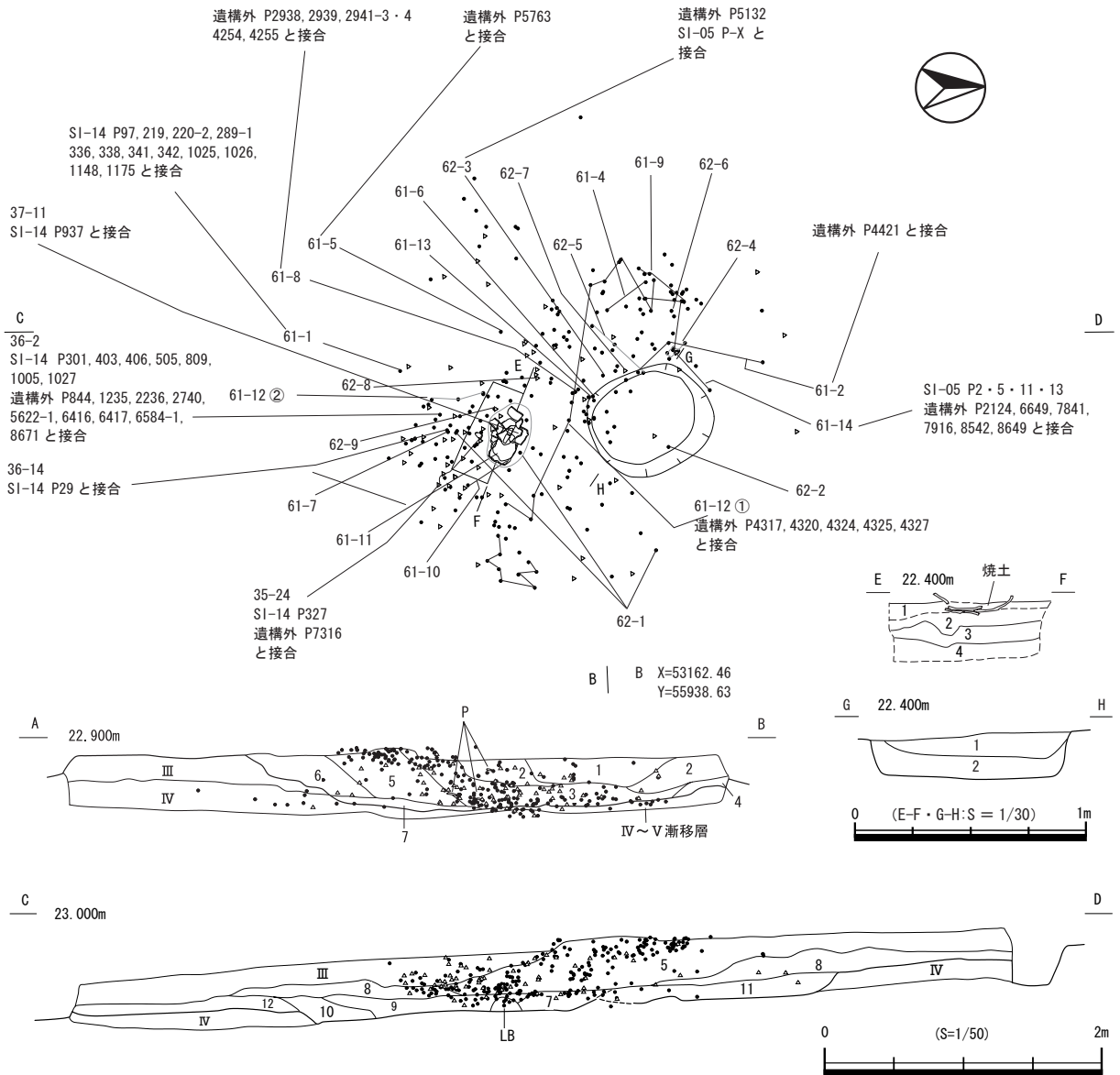


図 59 第 5 号不明遺構

A | A X=53162.45
Y=55933.57



A-B · C-D

- Ⅲ 層 10YR2/1 黒色砂質シルト 10YR5/6 黄褐色浮石 (φ 1 ~ 8mm) 5% 混入。硬い。中振浮石含む。
- Ⅳ 層 10YR2/1 黒色シルト 10YR7/4 にぶい黄橙色浮石 (φ 1 ~ 3mm) 1% 混入。粘性あり。
- 第 1 層 10YR2/2 黒褐色砂質シルト 10YR6/8 明黄褐色浮石 (φ 1 ~ 10mm) 10% 混入。硬い。φ 3mm 程度炭化物粒わずかに含む。粘性中。しまり中。中振浮石含む。
- 第 2 層 10YR2/1 黒色砂質シルト 10YR6/8 明黄褐色浮石 (φ 1 ~ 10mm) 10% 混入。硬い。φ 5mm 程度炭化物粒わずかに含む。粘性中。しまり中。中振浮石含む。1層よりも暗色。遺物多く含まれる。
- 第 3 層 10YR2/1 黒色砂質シルト 10YR5/6 黄褐色浮石 (φ 1 ~ 8mm) 5% 混入。炭化物 1% 混入。硬い。中振浮石含む。φ 1cm をこえる炭化物粒 10% 含む。炭化材含まれる。3層下部に遺物多く含まれる。
- 第 4 層 10YR2/2 黒褐色シルト 10YR6/8 明黄褐色浮石 (φ 1 ~ 5mm) 3% 混入。硬い。粘性中。しまり中。中振浮石含む。3層よりも暗色。

- 第 5 層 10YR2/1 黒色砂質シルト 10YR5/6 黄褐色浮石 (φ 1 ~ 10mm) 3% 混入。硬い。粘性中。しまり中。φ 1 ~ 10mm 炭化物わずかに含む。
- 第 6 層 10YR2/2 黒褐色シルト 10YR5/6 黄褐色浮石 (φ 1 ~ 15mm) 3% 混入。硬い。
- 第 7 層 10YR2/1 黒色シルト 10YR5/6 黄褐色浮石 (φ 1 ~ 5mm) 1% 混入。炭化物混入。粘性あり。
- 第 8 層 10YR2/1 黒色シルト 10YR5/6 黄褐色浮石 (φ 1 ~ 3mm) 3% 混入。硬い。
- 第 9 層 10YR1.7/1 黒色シルト 10YR7/4 にぶい黄橙色浮石 (φ 1 ~ 3mm) 1% 混入。粘性強。しまり中。中振浮石含む。
- 第 10 層 10YR1.7/1 黒色シルト 10YR5/6 黄褐色浮石 (φ 1 ~ 2mm) 1% 混入。粘性あり。φ 1mm 程度の焼土粒含む。中振浮石含む。粘性強。しまり中。
- 第 11 層 10YR1.7/1 黒色シルト φ 1mm の浮石微量混入。粘性あり。粘性強。しまり中。
- 第 12 層 10YR1.7/1 黒色シルト 10YR7/4 にぶい黄橙色浮石 (φ 1 ~ 3mm) 2% 混入。粘性あり。φ 1mm 程度の焼土粒含む。中振浮石含む。粘性中。しまり中。

E-F

- 第 1 層 10YR2/2 黒色シルト 5YR4/6 赤褐色焼土ブロック状に混ざる。φ 3mm 程度の炭化物わずかに含む。粘性中。しまり中。
- 第 2 層 10YR3/1 黒褐色砂質シルト φ 5mm 程度の炭化物がわずかに含まれる。粘性中。しまり中。
- 第 3 層 10YR2/3 黒褐色砂質シルト 粘性中。しまり中。Ⅳ ~ V 層漸移層。
- 第 4 層 10YR3/4 暗褐色粘土 粘性中。しまり中。地山V層。

G-H

- 第 1 層 10YR1.7/1 黒色粘質シルト 10YR4/6 褐色浮石粒 (φ 5mm 程度) 微量含む。土器 (ムシリI式) 含む。粘性強。しまり弱。
- 第 2 層 10YR2/3 黒褐色シルト 10YR2/1 黒色シルト。10YR4/4 褐色シルト斑状に混ざる。粘性中。しまり中。

図 60 第 6 号不明遺構 (1)



図 61 第 6 号不明遺構 (2)

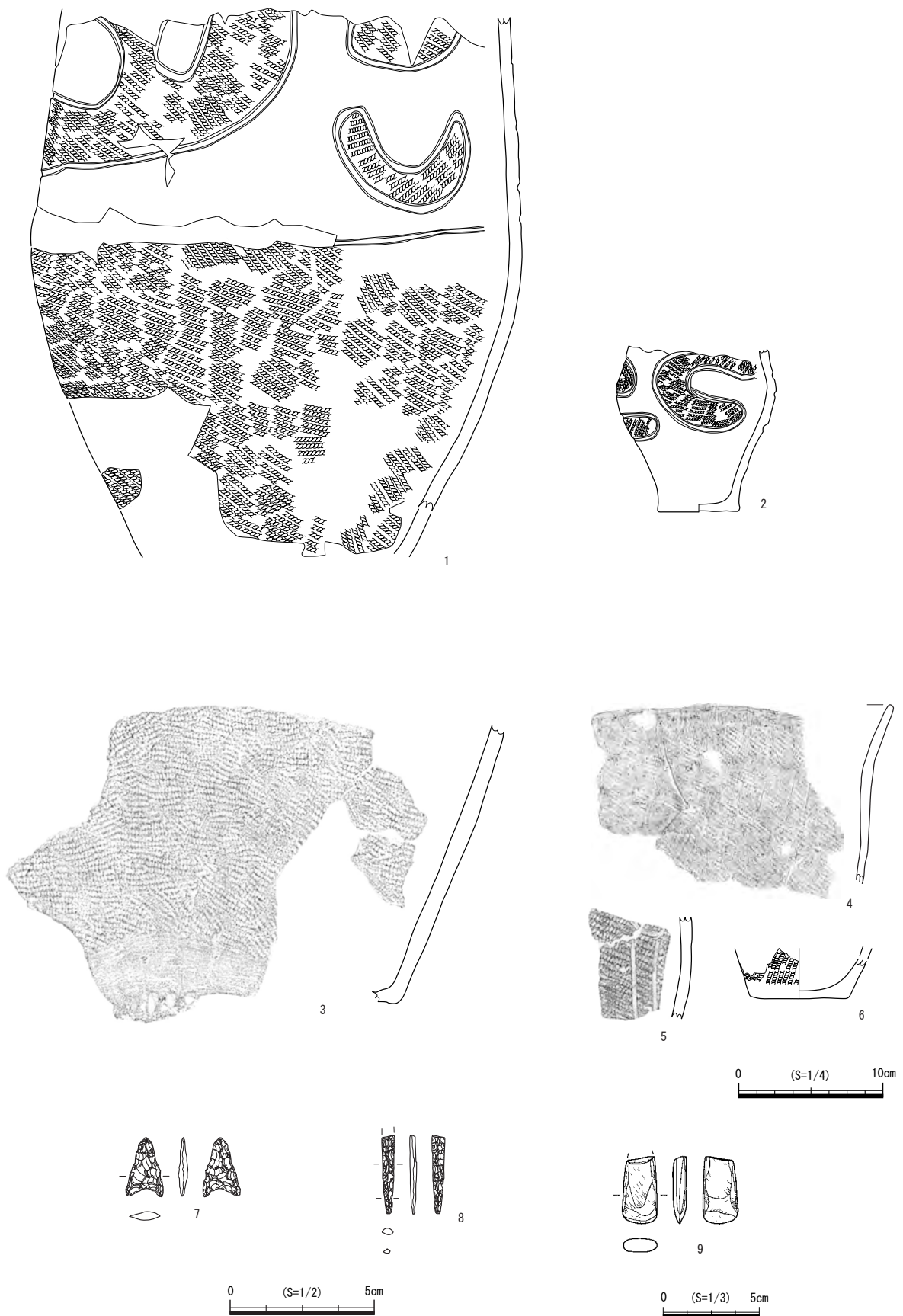


图 62 第 6 号不明遺構 (3)

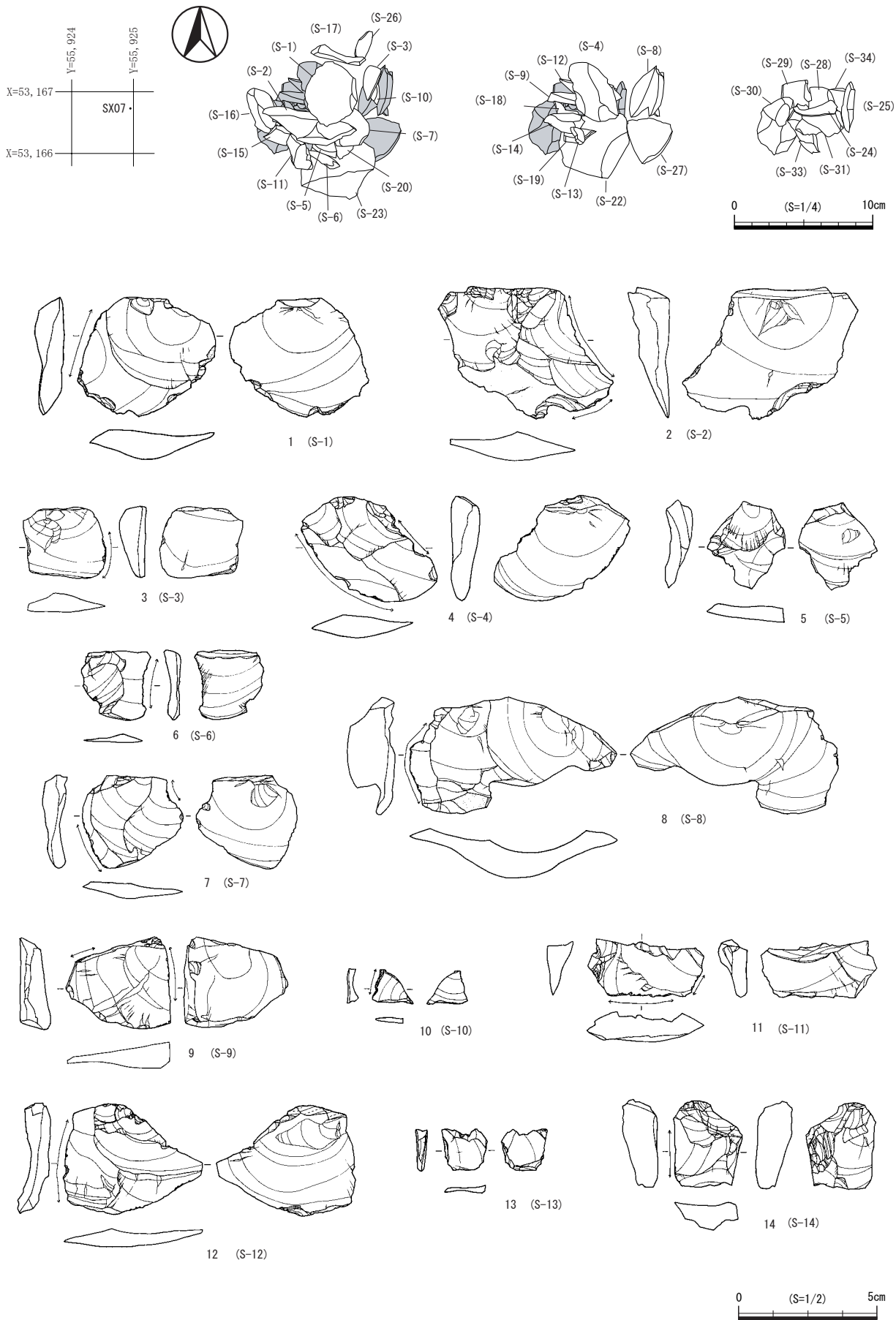


図 63 第 7 号不明遺構 (1)

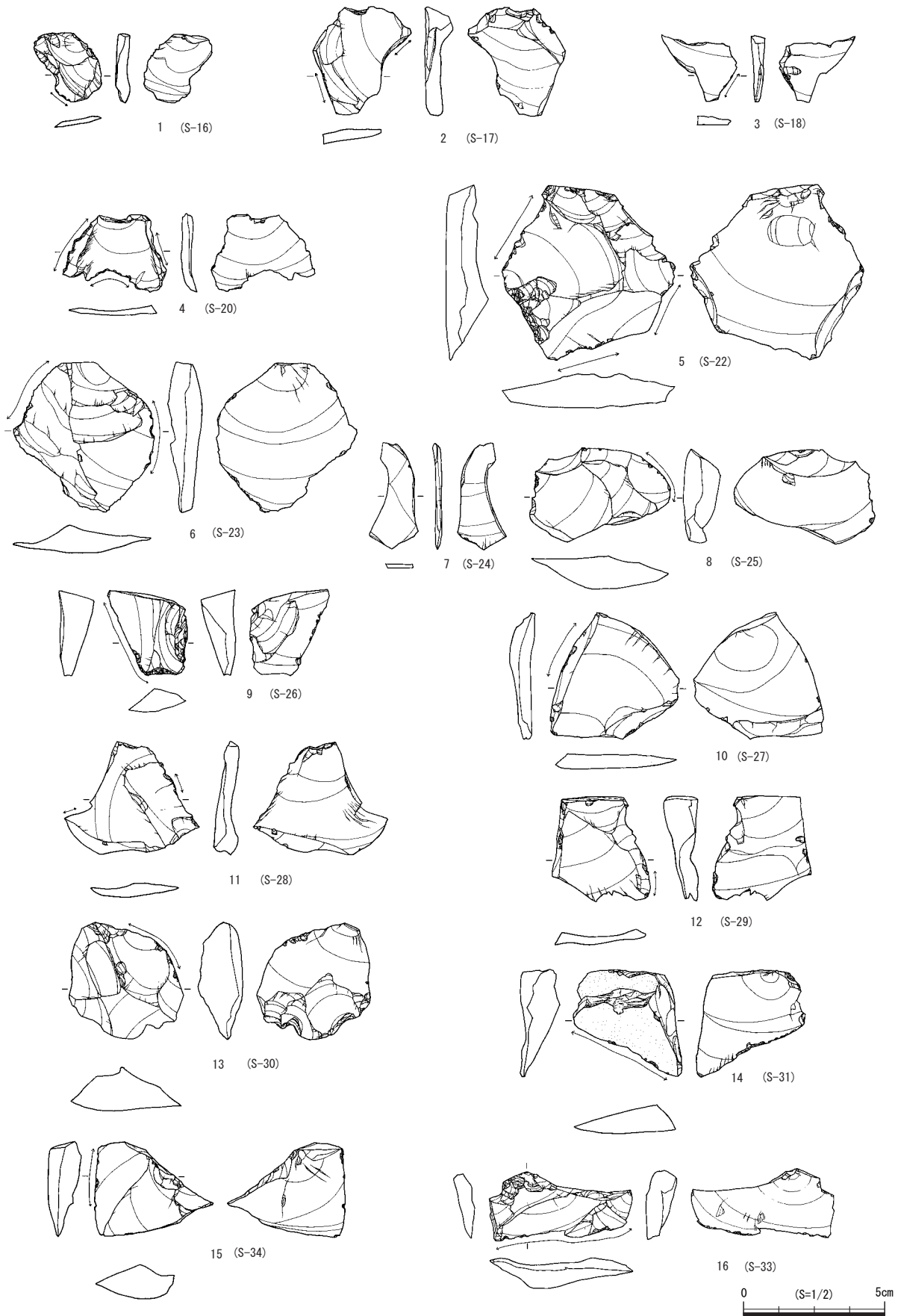
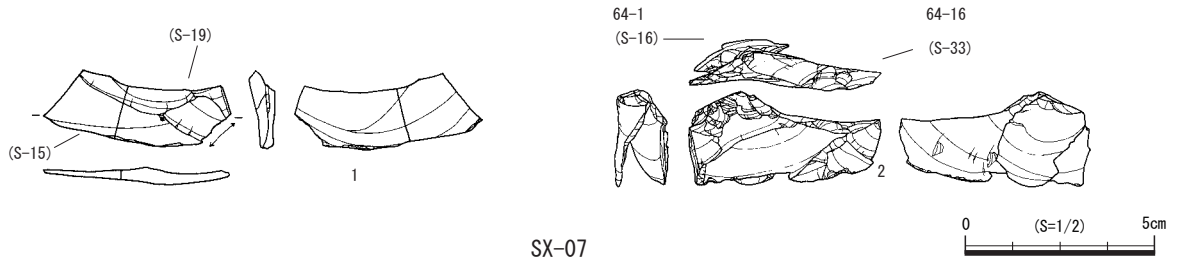
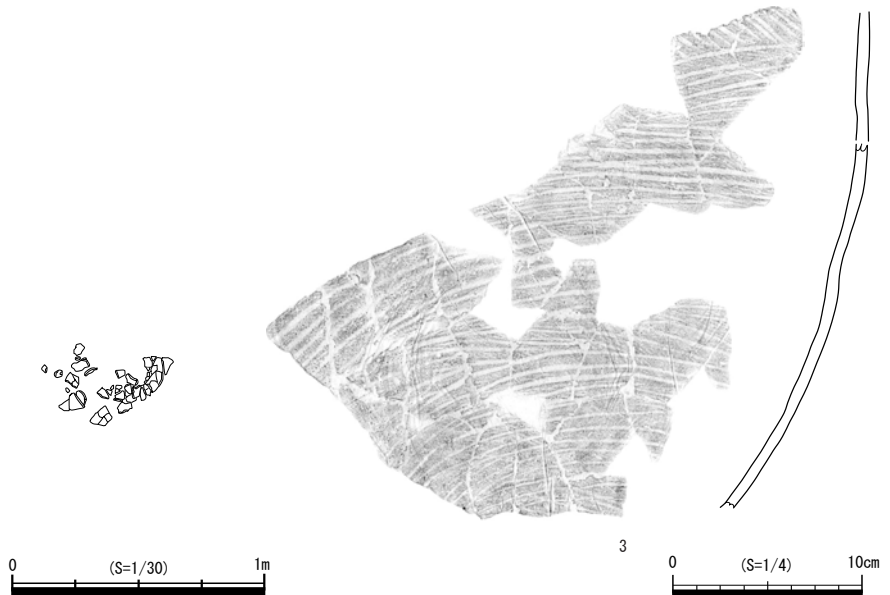
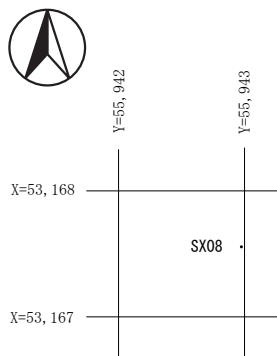


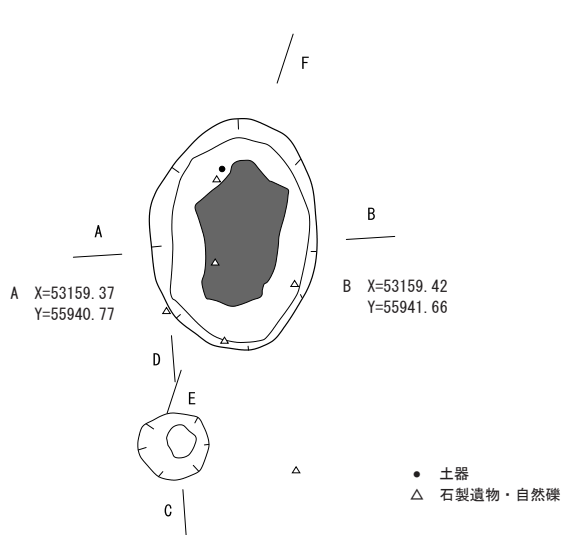
图 64 第 7 号不明遺構 (2)



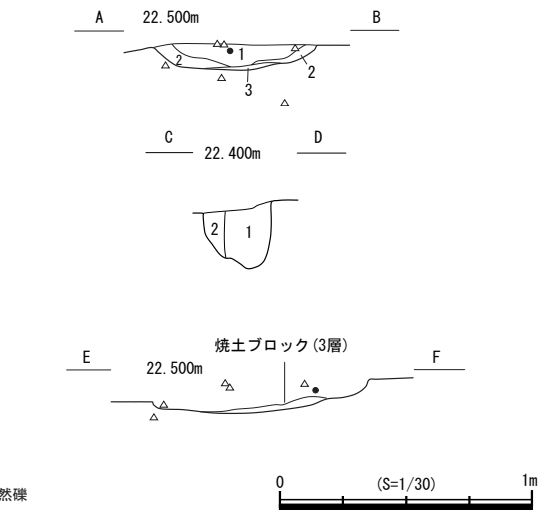
SX-07



SX-08



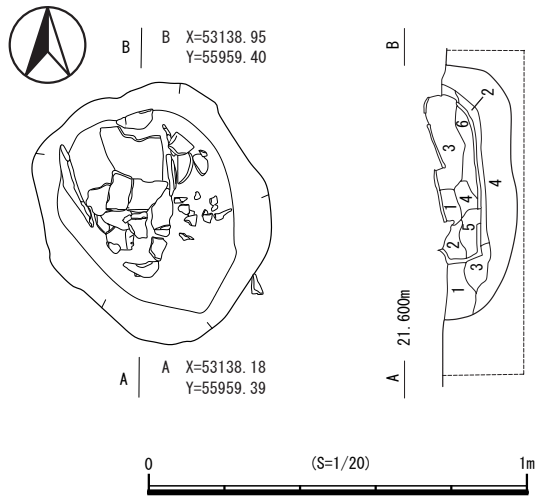
A-B
 第1層 10YR2/1 黒色シルト 10YR5/6 黄褐色浮石 (φ1~3mm) 2% 混入。
 第2層 10YR2/2 黒褐色シルト 10YR5/6 黄褐色浮石 (φ1~3mm) 1% 混入。
 第3層 5YR4/8 赤褐色焼土 炭化物わずかに含む。斑状。しまり強。粘性なし。



C-D
 第1層 10YR2/1 黒色シルト 硬い。
 第2層 10YR2/2 黒褐色シルト 硬い。

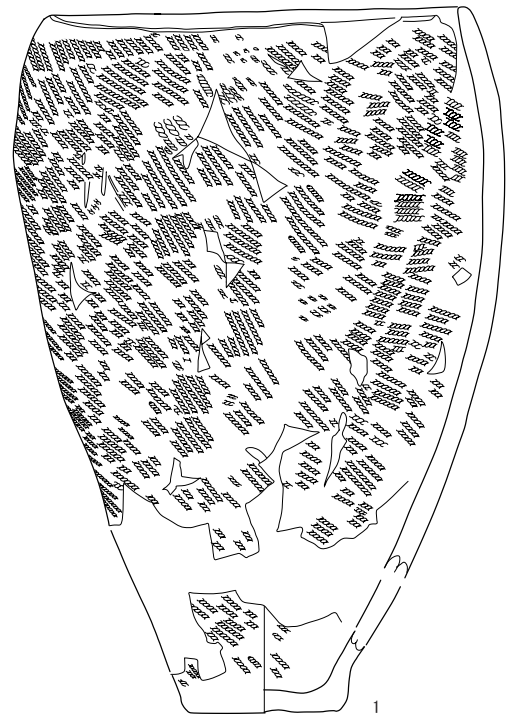
SX-09

図 65 第7号不明遺構 (3)・第8号不明遺構・第9号不明遺構

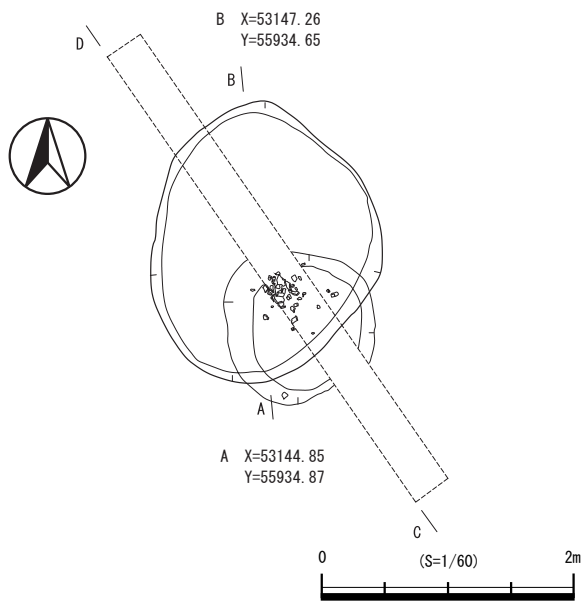


- 埋設土器内
- 第1層 10YR2/2 黒褐色シルト 10YR5/8 黄褐色の焼土粒 30% 混入。
 - 第2層 10YR1.7/1 黒色シルト 10YR5/8 黄褐色の焼土粒少量混入。
 - 第3層 10YR1.7/1 黒色シルト 10YR6/8 明黄褐色の浮石 (φ 1 ~ 8mm) 2% 混入。焼土粒微量混入。
 - 第4層 10YR5/8 黄褐色焼土層 10YR2/1 黒色のシルト少量混入。炭化物少量混入。
 - 第5層 10YR2/2 黒褐色シルト 10YR6/8 明黄褐色浮石 (φ 1 ~ 3mm) 2% 混入。焼土微量混入。
 - 第6層 10YR2/2 黒褐色シルト 10YR5/8 黄褐色の焼土粒 3% 混入。

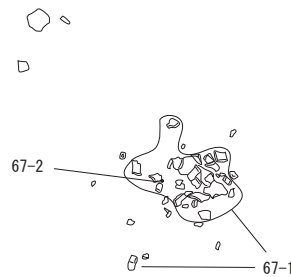
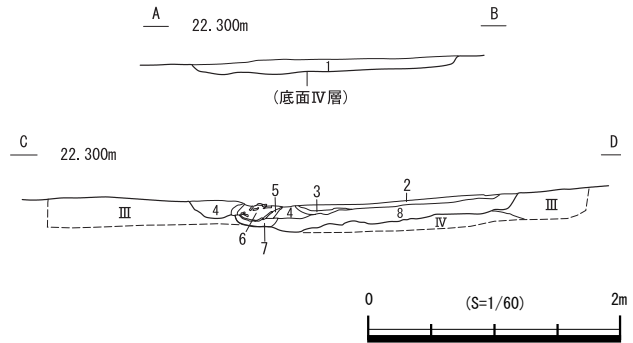
- 掘り方
- 第1層 10YR1.7/1 黒色シルト 10YR6/8 明黄褐色浮石 (φ 1 ~ 3mm) 1% 未満混入。
 - 第2層 10YR2/2 黒褐色シルト 10YR5/8 黄褐色焼土粒 (φ 1 ~ 3mm) 1% 混入。
 - 第3層 10YR2/2 黒褐色シルト 10YR5/8 黄褐色焼土粒 10% 混入。
 - 第4層 10YR1.7/1 黒色シルト 10YR6/8 明黄褐色浮石 (φ 1 ~ 4mm) 1% 混入。炭化物わずかに含む。



第1号土器埋設炉 (SR-01)



- A-B・C-D
- 第1層 10YR1.7/1 黒色シルト 中礫浮石起源と思われる黄褐色微細粒子含む。Ⅲ層上部相当。
 - 第2層 10YR1.7/1 黒色シルト
 - 第3層 10YR2/1 黒色シルト
 - 第4層 10YR2/1 黒色シルト
 - 第5層 10YR4/4 褐色シルト 弱い焼土。
 - 第6層 10YR3/1 黒褐色と 3/3 暗褐色シルト 焼土 (φ 1 ~ 5mm) 1% 混入。ただし、土器内面に明確な焼土面はなく土器内も焼けていない。
 - 第7層 10YR2/2 黒褐色シルト 焼土粒 (φ 1 ~ 10mm) 1% 混入。第5層よりはつきりしている。
 - 第8層 10YR1.7/1 黒色シルト



土器検出状況

第2号土器埋設炉 (SI-13)

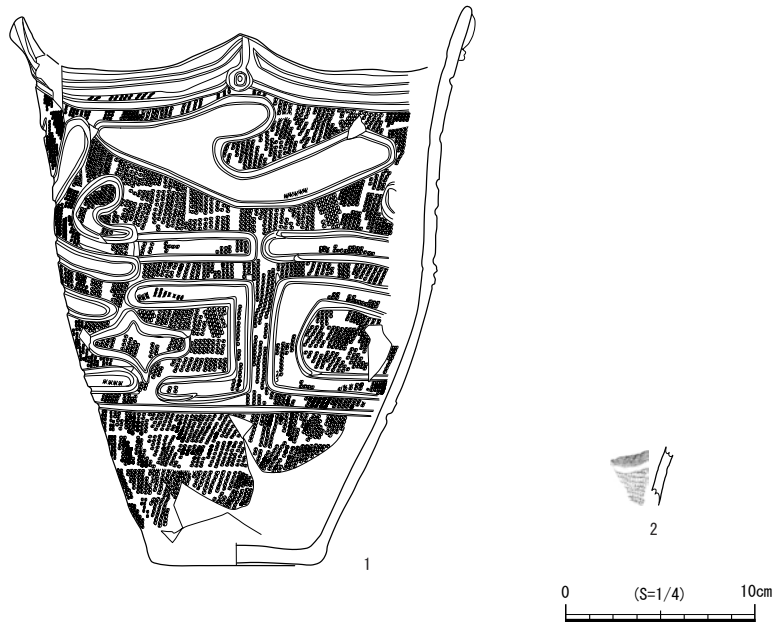
図66 第1号土器埋設炉・第2号土器埋設炉 (1)

[特徴] 基本層序第Ⅳ層で粗製土器の深鉢が横倒しの状態で据えられていた。土器の状態はやや口縁部が斜め上位に据えられており、土器内部には厚さ5cmほどの焼土が堆積していた。この焼土はブロック状で黒色土と斑状に混ざっているが、焼土面の状態は水平な面をなしており、さらに土器に接する掘方埋土が焼土を形成していることなどから、土器内部で火が焚かれた可能性が考えられる。土器内面は、堀方内に設置された状態の上部が焼けていることからこの可能性は支持される。[時期] 埋設土器より縄文時代中期末葉に帰属するものと考えられる。(斉藤)

第2号土器埋設炉〔SI-13〕(図66)

[検出状況等] 第Ⅲ層を掘り下げ中に、径約2.2mの円形の落ち込みを検出し、SK-07とした。しかし数cm掘り下げた時点で落ち込みは認識できなくなり、遺構としてとらえることは困難であった。そのため、更に第Ⅲ層を掘削した。これより約30cm下位で焼土と横位に埋設された土器を検出した。周辺にピット状のシミが黒色土中に認識されたため、SI-13と命名し精査をおこなったが、ピットは確認できず、床面も検出できなかった。従って、積極的に住居跡としてとらえることはできず、整理段階で土器埋設炉とした。ただし、遺物の注記等はSI-13を使用しているので、資料実見の際などは注意されたい。本遺構周辺の遺物の出土状況を見ると、遺物の分布が薄く上位から掘り込みが存在したと考えられ、先に述べた落ち込みは本遺構の一部に堆積した土層であった可能性が高い。

[特徴] 土器は斜位に埋設されており、土器下および底部周辺には焼土が形成されていた。土器内部に焼土は認められなかったが、熱のため器内面が荒れており、土器内で火を使用したものと考えられる。いわゆる斜位土器埋設炉である。[出土遺物] 炉体は縄文時代後期初頭の小型の深鉢である。剥



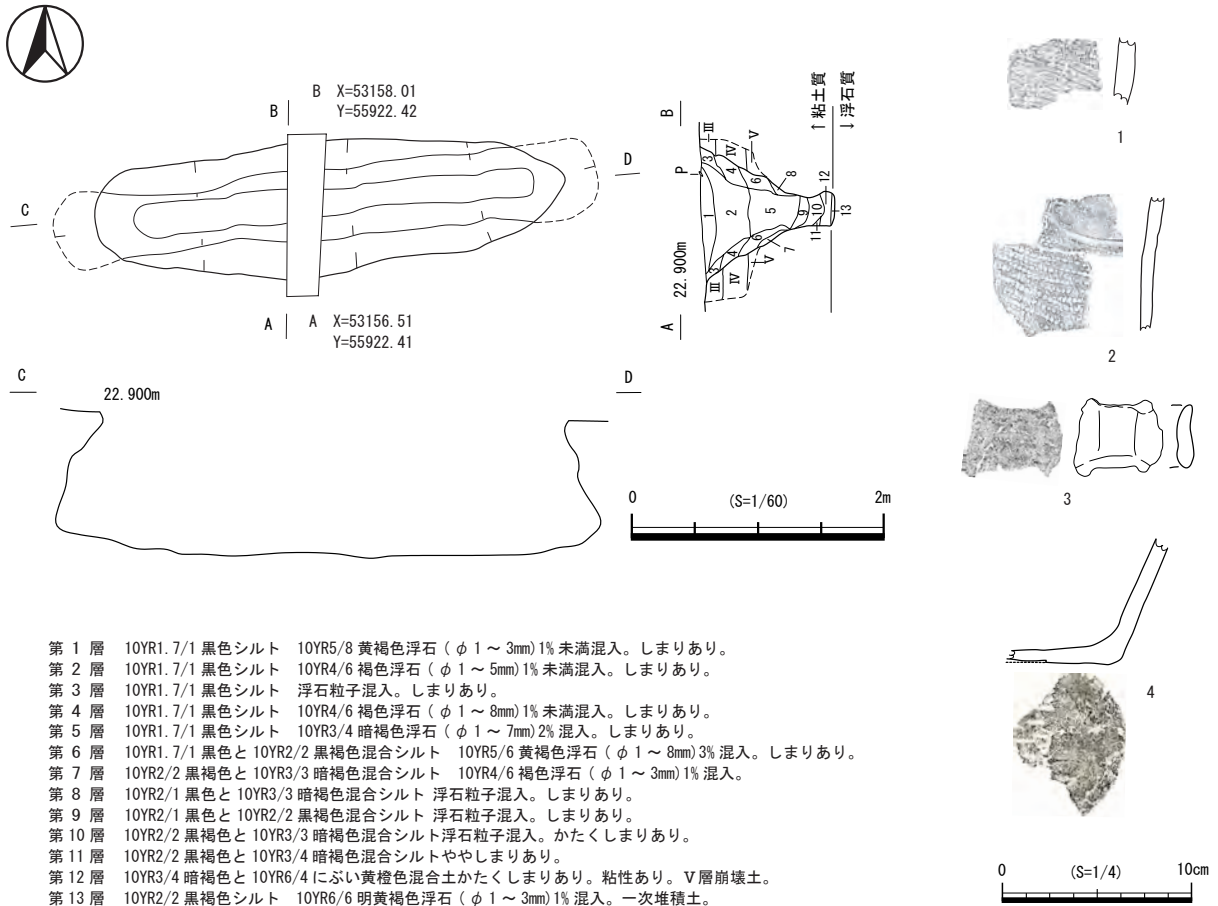
第2号土器埋設炉出土遺物

図67 第2号土器埋設炉(2)

片が1点出土した。(中村)

第1号溝状土坑〔SV-01〕(図68)

〔堆積土〕底面から第9層にかけては地山に由来する暗褐色ロームの崩壊土が堆積している。黒色土の薄層と、ローム土に漸移的な色調変化がみられることから自然堆積によって埋積が進行したものと考えられる。〔掘方〕土坑両端の平面形態は円形を呈しており、長軸方向の断面形状は底面付近で袋状に広がる。〔出土遺物〕土器が32点(388.4g)出土しているが、すべて周辺包含層からの混入と考えられる。〔時期〕検出層位から縄文時代前期後半以降に帰属するものと考えられる。(斉藤)



SV-01
 図68 第1号溝状土坑

ピット群(図69)

ⅡK~ⅡP-106~112の24×20mの範囲でピット群が検出された。ピットの平面形は円形ないしは楕円形で、堆積土には十和田b降下軽石を含んでいる。従って、掘り込み面は第Ⅱ層中と考えられ、本来の深さは20cm以上になると思われる。詳細な時期は不明だが、十和田b降下軽石を堆積土に含むことから弥生時代かそれ以降の所産と考えられる。(中村)

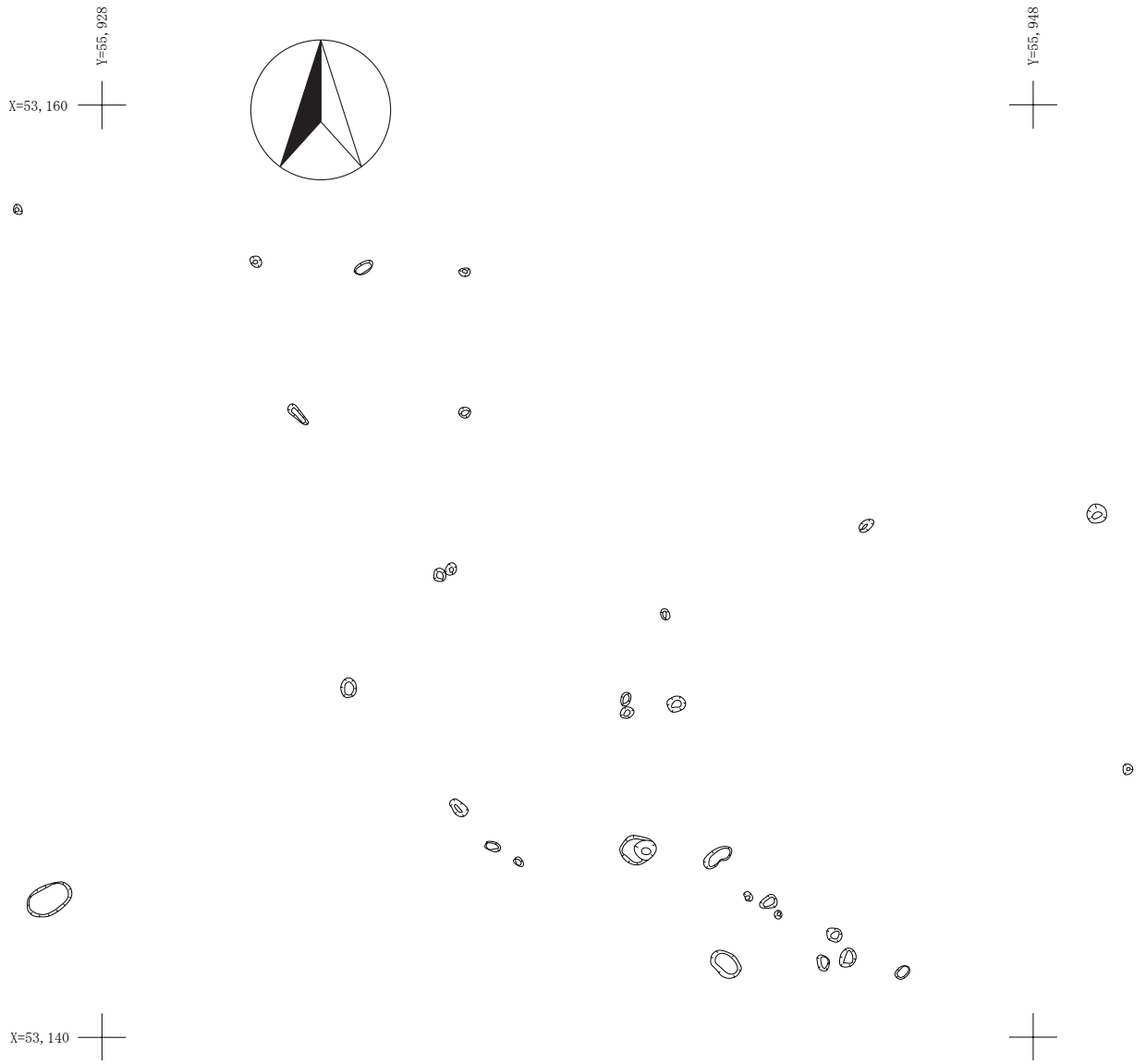


図 69 ピット群

第4章 遺構外出土遺物

第1節 土器・土製品

遺構外からは9,350点(143,140.8g、うち不明14)の土器が出土した。層序毎の内訳は、第Ⅱ層から942点(13,862.4g)、第Ⅲ層から7,436点(119,240.7g、うち不明10)、第Ⅳ層から925点(9,556.8g、うち不明4)、第Ⅴ層から29点(349.9g)である。調査区内は畑地造成のため削平されていたこともあって、第Ⅱ層・第Ⅲ層の分布は限定されたものであった。しかし、土器の全出土量のおよそ8割が第Ⅲ層から出土している事実から、第Ⅲ層が主要な包含層であることがわかる。第Ⅲ層出土土器はそのほとんどが縄文時代中期末葉のものである。第Ⅳ層・第Ⅴ層からは縄文時代早期・前期前葉の土器が出土した。以下に遺物の分類を述べる。

1 縄文土器

第Ⅰ群土器(図70-1～6)

白浜・小舟渡平式土器群に比定されるもの。

第1類(図70-1) 口縁部に爪形刺突と沈線が施されるもの。

1は、口縁部に縦位の爪形刺突と横位の爪形刺突を各1列、間隔を開けて2段巡らす。この範囲に鋸歯状沈線が施される。口唇部は上面から刻まれている。内面は口縁部に条幅0.5mmの条痕調整の痕跡を残すが、それ以下は縦方向のミガキである。

第2類(図70-2～4) 口縁部に爪形刺突文が施されるもの。

2～4は、口縁部に爪形文と貝殻復縁刺突が施される。口唇部は前面に刻みが施されている。

第3類(図70-5・6) 口縁部に爪形刺突文のないもの。

いずれも条痕調整である。5は浅い条痕調整が施される。砂粒・粘土の移動痕が多く、条の幅は約2mmである。口唇部は上面を刻んでいる。6は条幅・条間とも1.5mmで、溝底は平坦である。

第Ⅱ群土器(図70-7～36)

物見台式に比定されるもの。ヘラ描きの沈線と貝殻腹縁刺突文により文様が施される。貝殻腹縁刺突文は沈線と平行に施される場合と、沈線上に施される場合がある。文様の屈曲点に円形の刺突文が施されるものもある(24、27～29、31・32・34)。文様モチーフは小片が多いため全容を知り得ないものが多いが、口縁部の平行沈線間に弧線文を向かい合わせに配したもの(7)、複合鋸歯文風のもの(27～30、32・33)などがある。27～29・32は同一個体と思われ、内面に条幅・条間とも0.5mm以下のハケメ状の調整痕が認められる。32内面には工具が静止した痕跡が認められ、工具の形状は幅10mmの板状工具と考えられる。

第Ⅲ群土器(図70-37～43、図71)

ムシリⅠ式に比定されるもの。

第1類(図70-37～43、図71-1～4)

微隆起線で幾何学的な文様を描くもの。水平な微隆起線間を斜位や縦位の平行な微隆起線で区画し、区画内に梯子状に微隆起線を貼り付ける。微隆起線上には絡条体圧痕が施されるもの（図71-3・4）もある。

第2類（図71-5）

口唇部下に二条の微隆起線を巡らし、微隆起線上に縄文を回転施文するもの。浅く、条幅・条間とも不揃いな条痕が施される。

第3類（図71-6～16）

条痕調整が施されるもの。条幅3～6mmのものが大多数で、条間と条幅は同程度である。断面はやや丸みを帯びる。内面に同様の条痕が施されるものがあるが、外面とは条間・条幅とも異なるものがある。図71-16は、内外面とも浅く条幅・条間とも不揃いな工具による条痕が施される。

第4類（図71-17～20）

条痕により菱形や円形の幾何学的なモチーフを描くもの。条痕の工具は第3類と同様である。

第5類（図71-21～28）

外面に絡条体圧痕を持つもの。絡条体圧痕を横位・斜位に施している。間隔は5mm～10mmである。内面には条幅・条間とも0.5mm～1mmの条痕が施されるものが多い。

第6類（図71-29～32）

深い沈線を施すもの。沈線は幅・深さとも2.5mmで、それぞれの条は独立した棒状工具で引かれていると思われる。

第7類（図71-33・34）

無文のもの。薄手で、丁寧にナデられている。34は乳房状尖底の底部である。外面の調整は上記の1～6類とは異なるものの、胎土は類似し、本群に伴うものと考えられる。

第IV群土器（図72、図73-1～12）

縄文時代前期前葉～中葉に属するもの。

第1類（図72-1～5・7・8・10・11・26）

1～3は同一個体と思われる。口唇部上面にヘラ状工具による刻みが施される。口唇部下約15mmを無文帯とし、横位のナデ調整痕が残る。無文帯以下には0段多条RL原体の閉じた末端を上に向けて横位回転施文する。内面はヘラ状工具による横位のナデ調整が施され、砂粒の移動痕が残る。胎土・焼成とも良好で、堅緻である。胎土には繊維を含んでいる。

第2類（図72-12・14・15・17～22、24・25、73-2～5）

斜縄文が施されるもの。口唇部はナデられているが、口縁部は全体に不整な小波状の様相を呈している。第1類に比べると軟質で、繊維が目立つ。

第3類（図72-16）

結節回転文が施されるもの。LR縄文施文後、結節回転文が施される。口縁部は第2類と同様である。胎土には繊維を含み、やや軟質である。類例は和野前山遺跡第VIII群土器に見られる。

第4類（図72-6・9・13・29）

結束第1種羽状縄文を施すもの。口縁部は第2類・第3類と同様である。9は原体の上下を変

えて施文し、文様が菱形を呈する。29は胴部上半に0段多条のRL縄文を横位回転施文し、胴部下半に結束第1種羽状縄文を施文する。底部は尖底である。胎土には繊維を含みやや軟質である。

第5類(図73-1)

押し引き沈線が施されるもの。胴部には1.2cmの幅で縄文が4段施されている。早稲田6類b(佐藤・二本柳・角鹿 1960)に相当する。

第6類(図72-23・30)

口縁部から胴部に単軸絡条体1類を施文するもの。器形・調整、胎土の点では第2類～第4類と同様である。

第7類(図72-28)

口縁部～胴部上半に組紐の回転文、胴部下半にLR縄文を回転させるもの。

第8類(図73-7・8)

底部が上げ底で、底面に縄文が施文されるもの。胴部には回転縄文が施される。7は、付加条またはLR直前段多条原体を横位回転する。文様は底部付近まで施される。器面の一部に、縄文施文後、器面上位から移動した粘土が覆い被さり、その上に更に縄文が施文された状況が観察される。粘土が柔らかい状態で施文したものと思われる。内面には条幅2.5mm、条間1～1.5mmの条痕調整が残る。3～4条一単位である。底面は外面と同じ原体が回転施文される。胎土は繊維を含むが第IV群第1類～第7類と比較すると少ない。

第9類(図73-9～12)

円い堅い繊維により結節回転文が施されるもの。内面は平滑に調整される。繊維を微量含んでいるが、第IV群土器の中ではもっとも少なく硬質である。

第10類(図41-8) 円筒下層d式に相当するもの。

第V群土器(図73-13～21)

縄文時代中期前葉～中葉に比定されるもの。本群の大部分は図示した。13から15は口縁部に縄文原体の側面圧痕による平行線文・鋸歯文などを施す。円筒上層a式である。17・18は口縁部文様帯下端が2条の隆帯で区切られる。口縁部文様帯には隆帯と刺突が施される。円筒上層c式である。20・21は口縁部文様帯に素文の隆帯を施すもので、円筒上層d式である。

第VI群土器(図74-1・2)

縄文時代中期大木8b式・榎林式に比定されるもの。図74-1はRLR縄文施文後、隆沈線による渦巻き文を施文する。口縁部は凹線上に無文部が形成される。図74-2は口縁部が肥厚し、波頂部下に内外面とも凹点が施される。

第VII群土器(図74-3～16)

縄文時代中期大木9式・最花式に比定されるもの。

第1類(図74-5・6)

磨消縄文により逆U字縄文が施されるもの。沈線はA1⁽¹⁾タイプである。大木9式に比定される。

第2類(図74-3・4・7・8・10～12・16)

頸部に列点が施され、口縁部は無文である。胴部は縄文地紋に垂下する沈線文が施される。沈線はCタイプである。最花式に比定される。

第3類(図74-9・14)

口縁部に円形刺突文を施すもの。胴部に単軸絡条体1類回転文が施される。

第4類(図74-13・15)

口縁部を折り返し、無文部とする、あるいはナデによって折り返し口縁風の効果を呈するもの。

第Ⅷ群土器(図74-17～26、図75、図76-1～8)

縄文時代中期大木10式に比定されるもの。本遺跡で時期比定できる遺物の大半を占める。広義の磨消縄文により曲線的な文様を描くものが大半であるが、遺物のモチーフの全容がわかるものは少ない。用いられる沈線はAタイプ⁽¹⁾のみである。ここでは、遺構出土遺物の中で遺構外出土遺物に見られないタイプも含めて、手法により分類する。なお、磨消縄文の定義は第6章第1節を参照されたい。

第1類(図74-17～26、図75-1～22・27、図76-4～8)

広義の磨消縄文により曲線的な文様を描くもの。

第2類(図75-23～26・28)

広義の磨り消し縄文(第6章第1節の属性の分類参照)によって曲線的な文様を描くが、稜沈線を用いるもの。図75-17～22は、沈線による区画内に円形刺突文を充填する。

第3類(図61-12)

隆起線を用い曲線的な文様を描くもの。

第4類(図37-1、48-4)

広義の磨消縄文を用いて平行化した文様を描くもの。

第5類(図19-11)

隆起線を用いて横方向に展開する文様を描くもの。

第6類(図76-1～3)

口頸部に半円形の刺突を施すもの。

第Ⅸ群土器(図76-9～21、図77)

第Ⅶ群～第Ⅷ群に伴うと考えられるもの。第Ⅶ群と第Ⅷ群の出土量の比率から考えて、大半は第Ⅷ群に伴うものであろう。

第1類(図76-9～21、図77-1～4)

胴部に縄文を施す深鉢。口縁部が直立するもの(図76-9・12)、やや内湾気味のもの(同10・11・13)、やや外反するもの(同16～18、21)、やや内傾するもの(19～20)がある。用いられる縄文は単節で、回転方向はほとんどが縦位回転である。

第2類(図19-14、49-9)

無文の土器。

第3類(図77-5～9)

小型の土器。

底部（図 77-10・11）

2点図示した。接合面が良好な状態で観察される。底部円盤の外周に、指押さえの痕跡が顕著に残る。底部資料にはこのような事例が多く認められる。

第X群土器（図 78、図 79-1～9）

縄文時代後期初頭から前葉のもの。用いられる沈線はA1である。

第1類（図 78-12）

頸部・胴部に横位・縦位の隆帯をめぐらせ、隆帯上に棒状工具による刺突を施すもの。牛ヶ沢Ⅲ群に比定される。

第2類（図 78-1～11・13、図 79-1～3）

沈線により渦巻きや三角形を組み合わせた入り組み文を描くもの。弥栄平式に相当する。

第3類（図 79-4～9） 十腰内Ⅰ式に比定されるもの。

第XⅠ群土器（79-10～17）

縄文時代晩期のも。79-12・15は眼鏡状隆帯を持つ浅鉢である。16は口縁部に平行沈線をめぐらし、下端の平行沈線に粘土粒を貼り付ける。粘土粒上には沈線が施される。胴部は縦位の条痕が施される。これらは大洞C2式に比定されると考えられる。

各群土器の出土傾向は以下の通りである。

第Ⅰ群土器 SI-01に近い調査区北部に多い。

第Ⅱ群土器 調査区南部の第Ⅴ層に集中する。

第Ⅲ群土器 谷の全面から出土する。谷の西側からは出土しない。谷の東側の尾根上からも出土する。

第Ⅳ群土器 谷から多く出土するが。谷の西側、調査区西端からも出土する。谷の東側にはほとんど分布しない。

第Ⅴ群土器 谷の南部からごく少量出土する。

第Ⅵ群土器 調査区北西部の谷とSK-15・16周辺に集中する。

第Ⅶ群土器 Ⅱ0～ⅡP-102～104グリッドにのみ見られる。

第Ⅷ・Ⅸ群 削平を受けて表土直下で第Ⅳ～Ⅴ層が露出する区域をのぞきほぼ調査区全域から出土する。掘り込みの確認できた遺構上に集中する傾向があるが、それ以外にもSN-16付近、ⅡG～ⅡJ-109-114、ⅡN～ⅡO-102～105に集中地点が見られる。SN-16付近の集中は、SN-16が本来掘方を持つ遺構の一部であった可能性を示唆する。後二者は、遺構外にも遺物の廃棄地点があったものと解釈できる可能性がある。

第X群土器 第1・2類は谷中央部から南部にかけてのⅡH～ⅡM-104～114から出土した。

第3類はⅡK～ⅡM-110～112グリッドから少量、ⅡC～ⅡD-122にやや集中して出土した。

第XⅠ群土器 谷中央部、ⅡJ～ⅡN-103～111から出土する。

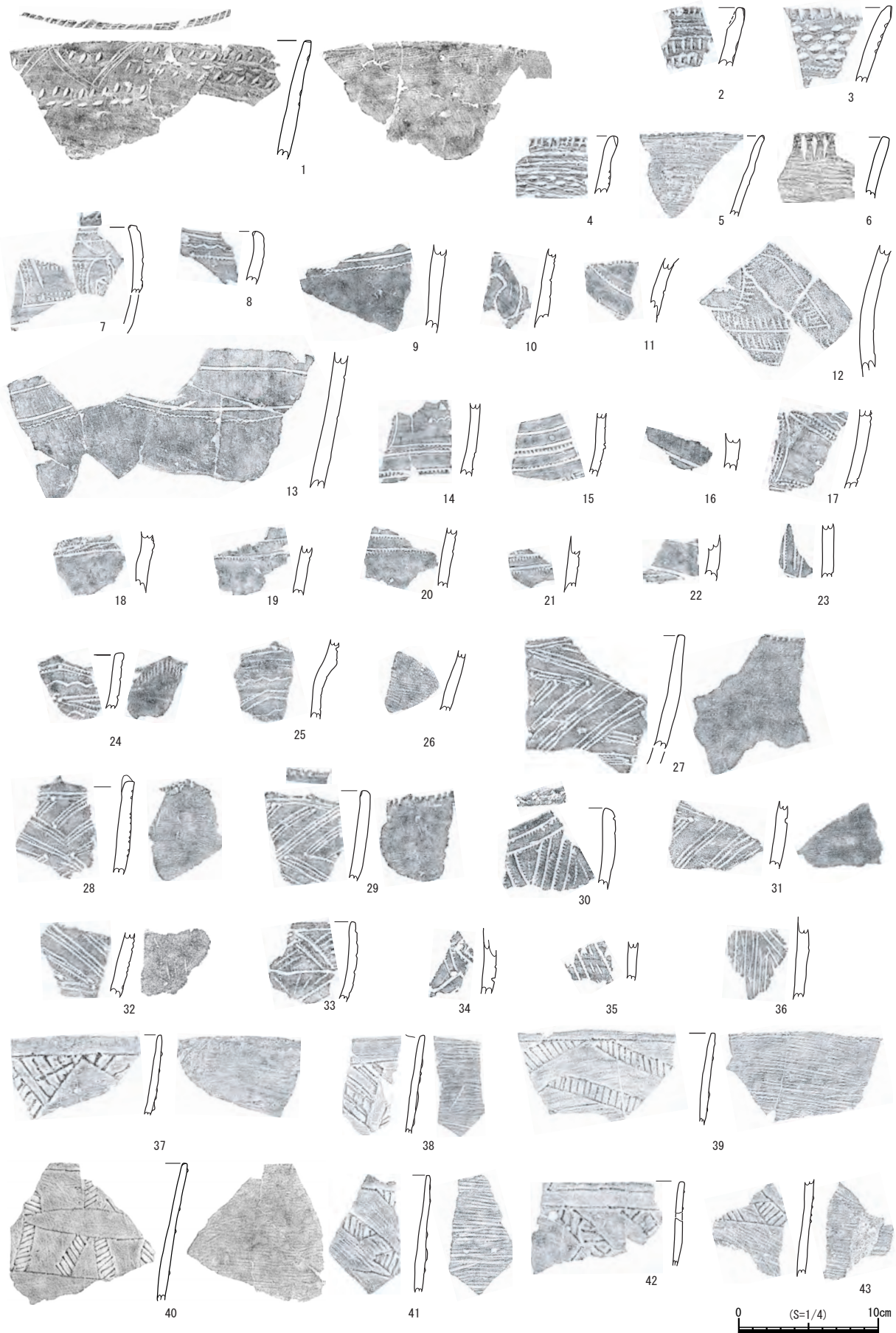


图 70 遺構外出土土器 (1)

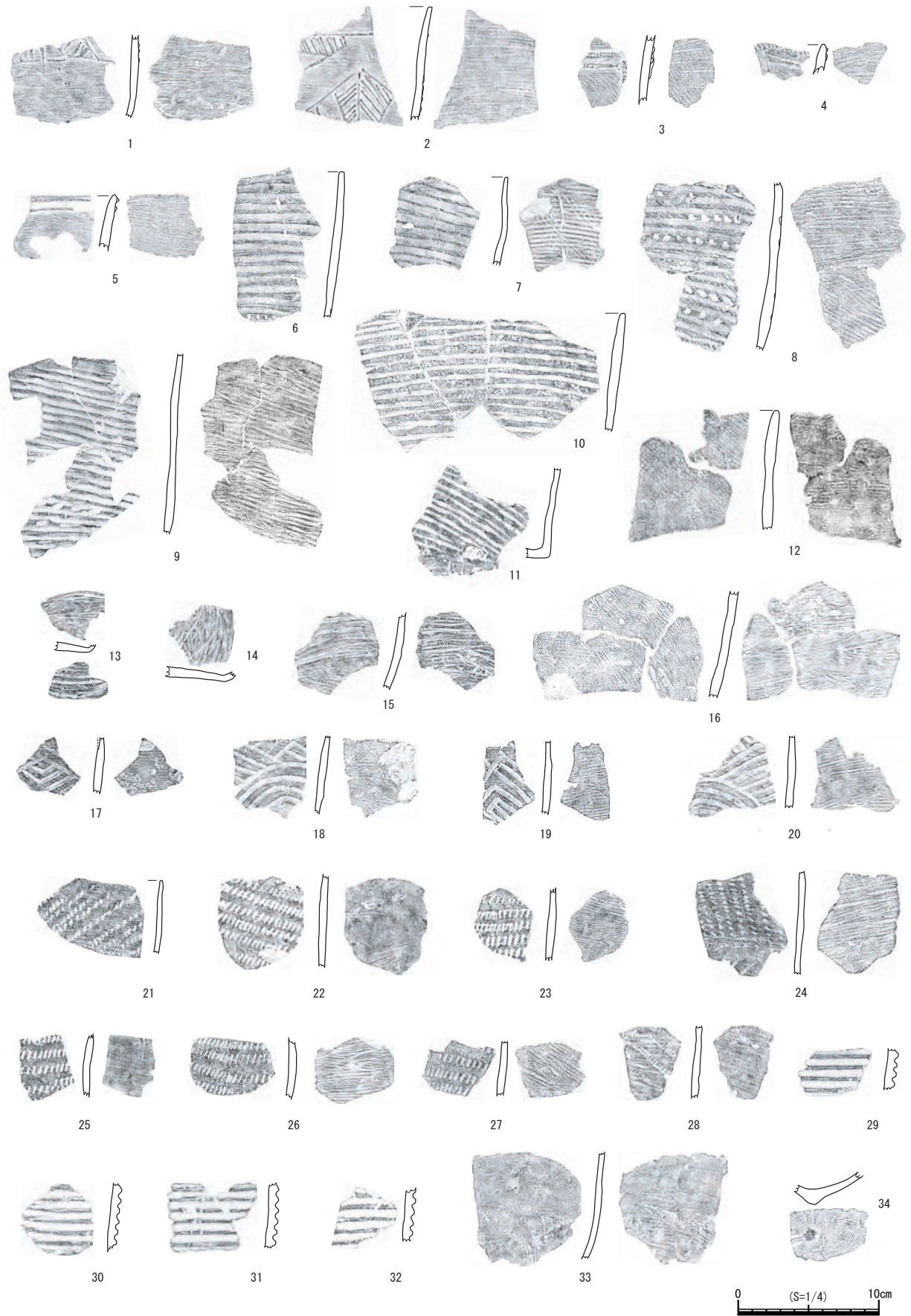


图 71 遺構外出土土器 (2)

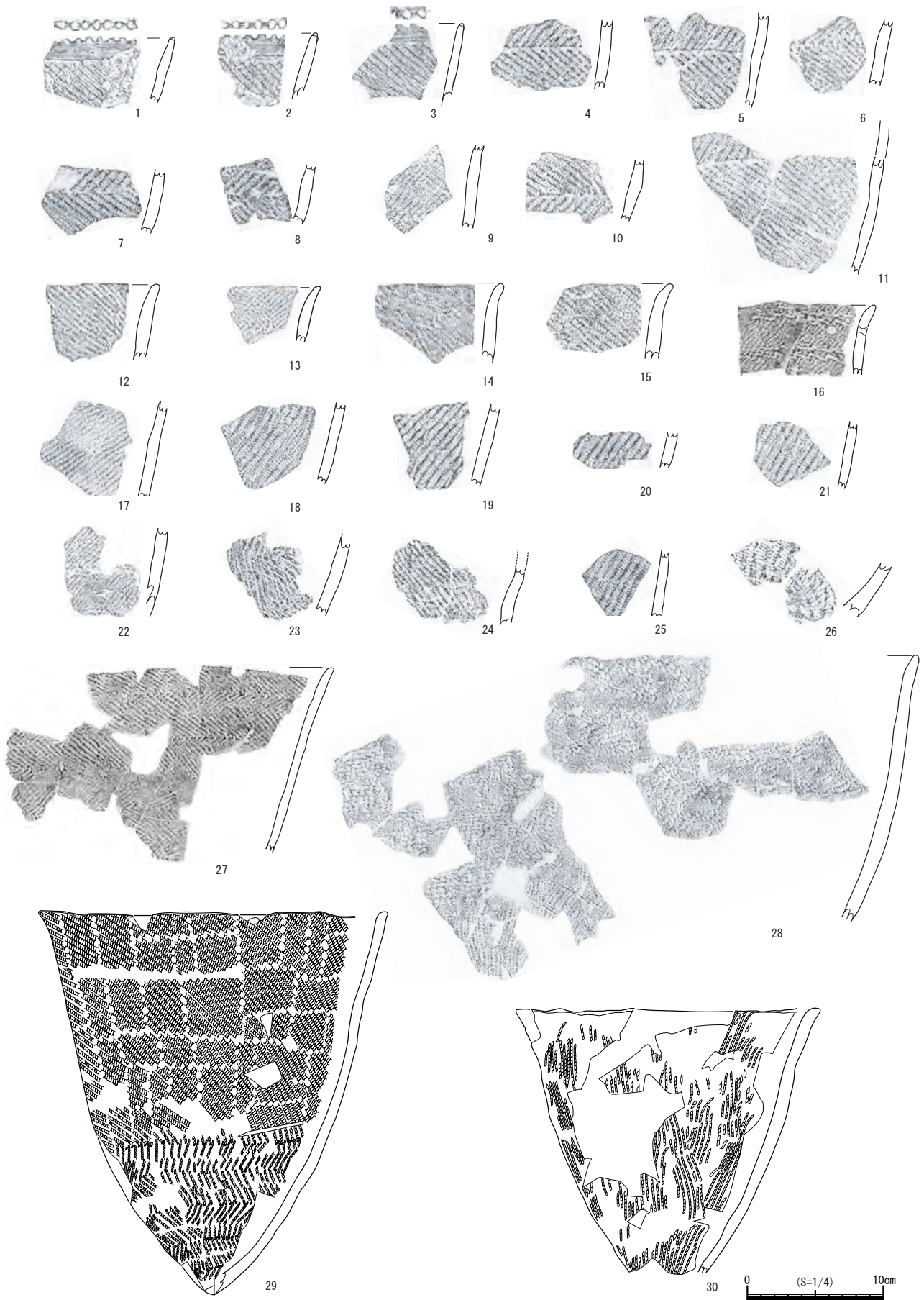


图72 遺構外出土土器(3)



图 73 遺構外出土土器 (4)

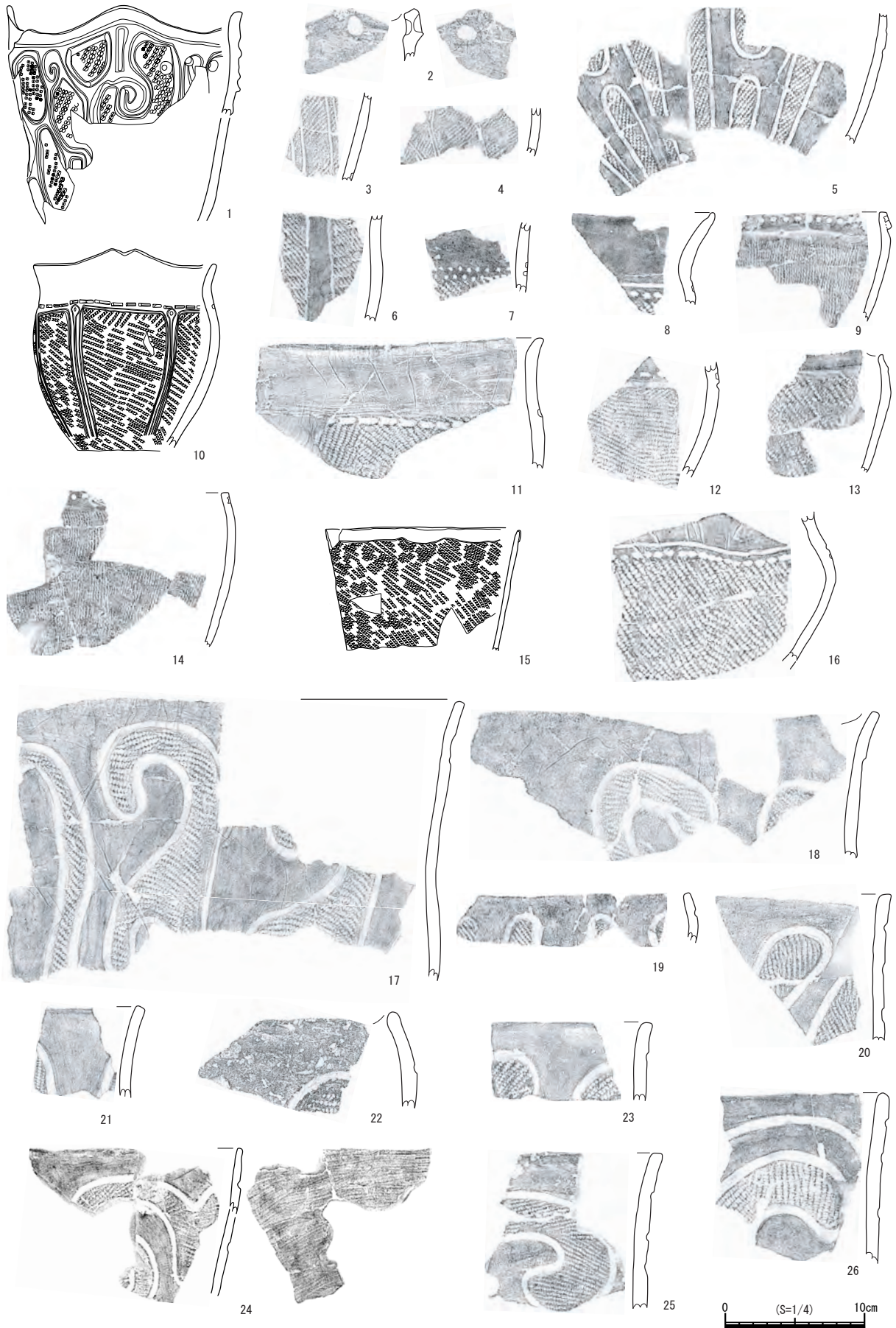


图74 遺構外出土土器(5)

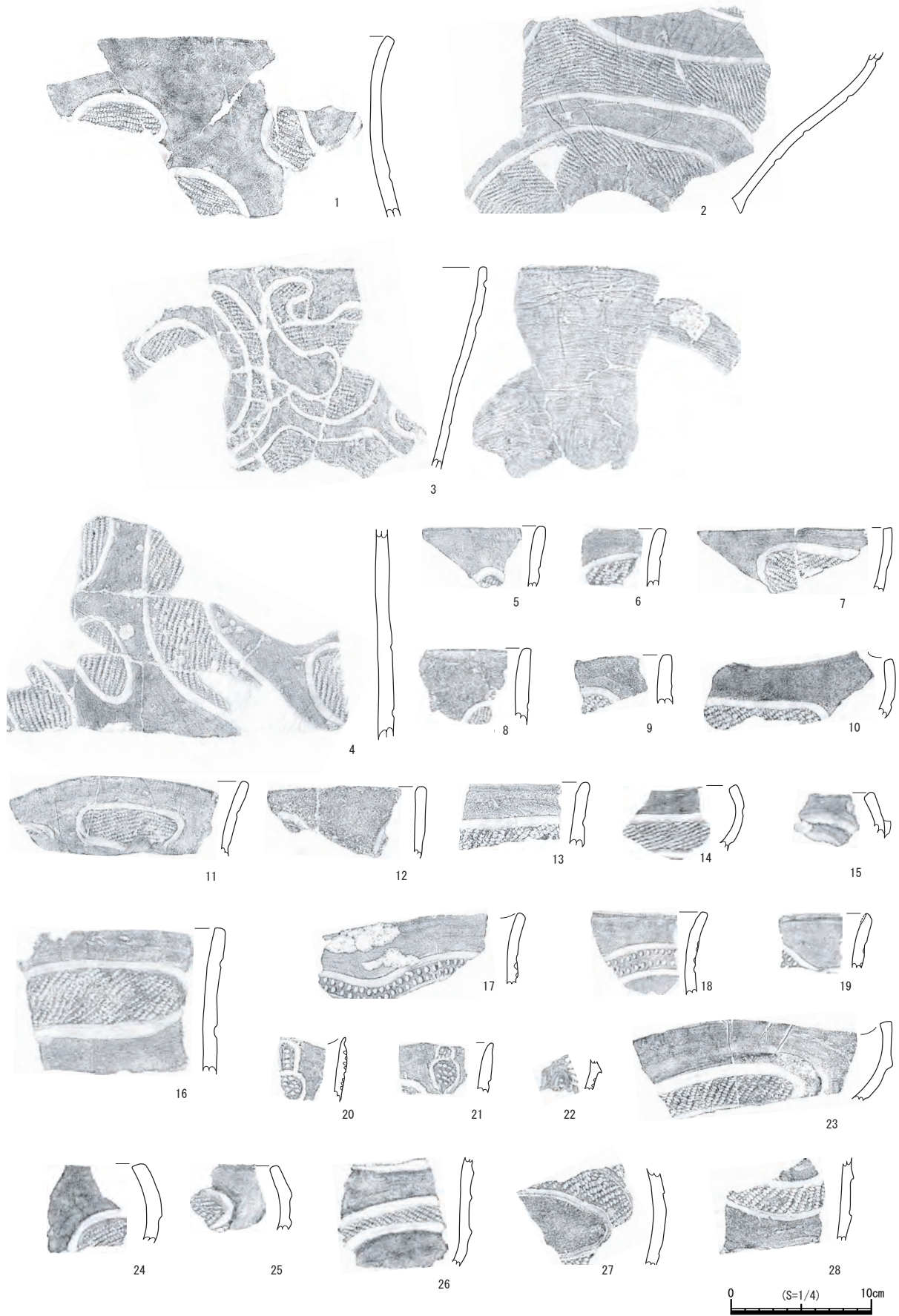


图 75 遺構外出土土器 (6)

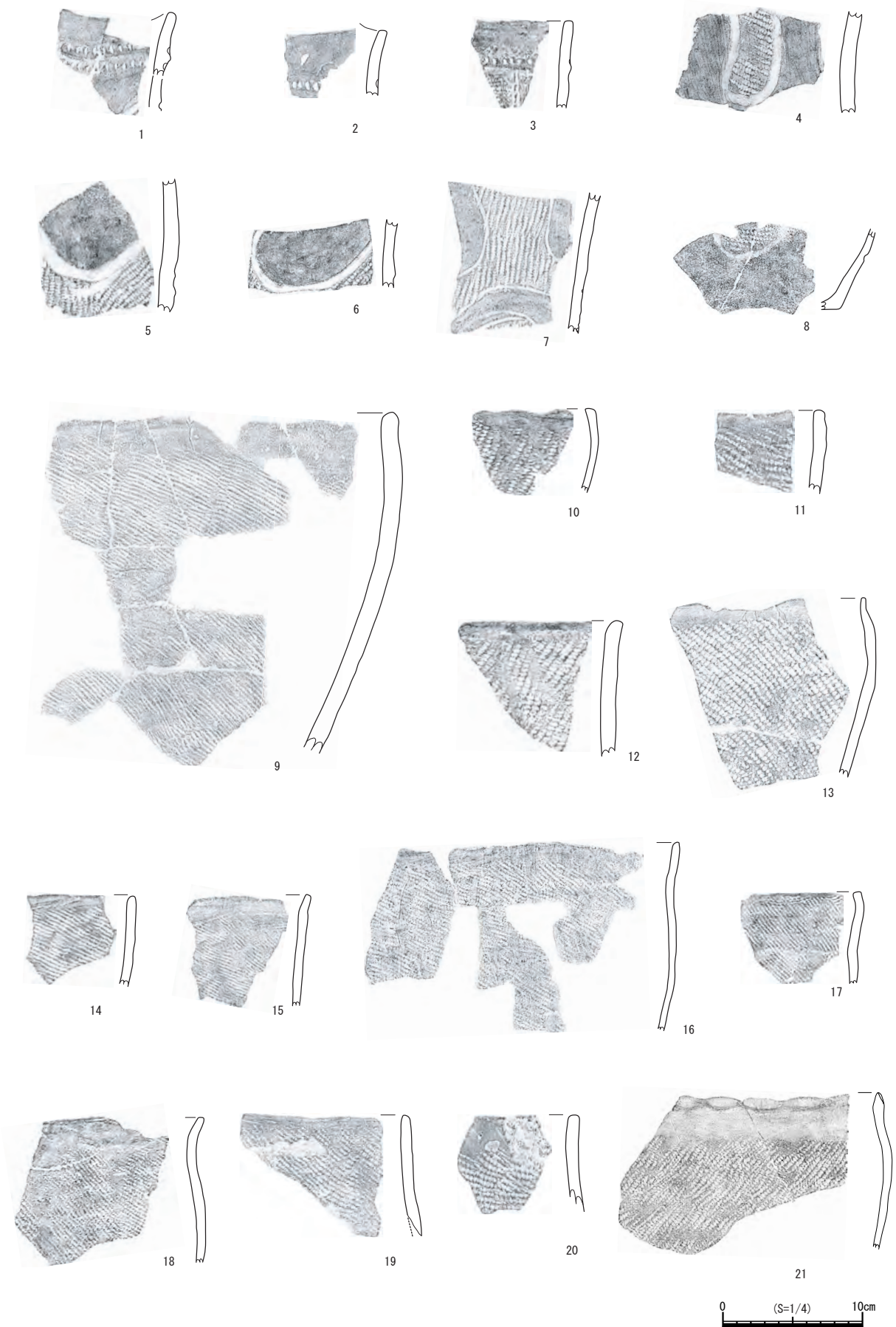


图76 遺構外出土土器(7)

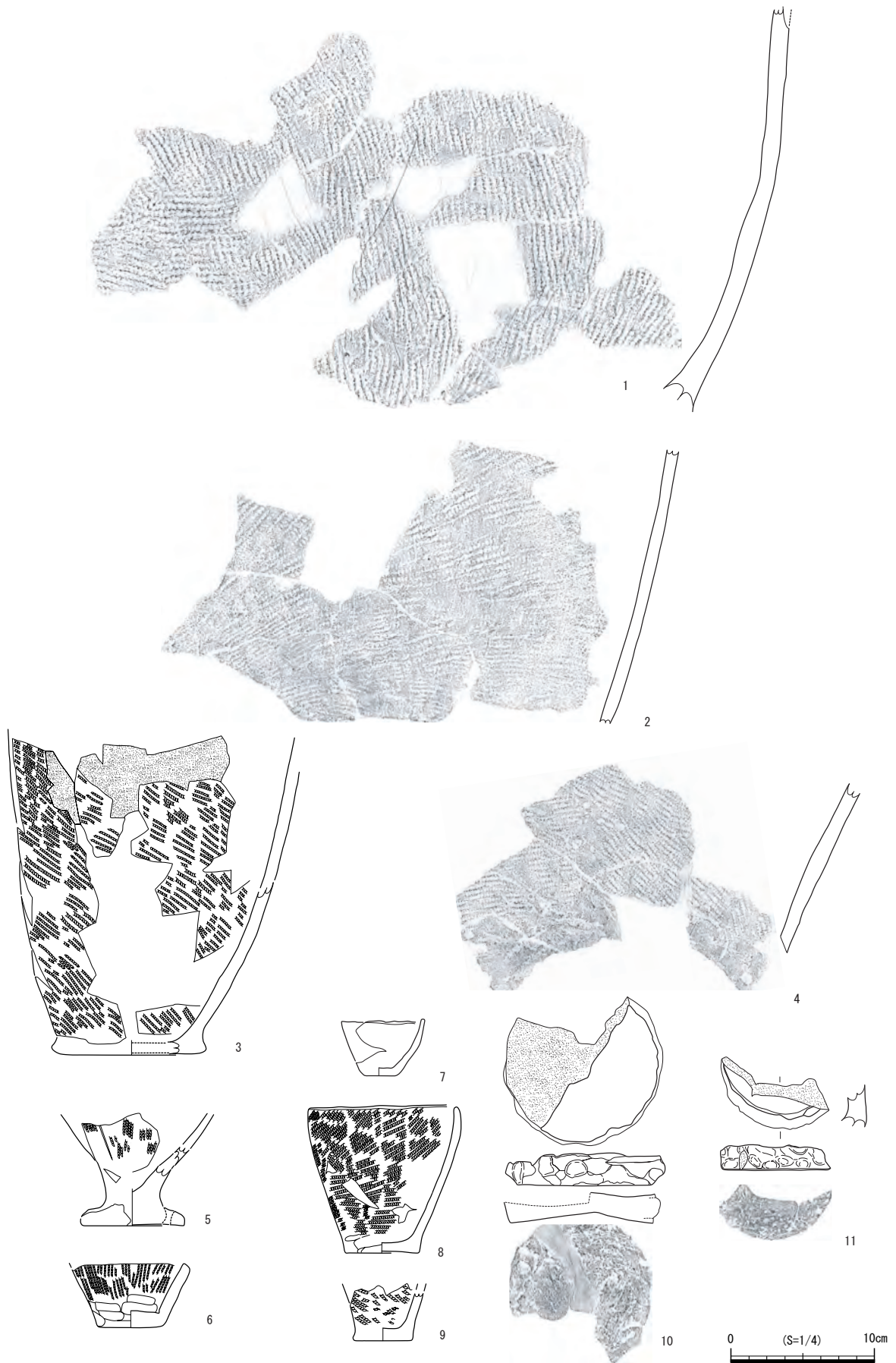


图 77 遺構外出土土器 (8)

縄文時代早期～前期中葉の土器は第IV～V層を主要な包含層とし、出土量は少ないが、各群によって分布傾向に明らかな違いがある。第I群土器期は調査区北部、第II群土器期は調査区南部、第III群土器期は調査区東半、第IV群土器期は調査区西半をそれぞれ主体としていたといえ、各時期の土地利用のあり方が異なっていたことを示すものである。

2 古代の土器 (図 79-18・19)

遺構外から極少量出土した。古代の土器で図化に耐えるものは2点のみであった。平安時代のものと考えられる。

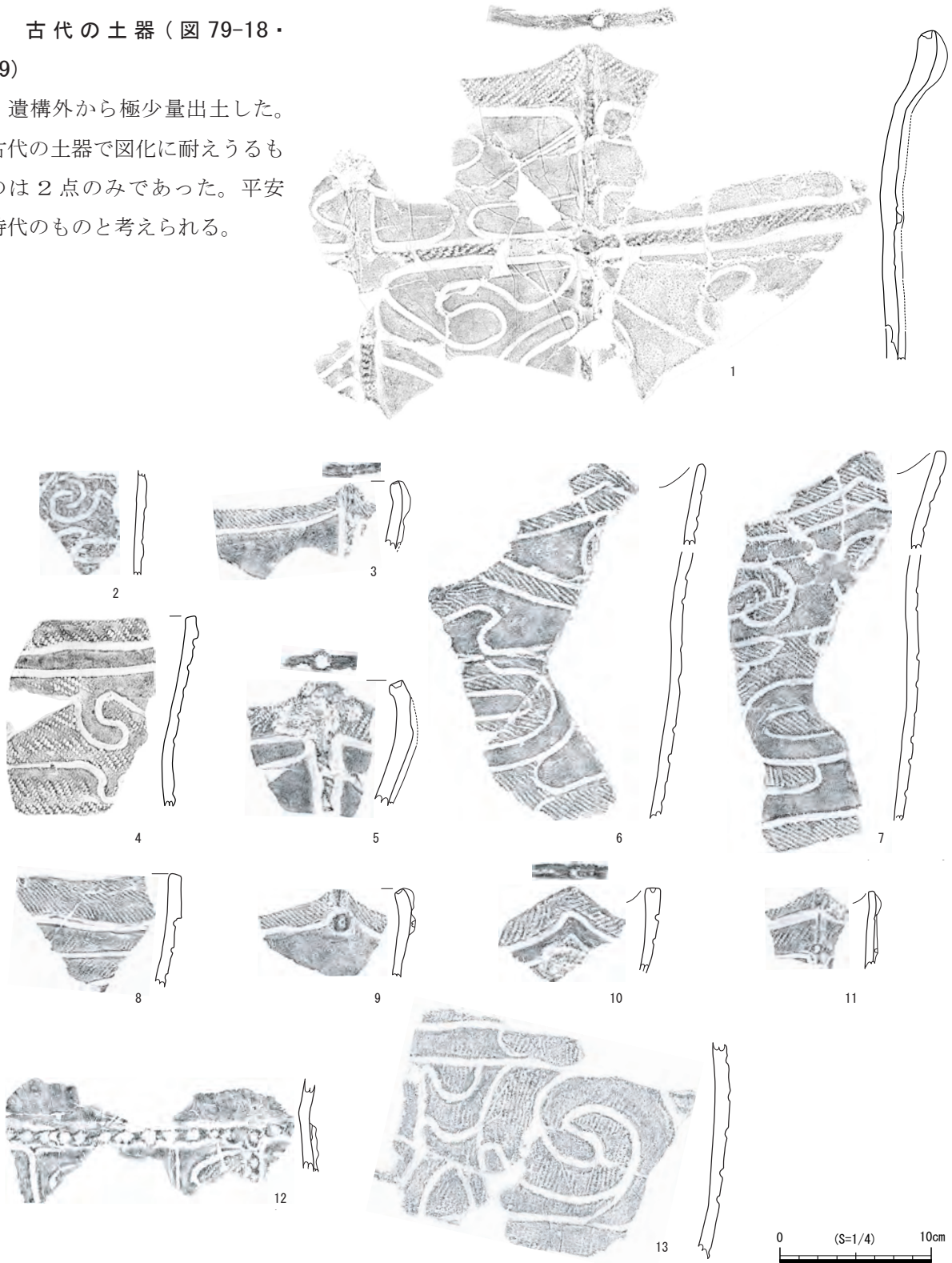


図 78 遺構外出土土器 (9)

3 土製品 (図 79-20)

環状の土製品で、中央上方から下方に貫通孔がある。

(中村)

註

(1) 沈線は次のように分類した。観察表中に用いる分類も同様である。

A1 類：先端の丸い工具を器面に垂直に当てたもの。 A2 類：先端の丸い工具を器面に垂直に当てたもの。A1 類に比べて深い。 B 類：先端の丸い工具を垂直に当てたもので、A 類より深い。 C 類：先端が平たい工具を器面に垂直に当てたもの。D 類：先端の丸い工具を器面に下から斜めに当てたもの。

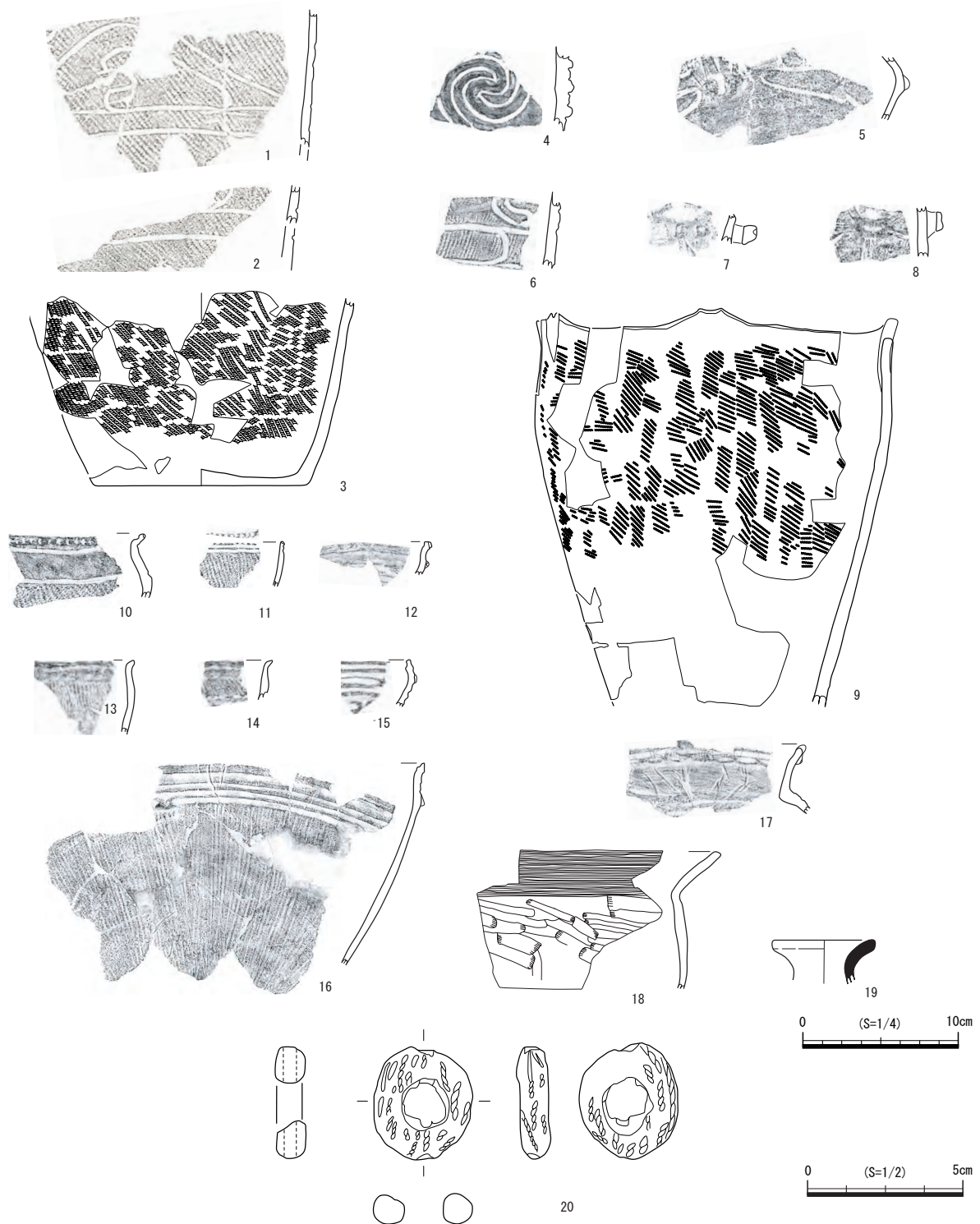


図 79 遺構外出土土器 (10)・土製品

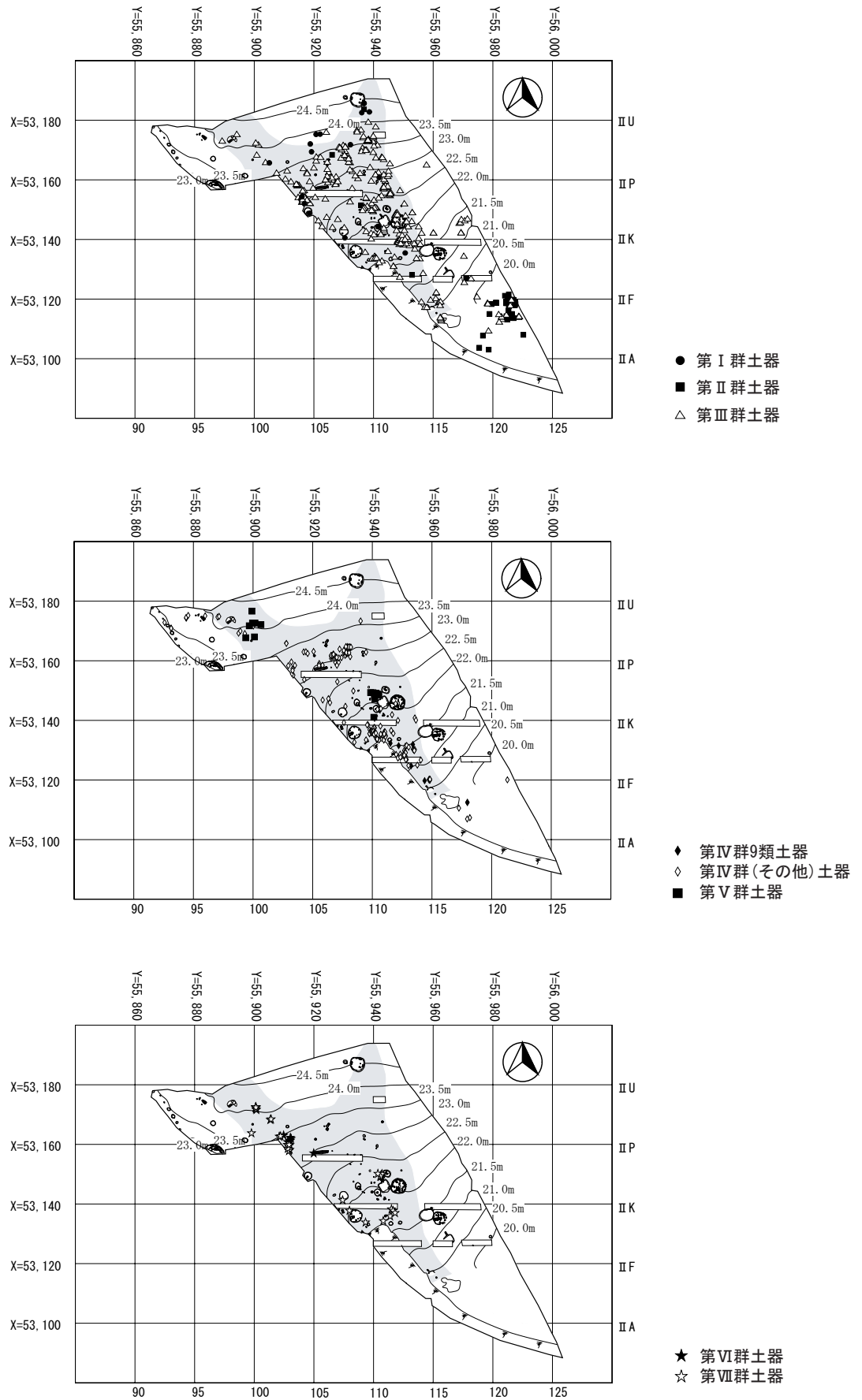
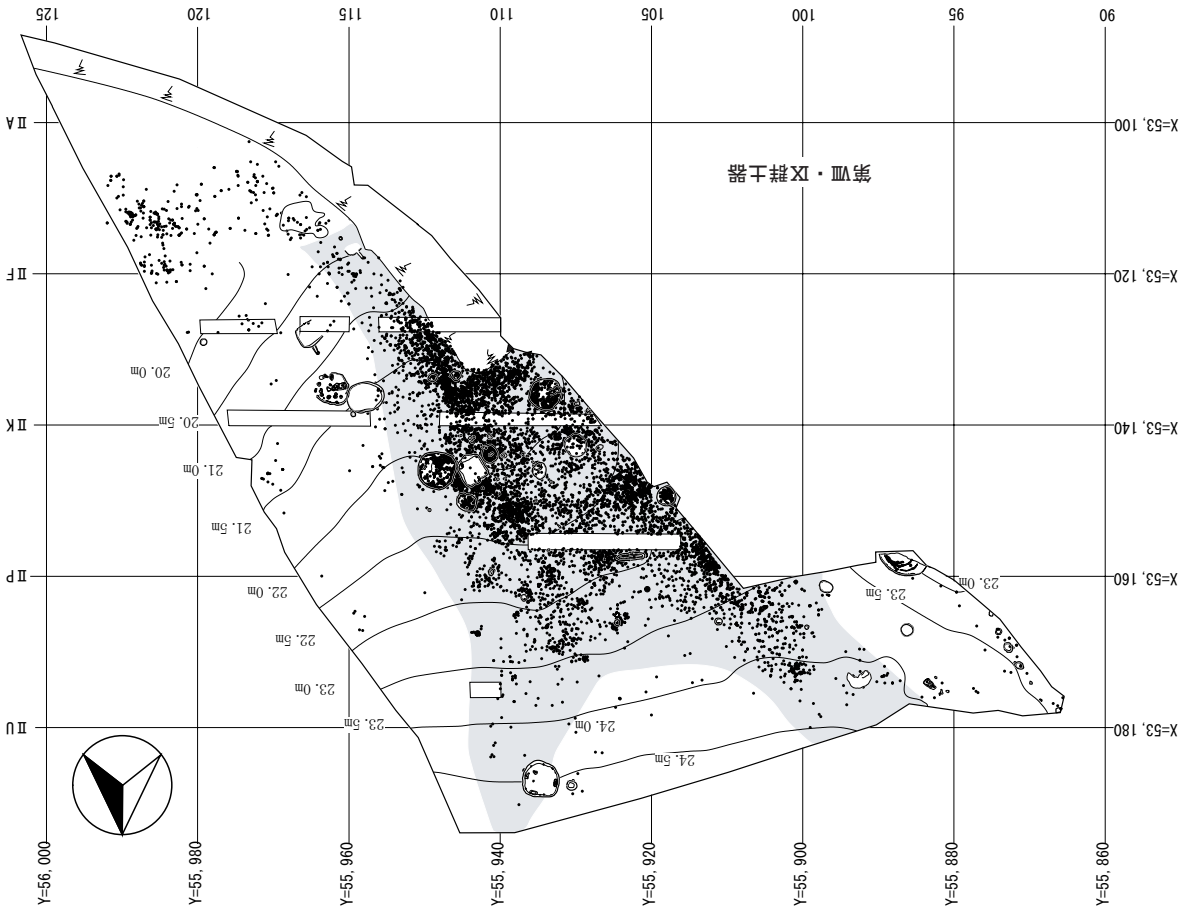
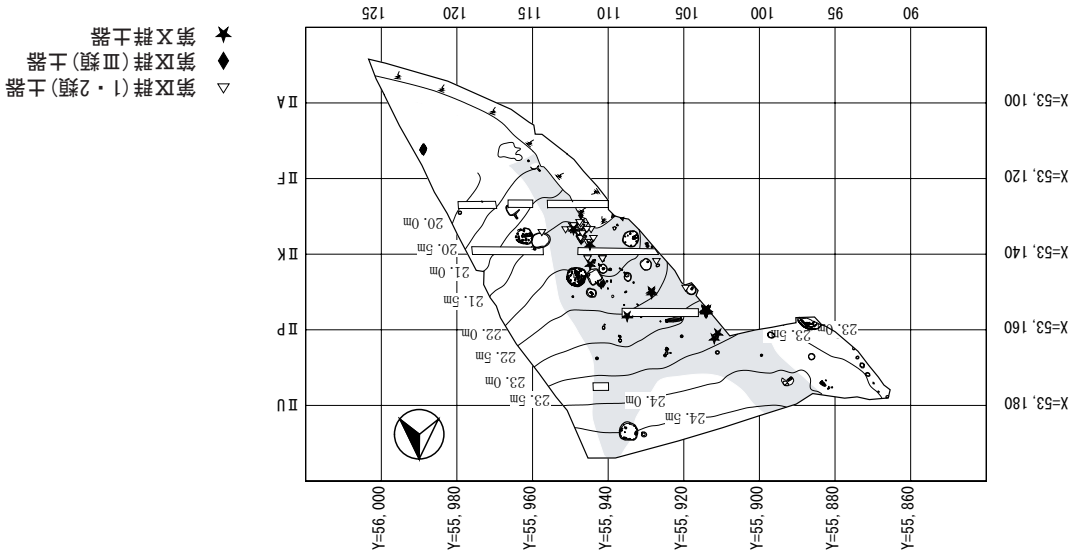


図 80 遺構外土器出土状況 (1)

图 81 遺構外土器出土状況 (2)



第2節 石器

遺構外では剥片石器 632 点、礫石器 126 点を含む総数 4,596 点の石製遺物が出土している。これらのうち、本遺跡を代表する資料 116 点を図示した。ここでは、各資料の個別的な特徴について記載する。文章中で用いている各器種の内容、細別類型については第 6 章第 4 節で述べる。

1 石鏃

第 I 層より I a 類、II c 類が各 1 点出土している。第 II 層からは I a 類 (83-1)、I b 類 (83-2)、I c 類 (83-3) の 3 点が出土しており、いずれも無茎鏃 (I 類) である。第 III 層では I a ~ d 類の無茎鏃の他に有茎鏃 (II 類) が伴うが、主体をなすのは I c 類 (83-10 ~ 31) である。

2 石槍

第 III 層より 3 点、第 IV 層より 1 点、総数 4 点が出土している。第 III 層出土資料は、いずれも破損品であり、基部もしくは先端部が欠けている。83-41 については比較的厚みがあるため、未製品・失敗品の可能性が考えられる。

3 石匙

第 I 層で 1 点、第 III 層で 5 点、第 IV 層で 7 点、総数 13 点が出土している。84-1、85-1 は腹面右側縁に調整打面を加えて背面左側縁に直線的な刃部もしくは深い調整剥離が加えられている。特に 85-1 は I 類を代表する資料である。

4 石錐

第 II 層で 1 点、第 III 層で 5 点、第 I 層および攪乱箇所から 2 点、総数 8 点が出土している。83-4 はつまみ部を円形に調整しており、刃部の径は約 3mm である。84-5 はつまみ部が直線的に整えられている。平面形態は石鏃 I b 類に近いが、側縁の内彎は二次的な加工とは判断できず、IV 類に含めた。

5 二次調整のある剥片 (不定形石器)

第 I 層で 1 点、第 II 層で 8 点、第 III 層で 63 点、第 IV 層で 31 点、第 V 層で 2 点の総数 105 点が出土している。

6 磨製石斧

第 II 層で 4 点、第 III 層で 7 点、第 IV 層で 4 点、総数 15 点が出土している。これらのうち、第 III 層と第 IV 層ではそれぞれ 1 点の未製品が含まれる。多くは緑色細粒凝灰岩、輝緑岩を素材としているが、87-2 は砂岩を素材とし、片側に礫面を残した状態で剥離調整と研磨が加えられている。85-10 は折損面にパッチ状の光沢面 (写真図版 37) が形成されており、折損によって生じた鋭利な破損面が搔器の刃部として利用された可能性が考えられる。85-7、85-11 は基部付近に線状の敲打痕 (敲 I 類) が形成されており、一時的に刃部側を保持する形で敲打器として使用された可能性が考えられる。

7 石皿・台石

第 II 層で 1 点、第 III 層および第 IV 層で各 2 点、総数 4 点が出土している。85-9、86-11 は明瞭な縁が形成され、石材には砂岩が用いられている。86-12 は発達した光沢面が凹面を縁取る形で帯状に形成されており、凹面の中央部分では光沢の発達がわずかに弱い。

8 砥石

第 III 層で 1 点が出土している。86-11 は石皿 II 類の機能部、脚部に幅 5 ~ 15mm、深さ 5mm 程度の

溝が数条形成されており、石皿破損後の転用品と考えられる。同様の溝は85-9、89-4などの粗粒質の石材が用いられている石皿類の裏面にも形成されている。

9 磨石

第Ⅱ層で2点、第Ⅲ層で16点、第Ⅳ層で43点、第Ⅴ層で5点が出土している。攪乱箇所から出土した2点を含めると総数68点が出土している。本遺跡で出土している磨石は磨面が礫面の稜線部分に形成されるもの（磨Ⅰ類）が主体となり、遺構外の層位的な出土傾向としては半数以上が第Ⅳ層からの出土である。

10 凹石

第Ⅲ層で8点、第Ⅳ層で6点、総数14点が出土している。本器種は使用痕が単独になるものを取り上げているが、磨痕が複合してみられるものが圧倒的に多く、量的な評価にあたっては敲磨器の点数を考慮する必要がある。凹みの形状は線状（凹Ⅰ類）が主体である。

12 敲石

第Ⅲ層で3点、第Ⅳ層で1点、第Ⅴ層で1点、総数5点が出土している。凹石同様、敲打痕が単独にみられるものを敲石としているが、「磨り」や「凹み」等の使用痕と重複する率は高い。円礫の一部に敲打痕跡がみられるもの（90-3）がほとんどであるが、敲打によって機能部分が整形されているものもみられる。（86-4）

13 敲磨器

第Ⅳ層で9点が出土している。単独の機能としては上記の「磨石」、「凹石」、「敲石」と重複した内容を有するものである。本遺跡では稜線上に形成された磨痕（磨Ⅰ類）と線状の凹み（凹Ⅰ類）が共存する資料が多くみられる。

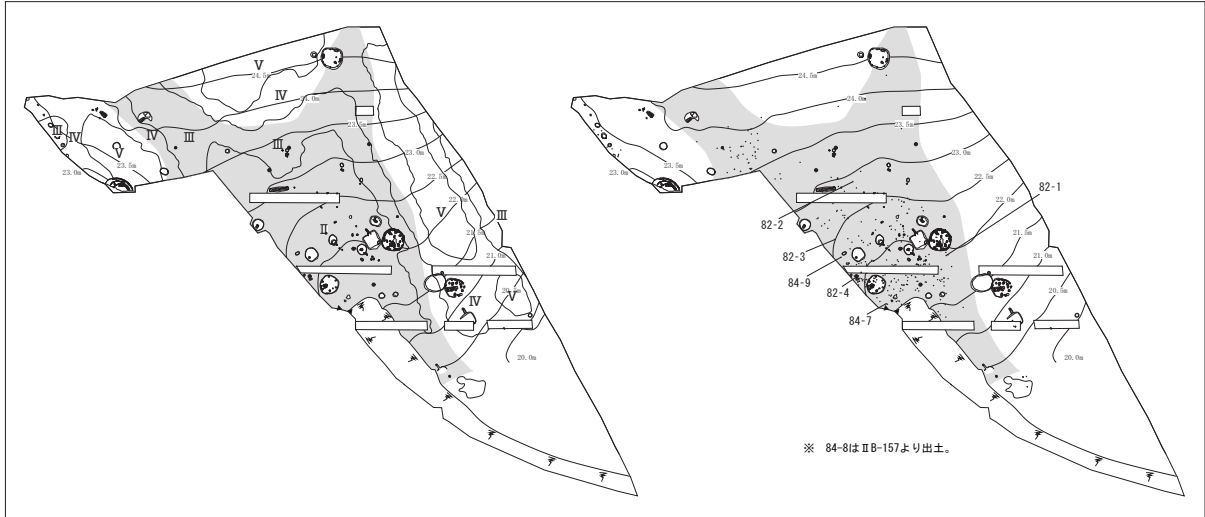
14 石錘

第Ⅲ層で1点、第Ⅳ層で2点、攪乱範囲より2点、総数5点が出土している。石材には頁岩、砂岩、粘板岩が用いられている。いずれの資料でも抉入部の剥離の深さが浅く、両極加撃によって抉りが加えられている。

第Ⅲ層および第Ⅳ層で出土した自然礫、礫石器、剥片石器等の石製遺物の空間分布を図82に示す。第Ⅳ層の分布がやや広域になるのは精査を行うことのできた層の偏りに起因する。遺構の上位に位置する資料がみられるが、今回は現場での所見を優先し、敢えて遺物の出土地点を遺構内に回帰させるといった操作は一切行っていない。（斉藤）

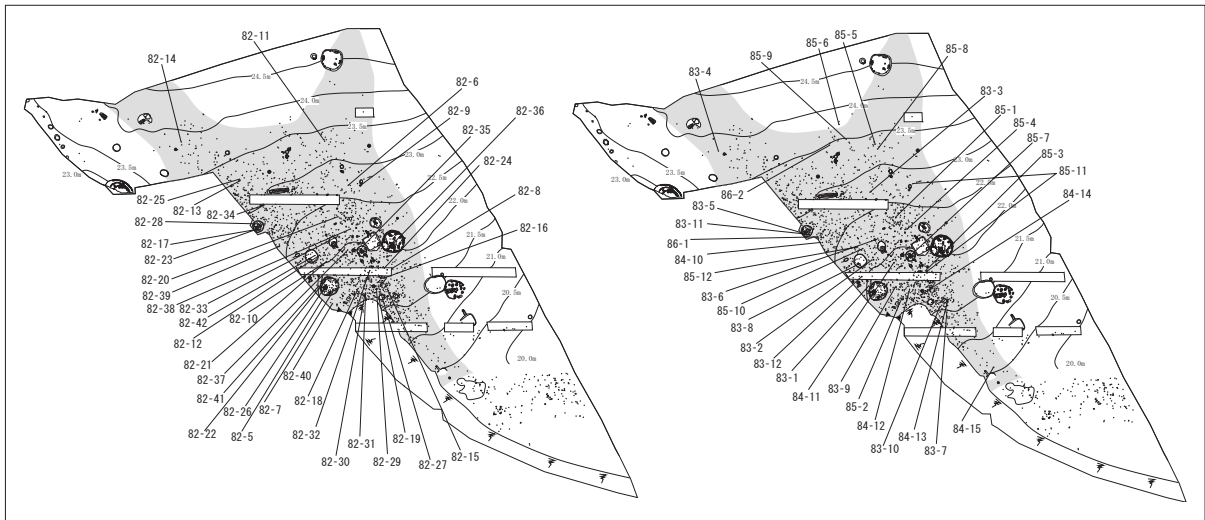
器種	類型	I層	II層	III層	IV層	V層	カクラン	総計
石鏃	I a 類	1	1	9	5			16
	I b 類		1	4	3			8
	I c 類		1	32	6		1	40
	I d 類			2	1			3
	II a 類			5				5
	II b 類			4				4
	II c 類	1						1
	未製品・失敗品			6	4			10
石槍	—			2	1			3
	未製品・失敗品			1				1
石匙	I 類			2	1			3
	II 類			2	2			4
	III 類	1		1	2			4
	IV 類				2			2
石篋	—			2	3	1	1	7
石錐	II 類	1	1	1				3
	IV 類			4			1	5
両極加撃痕跡のある剥片			1	10	3			14
二次調整のある剥片		1	8	65	32	2		108
微小剥離痕のある剥片			1	37	20			58
剥片			20	112	78	2		212
碎片			9	84	23			116
石核					2			2
磨製石斧	—		5	7	3			15
	未製品			1	1			2
磨石			2	16	43	5	2	68
敲石				3	1	1		5
敲磨器					9			9
半円状偏平打製石器？				1				1
凹石				8	6			14
石皿・台石			1	2	2			5
砥石				2				2
石錘				1	2			5
石製品				1				1
総計		5	51	427	255	11	7	756

表3 遺構外出土石器集計表



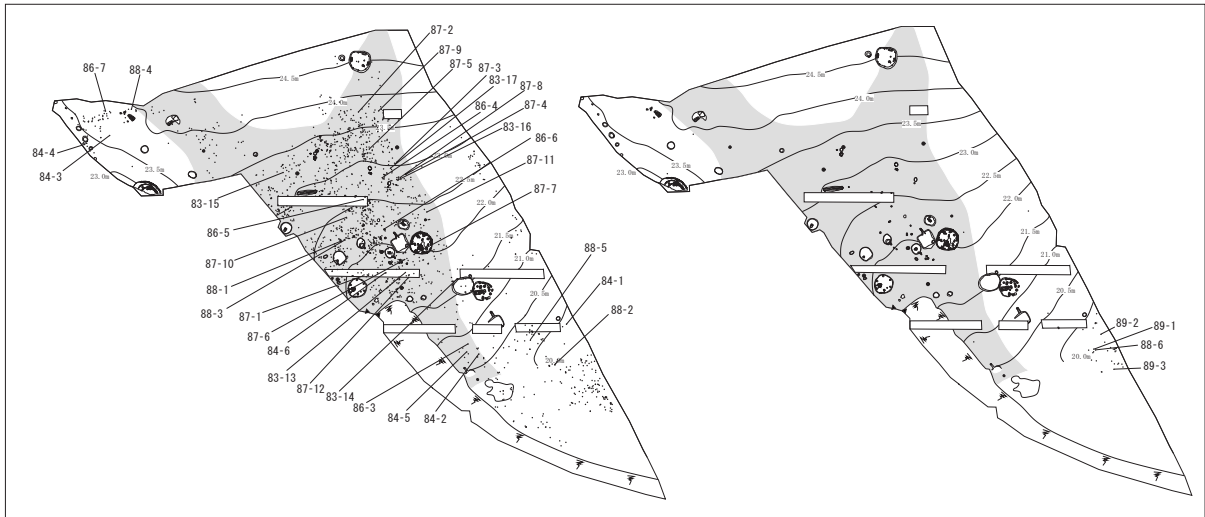
第Ⅰ層除去後に検出された層序区分

遺構外第Ⅱ層出土石製遺物分布図



遺構外第Ⅲ層出土石製遺物分布図①

遺構外第Ⅲ層出土石製遺物分布図②



遺構外第Ⅳ層出土石製遺物分布図

遺構外第Ⅴ層出土石製遺物分布図

図82 遺構外出土石製遺物分布図

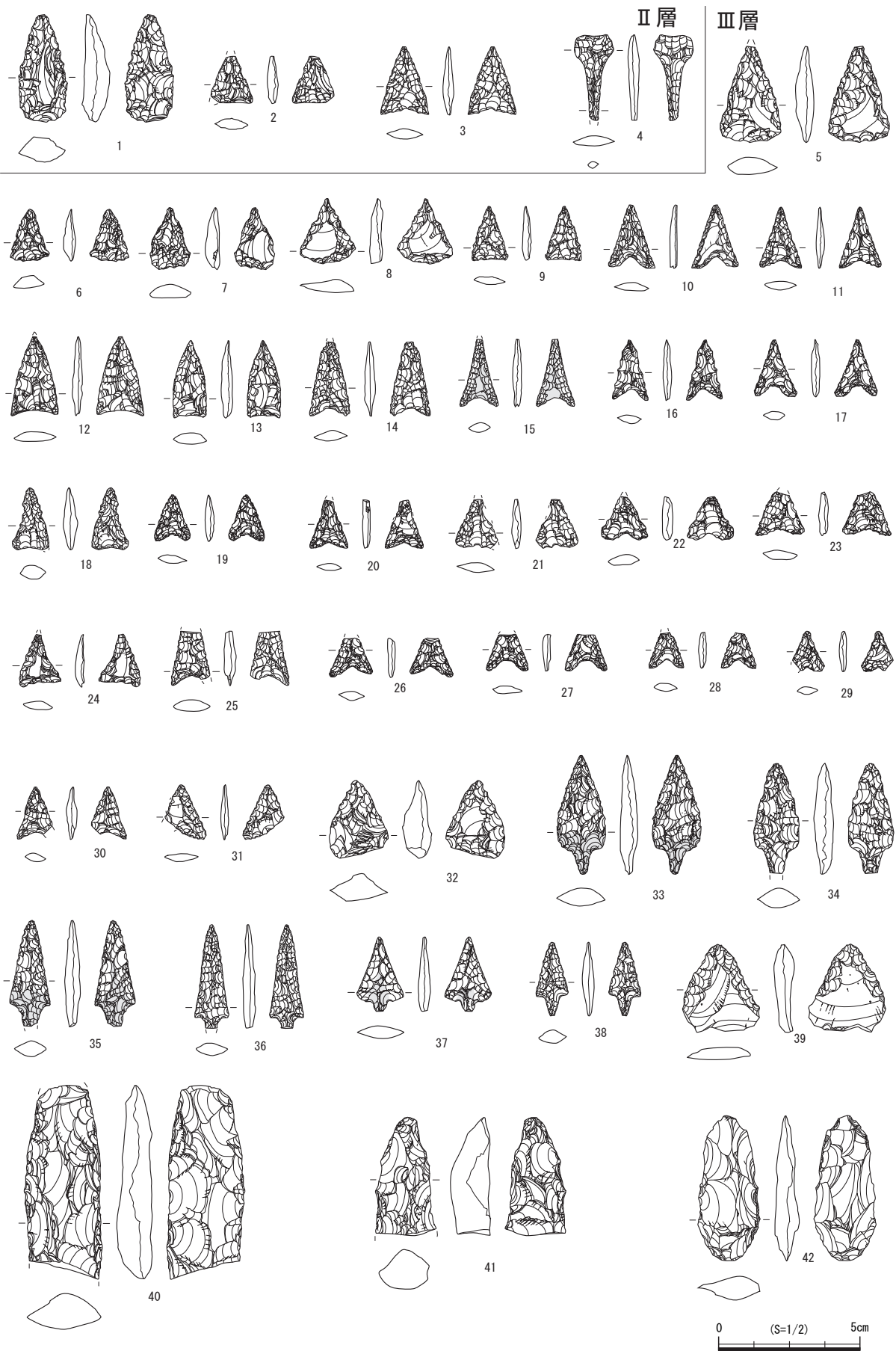


图 83 遺構外出土剥片石器 (1)

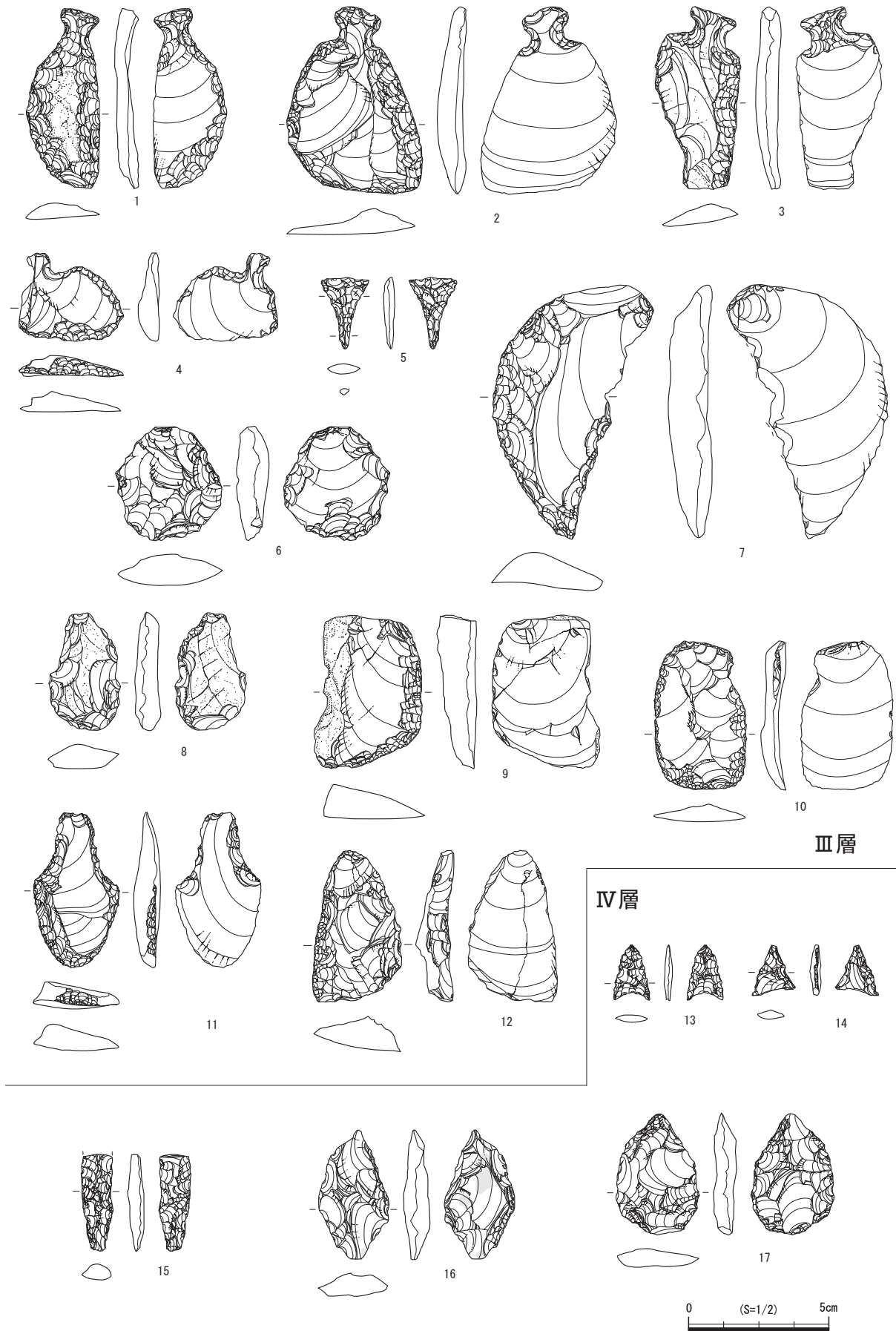


图 84 遺構外出土剥片石器 (2)

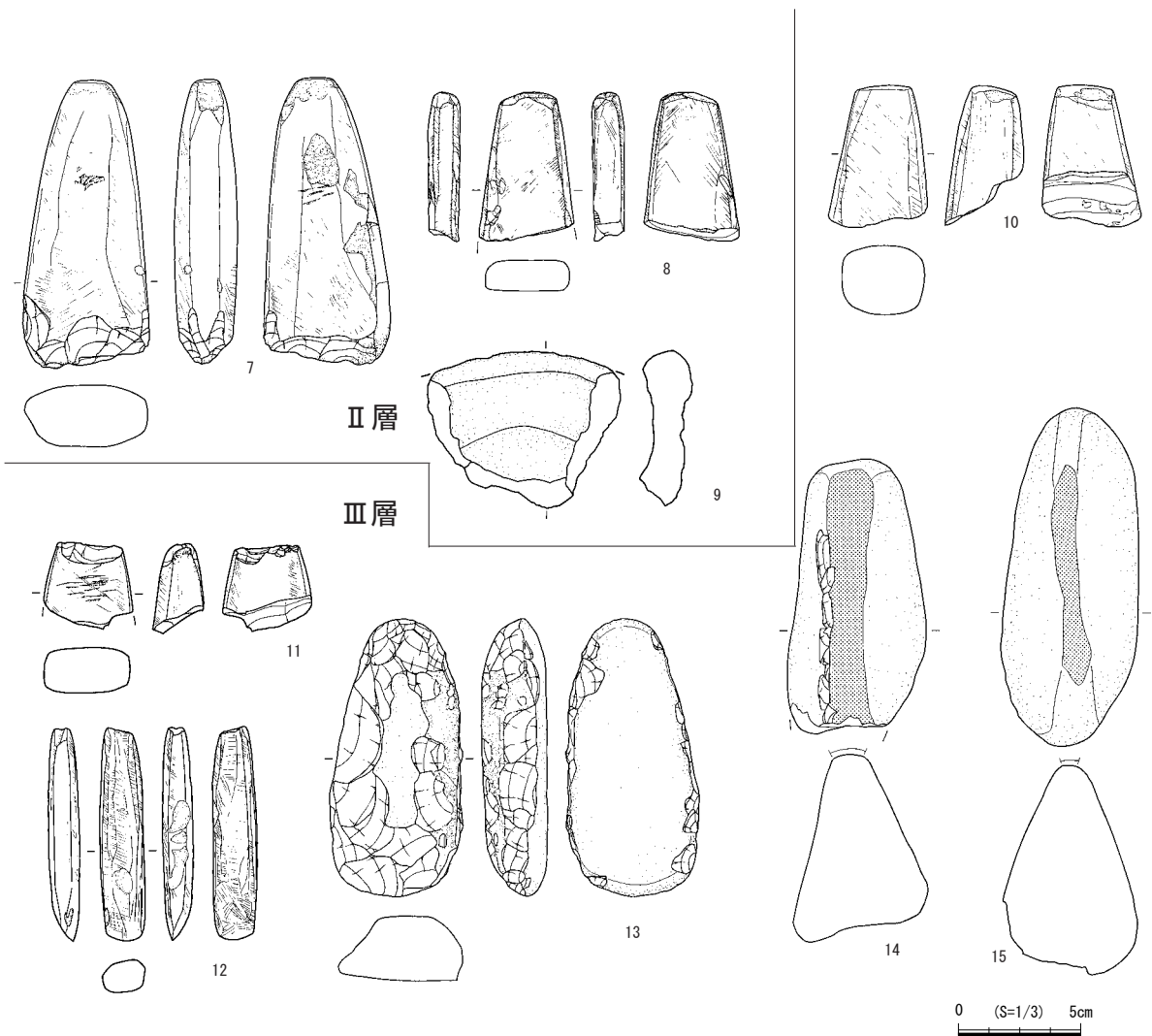
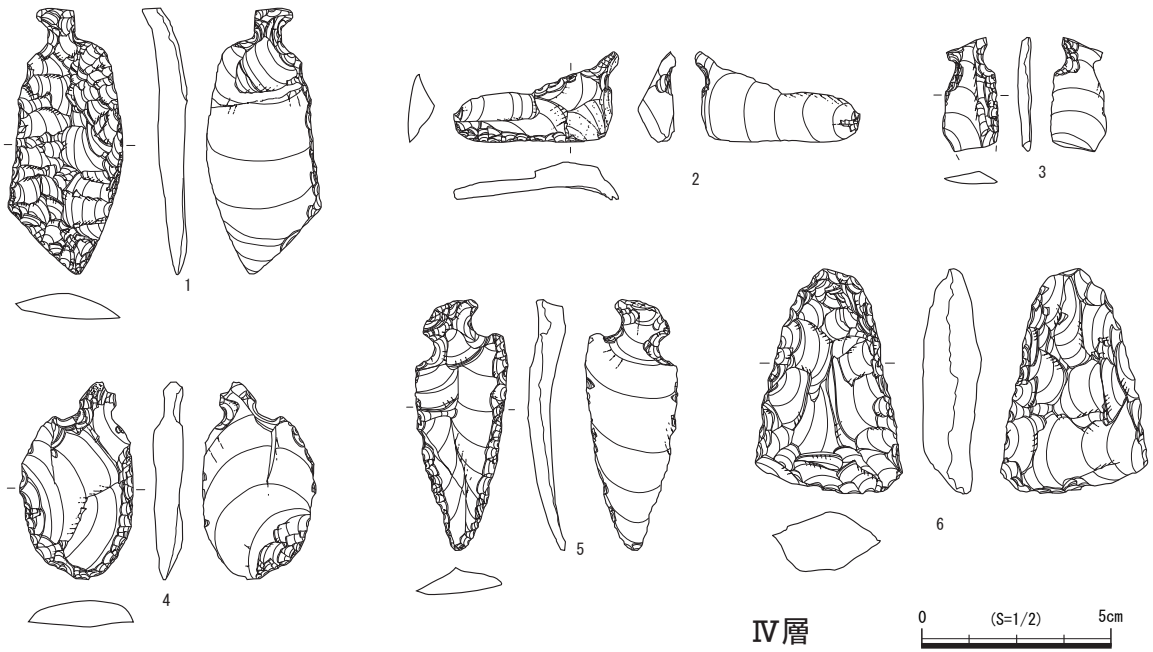


图 85 遺構外出土剥片石器 (3)・磨製石斧・礫石器 (1)

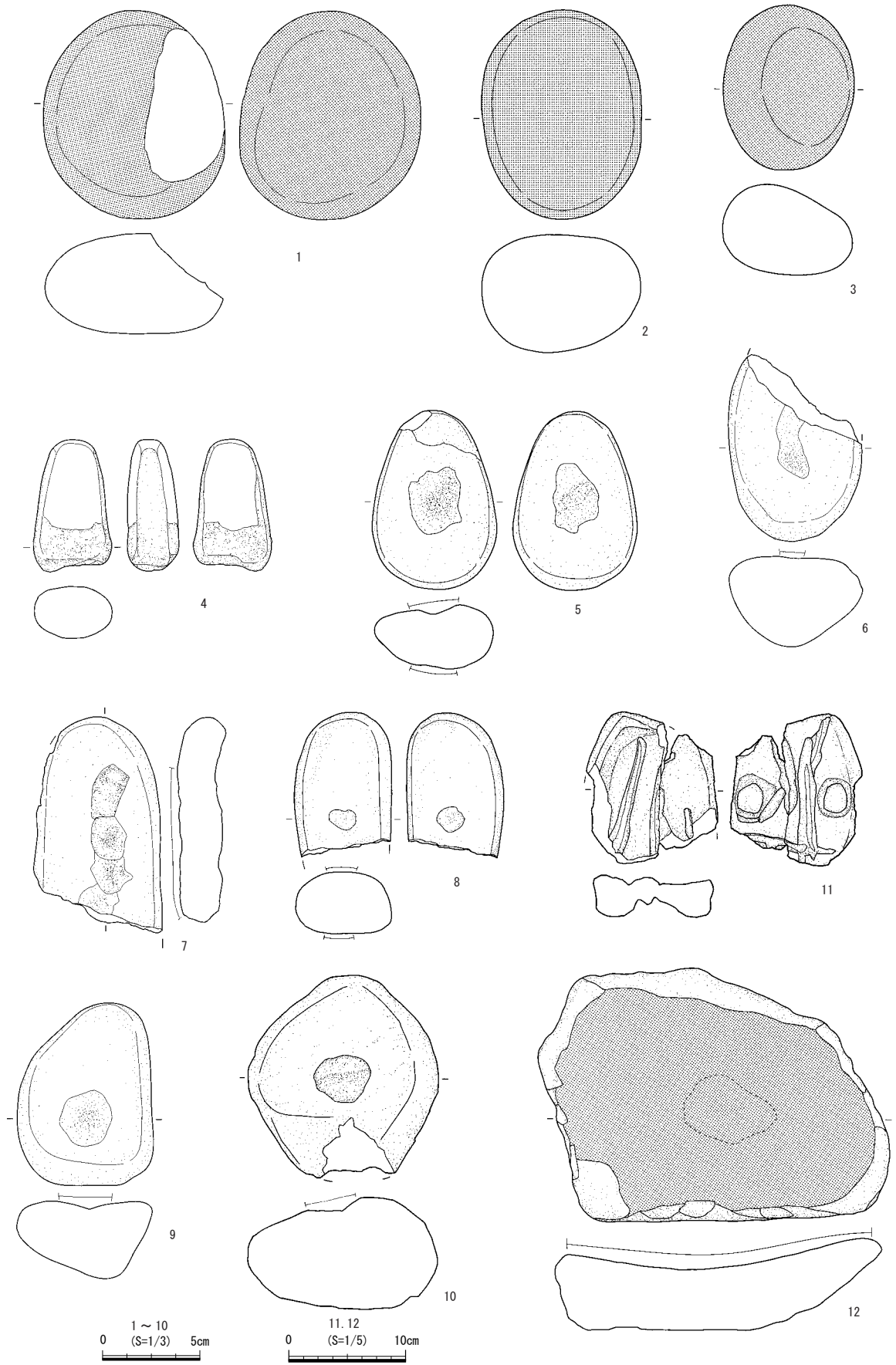


图 86 遺構外出土礫石器 (2)

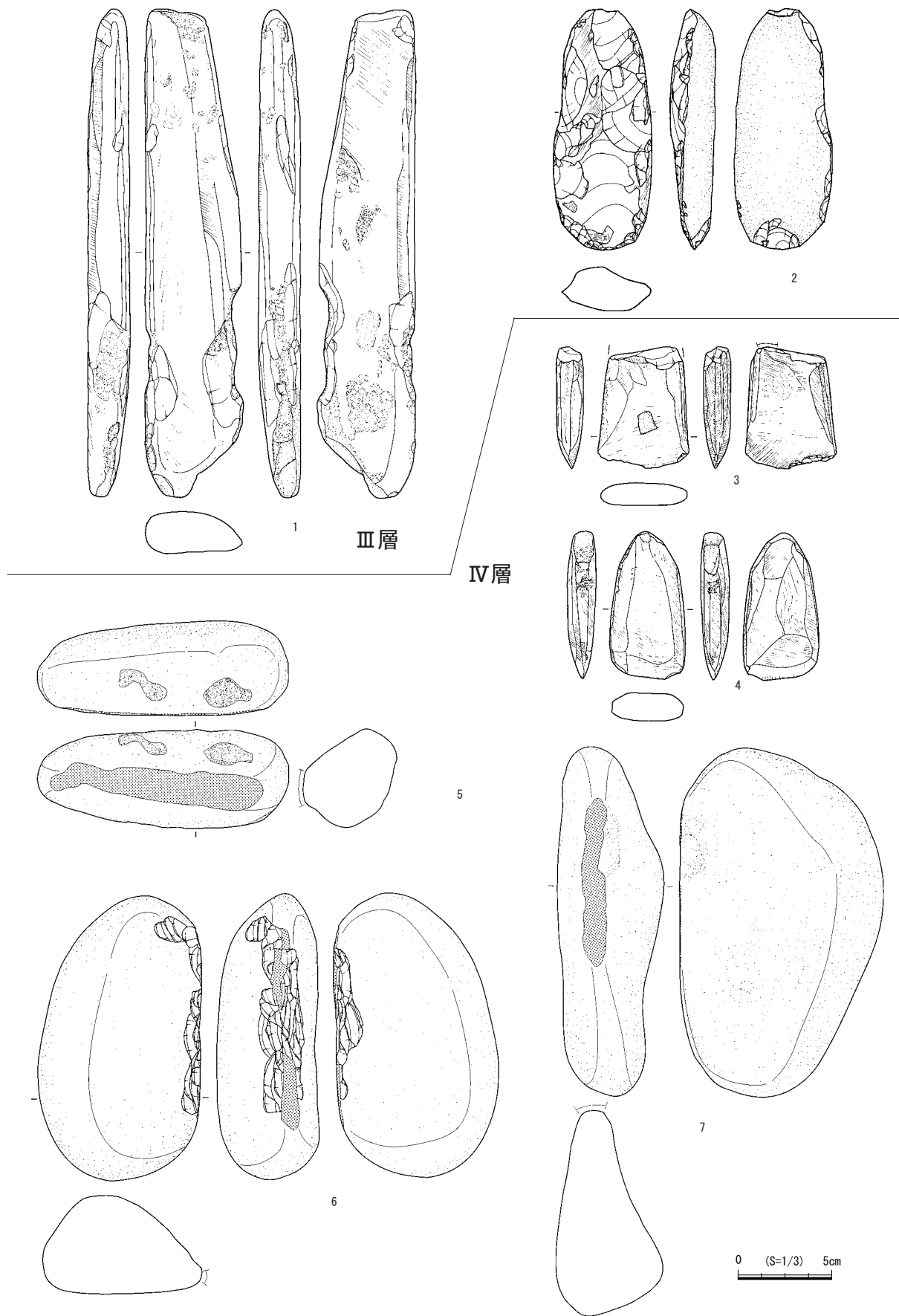


図 87 遺構外出土磨製石斧・礫石器 (3)

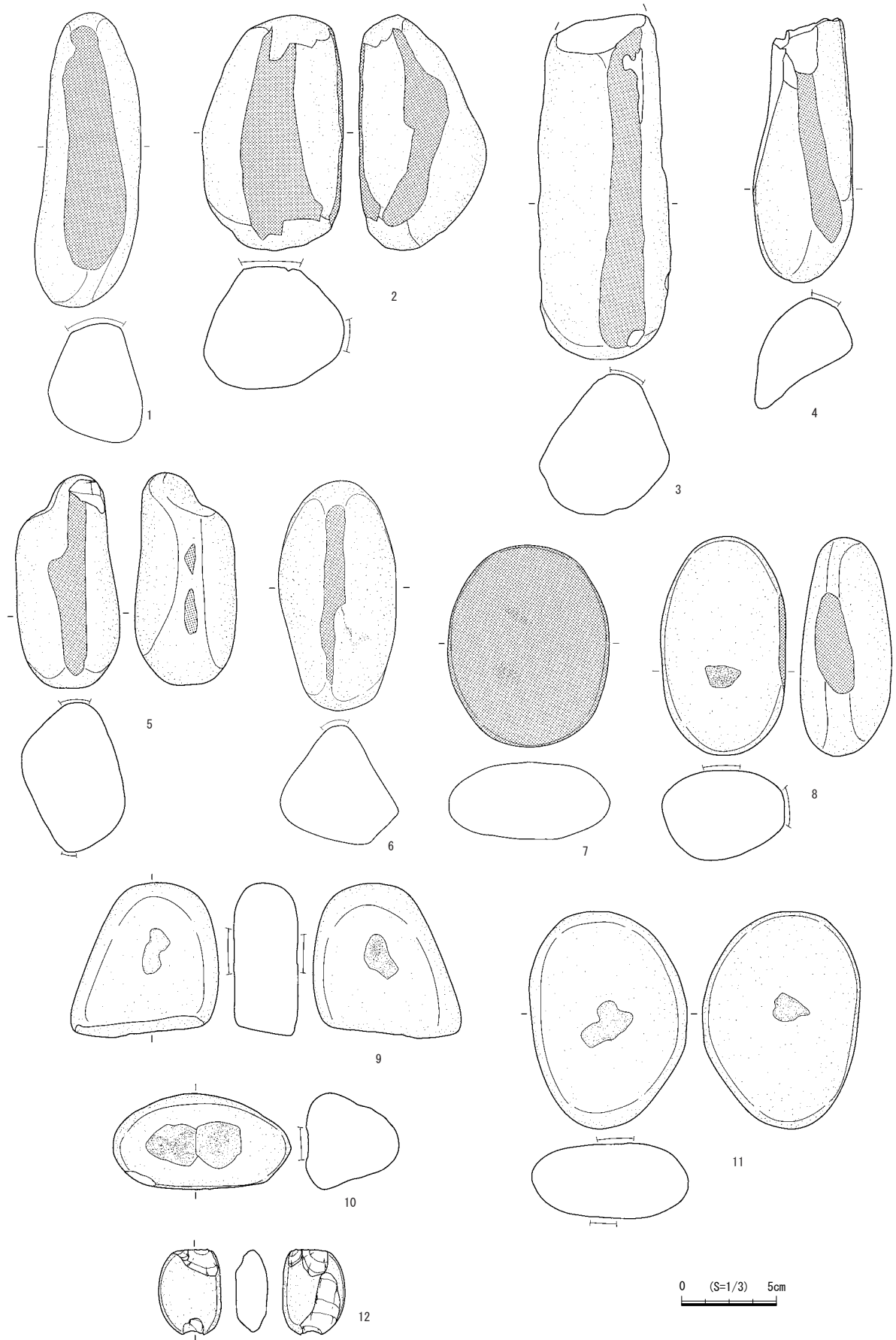


图 88 遺構外出土礫石器 (4)

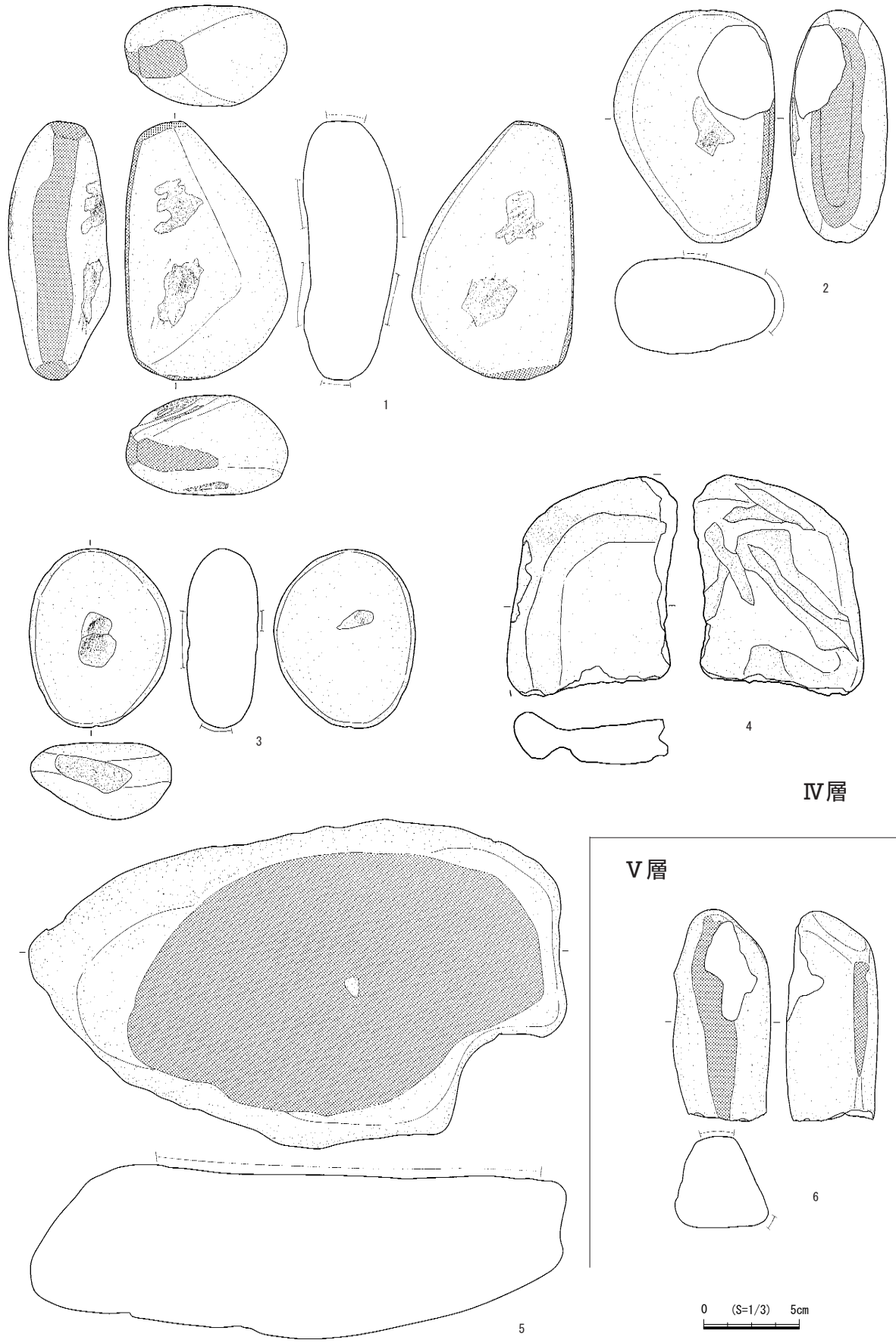


图 89 遺構外出土礫石器 (5)

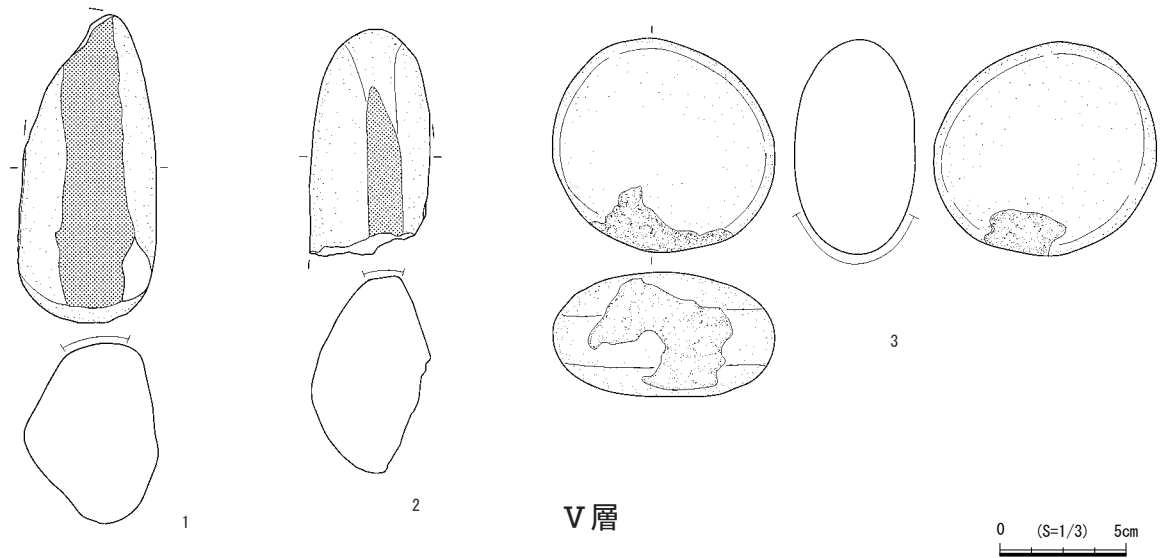


図90 遺構外出土礫石器(6)

第3節 その他の出土遺物

1 陶磁器(写真図版42)

第I層・攪乱土層から陶磁器が55点出土した。大きく分けて、中国産青磁、肥前IV～V期の肥前系陶磁器、18C末葉から19C中葉の瀬戸美濃系陶磁器、明治時代からそれ以降のものがある。

2 煙管(写真図版42)

第I層・攪乱土層から煙管が2点出土した。いずれも雁首で、1点は火皿を欠く。火皿は小さく、油返部は直角に曲がっている。継ぎ目は上面に来る。古泉弘の編年(古泉 1983)に対比すれば、第VI期の形態を示し、19世紀になって現れるとされる。(中村)

第5章 自然科学的分析

第1節 八戸市新田遺跡出土炭化材の樹種

高橋利彦（木工舎「ゆい」）

1. 試料

試料は30点（以下、仮試料番号No. 1～30で表す）で、5基の竪穴住居跡と1基の土坑から検出されたものである（表4）。このうちSI-05住居跡は奈良時代、他の5遺構は縄文時代中期末葉（大木10式併行期）～後期初頭のものともみられている。住居の炉跡から検出されたものとSK-15土坑から検出された試料は燃料材、他は住居の構築材と考えられている。

遺跡は新井田川左岸に位置し、調査区の標高は約20～25mである。遺跡の西には潟野遺跡があり、奈良時代とされるSI-05住居跡は潟野遺跡の同時期の住居と同じ集落を構成していたとみられている。

2. 方法

同定には調査担当者の立ち会いのもとで、保管されていたブロックから筆者が採取した材片を用いた。試料は乾燥していたが、大半が小片であった。試料の木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）3面を実体顕微鏡で観察する方法と、3断面を走査型電子顕微鏡（SEM、加速電圧10kV）で観察する方法を併用し同定した。併せて各分類群1点の電子顕微鏡写真図版を作成した（図91, 92）。SEM観察にご協力いただいた（株）ニッテツ・ファイン・プロダクツ釜石試験分析センターに感謝いたします。なお、残った炭化材とネガ・フィルムは木工舎「ゆい」に保管されている。

3. 結果

確実な同定ができず類似種としたものが1点あったが、試料は以下の4分類群に同定された。（）を付けた試料番号が類似種としたものである。試料の主な解剖学的特徴や一般的な性質は次のようなものである。なお、学名と配列は「日本の野生植物 木本Ⅰ・Ⅱ」（佐竹ほか1989）にしたがい、県内での自然分布については「北本州産高等植物チェックリスト」（上野1991）を参照した。また、一般的性質については「木の事典 第2～4巻」（平井1979, 1980）も参考にした。

・オニグルミ (*Juglans mandshurica* var. *sachalinensis*) クルミ科 No. 15

散孔材で年輪界付近でやや急に管径を減少させる。管孔は単独および2～4個が複合、横断面では楕円形。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性～異性、1～6細胞幅、1～40細胞高。柔組織は短接線状、周囲状。

オニグルミは北海道から九州までの川沿いなどに生育する落葉高木である。材の硬さは中程度、加工は容易で狂いが少なく、保存性は低い。銃床として広く用いられるほか、各種器具・家具材などの

用途も知られている。

- ・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus* sp.) ブナ科 No. 2, 20

環孔材で孔圏部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は横断面では円形～楕円形、小道管は横断面では多角形、ともに単独で配列する。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状となる。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと複合組織がある。柔組織は短接線状、周囲状。年輪界は明瞭。

コナラ節はコナラ亜属(落葉ナラ類)の中で果実(ドングリ)が開花の年に熟すグループで、カシワ(*Quercus dentata*)、ミズナラ(*Q. crispula*)、コナラ(*Q. serrata*)、ナラガシワ(*Q. aliena*)といくつかの変・品種がある。県内にはナラガシワを除く3種が分布する。このうちコナラは樹高20mになる落葉高木で、古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・樽・薪炭材などの用途がある。

- ・クリ (*Castanea crenata*) ブナ科 No. 1, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, (12), 13, 14, 16, 17, 18, 19, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 30

環孔材で孔圏部は1-多列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では楕円形～円形、小道管は単独および2-3個が複合、横断面では角張った楕円形～多角形。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。柔組織は周囲状、短接線状。年輪界は明瞭。No. 12は小片で、十分な観察ができなかったため類似種とした。

クリは北海道南西部から九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、櫓木などに用いられる。

- ・カエデ属 (*Acer* sp.) カエデ科 No. 11

散孔材で横断面ではやや角張った楕円形、単独および2-4個が複合、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔をもち、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1-5細胞幅、1-60細胞高。柔組織は周囲状または随伴散在状、接線状。年輪界はやや不明瞭。

カエデ属は国内に26種が自生し、また多くの品種があり植栽されることも多い落葉高木～低木である。県内にはハウチワカエデ(*Acer japonicum*)やコミネカエデ(*A. micranthum*)など11種ほどが自生する。材は一般にやや重硬・強靱で、加工はやや困難、保存性は中程度である。器具・家具・建築・装飾・旋作・薪炭材などに用いられる。

以上の同定結果を検出遺構などとともに一覧表で示す(表4)。

4. 考察

縄文時代中期末葉～後期初頭とされている遺構から検出された炭化材は住居の構築材と燃料材とみられているが、ともにクリと同定されたものが多い(表5)。

表4 新田遺跡出土炭化材の樹種

仮試料番号	検出遺構など	分類群
1	SI-02 複式炉埋設土器内	クリ
2	SI-05 C1 堆積土	コナラ属コナラ亜属コナラ節
3	SI-07 C1 堆積土	クリ
4	SI-07 C2 堆積土	クリ
5	SI-07 C3 堆積土	クリ
6	SI-07 C1 複式炉堆積土	クリ
7	SI-07 C2 複式炉堆積土	クリ
8	SI-07 C3 複式炉堆積土	クリ
9	SI-07 C4 複式炉堆積土	クリ
10	SI-07 C4 複式炉堆積土	クリ
11	SI-09 C1 堆積土	カエデ属
12	SI-11 C1 堆積土	クリ類似種
13	SI-11 C2 堆積土	クリ
14	SI-11 C3 堆積土	クリ
15	SI-11 C4 堆積土	オニグルミ
15	SI-11 C5 堆積土	クリ
17	SI-11 C6 堆積土	クリ
18	SI-11 C7 堆積土	クリ
19	SI-11 C8 堆積土	クリ
20	SI-11 C9 堆積土	コナラ属コナラ亜属コナラ節
21	SI-11 C10 堆積土	クリ
22	SI-11 C11 堆積土	クリ
23	SI-11 C12 堆積土	クリ
24	SI-11 C13 堆積土	クリ
25	SI-11 C14 堆積土	クリ
26	SI-11 C16 堆積土	クリ
27	SI-11 C17 堆積土	クリ
28	SI-11 C18 堆積土	クリ
29	SI-11 C19 堆積土	クリ
30	SK-15 C1 焼土上面	クリ

試料と近い時期では、本遺跡の南約 10Km に位置する南郷村田ノ上遺跡検出の縄文時代中期～後期^{注1)}とされる 2 住居跡覆土出土材 3 点がクリ・ケヤキ?・カエデに、炉検出材がクリに同定されている例(鳴倉 1981) や、田ノ上遺跡の南西約 1Km に位置する畑内遺跡検出の中期初頭とされる住居跡検出材がケヤキに同定されている例(高橋 2001) などがあるが、試料数が少ないためか、あるいは本試料とは時期が異なるためか、特にクリが多用されているという傾向はうかがえない。

また、奈良時代とされる SI-05 検出材はコナラ節に同定されたが、同じ集落を構成していたとされる潟野遺跡の住居跡出土材でもコナラ節が多く認められている(高橋 2006)。

表5 新田遺跡の縄文時代中期末葉～後期初頭とされる遺構検出材の遺構別用途別樹種構成。
燃は燃料材，構は構築材と推定されているもの。

分類群	SI-02	SI-07		SI-09	SI-11	SK-15	合計	
	燃	燃	構	構	構	燃	燃	構
オニグルミ	-	-	-	-	1	-	-	1
コナラ節	-	-	-	-	1	-	-	1
クリ	1	5	3	-	16*	1	7	19*
カエデ属	-	-	-	1	-	-	-	1
合計	1	5	3	1	18	1	7	22
		8					29	

* 類似種 1 点を含む。

注) 14C年代測定値(β線法)は3730 ± 130BPが得られている(木越 1981)。これを採用すれば縄文時代後期中頃となり、本試料より数百年新しい時期のものとなる。

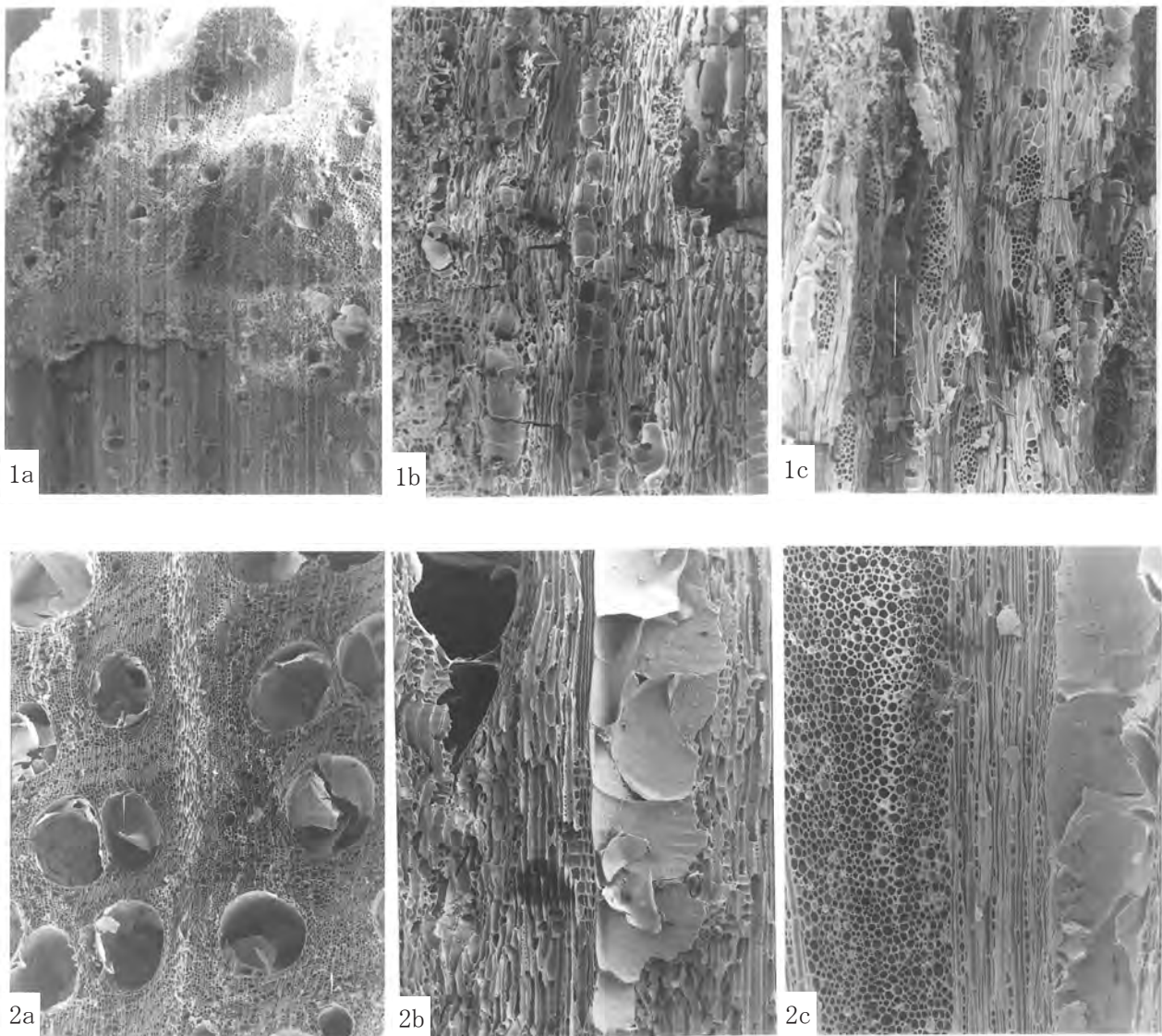


図91 炭化材の電子顕微鏡写真(1)

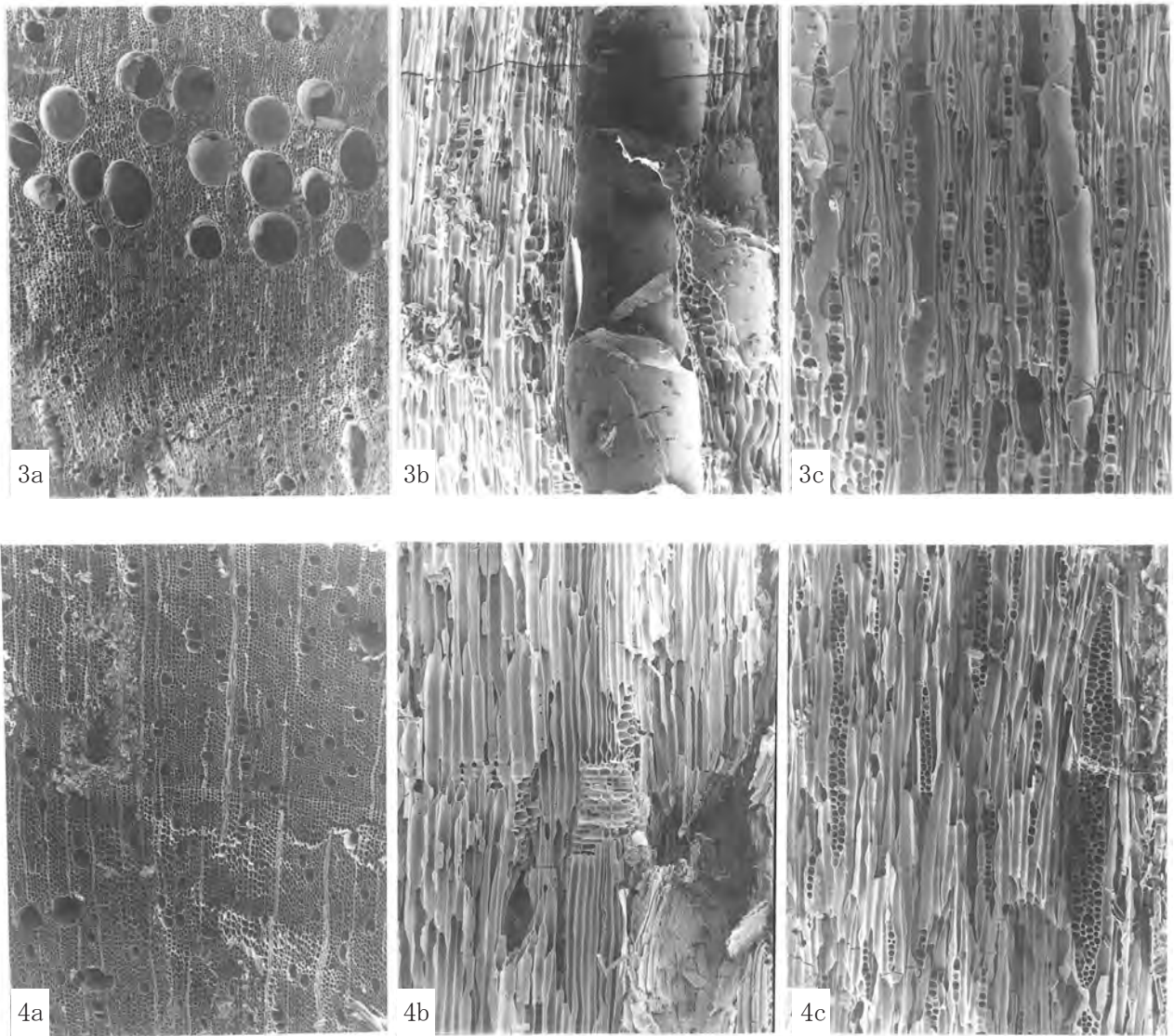


図 92 炭化材の電子顕微鏡写真 (2)

- 図 91 1. オニグルミ No. 15
2. コナラ属コナラ亜属コナラ節 No. 2

- 図 92 3. クリ No. 3
4. カエデ属 No. 11

a: 木口 × 40 b: 柁目 × 100 c: 板目 × 100
樹木の肥大成長方向は木口では画面下から上へ, 柁目では左から右.

引用文献

- 平井信二 1979 「木の事典 第2・3巻」, かなえ書房.
- 平井信二 1980 「木の事典 第4巻」, かなえ書房.
- 木越邦彦 1981 放射性炭素年代測定結果, 「青森県埋蔵文化財調査報告書第65集 国営八戸平原開拓建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ」, 116, 青森県教育委員会.
- 佐竹義輔・原寛・亙理俊次・富成忠夫(編) 1989 「日本の野生植物 木本Ⅰ・Ⅱ」, 平凡社.
- 嶋倉巳三郎 1981 炭化材の樹種, 「青森県埋蔵文化財調査報告書第65集 国営八戸平原開拓建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ」, 116, 青森県教育委員会.
- 高橋利彦 2001 南郷村畑内遺跡第126号住居跡出土炭化材の樹種, 「青森県埋蔵文化財調査報告書第308集 畑内遺跡Ⅶ(第2分冊) -八戸平原開拓建設事業(世増ダム建設)に伴う遺跡発掘調査報告-」, 1-2, 青森県教育委員会.
- 高橋利彦 2006 八戸市潟野遺跡出土炭化材の樹種同定結果, 『潟野遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第412集 pp. 163-168, 2pls., 木工舎「ゆい」.
- 上野雄規(編) 1991 「北本州産高等植物チェックリスト」, 東北植物研究会.

第2節 八戸市新田遺跡縄文時代中期より出土した炭化種実

吉川純子（古代の森研究所）

1. はじめに

新田遺跡は、八戸市の市街地から南に約3kmの新井田川河岸に位置する、おもに縄文時代中期末葉から後期初頭を中心とした集落跡である。当時の植物利用を解明する目的で、住居炉跡及び遺構の焼土層の炭化物の調査をおこなった。

2. 同定結果

同定された炭化種実を表6に示す。表中の数値は個数を示している。クリ子葉破片、果皮破片、トチノキ種皮破片、子葉破片はさまざまな大きさの破片が混在しているので、客観的に比較するために重さ(g)で示した。

SI02住居跡では、炉内埋設土器3試料からクリの子葉及び果皮破片を出土した。また、1試料からトチノキ種皮破片、子葉破片をわずかに出土している。ほかにはヒユ属とザクロソウ種子、核菌綱の菌核、不明炭化物を出土した。SI11住居跡の複式炉内からは焼土及び土器内からオニグルミ内果皮破片とクリ子葉破片をわずかに出土した。SI14住居跡では複式炉土器内からオニグルミ内果皮破

表6 八戸市新田遺跡より出土した炭化種実

分類群	出土部位	SI02 炉内埋設土器			SI02 複式炉	SI02 複式炉内埋設土器3層		SI11 複式炉内	
		3層	4層	3~6層(上)	4層	C-2	C-3	焼土	
オニグルミ	内果皮破片	-	-	-	-	-	-	3	
クリ	種子完形	-	-	-	-	-	-	-	
	子葉破片	1.04g	-	-	-	0.13g	0.1g	0.23g	
	果皮破片	0.1g	-	-	-	-	0.1g	-	
トチノキ	種皮破片	0.1g	-	-	-	-	-	-	
	子葉破片	0.4g	-	-	-	-	-	-	
ヒユ属	種子	-	-	-	2	-	-	-	
ザクロソウ	種子	17	1	-	-	-	-	-	
核菌綱	菌核	-	-	1	-	-	-	-	
不明		3	-	-	-	-	-	-	
		SI11 複式炉	SI14 複式炉土器内		SI14 複式炉	S K 1 4 焼 土			
分類群	出土部位	土器内14層	4層	6層	土器底面付近	1層	2層	3層	
オニグルミ	内果皮破片	1	-	-	1	-	-	-	
クリ	種子完形	-	-	-	-	-	-	-	
	子葉破片	-	0.1g	-	-	-	-	-	
	果皮破片	-	0.05g	-	-	-	-	-	
トチノキ	種皮破片	-	-	-	-	25.95g	2.93g	10.11g	
	子葉破片	-	-	-	-	0.1g	-	0.09g	
ヒユ属	種子	-	-	-	-	-	-	-	
ザクロソウ	種子	-	-	-	-	-	-	-	
核菌綱	菌核	-	-	-	-	1	-	-	
不明		1	-	1	-	-	-	-	
		SK14 炭化物	S K 14 覆 土				SK15 焼土	SX06 焼土	
分類群	出土部位		C-1	C-2	C-3	C-4	2層		
オニグルミ	内果皮破片	4	-	-	-	-	-	-	
クリ	種子完形	1	-	-	1	-	1	-	
	子葉破片	1.98g	0.55g	0.21g	-	1.62g	1.98g	-	
	果皮破片	12.63g	-	-	-	41.93g	0.31g	-	
トチノキ	種皮破片	0.06g	-	-	-	-	0.1g	-	
	子葉破片	0.46g	-	-	-	-	-	-	
ヒユ属	種子	-	-	-	-	-	-	-	
ザクロソウ	種子	-	-	-	-	-	-	-	
核菌綱	菌核	-	-	-	-	-	-	-	
不明		0.79g	-	-	-	-	-	1	

片、クリ子葉破片、果皮破片、不明をわずかに出土した。

用途不明のSK14、SK15は遺構の中央に焼土と炭化物があり、その上に土器片

と炭化物が覆っている。SK14 焼土からはやや多くのトチノキ種皮破片と微量のトチノキ子葉破片、担子菌を出土した。焼土上の覆土からは、少量のトチノキ種皮及び子葉破片と完形のクリ種子、やや多くのクリ子葉破片及び果皮破片を出土した。また、オニグルミ内果皮破片と不明炭化物もわずかに出土した。SK15 焼土からはクリ完形種子1個と子葉破片、果皮破片、わずかなトチノキ種皮破片を出土した。SX06 焼土からは不明炭化物をわずかに出土した

炭化したクリ種子のうち、計測可能な種子について高さ、幅、厚さ、重さ、及び平均値を示した(表7)。本遺跡で出土したクリ種子1個の平均の重さは0.95gであった。これにより破片試料を個数換算すると、SI02 複式炉埋設土器C-2、C-3、SI11 複式炉内焼土、SI14 複式炉土器内4層、SK14 覆土C-1、C-2はいずれも1個以下である。また、SI02 炉内埋設土器3層、SK14 炭化物、SK14 覆土C-4、SK15 焼土2層は、完形出土数とあわせても4個以下であった。

以下に同定された炭化種実の形態記載をおこなう。

オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Miyabe et Kudo) Kitamura): 出土した内果皮破片は緻密で壁は無構造、不規則な曲面としばしば壁に空隙がある。

クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.): 完形種子はまれに一部種皮が残存し、三角形で縦方向に波状の不規則なしわが入る。種子が壊れた子葉破片は一面にしわが残存し、きわめて緻密もしくは縦方向にひびが入る。果実基部の果皮破片は微少な丘状突起が密布してざらつき、それ以外の表面は規則的で構造的な縦筋が密に入る。本遺跡ではクリの完形および外形が一部わかる種子を5個出土した。これら5個のサイズの平均は高さ14.7mm、幅17.5mm、厚さ8.3mm、重さ0.95gであった。北海道函館市(旧南茅部町)の大船C遺跡縄文時代中期後半のH-95住居跡覆土より出土した炭化クリ84個の平均は高さ13mm幅14mmであった(南茅部町2000)。また、ほぼ同時期である大木10式前半の縄文時代中期末葉の福島県飯野町和台遺跡183号住居跡床面直上より出土した炭化クリ47個の平均は高さ19.2mm幅19.7mm厚さ10.8mm重さ1.62gであった(吉川2003)。つまり、北海道の南茅部町よりやや大きい、南方の福島県飯野町に比べるとかなり小さい。

トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume): 種子基部の破片は平滑だがざらつく。それ以外の表面は炭化しても光沢が残る場合が多く、表面には流紋状ないし指紋状の微少模様があり、不規則な形に割れることが多い。子葉破片は表面に不規則な丘状のおうとつがあり、内部に放射状のひびが入ることが多い。なお、トチノキは本遺跡でかなり細かい破片でしか出土せず、完形の種子の重量が不明なため、個数換算ができなかった。

ヒユ属 (*Amaranthus*): 種子は円形で扁平、炭化しても光沢があり、一端にへこんだへそがあり、そこから種子中心に向かってやや深い溝が入る。

ザクロソウ (*Mollugo pentaphylla* Linn.): 種子は腎円形で扁平、一端にややへこんだへそがあり、全面に瘤状の突起が密布する。

表7 新田遺跡より出土したクリ種子計測値

遺構	番号	状況	高さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)
SK14 覆土	C-1	半分破損	(14)	16.3	(6.5)	0.55
SK14 覆土	C-3	完形	14	19.6	6.9	0.75
SK14 炭化物		完形	14.8	16	7.7	0.79
SK14 炭化物		半分破損	15.4	-	-	0.62
SK15 焼土2層		完形	15.5	18.1	12	0.87
完形種子平均値			14.74	17.5	8.3	0.95

核菌綱 (Ascomycotina)： 菌核を出土した。内部は発泡状で無構造、枯死した材や樹皮に付着して生活する。元々黒くて堅いので炭化しているかどうか不明である。

不明 (Unknown)： 形状から球体破片で果実の一部と思われるが、特徴的な構造がなく、表面にも特徴的な模様がないので不明とした。

3. 出土炭化種実からみた当時の植物利用

本遺跡では炭化したクリ、トチノキ、オニグルミを出土した。また、ヒユ属、ザクロソウ、核菌綱をわずかに出土したが、これらは燃焼材に付着していたと考えられる。クリ種子は完形種子に換算すると1試料4、5個以下であった。また、SK14炭化物、SK14覆土C-4の試料では種子重量よりも果皮重量がかなり多く、種子よりも多くの果皮破片が火にくべられた可能性がある。福島県飯野町の和台遺跡では、縄文時代中期末葉の祭祀跡と考えられる遺構からクリ、トチノキ、オニグルミが多量に出土し、果皮や種皮よりも子葉の量が圧倒的に多く、さらにクリ、トチノキは完形種子や半分の種子が多い(吉川2003)。一般に完形の種子を焼却すると水分の少ない果皮や種皮は先に燃焼し、温度が低い条件では種子に付着して残る。水分の多い子葉はほぼ完形の状態で炭化し、ひびがはいった種子は取り上げ時に破壊される。つまり和台遺跡の祭祀遺構ではこれらの果実を完形のまま燃やしたと考えられる。

本遺跡の場合には子葉よりも果皮の方が多く、剥いた皮を火にくべた可能性が高い。完形種子は虫食いなどの食べられない種子と考えられる。トチノキは、クリの完形種子が出土した同一試料でも、完形や半分などの大きな種子がなく、かなり小さな破片のみ出土した。したがって火にくべられたときにすでに破片であったと考えられる。重さで比較すると子葉破片が種皮破片より少なく、特にSK14焼土1～3層で種皮を多く出土している。このことから、剥いた種皮だけを火にくべた可能性が高い。

東北地方の縄文時代中期末頃の複式炉期ではトチノキ属が一部で急増、特に遺跡周辺でこの傾向が顕著であり、クリとともに主要な植物資源であったと考えられている(吉川ほか2005)が、八戸市の複式炉期においても、クリとともにトチノキが利用されていたことが明らかになった。

引用文献

南茅部町教育委員会. 2000. 5節 H-95 検出のクリ炭化子葉. 大船C遺跡. 38-39.

吉川純子. 2003. 附章1 183号住居跡出土炭化種実の同定分析. 和台遺跡. 飯野町教育委員会福島県県北建設事務所. 733-741.

吉川昌伸・吉川純子. 2005. 縄文時代中・後期の環境変化. 日本考古学協会2005年度福島大会シンポジウム資料集. 日本考古学協会2005年度福島大会実行委員会. 13-22.

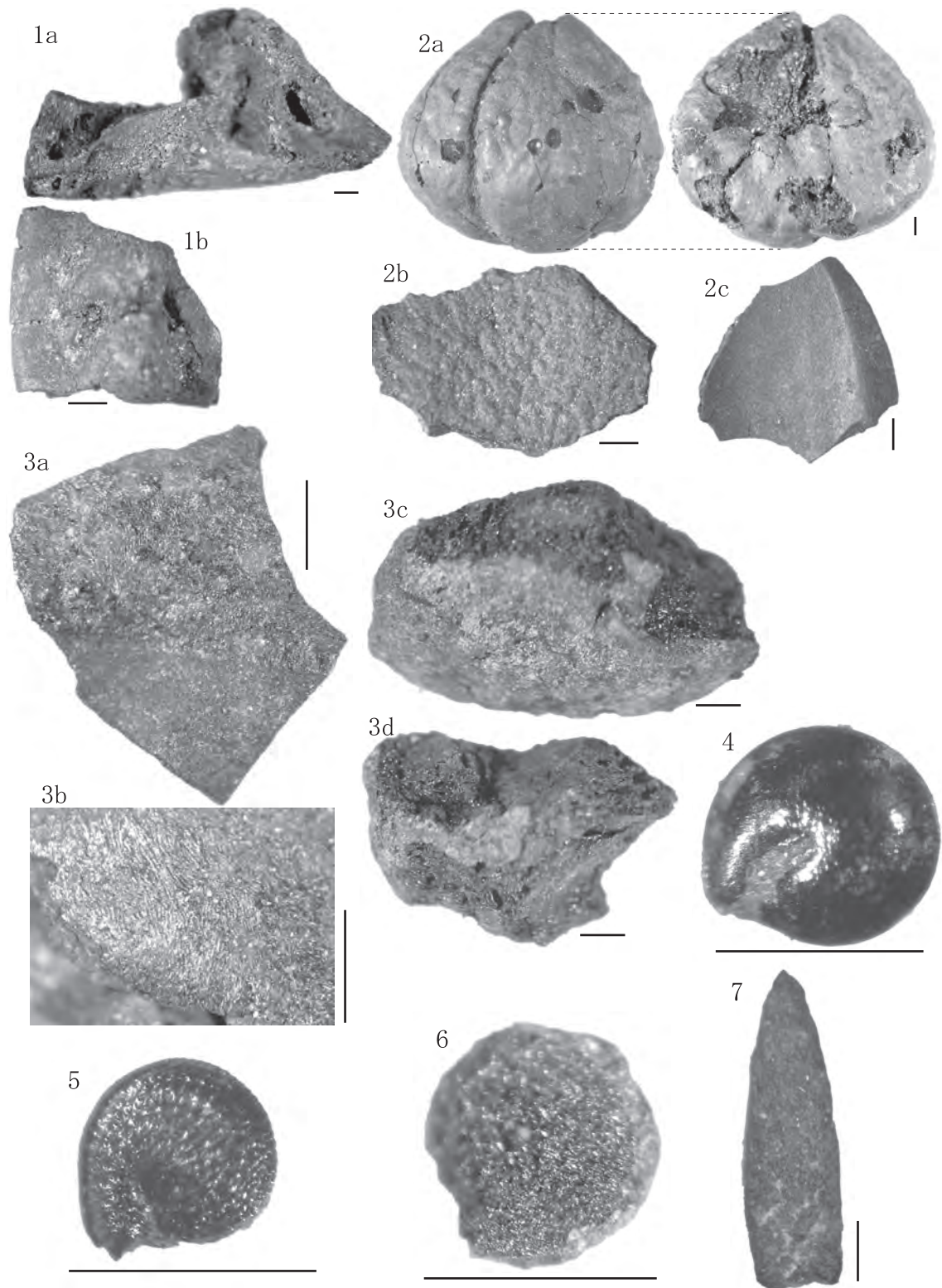


図93 新田遺跡より出土した炭化種実

1 オニグルミ内果皮破片. -1a(SI14複式炉内土器底面). -1b(SK14炭化物), 2 クリ(SK14炭化物). -2a 完形種子. -2b 基部果皮破片. -2c 果皮破片, 3トチノキ. -3a 種皮破片. -3b 種皮表面拡大(SK14焼土1層). -3c; 3d 子葉破片(SI02炉内埋設土器3層), 4 ヒユ属種子(SI02炉内埋設土器6層), 5 ザクロソウ種子(SI02炉内埋設土器4層), 6 核菌綱菌核(SI02炉内埋設土器3~6層上部), 7 不明(SK15焼土2層) スケール=1mm

第3節 土器付着漆および顔料分析

藤根 久 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

新田遺跡の調査では、縄文時代中期末の土器胴部（下半）内面に漆質物が付着した土器が出土した。また、これら漆質物の一部には、赤色物が点状に見られた。

ここでは、漆質物および赤色物の材質を検討するために顕微鏡赤外分光分析および蛍光 X 線分析を行った。

2. 試料と方法

試料は、縄文時代中期末の土器胴部（下半）内面に漆質物である（図 1）。試料は、予め顕微鏡を用いて写真撮影した（図 94）。黒色部表面には明瞭に縮みじわが見られ、点状に赤色物も観察された。分析は、黒色物が漆であるかどうかを同定するために顕微鏡の赤外分光分析を行った。また、赤色物がベンガラ（赤鉄鉱； Fe_2O_3 ）または水銀朱（硫化水銀； HgS ）であるかを同定するために蛍光 X 線分析を行った。各分析の試料採取と分析方法は以下の通りである。

赤外分光分析の測定試料は、黒色部表面において手術用メスなどを用いて 0.2mm 角程度の薄片を採取した。採取した試料片は、押しつぶして厚さ 1mm 程度に裁断した臭化カリウム（ KBr ）結晶板に挟んで、油圧プレス器を用いて約 7 トンで加圧整形した。測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計（日本分光(株)製 FT/IR-410、IRT-30-16）を用いて透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

蛍光 X 線分析の測定試料は、ピンセットを用いて赤色部分を 1mm^3 以下で採取し、アクリル板試料台に載せて点分析した。測定は、X 線分析顕微鏡（(株)堀場製作所製 XGT-5000Type II）を用いた。測定条件は、X 線導管径 $100\ \mu\text{m}$ 、電圧 50KV、電流自動設定、測定時間 500sec である。なお、定量計算は、標準試料を用いない FP 法（ファンダメンタルパラメータ法）で半定量分析を行った。

3. 結果および考察

図 94 に、生漆とともに、黒色部の赤外吸収スペクトル図を示す。縦軸は透過率 (%T ; Transmittance)、横軸が波数 (Wavenumber (cm^{-1}); カイザー) である。なお、スペクトルは、ノーマライズしてあり縦軸の透過率は相対強度である。

図 94 の吸収スペクトルに示した数字は、生漆の赤外吸収位置を示す。生漆の吸収位置（単位； cm^{-1} ）は、No. 1; 2925.48、No. 2; 2854.13、No. 3; 1710.55、No. 4; 1629.55、No. 5; 1454.06、No. 6; 1351.86、No. 7; 1270.86、No. 8; 1087.66 である。

分析した試料は、生漆の吸収位置とほぼ一致することから、漆と同定される。なお、No. 8 の吸収はゴム質であるが、劣化した漆ではこのゴム質の吸収が大きくなることから、この試料は劣化程度の低い漆と考えられる。漆が付着した土器は、内面全体に残留していないが、その表面において明瞭に縮みじわが見られたこと、点状にベンガラも観察されたこと、土器破断面においても付着する様子が

確認されていることから、容器またはパレットの可能性が考えられる。

一方、赤色部の蛍光X線分析では、鉄 (Fe) のピークが明瞭に検出され、半定量分析において最大 56.97% と高いことから、ベンガラと推定される (図 94 の下段の図)。ベンガラは、大きく鉄細菌系と非鉄細菌系に分かれる (馬淵ほか、2003)。鉄細菌系のベンガラとしては、パイプ状ベンガラが知られており、珪藻化石を伴うことから崖端の湧水部や水田などの環境下で生成されたことが考えられている (岡田、1997)。

一部を採取し、偏光顕微鏡で観察した結果、パイプ状ベンガラは認められなかった。

4. おわりに

土器胴部内面の一部に付着する黒色物は、赤外分光分析において漆と同定された。この土器は、明瞭に縮みじわを伴うことなどから、容器またはパレットの可能性がある。なお、随所に点状に見られた赤色物は、蛍光X線分析によりベンガラと推定されたが、パイプ状ベンガラは認められなかった。

引用文献

馬淵久夫・杉下龍一郎・三輪嘉六・沢田正昭・三浦定俊 (2003) 文化財科学の事典、522p. 朝倉書店
岡田文男 (1997) パイプ状ベンガラ粒子の復元. 日本文化財科学会第 14 回大会研究発表要旨集、p38-39.

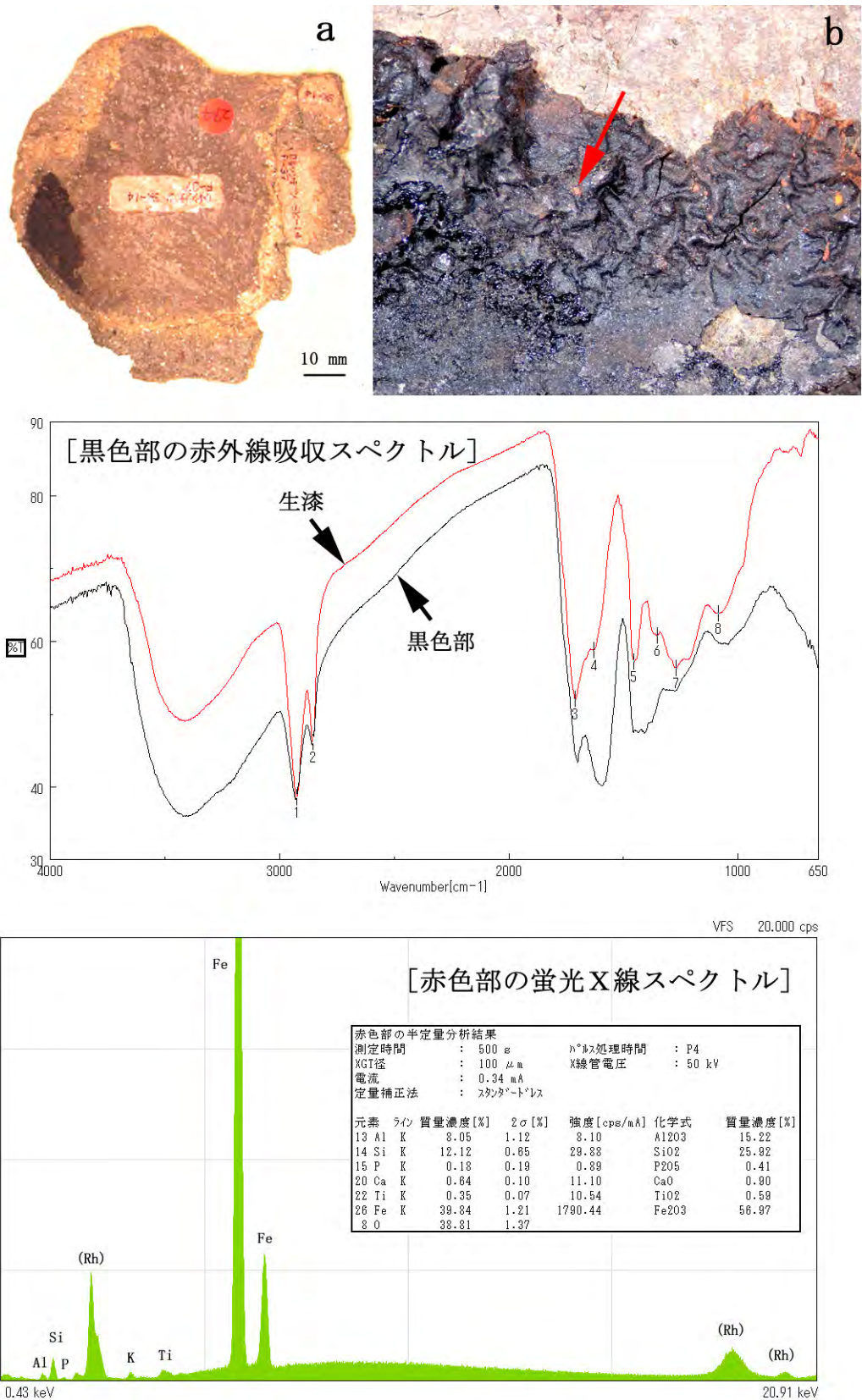


図 94 試料と各分析スペクトル

a. 土器胴部内面に付着する漆物 b. 拡大 (矢印は赤色物；蛍光X線分析採取位置)

上図；黒色部の赤外線吸収スペクトル図

下図；赤色部の蛍光X線スペクトル図と半定量分析結果

第4節 青森県八戸市新田遺跡出土炭化材の¹⁴C年代測定

小林謙一 1)・遠部慎 1)

1) 国立歴史民俗博物館

青森県八戸市新田遺跡出土炭化材の¹⁴C年代測定を試みた。試料は、青森県埋蔵文化財センターにおいて、小林が、採取されていた炭化材を実見し、後から調査担当者の中村哲也氏が送付した。なお、中村が最外縁から採取したほか、樹幹が形をなしていた試料については土ごと塊のまま歴博に送付し、小林が最外縁から採取した。預かった11試料のうち、1点は状態が不良のため保留し、10試料について年代を測定することができた。

試料については、一覧を表8に付す。

1 炭化物の処理

試料については、以下の手順で試料処理を行った。(1)の作業は、国立歴史民俗博物館の年代測定資料実験室において遠部、(2)(3)は、(株)パレオ・ラボに委託した。

(1) 前処理：酸・アルカリ・酸による化学洗浄（AAA処理）。

AAA処理は、自動処理装置(Sakamoto et al. 2002)を用いた。80℃、各1時間で、希塩酸溶液(1N-HCl)で岩石などに含まれる炭酸カルシウム等を除去(2回)し、さらにアルカリ溶液(1N-NaOH)でフミン酸等を除去する工程を5回、さらに2回酸処理(1N-HCl 240分以上)を行いアルカリ分を除いた後、純水を使って洗浄した(5回)。

試料の重量について、AAA前処理を行った量(処理量)、処理後回収した量(回収量)、二酸化炭素を得るために燃焼した量(燃焼量)、精製して得られた二酸化炭素の量に相当する炭素量(ガス)をmg単位で、処理した量に対する回収量の比(回収/処理)、燃焼量に対する炭素相当量の比(含有率)、処理量に対する炭素相当量の比、すなわち前者と後者の積(炭素量/処理)を%で、表2に記す。今回測定できた試料は、炭素含有率が50～60%と高い炭素含有率であり、良好な年代測定用試料といえる。

(2) 二酸化炭素化と精製：酸化銅により試料を燃焼(二酸化炭素化)、真空ラインを用いて不純物を除去。

(3) グラファイト化：鉄触媒のもとで水素還元し、二酸化炭素をグラファイト炭素に転換。アルミ製カソードに充填。

2 測定結果と暦年較正

AMSによる¹⁴C測定は、(株)パレオ・ラボ(機関番号PLD)へ委託した。

年代データの¹⁴C BPという表示は、西暦1950年を基点にして計算した¹⁴C年代(モデル年代)であることを示す(BPまたはyr BPと記すことも多いが、本稿では¹⁴C BPとする)。¹⁴C年代を算出する際の半減期は、5,568年を用いて計算することになっている。誤差は測定における統計誤差(1標

準偏差、68%信頼限界)である。

AMSでは、グラファイト炭素試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を加速器により測定する。正確な年代を得るには、試料の同位体効果を測定し補正する必要がある。同時に加速器で測定した $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比により、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比に対する同位体効果を調べ補正する。 $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比は、標準体(古生物 belemnite 化石の炭酸カルシウムの $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比)に対する千分率偏差 $\delta^{13}\text{C}$ (パーミル, ‰)で示され、この値を-25‰に規格化して得られる $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比によって補正する。補正した $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、 ^{14}C 年代値(モデル年代)が得られる(英語表記では Conventional Age とされることが多い)。 $\delta^{13}\text{C}$ 値については、同位体効果を補正するために加速器により測定した結果を、誤差を付した上で参考として示す。

測定値を校正曲線 IntCal04(^{14}C 年代を暦年代に修正するためのデータベース、2004年版)(Reimer, P, et al. 2004)と比較することによって暦年代(実年代)を推定できる。両者に統計誤差があるため、統計数理的に扱う方がより正確に年代を表現できる。すなわち、測定値と校正曲線データベースとの一致の度合いを確率で示すことにより、暦年代の推定値確率分布として表す。暦年校正プログラムは、国立歴史民俗博物館で作成したプログラム RHCAL (OxCal Program に準じた方法)を用いている。統計誤差は2標準偏差に相当する、95%信頼限界で計算した。年代は、校正された西暦 cal BC で示す。()内は推定確率である。図95は、各試料の暦年校正の確率分布である。

3 年代的考察

暦年校正年代について遺構ごとにみていく。

SI07 住居出土のC1～4は、C1は1層、C2～4はSI07住居下部検出の複式炉内の炭化材である。SI07 覆土中のAOMBN-C1のみは、炭素14年代で $3785 \pm 25^{14}\text{C}$ BPと明らかに新しく、他の複式炉内出土試料は、 1355^{14}C BPと明らかに新しいC4と 4150^{14}C BP頃のC2・3に分かれる。校正年代でみると、 2σ の確率で、C1は紀元前2290-2140年(calBC)に含まれる校正年代で、縄文時代後期前葉に相当する年代である(小林2003)。複式炉出土の試料では、C2・3は、紀元前2800～2650年頃を含む校正年代で縄文中期後葉(関東地方では加曽利E2式後半～E3式前半ころ)に当たる(註1)。一方、C4は奈良時代～平安時代の年代である。同一の複式炉内の炭化物であり、出土位置や、試料の採取部位(樹木の内側年輪部分など不適な部位でないかどうか)をもう一度確認する必要もある(註2)。

SI11 住居1層出土のC6～9は、C8が $4135 \pm 25^{14}\text{C}$ BPと数十年程度古いが、他の試料は、 $4070 \sim 4095 \pm 25^{14}\text{C}$ BPと、 1σ の誤差範囲内で重なり、整合的である。校正年代でみると、 2σ の確率で、やや古いC8を除き、紀元前2855-2490年の中に含まれる年代である。その中でも校正曲線との関係から紀元前2700-2560年ころに含まれる年代である可能性が92.5%ともっとも高くなる。やや古く測定されたC8についても、紀元前2780-2620年に含まれる確率が66%で、それほど大きな差はなく、仮にこれら4試料が本来同一の年代に帰属する試料であるならば、紀元前2700-2620年の中の一時点と仮定することもできる。これらの年代は、小林らのこれまでの測定からみると、縄文中期後葉(加曽利E3式後半 新地平編年12b・c期)の年代ととらえられる(小林2004)。

SK15号土坑1層出土のC10・11は、 $4150 \pm 25^{14}\text{C}$ BPと $4135 \pm 25^{14}\text{C}$ BPと、 1σ の誤差範囲内で重なり、整合的である。校正年代でみると、 2σ の確率で、紀元前2870-2620年の中に含まれる年代であり、その中でもC11では紀元前2780-2620年、またC10を重ねるならば紀元前2655以前

の較正年代の確率ももっとも高く 65% 程度の確率で重なる。関東地方での測定結果に対比させるならば、縄文中期後葉（加曾利 E3 式前半 新地平編年 12a・b 期または新しくみると 12c 期）に近い値となっている。

この分析は、国立歴史民俗博物館 平成 17 年度基盤研究「高精度年代測定法の活用による歴史資料の総合的研究」（研究代表 今村峯雄）および学術振興財団平成 17 年度科学研究費補助金（学術創成研究）「弥生農耕の起源と東アジア炭素年代測定による高精度編年体系の構築―」（研究代表 西本豊弘 課題番号 16GS0118）、平成 17 年度科学研究費補助金「基盤研究 (C) AMS 炭素 14 年代測定を利用した東日本縄紋時代前半期の実年代の研究」（研究代表 小林謙一 課題番号 17520529）の成果を用いている。

本稿を草するにあたり、暦年較正については今村峯雄氏のご教示を得た。感謝します。本稿は、1 を遠部、他を小林が執筆した。

<註>

(1) 調査担当者によれば、SI07 号住居は重複住居であり、下層の住居は複式炉、上層の住居は石囲炉で、反復住居の可能性はある。上層からは縄文地文のみの土器も出土しており、時期比定が困難だが、後期まで下る可能性もあり、検討を要する。

(2) 調査担当者によれば、奈良時代の焼失住居跡が調査区内に存在しており、混在の可能性も考慮される。

<参考文献>

今村峯雄 2004『課題番号 13308009 基盤研究 (A・1) (一般) 縄文弥生時代の高精度年代体系の構築』(代表今村峯雄)

小林謙一 2004『縄紋社会研究の新視点―炭素 14 年代測定の利用―』六一書房

小林謙一・西本豊弘 2003「年代がわかると歴史観が変わる・2」『歴史を探る サイエンス』国立歴史民俗博物館、pp. 1-64

Bronk R. C., 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43, 355-363.

Reimer et al. 2004 IntCal04 Terrestrial Radiocarbon Age Calibration, 0-26 Cal Kyr BP Radiocarbon 46(3), 1029-1058(30).

M. Sakamoto et al. 2002 An Automated AAA preparation system for AMS radiocarbon dating. Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B 223-224: 298-301.

表 8 新田遺跡年代測定試料一覧

試料	ラボコード	出土区	種類	型式
AOMBN C1	PLD-4161	SI-07/1層 C-1	炭化材クリ 塊状	大木 10 式併行
AOMBN C2	PLD-4162	SI-07/複式炉1層 C-1	炭化材クリ 最外部	大木 10 式併行
AOMBN C3	PLD-4163	SI-07/複式炉1層 C-2	炭化材クリ 最外部	大木 10 式併行
AOMBN C4	PLD-4164	SI-07/複式炉1層 C-4	炭化材クリ 最外部	大木 10 式併行
AOMBN C6	PLD-4165	SI-11/1層 C-5	炭化材クリ 塊状	大木 10 式併行
AOMBN C7	PLD-4166	SI-11/1層 C-7	炭化材クリ 最外部	大木 10 式併行
AOMBN C8	PLD-4167	SI-11/1層 C-15	炭化材クリ 塊状	大木 10 式併行
AOMBN C9	PLD-4168	SI-11/1層 C-17	炭化材クリ 最外部	大木 10 式併行
AOMBN C10	PLD-4169	SK-15/焼土上面 C-1	炭化材クリ 最外部	大木 10 式併行
AOMBN C11	PLD-4170	SK-15/1層 C-2	炭化材クリ 最外部	大木 10 式併行

表 9 新田遺跡年代測定用試料炭素含有量

試料	処理量	回収量	回収/処理	前処理後	燃焼量	ガス	含有率	炭素量/処理
AOMBN C1	62.0	22.40	36.1%	良	6.30	3.54	56%	20.3%
AOMBN C2	79.0	13.72	17.4%	良	3.40	1.80	53%	9.2%
AOMBN C3	42.0	14.61	34.8%	良	5.20	2.85	55%	19.1%
AOMBN C4	72.0	10.81	15.0%	良	2.60	1.54	59%	8.9%
AOMBN C6	65.0	33.79	52.0%	良	6.50	3.72	57%	29.8%
AOMBN C7	30.0	17.78	59.3%	良	5.20	3.00	58%	34.2%
AOMBN C8	31.0	12.77	41.2%	良	5.50	3.15	57%	23.6%
AOMBN C9	29.0	5.30	18.3%	良	3.50	1.90	54%	9.9%
AOMBN C10	161.0	79.05	49.1%	良	6.90	3.97	58%	28.3%
AOMBN C11	34.0	16.82	49.5%	良	4.20	2.48	59%	29.2%

表 10 測定結果と暦年較正年代

試料番号	測定機関番号	炭素年代 $\delta^{13}\text{C}\text{‰}$	^{14}C BP (補正值)	暦年較正 cal BC	(%) は確率密度
AOMBN-C1	PLD-4161	(-26.1 ± 0.2)	3785 ± 25	2290-2140	95.6%
AOMBN-C2	PLD-4162	(-26 ± 0.1)	4140 ± 25	2870-2825	18.9%
				2825-2800	8.6%
				2795-2625	67.9%
AOMBN-C3	PLD-4163	(-25.9 ± 0.1)	4150 ± 25	2875-2830	19.0%
				2820-2655	70.5%
				2655-2630	6.0%
AOMBN-C4	PLD-4164	(-28 ± 0.1)	1355 ± 25	AD640-AD690	92.9%
				AD750-AD765	2.5%
AOMBN-C6	PLD-4165	(-26.1 ± 0.1)	4075 ± 30	2855-2810	14.2%
				2745-2725	3.0%
				2695-2560	66.6%
				2535-2495	11.7%
AOMBN-C7	PLD-4166	(-25.2 ± 0.1)	4095 ± 25	2855-2810	20.6%
				2750-2720	6.3%
				2700-2570	67.7%
				2510-2505	0.8%
AOMBN-C8	PLD-4167	(-27.8 ± 0.1)	4135 ± 25	2870-2800	27.7%
				2795-2780	1.8%
				2780-2620	65.9%
AOMBN-C9	PLD-4168	(-31.5 ± 0.3)	4070 ± 25	2850-2840	0.5%
				2840-2810	10.7%
				2695-2685	0.5%
				2675-2560	69.4%
				2535-2490	14.3%
AOMBN-C10	PLD-4169	(-26.1 ± 0.1)	4150 ± 25	2875-2830	19.0%
				2820-2655	70.5%
				2655-2630	6.0%
AOMBN-C11	PLD-4170	(-25.7 ± 0.2)	4135 ± 25	2870-2800	27.7%
				2795-2780	1.8%
				2780-2620	65.9%

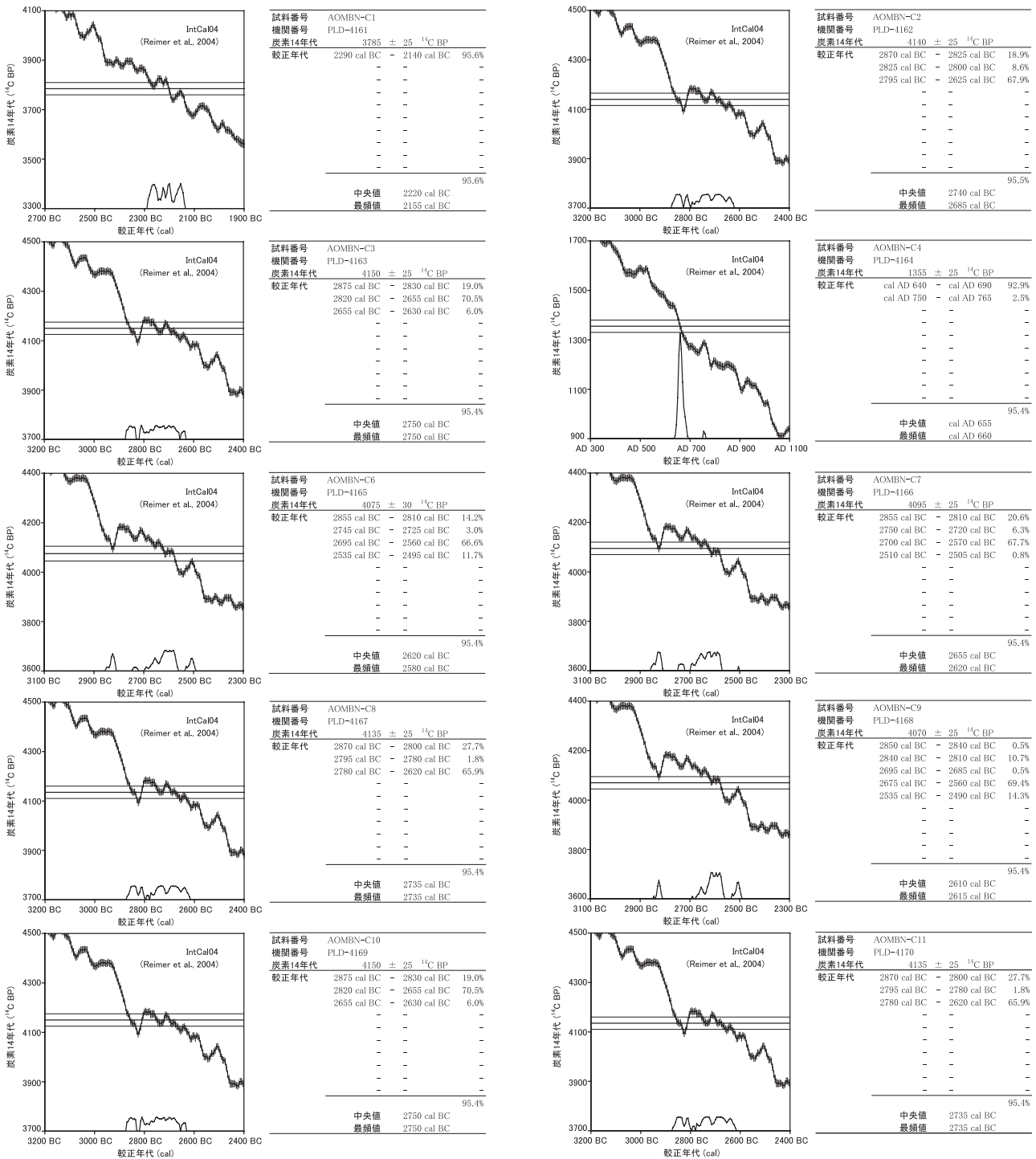


図 95 新田遺跡測定試料の暦年較正確率密度分布

中央値はその左右で確率密度が等しくなる値、最頻値はもっとも高い確率を与える値であるが、どちらも統計学上の数値であり、試料の年代として推奨される値とは限らない。

第5節 新田遺跡土器胎土分析について

弘前大学・理工学部・地球環境学科
柴 正敏

新田遺跡より出土した土器について胎土分析を行った。土器のペースト部及び砂粒子について、それらを構成する鉱物についてX線粉末回折法（XRD法）を用いて決定した（表11）。使用した装置は、弘前大学理工学部所有の理学電機社製ガイガーフレックス2013型である。分析条件は以下の通りである。

対陰極：Cu、フィルター：Ni、電圧：30 kV、電流：15 mA、レンジ：2 kcps、
時定数：2秒、チャートスピード：20mm/分、走査速度： $2\theta = 2^\circ$ /分、
走査範囲： $2\theta = 2^\circ \sim 30^\circ$ 、スリット： $1^\circ - 0.15\text{mm} - 1^\circ$ 。

ペースト部を構成する粘土鉱物はセリサイト（二八面体型雲母鉱物）が殆どである（表11）。代表的な粘土鉱物の分解温度は、セリサイトが約1,000°C、緑泥石が約800°C、カオリン鉱物が600～700°Cである。そのためセリサイトのみが初生の粘土鉱物として残存すると考えられる。セリサイトのほかに、スメクタイト、ハロイサイト、バーミキュライト、パイロフィライト、イライト/スメクタイト混合層鉱物及び緑泥石/スメクタイト混合層鉱物が認められるが（表11）、これらは土器の風化や変質により生じたか、あるいは焼成温度が低かった可能性がある。

砂粒子を構成する鉱物は、主に石英と斜長石であり、黒雲母（真珠状光沢持つ）、ホルンブレンド、普通輝石が認められる試料も多い（表11）。黒雲母は特に早期の土器に含まれている。砂粒子は鉱物のほかに、軽石粒子、流紋岩やチャートなどの岩片からなる。

セリサイトは泥岩の続成作用、酸性～中性の火成岩類や火砕岩類の変質作用などによって形成される。泥岩は砕屑粒子として含まれることも多い。一方、ホルンブレンドや黒雲母はカルクアルカリ系列の酸性～中性の火山岩類及び深成岩類に初生鉱物として出現する。単斜輝石（主にオージャイト）は、中性～塩基性の火山岩類や同質の火砕岩類及び中性～塩基性やカルクシリケート質の変成岩類にも形成される。

ペースト部をなすセリサイト、砂粒子を構成する黒雲母、ホルンブレンド、普通輝石、軽石粒子、岩片などを供給できる地質は遺跡周辺に広く分布している。セリサイトは新第三紀中新世の泥岩に広く出現する。例えば、津軽山地を構成する小泊層の泥岩に多産する。黒雲母は白亜紀の花崗岩～花崗閃緑岩に広く産出する。例えば、階上岳を構成する階上岳花崗岩類や深浦の白神岳花崗岩類などある。また、黒雲母は新第三紀中新世の流紋岩質火砕岩類にも出現する。津軽山地の太田凝灰岩や湯ノ沢カルデラを構成する尾開山凝灰岩類などがその例である。ホルンブレンドは黒雲母とともに、上述の花崗岩類や火砕岩類に産出する。単斜輝石（オージャイト）は第四紀の火山岩類に広く出現する。青森県に分布する第四紀の安山岩質～玄武岩質火山岩類には殆ど含まれている。また、新第三紀中新世の

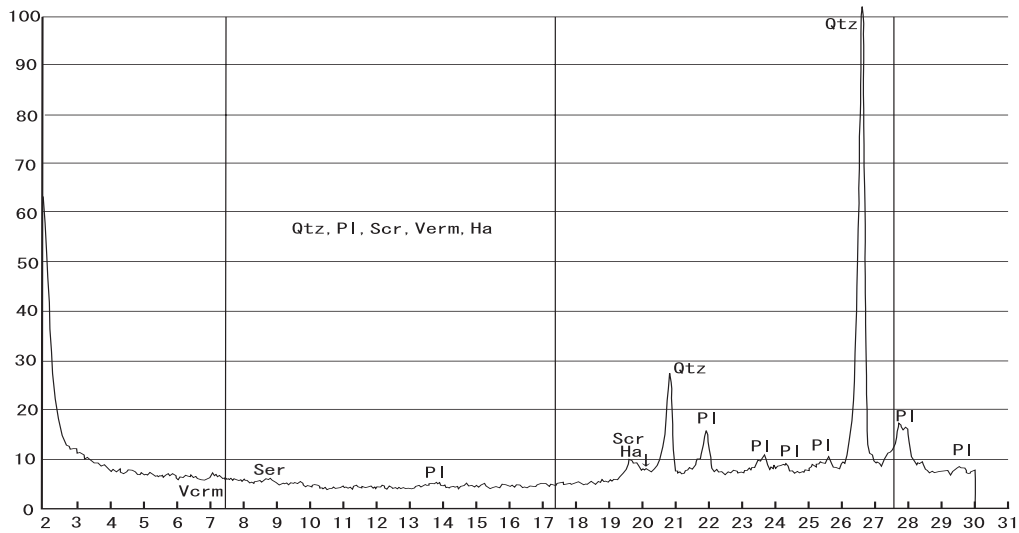
安山岩質～玄武岩質火山岩類及び同質火砕岩類にも多産する。津軽山地の長根層や西津軽地域の尻高沢層や藤倉川層の火山岩類や火砕岩類などがその例である。

従って、土器原料の産地特定についてはより詳細な調査が必要である。鉱物や軽石を構成する火山ガラスの化学組成をEPMAなどで決定し、露頭より採集した試料のガラス及び鉱物組成と比較する方法が考えられる。今後のデータの蓄積に期待したい。

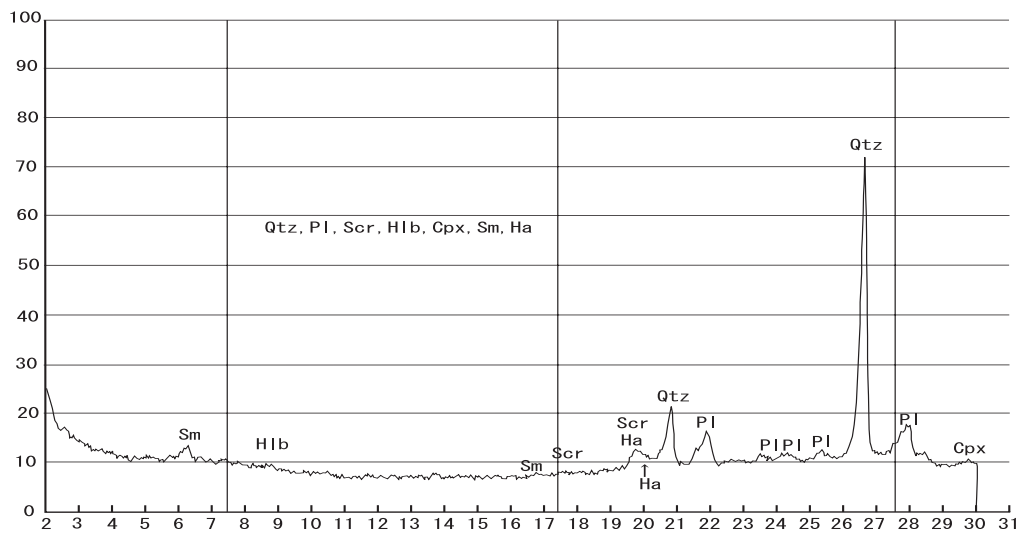
表 11. 新田遺跡土器胎土分析

試料No.	注記	時期	色調	鉱物	特記事項
1	SI-02 炉内土器 P-2	中期末葉	黒褐色系	石英、斜長石、ホルンブレンド、普通輝石、セリサイト	軽石粒子（径約1mm）を含む
2	SI-11 複式炉 P-26 ほか	中期末葉	黒褐色系	石英、斜長石、ホルンブレンド、セリサイト、(スメクタイト)	
3	SI-11 炉体	中期末葉	褐色系	石英、斜長石、セリサイト	岩片（径約1mm）を含む
4	SI-11P-126 床ほか	中期末葉	灰褐色系	石英、斜長石、黒雲母、ホルンブレンド、セリサイト、(ハロイサイト)	
5	SK-14 P-16・17・42	中期末葉	灰褐色系	石英、斜長石、セリサイト、(スメクタイト)	岩片（径約1mm）を含む
6	SR-01	中期末葉	褐色系	石英、斜長石、セリサイト、(ハロイサイト)	岩片（径約1mm）を含む
7	SX-06 P-133 ほか	中期末葉	黒褐色系	石英、斜長石、普通輝石、セリサイト	
8	SX-06 P-25 P-26 P-71 P-127 ほか	中期末葉	灰褐色系	石英、斜長石、ホルンブレンド、普通輝石、セリサイト	
9	II J-111 P-X III層	中期末葉	白色系	石英、斜長石、セリサイト	
10	P-1259	中期末葉	黒褐色系	石英、斜長石、(スメクタイト)、(ハロイサイト)	
11	P-1287	後期		石英、斜長石、セリサイト、(スメクタイト)、(イライト/スメクタイト混合層鉱物)	
12	P-1330	中期末葉	黒褐色系	石英、斜長石、セリサイト、緑泥石、(緑泥石/スメクタイト混合層鉱物)	岩片（径1～0.5mm）を含む
13	P-1357	中期末葉	黒褐色系	石英、斜長石、セリサイト、(イライト/スメクタイト混合層鉱物)	
14	P-1483	中期末葉	褐色系	石英、斜長石、普通輝石、セリサイト	
15	P-1705 1708 1709 ほか	中期末葉	褐色系	石英、斜長石、ホルンブレンド、普通輝石、セリサイト	
16	P-1742	晩期		石英、斜長石、普通輝石、セリサイト、(スメクタイト)、(ハロイサイト)	
17	P-1803	中期末葉	黒褐色系	石英、斜長石、普通輝石、セリサイト	
18	P-1820	早期		石英、斜長石、ホルンブレンド、セリサイト、(スメクタイト)、(ハロイサイト)	
19	P-1904	中期末葉	灰褐色系	石英、斜長石、セリサイト、(スメクタイト)、(ハロイサイト)	岩片（径約1mm）、海綿骨針を含む
20	P-2206	中期末葉	黒褐色系	石英、斜長石、セリサイト、(ハロイサイト)	
21	P-2481	中期末葉	灰褐色系	石英、斜長石、セリサイト	軽石粒子を含む
22	P-2545 2546 3811	中期末葉	黒褐色系	石英、斜長石、ホルンブレンド、普通輝石、セリサイト、(スメクタイト)、(ハロイサイト)	
23	P-2576	後期		石英、斜長石、セリサイト、(バーミキュライト)、(ハロイサイト)	
24	P-2820	中期末葉	褐色系	石英、斜長石、セリサイト、(ハロイサイト)	
25	P-2862	中期末葉	褐色系	石英、斜長石、ホルンブレンド、セリサイト、(スメクタイト)	
26	P-3783	中期末葉	黒褐色系	石英、斜長石、ホルンブレンド、普通輝石、セリサイト、(スメクタイト)、(ハロイサイト)	
27	P-4357	中期末葉	黒褐色系	石英、斜長石、セリサイト	
28	P-4720	中期末葉	黒褐色系	石英、斜長石	軽石粒子（1～0.5mm）を含む
29	P-5104	中期末葉	黒褐色系	石英、斜長石、ホルンブレンド、普通輝石、セリサイト、(スメクタイト)、(ハロイサイト)	岩片（径1～0.5mm）を含む
30	P-6147	中期末葉	褐色系	石英、斜長石、ホルンブレンド、普通輝石、セリサイト	軽石粒子（径約1mm）を含む
31	P-6381	中期末葉	黒褐色系	石英、斜長石、セリサイト、(スメクタイト)、(ハロイサイト)	
32	P-6874	中期末葉	黒褐色系	石英、斜長石、セリサイト、(スメクタイト)	
33	P-7801	中期末葉	黒褐色系	石英、斜長石、ホルンブレンド、セリサイト	
34	P-8415	早期		石英、斜長石、ホルンブレンド、セリサイト	
35	P-8419	早期		石英、斜長石、セリサイト、(スメクタイト)	軽石粒子、海綿骨針を含む
36	P-8867	早期		石英、斜長石、黒雲母、ホルンブレンド、普通輝石、セリサイト	黒雲母は真珠状光沢
37	P-8897	早期		石英、斜長石、黒雲母、ホルンブレンド、普通輝石、セリサイト	黒雲母は真珠状光沢
38	P-8913	早期		石英、斜長石、黒雲母、ホルンブレンド、普通輝石、セリサイト	黒雲母は真珠状光沢
39	P-907	中期末葉	白色系	石英、斜長石、ホルンブレンド、普通輝石、セリサイト	
40	P-X I層	中期末葉	黒褐色系	石英、斜長石、(バーミキュライト)、(パイロフィライト)	岩片（径1～0.5mm）を含む
41	P-X II J-11 III層	中期末葉	黒褐色系	石英、斜長石、セリサイト、(スメクタイト)、(ハロイサイト)	
42	P-X II層	中期末葉	褐色系	石英、斜長石、ホルンブレンド、普通輝石、セリサイト	
43	P-X	中期末葉	白色系	石英、斜長石、セリサイト、(スメクタイト)	
44	SI-07 粘土1	中期末葉～後期初頭		石英、斜長石、スメクタイト、ハロイサイト	
45	谷底堆積粘土			石英、斜長石、スメクタイト、ハロイサイト、パイロフィライト	

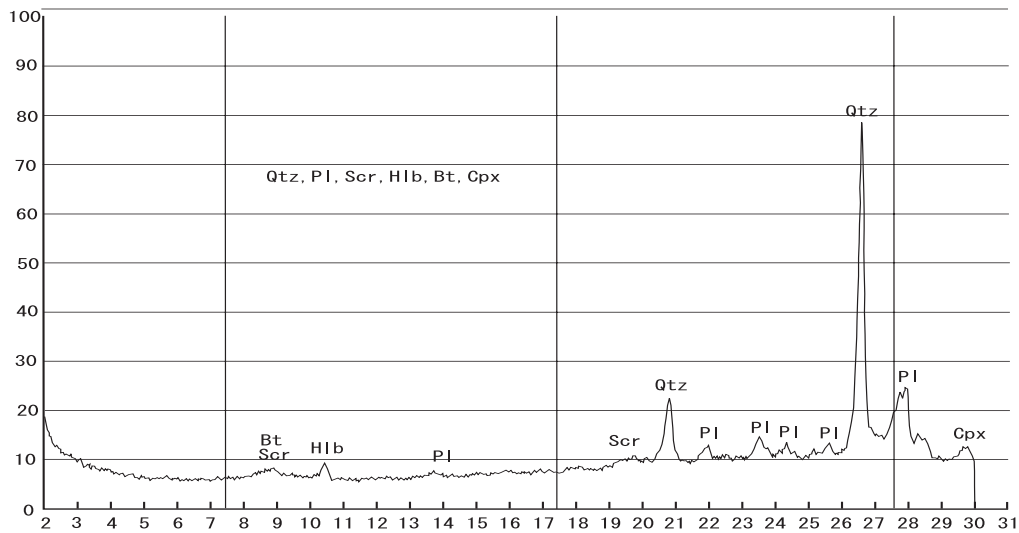
*カッコ内の鉱物は土器の変質によるものと考えられる



NO. 23



NO. 26



NO. 37

Bt : 黒雲母、Cpx : 普通輝石、Ha : ハロサイト、Hlb : ホルンブレンド、p1 : 斜長石、Qtz : 石英、Ser セリサイト、Sm : スメクタイト、Verm : バーミキュライト

図 96 X線粉末回折分析の結果

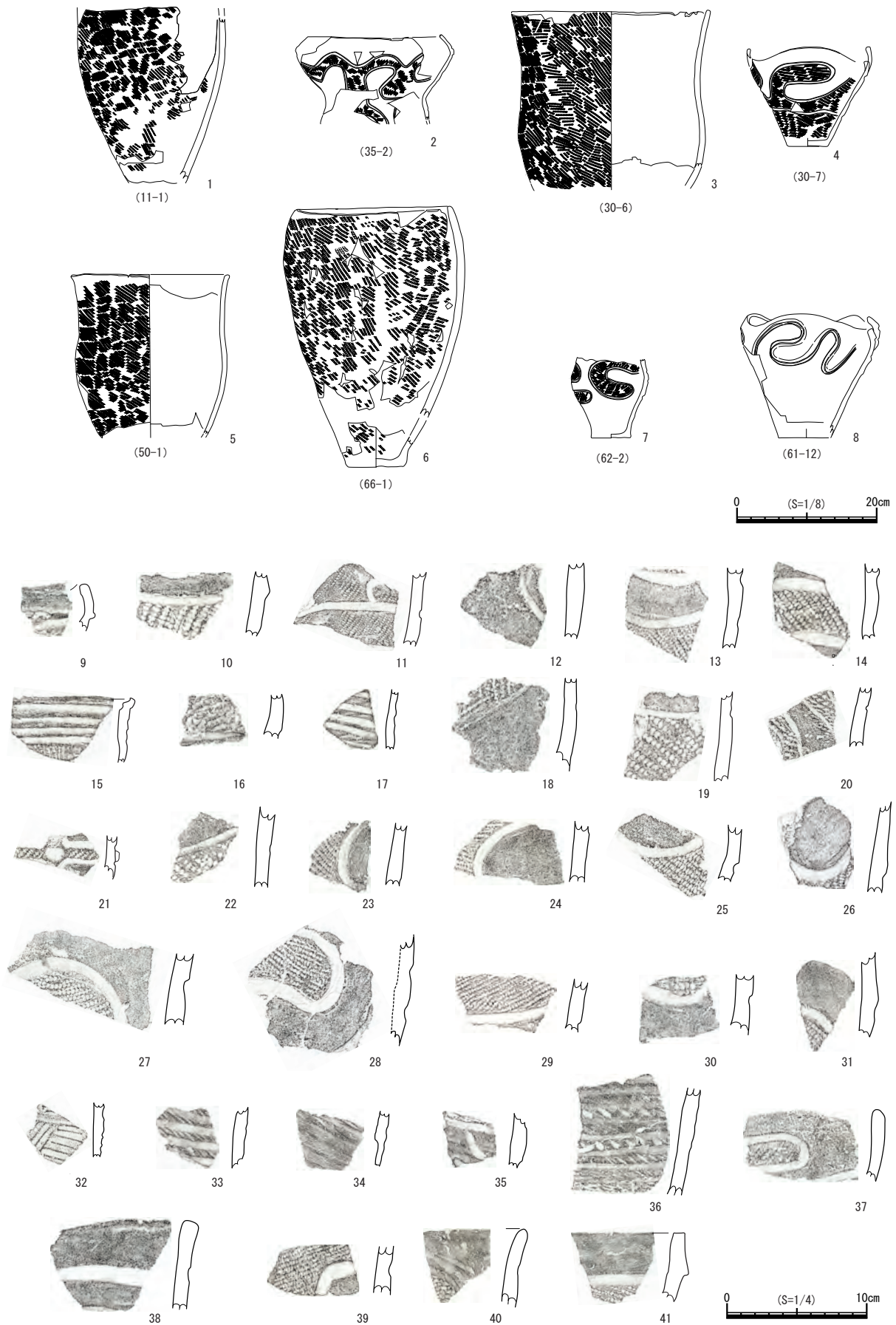


图 97 胎土分析資料実測图

第6節 新田遺跡出土の火山灰について

弘前大学・理工学部・地球環境学科
柴 正敏

新田遺跡より採集された、火山灰サンプル（10 試料）について、以下の観察・分析を行った。これら試料について、超音波洗浄器を用いて水洗し、粘土鉱物など数マイクロメートル以下の粒子を除去した後、偏光顕微鏡を用いて、火山ガラスの有無、火山ガラスが存在する場合にはその形態、構成鉱物の種類を観察・記載した。その結果を表 12 に示した。火山ガラスは、その形態、屈折率、化学組成、共存鉱物などにより給源火山を推定できる可能性がある（町田・新井、2003）。火山ガラスの化学組成を決定する方法として、近年、電子プローブマイクロアナライザー（以下 EPMA）がもちいられるようになってきた。本報告では、1 試料の火山ガラスについて EPMA 分析を行った。使用した EPMA は弘前大学・理工学部所有の日本電子製 JXA - 8800RL、使用条件は加速電圧 15 kV、試料電流 3×10^{-9} アンペアである。補正計算は ZAF 法に従った。

ガラスの形態及び共存鉱物（アルカリ長石及びヘデン輝石の共存）より、試料 1, 5 及び 8 の 3 試料は、白頭山苦小牧テフラ起源のガラスを含むと考えられる（表 12）。これらの試料には、粗粒な褐色ガラスや石英、針状のホルンブレンド、粗粒な軽石粒子が認められることより、十和田 a テフラ及び十和田八戸テフラが混入していると考えられる。

試料 2 に含まれる火山ガラスについて EPMA 分析を行った（表 13）。上記の観察結果により、十和田 a 及び十和田八戸テフラ起源のガラスの可能性はある。表 2 には比較のため、両テフラガラスの組成を示した。これらのデータからわかるように、両テフラガラスの化学組成は良く似ている（青木・新井、2000；柴他、2001）。本データのみから、両テフラの帰属決定は困難である。ガラスを分離・濃集し蛍光 X 線分析法や ICP 法などによる微量元素の定量が必要であろう。今後の課題としたい。

表 12 にて、「十和田系」とした試料は、ホルンブレンド及び石英を含まず、褐色ガラスが変質しているものである。

（引用文献）

青木かおり・新井房夫（2000）、三陸沖海底コア KH94 - 3、LM-8 の後期更新世テフラ層序。

第四紀研究、第 39 巻、107-120.

町田 洋・新井房夫（2003）、新編火山灰アトラス ー日本列島とその周辺ー。東京大学出版会、pp. 336.

柴 正敏・中道哲郎・佐々木 実（2001）、十和田火山、降下軽石の化学組成変化 ー宇樽部の一露頭を例としてー。弘前大学理工学部研究報告、第 4 巻、第 1 号、11-17.

表 12. 新田遺跡火山灰試料

試料No.	採取地点	層位	ガラス及び鉱物	ガラスの帰属	特記事項
1	SI-05	第2層	ガラス (p m、b w)、褐色ガラス、アルカリ長石、ヘデン輝石、斜長石、石英、ホルンブレンド、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	B-Tm, To-a, To-H	
2*	SI-05	第2層	ガラス (p m、b w)、褐色ガラス、斜長石、石英、ホルンブレンド、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	To-a, To-H	軽石粒子 (1.0 ~ 2.0mm)
3	SI-05	第4層	ガラス (p m、b w)、褐色ガラス、斜長石、石英、ホルンブレンド、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	To-a, To-H	軽石粒子、岩片 (1.0 ~ 2.0mm)
4	SI-05	第4層	ガラス (p m、b w)、褐色ガラス、斜長石、石英、ホルンブレンド、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	To-a, To-H	軽石粒子、岩片 (1.0 ~ 2.0mm)
5	SI-08	第2 a 層	ガラス (p m、b w)、褐色ガラス、アルカリ長石、ヘデン輝石、斜長石、石英、ホルンブレンド、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	B-Tm, To-a	
6	SI-08	第2 b 層	ガラス (p m、b w)、褐色ガラス、斜長石、石英、ホルンブレンド、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	To-a, To-H	軽石粒子、岩片 (1.0 ~ 2.0mm)
7	SI-08	第2 c 層下部	ガラス (p m、b w)、褐色ガラス、斜長石、石英、ホルンブレンド、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	To-a, To-H	軽石粒子、岩片 (1.5 ~ 2.0mm)
8	SI-08	第2 c 層上部	ガラス (p m、b w)、褐色ガラス、アルカリ長石、ヘデン輝石、斜長石、石英、ホルンブレンド、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	B-Tm, To-a, To-H	軽石粒子、岩片 (1.0 ~ 2.0mm)
9	SI-08	第2 d 層上部	ガラス (p m、b w)、褐色ガラス (変質)、斜長石、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	十和田系	岩片 (0.5 ~ 1.0mm)
10	SI-08	第2 d 層下部	ガラス (p m、b w)、褐色ガラス (変質)、斜長石、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	十和田系	軽石粒子、岩片 (1.5 ~ 2.5mm)

p m : 軽石型、b w : バブルウォール型、B-Tm : 白頭山苦小牧テフラ、To-a : 十和田 a テフラ、To-H : 十和田八戸テフラ。

* EPMA 分析を行った試料。

表 13. 新田遺跡、火山ガラスの EPMA データ

十和田系テフラ		SiO2	TiO2	Al2O3	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na2O	K2O	n	Total	EPMA
試料番号 2	最小	76.04	0.28	12.78	1.68	0.00	0.27	2.01	3.02	1.23			
SI-05	最大	78.62	0.45	13.95	2.07	0.20	0.43	2.70	3.67	1.46			
第2層	平均	76.94	0.35	13.27	1.90	0.11	0.33	2.36	3.36	1.37	7	99.17	WDS
	標準偏差	0.90	0.05	0.46	0.13	0.08	0.06	0.23	0.21	0.08			
十和田八戸テフラ													
	青木・新井 (2000)	76.38	0.40	13.43	1.90	0.11	0.44	2.22	3.88	1.24	8	96.56	WDS
十和田 a テフラ													
	青木・新井 (2000)	77.75	0.36	12.73	1.62	0.09	0.38	1.81	3.90	1.37	9	98.41	WDS

測定値は無水で 100% になるように再計算した。FeO* : 全鉄を FeO として計算した。n は分析点数を表す。

WDS は、波長分散型 EPMA を表す。

第7節 新田遺跡採取土壌の自然科学的調査結果

岩手県立博物館 赤沼英男

1 はじめに

青森県八戸市に所在する新田遺跡は、八戸南環状道路建設事業に伴い平成15年・平成16年に緊急発掘調査された遺跡である。平成16年度の発掘調査において、縄文時代早期および大木10式期を主体とする集落跡が確認され、その中から複式炉系列の炉跡や焼土とみられる遺構が多数検出された。焼土遺構には赤褐色を呈しているものの、それが熱の影響を受けたものか、あるいは褐鉄鉱をはじめとする化学物質の混入によるものかを判別することが困難なものもみられた¹⁾。

当該遺構が赤褐色を呈する要因を明らかにするため、遺構面から採取した土壌を自然科学的方法で調査した。以下に調査結果を報告する。

2 調査試料

調査資料は表14に示す遺構から採取された6試料(No.1～No.6)、および近隣の沢地から採取された褐鉄鉱(No.7)である。赤褐色を呈する要因の特定が困難な試料は表14No.2で、No.1・No.3、およびNo.4はそれぞれNo.2の上層、下層、およびNo.2と同じ層位から採取した比較試料である。No.5は石囲炉内焼土、No.6は焼土遺構と判定された遺構面から採取した試料である。

調査試料の採取は、青森県埋蔵文化財調査センター・中村哲也氏および斉藤慶吏氏によって行われた採取された試料の中から赤褐色を呈している部分を選別し、真空凍結乾燥した。乾燥した試料を2分し、一方は組織観察に、もう一方は蛍光X線分析法で含有元素を定性分析した後、酸で溶解し化学成分分析した。

3 分析方法

真空凍結乾燥したNo.1～No.7の試料を、メノー乳鉢で粉砕した後、No.1～No.6については純度99.99%Ti製カップにセットし、蛍光X線分析した。測定装置はサイドウインドー型クロム管球を装着した装置で、印加電圧50KV、印加電流50mA、真空下で、重元素および軽元素を定性分析した。No.1～No.6については蛍光X線分析が終了後、No.7については粉砕した粉末試料から0.02gをテフロン分解容器に直接秤量し、0.797mlのHCl(31.3wt%)、0.217mlのHNO₃(60wt%)、0.2mlのHF(50wt%)、および3mlの蒸留水を加え密栓した後、マイクロウェーブサンプル分解装置にセットし、振動数2,450MHz、三段階(第一段階:100-400W、5分、第二段階:600W、5分、第三段階:1,000W、15分)で分解した。冷却後、4.8ml 硝酸(4wt%)を加え、再びマイクロウェーブサンプル分解装置を用い1000Wで10分間分解した。冷却後、溶液をポリプロピレン製容器に移し、全量が20gになるよう蒸留水で希釈した。このようにして作成した溶液中の全鉄(T.Fe)、Cu(銅)、ニッケル(Ni)、コバルト(Co)、マンガン(Mn)、リン(P)、チタン(Ti)、ケイ素(Si)、カルシウム(Ca)、アルミニウム(Al)、マグネシウム(Mg)、およびジルコニウム(Zr)の12元素を、誘導結合プラズマ発光分光分析法(ICP-AES

法)で分析した。

組織観察用試料はエポキシ樹脂に埋め込み、エメリー紙、ダイヤモンドペーストを使って研磨した。研磨面を顕微鏡で観察し、部分熔融していると思われる領域を、エレクトロン・プローブ・マイクロアナライザー (EPMA) で分析した。

4 分析結果ならびに考察

4-1 抽出した試料の化学組成

図 98～図 101 は表 14 に示す 6 試料に含有される重元素の蛍光 X 線分析結果である。6 試料からは一様に Fe、Mn、Sr (ストロンチウム)、および Br (臭素) が検出され、軽元素として、Si、Al、P、および S の含有が確認された。

表 15 は 7 試料の ICP-AES 法による化学成分分析結果である。No. 1～No. 6 の Si、Al はそれぞれ 23.2～27.5mass%、8.15～9.87mass%、Fe は 3.81～6.16mass%、Mn は 0.101～0.150mass% である。No. 7 褐鉄鉱に含有される Fe は 20.2mass%、Mn、Si、および Al はそれぞれ 0.211mass%、16.8mass%、4.17mass% で、No. 1～No. 6 の約 3～5 倍の Fe が含有されている。

化学成分分析の結果、No. 1～No. 6 に化学組成上明瞭な差異はみられない。赤色の発色源となる Fe の、No. 2 における含有量は 5.73mass% で、No. 7 はもとより、No. 5 および No. 6 に比べても低レベルである。

4-2 抽出した試料の組織観察結果

図 102a は、No. 2 から抽出した試料の EPMA による組成像 (COMP) である。火山ガラス片および微細鉱物を内包する、ガラス化した領域 (G1) が観察される。領域 G1 には Si、Al、Fe、および Mn が高濃度に含有されている (図 102b)。

No. 5 から抽出した試料からは、斜長石 (Pl) と推定される鉱物が、ガラス化した領域 (G1) によって取り囲まれた組織が観察される (図 103a・b)。ガラス化した領域にはいたるところに空隙がみられる (図 103a)。No. 6 から抽出した試料にも No. 2 同様、ガラス化した領域および粘土状物質が部分熔融した組織が観察される (図 104a・b)。

No. 1、No. 3、および No. 4 から抽出した試料には、斜長石 (Pl)、酸化ケイ素 (Qtz: 石英と推定される)、鉄チタン酸化物 (XT)、および火山ガラス片などが観察されるが (図 105)、No. 2、No. 5、および No. 6 において確認された、熔融または部分熔融した後固化したと推定される組織は見出されなかった。

No. 1～No. 7 から抽出した試料の化学成分分析結果、および No. 1～No. 6 から抽出した試料の組織観察結果に基づけば、No. 2、No. 5、および No. 6 の 3 試料からはガラス化した組織が見出されており、外熱を受けた可能性が高い。とりわけ、石囲炉内から採取された No. 5、および焼土遺構から採取された No. 6 は No. 1 に比べ熔融が著しく、より高温下にさらされたとみることができる。

No. 2 の上層および下層、No. 2 と同じ層位から採取した No. 1、No. 3、および No. 4 に被熱の跡がみられなかったこと、赤褐色を呈していなかったことを考え合わせると、No. 2 の来歴としては、①他の場所で熱が加えられ、赤変した資料が運び込まれた、② No. 2 が検出された場所に炉等の熱を発す

る設備が設置されていた、という2点を考えることができる。この点については考古学の発掘調査結果を加味し、検討する必要がある。

註

1) 新田遺跡を発掘調査された青森県埋蔵文化財調査センター・中村哲也、斉藤慶吏両氏からのご教授による。

表 14 調査資料の概要

試料 No.	検出遺構	遺構の土質(肉眼観察)	採取した試料の肉眼観察結果	推定年代	検出状況
No. 1	第Ⅲ層 中振浮石ブロック	注記なし	黄褐色浮石ブロック	-	-
No. 2	SN11 第1層「焼土」	5YR2/3 極暗赤褐色焼土	7.5YR4/6 褐色の焼土粒(φ1~5mm)2%混入 しまりややあり 粘性強 アワズナが母材?	縄文時代早期末~前期初頭	Ⅲ層中で周囲と比較して赤味の強い範囲が確認された。試料No.1の下位であることから縄文時代前期初頭以前の年代が考えられる。
No. 3	第Ⅳ層	10YR2/2 黒褐色シルト	砂を含まない均質なシルト φ1cmの10YR6/8明黄褐色浮石10%含む 下層との境界は漸移的である	-	-
No. 4	第Ⅲ層	10YR2/1 黒色シルト	上層よりやや明度高い 上層より粒径細かくしまっている 中振浮石起源の黄褐色微細粒子含む	-	-
No. 5	SI02 複式炉第1層 石囲炉内焼土	10YR1.7/1 黒色シルト	10YR5/8 黄褐色浮石(φ1~4mm)1%未満混入 しまりあり 中振浮石起源と思われる黄褐色微細粒子含む	縄文時代中期末	-
No. 6	SN08 第1層 焼土	10YR2/1 黒色土主体	焼土1~5%混入	縄文時代中期末	Ⅲ層中で周囲と比較して赤味の強い範囲が確認された。縄文時代中期のSI14の遺構確認面とほぼ同一レベルで確認し、該当する時期の土器が周囲で出土していることから縄文時代中期の年代が考えられる。
No. 7	褐鉄釘	注記なし	-	-	-

注1) No. は分析番号。検出遺構、遺構の土質、採取した試料の肉眼観察結果、推定年代および検出状況は、青森県埋蔵文化財調査センター・中村哲也、斉藤慶吏氏による。

表 15 採取した土壌の化学組成 (mass%)

No.	T. Fe	Cu	Ni	Co	Mn	P	Ti	Si	Ca	Al	Mg	Zr
1	3.81	0.003	0.002	0.003	0.114	0.071	0.442	27.5	3.43	8.93	0.881	0.009
2	5.73	0.005	0.002	0.004	0.135	0.059	0.565	25.0	3.03	8.99	1.14	0.008
3	5.21	0.005	0.002	0.004	0.101	0.088	0.507	23.7	2.04	8.67	0.79	0.009
4	5.60	0.001	0.002	0.004	0.118	0.074	0.543	23.2	2.49	8.91	1.01	0.008
5	6.16	0.007	0.002	0.004	0.150	0.152	0.586	24.6	2.08	9.87	1.34	0.009
6	5.25	0.003	0.002	0.004	0.133	0.093	0.607	27.3	3.11	8.15	1.19	0.008
7	20.2	0.003	0.004	0.003	0.211	1.43	0.279	16.8	2.08	4.17	0.657	0.005

注1) No. は表1に対応。化学成分分析はICP-AES法による。

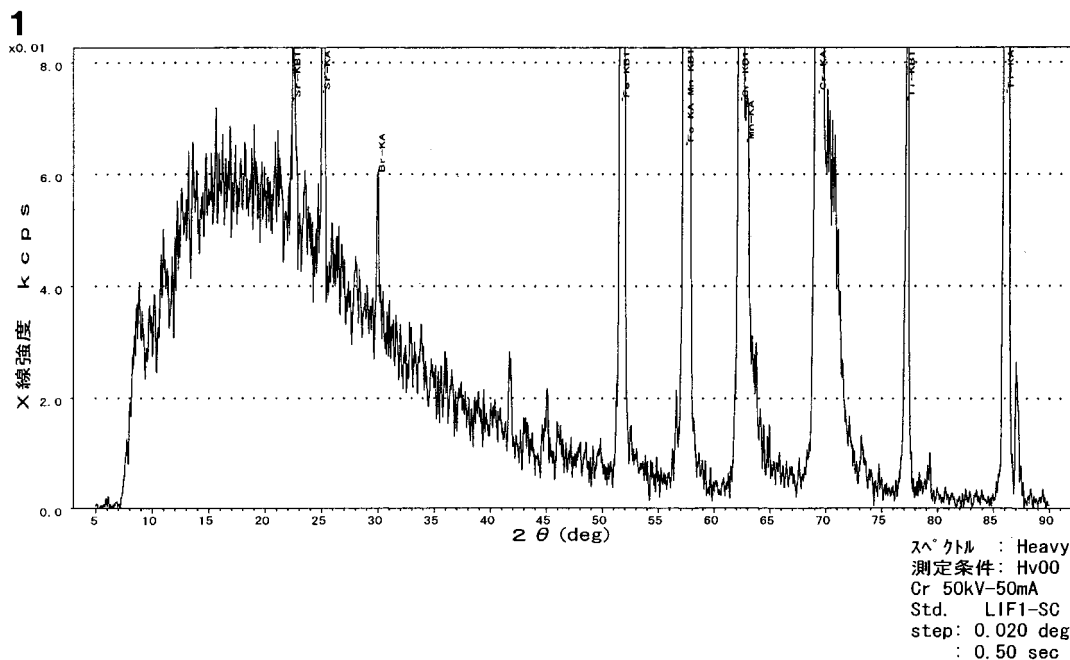


図 98 No. 1 の蛍光 X 線分析結果

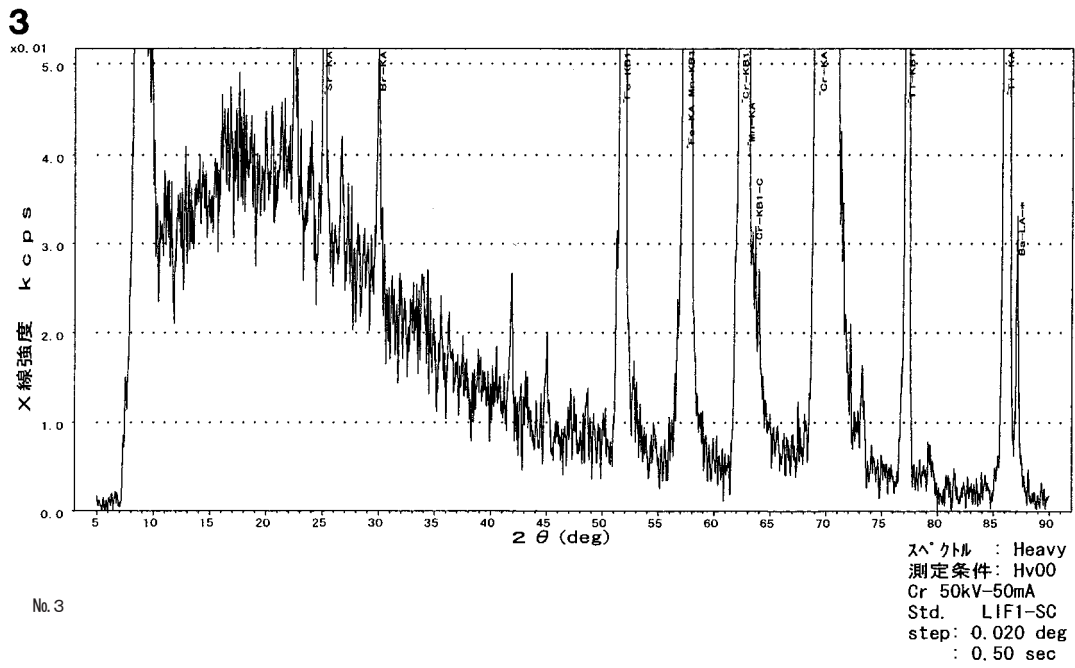
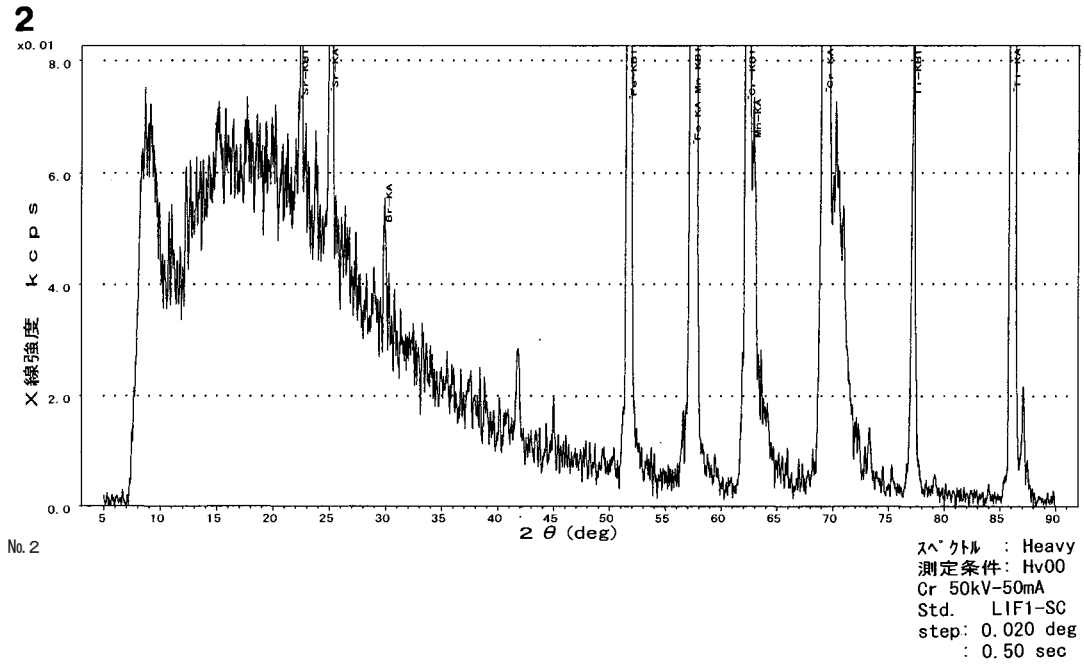
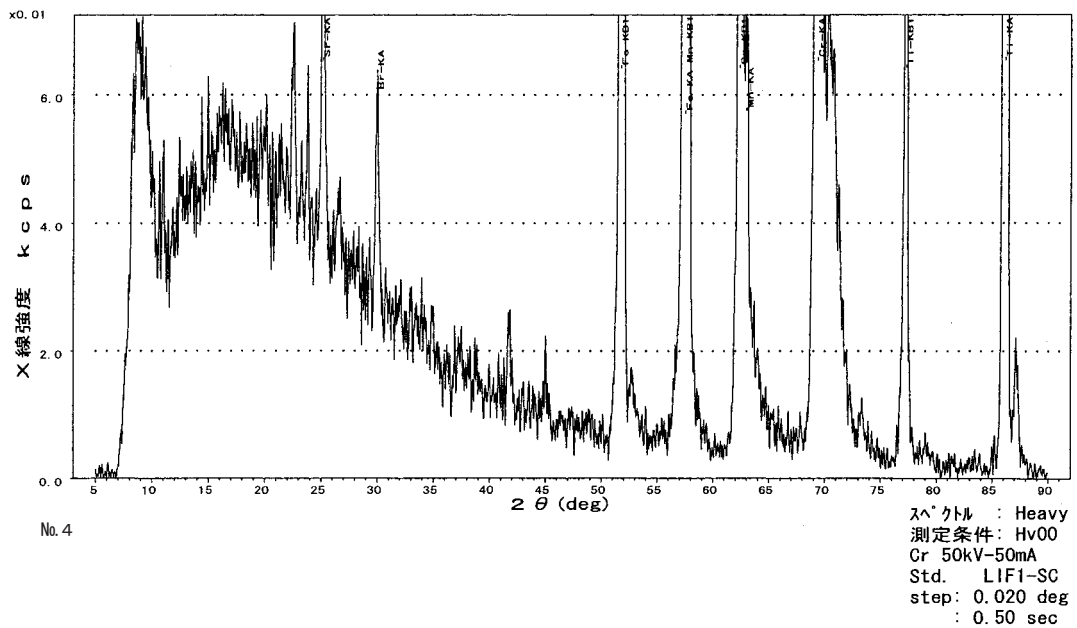


図99 No.2・No.3の蛍光X線分析結果

4



5

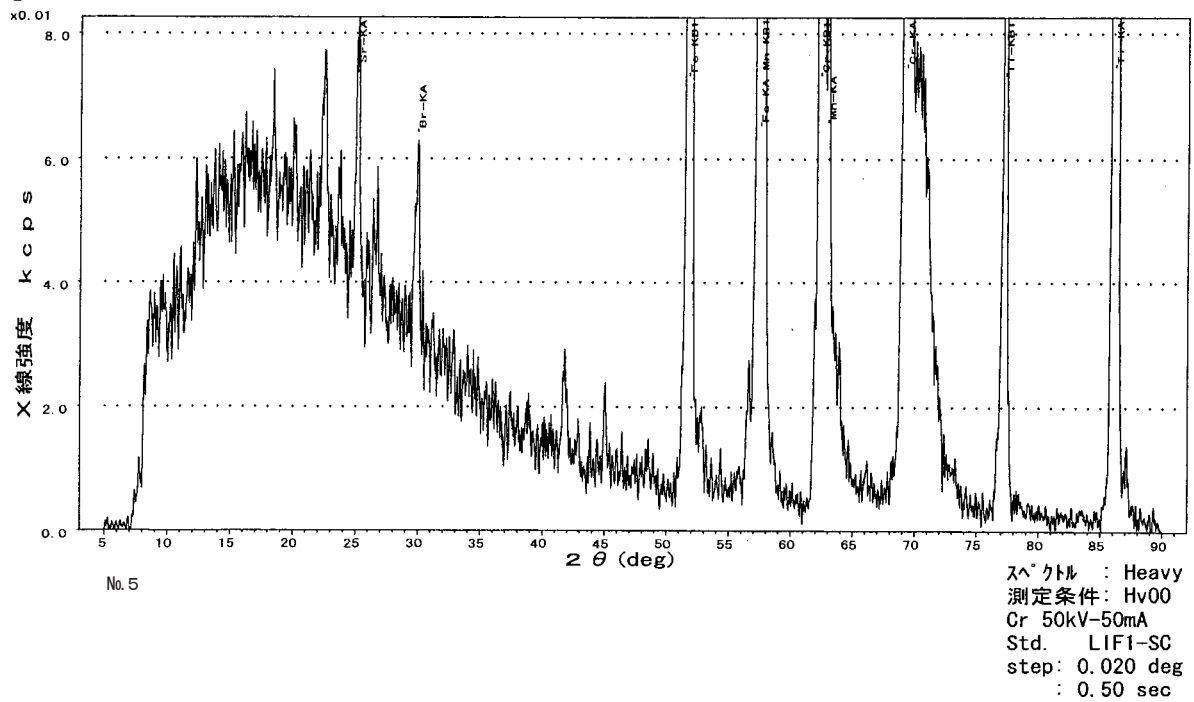


図 100 No. 4・No. 5 の蛍光 X 線分析結果

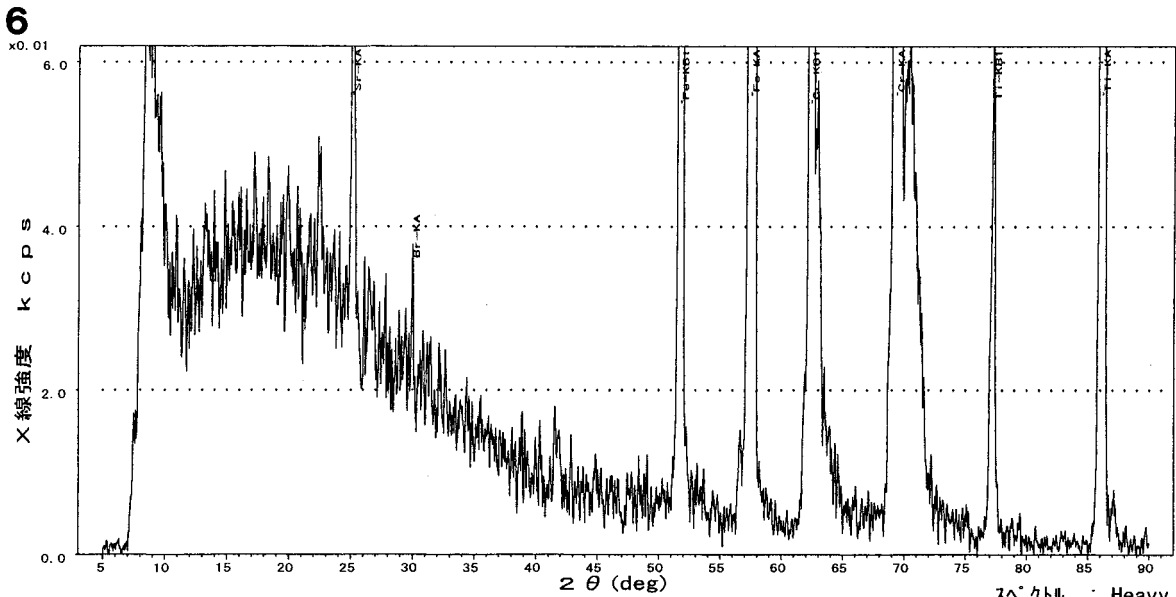


図 101 No. 6 の蛍光 X 線分析結果

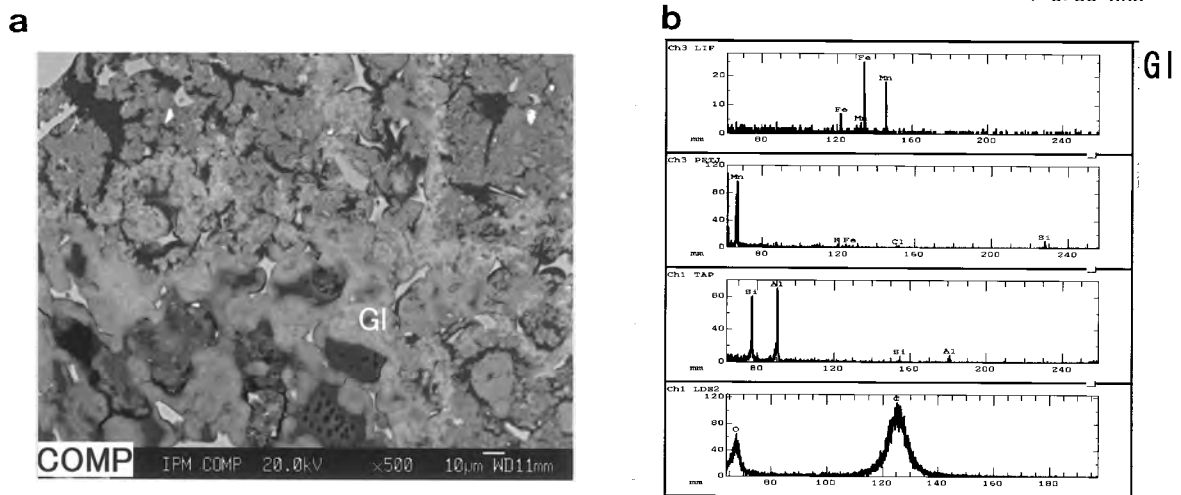


図 102 No. 2 から抽出した試料の EPMA による組成像 (COMP) と定性分析結果

GI はガラス化した領域。

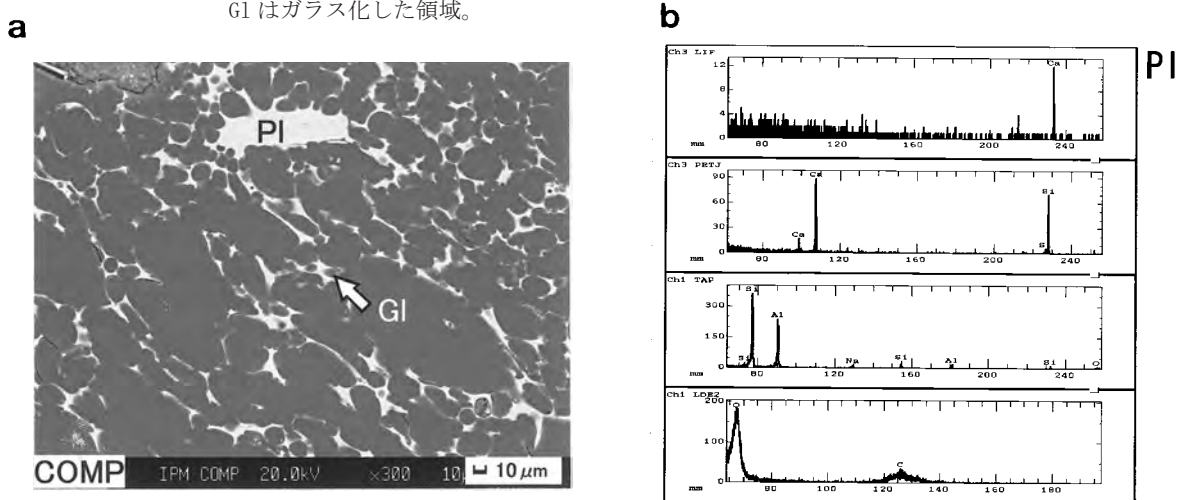


図 103 No. 5 から抽出した試料の EPMA による組成像 (COMP) と定性分析結果

GI はガラス化した領域。

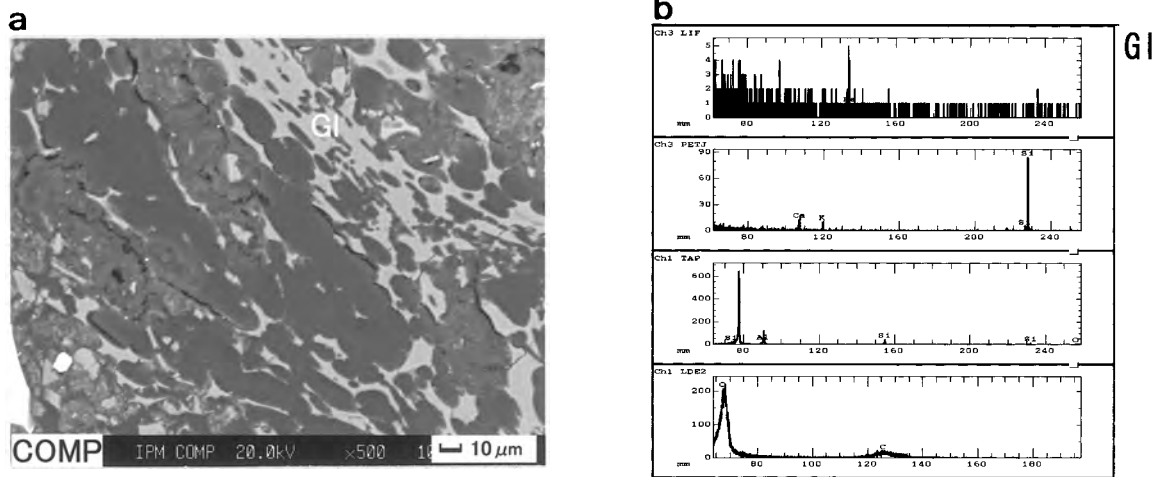


図 104 No. 6 から抽出した試料の EPMA による組成像 (COMP) と定性分析結果
G1 はガラス化した領域。

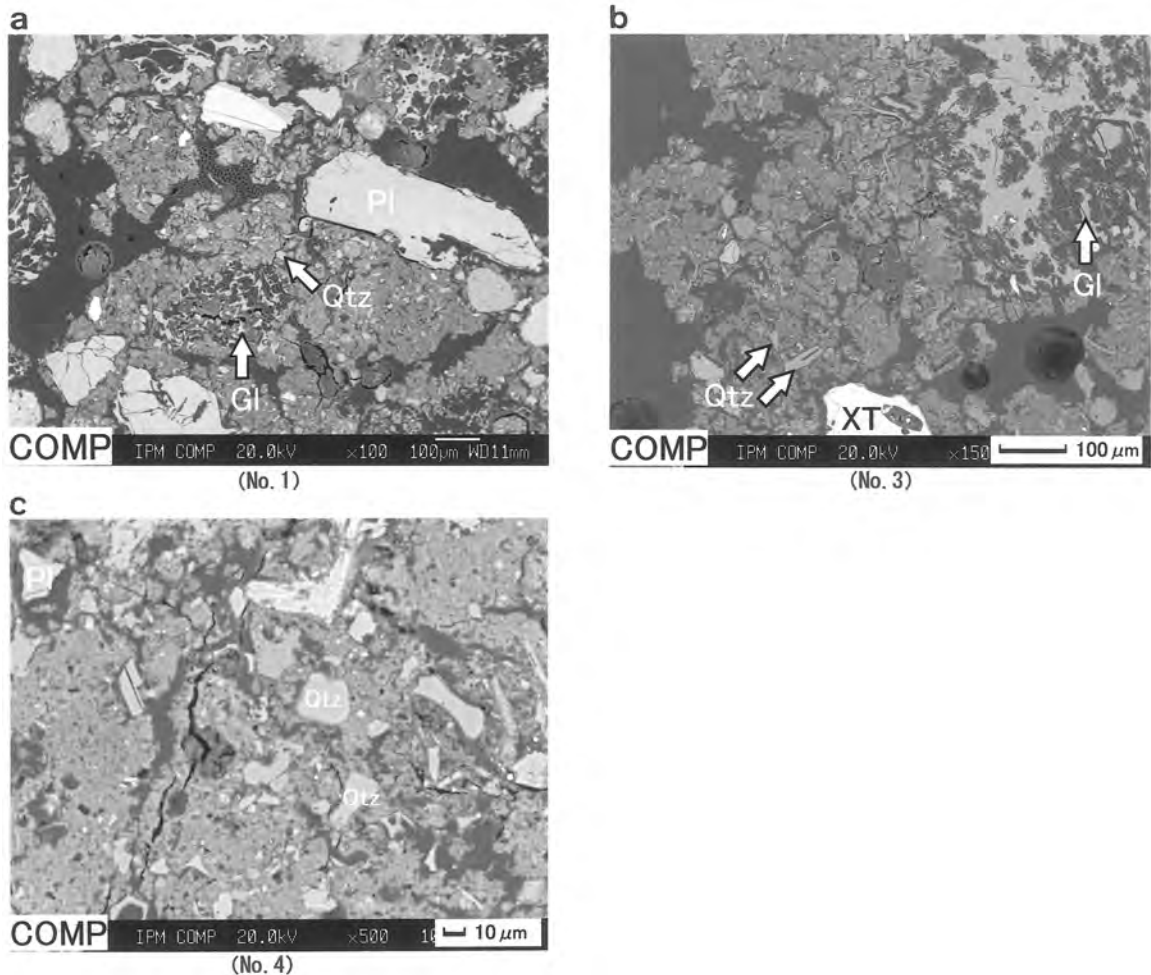


図 105 No. 1・No. 3・No. 4 から抽出した試料の EPMA による組成像 (COMP) と定性分析結果
Qtz: 酸化ケイ素 (石英と推定される)、XT: 鉄チタン酸化物、G1 はガラス化した領域 (火山ガラス片と推定される)。

第6章 考察

第1節 縄文時代中期末葉の土器について

本遺跡の出土土器の大半を占めるのが第Ⅷ・Ⅸ群とした縄文時代中期末葉に属する土器である。これまで、青森県内の縄文時代中期末葉の土器型式は大木10式併行期の土器、あるいは大曲Ⅰ式として理解することが一般的であった。それは、上北・下北・津軽地域において、縄文地文に沈線文を施す土器が分布することが知られており、大木10式と区別する必要があったからである。しかし、本遺跡の第Ⅷ群土器には縄文地文に沈線文を施す土器は存在せず、広義の磨消縄文手法で文様が描出されるのが一般的で、大木10式に直接対比しうるものである。以下に、大木10式との対比をとおして第Ⅷ群土器の時間的位置づけを考える。

第4章において出土遺物の分類を示したが、小破片から大型の破片、復元土器をすべて同じ基準で分類することは困難で、手法を中心にした分類にとどまらざるを得なかった。そこで、出土遺物を再掲し、属性単位で検討を加える。

<p>口縁部形状</p> <ul style="list-style-type: none"> a. 平縁 b. 緩い波状口縁 	<p>文様の区画線</p> <ul style="list-style-type: none"> 1 沈線 形状はbによる。先端の丸い工具により重ね引きされたもの。 2 稜沈線 沈線に沿って無文部側に隆起線を施し、無文部を磨くことで、無文部側が緩やかに、沈線側が急傾斜になる。 3 微隆起線 	<p>文様</p> <ul style="list-style-type: none"> 1 縄文施文部が文様の主体をなす。磨消部は比較的幅が狭く、文様帯のキャンパスの役割を果たしている。 2 無文部が文様の主体をなす(19-11)。
---	--	---

<p>主モチーフ</p> <ul style="list-style-type: none"> 1 波頭文(30-7、35-17、61-12) 2 O字文(35-14) 3 縦位のS字文(「S」を反転したものも含む)S字類似文様(36-16、43-8、74-17) 4 x字状の連繫文(35-2、36-1、53-15、75-3) 5 C字文(「C」を反転したものも含む)(36-1、61-8、62-2) 6 無文部が水平方向に伸びるもの(19-11) 	<p>文様描出技法</p> <p>縄文と沈線の切り合い関係では縄文が沈線を切るもの、沈線が縄文を切るもの両者がある。沈線は、引き直した痕跡をとどめているものがある(35-14、44-6、49-2、76-5など)。また、縄文部は、文様のモチーフに沿って縄文の回転方向を順次変えるものが見られる。これは、縄文を沈線が切るものの中にも認められる。文様モチーフに沿って縄文施文の方向が変化することは、縄文施文時点で既に沈線が認識できること意味している。従って、縄文と沈線の切り合い関係は、狭い意味での充填か磨消しかを定義する条件になりえず、縄文を沈線が切るものは再調整が施されたものとして理解できる。これらの点から、文様描出技法は沈線(下書き)→縄文施文→沈線の再調整という工程をとったものと考えられる(充填縄文)。縄文施文の方向が変化せず、沈線が縄文を切るものは、縄文施文→沈線の工程を採った可能性と、上記の充填縄文の可能性がある。この両者を合わせて、広義の磨消縄文と呼称する。分類基準は小林(1993)に準ずる。</p>
<p>文様下端区画モチーフ</p> <ul style="list-style-type: none"> 1 波状文(35-14、35-17、48-7、49-12、61-1、75-3) 2 形骸化した波状文(49-4) 3 平行沈線文(48-4、62-1、75-2) 	

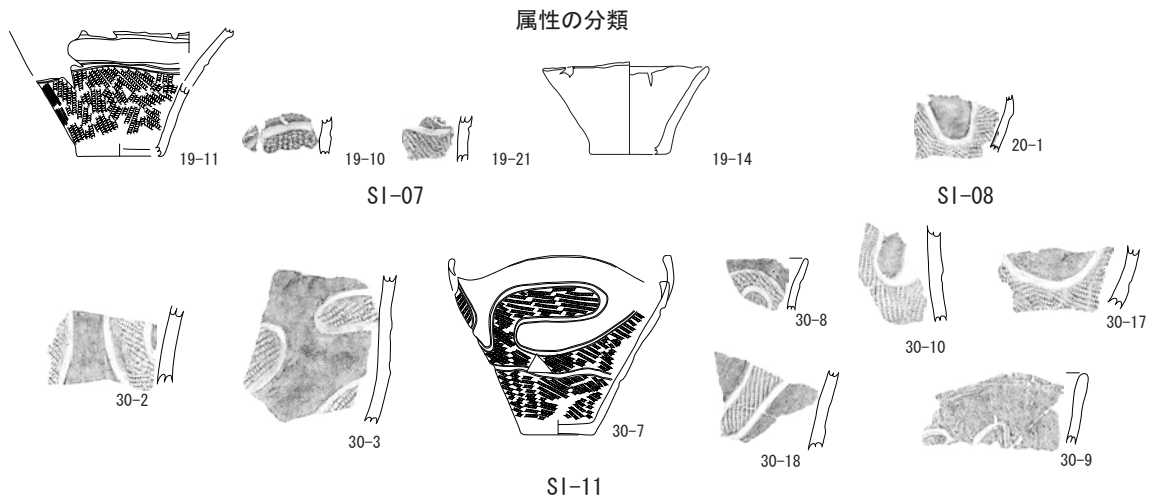


図106 土器集成図1(S=1/6)

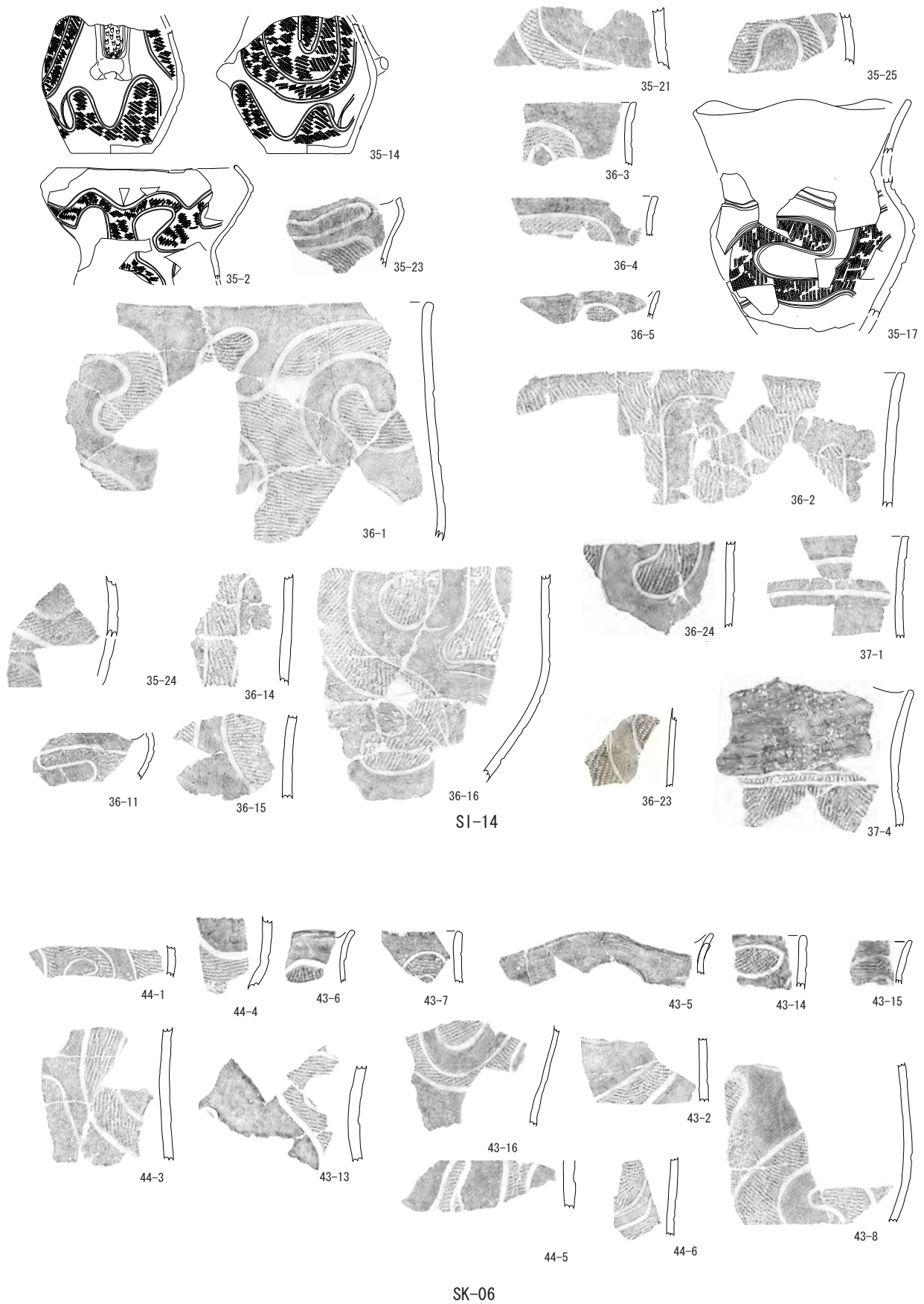


图 107 土器集成图 2 (S=1/6)

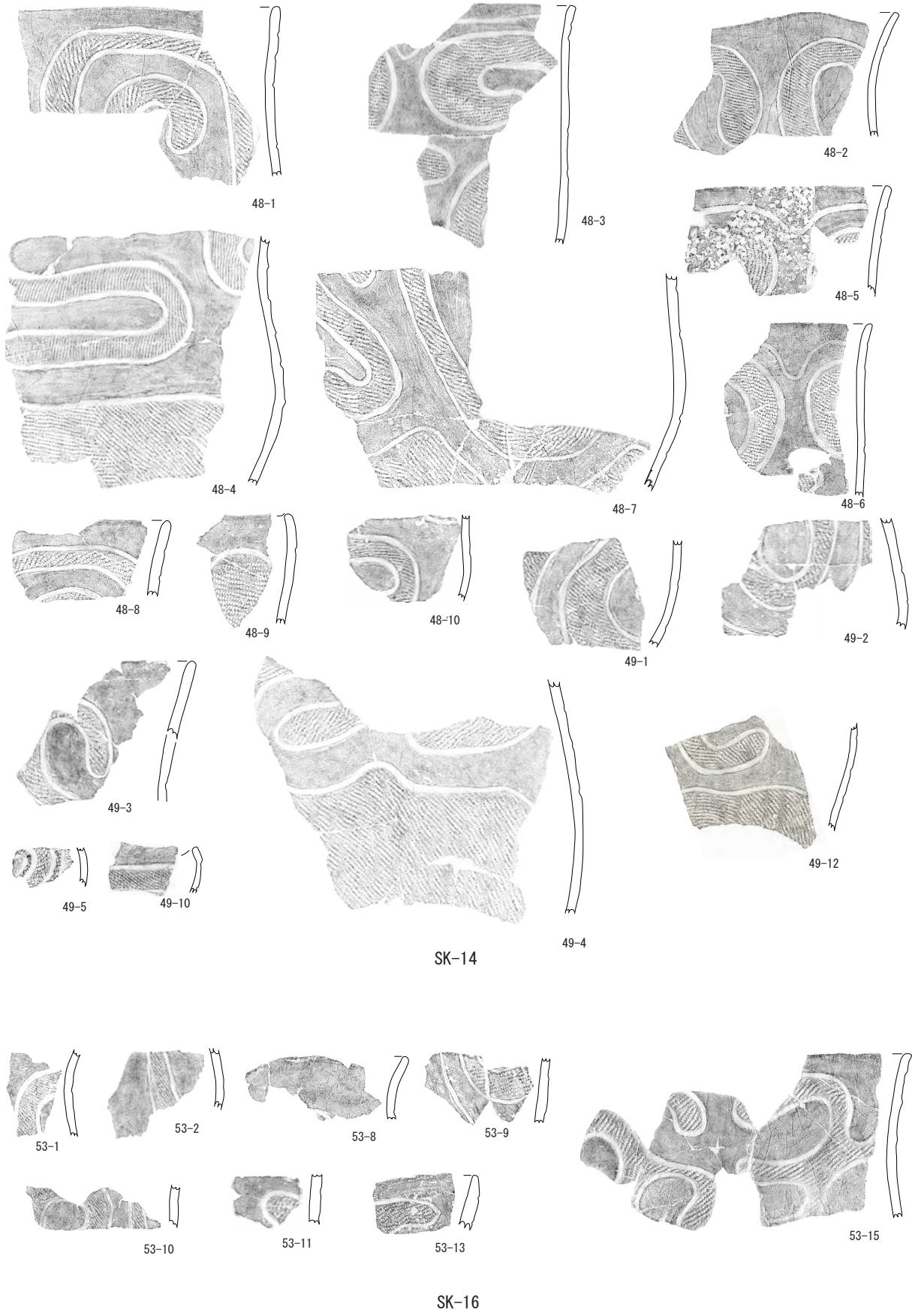
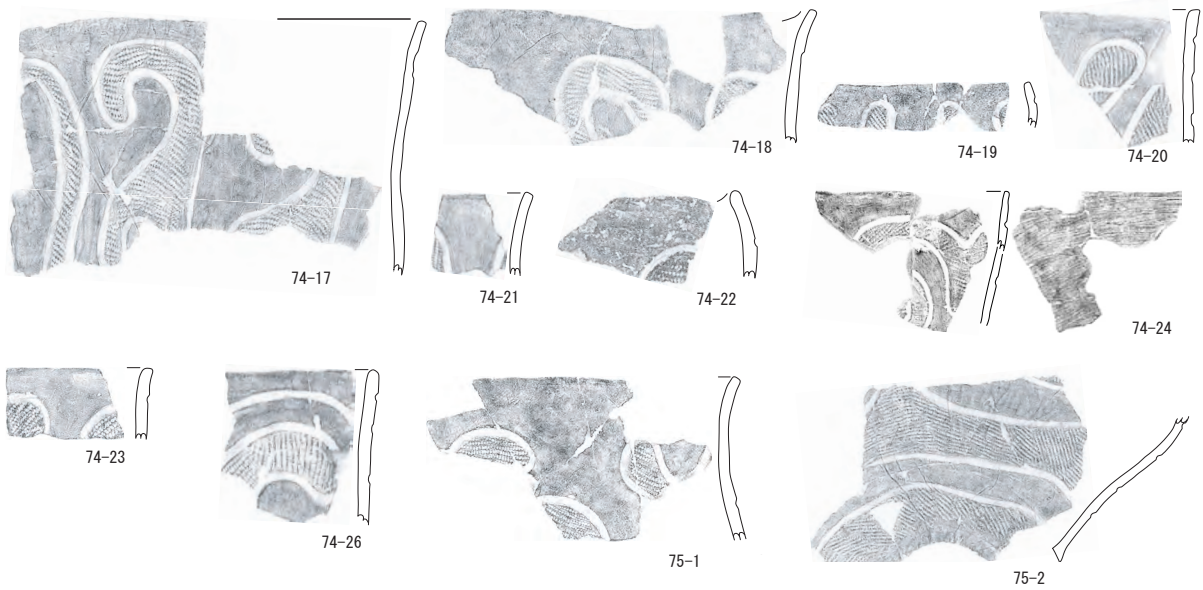


图 108 土器集成图 3(S=1/6)

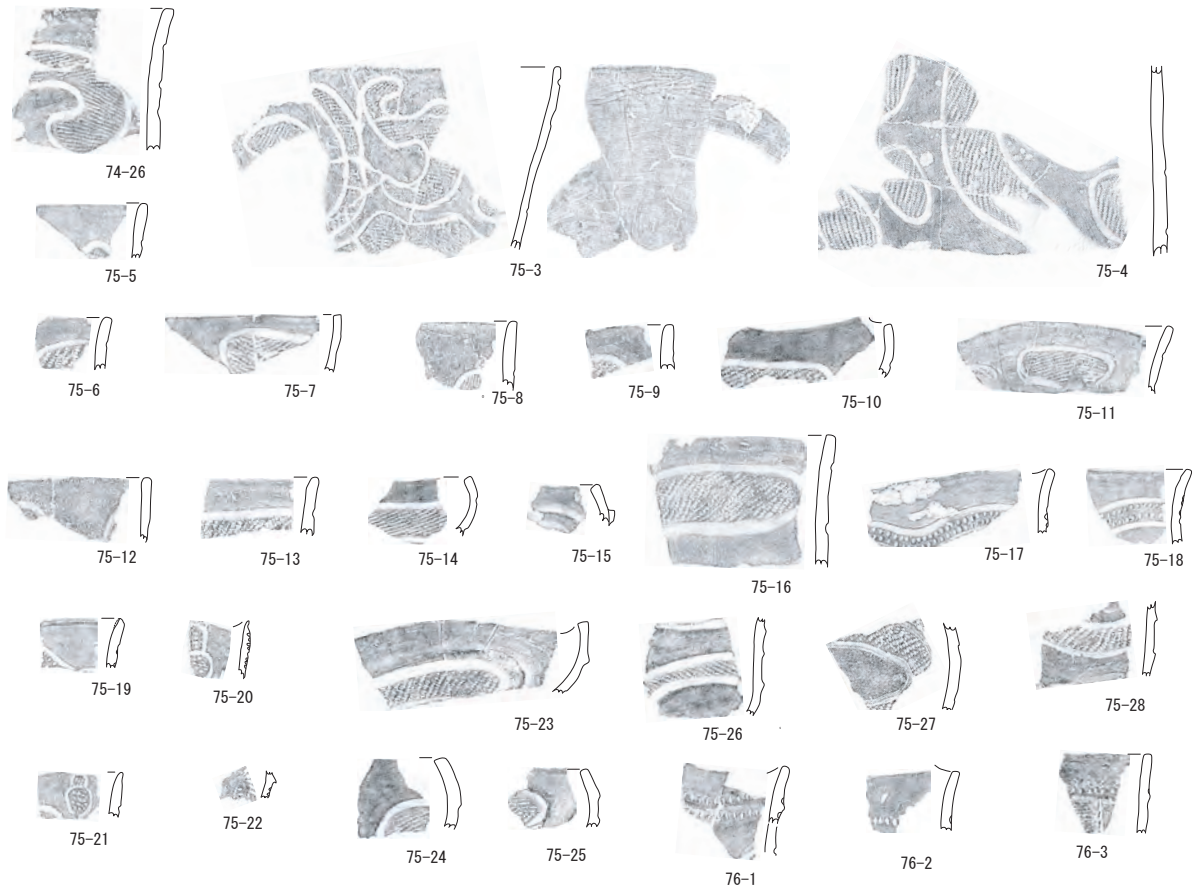


SX-06



遺構外

図 109 土器集成図 4 (S=1/6)



遺構外

図 110 土器集成図 5(S=1/6)

個体内の属性の組み合わせを表 16 に示した。組み合わせを判別できる個体が少ないため、数量的に有意な差を求めることは困難である。そこで、既存の編年により諸属性の変化を概観し、これと対比することとする。

大木 10 式土器の編年は、近年の豊富な発掘調査資料を基に、遺構出土遺物を用いた編年が提示されている（稲村 1997、日本考古学協会福島大会実行委員会 2005）。中でも、福島県伊達郡飯野町に所在する和台遺跡の発掘調査資料を用いて編まれた新井の編年（新井 2005）は竪穴住居の炉埋設土器を主体に型式学的な検討を加え、大木 9 式を 2 細分、大木 10 式を 4 細分する精緻なものである。供伴関係も明瞭で、編年観を共有するための基礎的な資料といえる。

新井の編年は掲載誌の性格上、詳細な解説が付されていないので、その概略を読み取らざるを得ない。大木 10 式期の土器はおおむね、古い方から新しい方へ向かって、文様面モチーフは単独単位文様→単独単位文様＋横位展開文様→横位展開文様→方形区画文、文様描出技法は、沈線→沈線＋微隆起線→沈線＋微隆起線＋鱗状突起→沈線＋鱗状突起という変化をたどる。

以上が新井の編年のうち、新田遺跡第Ⅷ群に関わる部分の概略である。北上市横欠遺跡とその周辺

		主モチーフ						区画モチーフ																					
		波頭文	0字文	縦位のS字文	λ字状の連繋文	C字文	水平化したS字文	無文部が水平方向に伸びるもの	波状文	形骸化した波状文	平行線文																		
描出技法	沈線	○	○	○	○	○			○	○	○																		
	稜沈線				○		○		○		○																		
	隆起線	○						○			○																		
								<table border="1"> <tr> <td rowspan="6">主モチーフ</td> <td>波頭文</td> <td>○</td> <td>○</td> </tr> <tr> <td>0字文</td> <td>○</td> <td></td> </tr> <tr> <td>縦位のS字文</td> <td>○</td> <td></td> </tr> <tr> <td>λ字状の連繋文</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>C字文</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>無文部が水平方向に伸びるもの</td> <td></td> <td>○</td> </tr> </table>			主モチーフ	波頭文	○	○	0字文	○		縦位のS字文	○		λ字状の連繋文			C字文			無文部が水平方向に伸びるもの		○
主モチーフ	波頭文	○	○																										
	0字文	○																											
	縦位のS字文	○																											
	λ字状の連繋文																												
	C字文																												
	無文部が水平方向に伸びるもの		○																										

表 16 属性の伴関係

の遺跡の資料を用いて検討された稲村の編年も概略は同様である。和台遺跡では稜沈線の施される土器が少なく、大木 10 式前半Ⅱ期の時点では、稜（微隆起線）の縄文側が太い棒状工具で調整されるが、調整の及ぶ深さは表面にとどまっており、沈線とは言い難いものが多い。まれに 2 号住 11 のように沈線ととらえることが可能なものがある。新田遺跡第Ⅷ群土器は、無文部を磨き込むことで隆起線と無文部の傾斜変換点が不明瞭となり、沈線との境目でもっとも厚くなり、沈線に向かって急激に切れ落ちるものが一般的である（図 111）。このような点で違いがあるものの、文様モチーフや文様帯区画モチーフは大半が和台遺跡大木 10 式前半Ⅰ期～前半Ⅱ期に対比できると思われる。19-11 は大木 10 式後半Ⅰ期に対比されよう。

次に新田遺跡第Ⅷ群土器を新井の大木 10 式前半Ⅰ期とⅡ期に対応させて分離できるかどうか検討する。新田遺跡第Ⅷ群土器の中に、微隆起線で文様を描くものは 19-11、61-12 を除いて存在しない。このうち、19-11 は微隆起線に挟まれる無文部が横方向に伸びることから和台遺跡大木 10 式後半Ⅰ期に位置付けられることは前述の通りである。新田遺跡第Ⅷ群土器には微隆起線がほとんどなく、稜沈線が多いという特徴がある。また、新田遺跡第Ⅷ群の中には横位に連繋する S 字文（図 112 大木 10 式前半Ⅰ期の 134 号住炉埋外側）も確認できない。これが地域差としてとらえられるのか時間差としてとらえられるのかは現時点で不明である。現状では大木 10 式前半期の細分というレベルでは他地域の編年と直接的に対比することは困難である。そこで遺跡内での出土状況を検討してみたい。遺構単独で層的に遺物が分離される例はほとんどない。これは、黒色土中に遺構が形成されることが多く、分層自体が難しい遺構が多かったためである。わずかに、SI-14 の壁際から出土した 35-14・16 とその他の土器が分離できる可能性が指摘されるが、数量的に僅少で様相の差は読み取れない。次に遺構単位で土器の様相に差があるかどうかを検討する。ここでは、まず遺構堆積土出土土器の接合関係を検討することとする。遺物を包含する土層が厚い SI-14、SX-06 の場合、図示していないが上下関係にある遺物が接合している。また、遺構間で遺物が接合した事例は図 113 に示したとおり



図 111 新田遺跡の稜沈線

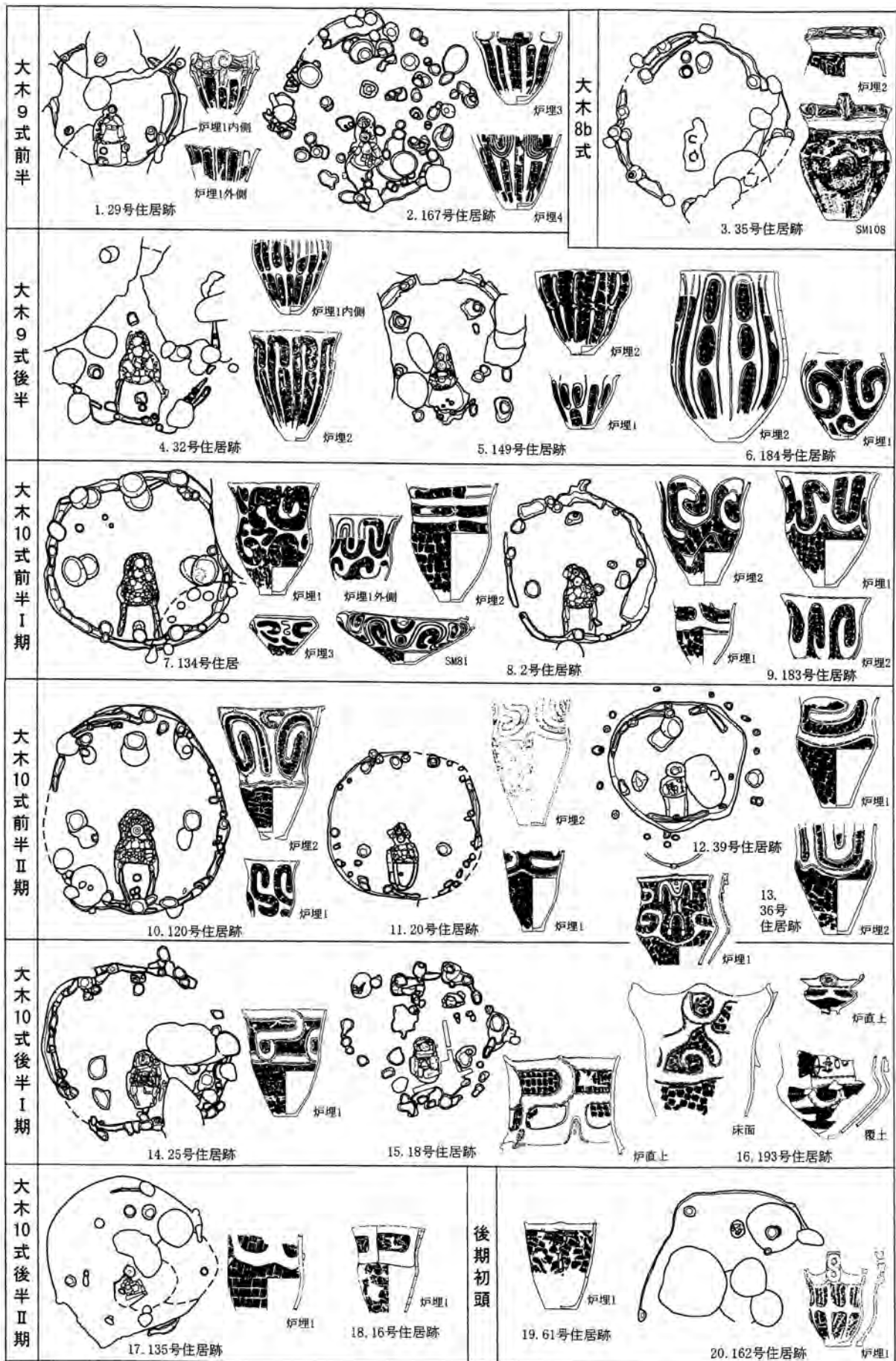


図112 和台遺跡における複式炉と土器型式の分類 (新井 2005 より転載)

であり、SI-14、SX-06 出土土器はお互いに接合するものがあり、また遺構外出土遺物とも接合している。これらのことから、SI-14・SX-06 の出土土器はどちらも大型の破片や完形に近い個体を含み、

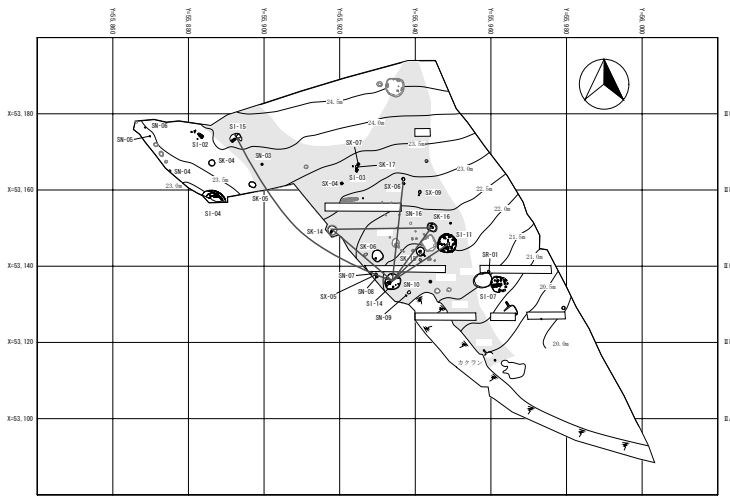


図 113 遺構間の接合関係

すべてが二次的な廃棄とは考えがたいが、相当量の二次的な廃棄の様相を示すものが混在すると思われる。SK-14 には平行化した S 字文を稜沈線で描出する個体があり、型式学的には新しい様相を含んでいる。SK-14 出土土器は SI-14 出土土器と接合するものがある。SK-14 の遺物の出土状況から、土器・石器・炭化物を一括廃棄したことは確かであるが、二次的な廃棄が混在する可能性も否定できない。いずれにせよ、遺跡内の

出土状況から供伴関係を決定することは困難である。

新田遺跡第Ⅷ群土器は、型式学的には新旧の要素を持っているが、出土状況からは明瞭に分離できず、大部分が大木 10 式前半期に比定され、ごく一部の土器（図 19-11）が大木 10 式後半Ⅰ期に比定されるものと考えておきたい。また、図 76-3 は、後半Ⅱ期～後半初頭の可能性がある。

第 2 節 複式炉の使用法について

本遺跡では縄文時代中期末葉～後期初頭に属すると考えられる竪穴住居跡が 7 棟（同一掘方内での重複を数えれば 8 棟）検出された。そのうち、4 棟がいわゆる複式炉、1 棟が複式炉系列の炉を有している。また、1 棟は石囲炉と埋設土器を有する。複式炉はいずれも土器埋設部・石囲部・前庭部を有するものである。ここでは、土器埋設部に使用された土器の使用痕跡・土器内出土物、炉埋設土器内土層堆積状況から複式炉土器埋設部の使用法について考察する。

「土器の使用痕」の用法

炉に埋設された土器は、当然ながら容器として使用された際の使用痕も残している。しかしここでは、容器としての使用痕は、土器が炉体として使用された際の痕跡と識別が必要な場合のみ扱うこととし、単に「使用痕」とした場合、炉体として使用された際の痕跡を指すものとする。

以下に特徴を列記する。

炉埋設土器内の土層堆積状況（図 114、115-9）

炉埋設土器内の土層堆積状況は、住居堆積土と一連のものと解釈できる上層と、炭化物や焼土の混じる下層に区分できる。土器内には現地性の焼土は形成されていない。

土器の使用痕（図 115-1 ～ 8）

土器上端付近の赤化が著しい。下位では、褐色・暗褐色・暗灰褐色等の色調を呈し、SI-02・

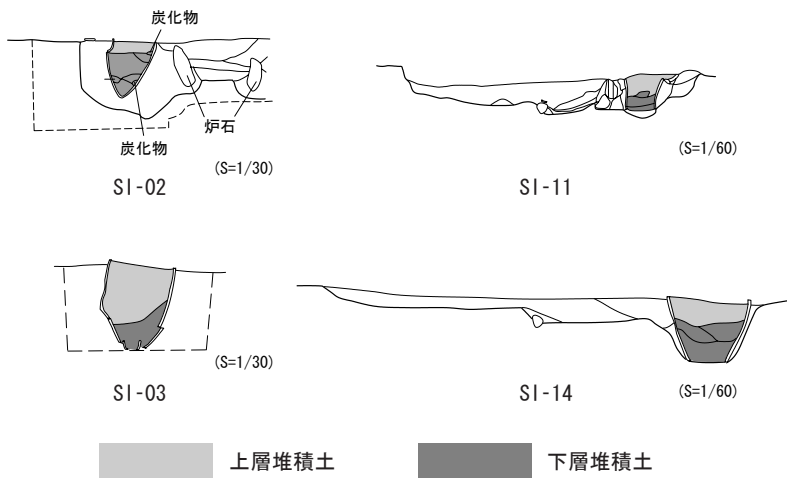


図 114 複式炉埋設土器土層堆積状況集成図

成されることはない。

土器内堆積土の上・下層の境界と土器内面の使用痕の境界線は、おおむね一致する。このことから、土器内堆積土下層は、炉廃絶後に堆積した土層ではなく、炉使用時に既に存在した土層である可能性が高い。一方、土器外に焼土が形成されることや、土器の上位がよく焼けていることから考えて、土器内で火を使用したことは明らかである。この点は、土器内に現地性の焼土が形成されないことと矛盾する。土器内では、上位 1/2 ～ 1/3 程度まで土を入れて火床としたが、この土は頻りに攪拌されたとすれば一見矛盾する状況を総合的に解釈できる。このような現象と解釈は、SK-14・15・16 の底面に形成された焼土にも相通じるものである。土器内からは、炭化材のみならず、炭化種子なども出土する場合がある（第 5 章第 2 節参照）。土壤中種実を加熱するのが目的であったとすれば、頻りに土壌が攪拌され、焼土が形成されないという状況も肯ける。しかし、出土した炭化種実片は、果皮が多く、必ずしも種実の加熱という使用法を支持するものではない（第 5 章第 2 節参照）。具体的な使用法を特定することは現状では難しい。

第 3 節 複式炉の分布について

これまで、青森県内では土器埋設部・石囲い部・前庭部の構成をとる複式炉（以下、三部構成の複式炉と呼称）は八戸市丹後谷地遺跡第 30 号竪穴住居跡、永野遺跡縄文第 6 号竪穴住居跡の 2 例が知られている。どちらも大木式土器の分布圏に近い地域である。

新田遺跡の所在する太平洋側で三部構成の複式炉が検出された遺跡の分布を見ると（図 116）、本地域に隣接する岩手県では、県南部に多く、県北部では少ない。駒木野の集成（駒木野 2004）によれば、二戸・久慈地域⁽¹⁾では、三部構成の複式炉は、複式炉・複式炉系列の炉の約 15%を占める⁽²⁾。一方、県南部の千厩・一関・水沢地域では約 51%で、県北部の約 2.5 倍の占有率である。複式炉・



図 115 複式炉埋設土器の使用痕

1・2 SI-02 炉埋設土器 3・4 SI-03 炉埋設土器 5・6 SI-11 炉埋設土器 7・8 SI-14 炉埋設土器 9 SI-14 炉埋設土器使用痕と土器内堆積土の関係

複式炉系列の炉を検出した遺跡数に対する三部構成の複式炉検出遺跡数は、県北部で 13%、県南部で 69% である。県南部では、石囲い部底面が石敷きになるいわゆる上原型も含んでいる。時期的

には、県南部では大木9式の段階で三部構成の複式炉が出現している。

青森県でこれまでに検出された三部構成の複式炉は上述のとおりで、丹後谷地遺跡第30号竪穴住居跡が大木10式前半期、永野遺跡縄文第6号竪穴住居跡は直接的な対比は困難であるが、文様モチーフの上端が平行なことから、大木10式後半期の可能性がある。

新田遺跡の所在する青森県南部地方は、大木9式に平行する時期には在地の型式である最花式と大木9式が共存する。大木10式前半期の様相はこれまで断片的な資料が知られていただけで、不明な点も多々あるが、本遺跡の例からすると、文様モチーフや文様描出技法において独自性を示す在地の土器は見られず、大木10式の分布圏に含まれるといえそうである。

このような状況から、新田遺跡の三部構成の複式炉は、大木式系土器の分布圏の拡大と連動して出現したものと理解できる。岩手県下では県南部・県央部内陸には底面を石敷とするもの（いわゆる上原型）が分布するが県北部では見られない。今後、土器埋設部の使用法などを加味することでより詳細な地域区分が可能になるかもしれない⁽³⁾。（中村）

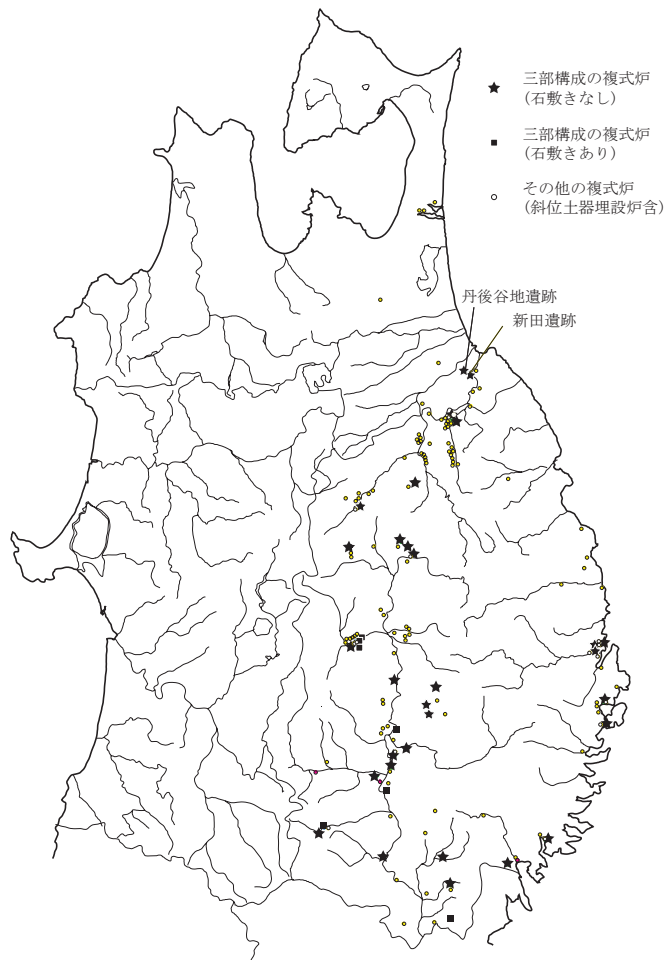


図 116 東北部太平洋側の複式炉検出遺跡分布 (駒木野 2004、坂本 2002 を基に作図)

註

(1) 地域区分は、県内地方振興局の管轄区域を7ヶ所に区分したものを採用し、地域区分は下表の通り（駒木野 2004）であるという。

1. 盛岡（南部） ・盛岡市 ・岩手郡一零石町・滝沢村 ・紫波郡一矢巾町・紫波町	2. 盛岡（北部） ・二戸郡一安代町 ・岩手郡一葛巻町・岩手町・西根町・松尾村・玉山村	3. 二戸・久慈 ・久慈市・二戸市 ・九戸郡一種市町・大野村・軽米町・九戸村・山形村 ・下閉伊郡一普代村 ・二戸郡一一戸町・浄法寺町	4. 宮古 ・宮古市 ・下閉伊郡一田野畑村・岩泉町・田老町・新里村・川井村・山田町
5. 釜石・遠野・大船渡 ・遠野市・釜石市・大船渡市・陸前高田市 ・上閉伊郡一大槌町・宮守村 ・気仙郡一住田町	6. 千厩・一関・水沢 ・江刺市・水沢市・一関市 ・胆沢郡一金ヶ崎町・胆沢町・前沢町・衣川村 ・西磐井郡一平泉町・花泉町 ・東磐井郡一大東町・東山町・千厩町・藤沢町・室根村・川崎村	7. 北上・花巻 ・花巻市・北上市 ・稗貫郡一大迫町・石鳥谷町 ・和賀郡一東和町・湯田町・沢内村	

(2) 「三部構成の複式炉」という分類と駒木野の分類は一致しない部分があるので、約●●%とした。

(3) 筆者が観察した福島県和台遺跡、法正尻、馬場前の各遺跡では、炉埋設土器は底部付近まで熱を受けた痕跡があるものが多く、本遺跡例のように部位によって急激に受熱痕跡が急激に変化するものは観察できなかった。このことは、炉埋設土器の使用法に違いがあったことを示していると考えられる。

第4節 石器について

1) 新田遺跡石製遺物の概要と整理、分析の方法

新田遺跡の調査では表土および攪乱部分をのぞいた第Ⅱ層以下の遺物包含層、遺構内堆積土から出土したこぶし大以上の礫、剥片石器の可能性が考えられた石製遺物（自然礫を含む剥片石器、礫石器、石製品などの総称として以下用いる）全点について出土位置の三次元座標を記録している。取り上げられた石製遺物は6,220点、総重量は約1,565kgに達した。これら石製遺物は室内整理作業で自然礫、剥片石器、礫石器、石製品に選別し、剥片石器、礫石器については後述する基準に基づいた分類を行った。また、あわせて個別重量を測定し、それぞれの石が有する属性を可能な限り抽出した。各類型の総点数・総重量は表35に示す通りである。接合関係の確認については遺構内外出土の剥片石器を対象にして重点的に実施し、自然礫、礫石器、炉石については個々の資料の扱いにくさから、遺構内出土資料を中心に整理作業過程の中で個別的に確認するに留まった。剥片石器では9組、礫石器では2組、自然礫では8組の接合関係が確認されている。（図117）等高線に直交する形で標高の高いものと低いものが互いに接合するケースが多く、標高の低い位置で出土している資料では層位的に上位になるものもみられる。

本節では分析対象資料を増やし、層位と器種類型の対応について考察をすすめるために遺構内の石器についても共伴する土器型式から遺構内堆積土が相当する基本層序に振り分けている。特に断りのない限り、ここで表記するローマ数字の層位は遺構外資料だけではなく、遺構内堆積土を包括した内容を有するものである。

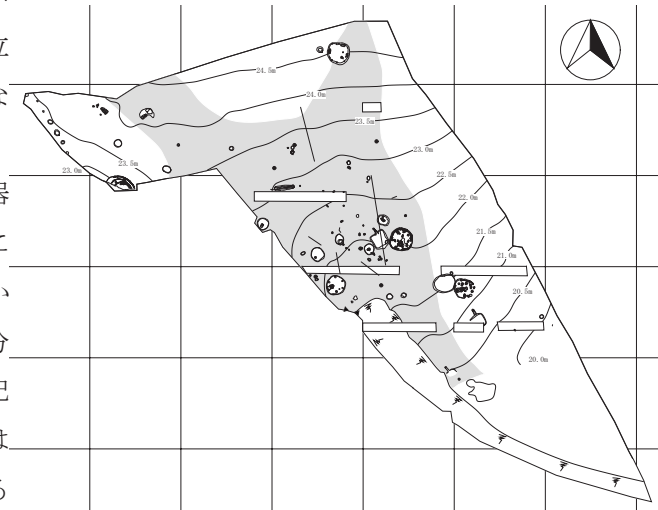


図117 石製遺物の接合関係

2) 新田遺跡出土石器の分類

本報告書では剥片石器を11器種、礫石器を7器種に分類している。剥片石器の器種は想定される最終的な機能形態に基づいて設定した。礫石器についても基本的には同様であるが、複数の使用痕が観察され、時間的な前後関係が不明確なものも多く存在する。これらについては一つの石器が特定の機能に収まらないことが考えられるため、複合的な使用痕を有するものを「敲磨器」という器種に一括してまとめた。出土点数については断りのない限り、平成15年度および16年度調査で出土した資料の総数である。以下、各器種の細別類型および、出土資料の概要について記載をおこなう。尚、石材点数の後の括弧内数値は同一器種内における石材組成比である。

1 剥片石器

総数949点が出土している。珪質頁岩の利用度が極めて高く、自然礫として多く確認されたチャート素材とする剥片はほとんどみられない。

(1) 石鏃 長さ 50mm 未満で矢尻としての機能が想定される小型尖頭状の両面加工石器を「石鏃」とした。総数 129 点が出土しており、未製品・失敗品と考えられる半製品段階の資料が 12 点含まれる。素材として用いられている石材は珪質頁岩 127 点 (98%)、鉄石英 1 点 (1%)、流紋岩 1 点 (1%) である。

基部の形状と平面形態から 6 類型に細別した。層位との対応としては第Ⅳ層には有茎鏃 (Ⅱ類) が含まれない。本遺跡で主体をなすのは無茎凹基 (Ⅰc類) であり、遺構外第Ⅲ層および中期末に帰属する遺構内堆積土からの出土が多い。(図 120)

Ⅰa類 (無茎円基) : 基部の平面形状が外彎するもの。第Ⅲ層を主体に総数 23 点が出土している。

Ⅰb類 (無茎平基) : 基部の平面形状が直線的に整えられているもの。第Ⅲ層を主体に総数 11 点が出土している。

Ⅰc類 (無茎凹基) : 基部が抉入しているもの。第Ⅲ層を主体に総数 66 点が出土している。

Ⅰd類 (無茎凸基) : 基部が尖頭状をなすもの。第Ⅲ層を主体に総数 5 点が出土している。

Ⅱa類 (有茎凸基) : 肩部から茎にかけて緩やかに外彎するもの。総数 7 点が出土している。出土層位は第Ⅲ層のみである。

Ⅱb類 (有茎平基) : 肩部から茎にかけての形状がほぼ直角をなすもの。第Ⅲ層で 4 点が出土している。

Ⅱc類 (有茎凹基) : 肩部から茎にかけて内彎するもの。第Ⅰ層から 1 点出土している。

未製品・失敗品 : 調整が粗雑で、厚みがあり先端部についても十分な加工がなされていないもの。総数 12 点が出土している。

第 121 図に長さとの相関を示した。Ⅰc類は厚さに強い規則性がみられるが、Ⅰa類は未製品・失敗品並に変異が大きい。これらの一部については未製品・失敗品に相当する可能性がある。

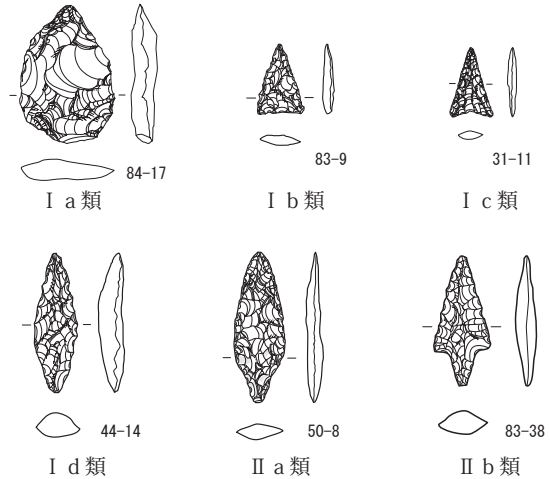


図 118 石鏃の分類

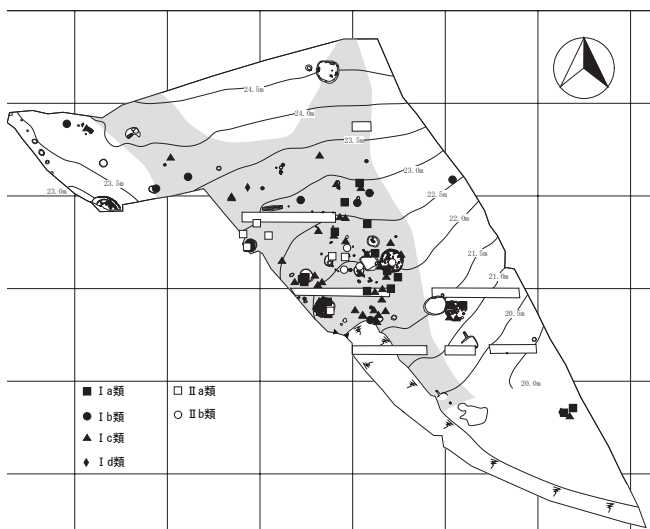


図 119 石鏃平面分布図

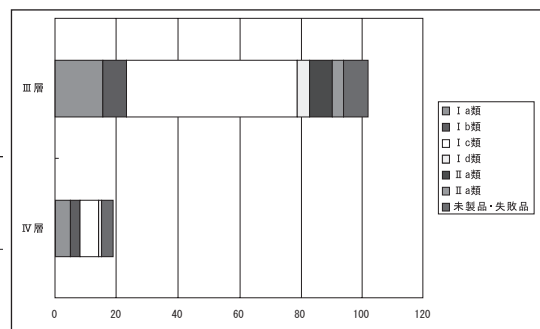


図 120 石鏃類型組成

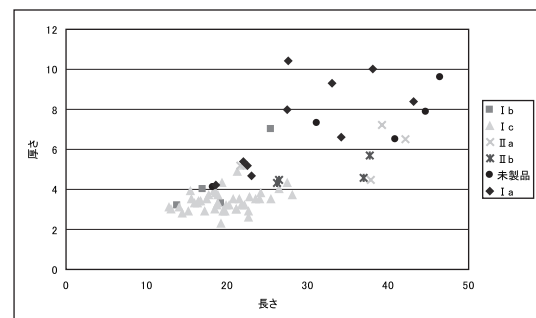


図 121 石鏃長さ・厚さ

(2) 石槍 長さ50mm以上で刺突機能が想定される大型尖頭状の両面加工石器を「石槍」とした。総数5点が出土している。石材は全て珪質頁岩である。SI14周辺で比較的多く出土している。調査区内の分布を図125に示した。

(3) 石匙 つまみ部を有し、片面加工で側縁の整えられている石器を「石匙」とした。総数14点が出土している。素材として用いられている石材は全て珪質頁岩である。

I類：背面の右側縁に連続的な調整を施し、その剥離面を打面として正面に長い調整剥離を施しているもの。いわゆる「松原型石匙」(秦1991)である。第III層および第IV層から総数3点が出土している。縄文時代早期後葉から前期前葉の遺構内で多く出土することが指摘されている。出土点数が少なく、層位、空間分布いずれからも時期を限定する状況は確認できなかった。2点出土している調査区南東部分は縄文時代早期の土器が比較的多く集中する。(図80, 123)

II類：円形に調整加工を施し、平面形態は巾着状を呈するもの。第III層および第IV層から総数4点が出土している。

III類：縦長の剥片を素材とし、両側縁の加工が腹面側から直線的に施されているもの。総数4点が出土している。

IV類：縦長もしくは横長の剥片を素材とし、一側縁に連続的な調整を施し、対になる側縁に刃器としての機能が想定されるもの。第IV層で3点が出土している。

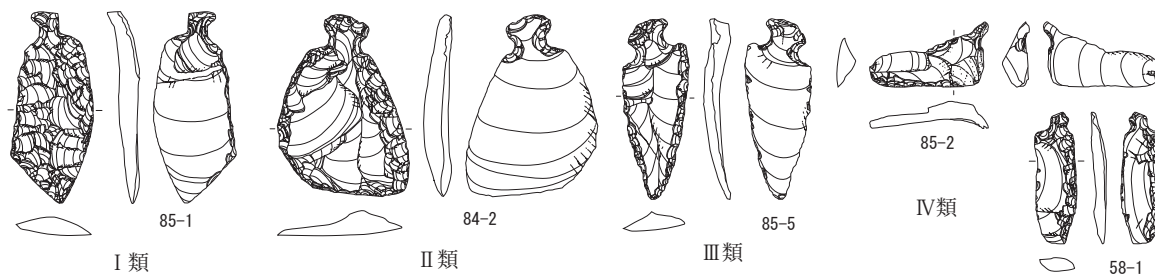


図122 石匙の分類

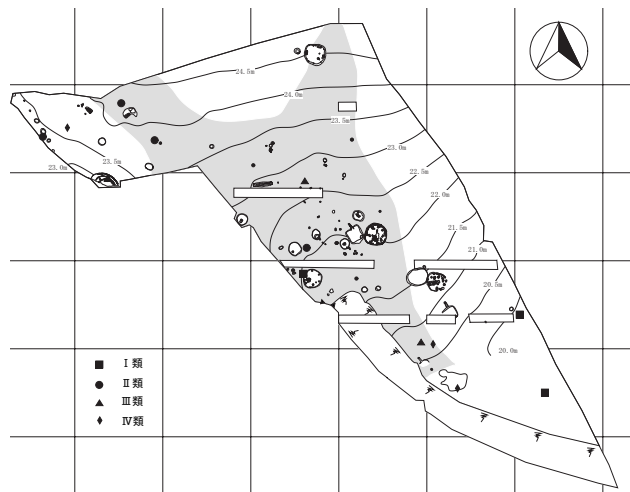


図123 石匙平面分布

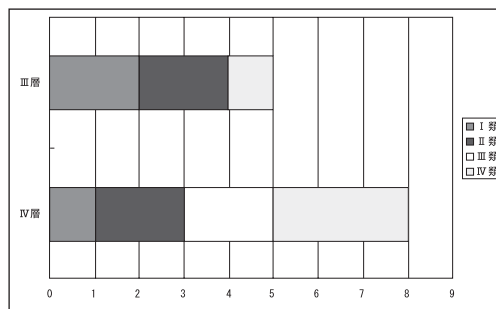


図124 石匙類型組成

(4) 石篋 直接打撃によって平面形態が撥型に整えられているものを「石篋」とした。総数8点が出土している。石材には珪質頁岩7点(88%)、細粒凝灰岩1点(12%)が用いられている。稜線部分に摩滅光沢のみられるものが含まれる。(85-6他) 調査区内の分布を図125に示した。

(5) 両極加撃痕跡のある剥片 主要剥離面に複数対になる状態で顕著な階段状剥離と発達したリン

グがみられるもの、もしくは打点に伴うフィッシャーが同一剥離面に対になって複数生じているものを「両極加撃痕跡のある剥片」とした。総数 24 点が出土している。長さは 30mm 程度に集中しており、加撃方向は側縁全体にめぐるものが多い。石材は全て珪質頁岩であるが、玉髄質の透明感のあるものが含まれている。

(6) 二次調整のある剥片 (不定形石器) 剥片の側縁に連続的な調整剥離が加えられているものを「二次調整のある剥片」とした。本器種にはいわゆる「搔器」、「削器」等のスクレイパー類、器種が特定できない定形石器の未製品などが含まれる。総数 157 点が出土している。

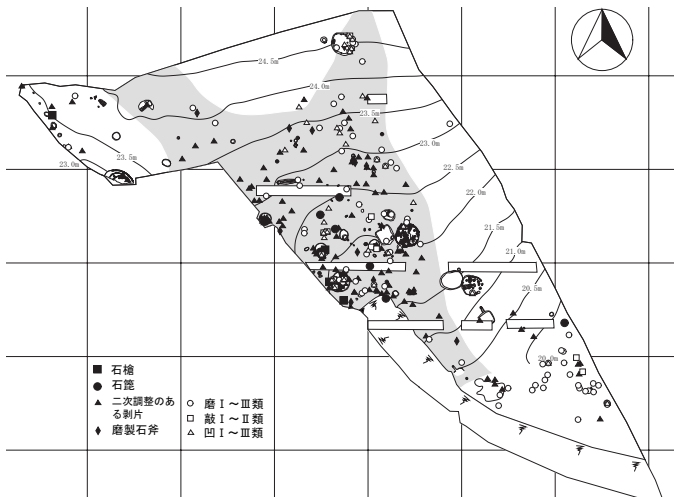


図 125 石槍、石鏃、二次調整のある剥片、磨製石斧、敲磨器類平面分布

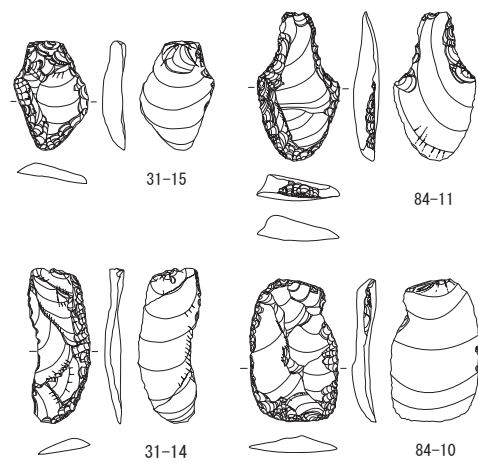


図 126 二次調整のある剥片 (不定形石器)

(7) 石錐 先端部に摩滅、刃こぼれ等の使用痕がみられ、刺突、穿孔の機能が想定される尖頭状の小型両面加工石器を「石錐」とした。総数 17 点が出土している。石材は全て珪質頁岩である。平面形態から 4 類型に分類した。

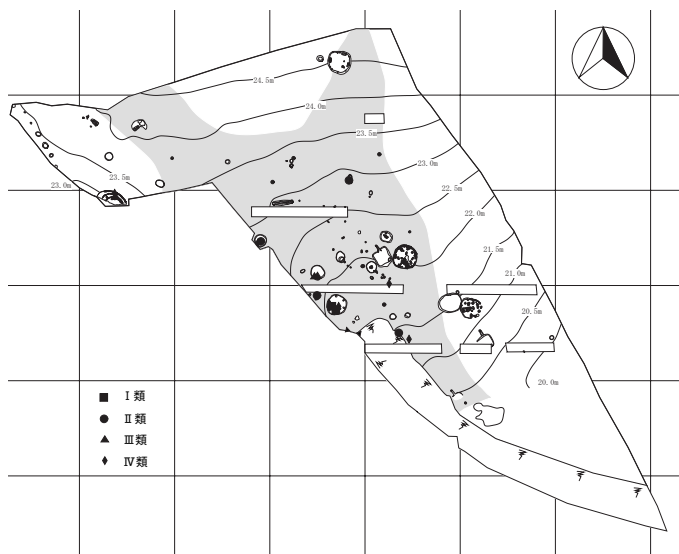


図 127 石錐平面分布

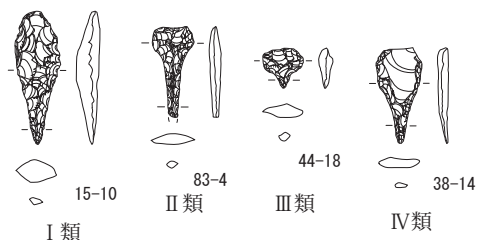


図 128 石錐の分類

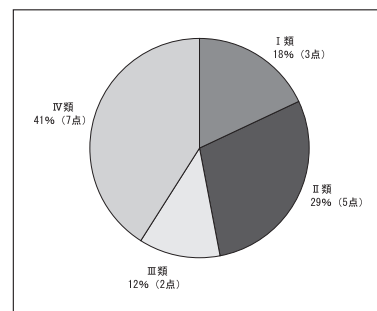


図 129 石錐類型組成

I 類：先端部の径が 4mm 程度で、先端部とつまみ部の境界が不明瞭なもの。石鏃の転用もしくは石鏃失敗品を再加工したものなどが含まれている。第 III 層より 3 点が出土している。

II 類：先端部の径は 3mm 程度で、長く棒状を呈する。先端部とつまみ部の境界は明瞭である。第 III 層を主体に総数 5 点が出土している。

Ⅲ類：先端部の径は2mm程度で、短い。つまみ部を含めても長さ13mm程度であり、先端部とつまみ部の境界は明瞭である。第Ⅲ層より2点が出土している。

Ⅳ類：先端部の径は4mm程度で、棒状を呈する。先端部とつまみ部の境界は明瞭である。第Ⅲ層を主体に総数7点が出土している。

(8) 微小剥離痕のある剥片 鋭利な側縁部に刃こぼれ状の微小剥離痕がみられる剥片を「微小剥離痕のある剥片」とした。微小剥離痕は剥片作出時に生じた偶発剥離、刃器として使用された際に生じた刃こぼれに由来する可能性が考えられる。SI11 剥片集積およびSX07、SX11 では構成される剥片のほとんどに微小剥離痕がみられた。第Ⅲ層を主体に総数185点出土している。

(9) 剥片・碎片・石核 二次調整、微小剥離痕などが一切確認できず、主要剥離面の長軸が概ね2cm以上の剥片石器を「剥片」とした。同様に2cm未満を「碎片」とし、また、素材剥片を作出した後の残核で、ネガ面のみで構成されているものを「石核」とした。剥片370点、碎片138点、石核3点が出土している。

2 磨製石斧

研磨によって整形され、一端に刃部を有する石斧類を「磨製石斧」とした。総数25点が出土している。側縁に擦り切り痕跡を残す資料が多くみられる。複数の資料で基部付近に線状の傷のつく資料がみられる。(85-7、85-11 他) 後述する敲打の使用痕である敲Ⅰ類、凹Ⅰ類に共通する特徴であり、敲石としての機能が想定される。石材には緑色細粒凝灰岩が多く用いられており、輝緑岩、閃緑岩、緑色細粒凝灰岩(古期)、頁岩、砂岩なども用いられている。破損品を再加工したことをうかがわせる資料(19-25、44-22 他)が複数みついている。

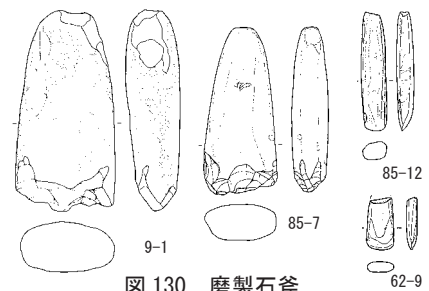


図130 磨製石斧

3 礫石器

敲打や磨り潰しなどに使用された礫で、使用痕が明瞭にみられるものを「礫石器」として抽出した。総数171点が出土している。使用痕の状態から細別類型を設定し、出土位置の平面分布については図125に示した。

(1) 敲石 敲打痕が礫面の端部に形成されているもので下記の使用痕のみからなるものを「敲石」とした。総数6点が出土している。

敲Ⅰ類：線状の敲打痕がみられるもの。軸が「右上がり」になるものが多い。

敲Ⅱ類：あばた状の敲打痕がみられるもの。

敲Ⅱ類は、敲Ⅰ類が同一の機能部に重複して形成され、発達した形状と考えることもできる。

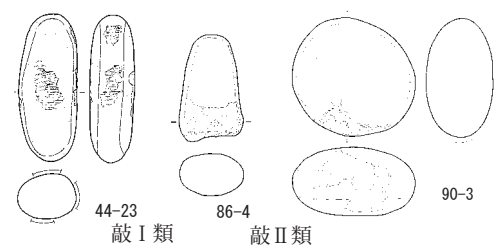


図131 敲打痕の分類

(2) 石錘 総数7点が出土している。礫の端部に一對の抉りが加えられているもの。新田遺跡出土資料は抉りが浅く、抉入部が「紐かけ」の機能をはたせるかどうか疑問が残る。9-2、45-1についてはパンチの可能性も考えられる。

(3) 磨石 下記の使用痕のみからなる礫を「磨石」とした。総数80点が出土している。

磨Ⅰ類：亜円礫、亜角礫の稜が研磨面として利用されているもの。いわゆる「三角柱状磨石」「特殊磨石」である。縄文時代早期から前期を特徴づける石器であり、本遺跡では第Ⅳ層で多量に出土している。

磨Ⅱ類：円礫の全面が研磨面として利用されているもの。

磨Ⅲ類：亜円礫、亜角礫の平坦面が研磨面として利用されているもの。

(4) 石皿・台石 総数 13 点が出土している。大礫の一部に平坦面の形成されているものを「石皿・台石」とした。縁や脚が形成されているもの(86-11,89-4 他)もみられる。

(5) 凹石 総数 17 点が出土している。直径 3cm 程度の凹みが礫の平坦面に形成されているもの。凹み痕の特徴から以下の 3 類型に分類した。

凹Ⅰ類：線状の敲打痕が単位となるもの。「右上がり」が多い。

凹Ⅱ類：あばた状の敲打痕が単位となるもの。

凹Ⅲ類：凹面が滑らかで、平滑な状態のもの。

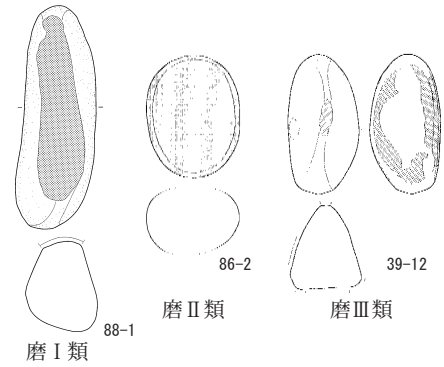


図 132 磨痕の分類

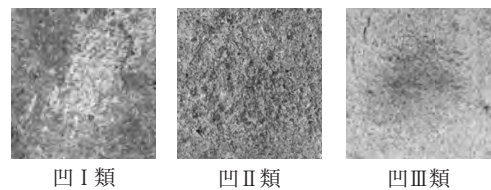


図 133 凹み痕の分類

(6) 敲磨器 特徴の異なる使用痕が重複するものを本器種にまとめた。総数 18 点が出土している。「凹み」と「磨り」の重複するものが 13 点、「敲き」と「凹み」が重複するものが 4 点、「磨り」、「敲き」、「凹み」の重複するものが 1 点出土している。「凹み」と「磨り」が同一個体にみられる資料が全体の約 72% を占めており、「凹み」と「磨り」は礫を使用する行為の中で時間的に連続する率が高いということがうかがえる。凹Ⅰ・Ⅱ類と敲Ⅰ・Ⅱ類は状態として近いものであり、これらについては「凹み」と「敲き」の差は選択された機能部位の差として考えることができる。

(7) 石製品 遺構外第Ⅲ層より研磨によって板状に成形されている石製品 1 点が出土している。(87-1) 側縁と裏面には敲打痕がみられ、側縁部が大きく抉られている。敲石に転用された磨製石斧未製品の可能性も考えられる。

3) 被熱礫の空間分布

被熱した石製遺物の分布を図 134 に示した。基本層序第Ⅲ層相当の被熱礫には 7 箇所集中区(集中区 1～7)が確認された。これらのうち、調査区北寄りに位置する集中区 1 は集石遺構(SX04)として、集中区 2 は廃棄域(SX06)として確認した箇所である。集中区 3～6 は中期末葉の土坑、ないしは住居跡の覆土にあたる。集中区 2～6 では自然礫のみならず、多量の土器・石器類、炭化物が含まれており、遺物を包含する層の底面が窪地になるという点で共通する。集中区 1 の礫は被熱したチャート、粘板岩類 59 点、被熱の痕跡がみられないもの 70 点からなる。磨石の破片が 1 点含まれている他に、土器や剥片石器は伴っていない。集中区 7 は上記した 1～6 と比較して、散漫でやや広い集中区である。中期末葉の住居跡が集中する箇所であると同時に沢地形にあたることなどから人為的に搬入され利用されていた礫が消極的な廃棄行為と地形に起因する転石によって集積された可能性が考えられる。いずれにせよ、前 6 者とは様相が異なる。

基本層序第Ⅳ層相当の被熱礫の集中区は1箇所が確認された。周辺からは縄文時代早期の土器が出土しており、被熱礫の時期もこれに帰属するものと考えられる。

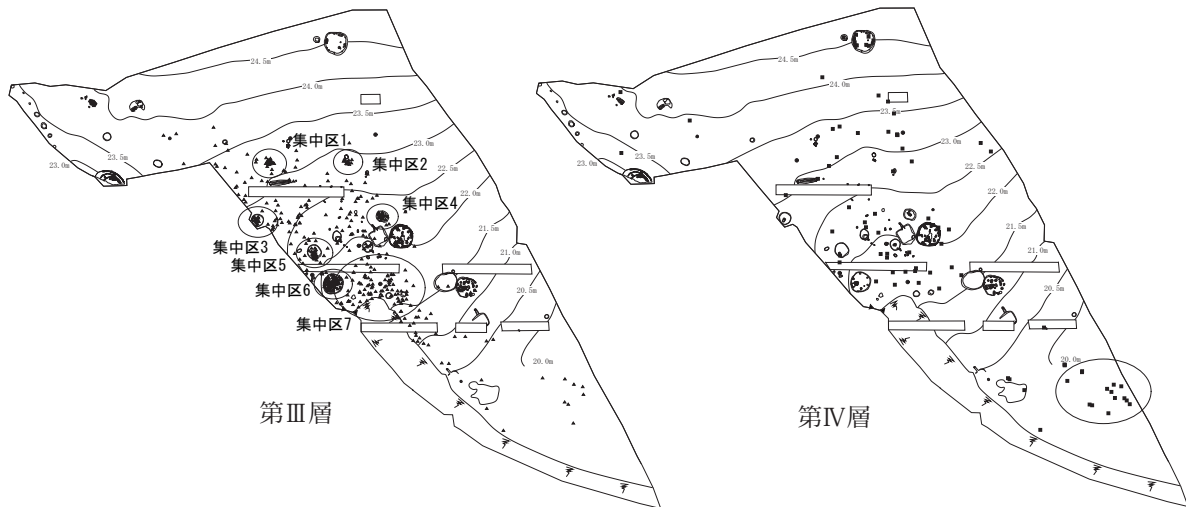


図 134 被熱礫平面分布

4) 青森県内における剥片集中遺構について

第 11 号竪穴住居跡第 1 号・第 2 号剥片集積、第 7 号不明遺構、第 11 号不明遺構は剥片石器が重ねられた状態（以下「剥片集中遺構」）で出土していることを特徴とするものである。検出位置は壁際や炉、焼土遺構の近くであり、構成する剥片の多くに微小剥離痕がみられる。いずれも珪質頁岩を素材とし、複数の母岩で構成される。周辺からは碎片がほとんど確認されず、石器製作残滓の集積である可能性は低い。石器の産状としては一箇所に積み上げられているような状態であり、掘方は確認されていない。これらの剥片類は微小剥離痕と母岩の多様性、薄手の碎片に近い形状が多いといった特徴などから、加工を目的とした素材の確保というよりも刃器としての利用を想定し、備蓄されていた可能性が強いものと考えられる。

東北地方南部から岩手県にかけて、住居跡内の床面で検出される剥片石器の集積については、中期末葉およびその前後の時期に多いことが指摘されており、複式炉との関連や石材流通の観点から議論されている。（植村 1997、阿部 2003、門脇 2003 他）表 34 に青森県内で検出されている剥片集中遺構の事例をまとめた。縄文時代早期から晩期まで各時期にわたって報告があるが、中期から後期にかけての時期に帰属するものが多い。地域的には八戸周辺の南部地域で多く確認されており、津軽地域では少ない。中期末から後期前葉の時期には玉髄や透明感のある「玉髄質珪質頁岩」が小型の両極剥片として多く出土することが知られているが、丹後谷地遺跡では後期後葉以前の時期に帰属する住居跡ピットから両極剥片が 80 点近く出土している。（八戸市教育委員会 1986）新田遺跡の剥片集中遺構を構成する石材は全て珪質頁岩であり、下北半島産の特徴がみられる。（松山力氏のご教示による）東北地方南部では中期後葉の石器群に最上川流域で採取された珪質頁岩を素材とした縦長剥片が加わることが知られており、中期後葉から後期の時期に珪質頁岩を中心とする石材流通の画期が存在することを指摘する意見もある。（宮城県教育委員会 1988 他）新田遺跡で確認された事例は東北北部地域における中期末の石材利用、流通、保有形態を考える上で重要な資料である。

（齊藤）

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1980 『永野遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 56 集
1998 『青森県遺跡地図』
2005 『大開遺跡・新田遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 384 集
- 阿部朝衛 2000 「先史時代人の失敗と練習 ―石鏃と磨製石斧の分析から―」『考古学雑誌』
86-1pp. 1-26
- 阿部勝則 2003 「岩手県における縄文時代中期の剥片集中遺構について」『紀要』XXII（財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）pp. 1-16
- 新井達哉 2005 「和台遺跡」『日本考古学協会 2005 年度福島大会シンポジウム資料集』
日本考古学協会 2005 年度福島大会実行委員会 pp. 197-202
- 稲村晃嗣 1997 「IV 考察 1 11 号住居跡覆土出土遺物について」『横欠遺跡（本文編）』北上市教育委員会 pp. 25-47
- 植村泰徳 1997 「縄文時代の剥片・碎片集中遺構、集中地点について ―福島県内の事例―」『福島考古』38 pp. 1-10
- 門脇秀典 2003 「縄文石器に関する 2・3 の問題 ―檜葉町馬場前遺跡出土の石器 について―」
『研究紀要 2002』pp. 153-164
- 北上市教育委員会 1997 『横欠遺跡（本文編）』
北上市教育委員会 1995 『横欠遺跡（図版編）』
- 工藤竹久 1977 「北日本の石槍・石鏃について」『北奥古代文化』9 pp. 40-55
- 古泉 弘 1983 『江戸を掘る』
- 小林正史 1993 「東北地方・縄文晩期後半の単位文様施文手法」日本考古学協会
第 59 回総回研究発表要旨 pp. 38-43
- 坂本真弓 2002 「沢部型複式炉の現在」『海と考古学とロマン』市川金丸先生古希記念論文集刊
行会 pp. 83-99
- 駒木野智寛 2004 「複式炉の研究」『紀要 XXIII』（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
pp. 41-50
- 日本考古学協会 2005 年度福島大会実行委員会 2005 『日本考古学協会 2005 年度福島大会シンポジ
ウム資料集』
- 秦 昭繁 1991 「特殊な剥離技法をもつ東日本の石匙―松原型石匙の分布と製作時期について―」
『考古学雑誌』76-4 pp. 1-29
- 八戸市教育委員会 1986 『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ―丹後谷地遺跡―』八戸
市埋蔵文化財調査報告書第 15 集
- 本間 宏 1994 「大木 10 式土器の考え方」『しのぶ考古』10 pp. 3-24
- 松山 力 1983 『八戸の地質』八戸市教育委員会
- 宮城県教育委員会 1988 「石器の考察」『大築川遺跡・小梁川遺跡 石器編』pp. 480-494

出土遺物観察表

*年代測定試料番号は、平成18年度日本学術振興会科学研究補助金基盤研究C「AMS炭素14年代測定を利用した東日本縄文前半期の実年代の研究」(代表 小林謙一)(175205293604)に土器附着炭化物を提供した際の分析試料番号である。

図版番号	遺構名	P番	層位	外面	内面	底面	備考	分類	年代測定資料番号
8-1	SI-01	13, 14, 15, 19, 20, 22-1, 2 遺構外 6766	3, 5, 7, IV	口唇部 へ状工具による刻み 口縁部 爪形刺突、貝殻復縁による刺突 胴部 二枚貝条痕	条痕調整後縦位のミガキ			I-2	
8-2	SI-01	16, 17	7	条痕	ミガキ			I	
8-3	SI-01	6	5	口唇部 へ状工具による刻み 口縁部 爪形刺突 胴部 二枚貝条痕	口唇部 へ状工具による刻み 縦のミガキ			I	
8-4	SI-01	9 遺構外 8385	5, IV	縦位のミガキ	縦位のミガキ			I-3	
8-5	SI-01	21	3	口唇部 へ状工具による刻み 口縁部以下二枚貝条痕	横位のミガキ			I-3	
8-6	SI-01	5	5	口唇部 へ状工具による刻み 口縁部 爪形刺突・貝殻復縁刺突	斜・横方向のミガキ			0	AOMB67
11-1	SI-02 複式炉埋設土器	2-1		LR 縦位回転	行 被熱によるバグ顕著			I-2	
11-2	SI-02 複式炉埋設土器内	1, 1-1	1 層上, 3	行	行			IX-1	
13-1	SI-03 埋設土器	1, 2, 4, 6, 8, 15	1, 2	LR 縦位回転	ミガキ 下半~底部付近まで軽いハジケが認められる。内底面から4cm~10cmの高さまで黒色帯がめぐる。それ以上はやや赤化している。			IX-1	
13-2	SI-03	23, 30	1	LR 縦位回転	横位のミガキ			IX-1	
13-3	SI-03	29	1	板状工具による条痕調整	縦位のミガキ			IX-1	
13-4	SI-03	46 遺構外 8323	1, III	頸部 LR 側面圧痕 胴部 LR 縦位回転	横位・縦位のミガキ			IX-1	
13-5	SI-03	35 遺構外 8188, 9188	1, III	RL 斜位回転	行			IX-1	
13-6	SI-03	1 遺構外 8331	1, III	LR 斜位回転	行			IX-1	
13-7	SI-03	7 遺構外 7884	1, III	LR 磨消縄文	横方向のミガキ			VII	
13-8	SI-03	13-1	1	沈線、LR 縦位回転	行			VIII	
13-9	SI-03	3	1	LR 磨消縄文	ミガキ			VII	
15-1	SI-04	33, 41, 44, 45	1, 2	板状工具による条痕調整	摩滅			IX-1	
15-2	SI-04	40, P-X カツラ	1	LR 斜位回転	板状工具による縦位の行			IX-1	
15-3	SI-04	8	1	LR 縦位回転	摩滅			IX-1	
15-4	SI-04	27 遺構外 P-X	1, I	RL 縦位回転	摩滅			IX-1	
15-5	SI-04	4, 9	1	RLR 斜位回転	ミガキ			IX-1	
15-6	SI-04	26, 32	1	RL 斜位回転	摩滅			IX-1	
15-7	SI-04	5, 6	1	LR 横位回転	ミガキ			IX-1	
15-8	SI-04	12, 13	1	LR 縦位回転	ミガキ			IX-1	
16-1	SI-05	2	1	ミガキ、底辺ケズリ	ミガキ	底面ヘラギリ		土師器	
16-2	SI-05	pit1-p1, 2, 4, 5, 13 P-X	1, 2, 7	ミガキ→口縁部ヨコ行、底辺ケズリ	ミガキ(黒色処理)	切り離し後再調整		土師器	
16-3	SI-05 カド	6, 14-1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 13, 14, 15, 16, 17, 15-1, 2, 3, 19, 21	1, 2	口縁部 ヨコ行、胴部 ミガキ	ハケミミガキ			土師器	
16-4	SI-05	4	1	口縁部 ヨコ行、胴部 ケズリ	ハケミ			土師器	
17-1	SI-05	紡錘車	1					紡錘車	
17-2	SI-05	P-X-4 遺構外 1518-1, 2, 108, 2109-2, 2110-1, 2, 2111, 2112, 2122-2, 2801, 3024, 3025, 3026 P-X	6, III	RL 縦位回転、底辺ケズリ	ミガキ	板状工具によるナデ		VII	
19-1	SI-07 複式炉内	125, 130, 141, 152, 155-1, 2, 156	pit2	RL 縦位、底辺ケズリ	板状工具による行			IX-1	
19-2	SI-07 複式炉内	96, 105-3, 107, 145-1	1, pit2	RL 斜位から縦位回転	縦方向のミガキ			IX-1	
19-3	SI-07 複式炉内	106, 117-2, 147-1, 4, 151, 152, 154, P-X	1, pit2	LR 縦位回転	摩滅			IX-1	
19-4	SI-07 複式炉	132	3	RL 縦位回転	横方向のミガキ			IX-3	
19-5	SI-07 複式炉	136	3	横・斜方向のミガキ	横方向のミガキ			VII	
19-6	SI-07 複式炉	131	3	行	行			IX-1	

表 17 土器・土製品観察表 1

図版 番号	遺構名	P 番	層位	外面	内面	底面	備考	分類	年代測定 資料番号
19- 7	SI-07 複 式炉	119, 120	3	LR 横位回転	横方向の行			IX-1	
19- 8	SI-07 複 式炉	98	1	沈線による曲線文 (?) 摩擦顕著	縦方向の行			IX-1	
19- 9	SI-07 複 式炉	103	1	LR 磨消縄文	行	0	0	VII	
19-10	SI-07	86-7, 93-6	1, pit3 上面	RL 磨消縄文	縦方向のミガキ	0	0	VII	
19-11	SI-07	11, 14, 58, 93-4	1, pit3 上面	微隆起線 + 沈線	ミガキ			VII-4	
19-12	SI-07	34-1, 3, 79-1	1	RL 横位回転	横・斜方向のミガキ			IX-1	
19-13	SI-07	26, 27, 38	1	LR 充填縄文	横方向の行			VII-1	
19-14	SI-07	5	1	横方向の行	横方向の行			VII	
19-15	SI-07	64	1	RL 横位回転 口唇部下 5mm 磨消	横方向のミガキ			IX-1	
19-16	SI-07	46, 48, 62	1	RL 横位回転 口唇部下 5mm 磨消	横方向のミガキ			IX-1	
19-17	SI-07	34-2	1	LR 縦位回転	横方向の行			VII	
19-18	SI-07	4	1	LR 磨消縄文	行			VII-1	
19-19	SI-07	23	1	沈線による曲線文	横方向の行			VII	
19-20	SI-07	61	1	RL 縦位回転	横・斜方向の行			VII-1	
19-21	SI-07	77	1	LR 磨消縄文	行			VII-1	
20- 1	SI-08	7	3	微隆起線文 縄文側を先端の丸い棒状工具 で再調整し、沈線様になる。無文部ミガキ。	横方向のミガキ			VII	
20- 2	SI-08	40	2d	RL 縦位回転	横方向の行			X 1	
20- 3	SI-08	38	1	堅い円い縄による結節回転文 横位回転	行			IV-9	
22- 1	SI-09	972	床面	ミガキ→ヨコ行→ミガキ	摩擦		底部穿孔	土師器	
30- 1	SI-11 複 式炉	4	14	LR 縦位回転	横方向の行			IX-1	
30- 2	SI-11 複 式炉 2	6		LR 充填縄文、無文部 ミガキ	横方向のミガキ			VII-2	
30- 3	SI-11 複 式炉 2	2		LR 磨消縄文、微隆起線文 無文部 ミガキ	横方向のミガキ			VII-1	
30- 4	SI-11 複 式炉 2	7		LR 縦位回転	横方向の行			IX-1	
30- 5	SI-11	1	pit12 覆土	LR 縦位回転	摩擦			IX-1	
30- 6	SI-11 複 式炉埋設			LR 縦位回転	行、被熱によるバグが顕著			IX-1	
30- 7	SI-11	103, 111, 121, 122, 124, 126	1, 床面	LR 充填縄文 縄文部より無文部が厚くなる。	ミガキ			VII-1	AOMB62
30- 8	SI-11	78	1	LR 充填縄文	横方向の行			VII-1	
30- 9	SI-11	101, 105 遺構外 6718	1, III	沈線による曲線文	横方向の行			VII-1	
30-10	SI-11	29, 71	1	RL 磨消縄文、稜沈線	横方向のミガキ			VII-2	
30-11	SI-11	58	1	RL 磨消縄文	横方向の行			VII-1	
30-12	SI-11	83	1	LR 磨消縄文	横方向の行			VII-1	
30-13	SI-11	21	1	RL 磨消縄文、稜沈線	横方向のミガキ			VII-1	
30-14	SI-11	49	1	沈線	横方向の行			VII-1	
30-15	SI-11	48	1	RLR 磨消縄文	横方向の行			VII-1	
30-16	SI-11	53	1	LR 磨消縄文	横方向の行			VII-1	
30-17	SI-11	79	1	LR 磨消縄文	板状工具による行			VII-1	
30-18	SI-11	64	1	RL 磨消縄文、稜沈線	横方向の行			VII-1	
30-19	SI-11	32	1	LR 縦位回転後沈線 C	縦・横方向の行			VII	
30-20	SI-11	10, 13, 14, 16, 18, 90 遺構外 6207, 8483, 8484, 8554-1	1, III, IV	LR 斜位回転後沈線 C	板状工具による横方向の行			VII	
30-21	SI-11	4, 9, 12 遺構外 8469, 8474, 8552	1, III, IV	LR 斜位回転後沈線 C	横方向のミガキ			VII	
31- 1	SI-11	39	1	RL 縦位回転 口縁部 15mm 磨消	横方向のミガキ			IX-1	
31- 2	SI-11	24	1	LR 縦位回転	横方向の行			IX-1	
31- 3	SI-11	80	1	LR 横位回転	横方向の行			IX-1	
31- 4	SI-11	118 遺構外 2280, 3478	1, II, III	LR 縦位回転	板状工具による横方向の行			IX-1	
31- 5	SI-11	57	1	RL 縦位回転	横方向の行			IX-1	
31- 6	SI-11	28	1	LR 横位回転	横方向のミガキ			IX-1	
31- 7	SI-11	85	1	RL 横位回転	ミガキ			IX-1	
31- 8	SI-11, 14, SK-16	SI-11 46, SI-14 125, 137, 247, 263, 266, 269, 622 , 780, 781, 782, 783, 784, 786, 963, 1129, SK-16 44 遺構外 1806, 2259, 2735, 3000, 5621-1	1, 3, III	LR 縦位回転	剥落			IX-1	
31- 9	SI-11	17, 20 遺構外 2205-1, 2771, 3096, 3104, 3 152, 3284, 3285, 3289, 3430, 3436, 4603, 515 1, 5169, 5170, 6741, 8428, 8432, 8433, 8437, 8 439, 8466-2, 8472-2, 8479, 8484, 8487, 8646	1, III	RL 縦位回転	行			IX-1	

表 18 土器・土製品観察表 2

図版 番号	遺構名	P 番	層位	外面	内面	底面	備考	分類	年代測定 資料番号
35- 1	SI-14 複 式炉埋設 土器			LR 縦位回転	ミガキ			IX-1	
35- 2	SI-14, SK-15	SI-14 複式炉 P26, SI-14 P571, 594, 859, SK-15 11, 12, 24, 29 遺構外 3151, 4731, 5797, 9282-2, 3, 9287-1, 2, 3, P-X	SI-14 複 式炉堆積 土, SI-14 堆積土, SK-15 1 層, I	LR 充填	ミガキ			VIII-1	A0NB61
35- 3	SI-14 複 式炉	8	複式炉堆積 土	RL 縦位・斜位回転 口唇部下 10mm 板状工具 による行'	行'			IX-1	
35- 4	SI-14 複 式炉	42	複式炉堆積 土	RL 磨消縄文	横方向のミガキ			VIII-1	
35- 5	SI-14 複 式炉	30	複式炉堆積 土	LR 縦位回転	摩滅			IX-1	
35- 6	SI-14 複 式炉	41, P-X-91, 133	複式炉堆積 土	LR 充填縄文	ミガキ			VIII-1	
35- 7	SI-14 複 式炉	43, 44	複式炉堆積 土	ミガキ	行'			VIII-1	
35- 8	SI-14 複 式炉	29	複式炉堆積 土	LR 充填縄文	横方向のミガキ			VIII-1	
35- 9	SI-14 複 式炉	5	複式炉堆積 土	RL 充填縄文	横方向の行'			VIII-1	
35-10	SI-14 複 式炉	28	複式炉堆積 土	磨消縄文	斜方向の行'			VIII-1	
35-11	SI-14 複 式炉	4	複式炉堆積 土	沈線による曲線文	横方向のミガキ			VIII-1	
35-12	SI-14 複 式炉	16	複式炉堆積 土	LR 縦位回転	斜・縦方向のミガキ			IX-1	
35-13	SI-14 複 式炉	P-X-3	複式炉土器 内 1	RL 横位回転	横方向のミガキ			IX-1	
35-14	SI-14	972	1	LR 充填縄文、把手、竹管状工具による刺突	板状工具による行'			VIII-1	
35-15	SI-14	1163	床	LR 縦位回転	縦方向のミガキ			IX-1	
35-16	SI-14	770, 786, 850-3, 970-1, 1165-1	1, 2, I	LR 縦位回転	行'			IX-1	
35-17	SI-14 SK-14	SI-14 531, SK-14 22, 38 遺構外 1817, 2623, 2 749, 2883, 3299, 3300-2, 3396, 4453, 4466, 4469, 44 71, 6295, 6696, 7189, 7486, 7885, 8396, P-X	1, III	稜沈線、充填縄文	行'			VIII-2	
35-18	SI-14	1149	2	LR 縦位回転、口唇部 5 ~ 10mm 磨消	横方向の行'			IX-1	
35-19	SI-14	1142	2	LR 縦位回転	行'			IX-1	
35-20	SI-14	1155	2	LR 磨消縄文	横方向の行'			IX-1	
35-21	SI-14	448, 998 遺構外 2626, 6406	1, III	LR 磨消縄文	剥落			VIII-1	
35-22	SI-14	358	1	LR 磨消縄文	行'			VIII-1	
35-23	SI-14	855, 1103	1	LR 充填縄文、一部に微隆帯	横方向のミガキ			VIII-1	A0NB64
35-24	SI-14 SX-06	SI-14 327, SX-06 164	1	LR 磨消縄文	横方向の行'			VIII-1	
35-25	SI-14	1039	1	LR 磨消縄文	摩滅			VIII-1	
36- 1	SI-14	303-1, 660, 1051, 1073, 3046, 3063, 3064, 5418, 541 9, 5421	1, III	LR 充填状文	横方向の行'			VIII-1	
36- 2	SI-14 SX-06	SI-14 301, 406, 493, 505, 809, 1005, 1027, SX-06 54 遺構外 844, 1235, 2236, 2740, 5622-1, 6416, 64 17, 6584-1, 8671	1, III	LR 充填状文	摩滅			VIII-1	
36- 3	SI-14	776	1	LR 充填縄文	横方向の行'			VIII-1	
36- 4	SI-14	719, 890, 995	1	LR 磨消縄文	横方向のミガキ			VIII-1	
36- 5	SI-14	393, 1000	1	RL 充填状文	摩滅			VIII-1	
36- 6	SI-14 SI-15	SI-14 334, SI-15 2, 7	1	沈線	横方向のミガキ			VIII-1	
36- 7	SI-14	591	1	LR 磨消縄文	横方向のミガキ			VIII-1	
36- 8	SI-14	496	1	LR 磨消縄文	横方向の行'			VIII-1	
36- 9	SI-14	593	1	LR 磨消縄文	行'			VIII-1	
36-10	SI-14	151	1	沈線による曲線文	横方向のミガキ			VIII-1	
36-11	SI-14	1031, 1141	1	LR 充填縄文	横方向の行'			VIII-1	
36-12	SI-14	964-1	1	沈線による曲線文	横方向の行'			VIII-1	
36-13	SI-14	845, 1161	1, 2	LR 磨消縄文	行'			VIII-1	
36-14	SI-14 SX-06	SI-14 29 SX-06 166 遺構外 7316, P-X	1, I, III	LR 磨消縄文	摩滅			VIII-1	

表 19 土器・土製品観察表 3

図版番号	遺構名	P 番	層位	外面	内面	底面	備考	分類	年代測定資料番号
36-15	SI-14	132, 146, 265	1	RL 充填縄文	横方向のミガキ			VII-1	
36-16	SI-14	595, 821, 1112, 1117	1	RL 充填縄文	横方向のミガキ			VII-1	
36-17	SI-14	418	1	LR 磨消縄文	横方向のミガキ			VII-1	
36-18	SI-14	932	1	RL 磨消縄文	摩滅			VII-1	
36-19	SI-14	5	1	LR 磨消縄文	剥落			VII-1	
36-20	SI-14	435 遺構外 1557	1, II	LR 磨消縄文	剥落			VII-1	
36-21	SI-14	738	1	条痕後、沈線による曲線文	横方向のナデ			VII-1	
36-22	SI-14	449	1	LR 磨消縄文	ナデ			VII-1	
36-23	SI-14	888, 894	1	LR 磨消縄文	横・斜方向のミガキ			VII-1	
36-24	SI-14	443, 677, 1030	1	LR 磨消縄文	横方向のミガキ			VII-1	
36-25	SI-14	154, 162	1	LR 磨消縄文	横方向のナデ			VII-1	
36-26	SI-14	117	1	沈線による曲線文、曲線文に囲まれた部分が他の部分に比べて分厚くなる。	横方向のミガキ			VII-2	
36-27	SI-14	291	1	RL 充填縄文、一部稜沈線	摩滅			VII-2	
36-28	SI-14	702	1	LR 充填状文	横方向のミガキ			VII-1	
36-29	SI-14	1061-1	1	RL 磨消縄文、稜沈線	横方向のミガキ			VIII-2	
37- 1	SI-14	722, 976, 遺構外 P-X	1	LR 充填縄文	横方向のミガキ			VII-4	
37- 2	SI-14	955, 958	1	LR 磨消縄文・稜沈線	横方向のミガキ			VII-2	
37- 3	SI-14	1135	1	LR 横位・縦位回転、平行沈線	横方向のナデ			VII	
37- 4	SI-14	181, 585, 680, 801, 834-1, 893	1	平行沈線間にハ状工具による刻み 胴部 RL 縦位・横位回転	摩滅			VII	AOMB65
37- 5	SI-14	541	1	沈線、棒状工具による刺突	横方向のナデ			VII-6	
37- 6	SI-14	512	1	粘土瘤貼り付け、粘土瘤上に竹管状工具による刺突、半円形刺突	横方向のナデ			VII-6	
37- 7	SI-14	931-1	1	LR 縦位回転、口唇部下 10mm 磨消	横方向のミガキ			IX-1	
37- 8	SI-14	873-2	1	波頂部下に粘土瘤	摩滅			IX-1	
37- 9	SI-14	52-1, 2, 53, 197-1	1	LR 縦位回転	横方向のナデ・ミガキ			IX-1	
37-10	SI-14	1038	1	LR 斜位回転、口唇部下 5mm 磨消	横方向のナデ			IX-1	
37-11	SI-14 SX-06	SI-14 937, SX-06 43 遺構外 4936	1, III	LR 縦位回転	横方向のミガキ			IX-1	
37-12	SI-14	276 遺構外 3972	1, III	LR 縦位回転、口唇部下 15 ~ 20mm 磨消	横方向のナデ			IX-1	
37-13	SI-14	363, 755, 757	1	RL 横位回転、口唇部下 7mm 磨消	斜・横方向のナデ			IX-1	
37-14	SI-14	322, 832, 1041	1	RL 横位回転	横方向のミガキ			IX-1	
37-15	SI-14	747-1	1	LR 縦位回転、口唇部下 20mm 工具によるナデ	横方向のナデ			IX-1	
37-16	SI-14	599, 600	1	RL 縦位回転、口唇部直下のみ RL 横位回転	横方向のミガキ			IX-1	
37-17	SI-14	856 遺構外 6871	1, III	単軸絡条体 1 類縦位回転	摩滅			IX-1	
37-18	SI-14	586, 1079	1	LR 斜位・縦位回転	横方向のミガキ			IX-1	
37-19	SI-14	834-2	1	LR 縦位回転	横方向のナデ			IX-1	
37-20	SI-14, SK-16	SI-14 274, 279, 476, SK-16 47, 142-2	1, 3, 3a	RL 縦位回転	横方向のナデ			IX-1	
37-21	SI-14	690, 883, 884, 902, 982-1 遺構外 2479-1, 2484, 3812, 3813	1, II, III	LR 縦位回転	横方向のナデ			IX-1	
37-22	SI-14	1054, 1055, 1067	1	RL 斜位回転	剥落			IX-1	
38- 1	SI-14	133, 158, 357, 360, 518, 605, 610, 614, 712, 761, 101 0, 1049, 1122, P-X-85	1	LR 縦位回転	摩滅			IX-1	
38- 2	SI-14	1033	1	LR 縦位回転	斜方向のナデ			IX-1	
38- 3	SI-14	961 遺構外 6541, 6856	1, III	LR 縦位回転	縦方向のミガキ			IX-1	
38- 4	SI-14	427, 428	1	条痕（板状工具の木口?）	板状工具による斜方向のナデ			IX-1	
38- 5	SI-14	345	1	条痕（板状工具の木口?）	板状工具による横方向のナデ			IX-1	
38- 6	SI-14	480, 621, 1043, 1113, 1133, 1137-1 遺構外 6464	1, III	L 縦位回転 被熱によるハツケ顕著	炭化物付着			IX-1	
38- 7	SI-14	822, 826-1, 891 遺構外 2245	1, III	RL 縦位回転 底辺 ケスリ	ミガキ			IX-1	
38- 8	SI-14	662	1		ナデ			IX-1	
38- 9	SI-14	316	1		ナデ	板状工具によるナデ 工具幅 30mm		IX-1	
38-10	SI-14	819, 873-1	1		ナデ			IX-1	
38-11	SI-14	40, 58, 314 遺構外 3403	1, III	ナデ	ナデ			IX-1	
38-12	SI-14	32-1 遺構外 2154, 8546	1, II, III	ハツケ状貼り付け、沈線、胴部下 半 RL 縦位	ナデ			X-2	
41- 1	SK-04	3	6	LR 横位回転	ナデ			IX-1	
41- 2	SK-04	2	2	ナデ	ナデ			IX-1	
41- 3	SK-04	6	1	LR 横位回転	ミガキ			V	
41- 4	SK-04	8	1	ナデ	ナデ			IX-1	
41- 5	SK-05	1, 13	2, 6	羽状縄文	ナデ			IV-2	
41- 6	SK-05	14	5	0 段多条 RL	ナデ			IV-2	
41- 7	SK-05	2	1・2 層	摩滅	摩滅			IX-1	

表 20 土器・土製品観察表 4

図版 番号	遺構名	P 番	層位	外面	内面	底面	備考	分類	年代測定 資料番号	
41- 8	SK-05	99-2	II 層確認面	擦系側面圧痕 (R)	ミガキ			IV-10		
43- 1	SK-06	1, 4, 312 遺構外 1340, 1342, 1343, 1346, 1347, 1355, 1362, 1365, 1533, 1548, 1554, 1558, 1566, 1582, 1846, 1867, 1868, 1869, 1870, 1873, 1875, 1946, 1981, 2031, 2080, 2082, 2083, 2084, 2093, 2094, 2095, 2612, 2813, 2814, 2816, 2817, 2818, 2819, 2821, 2822, 2823 -1, 2, 2824, 2825, 2828, 2829, 2830, 2833, 2838, 2844, 2845, 2965-1, 2966-1, 3, 2969, 2970-2, 2971, 2972, 2973, 2988, 2991, 2992, 2994-1, 3002, 3205, 3206, 3207, 3210, 3246, 4224, 4225, 4257, 4258, 4261, 5492, 5495, 6168-1, 6169, 6170, 6171, 6172, 6173, 6174-1, 2, 6175, 6589, 6590, 6591, 6593, 6720, 6845, 8356, P-X107, カクラン, 一括	1, 3, II, III	LR 縦位回転	ナゲ				X-2	
43- 2	SK-06	7, 299	1, 3, pit1	沈線による曲線文	横方向のナゲ			VII-1		
43- 3	SK-06	2, P-X	2, pit1	LR 充填縄文	横方向のナゲ			VII-1		
43- 4	SK-06	24, 164, 166, 192, 249, 251, 253, 254	2, 3	RL 縦位回転	横方向のナゲ			IX-1		
43- 5	SK-06	298, 300, 338, 339	3	沈線による曲線文	横方向のナゲ			VII-1		
43- 6	SK-06	105	3	LR 磨消縄文	縦・横方向のミガキ			VII-1		
43- 7	SK-06	205	3	RL 充填縄文	板状工具によるナゲ 工具幅 1cm			VII-1		
43- 8	SK-06	175	3	沈線による曲線文	横方向のナゲ			VII-1		
43- 9	SK-06	101, 217, P-X	3, III	沈線による曲線文	ナゲ			X?		
43-10	SK-06	56-1, 2, 66, 135, 160, 197, 206, 212, 229, 239, 241, 242, 263, 277	2, 3	RL 縦位回転	ミガキ			IX-1		
43-11	SK-06	103, 221, 222, 289, 314, 340 遺構外 1900, 2765, 5474, 5828, 8101, 8189	3, III, IV	LR 縦位回転 口唇直下のみ横位回転 口唇部下 1 ~ 2cm 磨消	縦・横方向の工具ナゲ			IX-1		
43-12	SK-06	90	3	RL 縦位回転	横方向のナゲ 工具幅 5mm			IX-1		
43-13	SK-06	147, 215, 246 遺構外 2156	3, III	LR 充填縄文 稜沈線	横方向のナゲ			VII-1		
43-14	SK-06	307	3	RL 充填縄文	横方向のミガキ			VII-1		
43-15	SK-06	156	1	RL 充填縄文	横方向のミガキ			VII-1	A0NB66	
43-16	SK-06	84, 87	3	LR 充填縄文	横・斜方向のナゲ 工具幅 7mm			VII-1		
44- 1	SK-06	325-1	3	LR 充填縄文	横方向のミガキ			VII-1		
44- 2	SK-06	326-1	3	LR 充填縄文	摩滅			VII-1		
44- 3	SK-06	216, 311, 312, 315	3	LR 磨消縄文	横方向のナゲ			VII-1		
44- 4	SK-06	198	3	LR 磨消縄文	ナゲ			VII-1		
44- 5	SK-06	189 遺構外 2681, 6189	3, III	LR 磨消縄文 稜沈線 (縄文部の両側を稜が取り囲んだ部分は無文部が浮き彫り状に見える)	ナゲ			VII-1		
44- 6	SK-06	313	3	LR 充填縄文 引き直し沈線あり	剥落			VII-1		
44- 7	SK-06	342	3	RL 充填縄文	横方向のミガキ			VII-1		
44- 8	SK-06	51, 247 遺構外, 4684	2, 3, III	LR 充填縄文	ナゲ			VII-1		
44- 9	SK-06	78 遺構外 2622-1, 3950	2, III	LR 充填縄文	縦方向のナゲ			VII-1		
44-10	SK-06	52-1	2	RL 充填縄文				VII-1		
45- 2	SK-12 SK-13	SK-12 3, 6, 9, SK-13 2, 13, 14 遺構外 2400, 2406-1, 2512-1, 3828, 3853, P-X	1, III	RL 斜位回転	ミガキ				弥生	
45- 3	SK-12	2-1	1	RL 縦位回転	ミガキ			IX-1		
45- 4	SK-12	5	1	RL 充填縄文	ミガキ			IX-1		
46- 1	SK-13	4	1	LR 斜位回転	ナゲ			VII		
46- 2	SK-13	1	1	沈線による曲線文	ミガキ			IX-1		
48- 1	SK-14	5, 144	1	LR 充填縄文	縦・横方向のミガキ 工具幅 5mm			VII-1		
48- 2	SK-14	15	1	LR 充填縄文	横方向のミガキ			VII-1		
48- 3	SK-14	18-1, 29	1	LR 充填縄文	横方向のミガキ			VII-1		
48- 4	SK-14	24	1	LR 充填縄文 稜沈線	横方向のナゲ			VII-2		
48- 5	SK-14	30-1, 33-1, 2, 72	1	LR 充填縄文	横方向のミガキ			VII-1		
48- 6	SK-14	25-1, 2	1	LR 充填縄文	横方向のミガキ			VII-1		
48- 7	SK-14	3, 9, 35	1	LR 充填縄文	横・縦方向のナゲ			VII-1		
48- 8	SK-14	1, 13	1	LR 充填縄文	縦・横方向のミガキ後 縦方向のミガキ			VII-1		
48- 9	SK-14	109, 153	1	LR 充填縄文	縦・横方向のナゲ			VII-1		
48-10	SK-14	27	1	LR 充填縄文	縦・横方向のミガキ			VII-1		
49- 1	SK-14	18-2	1	LR 充填縄文	横方向のナゲ			VII-1		
49- 2	SK-14	32-1	1	LR 充填縄文 引き直し沈線あり	ナゲ			VII-1		
49- 3	SK-14	26-1 遺構外 9164	1, III	LR 充填縄文	横方向のミガキ			VII-1		
49- 4	SK-14	36	1	LR 充填縄文	横方向のナゲ			VII-1		
49- 5	SK-14	117	1	LR 充填縄文	横方向のミガキ			VII-2		
49- 6	SK-14	80	1	LR 磨消縄文	横方向のナゲ			VII-1		

表 21 土器・土製品観察表 5

図版番号	遺構名	P 番	層位	外面	内面	底面	備考	分類	年代測定資料番号
49-7	SK-14	59	1	LR 磨消縄文	横方向の行			Ⅷ-1	
49-8	SK-14	14-14	1	L 縦位回転 沈線 C	横方向のミガキ			Ⅷ-1	
49-9	SK-14	37	1	ミガキ	ミガキ		内面漆付着	IX-2	
49-10	SK-14	122	1	LR 磨消縄文、稜沈線	横方向の行			Ⅷ-2	
49-11	SK-14	65	1	沈線による曲線文	摩滅			Ⅷ-1	
49-12	SK-14	28	1	LR 磨消縄文	行			Ⅷ-1	AOMB63
49-13	SK-14	21	1	沈線 胴部下半 LR 縦位回転	横方向の行			Ⅷ-1	
49-14	SK-14	12-1, 2	1	LR 磨消縄文	横方向の行			Ⅷ-1	
50-1	SK-14 SK-16	SK-14 96, 98, SK-16 6, 48, 51, 68-1, 69, 70, 71, 97-1, 2, 102, 106, 109, 112, 133, 168, 171, 179 遺構外 3181, 5945	SK-14 1, SK-16 3, 9, 10, III	LR 縦位回転、胴部中に炭化物が常状に付着	ミガキ、下半双炭化物付着			IX-1	
50-2	SK-14	16, 17-1, 42	1	LR 縦位回転	行			IX-1	
50-3	SK-14	19	1	RL 斜位→口唇部直下のみ RL 横位回転施文後磨消	横方向のミガキ			IX-1	
50-4	SK-14	17(2)	1	LR 縦位回転	被熱によるバツが顕著			IX-1	
50-5	SK-14	133	1	LR 充填縄文 稜沈線	行			土製品	
51-1	SK-15	39	焼土 2 層	LR 磨消縄文	行			Ⅷ-1	
51-2	SK-15	36	焼土 2 層	LR 縦位回転 沈線 C	行			Ⅷ	
51-3	SK-15	28	1	ミガキ	横方向の行			Ⅷ	
51-4	SK-15	19	1	LR 磨消縄文	横方向のミガキ			Ⅷ-1	
51-5	SK-15	32-1, 2, 3, 4, 5, 7, 8, 12, 18, 23 .8714-2, 3	1, III	RL 縦位回転 底部付近剥落	行			IX-1	
53-1	SK-16	174	9・10	LR 充填縄文	摩滅			Ⅷ-1	
53-2	SK-16	172	9・10	LR 磨消縄文	縦方向の板状工具による行 工具幅 5mm			Ⅷ-1	
53-3	SK-16	178	9・10	RL 縦位回転 口唇部 5mm 行	横方向の板状工具による行 工具幅 1mm			Ⅷ	
53-4	SK-16	124	3a	板状工具による縦方向の行	板状工具による縦・横方向の行 工具幅 7mm 広葉樹材			IX-1	
53-5	SK-16	88, 92, 96, 113, 114, 120, 140, 141, 161	1, 3, 3a	RL 縦位回転 口唇部 6mm 行	横方向のミガキ			IX-1	
53-6	SK-16	145	3a	LR 縦位回転 底辺ケリ	行			IX-1	
53-7	SK-16	32, 58, 110, 111, 138, 139 遺構外 4238	3c, 1, 3, III	LR 斜位回転 口唇部下 1cm 行	横方向の行			IX-1	
53-8	SK-16	86, 90, 127, 151	1, 3, 3c	沈線による曲線文	縦・横方向のミガキ			Ⅷ-1	
53-9	SK-16	8, 62	1, 3	LR 充填縄文	横・斜方向の行			Ⅷ-1	
53-10	SK-16	103	3	LR 磨消縄文	横・斜方向の行			Ⅷ-1	
53-11	SK-16	61	3	LR 磨消縄文	横・斜方向の行			Ⅷ-1	
53-12	SK-16	104	3	LR 磨消縄文 稜沈線	横方向のミガキ			Ⅷ-1	
53-13	SK-16	5-2	1	LR 充填縄文	横方向の行			Ⅷ-1	
53-14	SK-16	75	1	沈線による曲線文	横方向のミガキ			Ⅷ-1	
53-15	SK-16	21 遺構外 2951, 2952, 2955, 4232, 4233, 7344-3	1, III	LR 磨消縄文 稜沈線	横方向のミガキ			Ⅷ-2	
53-16	SK-16	10	1	底辺ケリ	行	行		IX-1	
53-17	SK-16	12, 29, 52	1, 3	行	行			IX-1	
61-1	SX-06 SI-14	SX-06 51, SI-14 97, 219, 220-2, 289-1, 336, 338, 341, 342, 1025, 1026, 1148, 1175	1	LR 充填縄文	行 内外面とも、最大径以下が最もよく焼けており、内面のハジケもこれに対応する。頸部以上の内面は被熱痕が顕著ではない。これらの点から、通常の容器として使用されたものと考えられる。			Ⅷ-1	
61-2	SX-06	1, 106, 131 遺構外 4421, P-X	1, III, 埋め戻し土	LR 充填縄文	横方向の行			Ⅷ-1	
61-3	SX-06	126, 194-2	1	LR 磨消縄文	横方向のミガキ			Ⅷ-1	
61-4	SX-06	23, 209	1	RL 磨消縄文	横方向のミガキ			Ⅷ-1	
61-5	SX-06	38 遺構外 5763	1, III	LR 磨消縄文	摩滅			Ⅷ-1	
61-6	SX-06	214	1	沈線による曲線文	摩滅			Ⅷ-1	
61-7	SX-06	53	1	RL 磨消縄文	横方向の行			Ⅷ-1	
61-8	SX-06	206 遺構外 2938, 2939, 2941-3, 4, 4254, 4255	1, III	LR 充填縄文 ミガキ	ミガキ			Ⅷ-1	
61-9	SX-06	11, 21, 24, 81	1	RL 充填縄文	横・斜方向のミガキ			Ⅷ-1	
61-10	SX-06	194-1, 202 遺構外 4378, P-X	1, III	RL 磨消縄文	縦方向のミガキ			Ⅷ-1	
61-11	SX-06	192-1	1	RL 磨消縄文	摩滅			Ⅷ-1	
61-12	SX-06	20, 25, 26-1, 71, 73, 102, 103, 110-1, 127, 155, 178, 220-2 遺構外 4317, 4320, 4324, 4325, 4327	1, III	微隆起線	行			Ⅷ-3	
61-13	SX-06	231	1	頸部 沈線間に刺突 LR 充填縄文	横方向のミガキ			Ⅷ	
61-14	SI-05 SX-06	SI-05 2, 5, 11, 13 SX-06 216 遺構外 2124, 6649, 7841, 7916, 8542, 8649 P-X	1, III	LR 斜位回転	行			IX-1	

表 22 土器・土製品観察表 6

図版 番号	遺構名	P 番	層位	外面	内面	底面	備考	分類	年代測定 資料番号
62- 1	SX-06	163, 168, 169, 180, 181, 182, 183-1, 2, 184, 185, 186-1, 2, 187-1, 2, 188, 190-1, 2, 191, 192-2, 3, 193, 196-1, 2, 198, 203, 205, 235, 2 36, 237, 238, 239, 240, 241, 243, 244, 245, 246	1	上半 LR 充填 下半 LR 縦位回転 上位 1/4 は被熱のため赤化	行'、上位 1/4 被熱のため剥落 顕著。下位 1/3 は暗褐色～黒 褐色を呈する。			VIII-1	
62- 2	SX-06	133	1	RL 充填縄文	ミガキ			VIII-1	
62- 3	SX-06 SI-05	SX-06 225, SI-05 P-X-16 遺構外 5132	1, 7, III	LR 斜位回転 底辺部 横方向のミガキ	斜・横方向の行'			IX-1	
62- 4	SX-06	4, 5, 6, 8, 105-1, 2, 137, 138	1	LR 縦位回転 口縁部 2cm 行'	斜・横方向のミガキ			IX-1	
62- 5	SX-06	10, 32	1	LR 縦位回転後 沈線 C				VII	
62- 6	SX-06	221	1	RL 縦位回転	ミガキ			IX-1	
65- 3	SX-08	1, 2, 3, 4, 7, 8-1, 2, 9, 10-1, 2, 11, 12, 13, 14, 16-1, 2, 17, 18, 19, 21, 22, 23, 24, 25 , 26, 27, 28, , 一括 -1, 5, 7, 11 P-X-4, 6, 12, 13	1	横位から斜位の条痕 (条幅 2mm)	横位の条痕 (条幅 1mm)			III-3	
66- 1	SR-01	1, 2, 3, 4, 5, 7, 8, 10, 12, 13, 14, 15, 20-1, 2, 21, 22, 23, 24-1, 2, 26, 27-1, 2	11	LR 縦位回転 外面の被熱痕跡は下位 1/2 以下に顕著に見られる。上半には煤付着。	行' 内面の被熱痕跡は不明瞭 である。			IX-1	
67- 1	SI-13	5, 6 遺構外 2872, 6744, 7083	6, III	RLR 磨消縄文	被熱のため荒れている			X-2	
67- 2	SI-13	2	1	磨消縄文	ミガキ			X-2	
68- 1	SV-01	P-X-9	堆積土	LR 斜位回転	摩滅			IX-1	
68- 2	SV-01	P-X-12, 15	覆土	LR 磨消縄文	ミガキ			X	
68- 3	SV-01	P-X-7	堆積土	ミガキ				VIII-1	
68- 4	SV-01	P-X	覆土, 堆積 土	底辺部 横方向の行'	横方向の行'	網代圧痕 →粘土貼付		IX-1	
70- 1	遺構外	717, 6767, 7711, 8773	III, IV	口唇部上面 へら状工具による刻み 口縁部 爪形刺突 鋸歯状沈線	縦・横位の行'			I-1	AOMB71
70- 2	遺構外	713-2	III	口唇部前面 へら状工具による刻み 口縁部 貝殻腹縁刺突 爪形刺突	行'			I-2	
70- 3	遺構外	かた		口唇部前面 へら状工具による刻み 口縁部 貝殻腹縁刺突 爪形刺突	行'			I-2	
70- 4	遺構外	8058	IV	口唇部前面 へら状工具による刻み 口縁部 貝殻腹縁刺突 爪形刺突	剥落			I-2	
70- 5	遺構外	かた		口唇部上面 へら状工具による刻み 口縁部 条痕	横位のミガキ			I-5	
70- 6	遺構外	9072	IV	口唇部前面 へら状工具による刻み 口縁部 条痕	横位の行'			I-5	
70- 7	遺構外	793, かた	III	沈線 貝殻腹縁刺突	横方向のミガキ			II	
70- 8	遺構外	853	III	口唇部上面刻み 沈線状貝殻腹縁刺突	摩滅			II	
70- 9	遺構外	9445	V	沈線 貝殻腹縁刺突	縦方向のミガキ			II	
70-10	遺構外	867	IV	沈線上貝殻腹縁刺突	縦方向のミガキ			II	
70-11	遺構外	843	III	沈線上貝殻腹縁刺突	摩滅			II	
70-12	遺構外	9464, 9476, 9483	IV, V	沈線 貝殻腹縁による刺突	横方向のミガキ			II	
70-13	遺構外	9405, 9047, 9429, 9431, 9444, 9458	IV, V	沈線 貝殻腹縁刺突 平行沈線	横方向のミガキ			II	
70-14	遺構外	226, 841	IV	沈線 貝殻腹縁刺突	摩滅			II	
70-15	遺構外	911	IV	沈線 貝殻腹縁刺突	横方向のミガキ			II	
70-16	遺構外	かた	IV	沈線	行'			II	
70-17	遺構外	かた		沈線上貝殻腹縁刺突	行'			II	
70-18	遺構外	P-X	IV	沈線 貝殻腹縁刺突 棒状工具による刺 突	条痕 (条幅 1mm 工具幅 5mm)			II	
70-19	遺構外	769-1, 3	IV	沈線上貝殻腹縁刺突	縦方向のミガキ			II	
70-20	遺構外	770	III	沈線上貝殻腹縁刺突	縦方向のミガキ			II	
70-21	遺構外	385	III	沈線 貝殻腹縁刺突	縦方向のミガキ			II	
70-22	遺構外	9125	IV	沈線 貝殻腹縁刺突	行'			II	
70-23	遺構外	849-1	IV	沈線上貝殻腹縁刺突	斜方向のミガキ			II	
70-24	遺構外	9437	IV	沈線上貝殻腹縁刺突 棒状工具による刺 突	口唇部 貝殻腹縁刺突 行'			II	
70-25	遺構外	9436	IV	沈線 貝殻腹縁刺突	摩滅			II	
70-26	遺構外	9432	IV	行'	条痕 (条幅 1mm)			II	
70-27	遺構外	9410-1	V	沈線上貝殻腹縁刺突 棒状工具による刺 突	横方向の条痕 (条幅 1mm) 工 具幅 10mm			II	
70-28	遺構外	9468-2	IV	沈線上貝殻腹縁刺突 棒状工具による刺 突	横方向の条痕 (条幅 1mm)			II	
70-29	遺構外	9468	V	沈線上貝殻腹縁刺突 棒状工具による刺 突	横方向の条痕 (条幅 1mm)			II	
70-30	遺構外	II F-116	IV	沈線上貝殻腹縁刺突	口唇部 貝殻腹縁刺突 行'			II	
70-31	遺構外	9410-3	V	沈線上貝殻腹縁刺突	横方向の条痕			II	
70-32	遺構外	9410-2	V	沈線上貝殻腹縁刺突	板状工具による行' (条痕)			II	
70-33	遺構外	9459	V	沈線 貝殻腹縁刺突	横方向の行'			II	

表 23 土器・土製品観察表 7

図版番号	遺構名	P 番	層位	外面	内面	底面	備考	分類	年代測定資料番号
70-34	遺構外	9400	IV	沈線 棒状工具による刺突	斜方向の ナギ			II	
70-35	遺構外	844	III	沈線 貝殻縁刺突	ナ			II	
70-36	遺構外	831	III	沈線 貝殻縁刺突	ナ			II	
70-37	遺構外	8237, 8238	IV	微隆起線による幾何学文	条痕（条幅 1.5mm）板？			III-1	
70-38	遺構外	8072	IV	微隆起線による幾何学文	条痕（条幅 0.5～1mm）板？			III-1	
70-39	遺構外	256, 257	IV	微隆起線による幾何学文	条痕（条幅 0.5～1mm）板？			III-1	AOMB68
70-40	遺構外	9486	IV	微隆起線による幾何学文	条痕（条幅 1.5mm）板？			III-1	AOMB69a, b
70-42	遺構外	P-X	排土	条痕調整後 微隆起線による幾何学文	条痕（条幅 1.5mm）貝？			III-1	
70-42	遺構外	8454-2, 8456	IV	微隆起線による幾何学文	条痕（条幅 1.5mm）			III-1	
70-43	遺構外	6357	III	条痕調整後微隆起線による幾何学文	条痕（条幅 1mm）			III-1	
71- 1	遺構外	8461	IV	微隆起線による幾何学文	条痕（条幅 0.5～1mm）板			III-1	
71- 2	遺構外	8384	IV	条痕調整後 微隆起線による幾何学文	条痕（条幅 0.5～1mm）板？			III-1	
71- 3	遺構外	229	IV	微隆起線上絡条体圧痕 条痕調整	条痕（条幅 1～1.5mm）			III-1	
71- 4	遺構外	763-2	III	口唇部 絡条体圧痕 微隆起線	条痕（条幅 2.5mm）			III-1	
71- 5	遺構外	371	III	口唇上回転縄文 口唇直下に微隆起線 微隆起線上回転縄文	条痕（条幅 1mm）板？			III-2	
71- 6	遺構外	8158	IV	条痕 半円形の刻み（右→左）条幅 6mm	ナ 条痕 条幅 1mm			III-3	
71- 7	遺構外	9222	IV	条痕 条幅 6mm	条痕 条幅 2.5mm			III-3	
71- 8	遺構外	9371-2, 9372	IV	条痕 条幅 4mm 先端の不揃な棒状工具による刺突	条痕 条幅 2mm			III-3	
71- 9	遺構外	798, 799, 881, 797	III, IV	条痕 条幅 4～6mm 二枚貝？	条痕 条幅 1.5～2mm 二枚貝			III-3	
71-10	遺構外	9152-1	IV	条痕 条幅 3～4mm 二枚貝？	摩滅			III-3	
71-11	遺構外	9007	IV	条痕 条幅 3～3.5mm 二枚貝？	指おさえ ナ			III-3	
71-12	遺構外	876, 894	III, IV	条痕 条幅 1～1.5mm	条痕 条幅 1mm			III-3	
71-13	遺構外	IW-116	カクラン	条痕 条幅 2mm 二枚貝？	条痕 条幅 2mm			III-3	
71-14	遺構外	915	III	条痕 条幅 2mm 二枚貝？	条痕 条幅 2mm			III-3	
71-15	遺構外	918	III	条痕 条幅 0.5～1.5mm 板状工具	条痕 条幅 1～1.5mm?			III-3	
71-16	遺構外	850, 879-2, 897	III, IV	条痕 条幅 1mm	条痕 条幅 1mm			III-3	
71-17	遺構外	1663	III	条痕による幾何学文幅 4mm 二枚貝	条痕 条幅 1mm			III-4	
71-18	遺構外	8090	IV	条痕による幾何学文 条幅 4mm 二枚貝	条痕 条幅 1mm			III-4	
71-19	遺構外	8691	IV	条痕による幾何学文 条幅 4mm 二枚貝	条痕 条幅 1mm 二枚貝			III-4	
71-20	遺構外	8336	III	条痕による幾何学文 条幅 4mm 二枚貝	条痕 条幅 1mm 二枚貝			III-4	
71-21	遺構外	9397	IV	単軸絡条体 1 類 (R) 側面圧痕	条痕後 ナ			III-5	
71-22	遺構外	9225-1	IV	単軸絡条体 1 類 (R) 側面圧痕	条痕 条幅 0.5～1mm			III-5	
71-23	遺構外	9291	IV	単軸絡条体 1 類 (R) 側面圧痕	条痕 条幅 0.5～1mm 板状工具			III-5	
71-24	遺構外	9399	IV	単軸絡条体 1 類 (R) 側面圧痕	条痕 条幅 2mm			III-5	
71-25	遺構外	9384	IV	単軸絡条体 1 類 (R) 側面圧痕	条痕 条幅 1mm			III-5	
71-26	遺構外	9225-2	IV	単軸絡条体 1 類 (R) 側面圧痕	条痕 条幅 1mm 二枚貝			III-5	
71-27	遺構外	9290	IV	単軸絡条体 1 類 (R) 側面圧痕	条痕 条幅 1mm 板状工具			III-5	
71-28	遺構外	254	IV	単軸絡条体 1 類 (R) 側面圧痕	条痕 条幅 1.5mm 二枚貝			III-5	
71-29	遺構外	9327	IV	沈線 幅 4mm 深さ 2.5mm	ナ			III-6	
71-30	遺構外	9315	IV	沈線 幅 4mm 深さ 2.5mm	ナ			III-6	
71-31	遺構外	9351-12	IV	沈線 幅 4mm 深さ 2.5mm	ナ			III-6	
71-32	遺構外	9113	IV	沈線 幅 4mm 深さ 2.5mm	ナ			III-6	
71-33	遺構外	7985	IV	ナ	ナ			III-7	
71-34	遺構外	9054	IV	ナ	ナ			III-7	
72- 1	遺構外	II L-152		口唇部 刻み 口唇部下 15mm 無文 0 段多条 RL 横位回転	横方向の ナ		織維含	IV-1	
72- 2	遺構外	II N-153		口唇部 刻み 口唇部下 16mm 無文 0 段多条 RL 横位回転	横方向の ナ		織維含	IV-1	
72- 3	遺構外	II L-152		口唇部 刻み 口唇部下 10mm 無文 0 段多条 RLR 横位回転	ナ		織維含	IV-1	
72- 4	遺構外	II L-152		0 段多条 LR・RL 横位回転	横方向の ナ		織維含	IV-1	
72- 5	遺構外	II L-152		0 段多条 LR・RL 横位回転	ナ		織維含	IV-1	
72- 6	遺構外	592	III	LR 羽状縄文結束第 1 種	ナ		織維含	IV-4	
72- 7	遺構外	II L-152		0 段多条 LR・RL 横位回転	横方向の ナ		織維含	IV-1	
72- 8	遺構外	II L-152	カクラン	0 段多条 LR・RL 横位回転	横方向の ナ		織維含	IV-1	
72- 9	遺構外	714	III	0 段多条羽状縄文結束第 1 種	ナ		織維含	IV-2	
72-10	遺構外	II L-152		0 段多条 LR・RL 横位回転	横方向の ナ		織維含	IV-1	
72-11	遺構外	II L-152		0 段多条 LR・RL 横位回転	横方向の ナ		織維含	IV-1	
72-12	遺構外	P-X	III	0 段多条 RL 横位回転	横方向の ナ		織維含	IV-2	
72-13	遺構外	P-X	カクラン	羽状縄文結束第 1 種横位回転	ナ		織維含	IV-2	
72-14	遺構外	II P-96	I	RL 横位回転	横方向の ナ		織維含	IV-2	
72-15	遺構外	7039	III	0 段多条 RL 横位回転	ナ		織維含	IV-2	
72-16	遺構外	3796, 4047, P-X	III	LR 横位 結節回転文	ナ		織維含	IV-3	
72-17	遺構外	P-X	III	0 段多条 LR 横位回転	ナ		織維含	IV-2	
72-18	遺構外	II L-152		0 段多条 LR 横位回転	横方向の ナ		織維含	IV-2	
72-19	遺構外	II L-152		0 段多条 LR 横位回転	横方向の ナ		織維含	IV-2	
72-20	遺構外	II L-152	カクラン	0 段多条 LR 横位回転	横方向の ナ		織維含	IV-2	
72-21	遺構外	II L-152		0 段多条 LR 横位回転	横方向の ナ		織維含	IV-2	

表 24 土器・土製品観察表 8

図版番号	遺構名	P 番	層位	外面	内面	底面	備考	分類	年代測定資料番号
72-22	遺構外	9172	Ⅲ	LR 横位	ナデ		織維含	IV-2	
72-23	遺構外	2331	Ⅲ	単軸絡糸体 1 類 (R) 縦位回転	ナデ		織維含	IV-6	
72-24	遺構外	9503	IV	0 段多条 RL 横位回転	縦方向のナデ		織維含	IV-2	
72-25	遺構外	Ⅱ L-152		0 段多条 LR 横位回転	横方向のナデ		織維含	IV-2	
72-26	遺構外	286, 846		0 段多条 LR 横位回転	ナデ		織維含	IV-1	
72-27	遺構外	9178, 9185, 9188, 9190, 9188, 9191, 9192, 9199, 9200, 9202, 9203	Ⅲ	羽状縄文結束第 1 種横位回転	ナデ		織維含	0	
72-28	遺構外	1636, 5030, 5082, 5032, 7877-1, 7878, 7981, 7982, 7876, 7946, 7945, 7943, 7949, 7947, 7972, 8049, 8050, 8051, 8053	Ⅲ, IV	口縁部～胴部上半 組紐横位回転 胴部下半 LR 横位回転	ナデ		織維含	IV-7	
72-29	遺構外	9177-1		上半 0 段多条 RL 横位回転 下半 羽状縄文結束第 1 種横位回転	ナデ		織維含	IV-4	
72-30	遺構外	9300, 9302, 9293-1, 2, 9296, 9299, 8966-1, 2, 9295, 8965, 8964, 8966-1, 8976, 9292-1, 2, 8963, P-X	IV	単軸絡糸体 1 類 (L) 縦位	ナデ、下半に指押え痕或る。		織維含	IV-6	
73- 1	遺構外	9422-1	IV	押し引き沈線文 0 段多条 LR 原体末端部の回転	縦方向のナデ		織維含	IV-5	
73- 2	遺構外	7587	Ⅲ	0 段多条 RL 横位回転	ナデ		織維含	IV-2	
73- 3	遺構外	7407	Ⅲ	0 段多条 RL 横位回転	ナデ		織維含	IV-2	
73- 4	遺構外	6605	Ⅲ	0 段多条 RL 横位回転	ナデ		織維含	IV-2	
73- 5	遺構外	7408	Ⅲ	0 段多条 RL 横位回転	ナデ		織維含	IV-2	
73- 6	遺構外	Ⅱ N-153		0 段多条 LR・RLR 横位回転	ナデ		織維含	IV-4	
73- 7	遺構外	5700, 5847, 5868, 6615, 6004, 6600, 7860, 9174, 9176-1, 2, 3, 4, 5, 6, 9178, 9179-1, 2, 9183, 9185, 9208, 9310	Ⅲ	RL 直前段多条横位回転	条痕調節後ナデ	RL 直前段多条回転	織維含	IV-8	
73- 8	遺構外	9339, 9510	IV	0 段多条 RL 横位回転 羽状縄文結束第 1 種横位回転	縦方向のナデ		織維含	IV-8	
73- 9	遺構外	7038	IV	円い硬い織維による結節か回転文	ナデ		織維含	IV-9	
73-10	遺構外	3735	Ⅲ	円い硬い織維による結節か回転文	ナデ		織維含	IV-9	
73-11	遺構外	270, 271		円い硬い織維による結節か回転文	ナデ		織維含	IV-9	
73-12	遺構外	P-X		円い硬い織維による結節か回転文	ナデ		織維含	IV-9	
73-13	遺構外	Ⅱ R-116	カクラン	口唇部 LR 側面圧痕縦位 口縁部 C 字状隆帯 LR 側面圧痕による平行線文間に鋸歯文	横方向のミガキ			V	
73-14	遺構外	Ⅱ S-100		LR 側面圧痕による平行線文間に矢羽根状文	横方向のミガキ			V	
73-15	遺構外	511	Ⅱ	口唇部 隆帯上 LR 側面圧痕 口縁部 斜位・縦位の隆帯上 LR 側面圧痕 LR 側面圧痕による平行線文	横位のミガキ			V	
73-16	遺構外	708	Ⅲ	頸部 隆帯上 LR 側面圧痕 胴部 結節回転文 (R) 横位	横位のミガキ			V	
73-17	遺構外	8926, 9117, 9285	Ⅲ, IV	口縁部 隆帯上 LR 側面圧痕 棒状工具による刺突 LR 横位回転	縦方向のミガキ			V	
73-18	遺構外	551, 552	Ⅱ	口縁部 隆帯上 LR 側面圧痕 棒状工具による刺突 LR 横位回転	縦方向のミガキ			V	
73-19	遺構外	516	Ⅲ	羽状縄文結束第 1 種横位	ナデ			V	
73-20	遺構外	8524	Ⅲ	口唇部 隆帯上 RL 側面圧痕 口縁部 横位の隆帯上 RL 側面圧痕 RL 横位回転	縦方向のミガキ			V	
73-21	遺構外	2994-2, 3005, 3019, 7251, 7252, 7254, 7265, 8525-2, 8526-2, 8528-1, 3, 4, 8529-3, 8530, 8531, 8533, 8574, 7250,	Ⅲ, IV	RLR 地に二本一組の隆帯による胸骨文 隆帯脇に再調整による沈線	ミガキ			V	
74- 1	遺構外	1705, 1708, 1709, 4843, 4848, 4849, 4893, 5599, 8083, P-X, 一括	Ⅲ	RLR 縦位回転→隆沈線	ミガキ			VI	
74- 2	遺構外	4198	Ⅲ	肥厚した口唇部に沈線・円形刺突	波頂部下に円形刺突			VI	
74- 3	遺構外	641, 671-2	Ⅲ	二本一組の沈線 LR 横位	横方向のミガキ			VII-2	
74- 4	遺構外	1507, 5664	Ⅲ	二本一組の沈線 LR 横位	横方向のナデ			VII-2	
74- 5	遺構外	179, Ⅱ C-112, P-X	Ⅲ, カクラン	RLR 磨消縄文	横方向のナデ			IV-1	
74- 6	遺構外	2283	Ⅱ	LR 充填縄文 沈線 C	横方向のミガキ			IV-1	
74- 7	遺構外	Ⅱ L-101	カクラン	先端の不揃な竹管状工具による刺突 LR 縦位回転	横方向のナデ			VII-2	
74- 8	遺構外	471-3	Ⅲ	頸部 平行沈線下に先端が不揃な棒状工具による刺突 胴部 RL 縦位回転	横方向のミガキ			VII-2	
74- 9	遺構外	2088, 2090, 2091, P-X	Ⅲ	口縁部 隆帯上竹管状工具による刺突	縦・横方向のミガキ			VII-3	
74-10	遺構外	548, 560, 647, 686, 687, 688, 689-1, 2, 709	Ⅱ, Ⅲ	頸部 列点文・平行沈線 沈線 B 胴部 LR 縦位 沈線直下のみ LR 横位	ミガキ			VII-2	
74-11	遺構外	4854, 5590, 5600	Ⅲ	頸部 先端の平たい工具による列点文 胴部 RL 横位・縦位	ミガキ			VII-2	
74-12	遺構外	5586	Ⅲ	半裁竹管状工具による二本一組の沈線 LR 横位	横方向のミガキ			VII-2	

表 25 土器・土製品観察 9

図版番号	遺構名	P 番	層位	外面	内面	底面	備考	分類	年代測定資料番号
74-13	遺構外	4871, 4876	Ⅲ	口縁部 折り返し口縁 胴部 LR 縦位回転	横方向のミガキ			Ⅶ-4	
74-14	遺構外	2092, 2961-1, 2, 2962, 2966-2, P-X	Ⅲ	口縁部 竹管状工具による刺突 単軸絡条体 1 類 (R) 縦位回転	縦方向のミガキ			Ⅶ-3	
74-15	遺構外	3634, 3639, 4068, P-X	I, Ⅲ	LR 縦位回転 口唇下 10mm 折り返し口縁	ミガキ			Ⅶ-4	
74-16	遺構外	471-5	Ⅲ	頸部 平行沈線と先端が不揃いな棒状工具による刺突	LR 縦位回転			Ⅶ-2	
74-17	遺構外	5906, 5655, 5656, 5657, 5658, 5654	Ⅲ, Ⅳ	LR 充填縄文	横方向のミガキ			Ⅶ-1	
74-18	遺構外	1929, 1890-3, P-X	Ⅲ	LR 充填縄文 稜沈線	横方向の行'			Ⅶ-1	
74-19	遺構外	5386, 8676-3, 7774	Ⅲ	LR 充填縄文	横方向のミガキ			Ⅶ-1	
74-20	遺構外	5288, 5710	Ⅲ	LR 充填縄文	横方向の行'			Ⅶ-1	
74-21	遺構外	2066	Ⅲ	LR 充填縄文	横方向の行'			Ⅶ-1	
74-22	遺構外	2633	Ⅲ	LR 充填縄文	横方向のミガキ			Ⅶ-1	
74-23	遺構外	8482	Ⅲ	LR 磨消縄文	横方向のミガキ			Ⅶ-1	
74-24	遺構外	7789, 8642, 2691, 8642, 7361-1	Ⅲ	LR 充填縄文	板状工具による行' 条痕			Ⅶ-1	
74-25	遺構外	1794, 4646	Ⅲ	LR 充填縄文	行'			Ⅶ-1	
74-26	遺構外	2792, 2889, 5515, 7823	Ⅲ	RL 充填縄文	行'			Ⅶ-1	
75-1	遺構外	3092, 3093, 6471, 6752, 6753	Ⅲ	LR 充填縄文 稜沈線	横方向のミガキ			Ⅶ-1	
75-2	遺構外	2545, 2546, 3811	Ⅲ	LR 充填縄文	横方向のミガキ			Ⅶ-1	
75-3	遺構外	2193-2, 2196, 3116-2, 7345, 7346, 7437-1, 2, 3, 7438, 7792	Ⅲ	LR 充填縄文 沈線 A2	条痕 条幅 0.5~1mm 板状工具			Ⅶ-1	
75-4	遺構外	1347, 1356, 1359, 4584, 4682, 5522, 6550	Ⅱ, Ⅲ	LR 充填縄文	横方向のミガキ			Ⅶ-1	
75-5	遺構外	5886	Ⅲ	LR 磨消縄文	横方向のミガキ			Ⅶ-1	
75-6	遺構外	6521	Ⅲ	RL 充填縄文	横方向のミガキ			Ⅶ-1	
75-7	遺構外	2722, 4657	Ⅲ	LR 充填縄文	横方向のミガキ			Ⅶ-1	
75-8	遺構外	2676	Ⅲ	RL 充填縄文	横方向の行'			Ⅶ-1	
75-9	遺構外	4693	Ⅳ	LR 磨消縄文	横方向の行'			Ⅶ-1	
75-10	遺構外	3838	Ⅲ	LR 磨消縄文	横方向のミガキ			Ⅶ-1	
75-11	遺構外	1653, 2904, 2905	Ⅲ	LR 充填縄文	横方向の行'			Ⅶ-1	
75-12	遺構外	1241	Ⅱ	沈線	摩滅			Ⅶ-1	
75-13	遺構外	2631	Ⅲ	LR 充填縄文	横方向のミガキ			Ⅶ-1	
75-14	遺構外	6736	Ⅲ	LR 磨消縄文	横方向のミガキ			Ⅶ-1	
75-15	遺構外	2367	Ⅲ	隆帯	横方向の行'			Ⅶ-1	
75-16	遺構外	8749	Ⅲ	LR 充填縄文	横方向の行'			Ⅶ-1	
75-17	遺構外	5960, 7436	Ⅲ	沈線による曲線文 区画内にへう状工具による刺突	横方向のミガキ			Ⅶ-1	
75-18	遺構外	5620	Ⅲ	沈線による曲線文内に半円形刺突充填	横方向のミガキ			Ⅶ-1	
75-19	遺構外	3079	Ⅲ	沈線による曲線文内に半円形刺突充填	横方向のミガキ			Ⅶ-1	
75-20	遺構外	P-X 試トシ	埋め戻し土	沈線による曲線区画内に半円形刺突	横方向の行'			Ⅶ-1	
75-21	遺構外	4798	Ⅲ	沈線による曲線区画内に半円形刺突	横方向の行'			Ⅶ-1	
75-22	遺構外	7269	Ⅲ	隆帯 へう状工具による半円形刺突	横方向のミガキ			Ⅶ-2	
75-23	遺構外	1475, 3294	Ⅲ	RL 磨消縄文 稜沈線	横方向のミガキ			Ⅶ-2	
75-24	遺構外	2599	Ⅲ	LR 充填縄文 稜沈線	横方向の行'			Ⅶ-2	
75-25	遺構外	1366	Ⅱ	微隆帯 LR 充填縄文	横方向のミガキ			Ⅶ-2	
75-26	遺構外	8572	Ⅲ	LR 磨消縄文 稜沈線	横方向の行'			Ⅶ-2	
75-27	遺構外	P-X		LR 磨消縄文 沈線 C	横方向のミガキ			Ⅶ-2	
75-28	遺構外	5381	Ⅲ	RL 磨消縄文 稜沈線	横方向の行'			Ⅶ-2	
76-1	遺構外	3466, 3556	Ⅳ	微隆帯の上下に半円形刺突	横方向のミガキ			Ⅶ-6	
76-2	遺構外	7714	Ⅲ	頸部 半円形刺突	横方向のミガキ			Ⅶ-6	
76-3	遺構外	2806	Ⅲ	頸部 半円形刺突下に微隆帯 垂下する沈線 B LR 斜位	横方向のミガキ			Ⅶ-6	
76-4	遺構外	3328	Ⅲ	RL 磨消縄文	横方向の行'			Ⅶ-1	
76-5	遺構外	4666	Ⅲ	RL 磨消縄文 引き直し沈線あり	横方向の行'			Ⅶ-1	
76-6	遺構外	2217	Ⅲ	LR 磨消縄文 稜沈線	横方向の行'			Ⅶ-1	
76-7	遺構外	1710	Ⅲ	RL 充填縄文	縦・横方向のミガキ			Ⅶ-1	
76-8	遺構外	3097-2, P-X	Ⅲ	RL 充填縄文	横方向のミガキ			Ⅶ-1	
76-9	遺構外	1730, 4761, 4779, 4781, 5542, 5543, 5547, 7173, 7553, 8076, 8729-2	Ⅲ, Ⅳ	LR 縦位回転	横方向の行'			Ⅸ-1	
76-10	遺構外	2662	Ⅲ	RL 縦位回転 口唇部下 10mm 磨消	板状工具による横方向の行'			Ⅸ-1	
76-11	遺構外	1903	Ⅲ	LR 充填縄文	横方向のミガキ			Ⅸ-1	
76-12	遺構外	1207, 1208	Ⅲ	RL 縦位回転 口唇部下 7mm 磨消	横方向のミガキ			Ⅸ-1	
76-13	遺構外	555	Ⅱ	LR 縦位回転 口唇部下 15mm 磨消	縦・横方向のミガキ			Ⅸ-1	
76-14	遺構外	1044	Ⅱ	LR 縦位回転 口唇部下 10mm 磨消	板状工具による横方向の行'			Ⅸ-1	
76-15	遺構外	2054	Ⅲ	L 縦位回転 口唇部下 1cmL 縦位回転	縦・横方向のミガキ			Ⅸ-1	
76-16	遺構外	983, 4332, 4381, 4333, 4336, 4338, 4339, 4408, P-X	Ⅲ	LR 縦位回転 口唇部下 1cm 磨消	横方向の行'			Ⅸ-1	
76-17	遺構外	2378	Ⅲ	LR 縦位回転	横方向のミガキ			Ⅸ-1	
76-18	遺構外	8284, 8285, 8287, 8289, 8357	Ⅲ, Ⅳ	LR 縦位回転 口唇部下 2cm 磨消	横方向の行'			Ⅸ-1	
76-19	遺構外	4571	Ⅲ	LR 横位回転 口唇部下 10cm 磨消	横方向のミガキ			Ⅸ-1	
76-20	遺構外	4869	Ⅲ	LR 縦位回転 口唇部下 25mm 磨消	斜方向の行'			Ⅸ-1	
76-21	遺構外	1704, 4845	Ⅲ	LR 横位回転 口唇部下 2.5cm 磨消 口唇部前面 2.5cm 幅の面取り	横方向の行'			Ⅸ-1	

表 26 土器・土製品観察表 10

図版番号	遺構名	P 番	層位	外面	内面	底面	備考	分類	年代測定資料番号
77- 1	遺構外	3008, 3010, 3027, 3582, 3661, 5065, 5068, 5072, 5074, 5077, 5443, 7272, 7275, 8576, 8581, 7260, 7263, 7833-1, 8578, 8579, 8663	Ⅲ	RLR 斜位～縦位回転	縦方向のミガキ			IX-1	
77- 2	遺構外	P-X	I	LR 横位回転	縦方向のナ			IX-1	
77- 3	遺構外	992, 1613, 1625, 1626, 4391, 4392, 4393, 4395, 4419, 4983, 4985, 4995, 6332, 6333, 6334, 6336, 6337, 6338, 6342, 6343, 6344, 6345, 6346, 7213, 7216, 7869, 8020, 4390-2, 6335, 7746	Ⅲ	LR 横位	板状工具によるナ (ひが状の擦痕が残る)			IX-1	
77- 4	遺構外	1438, 4644, 4654-1, 4655	Ⅲ	LR 縦位回転 底辺部ナリ	横方向のナ			IX-1	
77- 5	遺構外	3019-1, 2, 3	Ⅲ	単軸絡条体 1 類縦位回転、脚部に貫通孔 4 個	ミガキ			IX-3	
77- 6	遺構外	8011	Ⅲ	単軸絡条体 1 類 (R) 縦位、底辺部ナリ	横方向のナ			IX-3	
77- 7	遺構外	8559	Ⅳ					IX-3	
77- 8	遺構外	5903, 6073, P-X	Ⅲ, Ⅳ	0 段多条 LR 横位回転	横方向のミガキ			IX-3	
77- 9	遺構外	P-X	I	LR 縦位回転	ナ			IX-3	
77-10	遺構外	2219, 7327	Ⅲ	-、外底面 周縁部 粘土貼付	ナ		外周圧痕?	IX	
77-11	遺構外	P-X	Ⅲ	-、外底面 ナ	ナ		外周圧痕?	IX	
78- 1	遺構外	3690, 3714, 3999, 3998, 3706, 3679, 3981, 3984, 3726, 3691, 3749, 3986, 3720, 3724-2, 4134, 5727, 5736	Ⅲ	口唇部 隆帯上 LR 横位回転 口縁部 垂下する隆帯上 LR 回転 隆帯による区画内に沈線 A1 による曲線文	横方向のナ			X-2	
78- 2	遺構外	6772	Ⅲ	沈線 A による曲線文	横方向のナ			X-2	
78- 3	遺構外	2520, 3844	Ⅲ	口唇部 RL 横位回転後沈線 垂下する隆帯	横方向のミガキ			X-2	
78- 4	遺構外	2447, 4065	Ⅲ	RL 充填縄文 沈線 A2 による曲線文	横方向のミガキ			X-2	
78- 5	遺構外	1328, 3870	Ⅲ	口唇部 隆帯上 LR 横位回転 口縁部 沈線 A 垂下する隆帯上 LR	横方向のミガキ			X-2	
78- 6	遺構外	2502, 2506-1, 2460, 3773	Ⅲ	沈線 A2 による曲線文 0 段多条 RL 充填縄文	横方向のミガキ			X-2	
78- 7	遺構外	2501-1, 2506-2, 2502-2, 3768	Ⅲ	沈線 A2 による曲線文 0 段多条 RL 充填縄文	横方向のミガキ			X-2	
78- 8	遺構外	2516	Ⅲ	口唇部 RL 横位回転 胴部 RL 縦位回転	板状工具による横方向のナ			X-2	
78- 9	遺構外	2527	Ⅲ	波頂部 棒状工具による刺突 口唇部 0 段多条 RL 横位回転 波頂部下に短い縦位の粘土瘤 ボウ状貼付	横方向のミガキ			X-2	
78-10	遺構外	P-X	カクラン	波頂部 棒状工具による刺突 口唇部 LR 横位回転 沈線 A2	横方向のミガキ			X-2	
78-11	遺構外	2565	Ⅲ	口唇部 隆帯上 LR 横位回転 口縁部 LR 横位回転 沈線 A2	横方向のミガキ			X-2	
78-12	遺構外	2450-1, 3744, 3747, 3752, 3753,	Ⅲ	頸部 隆帯上棒状工具による刻み 垂下する隆帯上棒状工具による刻み 沈線による方形区画内に曲線文 LR 磨消 沈線 A2				X-1	
78-13	遺構外	7366-2, 3	Ⅲ	RL 磨消縄文 沈線 A2	縦方向のナ			X-2	
79- 1 2 3	遺構外	2418, 2422, 2424, 2429, 2436, 2442, 244 8, 3665, 3666, 3668, 3669, 3671, 3672, 3 673, 3709, 3713, 3715, 3722, 3723, 3726 , 3741, 3995, 4117, 4119, 4116, 5715-1, 5208, 5210, 5211, 5214, 5248, 5786, 6226,		LR 縦位回転	ミガキ	板?圧痕		X-2	
79- 4	遺構外	2489	Ⅲ	二本一組の沈線間に隆帯貼付 渦巻き文	横方向のミガキ			X-3	
79- 5	遺構外	2163, 5166	Ⅲ	沈線による曲線文 粘土瘤貼り付	横方向のナ			X-3	
79- 6	遺構外	4695	Ⅲ	RL 縦位回転 沈線による曲線文	横方向のミガキ			X-3	
79- 7	遺構外	5442	Ⅲ	橋状把手上に粘土瘤貼り付 竹管状工具による刺突	ナ			X-3	
79- 8	遺構外	2119	Ⅲ	橋状把手	ナ			X-3	
79- 9	遺構外	244, 325, 327, 329, 332, 335, 336, 337, 338, 345, 346 , 347, 343, 351, 355, 358-3, 359-2, 801, 802, 803, 80 9, 811, 812, 813, 815, 855, 856-1・2・3・6・7, 861,	Ⅲ	L 縦位回転	ミガキ			X-3	
79-10	遺構外	2521	Ⅲ	口唇部 先端が不揃いな棒状工具による刺突 頸部 平行沈線 胴部 RL 横位回転	横方向のナ			X I	
79-11	遺構外	4494-2	Ⅲ	口唇部 刻み 口縁部 平行沈線 胴部 RL 横位回転	横方向のナ			X I	
79-12	遺構外	2405, P-X	Ⅱ, Ⅲ	頸部 眼鏡状隆帯	口唇部 沈線			X I	
79-13	遺構外	1160	Ⅱ	口縁部 無文 胴部 RL 横位回転	横方向のナ			X I	
79-14	遺構外	1161	Ⅱ	口縁部 無文 胴部 RL 横位回転	横方向のナ			X I	
79-15	遺構外	P-X		平行沈線の眼鏡状隆帯	口唇部 沈線 ナ			X I	
79-16	遺構外	1028, 1407, 1408, 1751, 1754, 1755, 1756, 1757, 175 8, 1759, 1760, 4744, 4745,	Ⅱ, Ⅲ	口縁部 平行沈線 D 頸部 粘土瘤上に沈線 縦位の条痕				X I	

表 27 土器・土製品観察表 11

図版番号	器種	類型	遺構	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	受熱	備考
9-1	敲磨器	敲Ⅱ類、凹Ⅱ類	S101	10層	110	79	35	395	砂岩	無	
9-2	石錘	—	S101	7層	100	69	24	230.7	頁岩	無	
9-3	磨製石斧	—	S101	7層	145	71	38	602.3	頁岩	無	
9-4	敲磨器	凹Ⅰ類、磨Ⅰ類	S101	7層	132	93	34	575.5	砂岩	無	
9-5	石皿・台石	—	S101	7層	266	182	90	3800	デイサイト	有	
9-6	磨石	磨Ⅰ類	S101	5層	83	61	32	181.9	砂岩	有	
9-7	敲磨器	磨Ⅰ類、凹Ⅱ類	S101	5層	108	70	51	480	砂岩	有	煤？付着
10-1	石皿・台石	—	S101	5層	330	366	106	15000	頁岩	無	
10-2	磨石	磨Ⅰ類	S101	3層	109	53	44	255.8	砂岩	有	
10-3	敲磨器	磨Ⅰ類、凹Ⅱ類	S101	3層	122	82	25	372.6	砂岩	無	
10-4	敲磨器	磨Ⅰ類、凹Ⅱ類	S101	3層	66	76	23	178.9	砂岩	無	
10-5	敲磨器	磨Ⅰ類、凹Ⅱ類	S101	3層	126	61	28	318.7	砂岩	無	
11-3	石鏃	I c類	S102 複式炉埋設土器	3層	15.2	15.8	2.9	0.6	珩質頁岩	有	
15-9	石錘	IV類	S104	床面	34.4	19.8	6.7	3	珩質頁岩	無	
15-10	石錘	I類	S104 pit1	覆土	44.6	15.6	8.2	3.8	珩質頁岩	無	
15-11	石鏃	I d類	S104	1層	37.8	13.4	4.4	1.6	珩質頁岩	無	
15-12	二次調整のある剥片	—	S104	1層	25.9	25.6	9	3.1	珩質頁岩	無	
19-22	石鏃	I c類	S107	1層	15.9	11.5	3.3	0.3	珩質頁岩	無	
19-23	石鏃	I c類	S107	1層	16.3	12.4	3.3	0.3	珩質頁岩	無	アスファルト状物質付着
19-24	石鏃	I c類	S107	1層	17.7	14.8	3.7	0.7	珩質頁岩	無	
19-25	磨製石斧	再加工残欠？	S107 pit3	上面	32	26	10	15.4	頁岩	無	
19-26	敲磨器	敲Ⅰ類、凹Ⅱ類	S107 pit7	2層	100	66	27	217.6	砂岩	有	
25-1	微小剥離痕のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	51	30	10	11	珩質頁岩	無	
25-2	微小剥離痕のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	31	28	8	2.8	珩質頁岩	無	
25-3	微小剥離痕のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	21	31	4	1.6	珩質頁岩	無	
25-4	微小剥離痕のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	34	44	11	14.5	珩質頁岩	無	
25-5	微小剥離痕のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	50	32	15	14.1	珩質頁岩	無	
25-6	微小剥離痕のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	51	46	13	14.2	珩質頁岩	無	
25-7	微小剥離痕のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	25	29	5	2.5	珩質頁岩	無	
25-8	微小剥離痕のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	51	36	14	16.2	珩質頁岩	無	
25-9	微小剥離痕のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	25	31	6	3.8	珩質頁岩	無	
25-10	両極加撃痕跡のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	42	32	10	11.9	珩質頁岩	無	
25-11	剥片	—	S111 剥片集積1	—	27	31	6	2.5	珩質頁岩	無	
25-12	微小剥離痕のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	43	48	6	8	珩質頁岩	無	
25-13	微小剥離痕のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	54	54	15	25.7	珩質頁岩	無	
25-14	微小剥離痕のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	47	30	12	12.3	珩質頁岩	無	
25-15	微小剥離痕のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	37	49	12	16.1	珩質頁岩	無	
26-1	剥片	—	S111 剥片集積1	—	50	66	13	31.4	珩質頁岩	無	
26-2	微小剥離痕のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	42	50	12	13.5	珩質頁岩	無	
26-3	微小剥離痕のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	31	26	11	7.1	珩質頁岩	無	
26-4	微小剥離痕のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	39	18	10	4.8	珩質頁岩	無	
26-5	微小剥離痕のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	32	36	9	6.9	珩質頁岩	無	
26-6	微小剥離痕のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	31	26	7	3.7	珩質頁岩	無	
26-7	微小剥離痕のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	58	33	13	11.4	珩質頁岩	無	
26-8	微小剥離痕のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	32	39	11	7.8	珩質頁岩	無	
26-9	微小剥離痕のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	54	63	12	20.6	珩質頁岩	無	
26-10	微小剥離痕のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	44	62	13	28.7	珩質頁岩	無	
26-11	微小剥離痕のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	40	57	15	22.7	珩質頁岩	無	
27-1	微小剥離痕のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	47	40	22	27.2	珩質頁岩	無	
27-2	二次調整のある剥片	—	S111 剥片集積1	—	46	54	21	37.4	珩質頁岩	無	
27-3	剥片	—	S111 剥片集積2	—	16	34	12	4.3	珩質頁岩	無	
27-4	微小剥離痕のある剥片	—	S111 剥片集積2	—	37	40	10	8	珩質頁岩	無	
27-5	微小剥離痕のある剥片	—	S111 剥片集積2	—	20	28	6	3.7	珩質頁岩	無	
27-6	微小剥離痕のある剥片	—	S111 剥片集積2	—	37	24	13	7.5	珩質頁岩	無	
27-7	微小剥離痕のある剥片	—	S111 剥片集積2	—	30	34	8	3.7	珩質頁岩	無	
27-8	微小剥離痕のある剥片	—	S111 剥片集積2	—	31	45	8	3	珩質頁岩	無	
27-9	微小剥離痕のある剥片	—	S111 剥片集積2	—	32	30	5	2.8	珩質頁岩	無	
27-10	微小剥離痕のある剥片	—	S111 剥片集積2	—	35	23	10	4.2	珩質頁岩	無	
27-11	微小剥離痕のある剥片	—	S111 剥片集積2	—	35	37	9	1.4	珩質頁岩	無	
27-12	微小剥離痕のある剥片	—	S111 剥片集積2	—	23	37	8	2.3	珩質頁岩	無	
27-13	微小剥離痕のある剥片	—	S111 剥片集積2	—	38	41	9	5.5	珩質頁岩	無	
27-14	微小剥離痕のある剥片	—	S111 剥片集積2	—	33	42	14	6.8	珩質頁岩	無	
28-1	微小剥離痕のある剥片	—	S111 剥片集積2	—	45	25	6	3.9	珩質頁岩	無	
28-2	微小剥離痕のある剥片	—	S111 剥片集積2	—	13	23	7	1.7	珩質頁岩	無	
28-3	微小剥離痕のある剥片	—	S111 剥片集積2	—	40	31	7	4.4	珩質頁岩	無	
28-4	微小剥離痕のある剥片	—	S111 剥片集積2	—	34	47	11	9	珩質頁岩	無	
28-5	剥片	—	S111 剥片集積2	—	16	16	8	1.6	珩質頁岩	無	
28-6	微小剥離痕のある剥片	—	S111 剥片集積2	—	29	24	10	5.2	珩質頁岩	無	
28-7	剥片	—	S111 剥片集積2	—	24	20	8	7.1	珩質頁岩	無	

表 28 石器・石製品観察表 1

図版番号	器種	類型	遺構	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	受熱	備考
28-8	微小剥離痕のある剥片	—	S111 剥片集積2	—	42	23	8	7.7	珩質頁岩	無	
28-9	剥片	—	S111 剥片集積2	—	37	25	9	6.4	珩質頁岩	無	
28-10	両極加撃痕跡のある剥片	—	S111 剥片集積2	—	40	39	13	16.5	珩質頁岩	無	
28-11	微小剥離痕のある剥片	—	S111 剥片集積2	—	46	49	11	10	珩質頁岩	無	
28-12	二次調整のある剥片	—	S111 剥片集積2	—	50	32	8	10.6	珩質頁岩	無	接合資料
28-13	微小剥離痕のある剥片	—	S111 剥片集積2	—	32	48	8	6.7	珩質頁岩	無	接合資料
31-10	二次調整のある剥片	—	S111 複式炉	1層	26.4	27.4	9.5	6.1	珩質頁岩	無	アスファルト 状物質付着
31-11	石鏃	I c類	S111	1層	25.5	15.9	3.5	0.8	珩質頁岩	無	
31-12	石鏃	I c類	S111	1層	19.7	14.1	2.9	0.6	珩質頁岩	無	アスファルト 状物質付着
31-13	二次調整のある剥片	—	S111	1層	38.2	24.2	10.2	7.3	珩質頁岩	無	
31-14	二次調整のある剥片	—	S111	1層	57.9	23.6	7.3	6.1	珩質頁岩	無	
31-15	二次調整のある剥片	—	S111	1層	40.8	27.8	8.9	7.5	珩質頁岩	無	
32-1	二次調整のある剥片	—	S111	1層	50.4	48.8	11.7	19.4	珩質頁岩	無	
32-2	磨製石斧	—	S111	床面	92	40	16	85.4	緑色細粒凝 灰岩	無	
32-3	敲磨器(炉石)	磨I類、凹II類	S111 複式炉	炉体	180	69	36	849.7	安山岩	有	
38-13	石鏃	I類	S114	床面	38	16	9.1	4	珩質頁岩	無	
38-14	石鏃	IV類	S114	床面	32.2	15.6	4	1.6	珩質頁岩	無	アスファルト 状物質付着
38-15	石鏃	未製品・失敗品	S114	2層	44.7	22.2	7.9	7.2	珩質頁岩	無	
38-16	石鏃	I b類	S114	1層	25.5	18.6	7	1.8	珩質頁岩	無	
38-17	石鏃	I c類	S114	1層	19.2	8.5	2.3	0.3	珩質頁岩	無	
38-18	石鏃	I c類	S114	1層	23.5	15.5	3.5	0.7	鉄石英	無	アスファルト 状物質付着
38-19	石鏃	I c類	S114	1層	21.1	13.4	3	0.5	珩質頁岩	無	アスファルト 状物質付着
38-20	石鏃	I c類	S114	1層	22.8	14	3.6	0.2	珩質頁岩	無	
38-21	石鏃	I c類	S114	1層	18.7	16.3	3.2	0.6	珩質頁岩	無	アスファルト 状物質付着
39-1	石鏃	I c類	S114	1層	21.3	15.5	4.9	0.9	珩質頁岩	無	
39-2	石鏃	I c類	S114	1層	22.6	14.9	2.6	0.6	珩質頁岩	無	アスファルト 状物質付着
39-3	石鏃	I c類	S114	1層	22.2	14.4	3.2	0.6	珩質頁岩	無	
39-4	石鏃	I c類	S114	1層	18.8	15.9	3.7	0.6	珩質頁岩	無	アスファルト 状物質付着
39-5	石鏃	II a類	S114	1層	21.7	13.5	5.2	1.5	珩質頁岩	無	
39-6	石槍	未製品・失敗品	S114	1層	61.7	33	13.2	17	珩質頁岩	有	
39-7	石鏃	I類	S114	1層	37.9	11.1	8.2	2.6	珩質頁岩	無	
39-8	両極加撃痕跡のある剥片	—	S114	1層	29.9	24.9	8.8	5.8	珩質頁岩	無	アスファルト 状物質付着
39-9	二次調整のある剥片	—	S114	1層	17.7	15.4	4.7	1.1	珩質頁岩	無	
39-10	磨石	磨II類	S114	1層	104	83	54	669.1	粗粒玄武岩	無	
39-11	凹石	凹II類	S114	1層	158	77	45	696	砂岩	有	
39-12	敲磨器	磨III類、凹II類	S114	1層	102	52	66	405.8	砂岩	無	
39-13	敲磨器	敲II類、凹II類	S114	1層	118	75	45	512	砂岩	無	
39-14	敲磨器	敲II類、凹II類	S114	1層	63	112	44	427.1	砂岩	無	
41-9	石鏃	I b類	SK05	5層	13.8	18	3.2	0.8	珩質頁岩	無	
44-11	石鏃	I a類	SK06	3層	22.5	15.6	5.2	1.2	珩質頁岩	無	
44-12	石鏃	I c類	SK06	3層	16.7	16.4	3.4	0.6	珩質頁岩	無	
44-13	石鏃	I c類	SK06	3層	21.2	13	3	0.5	珩質頁岩	無	
44-14	石鏃	I d類	SK06	3層	35.1	11.1	6.9	2.2	珩質頁岩	無	
44-15	石鏃	I a類	SK06	3層	33.1	24.4	9.3	6.2	珩質頁岩	無	
44-16	石鏃	—	SK06	3層	44.3	33.9	11.9	15	珩質頁岩	無	
44-17	石鏃	III類	SK06	3層	17.3	17.6	6.4	1.1	珩質頁岩	無	
44-18	石鏃	III類	SK06	1層	13.7	13.7	5.1	0.6	珩質頁岩	無	
44-19	石鏃	I a類	SK06	1層	27.5	23	8	3.9	珩質頁岩	無	
44-20	石鏃	未製品・失敗品	SK06	覆土	40.9	28.4	6.5	5.2	珩質頁岩	無	
44-21	磨製石斧	—	SK06	3層	109	51	24	240.4	細粒凝灰岩	無	
44-22	磨製石斧	二次残欠	SK06	2層	26	10	12	3.6	頁岩	無	
44-23	敲磨器	敲I類、凹I類	SK06	2層	95	38	29	149.6	粗粒玄武岩	有	
45-1	石鏃	—	SK11	1層	51	86	28	152.7	粘板岩	無	
50-6	石鏃	I c類	SK14	1層	18.4	14.9	3.9	0.7	珩質頁岩	無	
50-7	石鏃	I c類	SK14	1層	18.5	14.3	3	0.5	珩質頁岩	無	アスファルト 状物質付着
50-8	石鏃	II a類	SK14	1層	37.9	13	4.5	1.7	珩質頁岩	無	アスファルト 状物質付着
53-18	敲磨器	磨I類、敲II類	SK16	6層	123	69	86	727.8	砂岩	無	

表 29 石器・石製品観察表 2

図版番号	器種	類型	遺構	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	受熱	備考
53-19	磨石	磨Ⅱ類	SK16	3a層	125	68	58	694.3	粗粒玄武岩	有	
58-1	石匙	Ⅳ類	SX03	—	486	159	58	4.2	珩質頁岩	無	
58-2	磨石	磨Ⅰ類	SX03	—	215	89	41	1017.6	砂岩	無	
59-1	微小剥離痕のある剥片	—	SX05	—	44	59	13	22.9	珩質頁岩	無	
59-2	微小剥離痕のある剥片	—	SX05	—	52	41	13	15.8	珩質頁岩	無	
59-3	微小剥離痕のある剥片	—	SX05	—	34	52	11	10.7	珩質頁岩	無	
59-4	微小剥離痕のある剥片	—	SX05	—	32	28	5	3.5	珩質頁岩	無	
59-5	微小剥離痕のある剥片	—	SX05	—	29	35	9	5.2	珩質頁岩	無	
59-6	微小剥離痕のある剥片	—	SX05	—	44	55	12	13.3	珩質頁岩	無	
59-7	微小剥離痕のある剥片	—	SX05	—	55	49	10	14.9	珩質頁岩	無	
59-8	微小剥離痕のある剥片	—	SX05	—	45	52	11	19.6	珩質頁岩	無	
62-7	石鏃	I c類	SX06	Ⅰ層	20.7	13.2	3.5	0.7	珩質頁岩	無	
62-8	石鏃	Ⅱ類	SX06	Ⅰ層	27.5	4.7	2.8	0.3	珩質頁岩	無	
62-9	磨製石斧	—	SX06	Ⅰ層	35	18	7	8.2	緑色細粒凝灰岩	無	
63-1	微小剥離痕のある剥片	—	SX07	—	43	50	11	13.8	珩質頁岩	無	
63-2	微小剥離痕のある剥片	—	SX07	—	47	64	15	25.6	珩質頁岩	無	
63-3	微小剥離痕のある剥片	—	SX07	—	26	30	10	6.5	珩質頁岩	無	
63-4	微小剥離痕のある剥片	—	SX07	—	38	49	10	11.9	珩質頁岩	無	
63-5	剥片	—	SX07	—	31	28	10	4.5	珩質頁岩	無	
63-6	微小剥離痕のある剥片	—	SX07	—	25	25	6	2.3	珩質頁岩	無	
63-7	微小剥離痕のある剥片	—	SX07	—	34	36	9	7.3	珩質頁岩	無	
63-8	微小剥離痕のある剥片	—	SX07	—	42	75	18	27.6	珩質頁岩	無	
63-9	微小剥離痕のある剥片	—	SX07	—	33	58	11	11.8	珩質頁岩	無	
63-10	微小剥離痕のある剥片	—	SX07	—	12	15	4	0.3	珩質頁岩	無	
63-11	微小剥離痕のある剥片	—	SX07	—	21	42	11	6.8	珩質頁岩	無	
63-12	微小剥離痕のある剥片	—	SX07	—	40	50	11	11.3	珩質頁岩	無	
63-13	剥片	—	SX07	—	20	17	4	0.8	珩質頁岩	無	
63-14	微小剥離痕のある剥片	—	SX07	—	31	25	13	8.3	珩質頁岩	無	
64-1	微小剥離痕のある剥片	—	SX07	—	24	24	6	1.7	珩質頁岩	無	64-16と接合
64-2	微小剥離痕のある剥片	—	SX07	—	38	35	10	7	珩質頁岩	無	
64-3	微小剥離痕のある剥片	—	SX07	—	24	27	5	1.7	珩質頁岩	無	
64-4	微小剥離痕のある剥片	—	SX07	—	27	37	6	2.3	珩質頁岩	無	
64-5	微小剥離痕のある剥片	—	SX07	—	62	71	16	42.7	珩質頁岩	無	
64-6	微小剥離痕のある剥片	—	SX07	—	53	55	12	20.9	珩質頁岩	無	
64-7	剥片	—	SX07	—	37	22	4	1.3	珩質頁岩	無	
64-8	微小剥離痕のある剥片	—	SX07	—	33	50	13	14.8	珩質頁岩	無	
64-9	微小剥離痕のある剥片	—	SX07	—	30	33	12	6	珩質頁岩	無	
64-10	微小剥離痕のある剥片	—	SX07	—	45	46	10	13.8	珩質頁岩	無	
64-11	微小剥離痕のある剥片	—	SX07	—	40	48	9	7.5	珩質頁岩	無	
64-12	微小剥離痕のある剥片	—	SX07	—	37	35	12	5.6	珩質頁岩	無	
64-13	微小剥離痕のある剥片	—	SX07	—	42	40	16	17.3	珩質頁岩	無	
64-14	微小剥離痕のある剥片	—	SX07	—	38	38	14	13.8	珩質頁岩	無	
64-15	微小剥離痕のある剥片	—	SX07	—	34	42	12	9	珩質頁岩	無	
64-16	微小剥離痕のある剥片	—	SX07	—	25	51	11	5.6	珩質頁岩	無	64-1と接合
65-1	剥片	—	SX07	—	20	50	4	3	珩質頁岩	無	接合資料
83-1	石鏃	I a類	遺構外	Ⅱ層	38.1	17.5	10	5	珩質頁岩	無	
83-2	石鏃	I b類	遺構外	Ⅱ層	16.9	14.8	4	0.6	珩質頁岩	無	
83-3	石鏃	I c類	遺構外	Ⅱ層	24.2	17.1	3.8	0.7	珩質頁岩	無	
83-4	石鏃	Ⅱ類	遺構外	Ⅱ層	30.4	14.1	4	1.4	珩質頁岩	無	
83-5	石鏃	I a類	遺構外	Ⅲ層	34.2	21.8	6.6	3.7	珩質頁岩	無	
83-6	石鏃	I a類	遺構外	Ⅲ層	18.6	13.9	4.2	0.6	珩質頁岩	無	
83-7	石鏃	I a類	遺構外	Ⅲ層	22	14.4	5.4	1.5	珩質頁岩	無	
83-8	石鏃	I a類	遺構外	Ⅲ層	23.1	19.7	4.7	1.6	珩質頁岩	無	
83-9	石鏃	I b類	遺構外	Ⅲ層	19.3	12.8	3.3	0.2	珩質頁岩	無	
83-10	石鏃	I c類	遺構外	Ⅲ層	22.6	16.6	2.9	0.7	珩質頁岩	無	アスファルト状物質付着
83-11	石鏃	I c類	遺構外	Ⅲ層	21.8	14.9	3.2	2.4	珩質頁岩	無	
83-12	石鏃	I c類	遺構外	Ⅲ層	28.1	16.8	3.7	1.2	珩質頁岩	無	
83-13	石鏃	I c類	遺構外	Ⅲ層	27.5	12.1	4.3	1.4	珩質頁岩	無	
83-14	石鏃	I c類	遺構外	Ⅲ層	26.4	14.4	4	1	珩質頁岩	無	アスファルト状物質付着
83-15	石鏃	I c類	遺構外	Ⅲ層	24	13.6	3.5	0.6	珩質頁岩	無	アスファルト状物質付着
83-16	石鏃	I c類	遺構外	Ⅲ層	21.5	12.8	3.5	1	珩質頁岩	無	
83-17	石鏃	I c類	遺構外	Ⅲ層	20.2	15.3	3.2	0.4	珩質頁岩	無	
83-18	石鏃	I c類	遺構外	Ⅲ層	22	12.9	5.2	1	珩質頁岩	無	
83-19	石鏃	I c類	遺構外	Ⅲ層	16.5	12.8	3.4	0.4	珩質頁岩	無	
83-20	石鏃	I c類	遺構外	Ⅲ層	17.2	13.7	2.9	0.5	珩質頁岩	無	
83-21	石鏃	I c類	遺構外	Ⅲ層	17.5	15	3.5	0.8	珩質頁岩	無	
83-22	石鏃	I c類	遺構外	Ⅲ層	15.5	16.5	3.9	1.1	珩質頁岩	有	

表 30 石器・石製品観察表 3

図版番号	器種	類型	遺構	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	受熱	備考
83-23	石鏃	I c 類	遺構外	Ⅲ層	15.6	17.2	3.5	13.2	珪質頁岩	無	
83-24	石鏃	I c 類	遺構外	Ⅲ層	18.8	14.8	3.3	1.1	珪質頁岩	無	
83-25	石鏃	I c 類	遺構外	Ⅲ層	19.4	13.7	4.3	0.7	珪質頁岩	無	
83-26	石鏃	I c 類	遺構外	Ⅲ層	14	15.4	3.1	0.6	珪質頁岩	無	
83-27	石鏃	I c 類	遺構外	Ⅲ層	13.1	15	3	0.4	珪質頁岩	無	
83-28	石鏃	I c 類	遺構外	Ⅲ層	12.8	12.5	3.1	0.3	珪質頁岩	無	
83-29	石鏃	I c 類	遺構外	Ⅲ層	14.4	11.5	2.8	0.3	珪質頁岩	無	
83-30	石鏃	I c 類	遺構外	Ⅲ層	18.6	12.5	3.8	0.9	珪質頁岩	無	
83-31	石鏃	I c 類	遺構外	Ⅲ層	19.5	14.8	2.9	0.5	珪質頁岩	無	
83-32	石鏃	I a 類	遺構外	Ⅲ層	27.6	21	10.4	4.2	珪質頁岩	無	
83-33	石鏃	Ⅱ a 類	遺構外	Ⅲ層	42.2	17.4	6.5	3.3	珪質頁岩	無	アスファルト 状物質付着
83-34	石鏃	Ⅱ a 類	遺構外	Ⅲ層	39.3	16.3	7.2	3.7	珪質頁岩	無	
83-35	石鏃	Ⅱ b 類	遺構外	Ⅲ層	37.7	14.5	5.7	2.1	珪質頁岩	無	アスファルト 状物質付着
83-36	石鏃	Ⅱ b 類	遺構外	Ⅲ層	36.9	12.1	4.6	1.5	珪質頁岩	無	
83-37	石鏃	Ⅱ b 類	遺構外	Ⅲ層	26.5	16.7	4.5	1.1	珪質頁岩	無	アスファルト 状物質付着
83-38	石鏃	Ⅱ b 類	遺構外	Ⅲ層	26.2	11.5	4.3	0.8	珪質頁岩	無	
83-39	石鏃	未製品・失敗品	遺構外	Ⅲ層	31.2	27.4	7.3	4.9	珪質頁岩	無	
83-40	石槍	—	遺構外	Ⅲ層	68.7	27.8	12.6	26.2	珪質頁岩	有	
83-41	石槍	—	遺構外	Ⅲ層	41.9	21.8	14.7	12.3	珪質頁岩	無	
83-42	石槍	未製品・失敗品	遺構外	Ⅲ層	51.6	22.3	8.9	9.2	珪質頁岩	無	
84- 1	石匙	I 類	遺構外	Ⅲ層	64.3	26.4	8.8	10.2	珪質頁岩	無	
84- 2	石匙	Ⅱ類	遺構外	Ⅲ層	67	48.7	10.6	25.7	珪質頁岩	無	
84- 3	石匙	Ⅲ類	遺構外	Ⅲ層	65.3	30.8	9.5	14.4	珪質頁岩	無	
84- 4	石匙	Ⅱ類	遺構外	Ⅲ層	31.6	37.4	7.7	6.7	珪質頁岩	有	
84- 5	石鏃	Ⅳ類	遺構外	Ⅲ層	25.7	17.2	4.2	1	珪質頁岩	無	
84- 6	二次調整のある剥片	—	遺構外	Ⅲ層	40.7	38	12	17.8	珪質頁岩	無	
84- 7	二次調整のある剥片	—	遺構外	Ⅲ層	92.6	50	16.1	55.5	珪質頁岩	無	
84- 8	二次調整のある剥片	—	遺構外	Ⅲ層	42.3	25.6	9.3	11.3	珪質頁岩	無	
84- 9	二次調整のある剥片	—	遺構外	Ⅲ層	54.9	38.7	14.6	29.6	珪質頁岩	無	
84-10	二次調整のある剥片	—	遺構外	Ⅲ層	53.2	33	9.2	14.3	珪質頁岩	無	
84-11	二次調整のある剥片	—	遺構外	Ⅲ層	55.5	30.8	9.7	14.3	珪質頁岩	無	
84-12	二次調整のある剥片	—	遺構外	Ⅲ層	54.2	32	13.6	18	珪質頁岩	無	
84-13	石鏃	I c 類	遺構外	Ⅳ層	19.9	12.9	3.2	0.9	珪質頁岩	無	
84-14	石鏃	未製品・失敗品	遺構外	Ⅳ層	18.2	15.6	4.1	0.6	珪質頁岩	無	
84-15	石鏃	I d 類	遺構外	Ⅳ層	34.5	11.6	6.2	1.9	珪質頁岩	無	
84-16	石鏃	未製品・失敗品	遺構外	Ⅳ層	46.4	25.4	9.6	9	珪質頁岩	無	アスファルト 状物質付着
84-17	石鏃	I a 類	遺構外	Ⅳ層	43.2	29.7	8.4	10.2	珪質頁岩	無	
85- 1	石匙	I 類	遺構外	Ⅳ層	70.6	30.5	12	14.8	珪質頁岩	無	
85- 2	石匙	Ⅳ類	遺構外	Ⅳ層	24.2	43.8	10.1	4.1	珪質頁岩	無	
85- 3	石匙	Ⅳ類	遺構外	Ⅳ層	30.3	14.9	3.7	1.2	珪質頁岩	無	
85- 4	石匙	Ⅱ類	遺構外	Ⅳ層	52.5	30.2	8.3	11.6	珪質頁岩	無	
85- 5	石匙	Ⅲ類	遺構外	Ⅳ層	66.6	24.8	10.3	9.3	珪質頁岩	無	
85- 6	石鏃	—	遺構外	Ⅳ層	59.8	39.1	15.8	32.8	珪質頁岩	無	
85- 7	磨製石斧	—	遺構外	Ⅱ層	116	91	25	240.7	緑色凝灰岩	無	
85- 8	磨製石斧	—	遺構外	Ⅱ層	61	39	13	56.1	緑色細粒凝 灰岩	無	Ⅱ B-157
85- 9	石皿・台石	—	遺構外	Ⅱ層	63	78	12	87	砂岩	無	
85-10	磨製石斧	—	遺構外	Ⅲ層	57	41	32	105.3	緑色細粒凝 灰岩	無	
85-11	磨製石斧	—	遺構外	Ⅲ層	35	31	22	38.4	頁岩	無	
85-12	磨製石斧	—	遺構外	Ⅲ層	86	18	12	35.5	緑色細粒凝 灰岩	無	
85-13	磨製石斧	未製品	遺構外	Ⅲ層	114	54	26	259	閃緑岩	無	
85-14	磨石	磨Ⅰ類	遺構外	Ⅲ層	111	54	48	581.8	粗粒玄武岩	無	
85-15	磨石	磨Ⅰ類	遺構外	Ⅲ層	123	54	87	801.7	安山岩	無	
86- 1	磨石	磨Ⅱ類	遺構外	Ⅲ層	110	95	52	803.2	安山岩	無	
86- 2	磨石	磨Ⅱ類	遺構外	Ⅲ層	110	84	62	884.1	凝灰岩	無	
86- 3	磨石	磨Ⅱ類	遺構外	Ⅲ層	87	68	48	432.4	安山岩	無	
86- 4	敲石	敲Ⅱ類	遺構外	Ⅲ層	66	41	27	119	花崗閃緑岩	無	
86- 5	凹石	凹Ⅲ類	遺構外	Ⅲ層	94	66	34	262.7	砂岩	無	
86- 6	凹石	凹Ⅱ類	遺構外	Ⅲ層	98	70	47	370.1	砂岩	無	
86- 7	凹石	凹Ⅱ類	遺構外	Ⅲ層	113	68	26	263.9	砂岩	無	
86- 8	凹石	凹Ⅱ類	遺構外	Ⅲ層	75	51	32	200.1	砂岩	無	
86- 9	凹石	凹Ⅲ類	遺構外	Ⅲ層	96	71	41	348.2	砂岩	無	
86-10	凹石	凹Ⅰ類	遺構外	Ⅲ層	108	99	57	732.2	砂岩	無	
86-11	砥石 (石皿・台石)	—	遺構外	Ⅲ層	130	115	15	351.3	砂岩	無	

表 31 石器・石製品観察表 4

図版番号	器種	類型	遺構	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	受熱	備考
86-12	石皿・台石	—	遺構外	Ⅲ層	224	380	82	66000	デイサイト	無	
87- 1	石製品	—	遺構外	Ⅲ層	265	55	23	505.1	頁岩	無	
87- 2	磨製石斧	—	遺構外	Ⅲ層	129	54	24	22.5	頁岩	無	
87- 3	磨製石斧	—	遺構外	Ⅳ層	22	48	12	80.8	緑色細粒凝灰岩(古期)	無	
87- 4	磨製石斧	—	遺構外	Ⅳ層	79	42	16	87.6	緑色細粒凝灰岩	無	
87- 5	敲磨器	磨 I 類、凹 II 類	遺構外	Ⅳ層	137	54	51	499.4	砂岩	無	
87- 6	磨石	磨 I 類	遺構外	Ⅳ層	165	89	55	1092.7	頁岩	無	
87- 7	磨石	磨 I 類	遺構外	Ⅳ層	190	58	112	1453.9	斑岩	無	
88- 1	磨石	磨 I 類	遺構外	Ⅳ層	156	56	63	710.3	砂岩	無	
88- 2	磨石	磨 I 類	遺構外	Ⅳ層	125	73	67	758.7	砂岩	無	
88- 3	磨石	磨 I 類	遺構外	Ⅳ層	181	69	75	1297.2	細粒凝灰岩	有	
88- 4	磨石	磨 I 類	遺構外	Ⅳ層	140	52	60	495.6	砂岩	有	
88- 5	磨石	磨 I 類	遺構外	Ⅳ層	113	54	79	700.8	粗粒玄武岩	無	
88- 6	磨石	磨 I 類	遺構外	Ⅳ層	122	62	63	497.8	砂岩	無	
88- 7	敲磨器	磨 II 類、凹 II 類	遺構外	Ⅳ層	107	85	41	552.3	凝灰岩	無	
88- 8	敲磨器	磨 I 類、凹 I 類	遺構外	Ⅳ層	115	66	48	507.2	砂岩	無	
88- 9	凹石	凹 I 類	遺構外	Ⅳ層	82	78	35	329.6	砂岩	無	
88-10	凹石	凹 II 類	遺構外	Ⅳ層	93	51	51	287.8	安山岩	有	
88-11	凹石	凹 I 類	遺構外	Ⅳ層	114	84	39	592.7	閃緑岩	無	
88-12	石錘	—	遺構外	Ⅳ層	44	33	17	35.5	砂岩	有	
89- 1	敲磨器	磨 I 類、敲 II 類、凹 I 類	遺構外	Ⅳ層	136	84	53	749.2	砂岩	無	
89- 2	敲磨器	磨 I 類、凹 II 類	遺構外	Ⅳ層	122	83	51	736.3	閃緑岩	無	
89- 3	敲磨器	敲 II 類、凹 I 類	遺構外	Ⅳ層	93	74	40	358.5	砂岩	無	
89- 4	石皿・台石	—	遺構外	Ⅳ層	105	81	21	215.2	凝灰岩	有	
89- 5	石皿・台石	—	遺構外	Ⅳ層	288	470	155	23.4kg	デイサイト	無	
89- 6	磨石	磨 I 類	遺構外	V 層	111	51	48	392.6	砂岩	有	
90- 1	磨石	磨 I 類	遺構外	V 層	123	54	72	584.4	砂岩	無	
90- 2	磨石	磨 I 類	遺構外	V 層	91	48	78	461.1	砂岩	有	
90- 3	敲石	敲 II 類	遺構外	V 層	85	88	48	541.9	砂岩	無	

表 32 石器・石製品観察表 5

遺跡名	遺跡所在地	遺構名	時期	出土位置	母岩	接合	石材	
長七谷地貝塚	八戸市	第 3 号竪穴住居跡	早期末葉（早稲田 5 類）	ピット覆土		2 組		
表館 (1) 遺跡	六ヶ所村	第 1 号剥片集積跡	早期末葉	住居跡に隣接			頁岩	
		第 2 号剥片集積跡※	早期末葉				頁岩(多)、珪質頁岩、チャート	
砂沢平遺跡	大鰐町	なし	前期前葉?	遺構外	未精査		未精査	
中里 (2) 遺跡	十和田湖町	剥片集積遺構	前期? (中掘浮石下位)	遺構外			珪質頁岩	
笹ノ沢 (3) 遺跡	八戸市	第 19 号竪穴住居跡	中期前葉 (円筒上層 a 式)	ピット上面、住居跡壁際				
近野遺跡	青森市	第 E120b 号竪穴住居跡	中期中葉?	底面下位	2 母岩	6 組	珪質頁岩	
三内丸山 (6) 遺跡	青森市	第 39A 号竪穴住居跡	中期前葉~中葉	ピット上面~覆土上部 (深さ 10cm)	単一	7 組	頁岩	
山崎遺跡	今別町	No. 1	中期中葉 (円筒上層 d 式)	遺構外	単一	4 組	珪質頁岩	
		No. 2	中期中葉 (円筒上層 d 式)	遺構外	単一	1 組	珪質頁岩	
松ヶ崎遺跡	八戸市	第 7 号竪穴住居跡※	中期後葉 (円筒上層 e 式)	住居跡壁際、床面、周溝				
		第 11 号竪穴住居跡	大木 8b ~ 覆林式以前	床面				
		第 13 号竪穴住居跡 P19	中期後葉 (円筒上層 e 式)	ピット覆土				
		第 13 号竪穴住居跡 P46	中期後葉 (円筒上層 e 式)	ピット覆土				
		第 14 号竪穴住居跡 P12	中期後葉 (円筒上層 e 式)	ピット覆土				
三内丸山遺跡	青森市	第 603 号竪穴住居跡	中期後葉 (円筒上層 e 式)	ピット底面~覆土	8 母岩	2 組	珪質頁岩	
長久保 (2) 遺跡	八戸市	第 3 号竪穴住居跡	中期後葉 (最花・大木 9 式)	床面、住居跡壁際	複数存在	2 組		
槻ノ木遺跡	野辺地町	石器集積跡	中期末?	遺構外			無	
安田 (2) 遺跡	青森市	第 26 号竪穴住居跡 (集積 1)	後期前葉	床面	複数存在	9 組	珪質頁岩、玉髄質珪質頁岩	
		第 26 号竪穴住居跡 (集積 2)	後期前葉	床面	複数存在	7 組	珪質頁岩、玉髄質珪質頁岩	
丹後谷地遺跡	八戸市	第 45 号竪穴住居跡	後期後葉 (十腰内 IV 群)	ピット覆土				
		第 56 号竪穴住居跡	後期後葉 (十腰内 IV 群) 以前	ピット覆土	複数存在	2 組		
丹後平遺跡	八戸市	第 10 号竪穴住居跡	後期中葉	床面、住居跡壁際	単一	2 組		
小牧野遺跡	青森市	剥片埋納遺構 (SX-07)	後期?	遺構外		4 組	珪質頁岩	
田ノ上遺跡	南郷村	第 2 号竪穴住居跡ピット 19	後期前葉 (十腰内 I 群)	ピット覆土			碧玉	
鞍越遺跡	川内町	SI-01	後期後葉~晩期前葉	床面、住居跡壁際		無	珪質頁岩	

※ 土坑等の覆土上層部分に堆積し、土器や自然礫を多く伴うなど、一括廃棄の様相が強いものは表から除外した。表館 (1) 遺跡第 2 号剥片集積、松ヶ崎遺跡第 7 号竪穴住居跡は破片類を伴っており、石器製作残滓の廃棄ブロックの可能性が考えられる。

表 33 青森県剥片集中遺構集成 1

遺跡名	遺構名	総数	文献
長七谷地貝塚	第3号竪穴住居跡	70点	八戸市教育委員会 1982 『長七谷地遺跡発掘調査報告書』
表館(1)遺跡	第1号剥片集積跡	236点	青森県教育委員会 1989 『表館(1)遺跡Ⅲ』
	第2号剥片集積跡※	数千点	
砂沢平遺跡	なし	未精査	大鰐町教育委員会 2004 『砂沢平遺跡 一確認調査報告書一』
中里(2)遺跡	剥片集積遺構	32点	十和田湖町教育委員会 2001 『中里(2)遺跡』
笹ノ沢(3)遺跡	第19号竪穴住居跡	19点	青森県教育委員会 2004 『笹ノ沢(3)遺跡Ⅳ』
近野遺跡	第E29号竪穴住居跡	45点	青森県教育委員会 2005 『近野遺跡Ⅶ』
三内丸山(6)遺跡	第39A号竪穴住居跡	67点	青森県教育委員会 2001 『三内丸山(6)遺跡Ⅱ』
山崎遺跡	No. 1	22点	青森県教育委員会 1982 『山崎遺跡』
	No. 2	32点	
松ヶ崎遺跡	第7号竪穴住居跡※	チップ440g	八戸市教育委員会 1994 『八戸市内遺跡発掘調査報告書6 松ヶ崎遺跡』
	第11号竪穴住居跡	14点	
	第13号竪穴住居跡P19	51点	
	第13号竪穴住居跡P46	78点	
	第14号竪穴住居跡P12	70点	
三内丸山遺跡	第603号竪穴住居跡	24点	青森県教育委員会 1998 『三内丸山遺跡ⅩⅠ』
長久保(2)遺跡	第3号竪穴住居跡	8点	青森県教育委員会 2004 『長久保(2)遺跡』
槻ノ木遺跡	石器集積跡	29点	青森県教育委員会 1983 『松原遺跡・陣馬川原遺跡・槻ノ木遺跡』
安田(2)遺跡	第26号竪穴住居跡(集積1)	59点	青森県教育委員会 2001 『安田(2)遺跡Ⅱ』
	第26号竪穴住居跡(集積2)	32点	
丹後谷地遺跡	第45号竪穴住居跡	82点(アスファルト塊含む)	八戸市教育委員会 1986 『八戸市新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』
	第56号竪穴住居跡	80点	
丹後平遺跡	第10号竪穴住居跡	8点	八戸市教育委員会 1988 『八戸市新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ』
小牧野遺跡	剥片埋納遺構(SX-07)	122点	青森市教育委員会 2002 『小牧野遺跡Ⅶ』
田ノ上遺跡	第2号竪穴住居跡ピット19	26点	青森県教育委員会 1981 『国営八戸平原開拓建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』
鞍越遺跡	SI-01	12点	川内町教育委員会 1993 『鞍越・農川遺跡発掘調査報告書』

表 34 青森県剥片集中遺構集成 2

	類型	I層	II層	III層	IV層	V層	カクラン	総点数	重量(g)
石鏃	I a類	1	1	16	5			23	70.9
	I b類		1	7	3			11	14.7
	I c類		3	56	6		1	66	72.2
	I d類			4	1			5	11.3
	II a類			7				7	15.8
	II b類			4				4	5.5
	II c類	1						1	1
	未製品・失敗品			8	4			12	77.2
石槍	—			2	1			3	64.8
	未製品・失敗品			2				2	26.2
石匙	I類			2	1			3	41
	II類			2	2			4	55.3
	III類	1		1	2			4	23.7
	IV類				3			3	9.5
石篋	—			3	3	1	1	8	293.2
両極加撃痕跡のある剥片	—		2	20	3			25	159.1
二次調整のある剥片	—	1	11	110	33	2		157	1485.9
石錐	I類			3				3	10.4
	II類	1	1	3				5	243.9
	III類			2				2	1.7
	IV類			6			1	7	114.8
微小剥離痕のある剥片	—		2	162	21			185	1585
剥片	—		23	262	82	2	1	370	2590.4
碎片	—		9	106	23			138	799.6
石核	—		1		2			3	1289.3
磨製石斧	—		5	12	4			21	2330.7
	残欠			2				2	19
	未製品			1	1			2	312.7
敲石	—			4	1	1		6	2347.8
凹石	—			10	7			17	7343.9
磨石	—		3	21	49	5	2	80	39279.5
敲磨器	—			5	13			18	8718.5
石皿・台石	—		1	8	4			13	119119.7
石錘	—			1	4		2	7	582.6
砥石	—		1	3				4	2430.9
半円状扁平打製石器?	—			1				1	46.6
石製品	—			1				1	505.1
自然礫	—	7	350	2996	1610	30	3	4996	1373082.9
総点数		12	412	3853	1889	41	11	6220	1565182.3

表 35 新田遺跡出土石製遺物組成



第 11 号竪穴住居跡完掘状況（南から）



第 14 号竪穴住居跡完掘状況（南から）

写真図版 1



第1号竖穴住居跡土層堆積状況（南から）



第1号竖穴住居跡完掘状況（南東から）



第1号竖穴住居跡 Pit1 土層堆積状況



第1号竖穴住居跡 Pit1 完掘状況

写真図版 2



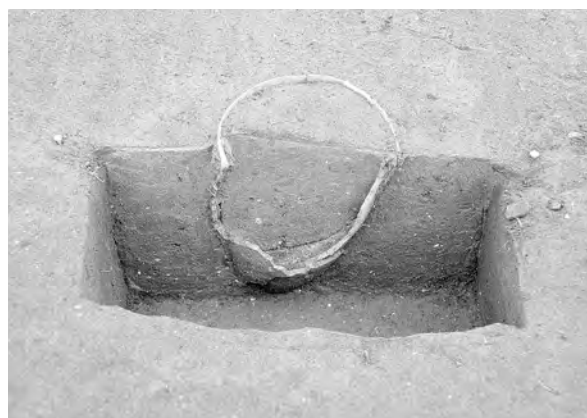
第2号竖穴住居跡完掘状況（南東から）



第2号竖穴住居跡炉埋設土器内面（南から）



第3号竖穴住居跡完掘状況（東から）



第3号竖穴住居跡埋設土器土層堆積状況（南から）



第4号竖穴住居跡土層堆積状況（東から）



第4号竖穴住居跡完掘状況（北西から）



第4号竖穴住居跡掘方完掘状況（北から）



第4号竖穴住居跡琥珀出土状況（北から）

写真図版 3



第5号竖穴住居跡カマド遺物出土状況（南から）



第5号竖穴住居跡焼土・火山灰検出状況（南から）

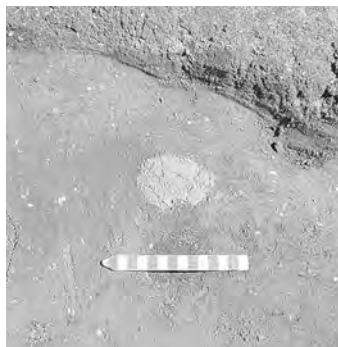


第5号竖穴住居跡居完掘状況（南から）



第7号竖穴住居跡完掘状況（東から）

写真図版4



第7号竖穴住居跡炭化材検出状況（南から） 第7号竖穴住居跡炭化材検出状況（部分） 第7号竖穴住居跡床面粘土出土状況



第7号竖穴住居跡複式炉炭化材検出状況（西から）



第7号竖穴住居跡複式炉炭化材検出状況 部分（南から）



第7号竖穴住居跡複式炉底面ピット土器出土状況

写真図版 5



第8号竖穴住居跡土層堆積状況（西から）



第8号竖穴住居跡土層堆積状況（南から）



第8号竖穴住居跡焼土・火山灰検出状況（南から）



第8号竖穴住居跡掘方工具痕



第8号竖穴住居跡完掘状況（南から）

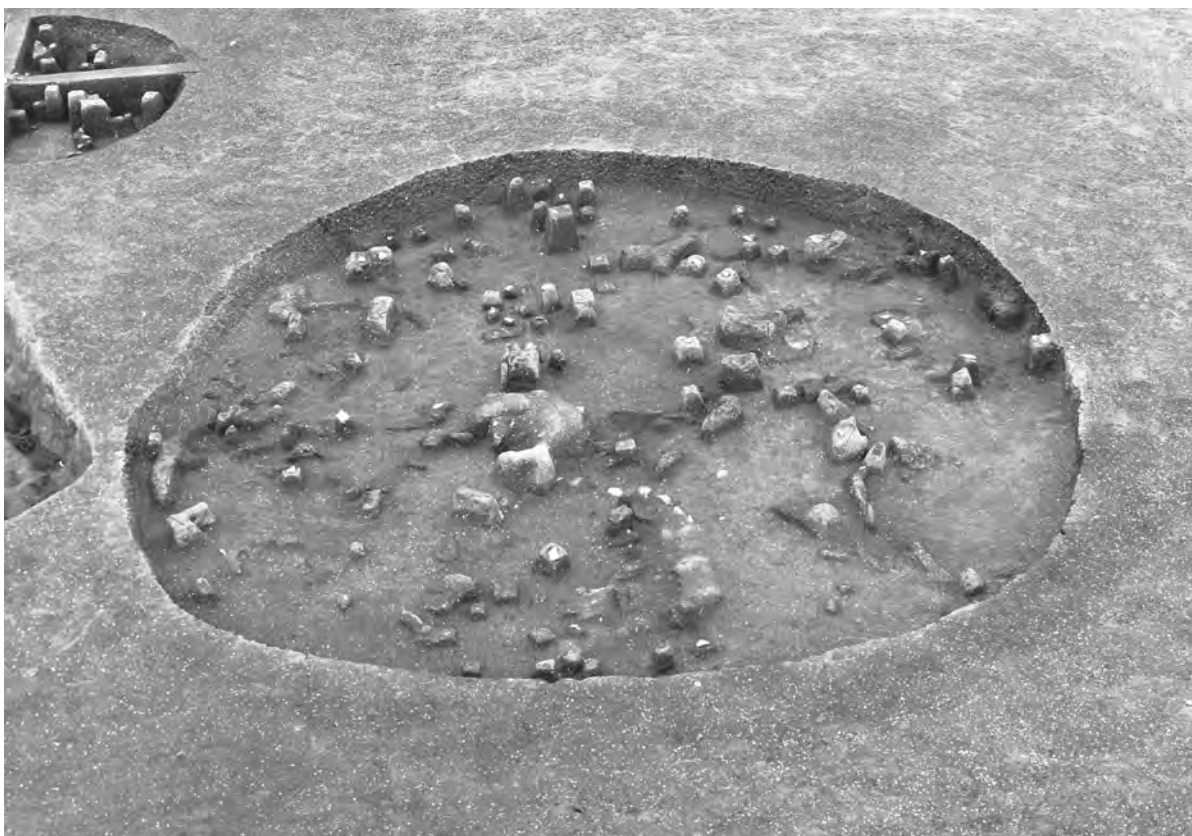
写真図版 6



第 8 号 豎穴住居跡掘方完掘状況（南から）



第 9 号 豎穴住居跡土師器坏出土状況



第 11 号 豎穴住居跡炭化材検出状況（南から）

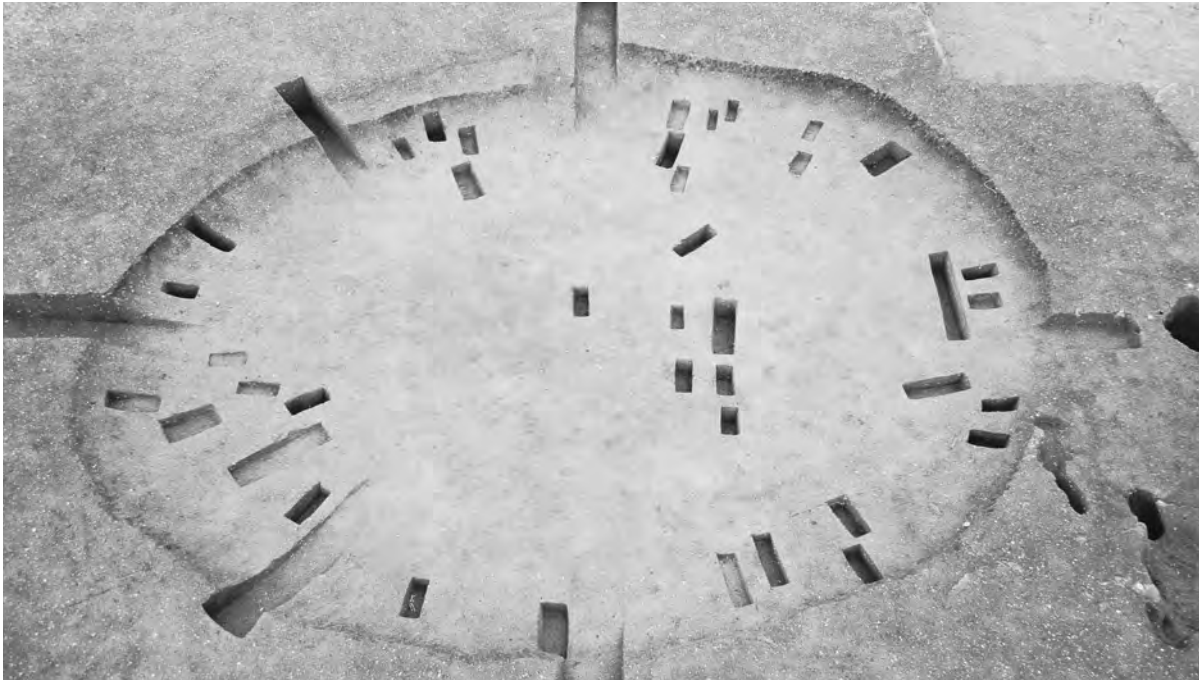


第 11 号 豎穴住居跡剥片集積検出状況



第 11 号 豎穴住居跡複式炉埋設土器検出状況

写真図版 7



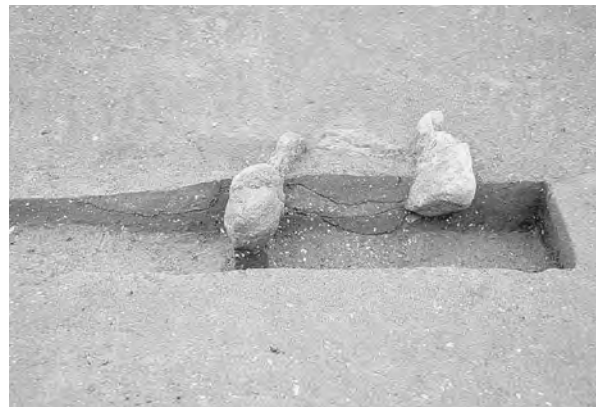
第12号竖穴住居跡完掘状況（南から）



第14号竖穴住居跡遺物出土状況（南東から）



第15号竖穴住居跡硬化面検出状況（北東から）



第15号竖穴住居跡石囲炉土層断面（南東から）

写真図版 8



第4号土坑土層堆積状況（東から）



第4号土坑完掘状況（東から）



第5号土坑土層堆積状況（東から）



第6号土坑完掘状況（東から）



第10号土坑土層堆積状況（東から）



第10号土坑完掘状況（東から）



第11号土坑土層堆積状況（東から）



第11号土坑完掘状況（東から）

写真図版9



第 14 号土坑堆積土遺物出土状況（東から）



第 14 号土坑堆積土炭化種実出土状況



第 14 号土坑底面焼土炭化種実片出土状況（断面）



第 14 号土坑堆積土炭化種実出土状況（上の写真の拡大）



第 14 号土坑底面焼土炭化種実片出土状況（平面）

写真図版 10



第 14 号土坑底面焼土検出状況（南から）



第 15 号土坑底面焼土検出状況（南から）

写真図版 11



第 15 号土坑底面焼土断面



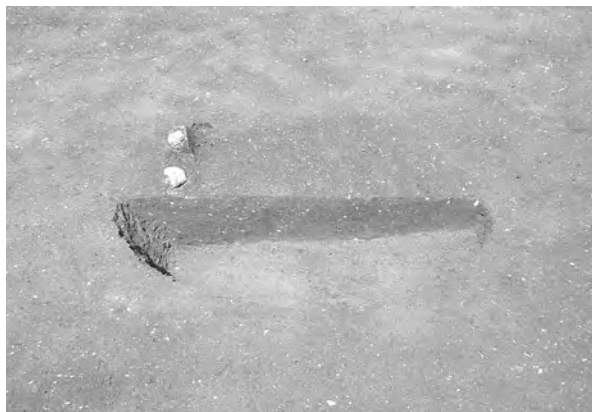
第 15 号土坑底面焼土炭化クワリ出土状況



第 16 号土坑底面焼土検出状況（東から）



第 16 号土坑底面焼土断面



第 17 号土坑土層堆積状況（東から）



第 17 号土坑完掘状況（東から）



第 18 号土坑土層堆積状況（東から）



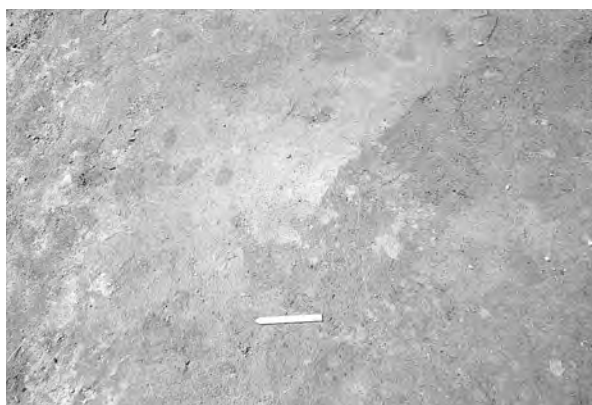
第 18 号土坑完掘状況（東から）



第 3 号焼土検出状況（東から）



第 4 号焼土検出状況（北東から）



第 5 号焼土検出状況（南東から）



第 6 号焼土検出状況（北東から）



第7号焼土検出状況（東から）



第8号焼土検出状況（東から）



第11号焼土検出状況（南東から）



第11号焼土付近基本土層断面（南東から）



第12号焼土検出状況（南東から）



第13号焼土検出状況（東から）



第15号焼土断面（南東から）



第16号焼土検出状況（南から）

写真図版 14



第1号土器埋設炉検出状況（西から）



第1号土器埋設炉土器内焼土検出状況（南東から）



第1号土器埋設炉断面（東から）



第2号土器埋設炉検出状況（南東から）



第2号土器埋設炉土器外焼土検出状況（南東から）



第2号土器埋設炉断面（北東から）



第3号不明遺構検出状況（東から）



第4号不明遺構検出状況（東から）



第5号不明遺構検出状況（東から）



第6号不明遺構遺物出土状況（東から）



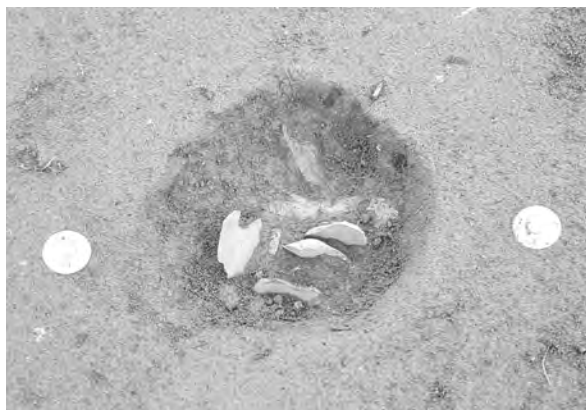
第6号不明遺構 図62-1 土器内焼土検出状況(南東から)



第6号不明遺構 図62-1 土器内焼土完掘状況(北西から)



第6号不明遺構土層堆積状況(南東から)



第7号不明遺構検出状況(北から)



第8号不明遺構検出状況(東から)



第1号溝状土坑土層堆積状況(南から)



第1号溝状土坑完掘状況(東から)



遺構外P-9176出土状況(東から)



写真図版 18



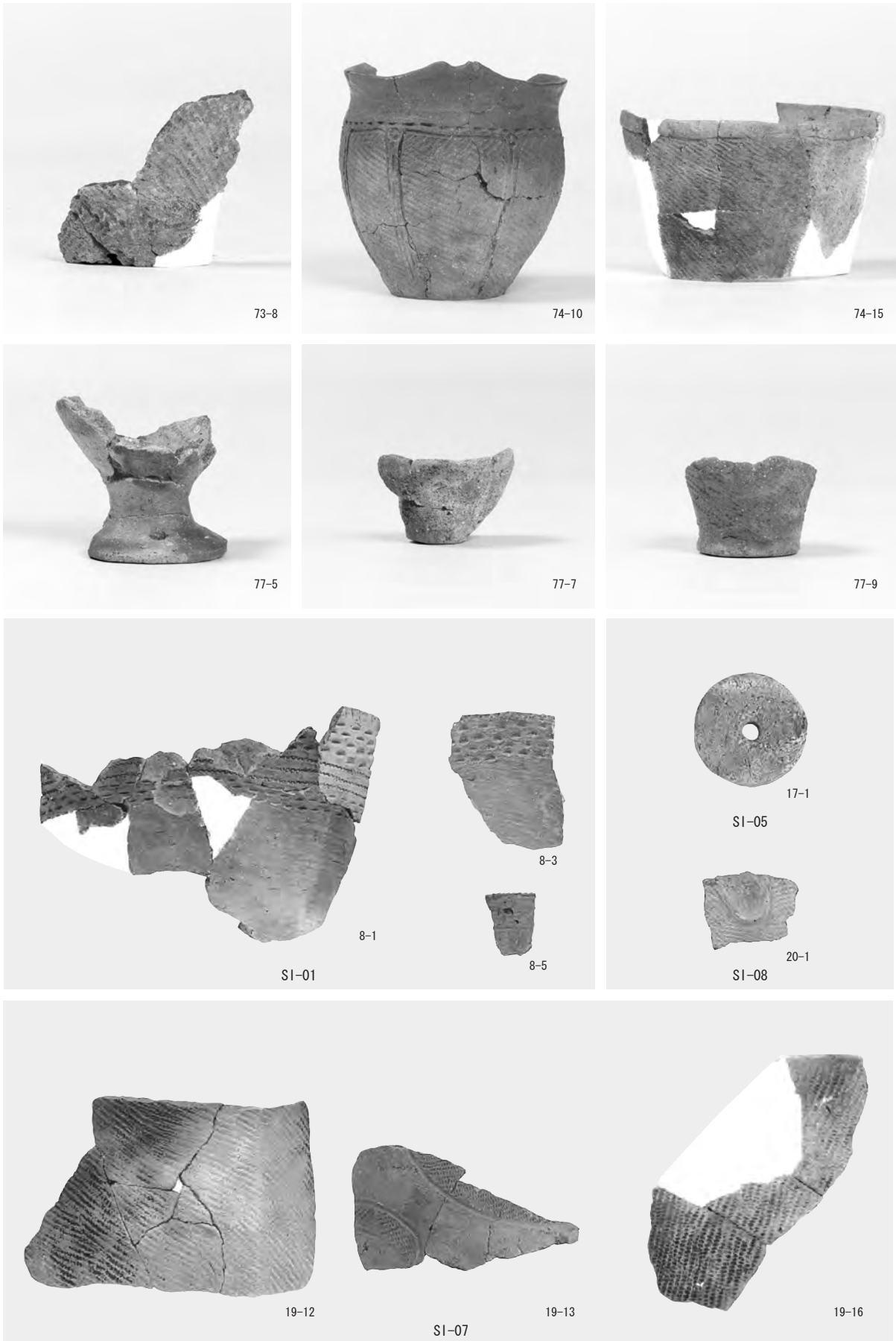
写真図版 19



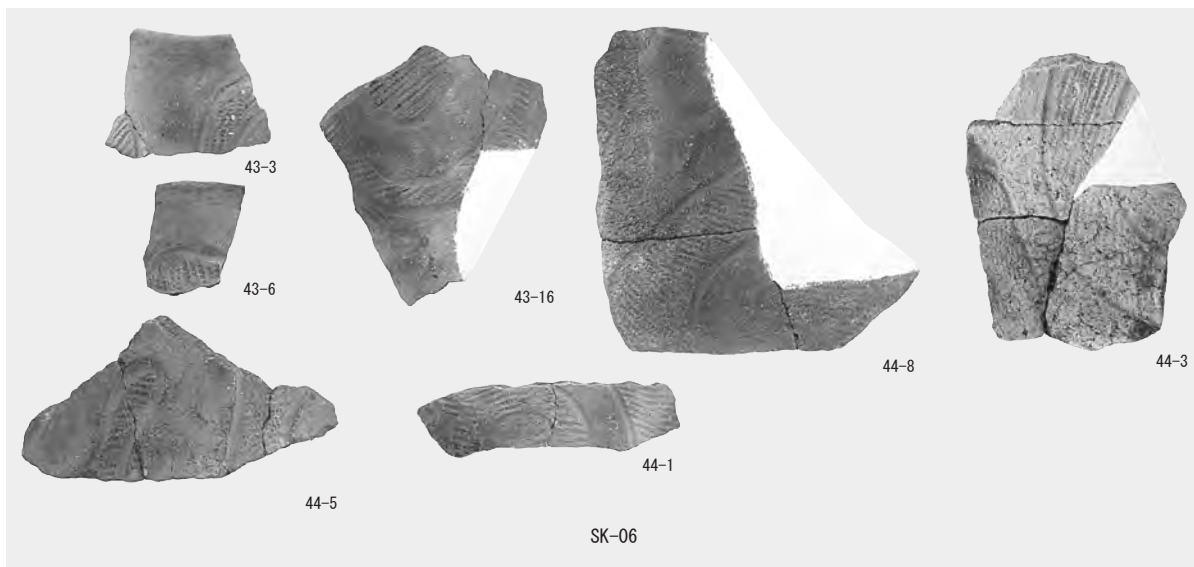
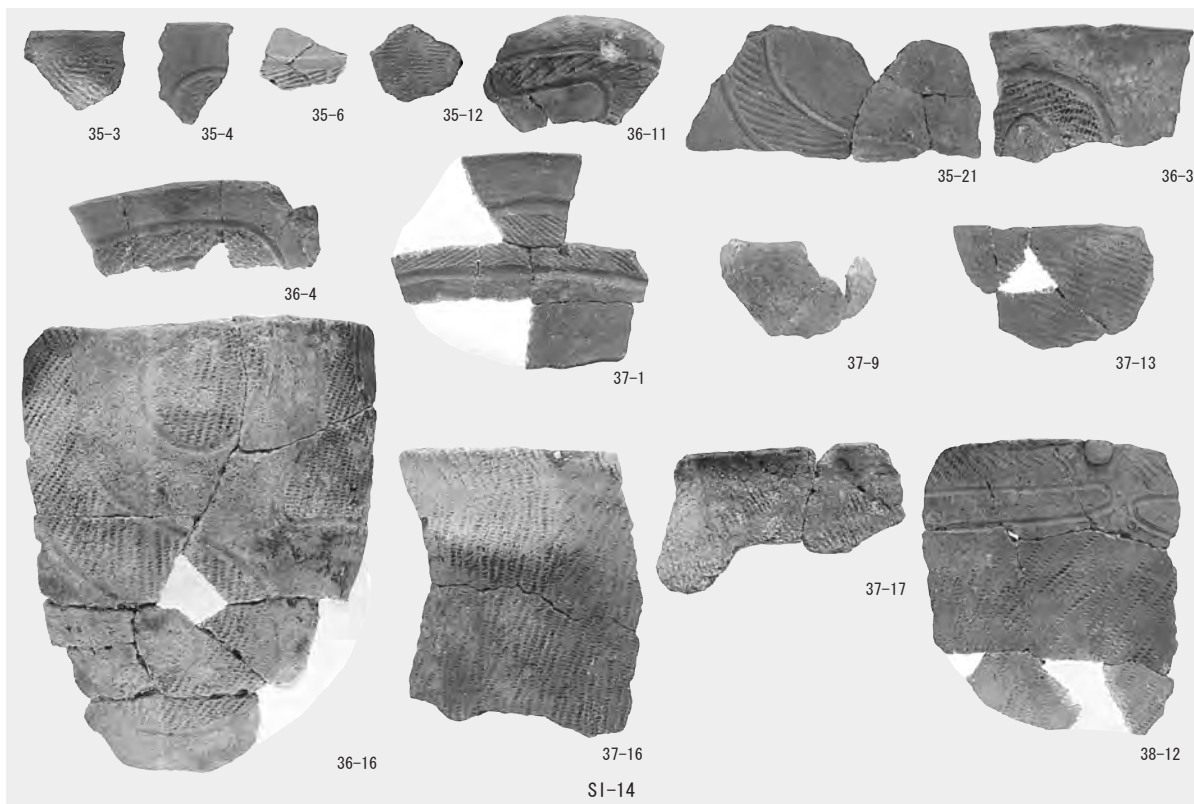
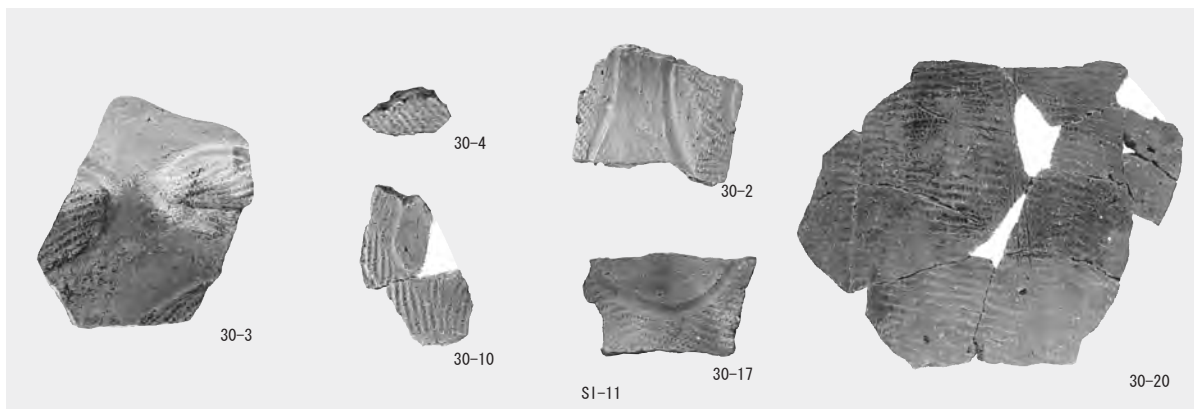
写真図版 20



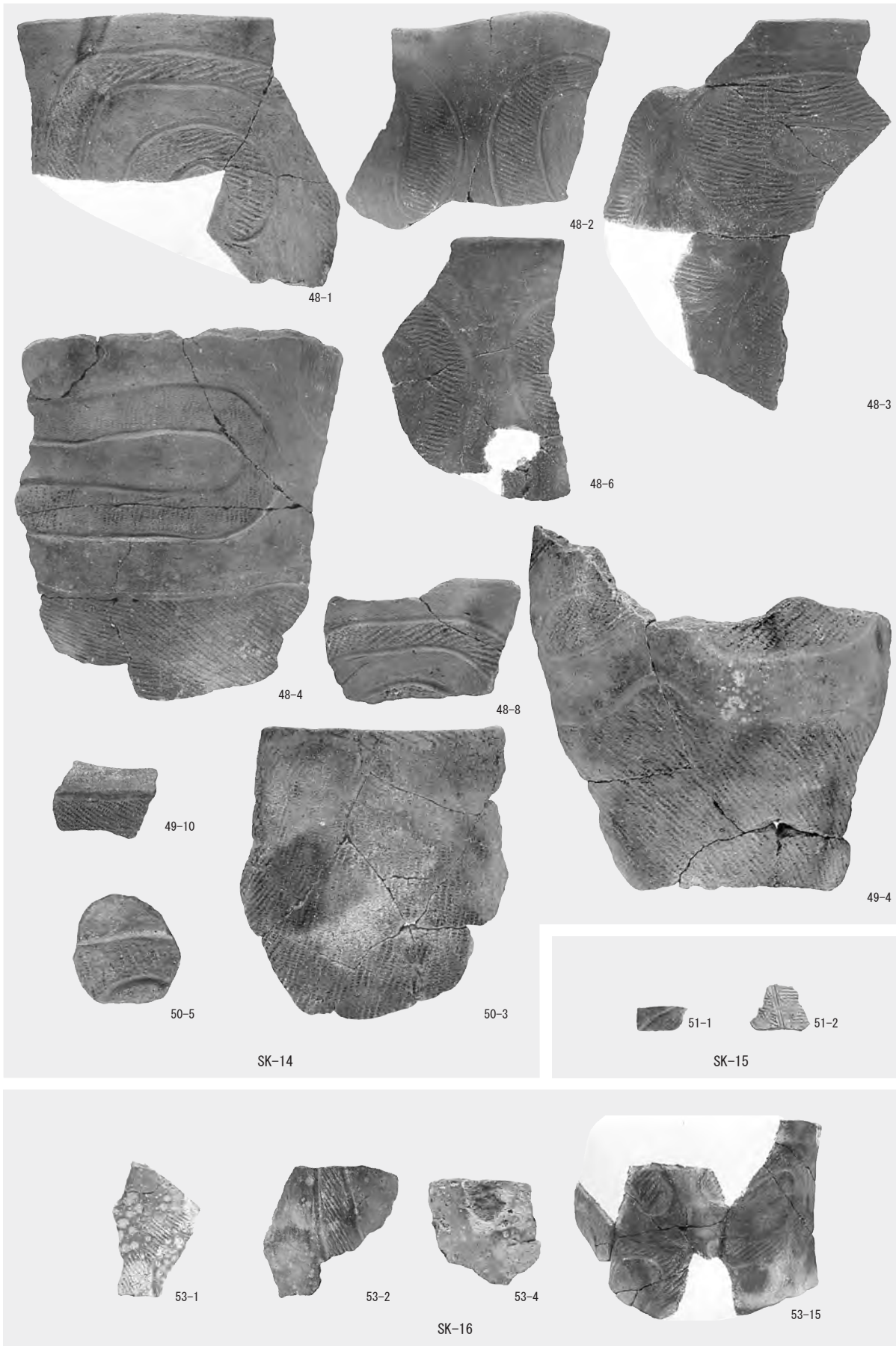
写真図版 21



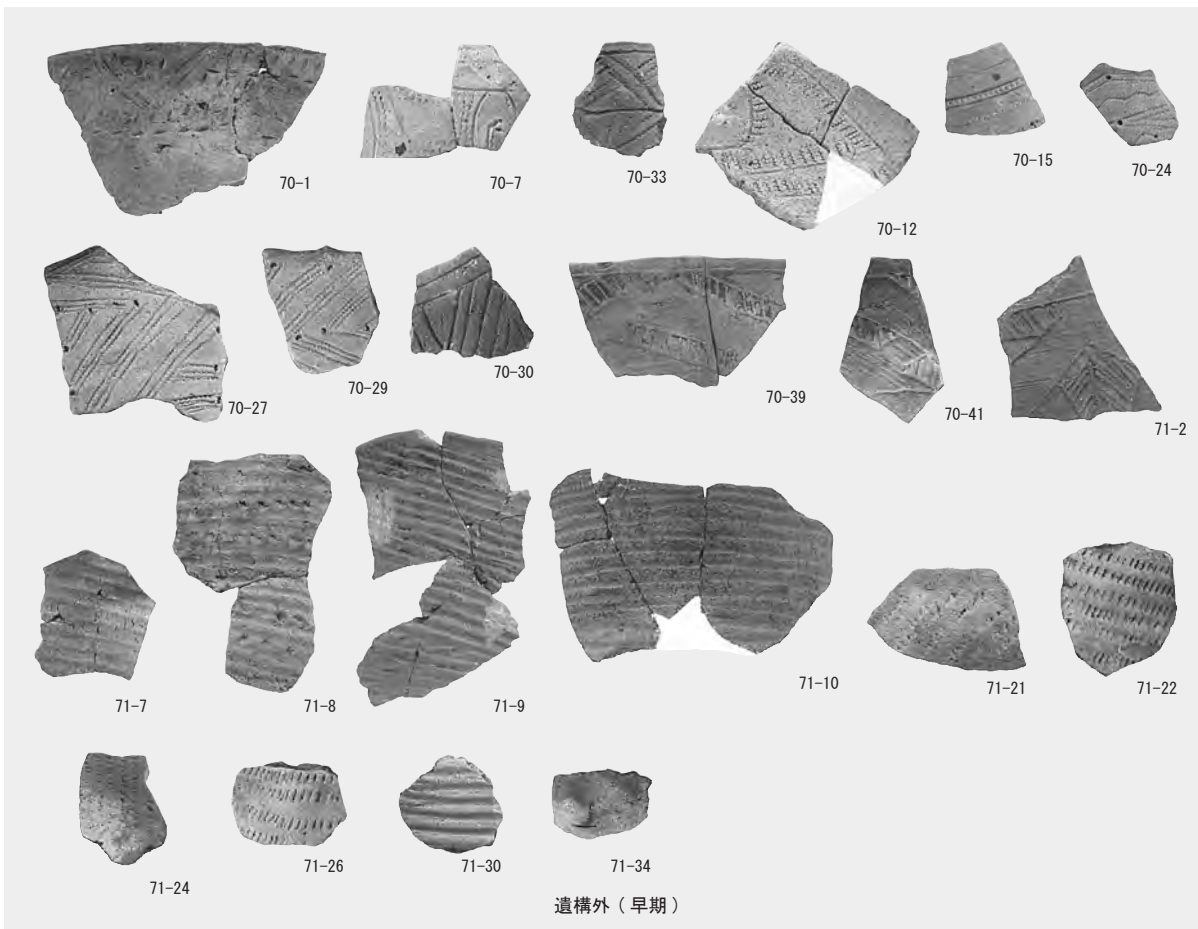
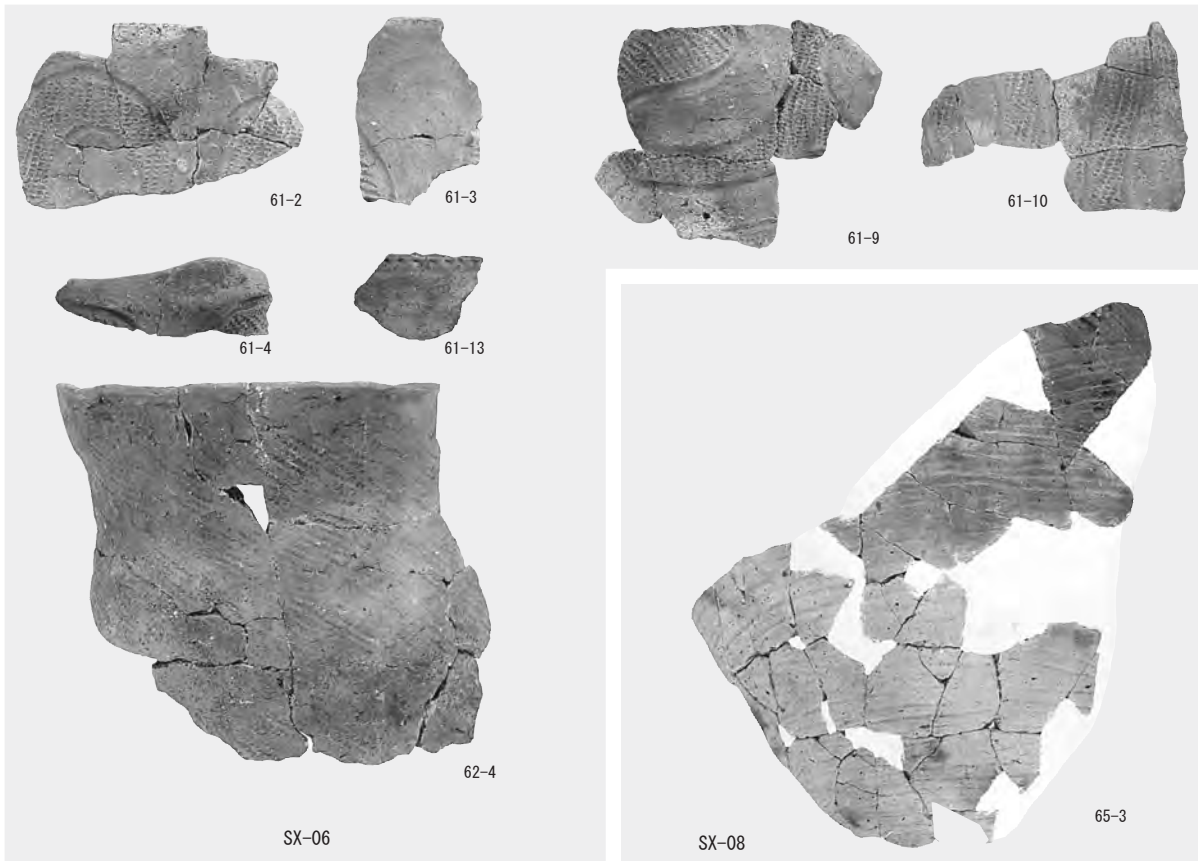
写真図版 22



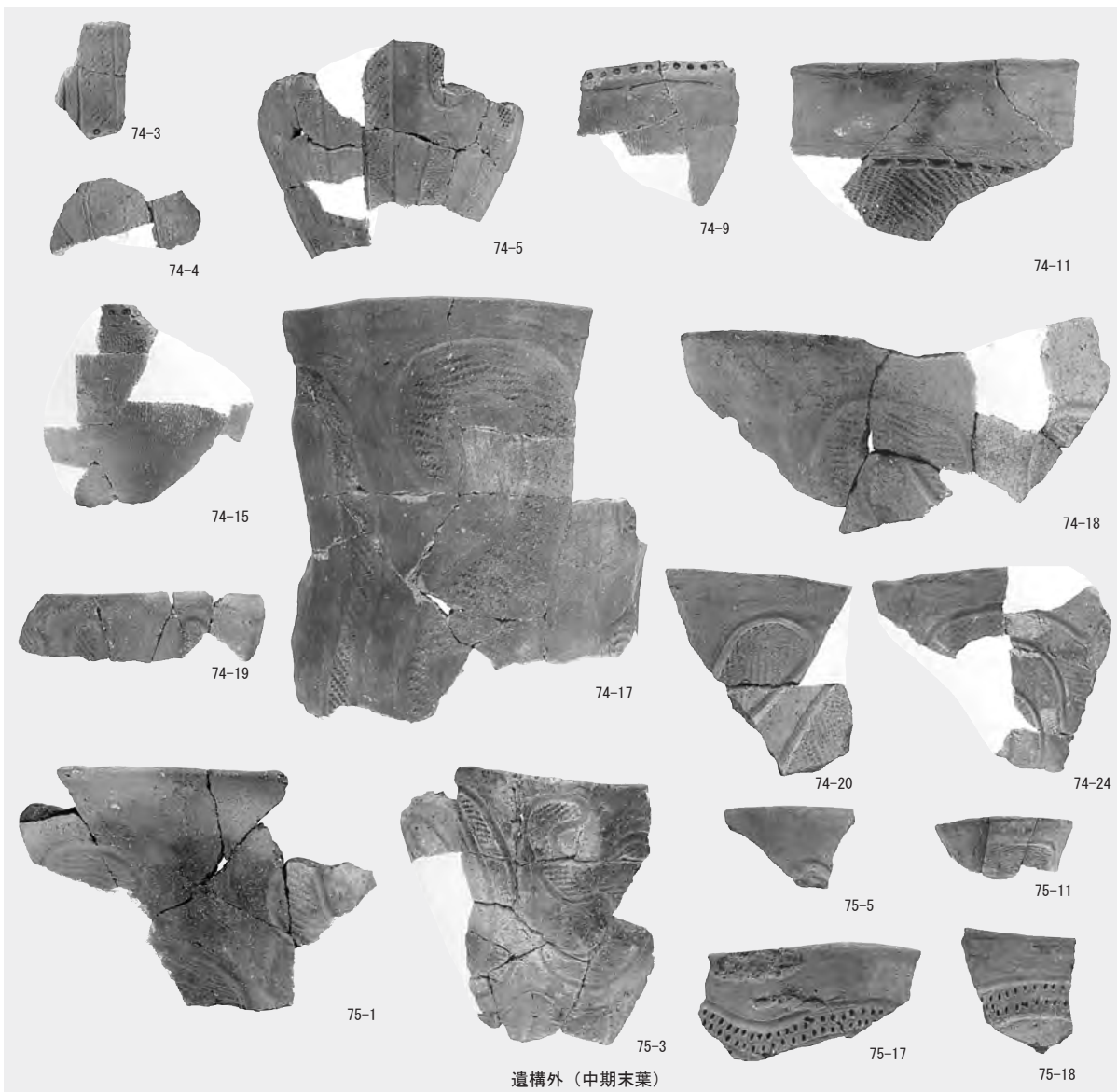
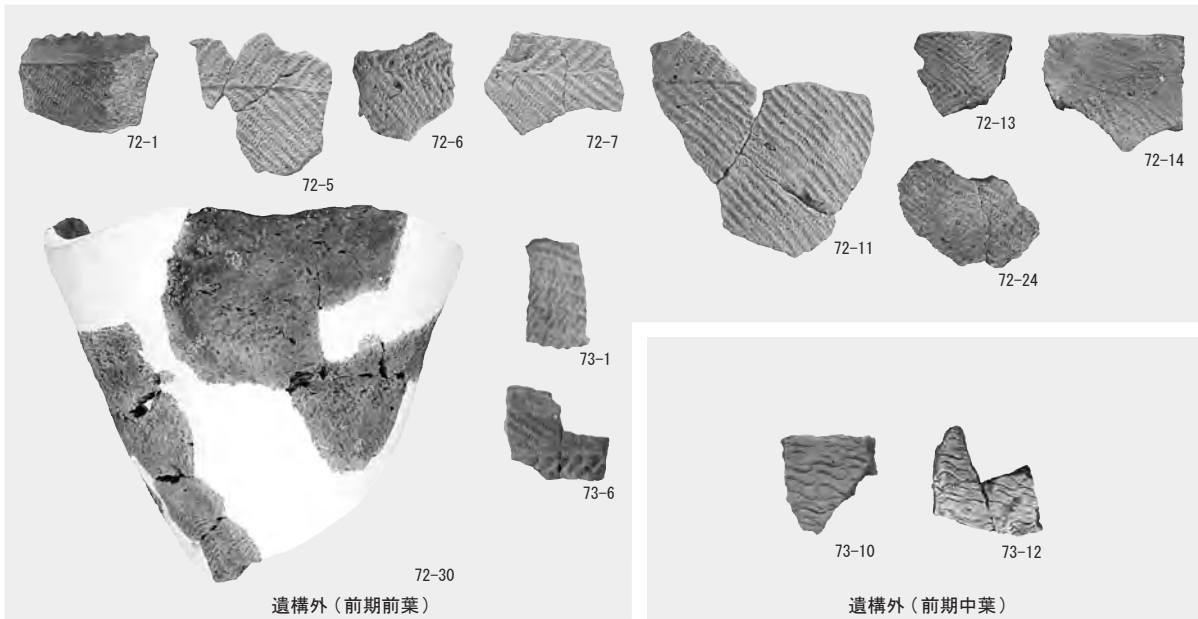
写真図版 23



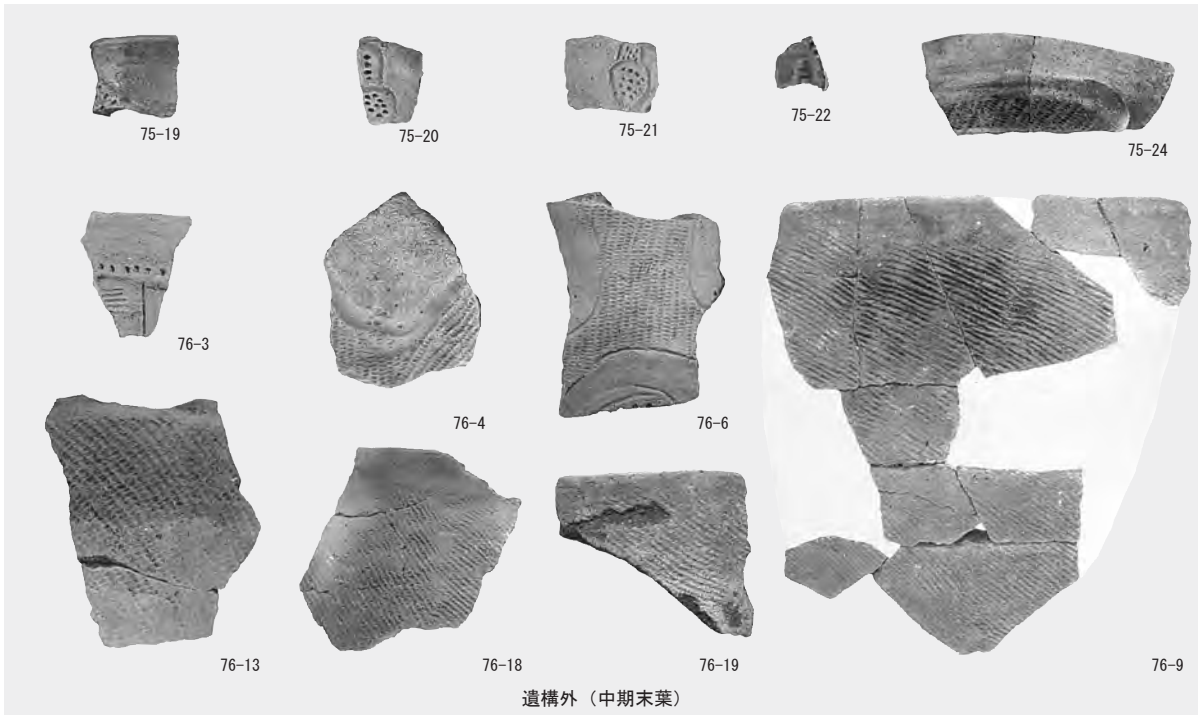
写真図版 24

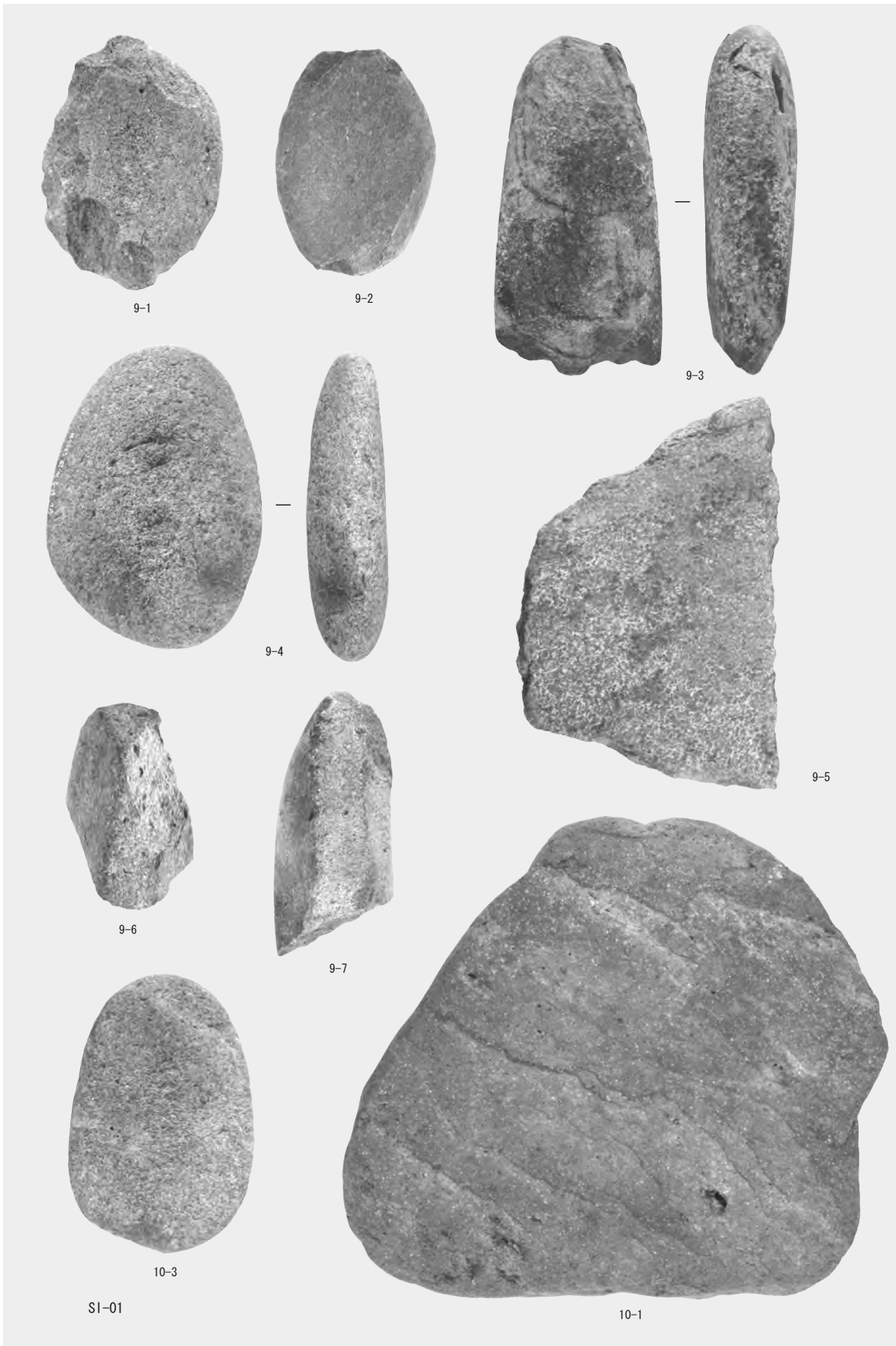


写真図版 25



写真図版 26

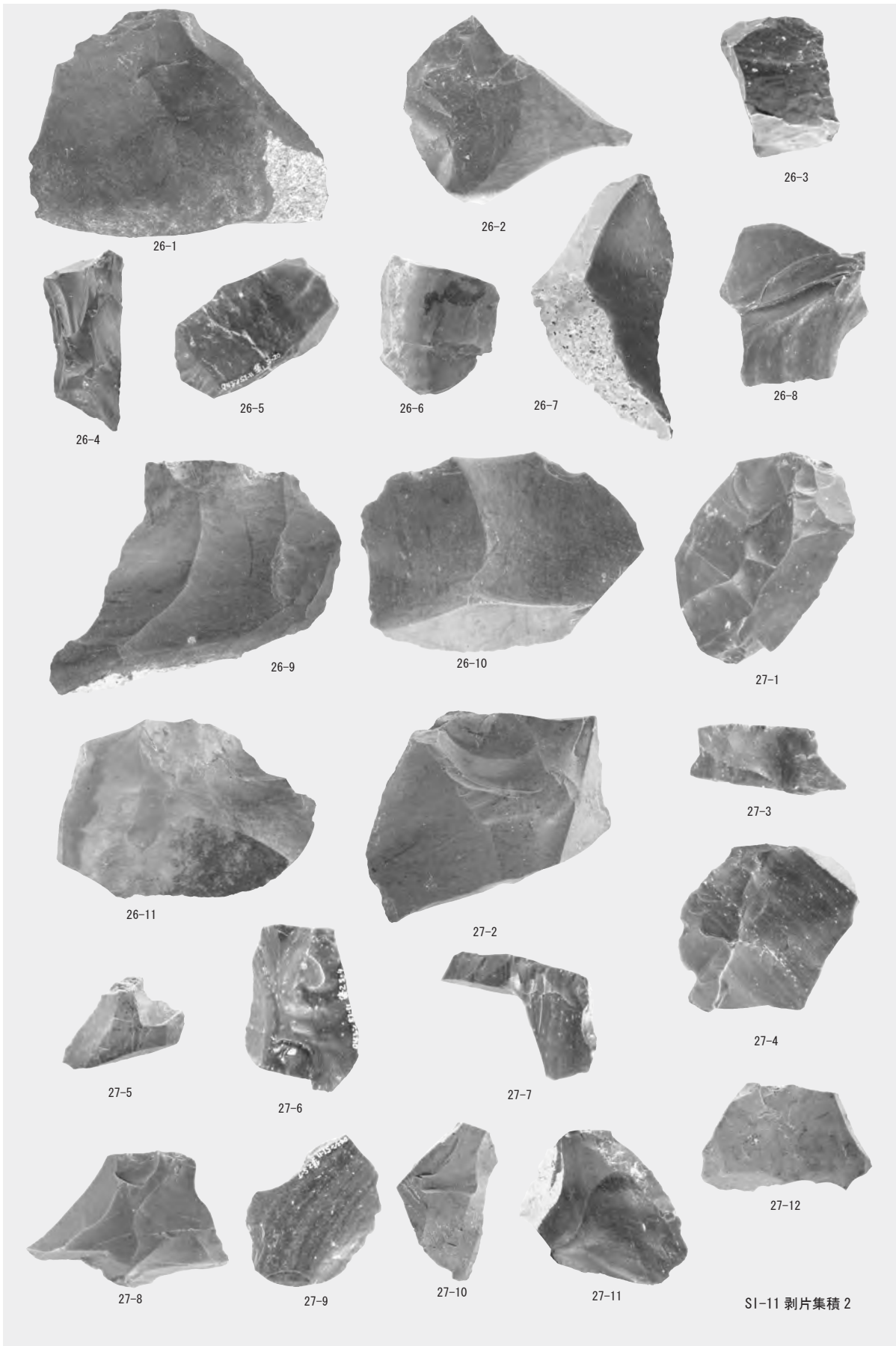




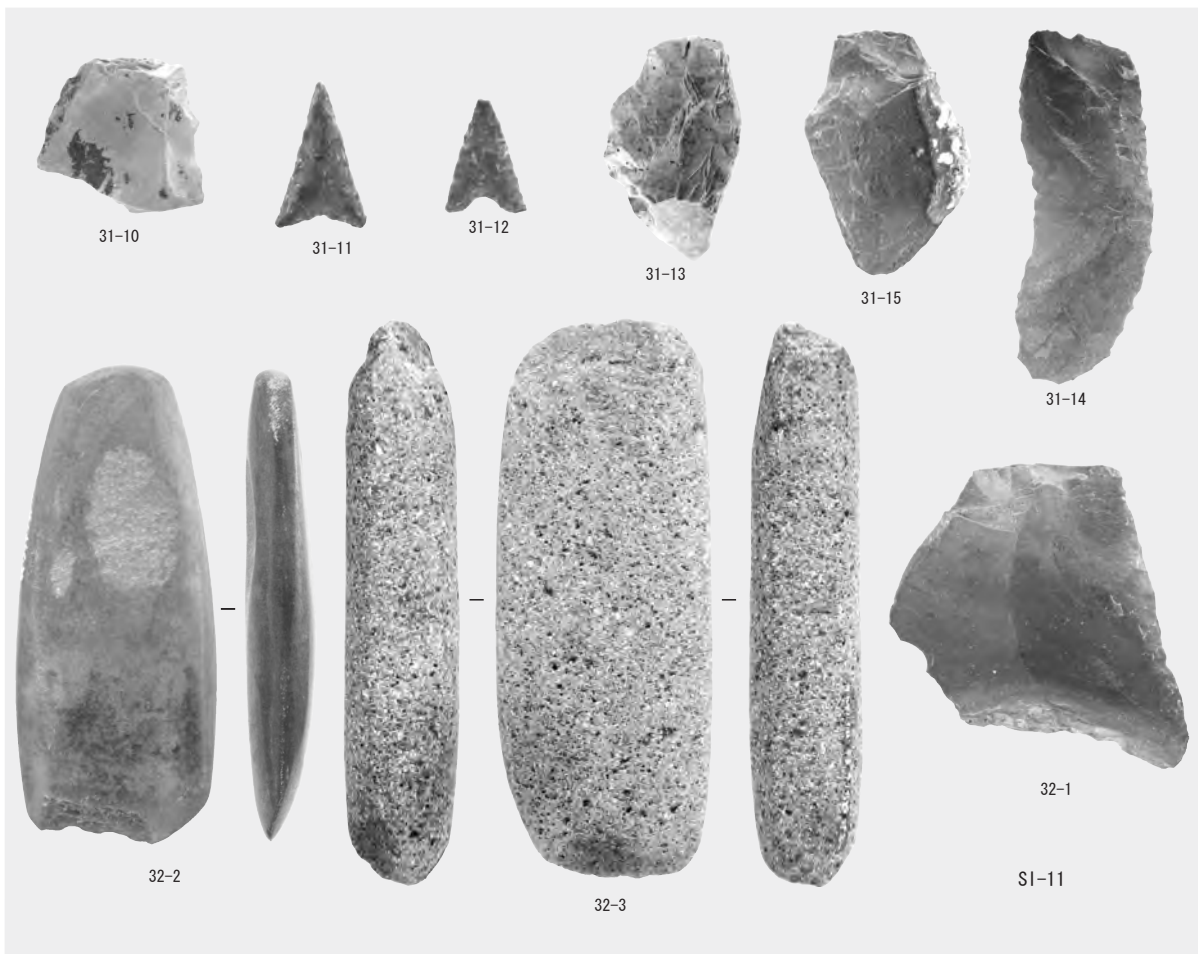
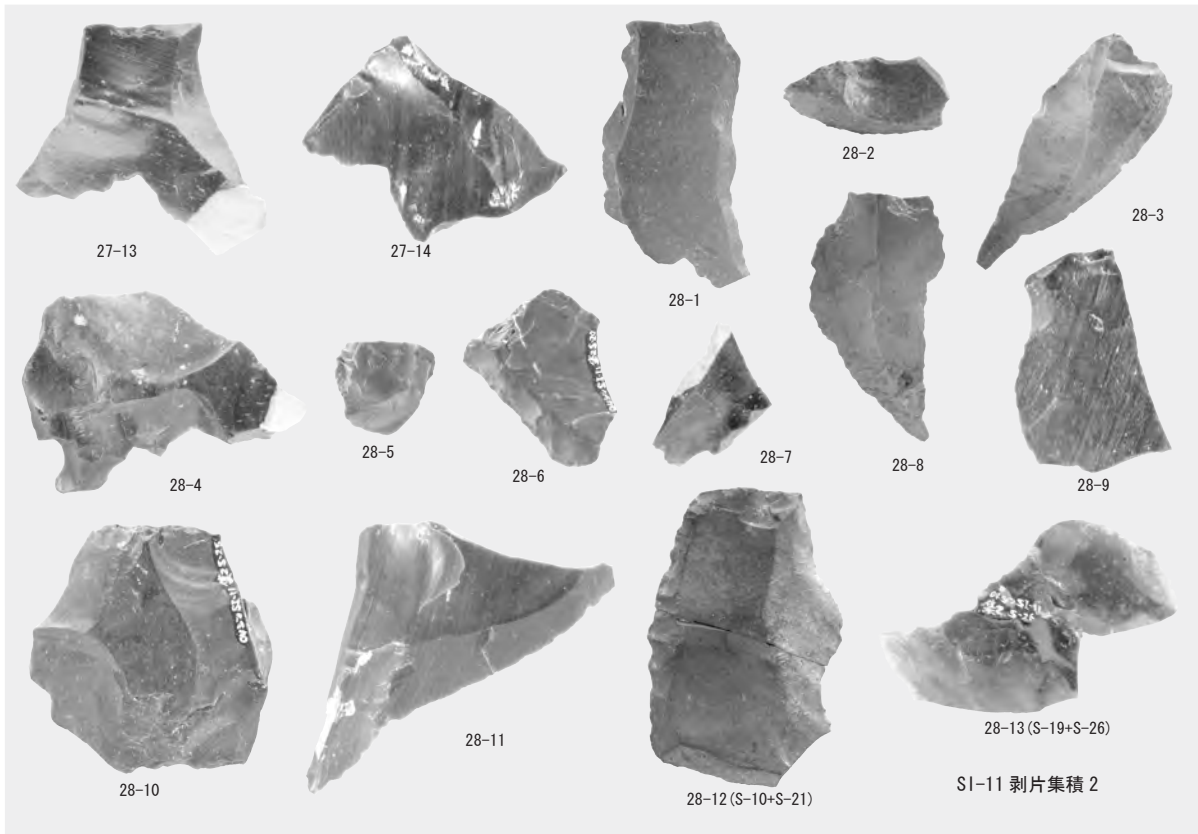
写真図版 28 遺構内出土石器 1



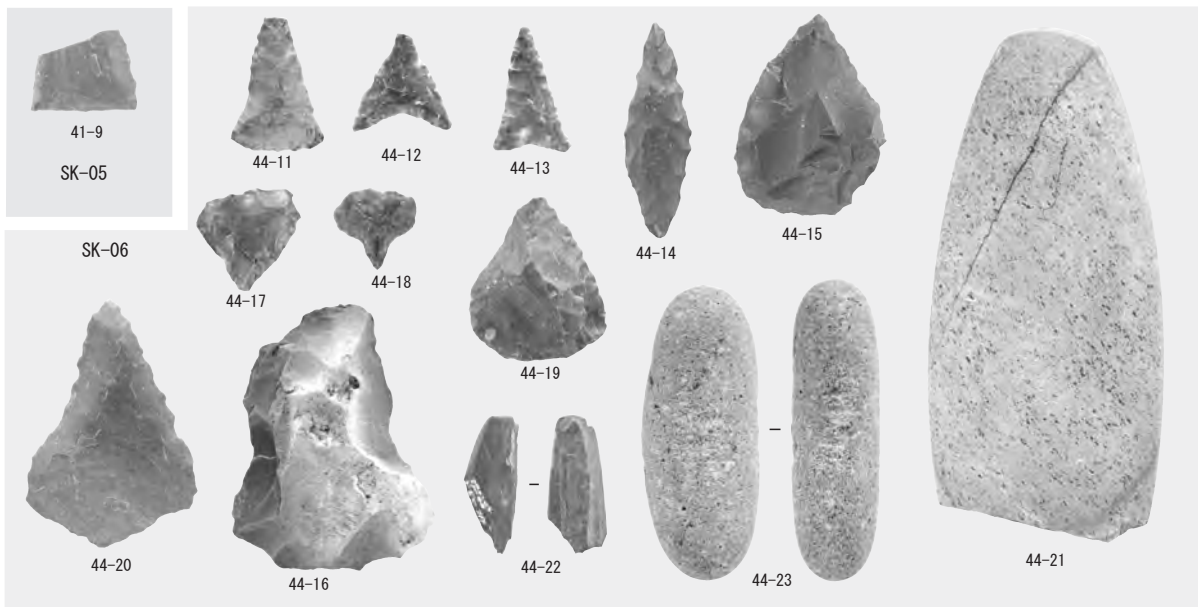
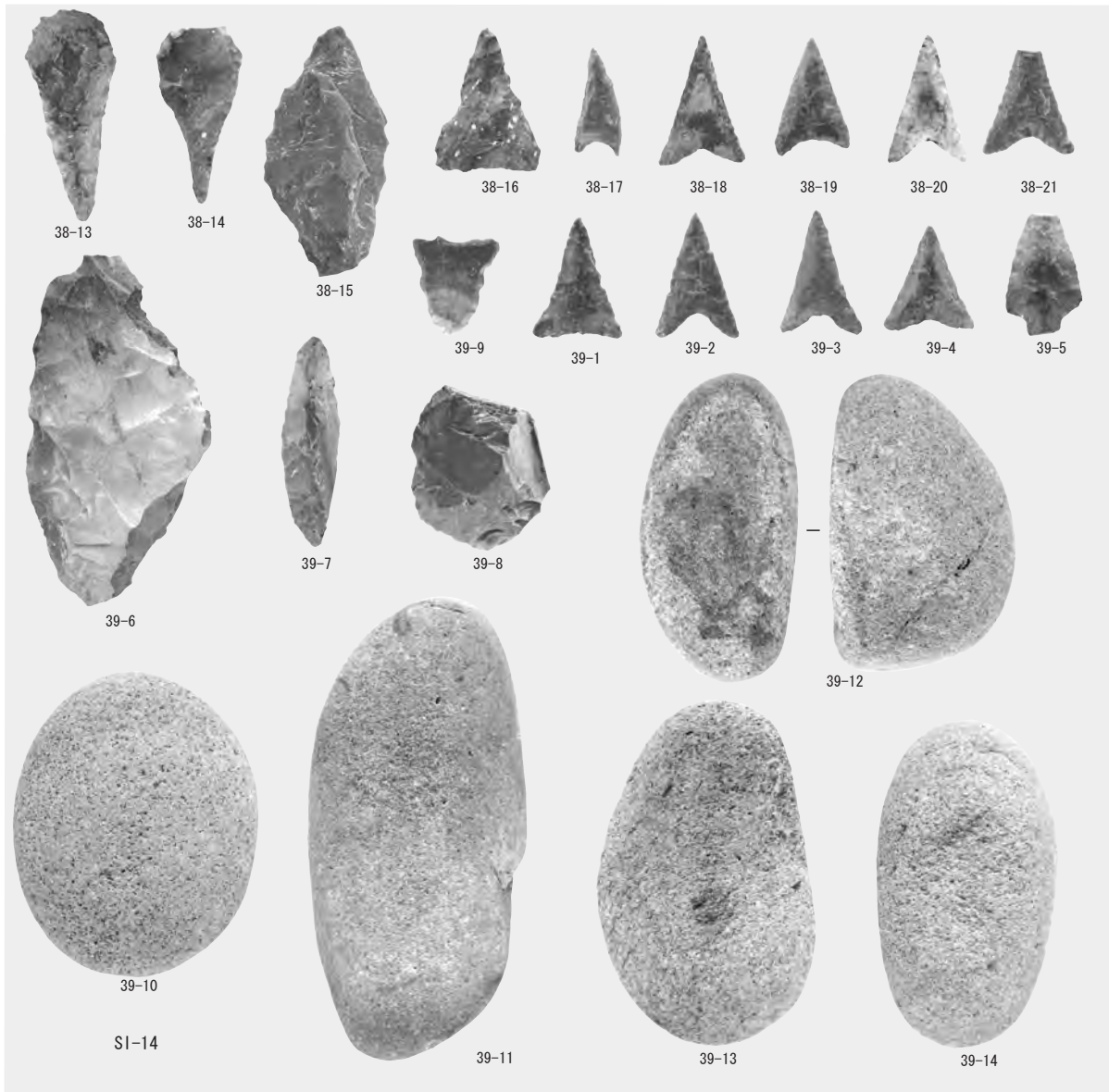
写真図版 29 遺構内出土石器 2



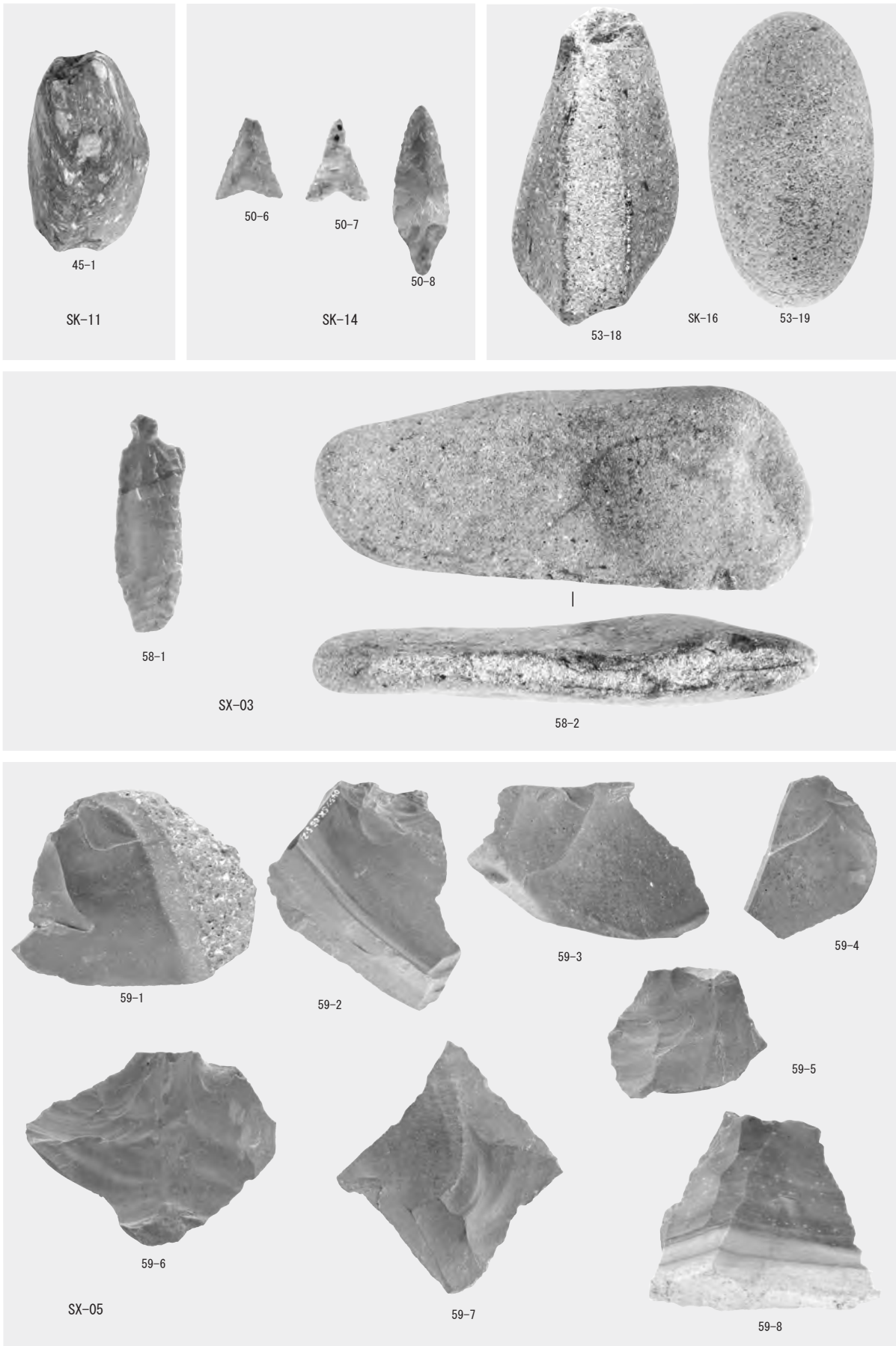
写真図版 30 遺構内出土石器 3



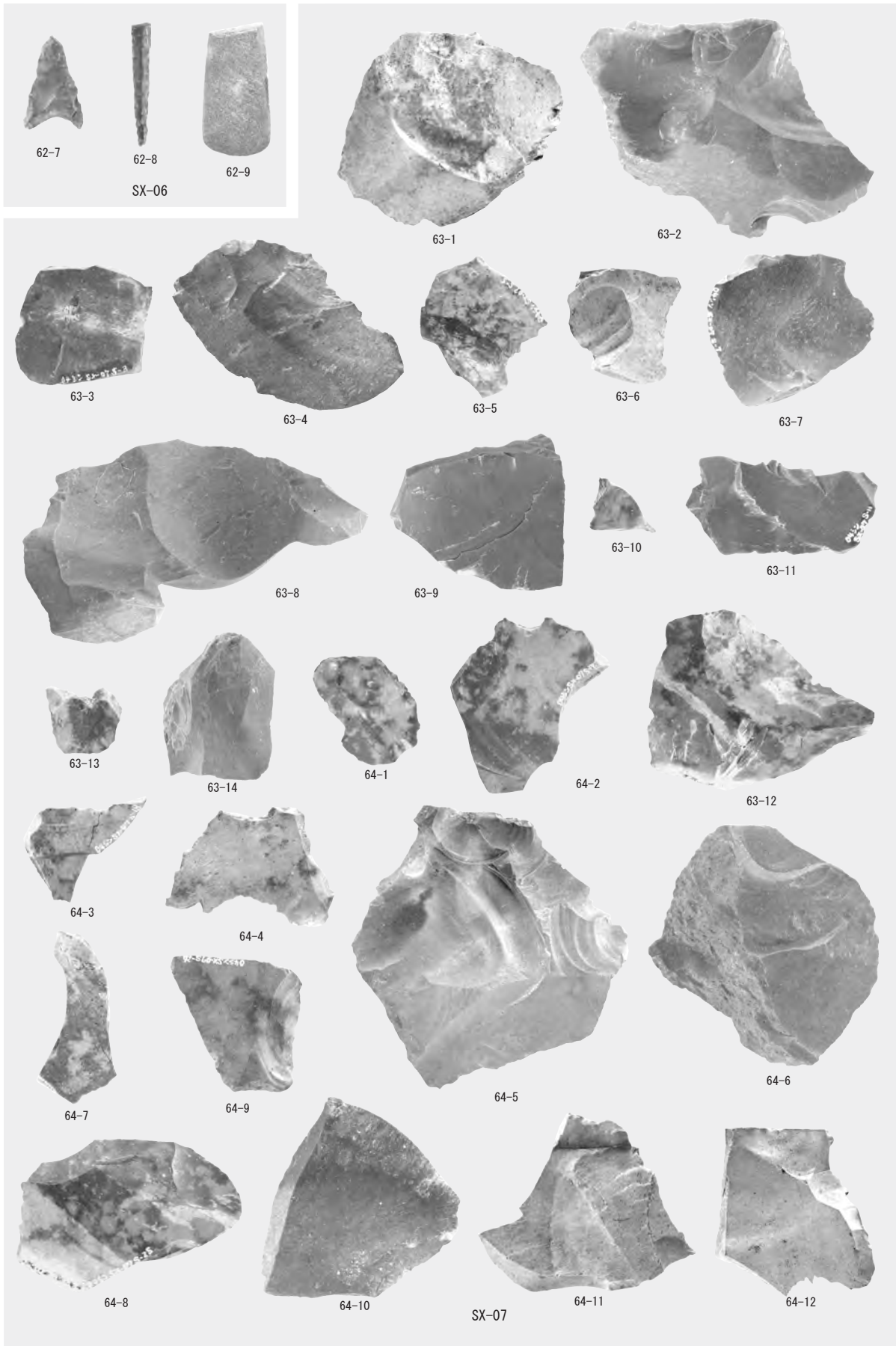
写真図版 31 遺構内出土石器 4



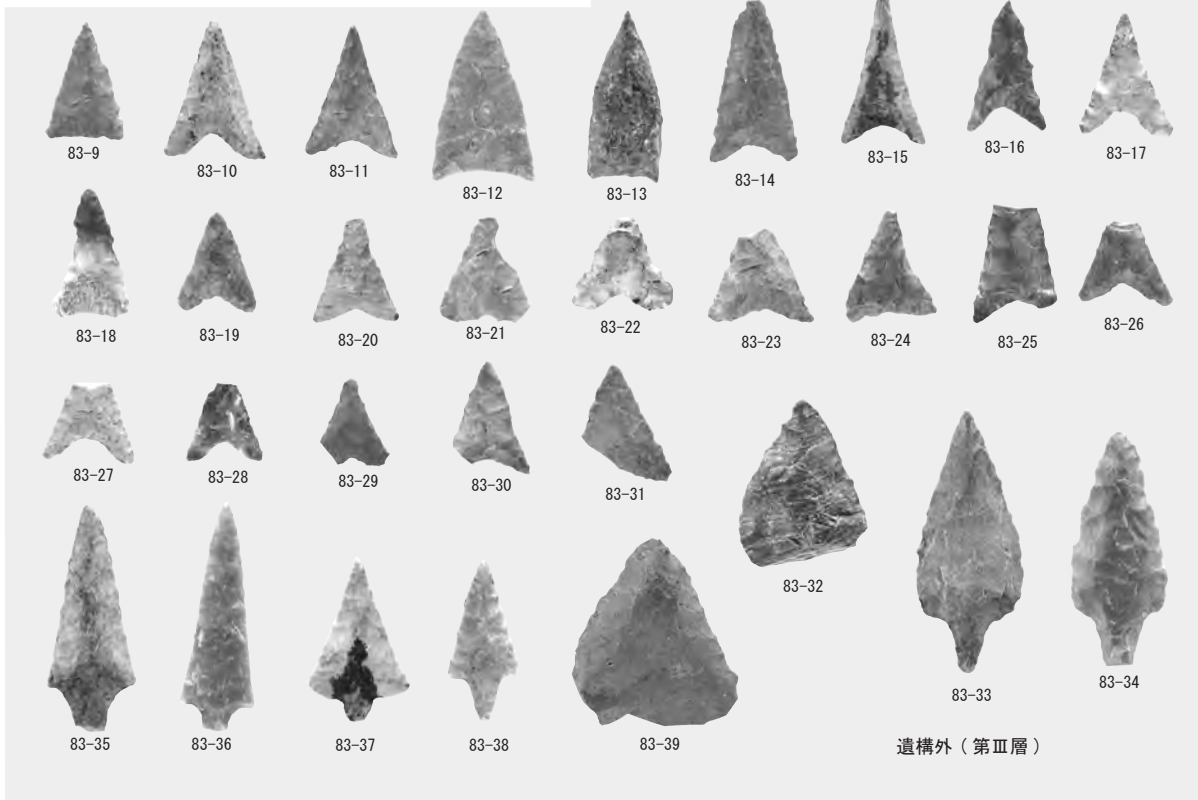
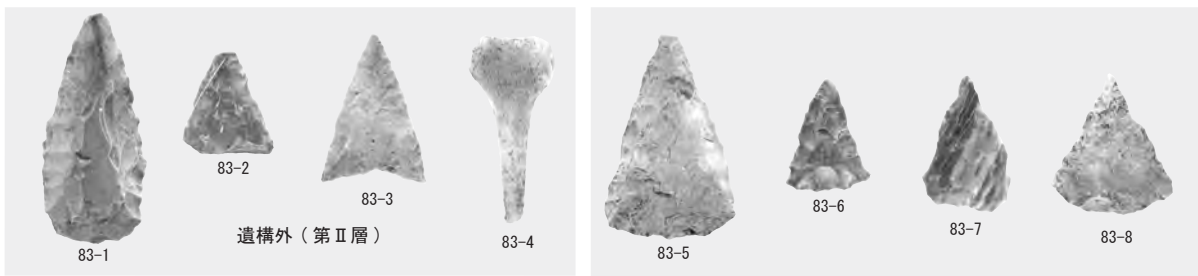
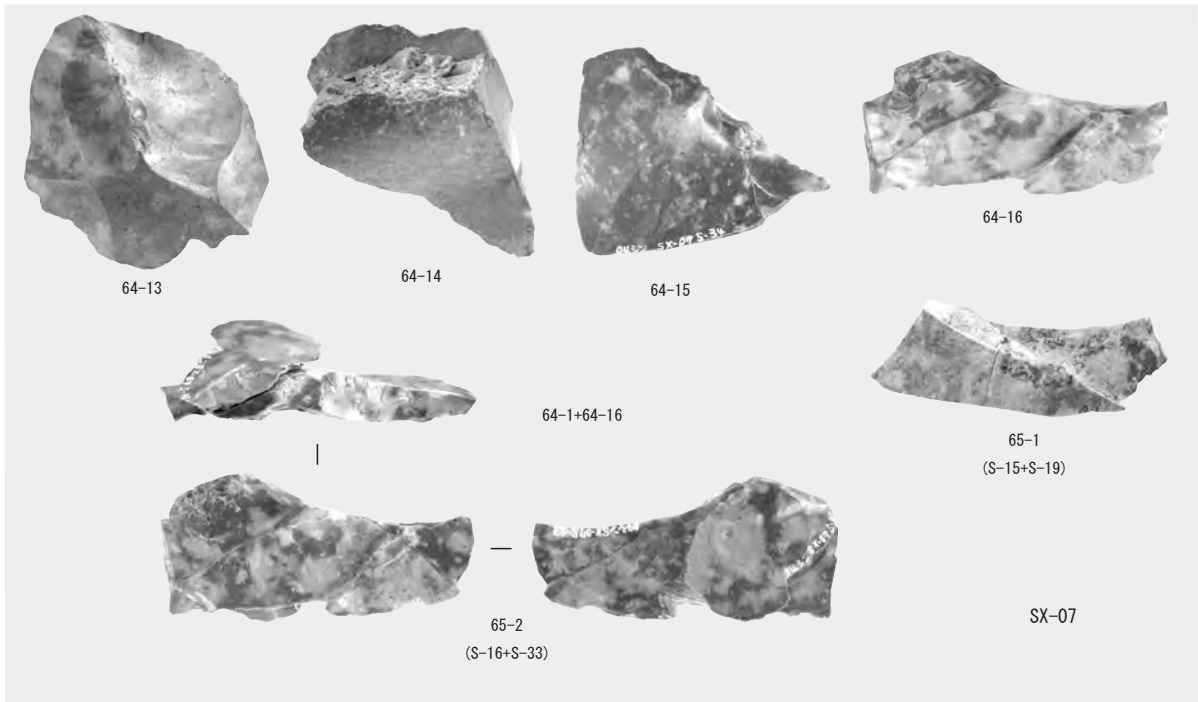
写真図版 32 遺構内出土石器 5



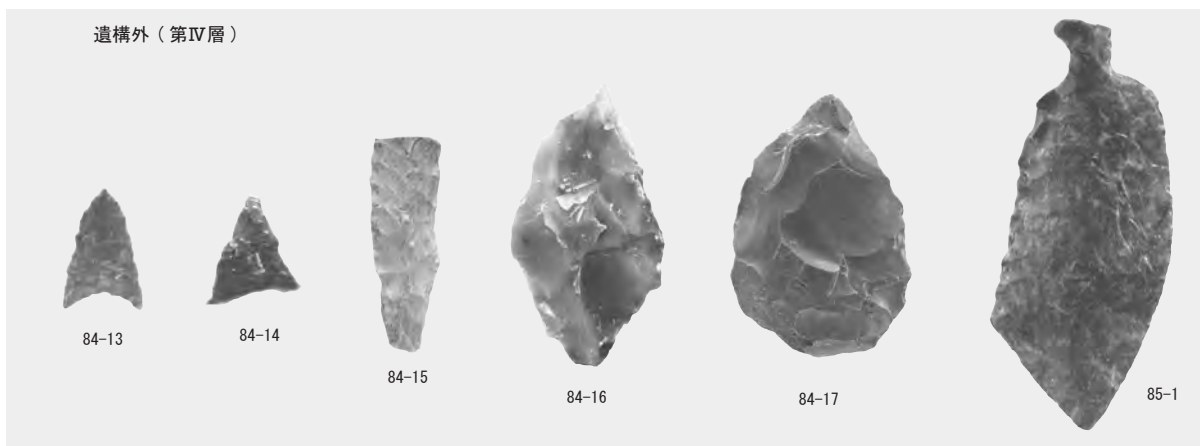
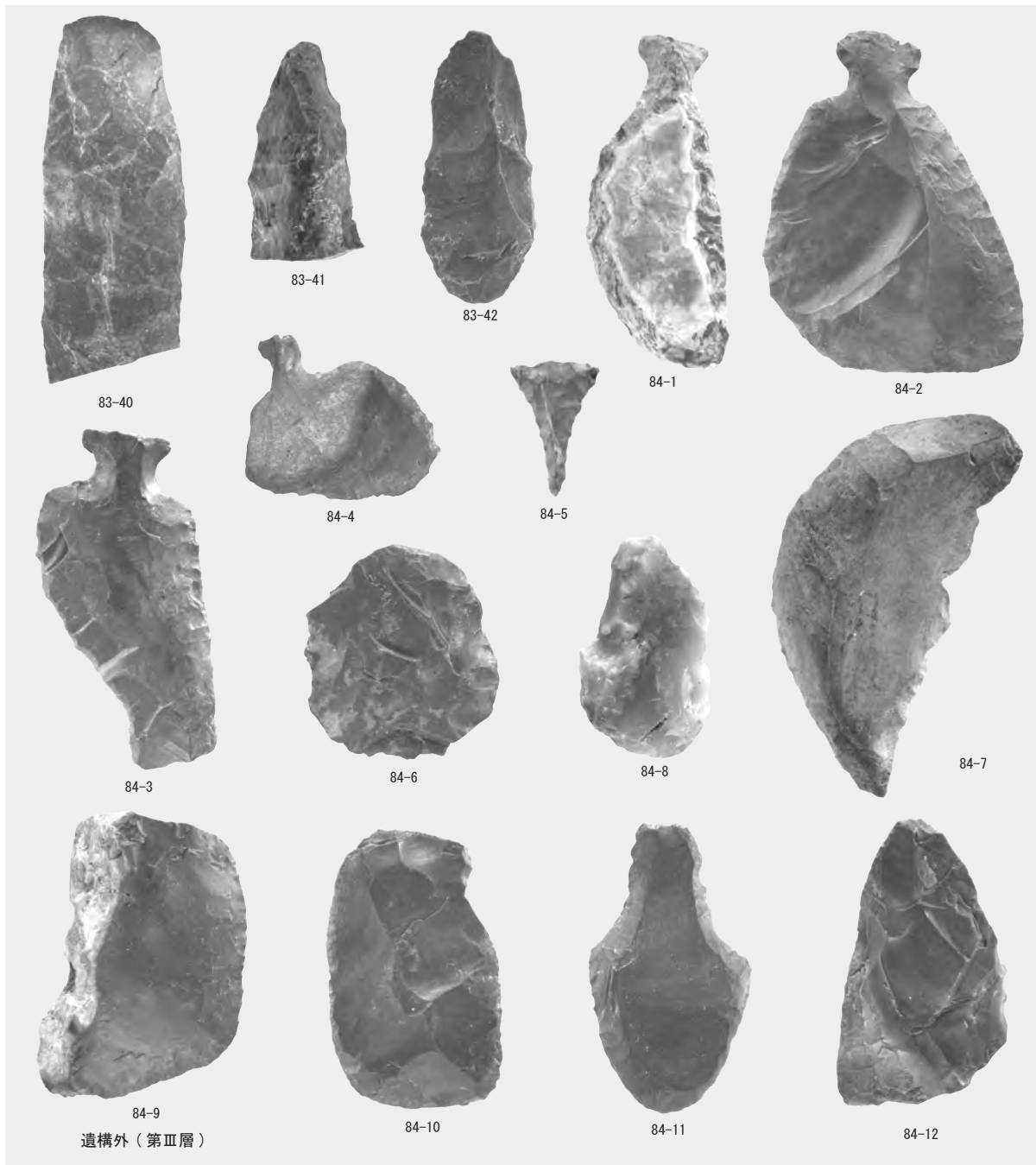
写真図版 33 遺構内出土石器 6



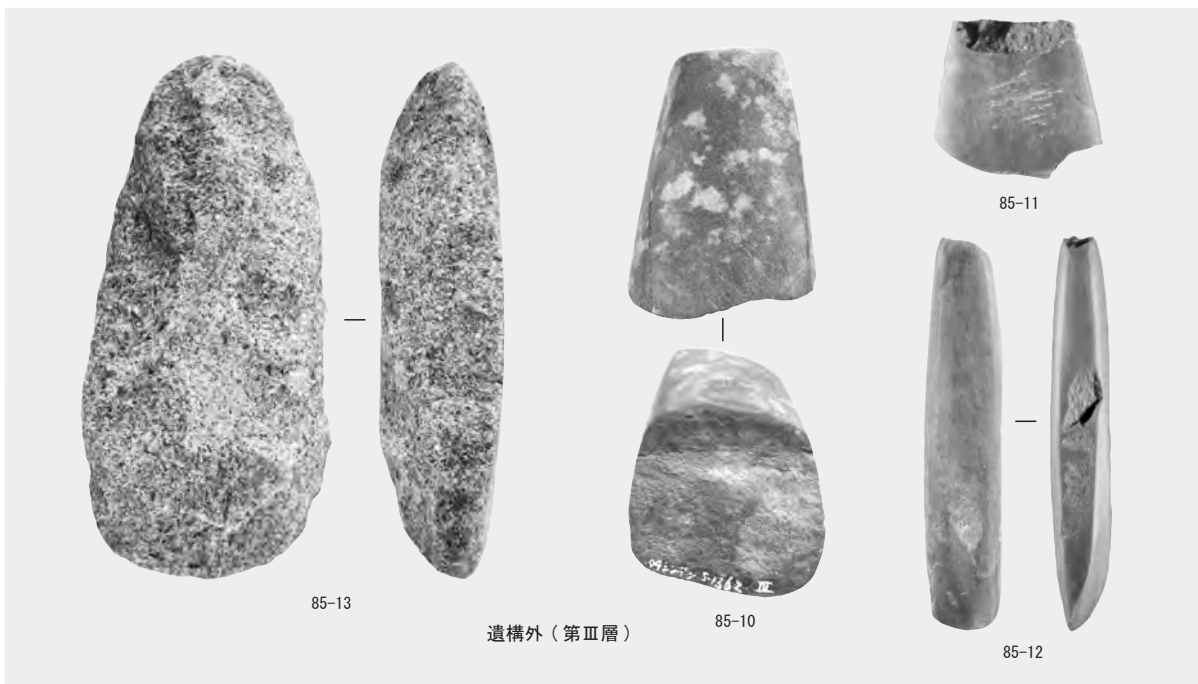
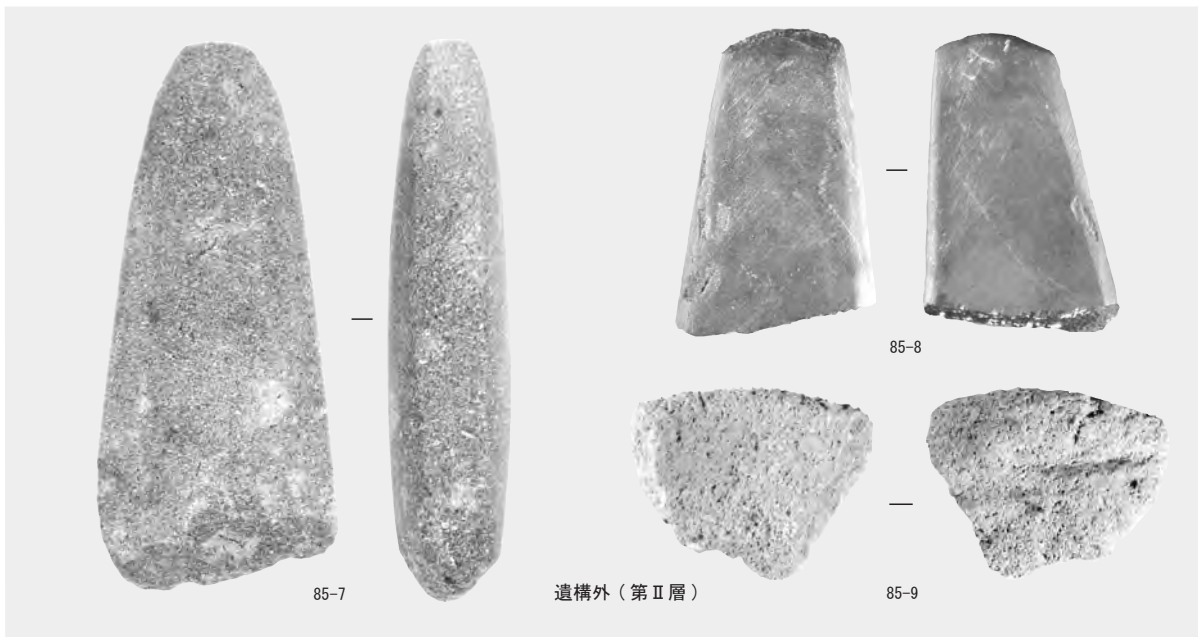
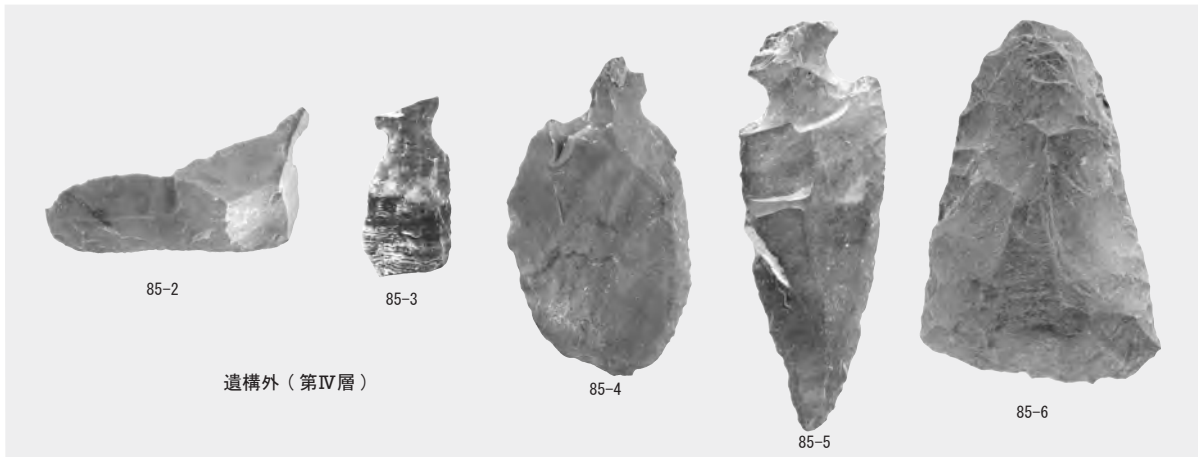
写真図版 34 遺構内出土石器 7



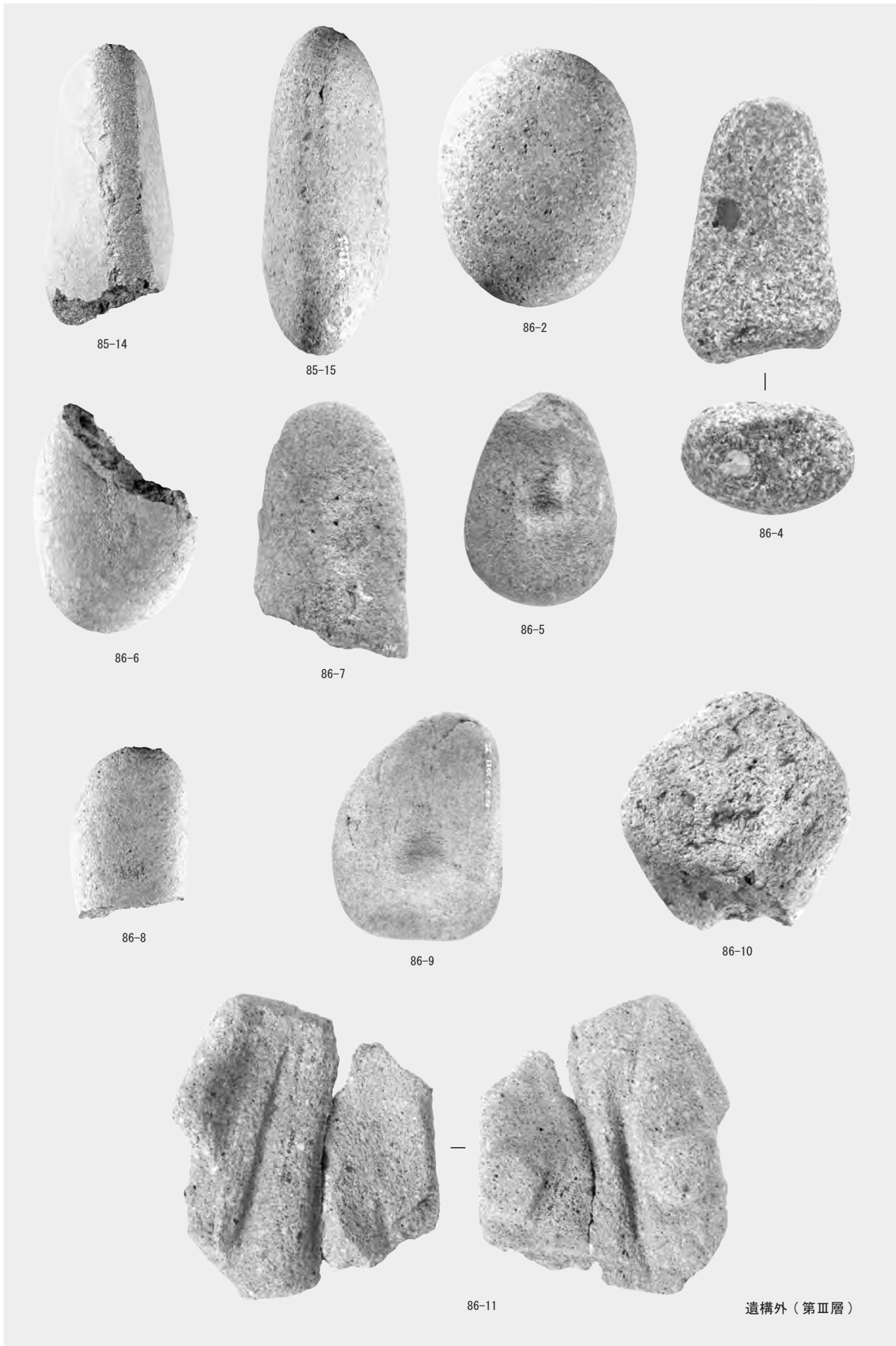
写真図版 35 遺構内出土石器 8・遺構外出土剥片石器 1



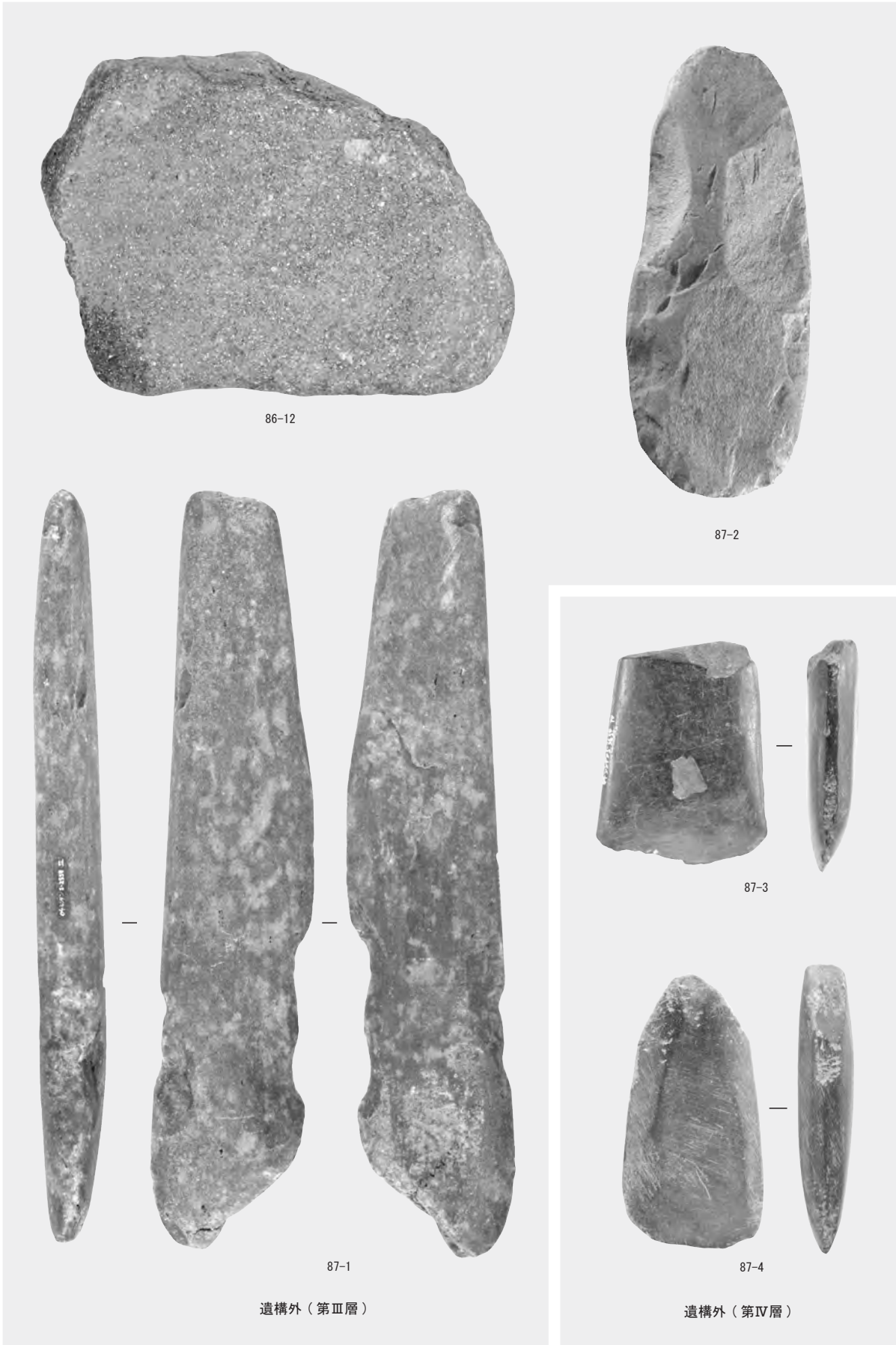
写真図版 36 遺構外出土剥片石器 2



写真図版 37 遺構外出土剥片石器 3・礫石器 1



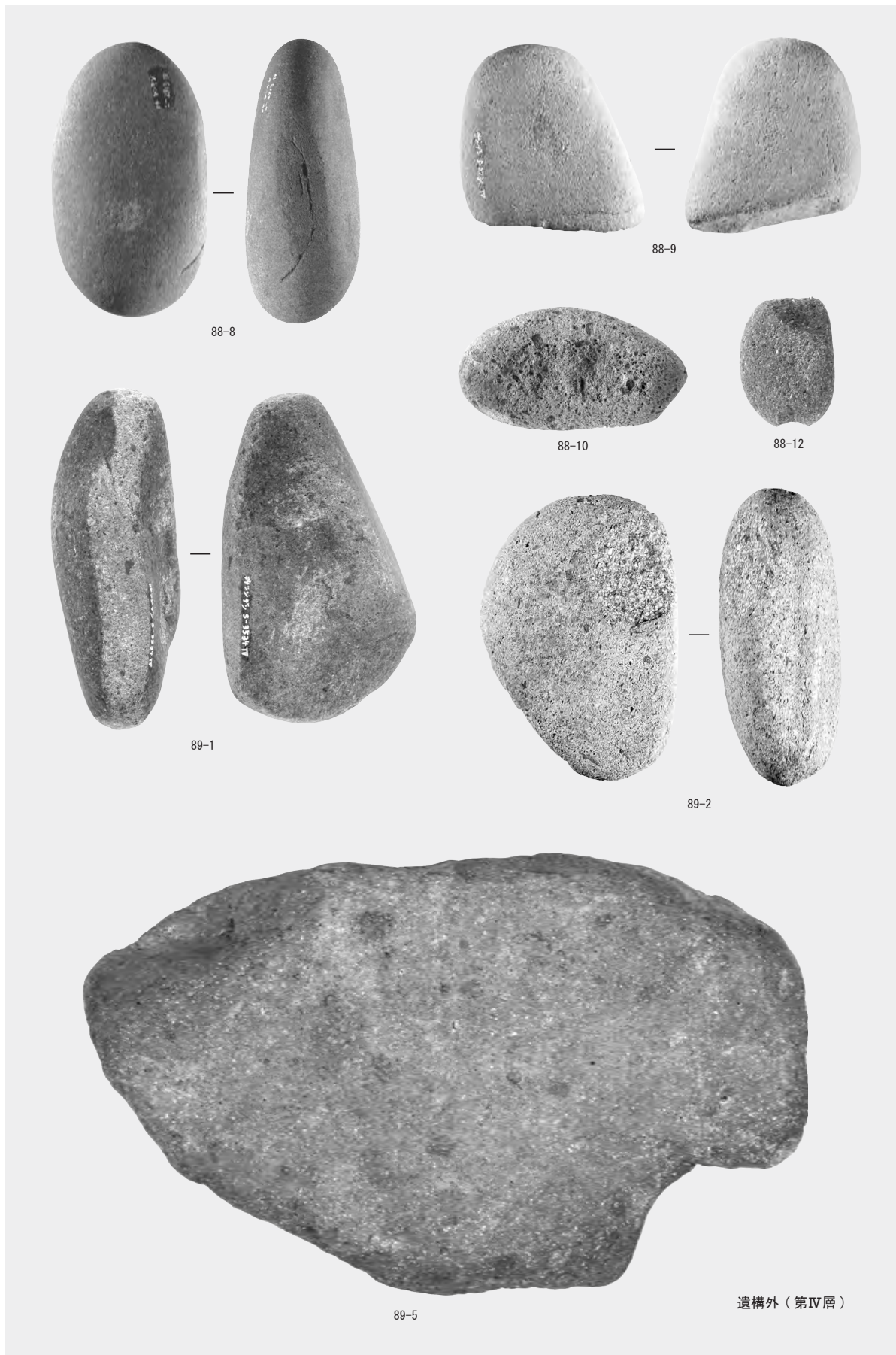
写真図版 38 遺構外出土礫石器 2



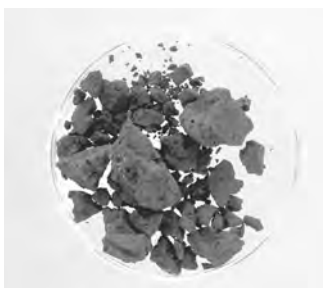
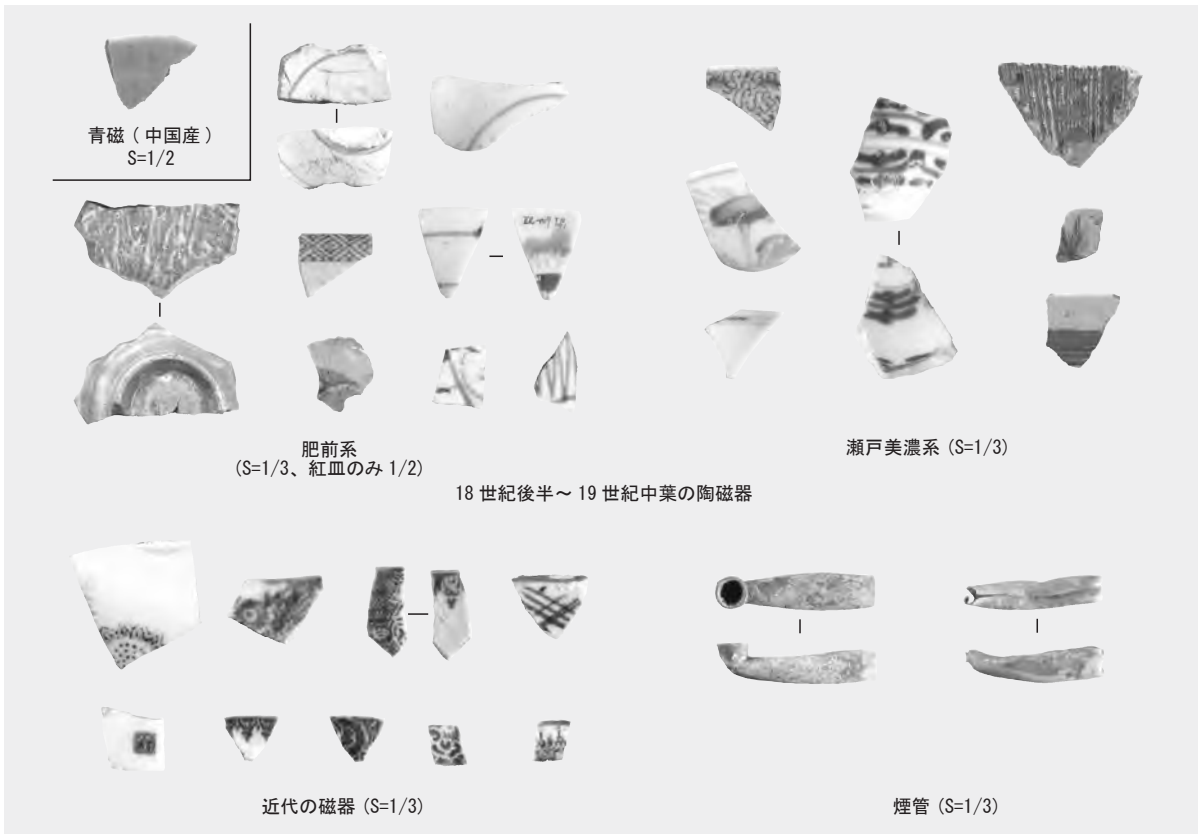
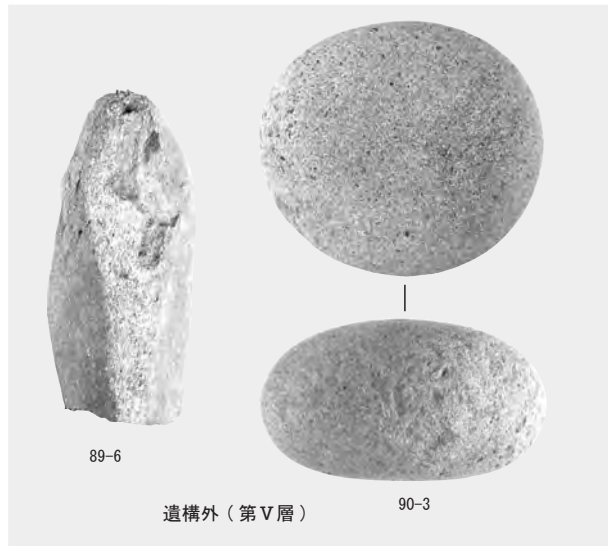
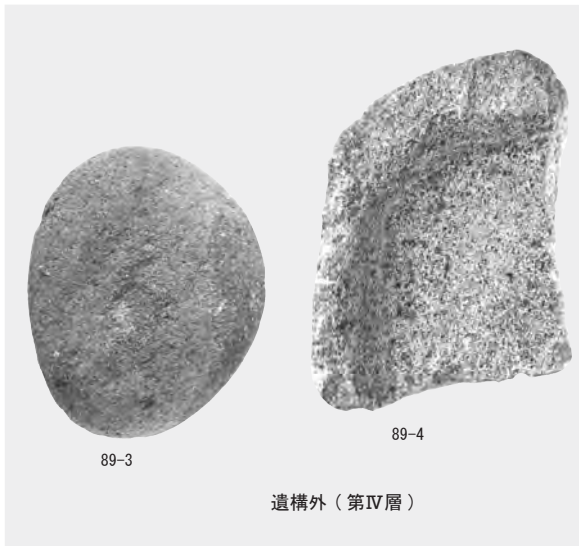
写真図版 39 遺構外出土礫石器 3



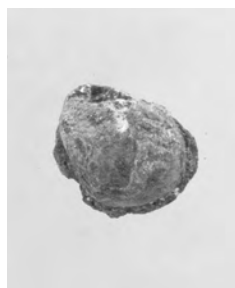
写真図版 40 遺構外出土礫石器 4



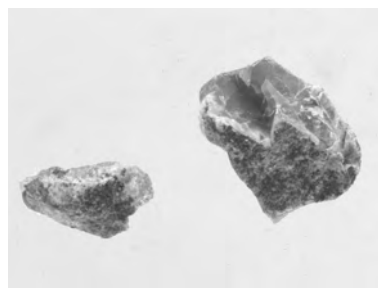
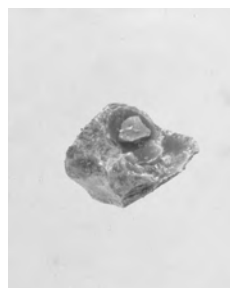
写真図版 41 遺構外出土礫石器 5



SI-07 出土粘土（縮尺任意）



SI-04 出土琥珀 (S=1/1)



SI-14 出土琥珀 S-126(S=1/1)

写真図版 42 遺構外出土礫石器 6・その他出土遺物

報告書抄録

ふりがな	しんでんいせきに							
書名	新田遺跡Ⅱ							
副書名	八戸南環状道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告							
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第410集							
編著者名	中村 哲也 齊藤 慶吏							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038-0042 青森市新城字天田内152-15 TEL 017-788-5701							
発行機関	青森県教育委員会							
発行年月日	2006年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		旧日本測地系 (Tokyo Datum)		調査期間	調査面積	調査原因
しんでんいせき 新田遺跡	はちのへしおおあざ 八戸市大字 これかわあざしんでん 是川字新田 8-6、外	市町村	遺跡 番号	北緯	東経	20030801	4,900 m ²	八戸南環状道路建設事業に伴う事前調査
				40° 28' 40"	141° 29' 25"	20031023		
		0203	03141	日本測地系 2000 (JGD2000)		20040420		
				北緯	東経	20040908		
				40° 28' 29"	141° 29' 25"			
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
新田遺跡	集落	縄文時代					複式炉を伴う中期末葉の集落が検出された。	
		早期	竪穴住居跡2軒 土坑1基		土器・石器			
		早期後半～	焼土1基		土器			
		前期前半	焼土3基					
		前期後半以降	土坑4基 焼土7基		土器・石器・土製品・ 植物遺体・コハク片			
		中期	竪穴住居跡6軒 土坑4基					
		中期末葉 ～後期初期	焼土3基、土器埋設炉1基					
		後期	竪穴住居跡1軒		土器・石器			
		晩期	土器埋設炉1基		土器			
		古代（主に奈良時代）	土坑2基		土師器・紡錘車			
			竪穴住居跡3軒					

青森県埋蔵文化財調査報告書 第410集

新田遺跡Ⅱ

—八戸南環状道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

発行年月日 2006年3月24日

発行 青森県教育委員会
〒030-0801 青森市新町二丁目3-1

編集 青森県埋蔵文化財調査センター
〒038-0042 青森市新城字天田内152-15
TEL. 017-788-5701 FAX. 017-788-5702

印刷 不二印刷工業株式会社
〒030-0902 青森市合浦一丁目10-16
TEL. 017-741-5439 FAX. 017-741-2541
